高知県地震津波史料

都司嘉宣編

まえがき

本書は「高知県地震津波史料」として、高知県内の郷土史料調査によって得られた明治二十三年（1890年）以前の、地震、津波、地変、火山灰降下の記事を集めたものである。同様のものとして、「東海地方地震津波史料――静岡県・山梨県・長野県南部編――」を昭和五四年三月に防災科学技術研究資料第三十五号・三十六号ですでに発行している。本書はそれに続くものである。

高知県は歴史上いくどか、南海道沖の巨大地震とそれに伴う津波の被害にみまわれている。その最も古い記録は、「日本書紀」に記された天武天皇十二年十月十四日（西暦684年11月29日）の「白鳳地震」の記録である。そのあと、仁和三年（887）、康和元年（1099）、正平十六年（1361）、慶長九年（1605）、宝永四年（1707）、安政元年（1854）、と続いて、昭和二十一年（1946）の「南海地震」とたどることができる。

「白鳳地震」に関しては、高知県各地に「黒田郷」が海に沈んだという伝説が残っていた。これらの中には、にわかに信ずることのできない説話もまあるが、本書ではこれらの伝承を実証的な価値のないものとしてすて去るということをしなかった。これらの説話の中には、「白鳳地震」ではないにしろ、古い時代の南海沖巨大地震の伝承が反映されている可能性があると考えたからである。また、説話の中にしばしば出てくる「海の静かな日には海底に住居あとが見える」という風な伝承は、将来の実地検証によって、その真偽が判定される材料となる可能性があるからでもある、勇敢なダイバーの手によって伝承に真実性の血が脈打ちはじめる、という日を楽しみにして待つことにしたい。

安土桃山時代までの新史料は、あまり多くを見出すことはできなかった。中世土佐国は細川の統一のあと応仁の乱をへて、安芸、香宗我部、津野、長宗我部などの諸氏が割拠し、ついに再統一した長宗我部氏は豊臣秀吉に敗れて（1585）その支配下に入り、関ケ原の戦のとき西軍についたため所領が徳川氏に没収されて、最後に遠州掛川城主であった山内氏に主が交替するという、めまぐるしい支配者の変遷があった。このため地震史料に限らず、山内一豊の土佐入封（1601）以前のあらゆる記録は、ほとんど現存していないのである。

慶長地震・津波の史料としては、安芸郡と浦戸港、土佐佐賀の記録を収めることができた。江戸時代に起きた宝永、安政の二大地震の記録についてはすでに武者金吉編による「増訂大日本地震史料」三巻と「日本地震史料」一巻（以下本書を通じてこれら計四巻をカギをつけて「史料」とよぶ）にも多くの史料が集められていることは、本文にも述べた通りであるが、今回の調査でもさらに数多くの記事を集めることができた。ことに高知県立図書館所蔵の「神社明細帳」をはじめ、山ノ内文庫、前ノ浜文庫などに所収の古文献から多くの新史料を見出した。従来から、四国地方では、宝永地震津波の方が、安政地震津波より大規模であることはしばしば指摘されてきたことであるが、今回集めた寺院、神社の記録の対比からも、このことが明瞭に裏づけられる。

今回集めた史料の中に、いくつかのすぐれた日記史料があることも特筆しておきたい。ことに高岡郡宇佐村の真覚寺の僧、井上静照が、安政地震の当

日から十五年間、ほぼ一日も欠かさず記録し続けた「地震日記」九巻、「晴雨日記」五巻には頭の下がる思いがする。

土佐国はまた山が深く谷筋がけわしく入りこんでおり、加えて台風の常襲地にも当っているため、いく度となく山崩れが発生している。本書では山崩れと高波による海岸の崩壊もまた地変の一種であるということで、この史料も採取した。

本書の編纂の第一の目的は、地震や津波の研究者に知られていなかった史料を紹介することである。この目的からいえば、武者によってすでに「史料」に収められた史料は、一部分であれ全文であれ、本書に重複して掲げることは避けられるべきである。すなわち本書の読者の手元には「史料」四巻がすでにあるという前提に立って編集されるべきだ、ということになる。ところで一方本書はまた、高知県内の各市町村で、防災の実務を担当する人々に、参考資料として使われることも、第二の目的としている。「史料」は現在、あまり入手しやすい本ではない。もし第一の目的だけを重視して編集すると「史料」にのせられた重要文献である「三災録」、「谷陵記」をはじめ、これらと文旨の共通なすべての文を割愛しなければならなくなる。その結果は土佐国全体の概況を見るのに適した最重要の文献ののっていない現場での防災の実務を担当する人々にとって画竜点晴を欠く史料集となってしまう。だからといって第二の目的を完全に満たそうとすると、「史料」所収の高知県関係の史料を全文再録する他はなく、いたずらに高価な活字と紙面を浪費することになってしまう。このような相互に矛盾する二つの要請を考慮して、本書は「史料」と記事の重複する文章に対しては次の方針で対処することにした。

(1) 宝永地震津波の最重要文献である「谷陵記」の、土佐沿岸各村の被害記事のみは、あえて本書にも再録すること。

(2) 今回の文献調査で得た各文献の、文章の一部分が、「史料」所収の文の一部と同文あるいは同旨のときも、その部分だけを割愛するということはしないこととすること。

(3) 前条の場合を含めて、本書と「史料」との所収関係に関する注をできるだけ多く付けること。

このような処置により、「史料」を持たぬ読者にも、不十分ながら地震津波災害の全容を把握できる史料集になったのではないかと自負している。「史料」は全国から集めた文献がのっており、しかも一つの地震に対して文献の記載順序が無秩序であるので、そこから高知県の史料を抜き出すというようなとき、かなりの労苦を伴う。右の(3)に述べたように、本書には「史料」のどこに、高知県関係の文献がのっているかという注をくわしくしたので、本書をベースにして「史料」を検索すれば研究能率はいっそう向上するであろう。

文献の収集活動は、昭和五十二年、五十三年度の科学技術庁の特別研究促進調整費による、「東海地方の地震予知に関する総合研究」の一環として行なった。南海沖の巨大地震も、東海沖巨大地震と密接な関係にあるということから、調査費が認められたのである。しかしながら当時、研究の主力は東海地方に重点がおかれており、四国地方は従と見なされていて、編者の四国滞在日数もきわめて限られたものであった。ことに高知県立図書館に所蔵された山内氏の史料も、大部分が未調査であり、高知県沿岸各地の旧家を個別に探訪するというような本格的な調査は全くなしえないままこの総合研究の期間が終わった。史料集の刊行についても、いずれもっと本格的な調査の機会を得た後にと考えていたが、残念なことにその後、予算上の制約などのためその機会が得られず、たいして史料も増えないまま二年近い時間が過ぎてしまった。一方、この二年間には、南海沖、東海沖巨大地震に関する津波の研究の発表が、地震・海洋の両学会であいついだ。ことに昭和55年4月の海洋学会では津波のシンポジウムが開かれ、編者を含め六人の研究者から六つのテーマで研究発表がなされたが、そのうち五つが歴史史料に基づく研究であった。このような事情から、将来のことは将来のこととして、手持ちの史料だけでも早急に刊行することの意義を改めて考えなおし、本史料集を編することにしたのである。

文献の収集にあたり、閲覧、文献複写に特別の御配慮をして下さった高知県立図書館の職員各位、および所蔵文献の刊行を許可して下さった同館の岡崎豊館長、古文書の解読にお世話になり、また「地震日記」の存在を最初に教えて下さった東大地震研究所の宇佐美龍夫教授、さらに古文書から原稿作成のさい書道と速記の両方面の特技を発揮されてお手伝いを下さった菊地原初子さんには、記して感謝の意を表わしたい。

高知県の地震津波に関する新たな文献をご存知の方がおられたら、編者あてにお知らせ下されば幸である。

一九八〇年十月

（編者は国立防災科学技術センター　平塚支所沿岸防災第一研究室）

本書利用上の注意

一、本書には、高知県の郷土史料中にあらわれた地震、津波、火山灰降下、山崩れ、海岸崩壊などの地変記事のうち、明治23年以前の記録を収集した。高知県郷土史料中にあらわれた他地方の記事も本書に収めた。

二、武者金吉著「増訂大日本地震史料」全三巻と、その続編である「日本地震史料」一巻の計四巻（以下「史料」と書く）にすでに収録されている文献は原則として掲載しないこととしたが、「谷陵記」の宝永津波記事のうち高知県沿岸各村落の状況を述べる文のみは、あえて本書にも再掲した。また本書所収の文献の、文章の一部分が「史料」と同文、あるいは同旨の文であるとき、その部分をあえて割愛しなかった場合がある。

三、本書の体裁は、「史料」にならない、各年代の地震の状況を略述した総括文、文献名、引用本文の順にならべ、さらに必要に応じて各文の末尾に注釈文をつけた。

四、「史料」全四巻を対照する時には、たとえば（Ⅱ－27）、（Ⅳ－430）という形に表記した。これらはそれぞれ「増訂大日本地震史料第二巻」二十七ページ、「日本地震史料」四百三十ページを参照せよ、という意味である。第二項でのべたような本書所収文献の文章の一部が「史料」にすでに収録されているものと部分的に同文である場合には、その個所に※『……』の印を付け、さらにその直後に右の記号を用いて「史料」の巻、ページ数を明示した。

五、総括文（伝統的には（綱文）とよばれている）と、文献名の注釈は〈 〉の記号で示した。本書ではとくにこれらの注釈文の充実に注意を払った。高知県立図書館に古文書原本が所蔵されている場合には、「県図」と注記し、図書番号を付した。

六、本書の配列は年代順とし、一事象ごとに一条の総括文を置くことを原則としたが、日記史料中に現われる有感地震記事については、一年分をまとめて一項目とした。総括文の先頭には通し番号をつけた。

七、原典の中で相当はなれた個所に、同じ地震の記事が現われた場合には、○印でそれら両記事の区切れ目を表わした。

八、引用本文に関する本書の編者のつけた注釈文には○印を付した。

九、本書には年代の定め難い地震・津波記事と、地変に関する参考記事も掲載した。これらは一括して本書の末尾に置いた。

十、西暦は一五八二年以前、一五八三年以後を通じてグレゴリオ暦による日次を記し、一五八二年以前の記事にはユリウス暦による日次も並記した。「理科年表」の地震、火山に関する表や、「資料、日本被害地震総覧」など地震に関する多くの書物で、一貫してグレゴリオ暦が使われている。また「史料」でも、第一巻巻頭の例言に「一五八二年以前はユリウス暦を用いた」と記してあるが、実は一五八二年以前もグレゴリオ暦が使われている。

十一、地震・津波発生日は、和暦、西暦の他にユリウス日（JDと略す）を記しておいた。西暦日付のあとにある七桁の数字がそれである。これは天文学の方でよく使われる紀元前四七一三年一月一日から数えた日数で、たとえば一九八一年一月一日は、JD＝2444606となる。

十二、津波を伴った主な地震に対しては、室戸岬、高知、あるいは土佐清水の、その日の潮汐表を与えておいた。その計算には、気象庁の潮位定数表に基づき、M_2・S_2・K_1・O_1・S_a・N_2・P_1・K_2・Q_1・M_4・S_{sa}・μ_2・L_2・ν_2・MS_4 の十五分潮を採用した。計算は国立防災科学技術センター平塚支所のMELCOM COSMO－500によった。

十三、原文献に明らかに誤りがあると思われる場合には（○ママ）と注記した。またくずし字などの原文の判読の難しい字をしいて読んだ個所には（○カ）と注書きした。○印のついていない（ママ）、（カ）は編者の参照した原典にもとから付してあるものである。

十四、用字については、なるべく原文献の体載を損なわないことに注意

を払ったが、更に次の原則によった。

(イ) 当用漢字表に新字体のあるものはそれを使った。

(ロ) かな文字の現行の字体を使ったが、候文中「江」、「而」はそのまま表記した。

十五、文献の注書きで、「著」は著者名に、「刊」は古文献を謄写板本に刊行した人の名に付した。また明治前期以前の古分献の原著者には「筆」の字を付した。活字刊本の刊行年は「大正」、「昭和」の年次で示し、たとえば「昭48」などと表示した。

市町村誌の編集者が、その市町村の教育委員会、あるいは「誌編さん委員会」などの場合には、注記を省略した場合がある。

十六、寺社などの所在地を示す記事は、すべて原典にある通り掲載した。従って刊行年の古い書書物によるものは、現行の行政区画による表示と異なるものがあるので注意を要する。

十七、近時の印刷物で概説的に歴史地震・津波について述べているのみで、他の史料から独自性に欠ける文献は、本書には掲載しなかった。

十八、江戸時代の時法は、真夜を子の刻（夜九ツ）として、十二支を配している。しかしながらその配し方は二時間ずつ等分してあるのではなく、貞享暦法によれば日出の三十六分前を卯の刻（明六ツ）、日没の三十六分後を酉の刻（暮六ツ）として、これを昼夜の切れ目とし、昼夜別々に等分した時法が使われていた。このようなわけで、現行時法（JSTと略す）とは次の三種の原因によるずれが生ずる。

(イ) 均時差。JSTは平均太陽時を用いているのに対し、貞享暦法は、視太陽時を用いている。

(ロ) 季節差。JSTは真夜を起点として一日を二十四等分しているのに対し、貞享暦法は「夜明け」「日暮れ」を昼夜の起点としているため、夏の昼の一刻は長く夜は短く、また冬は逆に昼が短く夜は長い「不定時法」となっている。

(ハ) 地方差。JSTは東経百三十五度の経線の太陽時を基準にしているのに対し、貞享暦法ではその場所ごとの地方太陽時を基準にしている。

いま、高知県の経度を東経百三十三・五度、緯度を北緯三十三・六度として、グレゴリオ日付に対する日の出、日の入り時刻を天文計算し、これに基づいて貞享暦法による各正刻の現行のJST時刻で表記した表をかかげておく。卯の刻というのが午前6時とは限らず、夏至のころは午前4時に近いことなどに注目すべきである。

DATE		ヒノデ		ヒノイリ		ヒル1コク	ヨル1コク	ヨル9ツ	ネ	ヨル8ツ	ウシ	ヨル7ツ	トラ	アケ6ツ	ウ	ヒル5ツ	タツ	ヒル4ツ	ミ	ヒル9ツ	ウマ	ヒル8ツ	ヒツジ	ヒル7ツ	サル	クレ6ツ	トリ	ヨル5ツ	イヌ	ヨル4ツ	イ
M	D	H	M	H	M	MIN	MIN	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M	H	M
1	1	7	9	17	9	112.0	128.0	0	9	2	17	4	25	6	33	8	25	10	17	12	9	14	1	15	53	17	45	19	53	22	1
1	11	7	11	17	17	113.0	127.0	0	14	2	21	4	28	6	35	8	28	10	21	12	14	14	7	16	0	17	53	20	0	22	7
1	21	7	9	17	27	115.0	125.0	0	18	2	23	4	28	6	33	8	28	10	23	12	18	14	13	16	8	18	3	20	8	22	13
1	31	7	3	17	36	117.5	122.5	0	20	2	22	4	25	6	27	8	25	10	22	12	20	14	17	16	15	18	12	20	15	22	17
2	10	6	56	17	46	120.3	119.7	0	21	2	21	4	20	6	20	8	20	10	21	12	21	14	21	16	22	18	22	20	22	22	21
2	20	6	45	17	55	123.7	116.3	0	20	2	16	4	13	6	9	8	13	10	16	12	20	14	24	16	27	18	31	20	27	22	24
3	2	6	33	18	4	127.2	112.8	0	19	2	11	4	4	5	57	8	4	10	11	12	19	14	26	16	33	18	40	20	33	22	26
3	12	6	21	18	12	130.5	109.5	0	17	2	6	3	56	5	45	7	56	10	6	12	17	14	27	16	38	18	48	20	38	22	27
3	22	6	8	18	19	133.8	106.2	0	14	2	0	3	46	5	32	7	46	10	0	12	14	14	27	16	41	18	55	20	41	22	27
4	1	5	54	18	27	137.5	102.5	0	11	1	53	3	36	5	18	7	36	9	53	12	11	14	28	16	46	19	3	20	46	22	28
4	11	5	41	18	35	141.0	99.0	0	8	1	47	3	26	5	5	7	26	9	47	12	8	14	29	16	50	19	11	20	50	22	29
4	21	5	29	18	41	144.0	96.0	0	5	1	41	3	17	4	53	7	17	9	41	12	5	14	29	16	53	19	17	20	53	22	29
5	1	5	18	18	49	147.2	92.8	0	4	1	36	3	9	4	42	7	9	9	36	12	4	14	31	16	58	19	25	20	58	22	31
5	11	5	9	18	56	149.8	90.2	0	3	1	33	3	3	4	33	7	3	9	33	12	3	14	32	17	2	19	32	21	2	22	32
5	21	5	2	19	3	152.2	87.8	0	3	1	30	2	58	4	26	6	58	9	40	12	3	14	35	17	7	19	39	21	7	22	35
5	31	4	57	19	10	154.2	85.8	0	4	1	29	2	55	4	21	6	55	9	29	12	4	14	38	17	12	19	46	21	12	22	38
6	10	4	55	19	15	155.3	84.7	0	5	1	30	2	54	4	19	6	54	9	30	12	5	14	40	17	16	19	51	21	16	22	40
6	20	4	56	19	20	156.0	84.0	0	8	1	32	2	56	4	20	6	56	9	32	12	8	14	44	17	20	19	56	21	20	22	44
6	30	4	59	19	20	155.5	84.5	0	10	1	34	2	59	4	23	6	59	9	34	12	10	14	45	17	21	19	56	21	21	22	45
7	10	5	3	19	19	154.7	85.3	0	11	1	36	3	2	4	27	7	2	9	36	12	11	14	46	17	20	19	55	21	20	22	46
7	20	5	9	19	15	153.0	87.0	0	12	1	39	3	6	4	33	7	6	9	39	12	12	14	45	17	18	19	51	21	18	22	45
7	30	5	16	19	9	150.8	89.2	0	13	1	42	3	11	4	40	7	11	9	42	12	13	14	43	17	14	19	45	21	14	22	43
8	9	5	23	18	59	148.0	92.0	0	11	1	43	3	15	4	47	7	15	9	43	12	11	14	39	17	7	19	35	21	7	22	39
8	19	5	30	18	49	145.2	94.8	0	10	1	44	3	19	4	54	7	19	9	44	12	10	14	35	17	0	19	25	21	0	22	35
8	29	5	37	18	37	142.0	98.0	0	7	1	45	3	23	5	1	7	23	9	45	12	7	14	29	16	51	19	13	20	51	22	29
♂	8	5	44	18	24	138.7	101.3	0	4	1	45	3	27	5	8	7	27	9	45	12	4	14	23	16	41	19	0	20	41	22	23
9	18	5	51	18	10	135.2	104.8	0	1	1	45	3	30	5	15	7	30	9	45	12	1	14	16	16	31	18	46	20	31	22	16
9	28	5	58	17	57	131.8	108.2	23	58	1	46	3	34	5	22	7	34	9	46	11	58	14	9	16	21	18	33	20	21	22	9
10	8	6	5	17	42	128.2	111.8	23	54	1	45	3	37	5	29	7	37	9	45	11	54	14	2	16	10	18	18	20	10	22	2
10	18	6	12	17	30	125.0	115.0	23	51	1	46	3	41	5	36	7	41	9	46	11	51	13	56	16	1	18	6	20	1	21	56
10	28	6	20	17	19	121.8	118.2	23	50	1	48	3	46	5	44	7	46	9	48	11	50	13	51	15	53	17	55	19	53	21	51
11	7	6	29	17	10	118.8	121.2	23	50	1	51	3	52	5	53	7	52	9	51	11	50	13	48	15	47	17	46	19	47	21	48
11	17	6	39	17	3	116.0	124.0	23	51	1	55	3	59	6	3	7	59	9	55	11	51	13	47	15	43	17	39	19	44	21	47
11	27	6	47	16	59	114.0	126.0	23	53	1	59	4	5	6	11	8	5	9	59	11	53	13	47	15	41	17	35	19	41	21	47
12	7	6	56	16	58	112.3	127.7	23	57	2	5	4	12	6	20	8	12	10	5	11	57	13	49	15	42	17	34	19	42	21	49
12	17	7	3	17	1	111.7	128.3	0	2	2	10	4	19	6	27	8	19	10	10	12	2	13	54	15	45	17	37	19	45	21	54
12	27	7	8	17	6	111.7	128.3	0	7	2	15	4	24	6	32	8	24	10	15	12	7	13	59	15	50	17	42	19	50	21	59

1　天武天皇十二年十月十四日（684－Ⅻ－29，ユリウス暦では－26，1971219），諸国地震，土佐国最もはげしく，田苑五十余万頃没して海となり，津波を伴う，伊予の温泉止まり，京都では東方に鼓のような鳴響を伴う，土佐国吾川郡，長岡郡，高岡郡，幡多郡の各地に「黒田郷」水没の伝承あり，「白鳳地震」〈（Ⅰ－7）〔日本書紀〕，なおこの文は〔土佐大震記〕中の引用の形で本書にも全文掲載した〉

684年11月29日～30日の潮汐表（高知，H_0＝110 cm）

満潮		干潮	
29日16時31分	167 cm	29日23時19分	18cm
30日6時2分	161 cm	30日11時25分	87cm

地震発生時刻は原文に「遂于人定」とあるので，30日の午前0時ごろか

〔土佐大震記〕〈高知市民図書館所蔵，K 210－トサ〉

日本書紀に曰。

天武紀白鳳十三年十月の條に。

※『壬辰，遂于人定，大地震，挙国男女叫唱不知東西，則山崩河涌，諸国郡官舎，及百姓倉屋寺塔神社，破壊之類，不可勝数由是，人民及六畜，多死傷之時，伊予温泉没而不出，土佐国田苑五十余万頃，没為海古老曰，若是地動未曽有也，是夕有鳴聲，如鼓鬪于東方，有人曰，伊豆島西北二面，自然増益，三百余丈更為一島別如鼓音者，神造是島響也。』（Ⅰ－8）

是より溯りて，白鳳九年以来之地震に就て，記すこと左の如し，

白鳳九年二月癸亥，

如鼓音聞于東方，

同，　六月辛亥，

灰零，

同丁巳，

雷電之甚也，

同，　九月乙未，

地震，

同，　十一月甲戌，

自戌至子東方明焉，

同，　辛己，

雷於西方，

白鳳十年三月庚寅，

地震，

同，　六月壬戌，

地震，

同，　十月癸未，

地震，

白鳳十一年正月癸丑，

地震，

同，　三月庚子，

地震，

同，　七月戊申，

地震，

同，　七月壬子，

信濃吉備国並言，霜降亦大風，

五穀不登，

同，　八月壬申，

有物如灌頂幡，而火色浮空，

流水，毎国皆見，或曰，入越海，是曰白気起於東山，

其大四囲，

同，　八月癸酉，

大地動，是其翌日也，

同，　八月戊寅，

亦地震，是曰，平旦有虹，

当于天中央、

白鳳十二年七月、

是日、始至六月旱、

同、　九月丙戌、

大風、

上に記す如く、白鳳十三年大地震前の四年間に於ける、天災地変は頻々臻りて、遂に同十三年十月に至り、前代未聞の大地変を来したるなり、而して土左国に於て、其絶頂を極めたるものと見ゆ、

此の時の震動区域は、遠く各地にわたりてわが日本の南部の大半に及ぼせるが如く、四国にありては、西に当りて、伊与の国に温泉の涸るゝあり、又東に於ては、伊豆の島の傍に、小さき島を形成りたりと見えたり。恰も、比の五拾万頃といふ広さを坪に割当つれば、三百四十四万坪、町に直せしは、およそ一千百五十八町にして、一里四方の土地なり、斯く地震のために陥没したる面は、東の方、室戸岬より、西の方、足摺岬にわたる、黒田郡と称ふる一円の田島(ノカ)にして、黒田郡の外に、

黒土、上鴨、下鴨の三郷に分れ、石高は二十六万石ほどの地なり。当時此の海辺には、大郎(ノカ)千軒、小田千軒などいへる、賑やかに栄えたる浦里ありしも、此の大地震の時、海底に沉没したるなり。

この、上鴨下鴨といふは、この処に、鴨の社とて、土佐の産土神を祀りし、小祠あり、昔白鳳年代より以前に、珍らしき伝説あるを記さんに。

一日此の浦の年老ひたる漁夫、世に人魚を言ひ伝ふる、奇異なる魚類を獲たりしが、此の時一人の浦の少女、馳け来りていと稀らし気に、しげしげと見てありしが、やがて何思ひけん、二口三口、これをねぶりて帰りける。

偖も、不思議なるかな、此の乙女、それより、いともすこやかに成人して、その後諸国を遍歴しつゝ、極めて長命にして或時若狭の国に赴きしか、其まゝこの国に足を留めて、遂に齢八百歳に達し、八百比丘尼と名を伝せしか、そののち、故郷土左に回歴帰国したるみきり、彼の鴨の郷に祀れる、産土神、鴨の社に名塔を寄進したりしか、其の後白鳳大震の節社もろとも、石塔も海中深く沈ミて見えすなりしが、底には猶くちずしてありしまゝの姿を残すらむ、白鳳大地震にて変動之節、浦戸港を成せる山を、大浪南方より勢はげしく打寄せて、この山脈を突き破りて、六七町ばかりの小き海峡をなせしか、其打ちかきたる山の一部を、猶も湖の岬よする勢にて、北に突き流し、其の孕より北の方へ、三十丁余りも持ち行きたるが、比島といふ小島なり。

太古、四国にいまた分れさる折は、此の島を、伊与の二名洲と呼びしか、其の中ほどに当る処に、考霊天皇の皇子、彦狭嶋命封せられ玉ひしか、後白鳳大変の時大地の南部に当る処、一時に陥没したるため、地変変し南端に偏する地位となれるなりと見ゆ。

日本書紀、白鳳十三年十一月の條に曰。

※『庚戌、土佐国司官、大潮高騰、海水漂蕩、調船多数投失焉』（一－8）

大震後の翌月に至りて、其後引続き、余震ありて地動きやまず、遂に大津浪を起しぬ、此の大地震後の、ゆりなほし、又高潮になかゝゝ容易に鎮まるへきものにあらす、徐ろに歳月を関して、地盤の安定に赴くものなれハ、一月後の此の土佐国司の言上はまたまた、朝廷及び大衆を驚かしたるは申すまでもなく、それより後之四年の間は、天変地妖の厄災相重なりし年代にて、

又日本書記に曰、

白鳳十三年十一月戊辰、

此日たそがれ時、天の七星、一時に流れて東北の方、はるかに飛び、やがて終に地に隕ちぬ、

白鳳十三年戊辰、昏時、七星倶、

流東北、則隕之。

曰はく、庚午の日なるが、これも日暮れ時に、空に帛を裂くごとき響

聞えしか、一囲もありつらんと思はるゝほとの、大きなる光星、東の方さして飛びおちぬ。これを始めとして、戊の刻まで、空、白気を帯びて一面に明るく、あちらこちら星の飛びて落つること雨の如くなりき。また此の時、一の星ありて、大空の中ほどに、鋭き光りを放ちて為しか、遂に、昂星に並びて天空をめくり行き、月西に舂くに及びていつかたともなく消えうせぬ

白鳳十三年十一月庚午

日没時　星隕東方　大如甕　逮于戌時天文悉乱、以星隕如雨、是日有星孛于中央、与昴星雙而行之、及月尽失焉、

白鳳十四年三月に至れは、また不思議なる変災起りぬ、そは此月信濃国一面にわたりて、頻りに灰を降らしければ、木草の類、山といはず野と言はず、すべて全く枯れつきたり。

白鳳十四年三月、

是月灰零于信濃国草木皆枯焉。

さて、その翌月には、紀伊国の司人、言上すらく、

紀の国　牟婁の温泉、地震ひしため没して出ですなりぬ、

白鳳十四年四月巳卯

紀伊国司言、牟婁温泉没而不出也、

かくてまたその年の極月に至りて、西より地震起りて、各地に及ぼしたり、

白鳳十四年十二月辛巳、

自西発之地震、

朱鳥元年三月庚戌、

雪之、

越えて、改元して朱鳥と号したる頃、其元年の三月には、各国に大に雪を降らして人々を驚かしけり。

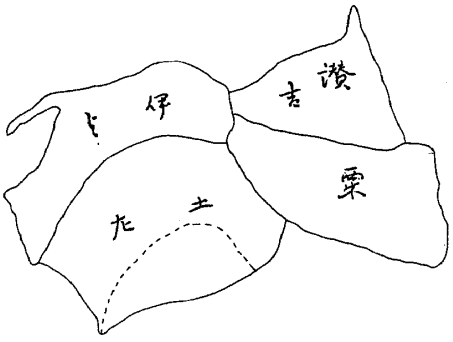
また其の年十一月にも、地震ありて、諸人安堵の思ひを為すいとまもなくして、おづおづしき日を送りぬ。

朱鳥元年十一月、

地震、

斯くの如く、大震の前後には季候の変調多少の天変地異等もありて、其の前兆を現はしたるこそ、うたてけれ。

白鳳十三年大震以前之土左国及四国図



白鳳震災後の土佐図、及四国の図、

天武天皇白鳳十三年壬辰十一月十四日、諸国大震、此の時、土佐の地室戸岬より足摺岬迄田島陥没して海湾となる。



侭も、この前代未聞、古来いまたなき、白鳳十三年の大震、地変のありさまを、その時の昔より、言ひ伝へ聞きつたへて、つきづきの筆の跡をしたひて、書きつくらんに、

天武天皇、白鳳十三年壬辰十月十四日、さても此の日は、朝のほどより不気味なるほど、のどかにも、且をたやかにして、一天すっきりと晴れわたりて、しるしほとの雲も見えず、風少しも吹かす、その暑きこと夏の頃にも似て、人々奇異の思ひをして刻を過る程に、やがて、黄昏ともなれは、夕の空今、白々しくて乳色を帯び、星の光りもなく、夜に入り諸人皆いつれも鎮まりたるころ、東南の方に当りて、ごうごうとおひたたしく鳴りひゝきわたるにそ、人こあなやと、いぶかしく思ふほともあらせず、大地にはかに震ひ出づ。そのゆりわたること、天地も一つに成るかとおもはるゝばかりなり、国を挙りて、老若男女童幼の別ちなく、あわてふためき、騒ぎいでゝ、東西を知らす、南北を分たず、阿鼻狂喚あてどもなく走り廻り、駈けありく間にも山は崩れ、河は埋もり、地は裂け、樹木家居は悉く倒れ、水は湧き火は起り、人畜は無数に死に傷きて至る処修羅の巷の如くなり。

諸人、いつれも、われ先きにと広場に走り逃げ出づる、三人五人互にたふるまじと手に手を取り組むといへとも、大地の震動激しけれは、皆打たふれて、或はうつふしにあるはあをのけに成又うつぶしになりつゝ三四間の内を転びまわり、ようやくに立上りて走らんとあせれとも、眼もくらミて、足の運びたやすからす。一刻はかり大ゆりありてしばし止まる、此の間に気を失ふ人々数をしらす、気のたしかなるものは、此の間に走らんと、身を起せしは、無惨にも又ゆり出す。ゆりてはやミ、やむかと思へは、またゆり、かくすること幾度といふ限りなし。此の一時の内六七度ゆりやまりたる間にも、浪立つ海にありて小舟になるがごとくにて、大地定まらす、四五尺も大地のわれさけたる所より、泥水わき出で、世界滅尽、この世も限りなるべう思ひなさるる有様、大地も一切今沈むかと覚ゆるなり地の震ひしばらくやミて、やれありがたしと、一息つく間もあらせて、こたびは、沖より大津浪押入るそと、人々のなきさけぶ声して、上を下へとかへすこと夥し、山に近き人々は　そのほとりの、山の上に逃け上るに高潮の勢激しくて、至るところ堤をみな乗り越え押切りて入込ミ見渡すかきり一海の大海となる。

此の時、当地港之口を抱く山脈、大潮に押破られて、あたかも孕める如く小さき海峡をなす、其間は六七町がほどなり、当時半里ばかり北に、此の山土を押寄せて、小島を作りぬ。

此の大津浪の勢の及ぶ処、海水は遠く、潮口の山の中段までも浸して、いづちへ逃るゝに処もなき有様なりき。

かくの如く到るところに、大浪打入り、荒潮はうづまき、社寺屋舎などは、倒壊したる上に押流されて行方もしらす。又人類家畜も、漂ひ流れ矢の如き渦巻のなかに引こまれて、遂に水底のもくづとなる、人々もはや生きたる心地するものなし。

斯かる間に、国司は、海辺の山々へ、具役を遣ハされ、沖より大津浪見ゆる時ハ、同時に貝を吹き立て告げ知らするなり、されど、其貝役さへも、わが身の危ふきに臨みては、役立たず。しばしの間は、誰彼のわかちなく老も若きも、貴も賤も、山こもりし、あるひは、高きをかにのがるれとも、しばしのあひたも安き心はなし。

さすかに、山近き処は死人も鮮けれとも、浜辺は死する人傷く人もいと多し。

浪入数度ありしうちにも、初めと其の次とは、さほど強からす。三度目の大浪、其高サ十丈はかり、此浪のため、今まで恙なかりし浜辺、海そひの人家並樹等とも、一たまりもなく、引きはらはれて、一瞬の間に跡形もなくなりぬ。

かゝるうちに、時うつり事去りて、実にうつゝ世の定めなきとはいひなから、今まで平なるなぎさ、にはかに、浪さわぎ渦まき起り、白きみなわたちまよひて、家居をはじめ、処々のつひぢ、土居など、暫くのうちに打ちたふは、おし流して数も知れず算を乱して、老若の男女幼童波にもまれ、あるひは、沖とほく海の真中にをし流されて又磯辺に打あげられ、惨々にいためさいなまれて、遂に死す。あるいは、磯へするといへ

ともそのあたりの巌峨々として、あたかも、けづりたることく、これに取つくべき便りだになし。また、沖へ押ながされたる人は折から漂ひ来る、木きれ、ごみくづにも、とりつきてのがれんとあせり、やうやく浜近く流れ来て、声をかきりにたすけを呼べとも、救はんとする人もなし。あるひは、浜辺のその網なんどを投かけて、時にはあすくにもあれと、多くは運命つたなくして、引汐にゆられて流されて、親は子にはなれ、子は助かれとも親はなく、又家あれとも住むべき人はなく、人あれとも家宅なし、実に国中の大難たとふるにものなき赴なり。

かようにして、やうやくに助かりたる人々も、住む家なく、食ふに飯なき有様なれは国司たちも、いろいろ心をつくし力をあつめて、諸人の救ひに奔走するなり。

其後月の半ごろまでは、ふしぎにも助けをよぼふ哀れなる声むなしく空にのこりて、雨夜なとには、いづくともなく数百人の、悲しげなる声音聞へ来て魂を失はさるものなし。

地震の折には十里ばかりの間、大地七八尺斗ゆりさけ浅くなり、津浪、室津の辺は又七八尺もゆりあけて高く成りぬ。

偖も大地震後の地上の変動に就て古老の語る処を聞くに、

わが郡は総じて東南に海を受けたる国々は漸々に浜出来て海となり。西北に海をひかへたる諸国にては、浜近くに減て地となるといふ。而してそれがため地盤の高下することは珍らしからぬ事なりとぞ。

〔補訂十市村古事考〕〈山本笹樹著、昭46〉

口碑の伝誦によると、改田の金毘羅は白鳳十三年の大地震に黒田郡が海底に沈んだ時、海から流れ寄った神を祭ったと伝えている。

注　白鳳の地震に、土佐湾にあった黒田郡が沈んだと言う伝説そのものが、何うも虚伝のようである。

改田の金毘羅は、山内氏の藩政中期頃の奉紀と判断するが、古く白鳳の地震に流れ寄ったとする口碑もある。

〔日本の地震と津波〕〈沢村武雄著〉

最も興味のあるのは、「土佐国田苑五十余万頃没為海」の記事である。五十余万頃の〝頃〟は、日本書紀には〝しろ〟と訓読してあり、今日のおよそ一二平方キロメートル（一一五七町歩）に当たる。五〇万という数字があまりにも大きいので、県内のあちらこちらの口碑に残る言い伝えがある。なかでも黒田郡の話はおもしろい。

「白鳳地震陥没の地面は、東の方室戸岬より西の方足摺岬に達する黒田郡と称する一円の大地なり。」

とし、黒田郡を「黒田、黒土、上鴨、下鴨の四郡に分石高二十六万石程の地」というこまかいものや、陥没の音が京都まで聞こえたという大変なおまけ付きのものまである。

これについて、高岡郡に残る言い伝えが多く、

「昔、大良千軒、小田千軒などいえる繁栄の市あり、白鳳地震の時陥没して今海底に帰せり。」

というもの、須崎海上大坊千軒の鴨神の伝説、野見・大谷・久通などの山上の古墓の伝説、仁井田の高岡神社の伝説がある。もう一カ所高知市近傍があげられているが、高岡郡や高知市のものは、陥没面積はほぼ妥当なもののようである。（〇中略）

白鳳地震の地震津波は、宝永・安政・昭和のものと同一型のものであったが、その勢力の強かったところから、次のような口碑がある。

高知市街の入口なる浦戸港の北方を孕という。距離六、七町の小海峡をなす。白鳳大変の時、大浪南方より打寄せ、この山脈を蹴破りて、小海峡をなせしが、当時その打欠ぎたる山の一部をば、なお潮勢にて北に押流し、孕より二十丁程北方に坐らしめたり。これ今日の比島なり。

口碑も、こうなるとあいきょうがある。

〔土佐古今の地震〕〈寺石正路著、土佐史談会、大11〉

白鳳地震は今を距る一千二百余年前の変災にして世古く事遠く其事情日本書紀記載の外他に考ふべきものなし偶国中一二の記録今に伝ふるもの

なきにあらずと雖も要するに皆後世の追著にかゝり遂く上代に溯りて正史の欠陥を補ふに足らず唯其中国中の口碑に残れる伝説に取り留め難き筋あるも亦稚気ありて覚束なげに古伝を伝へたりと覚ゆるものなきにあらず今参考の為め左に其の若干を採録せん。

(一) 国中一般に伝ふる所

白鳳地震陥没の地面は東の方室戸岬より西の方足摺岬に達する黒田郡と称する一円の大地なり

(二) 国中或部に伝ふる所

白鳳地震陥没の地面は東の方、室戸岬より西の方、足摺岬に達する一大地積にして黒田、黒土、上鴨下鴨の四郡に分石高二十六万石程の地なり

(三) 高岡郡吾川郡南部海浜の所伝

昔、大良千軒、小田千軒などいへる繁栄の市あり白鳳地震の時陥没して今海底に帰せり

(四) 高岡郡多之郷村、鴨神の所伝

昔白鳳の前、須崎の海上に大坊千軒と称する繁栄の浦あり一日漁人其浦にて奇異なる人魚を獲たりしが浦中の一少女がこれを舐ぶりしに成長し極めて長寿を享け諸国を遍歴し若狭の国に留まり八百歳の齢に達し為に八百比丘尼の名を獲しが後に土佐にかへり産土神なる鴨社に石塔を寄進せり大坊の浦の大震の時海底に帰せしが鴨社の石塔は今に現存せり

(五) 高岡郡に伝ふる所

高岡郡野見、大谷、久通等の諸村の山上に無数の古墓あり自然の土盛をなすあれば或は自然石を置きて標とす中には神護景雲三年当国に流されたる氷上志計志麿の墓と伝へらるゝもあり此等の場所は孰れも大昔須崎の海上にありし大市街の墓山にして白鳳大震の時市街は陥没し名残とし墓山のみを残せる者なり

(因に記す氷上志計志麿当国配流の事は続日本紀高野天皇紀に見へ正史的の事実なり神護景雲は白鳳より遥か後の事なれど昔よりの墓所故埋葬せしものといひ伝へしならむ)

(六) 高岡郡仁井田郷の古伝

高岡郡仁井田郷には県社高岡神社あり社殿五棟にして俗に五社明神といふ貞和五年、嘉暦三年等の鰐口ありて当国にては先づ名ある奮社なり其祭神は一宮、孝霊天皇、二宮、磯城細媛命、三宮、大山積命又吉備彦狭島命、四宮、伊豫二名洲小千命、五宮、伊豫嶋天狭貫命を祀る皆伊豫に関係ある神達なり伝へいふ太古四国未だ分れざる時伊豫の二名洲と呼ばれし頃孝霊天皇の皇子彦狭嶋命此地の二名洲の中央に当るより封せられて居給ひし所なるが後白鳳大震の時南部大地一時に陥没して地形変換し今は四国の中央たる釣合を失ふて却て南端に偏する僻地に位するに至れりと

(七) 高知近傍に伝ふる所

高知市街の入口なる浦戸港の北方を孕といふ距離六七町の小海狭をなす白鳳大変の時大浪南方より打寄せ此由脈を蹴破りて小海狭をなせしが当時其打欠ぎたる山の一部をば猶潮勢にて北に押流し孕より二十丁程北方に坐らしめたり是今日の比島なり云々

以上は大方国中に流伝する白鳳地震に直接間接関係ある口碑の概略なり但しこは口碑の事なれば素より其各條が一々正確の事実を伝へ真面目の解釈を試むべき価値あるものとはいはされど千年昔の大時変が正史の外如何に卒直なる申伝へにより国中に流伝せるかの例証となさば又地震学中の面白き一材料となすに足りぬべし

〔土佐遺事雑纂上〕〈県図、K270－3〉

(○黒田郡ハ)白鳳年中地震ノ為メニ沈没ス、今尚ホ浦戸ヨリ南海三里計リノ所ニ堤防ノ如キモノアリ最浅キ所ニハ瓦屋根ノ見ユル事アルノミナラズ動モスレバ蛎ノ付キタルガ漁夫ノ網ニ掛リテ上ル事アリトゾ

〔高知史跡めぐり〕〈橋本延寿著、昭44〉

宇賀神社

浦戸字南浦にある。宇賀の長者は天武天皇の白鳳の地震に沈んだ黒田郡をもっていたお金持であったと伝えている。

〔上ノ加江町史〕〈編集委、昭31〉

小矢井賀白王神社の由来

小矢井賀の白王神社は、上ノ加江町内では勧請年月が最も古いと云われている。

かの黒田郡の陥没したといわれる白鳳大地震の直後、大浪の打ちよせる夜明けの浜辺に、一体の御神体が漂着した。その燦然と輝く神々しさに打たれた村人たちは、その神威に畏敬すると共に、村の守り神として永く祭ろうと云うことになり、早速村の中央、大樹の森に奉斎した。

これが今の白王神社である。

もと白鳳と書かれたものが、何時の頃からか白王と呼ばれるようになったといわれる。

〔神社明細帳〕

高知県土佐郡吾川郡長浜村長浜字北地東塩屋鎮座

無格社、国史現在社

宇賀神社

由緒（〇前文略）漁隠叢書云、総蔵天王の社より西北十町余る宇賀の谷と云所有則長浜の支配なり、此所に家数十五六軒有所謂宇賀長者の子孫国内にありと云は此所ならん歟云々（〇中略）宇賀長者の居宅は白鳳ノ大変海トナリテ其由縁只名村社宇賀塚又此総蔵宇賀神社ノ存スル而已。

〇

今仮ニ此所ノ古伝ヲ記サバ宇賀社在長浜郷古塩田北本田上此所云、宇賀谷所祭宇賀神、宇賀塚在右社東南海伝説云古哥朝日照此所ナル歟或云宇賀長者居宅焼亡又曰此地因白鳳大変為海也、今尚海底有石垣屏石等之形ト云、

〇

高知県土佐国吾川郡長浜村横浜字玉島鎮座

無格社

玉島神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、往古玉島トテ大ナル島アリ、神功皇后玉ヲ得玉フニヨリ名ニ負タリト云、白鳳四年ノ大変災ニ依テ沈没ス後世人彼旧称ヲ此島ニ移シテ三女神ニ皇后ノ御霊ヲ祭ルト云。

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教協会刊〉

〇土佐郡朝倉村の条

東淇文集に云白鳳の地震に孕山浪に打切今東西孕山と成朝倉より東ハ野市迄海となれりとかや

〇高岡郡野見村の条

神母大明神 東勢井

従先規野見浦人祭来右祭之訳は先祖戸嶋より東勢井へ白鳳年中大変大潮に流上り住居仕此神之由右之処住所に不宜と申野見浦へ引越申由則水主屋敷四反十代余本田今に当浦々支配也

〇高岡郡須崎浦の条

藍江山海蔵寺　退転本尊のみ残

本尊地蔵　開山夢窓国師本願津野孫八郎親高法名海蔵寺殿一機玄覚大居士　〇地蔵堂今在家二ツ石に有大善寺支配　大善寺寺記曰右地蔵は須崎湊山之麓に旧跡有海蔵寺持仏本尊也往古天武天皇御宇白鳳十三甲申年十月十四日当国大潮騰り民岳悉流失田地三十万束流敷是時海蔵寺境内欠ケ院住不成此時今在之家渡り五反余之寺園を構へ寺務有赴公義御本倉帖に相見る然処末世に成海蔵寺及退転此地蔵地下人之守護と崇め当所二ツ石に安置

〇

一、幡多郡御坊畑村庄屋先祖書曰御国ノ南東寺ヨリ足摺山ノ間地方二十六万石有ト云御国内高十二郡ノ内大方郡あだち郡里田郡とふ田郡しのぶ郡五郡人王四十代天武天皇御治世ノ内白鳳十三年十月十四日大地しん浪

高事不及申当御郡上山郷ノ内片平ト申処ニ半身魚掛居申付片魚村ト申同入野郷八町山ニ舟梶八丁掛八丁森ト申候又上田ノ口村ノ南田野浦境山浪流此山流　ト申候又土佐南五万頃海成其外御国用神社仏殿在家くつれ流失

野見千軒

高岡郡野見村古老伝云白鳳四年以前ハ野見千軒と称し同郡須崎村の長者辺ヨり今の地位迄人屋軒を並へ一に又長者千軒とも云頗る繁盛ニして波津波に流亡したる黒田郡の広野を一見する土地なれハ野見と名付也とぞ然るに土地も人屋も皆流失し纔ニ残る人民共少しの流れ残りたる此地を見立居宅を結構セしと云同郡大谷村に属する駿岐山ハ一山墳墓の地にして大小の古碑百千を以数ふ白鳳以前本村の三昧地なりと云実にさも有るべし今の人屋百戸に過さる本村の墳墓所とは思ふへからず野見千軒と称し小都会たりし事確乎たり又陰暦正月十四日の夜退潮の極期を伺ひ潮斗りと称し五色短冊数千葉を結付たる大葉竹を潮と陸の界に立るを今ニ旧例とす往時戸島千軒野見千軒大坊千軒の世代其疆々に立たりし古式の残りたる事とぞ又同郡大谷村の陸地より遥に八尋を隔てたる神島は本村の属たるも往昔弘く此近傍は野見の所管たりしとぞ

章行云白鳳以前古碑イカヾ此比ハ国造又ハ高貴ノ者ニアラサレハ碑ハ多クナシ

〔補注、幡南探古録〕○亀井釣月著、沖本樵児補

災害としては往昔大震災ありて海嘯大に起り、之が為陥没する所あり或は波浪陸地を呑み、遠き地域に迄器具舟船などの漂ひ至れる等の口碑各所に伝はるあり、即下の加江荒倉山のコガン峠、大浜のサラン峠、爪白沖のイデ崎、西泊の大嶋、宗呂の舟川、幷に幡南以外なれども奥内村の流れ越え、柏島の沈堤、石原の舟ノ川等の伝説之れなり。固より漠として何等年紀の知るべき者無しと雖、史によれば白鳳年間大震災ありて土佐の田園五十万頃陥没して海となるとあり、以上の伝説亦此の事変と仝一の事を語るものと思はざるを得ず。

〔西土佐村史〕〈編纂委、昭45〉

白鳳十二年甲申冬十二月十四日（六八五）天武帝の御宇、大地震があったのは有名である。この地震で土佐の国で田畑五十四万頃が陥没して海と化した。その土地は鍵掛郡、小県郡と称した由であるが、一説には黒田郡と称したとも伝えられる。今もなお渭南地方に鍵掛小方の地名があるをみれば、やはり幡多郡南方の地ではなかったかと想像される。説によると、天気晴朗にて波静かなる日この地方沖合で海中を眺めると、時として当時の竹林・家屋跡、塀・井戸などの残骸らしきものが見られ凄絶気を失うばかりなりという。

（註）「頃」は百畝といい、又一説には一歩という。

〔大内町史〕〈中田八束著、昭32〉

古満目、柏島に往古千軒の戸数があり、その陸地跡が完全に海中にあると浦人は異口同音に説明する。事実三月の大潮には堤の跡が遥か沖合に完全に見える。慶長以後の陥没でない事は天正地検帳によって明らかであるので、史実としては浦戸沖となっているが同一地続の土佐だから白鳳の大地震に陥落したのかもしれないし、こゝまで遡つて考えるより他に方法がない。

慶長、寛文共に何らの資料を残さぬ。

〔下川口村誌〕〈田村信吉編、昭10〉

口碑　下川口浦専用漁場中　天嶋の附近に「井出ざき」と云へる網代あり、往昔此附近に井出（堰）あり多くの田園もありしが地震の為陥没して海となる。

仝　宗呂上みの段の附近に舟川と云へる処あり、海嘯の時舟の漂蕩し来りて坐せし処と云ふ。

附　記

○前略　爪白は夫迄は二千七百石の村と云へり、今の入船嶋は田の中の氏神の社と云寺も二軒あり、西は称名寺東は覚夢寺覚夢寺は現存し称

名寺は字斗り入舟嶋の沖二丁斗りの処に井出と云ふ網代の字あり、井出とは田の水を吐かす川口を云ふ、場所は東は千尋岬より西は域山の鼻迄一湾の田地なり、此事は覚夢寺の古き過去帖の表に記載あり。
右の一節は藤井智道氏が記せる杉島宮従中世之概略記録中にありし。

〔大方町史〕〈編修委、昭38〉

入　野

大方山長泉寺

又口碑を伝えるものに「往昔当寺所在の地、白鳳の変に海となり、住僧某本尊を携えて入野村に来り一宇を建立す。大方山長泉寺之なり」とある。

○

高岡郡須崎の南方で、黒田郡と呼ばれたとの伝説があり、またそれは桂浜の南方であったとか或は室戸崎の沖だともいい、更に東室戸崎から西足摺崎におよぶ今の土佐湾一帯で、黒田・黒土・上鴨・下鴨の四郡二十六万石におよぶものだったとも伝えられる。これらの伝説を推しひろめて行くと、大方町の南方の海湾もその時の陥没によって出来たものとなり、「長泉寺記」にあったと云われるこの寺が、ずっと西南方から避難して入野本村に移動して来たという話にまで発展することにもなるが確証がなく、ついに一つの口碑に終りそうである。

〔高知県神社誌〕〈竹崎五郎著、昭6〉

琴平神社（○長岡郡）三和村里改田字琴平山

古来当地方の総鎮守で、神威赫然一般の崇敬篤き古社である。社伝には「天智天皇五穀御祭所国民豊楽黒崎御宮□古土佐国黒崎といふは是より南にあり、此地より七里沖にとつかうの峯とて東西大河より流出る川裾長野常磐両村の間に有此所に黒崎の宮と申て五穀御祭の御宮なり云々」とあつて彼の白鳳年間の大地震に陥没した黒田郡に鎮座の処、大変の節当山へ神移りあり、里人これを奉斎したといふ。鎮座地は金毘羅山上にあり、老樹古松鬱然たる裡に本殿、拝殿、給馬殿、神庫等結構宏壮極めて神厳な境地である。

鳴無神社（○高岡郡）浦の内村奥浦東分字鳴無

当社祭神は土佐神社と同神で、雄略天皇の二十二年この地に御神幸あり、土民高賀茂大明神と崇称し鎮祀す。后二百余年白鳳十三年十月十四日地震の為め当郷の地大半一度海底となり、遂に今の地に社殿を設け和鎮す。尋で神意に依り土佐郡一宮村に鎮座したと伝へられている。

○他に〔高知伝説散歩〕〈市原麟一郎編著、昭50〉「竜神の玉」（神戸）、「宇賀の長者」（長浜）にそれぞれ黒田郷沈没の伝説が載せられている。以上の史料と同旨であるので略す。

〔北川文書〕〈「高知県史・近世史料編」所収、安芸郡野根郷〉

一　往古白鳳年中大変今土民申伝へ、東ハ東寺之端より西ハ足摺之はな迄ありつる広大之土地悉く皆沈し事とそ。其有無は知へき様なし。異事ハ歴代の国史ニ明なり。白鳳元年より今年迄年数九千百八拾三年、又漁父之申ハ足摺、東寺の通往古之土地堤の如く残、其所ニ猟事なりつるよし。又此時勅を下し給ひ土佐の国神を鎮めよと仰を承り下りし神職成候者、今ニ東灘辺ニ住居宗円何某の家と聞へし。其住居ハ忘し。宮地伊勢守殿噺し聞し事なりき。

〔皆山集〕〈「里改田村、琴平神社由緒」〉

長岡郡里改田村字琴平山鎮座　郷社祭神大物主大神　崇徳院天皇

一　由緒

天智天皇五穀御祭所国民豊楽

黒崎御宮

右土佐国黒田ト言ハ是ヨリ南ニ有此地ヨリ七里沖ニトツカウノ峯トテ東西大河ヨリ流出ル川スソ長埜、常盤両村ノ間ニ有此所ニ黒崎ノ宮ト申テ五穀御祭ノ御宮ナリ有時日数三十日大雨フリ東西ノ河々ヨリ洪水出黒田大埜大海ノ如クナリ其翌日大地震シテ終ニ南海トナル此時敗損

スル事凡土地半国ニ及ヘリ近在里人此山ニ上リタリシニ海中ヨリ乾ノ方ニ当テ金ノ光リ毘羅々々トシテ玉来テ此山ノ松ノ末葉ニ留マラセタマウ里人是ヲ見テ後神ナラント此御山ニ如件奉崇則居王峯山ト号ス松玉金毘羅大権現ト奉祭ルナリ亦其後塘塚長者末宇河一朝ト言人寄附シテ分領余多潤有東池村カキ山ト言所ニテ土ノ人形ヲ作キマンマツリシタル故我田地ナガレタリト言

○

「吸江遊覧詩幷序」、黒山右慈庵筆

乙巳の夏予疎からぬ友ひとりふたりと吸江ニ遊はん事を契り橋の本より扁舟ニ棹さし颺々として浮ひ出つ風光特ニうるハしうして塵怪おのつから伸へり朋友問て曰伝聞むかし此所大浪ありて山を崩し田を埋ミ初て此入海となれるとなんいふかし何れの世にかくありいつれの書ニか記し侍る予か云日本書記を案るに天武天皇白鳳十三年十月十四日の夜とかや地震夥しうして山崩れ川は洩れ諸国の官舎民屋或ハ寺塔神社破損する事幾千万といふ数をしらす人民六畜多くハ死傷し豫州の温湯も埋れ土佐の国田苑五十余万頃悉く埋れて海と成となん古老の説を聞ニ六十七年以来まてハ此海東北西の山間を廻りて甚広といひぬ思ふに此地彼旧記ニしるせし処ニや

○

諏訪神社合祭神　一高　志和村浜屋敷鎮座諏訪神社へ合祭神

黒土神　黒土郡土人ノ惣霊を祭と云志和礁へ合祭

右三社勧請年月等不詳と雖も古来より志和村ノ崇敬神也初メ志和村より一里斗り沖合志和暗礁ニ鎮座ナルモ神社御改正ノ時神殿等も無之海底を指て鎮座なセシと称すのミ故ニ誤テ調落ト相成明治十二年十一月廿八日許可ヲ得テ合社但古老口碑ニ云白鳳二年酉ノ大変ニテ黒土郡ト唱る土地海底と相成而后ニ該郡ノ諸神社並人霊を合祭して元志和礁ノ神ト称シ其後志和礁神社ト改む。

〔土佐国蠹簡集竹頭〕〈高知県史〉

下民むかし咄

御国ノ南東寺　足摺山ノ間地方弐拾六万石有ト云御国内高拾弐郡ノ内大方郡あだち郡黒田郡とふ田郡しのぶ郡五郡人王四十代天武天王御治世ノ内白鳳拾三年十月十四日大ちしん浪高キ事不及申当御郡上山郷ノ内片平と申所ニ半身魚掛居申ニ付片魚村と申同入野郷八町山ニ舟ノ梶八町掛り八町森と申候又上田口村ノ南田野浦境山浪流越此山ヲ流越と申候又土佐南ニ五万頃海ニ成其外御国内神社仏殿在家くつれ流失

〔陋巷浅説〕〈久松三助清秋筆、「須崎史談21」所収〉

観音寺

古ハ宮川内土居屋しきの山に有り。元亀、天正のころか、快心僧都の代に今の竹の岬へ移されしと也。今の寺地元ハ津野藤蔵人　津野の一老、知行千石也しのやしきなりしと云伝ふ

と云伝ふ

此寺本尊の観音は、上古の事を伝へ聞くに元ハ大坊の浦に安置せしが白鳳の大変に大影山の麓、堂が奈路といふ所に流れ留って後、爰に暫くあがめ置けるが、其後宮の川内土居山の観音寺へ移し、それよりも、又竹ノ岬今の観音寺へ移されしと聞ゆ。白鳳己来も一千余年それより前の事ハ猶聞き及ぶ事なし如何様久しき仏なるべし。

〔南海大震災誌〕〈広木三郎編、昭24〉

今を去る一千二百余年前白鳳年間当国大地震ありて広き陸地陥りて海となりきといへり。今其跡はこのあたり（須崎）の南ならんと云ふ。

古老の伝説によれば白鳳以前我が須崎附近に戸嶋、千軒、野見、十軒と云ひて戸嶋と野見とは当町一市邑にして長者の鼻は住居せし屋敷跡なり。海のよく澄みたる天気の麗かなる日干潮を待ちて此の所に至れば井戸石垣等を海底に認むるを得べしと未だ其真否を検する能はずと書しあり。

〔土佐寺院誌〕〈竹崎五郎著、昭7〉

長泉寺　入野村入野字田詰（現幡多郡大方町）

開基年代は未詳であるが、口碑に依ると往古当寺所在の地、白鳳の大変に海となり、住侶某本尊を奉じて当村に来り一宇を建立した。これが当寺の起原であると。永享元年六月入野但馬守再興。

〔子ども郷土史〕〈安芸市研究研究所編、昭52〉

それから（○白鳳大地震）一三〇〇年の年月が過ぎましたが、いまでも漁師の伝え話によると、雨の降る夜に漁をしていたら海の底から人のすすり泣く声が聞えてくるとか、晴れた日に海にもぐると屋敷の石垣の跡や井戸の穴の跡がみえるとかいうことです。わたしも海岸ぶちの学校にいる時漁師からそんな話を聞いたことがあります。こうした話があちこちで伝わっているのも、海の底に沈んだ人々を悲しむ声のあらわれでしょう。

2 康和元年一月二十四日（1099－Ⅱ－22，ユリウス暦では－16，2122514）、奈良、大阪、京都で強い地震を感じ、興福寺、天王寺に小破損あり、土佐国でも地震、潮江庄千余町海となる〈（Ⅰ－158～159）〉

〔兼仲卿記紙背文〕〈「歴史地震」（宇佐美龍夫著、イルカぶっくす8、1976）、による、桃裕行発見史料〉

土佐国潮江庄康和二年正月□□四日地震之刻国内田千余町皆以成海底畢社領□□江御庄依近海浜又以同前……。

○康和元年の誤か、

3 久安五年十一月二十四日（1150－Ⅰ－1，ユリウス暦では1149－Ⅻ－25，2141089）、深夜、幡多郡地震あり、

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教協会刊〉

○幡多郡石原村

御園龍王神社

青枝女霊　世俗青衣女言恵与并相通予
正光任論補体背負小児女像

在同所御園神問正光答曰同郡川登農家賤陋娘青枝女其容色美麗而娩婉状遠楊貴妃虞氏君西施李夫人王照君木花開耶姫衣通姫龍宮乙姫小野小町恥面形容伝聞伊予田淡路守紀伊守国能祖恋之為妾一子岩寿丸有誕生矣淡路守妻本結某娘嫉妬甚城内難彷徨久安五辰年霜月二十四日夜深更懐一子城中雖忍出闇夜失方角蹬惑入深山幽谷岩峨々高山九折険道荊棘蔓失通于時大地震堙山谷岩落母子倶圧死焉厥亡霊怨気結而不散為崇其神霊斎御園龍王鎮之云云

○〔皆山集一〕御園神社（幡多郡山奈村山田）の条、および〔神社明細帳〕にもほぼ同一の文あり。

4 文永二年七月十七日（1265－Ⅸ－5，ユリウス暦では－Ⅷ－29，2183340）、土佐暴風雨、山岳崩壊する。

〔池川年代記〕〈竹本源治校訂〉

一、文永二年七月十四日より五六七日、朝の四時迄風雨はげしくやむ時なし。中にも十七日無上の荒風にて大木根こげ、中折、屋傷む。洪水にて山岳壊れ風に凌かれ、表ては只かれ山と成けり。

同十八日、河添の青木の末に雀数十羽鳴叫、立寄見れば其の木の元に正き幣串三本落掛りたる体也。量を取上按に烏海鎌倉の産社先祖の霊風雨に乗渡給と押載き、当社に合大渡三社権現と奉崇。

右は近年風雨・雷光・暑寒共不当成、諸人大いに恐信心専として神仏を貴む。

5 弘安四年七月十八日（1281－Ⅷ－11，ユリウス暦では－4，2189159）

土佐暴風雨、山岳崩壊する。

〔池川年代記〕〈竹本源治校訂〉

同四年巳七月、日々に夕立・雷光・神雨度々也。同十八日九日両日古今まれなる風雨にて洪水にて、山岳壊れ、大木根こけ、中折、屋毎吹破れ野山は追々焼立の如かれ渡、すざましかりし次第なり。

6 正平十六年六月二十四日（1361－Ⅷ－3，ユリウス暦では－Ⅷ－26，2218370）、近畿地方に強い地震あり、摂津、阿波、土佐には津波がおそう。〈（I－332）に〔土佐国編年紀事略〕の記事あり、本書引用の〔南路志〕の文がもととなっていると思われる。〉

1361年8月3日，4日の潮汐表（高知，H_0＝110 cm）

満潮	干潮
3日23時40分　170 cm	3日17時35分　114 cm
4日14時28分　150 cm	4日 7時10分　65 cm

時刻は「睥睨刻」（4時ごろ）としたものが多い。

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教協会刊〉

○香美郡前浜、南光山智蔵院正興寺の条

当寺所蔵古文書

土左国田村下庄正興寺院主転並供田□

合一ヶツタホ十里西依、五段御敷地

西ヲホ九里
一、壱町

一、八反西□

右件供田者本寄進状者康安元年六月廿四日大塩之時雖令紛失為彼供田等明渡之上者為末代沙汰人等加判形之者也仍為後代亀鏡の状如件

応永二年二月九日　妙香寺殿　安主　康氏
公文信　実

○〔皆山集八〕、〔正興寺文書〕、〔土佐国蠹簡集脱漏〕に同一の文あり。

7 康暦二年（1380）か三年（1381）の秋か冬、高岡郡に地震あり、多く家倒れ人死ぬ。

〔八幡荘伝承記〕〈庄田古文書、高岡郡佐川町庄田、結城有氏所蔵、明神健太郎刊〉

康暦の変の事

康暦二年八月十七日、大出水の為穀物実らず荘内は云ふに及ばず、近辺の諸郷の者ども皆飢ゑてかなしむものの声を聞くもあわれなりけり。亦この年悪疫来りて死す者数知らざりき。されば守護代中山殿は神明に祈りて悪疫退散の祈願をなし亦五穀成就の祈願をなしたれば翌年やがて改復し豊熟となりければ皆よろこび居りしに亦々地震ありて多く家はかやり人死にけり。翌改元なり永徳元年の秋は世は大平にをさまりて人亦生きにけり。

○康暦二年の翌年、康暦三年に永徳と改元されている、従って右の文の康暦二年の翌年が地震の年、その又翌年が永徳元年という文は不条理である。

8 弘治年間（1555～1558）、幡多郡石原村愷山震動あり。

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教協会刊〉

○幡多郡石原村

愷山権現神社

九樹村里長杉本文左衛門予伝曰弘治頃乎山震動甚或時惑人倚以当地奉勧請蔵王権現鎮之云云英通按垂跡和州吉野郡金峯山勧請歟且修験所変歟不知是非

○「土佐故事雑纂」同一文あり

9 天正十三年十一月二十九日（1586－I－18，2300352）、近江、伊勢尾張、飛弾、美濃、北陸、京都を含む地方で大地震あり、越中木船城崩れ、飛弾白川谷で三百人の死者出す、当時近江長浜の城主であった山内

一豊の娘与弥姫、乳母、従者とともに城中で圧死する。「天酉地震」〈（Ⅰ－553）〉

〔皆山集二〕

「僧伝」、湘南和尚の条。

湘南幼字拾釈諄宗化号湘南一豊公天正十三乙酉於江州長浜入部後十一月二十九日大地震城中悉顚倒覆殿潰落与祢君六歳見性院殿御腹乳母共卒去妣別殿無異変甚悲歎日々墳墓詣啓一豊公我已不勝哀情竟入禅林妙心寺。

「亀暦通記」

十一月廿九日江州長浜大地震此時一豊君女米姫　死年六歳云

〔国府村史〕〈竹内英省著、昭36〉

かくして一豊が天正十三年（1585、五八五）近江長浜二万石の城主となるや備後と称し家老に列し千三百石を賜わった。同年十一月廿九日震災で和信夫妻ともに震死し同地に葬られた。一豊と若宮夫人との間の一粒種与弥姫（当時六歳）を助け出さんとして共に圧死したといわれる。

（〇中略）その従者五人の一人の乾伊助は初代長浜城家老和信の長男、八歳の時父の震死にあい、幼少のため世を嗣ぐことができなかった。

〇都司注、山内一豊と夫人は「共に死んだ」わけではない。

10　慶長九年十二月十六日（1605－Ⅱ－3，2307308）、南関東沖を中心とする地震と、南海沖を中心とする二元の巨大地震があり、房総、八丈島、伊豆、遠江、阿波、土佐は津波におそわれる、阿波宍喰、鞆浦、土佐甲浦、崎浜、室津、浦戸、土佐佐賀、および幡多郡三崎をおそう、崎浜で五十人、三崎で百五十三人の死者あり。〈（Ⅰ－669～678）、土佐関係は（Ⅰ－672）に「置文写」が、（Ⅰ－673）に〔三災録付録〕が、（Ⅰ－674）に〔谷陵記〕記事がのっており、すべて崎浜の僧暁印の記録の引用であって、本書所載の〔北川文書〕の記事がその原文に近いと考えられる、この他（Ⅰ－676）の〔蒼屋雑記〕の「慶長九年甲辰十二月十六日、夜亥ノ時、三崎浦大潮指、浦中男女百五十三人死」という記事は相州三浦三崎のことではなく、土佐幡多郡三崎の事情を述べたものである（石橋克彦、1978）という。また「史料」の宝永地震の記事の中で、（Ⅱ－106）所収〔谷陵記〕の安芸郡元の条に「（宝永津波は）磯辺ノ家少流ル、潮八町三ケ一迄、慶長九年潮ヨリ、六尺卑シト云フという文、および、同書前半末尾の「但幡多郡佐賀へハ此ノ時ノ潮家迄入ル、此外ノ浦々伝ナシ」という文の「此の時」が慶長津波をさしており、これらの文も参考とすべきである。

1605年2月3日，4日の潮汐表

地名	H_0	満潮	干潮
室戸岬	109 cm	3日17時34分　171 cm	3日11時50分　62 cm
		4日6時46分　173 cm	4日0時9分　－7 cm
高知	110 cm	3日17時31分　173 cm	3日11時49分　61 cm
		4日6時41分　174 cm	4日0時8分　－7 cm
土佐清水	112 cm	3日17時36分　188 cm	3日11時55分　63 cm
		4日6時43分　180 cm	4日0時12分　－6 cm

主な文献による発震の時刻について。「宍喰浦旧記」のみ他書と異なる。

文献名	「史料」所載ページ	場所	原文表記	およその換算時刻
当代記	（Ⅰ－670）	駿府？伊勢亀山？	戌刻	3日22時
伊豆八丈島宗福寺古記	（Ⅰ－671）	八丈島	夜	－
崎浜村暁印記録	－	土佐崎浜	夜地震，夜半潮入	－
	（Ⅰ－675）	土佐幡多郡	夜亥，時大潮	4日0時
阿波国社寺文書	（Ⅰ－676）	阿波	未亥刻	4日1時
宍喰浦旧記	（Ⅰ－677）	阿波	辰半刻より申の上刻まで大地震，酉の上刻日出のところ津波	3日8時から16時まで3日6時前
阿波国鞆浦碑文	－	阿波鞆浦	亥刻	4日0時

〔北川文書〕〈「高知県史、近世史料編」所収、安芸郡野根郷〉

※『一　崎浜村談義所蓮華院大日寺住僧権大都阿闍利暁印か寺録ニ、慶長九年災多し。先一ニ七月十三日大風・洪水、二ニ八月四日大風・洪水、三ニ閏八月廿八日又大風・洪水、四ニ十二月十六日夜之地震、同夜半ニ大潮入而南向之国ハ悉く破損ス、西北向之国ハ地震計と云々。当所ニハ五拾人溺死、西寺・東寺之麓ニハ四百人、甲浦ニは三百五拾人、宍喰ニハ三千八百六人溺死。野根浦へハ潮不レ入不思儀と可レ言。当処之潮ハ当寺之履脱を限り、或ハ中里鍛治か庭、川ハ船場石本か家之前、又は八幡宮は高欄へ迄打詰ル。年数弐百五拾壱年ニ成ル。』

（Ⅰ－675）

○「皆山集」も同文

〔大方町史〕〈編修委、昭38〉

当時は山内一豊が入国して間もない頃で記録が備わらず、わずかに後年谷秦山・奥宮正明などの筆記によるものの存するに過ぎない。それ等によると、その年には七月と八月、うるう八月に猛烈な風雨洪水があって、十二月十六日の夜急激な大地震が起り、夜半に至って大潮が入り、浦々に被害が多く、中でも安芸郡方面に甚しく、死人も数百人に上ったとある。

〔佐賀町郷土史〕〈大塚政重著、昭49〉

佐賀坂本家の記録によれば

「慶長九年極月十六日地震潮入の時浜崎にあり、母を背負いて城山に逃る。祖先巻物、知行折紙、元親公の書簡等旧記悉く流失す（坂本弥次郎重金記）」

と津浪の模様が誌るされている。

この地震に安芸郡で三千八百六人の死者があったと伝えられている。

伊与木郷も相当大きな被害があったと思われる。

○三千六百六人の死者が出たのは阿波国宍喰であって安芸郡ではない。

〔浦戸港の沿革と其の史蹟〕〈松山秀美著、史談22、昭2〉

慶長六年山内一豊の入封となって浦戸の城にあるや、同九年に至り前代修築の突堤は激浪の為に崩潰し、彼の北方の澪筋も浅渋して船舶の出入に困難を来したが、寛文年間賢宰野中兼山が奉行職に登用せらるゝに及び、彼は天賦の材幹を以て長宗我部元親の築堤以上に大規模の設計を立て、勝浦浜の古堤を修補すると同時に、対岸種崎にも突堤を構築したので、潮流漸く旧に復し、澪筋も水深を生じ、土砂の放流をも容易ならしめた。

〔土佐故事雑纂〕

（○「土佐日記」に現われる「大湊」の所在論争文中）享保ノ学者谷秦山が其奥宮正明ニ贈りシ書簡ニ大港ノ所在ヲ説キ「大みなと池の事とは不存候、前浜の事とのみ存候池にて大かたあるましくと存候」トアレバ前浜説ハ既ニ是ヨリ以前ニ唱レラレ而シテ秦山ハ実ニ此談説ヲ賛成セシ一人ナリシコトヲ知ベシ、南路志又此説ヲ取レリ其文ニ云、

或人云大港ハ兆ニ大岩ヨリ南へ鏡川分レ秋田川ヲ西へ神洲下田村ノ南住吉ト伊都多迄ノ間ヲ云フトゾ、今按ルニ久枝ノ室岡山ヲ片取リ兆ハ大岩即チ塩ケ峯沖島々マテ潮入リ鏡川ノ末川港ナリ、一豊公御国迄満形可有慶長中大変ニ□□以来堤築田地トハ可成猶可考

〔土佐国編年略上〕〈中山厳水筆、弘化四〉

（○香美郡吉原、香宗我部、野市付近の説明文のあと）

酉ノ方ヲ酉ノ城戸ト云也兼序ノ墓ノ酉ニ百姓屋敷ノ内ニ一人腹切申サル墓アル也兼序ノ御家来也兼序ヲ責ルハ田居八幡ノ田中ナリ此墓ヘメタトノホラレヌ也酉ノ田中ニモ古墳アリシト云カ如何ト問ヘハソレハシラス田中ニ寺アリシ也先年ノ大潮ヨリマタ前ノ大潮ニ鐘ツキ堂ノカネハ国府へ行門ノトヒラハ淡路島へ行シ也ト

○右の文で「問ふた」のは大神真潮翁、答えたのは加々見郡（香美郡）吉原の九十三歳の市右衛門という老人で、寛延三年（一七五〇年）の問

答である。「兼序の墓」とは長宗我部兼序の古墳をさす。「先年ノ大潮」とは宝永津波を、「ヨリマタ前の大潮」とは慶長津波をさすと思われる。

〔室戸町誌〕〈編集委、昭37〉

願船寺の草創

西寺東寺の浦分　浮津室津津呂の灘辺では、男女四百余人が溺死した程である。その夜の津浪の惨害が如何に甚大であったかが想像するに難くない。想うに、この近隣では半に近い多くの人が、その玉の緒をうばわれたものらしい。ところで、此の夜、浮津浦に一つの奇瑞が残された。

浮津の人家の数十軒が、大津浪にさらわれたその中に、不思議や、商人三太夫と云う者の家が、取り残され、家族も一同無事につつがなく助かったと云う事である。三太夫と云うと、和泉の国の人で、仏千十郎と云う福人（中国、福建省の人）の末子であって、商買のため、遥々土佐の浮津へ来て、遂にここに有り付いたが、彼は日頃、阿弥陀如来を信仰して、家に安置して朝夕これを拝していたのである。

慶長九年辰、地震大潮入候みぎり、右三太夫、本尊の守護により不思議に相助り申候〔南路志〕

彼は阿弥陀如来の加護によって、百死に一生を助かったのだと、浦の人々は目を見はって、その功徳をたたえた。それ以来、浦人の中から阿弥陀如来を尊仰する者が、日増しに増加して行ったと云う。

〔土佐古今の地震〕〈寺石正路著、土佐史談会、大11〉

吾川郡神谷村の庄屋家記といふ年代記に左の文あり

慶長五子年一豊公御入国浦戸へ御入城云々四年目当城へ御移

仝　九辰年大風津浪入

土佐東部の国境に近き阿波国海部部に鞆浦と呼ぶ一村落あり村中に立石とて高丈余の紀念碑石あり該地震の事に関し末世の戒とて銘文を刻すといふ三災録に其写あり曰く

※『敬白右意趣書、人皇百十代御宇、慶長九甲辰年十二月十六日、亥刻、於当、月白風寒、凝行歩時分、大海三度鳴、人々巨驚、拱手処、逆浪頻起、其高十丈、来七度、名大潮剰男女、沉千尋底百余人、為後代言伝奉興之各平等利益者必也、』（I－676）

（訓点句頭は便宜施こす所、、末文又誤字あるに似たり）

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教会刊〉

○安芸郡浮津村の条

願船寺　真宗東本願寺末

寺記云建立ハ慶長年中ニ泉州境之商人仏千十郎と申福人之末子三太夫と云もの商売に付当浦へ来有付居候時本尊を請来安置　然ニ慶長九辰年地震大潮入候砌右三太夫本尊の守護により不思義に相助り申に付浦人右本尊を尊信之者出来自然と其家を道場と申ならはし候然共俗家にて僧形のもの無之寺役相勤不由其時より浮津浦に居住無違変延宝年中室津湊御結講被仰付候節当寺地に移元禄年中寺堂御改之節御公儀江正海と法名字に書付差上申候其後正徳卯年本願寺より願船寺と申寺号申請代々相続仕也

〔安芸郡史考〕〈安岡大六著、昭30〉

慶長の地震　慶長九年（一六〇四）十一月十九日に大地震があつて、その夜半津浪がおこつた。甲浦は三百五十余人の死者があり、野根は潮が入らなかつた。佐喜浜は中里の鍛冶屋次郎左衛門の坪まで波が入り、「代官の下役山田助右衛門の一家は波にさらわれ朝露の如く消えたるは哀れなるかな悲しきかな」と書いてある。死者は五十余人であつた。岬附近では四百人ばかりの死者があり、奈半利は津波のため善照寺附近には家が一軒もなかつたと記されている。

○「安芸郡のあゆみ」同旨の文あり

〔田野文化史〕〈安岡大六著、昭30〉

慶長九年（一六〇四年）二月大地震あり、夜半に大津波起つて、田野

平野は一面に海水が入つて、潰家や死者も相当あつたようである。

〔佐喜浜村を語る〕〈小堀春樹著、昭5〉

四五十年後の慶長九年十二月十六日の夜、突然の大地震が来た。従つて海沿ひには附き物の大海嘯が、大地を呑んだ、十丈もある大浪が七度寄て七度引いたと云ふ。

「波に浚はれたる男女五十四人」と史実は物語りしてをる。

〔羽根村史〕〈十兵衛会、山本武雄編、昭32、安芸郡〉

白鳳地震後九二〇年を経た慶長九年（一六〇四）七月十二日大雨洪水八月四日大雨洪水、閏八月二十八日又大雨洪水十二月十六日大地震があつて夜半津浪を伴って居り、この時は羽根には潮は入って居らず（〇以下略）

〇以上の文献の他に〔稿本、佐喜浜物語〕（植松棟造著）があるが記事の独自性に乏しいので略す。

〔土佐国旧事記大集上〕〈県図、K270－8〉

明治三十五年二月島村翁ノ調製セシ浦戸港縮図ニ記載セシ摘要記文ハ左ノ如シ、（中略）試ニ当港ノ沿革ヲ挙グレバ天正十七年長曽我部元親氏築港慶長十年波涛ノ為メニ港口大ニ破損ス野中兼山翁之ヲ修繕シテ良港ト成ル、宝永四年大地震ノ為メ亦タ大ニ破損旧藩主山内氏大工事ヲ起シ復タ良港トナル事百余年、安政元寅年又タ大ニ破損ス以上ノ如ク屢々修繕セシガ安政破損ノ后工事数度ヲ重ヌルモ未ダ原形ニ復セズ。

〇慶長九年の誤か、あるいは修繕の日次が慶長十年であるか、ちなみに「日本の気象史料」には、慶長九年閏八月二十八日と慶長十一年九月一日に四国に大風雨があったという史料がのっているのに対して、慶長十年には近畿以西の風雨記録は知られていない、また筆者の史料調査にも慶長十年の暴風記録はなかった。

11 正保四年五月十四日（1647－Ⅵ－16，2322781）、南関東に地震あり江戸城、侍屋敷に破損を生じ、東叡山の大仏の頭落ちる。〈（I－777～783）〉

〔御当家年代略記〕〈宮地仲枝筆、元禄末年成立か〉

四、丁亥、五月十四日江戸大地震御上屋舗所々破損、

12 慶安元年四月二十二日（1648－Ⅵ－12，2323143）、相模国大地震、箱根山坂道崩れる、土佐でも小地震を感じた。（I－787～788）

〔池川年代記〕〈竹本源治校訂〉

一、慶安元年関東大地震と聞く、然に当国辺りは少し斗りの事也

13 慶安三年六月四日（1650－Ⅶ－2，2323893）、諸国に毛が降る、土佐にも降る。（I－802）

〔池川年代記〕〈竹本源治校訂〉

同三年寅の六月、諸国異る毛降り、其の形長四寸斗り、本黒中赤く末少し白く、馬の毛に似る品也、見まわす内に五六本、又十本斗りも有、木草の上にも降掛りたる体也、七月中比少し風雨して後は無、是何故共譬へ方無き事共也。

14 万治元年（明暦四年）四月三日（1658－Ⅴ－5，2326757）、および同年七月十一日（Ⅷ－9，2326853）江戸に地震あり、

〔淡輪四郎兵衛記録〕〈この時四郎兵衛江戸にあり〉

一、卯月（明暦四年）三日、（〇中略）同晩戌刻大地震也、

〇

同（〇七月）十一日、夜四ツ時分ニ地震仕候也、

15 万暦二年（1659）土佐に暴風雨あり、汗見川流域各所に山崩れあり。

〔吉野風土記〕〈本山町、長野徳次編、昭47〉

万治二年酉の年、月日は分らないが、八、九月の台風の時期のことであろう。（万治は野中兼山公時代、今より約三〇〇年前）大洪水があり、汗見川の流域各所に大山崩れがあり、屋所では上の鎌滝山の中腹より大山崩れがあり、屋所谷を押し流れ、屋所在所の一部と松原はその「ツエすわり」で有るとのこと。

其の時在所の谷より西、間山前屋敷の宅地の南の少し上に栃の奥という所に栃の大木があり、これが山崩れと共に押し出し屋所の在所の前を立木のまゝ押し流れ、汗見川に押し出して倒れ屋所の古野屋敷の前で川を横に関き止めて長く瀬戸となっていた。

以上は屋所のことであるが、汗見川全体に山崩れの被害は大きく為に川はあせて何処でも渡ることが出来るようだったと。この万治二年の大洪水は各地に被害があったらしく、本山北山東の大崩もこの時であったとのことである。

16 寛文元年十月十九日（1661－Ⅷ－10，2328072）、土佐に強い地震あり高知城破損あり、〈（Ⅰ－812）の〔御当家年表〕の文面は本書所収〔御当家年代略記〕と同一〉

〔御当家年代略記〕〈宮地仲枝筆、元禄末年頃成立か〉

寛文元年、辛丑、十月十九日地震、御城内破損。

〔室戸岬町誌〕〈安岡大六著、昭28〉

寛文の地震　寛文元年（一六六一年）十月十九日地震があつたが、大した被害はなかつたようである。

〔羽根村史〕〈十兵衛会、山本武雄編、昭32、安芸郡〉

寛文元年十一月十九日大地震

〔上ノ加江町史〕〈編纂委、昭31〉

寛文の大地震

寛文元年十一月十九日

〇十一月は十月の誤伝であろうか、

17 寛文二年五月一日（1662－Ⅵ－16，2328260）、京都、大阪を中心として近畿、東海地方に大地震あり、〈（Ⅰ－815～833）、このうち（Ⅰ－824）所収の〔御当家年表〕の文面は、本書の〔御当家年代略記〕と同一〉

〔御当家年代略記〕〈宮地仲枝筆〉

五月朔日京大坂大地震京都御屋鋪破損

18 寛文三年十二月六日（1664－Ⅰ－4，2328827）、京都に強い地震あり、二条城、伏見に家屋被害あり、〈（Ⅰ－845～846）、このうち、〔御当家年表〕の文面は、本書の〔御当家年代略記〕と同一〉

〔御当家年代略記〕

十二月六日山城国中大地震京伏見御屋鋪所々破損、

19 寛文五年一月二十八日（1665－Ⅲ－14，2329262）、および同年七月二十九日（1665－Ⅸ－8，2329440）、土佐に地震あり、

〔桂井素庵筆記〕〈杜山蔵書、高知県文教協会刊、昭40〉

正月廿八日、此朝六つ前地震す少しづつゆり久敷ゆる也、

七月廿九日、此夜三更に地震す、

20 寛文十一年一月十八日（1671－Ⅱ－27，2331438），土佐，伊予に強い地震あり，備前でも感じる，甲浦に小津波あり，〈（Ⅰ－867）に，「邑久郡誌」（岡山県）の記事あり〉

1671年2月27日の潮汐表（室戸岬，H_0＝112 cm）

満潮		干潮	
27日 8時 1分	163 cm	27日 1時46分	28 cm
27日20時10分	152 cm	27日14時 8分	37 cm

「邑久郡誌」では辰の刻，となっている。27日7時ごろか。

〔寛文十一年日記〕〈山ノ内文庫，県図，K 252－7〉

風雨雷洪水地震之事

正月十八日卯后刻大地震仕中村佐川宿毛宿川茂同前之由甲浦は卯之上刻より中刻前迄大地震いたし湊之内潮之差引強東西之町江差上候得とも止付鎮，破損は無之由与州も同刻強地震候得共為差儀ニ而無之由不伯様より被伝下也

21 延宝五年（1677），高岡郡四万川坂元川池が奈路の大沼崩壊し被害を出す。

〔津野山異談続編〕〈中越穂太郎著，昭30〉

延宝五年四万川坂元川池が奈路の大沼崩壊に及びせかれたる水は分丸桑の木畑（字）にまで至る。その被害水浸地は一里奥まで及ぶ。

22 天和三年六月二十日（1683－Ⅶ－12，2335987），土佐大洪水，物部川筋に地変あり，

〔南路志〕

○香美郡山田村

天和三年癸亥土佐国六月廿日大洪水物部川筋小田嶋より久枝の川筋は立家とも皆流失此度の水難に小田島は流申に付山田嶋は林田分之内岸田へ屋地取して何も不残上り申候小田嶋は菅野へ引越暫居申候へ共大川を隔農作難成候に付又不残右の小田嶋へ戻也岩積も此時大かた西へ上り申也

23 元禄六年十二月十四日（1694－Ⅰ－9，2339790），高知に二度地震あり。

〔亀暦通記〕〈「皆山集二」所収〉

十二月十四日辰刻高知地震亥刻亦震。

24 元禄十一年九月二十一日（1698－Ⅹ－24，2341539），土佐，鳥取に地震あり，〈（Ⅱ－22）所収の〔鳥取地方の災害其他気象関係記録〕には「申の刻地震」とある。〉

〔亀暦通記〕〈「皆山集二」所収〉

土佐国城下有七怪，九月廿一日地震爾後頻震。

25 元禄十四年八月十六日（1701－Ⅺ－18，2342598），土佐洪水あり，上八川村清水に山崩れ，死者あり，〈現在吾川郡吾北村〉

〔高知県史下〕〈津村久茂編，昭26〉

その後八月十六・十七日洪水があつて損毛十万余石に及んだ。上八川村清水に山崩れあり死者八人を出した。

26 元禄十五年（1702），高岡郡大野見村に大地震あり？

〔大野見村史〕〈編纂委，昭31〉

（〇年表中）大洪水，大地震あり，

○何の書によるか不明、疑わしい。

27 元禄十六年十一月二十三日（1703－XII－31，2343432）、南関東に大地震あり、津波の余波土佐にも及ぶ。「元禄地震」＜（II－35～74）＞

〔大変記〕＜県図、K 254－22＞

又地震して汐曲ヒ等有時は由断すべからず、浪入来ルト知へし。其訳は土佐物話と号ある古人の控ニ記有とも昔元禄十六癸未年十一月廿二日当国所々湊口汐満干日数三日不定一日之間ニ四五度も曲ヒ不審する所に東国大地震小田原崩レ安房上総江津浪入死人夥敷、皆人の知ル所也。此事已後ニ聞ユル他国之事成共心得のため爰に記トあり。

○地震が起きたのは二十三日未明である。

〔香北町史〕＜松本実編、昭43年＞

（○年表中）大地震があった。

○何の書によるか不明。

28 宝永四年十月四日（1707－X－28，2344829）、東海、南海、四国沖にわたる巨大地震が発生し、東海地方、近畿地方、四国地方に大きな被害を出した。地震後伊豆下田以西九州に至る海岸に津波がおそい、伊豆下田、熊野灘沿岸、紀伊沿岸、大阪、阿波、土佐での津波被害がとくにひどかった。被害家屋は潰家流失家二万九千戸、死者四千九百人に及ぶ地震後遠江御前崎、土佐室戸岬付近で隆起が、浜名湖、および土佐高知市付近で沈下が生じた。

＜（II－101～211）、このうち（II－104）に〔御当家年表〕が、（II－104～119，123）に〔谷陵記〕が、（II－119～123）に〔弘列筆記〕が、（II－129～168）に〔宝永地震記〕が、（II－170～175）に〔高知県下に於ける津波災害予防施設に就て〕が、（II－176）に〔土佐安芸町、某家旧記〕が、（II－182～183）に〔宮地日記〕が、（II－183～184）に〔国中損亡の覚〕がそれぞれ収録されており、土佐の事情が掲載されている。本書ではこのうち〔谷陵記〕中の各浦の被害状況をのべた部分をあえて再録した。なお、「史料」の安政地震の項にも宝永地震のことに言及するものがあり、（IV－189－192）の〔三災録〕、（IV－321～324）の〔三災録抄録〕の両地震比較記事にも注目すべきである。＞

1707年10月28日，29日の潮汐表

地点	H_0	満潮		干潮	
室戸岬	109 cm	28日 7時40分	173 cm	28日13時 5分	88 cm
		28日18時47分	180 cm	29日 1時32分	23 cm
高知	110 cm	28日 7時35分	173 cm	28日13時 5分	86 cm
		28日18時46分	181 cm	29日 1時31分	22 cm
土佐清水	112 cm	28日 7時36分	179 cm	28日13時10分	88 cm
		28日18時51分	187 cm	29日 1時35分	24 cm

発震時刻については未ノ上刻，あるいは午の下刻と記した文献が多く，午後1時ごろであろう。

〔谷陵記〕＜（II－105～112）から転載＞

安喜郡

甲浦　亡所、潮ハ山迄、御殿並寺院三ケ寺、水主ノ家三軒残ル、番所一軒屋具計残ル、舟越ト云所ハ潮入ケレドモ家流レズ

白浜　亡所、潮ハ在所残ナシ、家ハ少シ残ル

河内　此村ノ土地ハ所々入込有之故、詳ニ難記大体三ケ一ノ亡所・潮ハ山迄

生見　潮ハ田町ニテ、家ハナシ

野根　事ナシ

崎浜　事ナシ

椎名　事ナシ

三津　事ナシ

津呂　事ナシ

室津　耳崎ヨリ打入ル潮ニ、湊ノ東水尻ト云所ノ家流ル、其外事ナシ
浮津　事ナシ
元　磯辺ノ家少流ル、潮八田丁三ケ一迄、慶長九年潮ヨリ、六尺卑シト云フ。
吉良川　事ナシ
羽根　事ナシ
奈判利　浜ノ在家亡所、御殿辺ノ家流ル、潮ハ田丁残ナシ
田野　事ナシ
安田　事ナシ
唐浜　潮ハ田丁迄、家ニハ不入
下山　事ナシ、但幸野家ハ流ル
伊尾木　潮ハ山迄、家少シ残ル
川北　松田島窪田モ亡所、柄川本村事ナシ
土居　本村ハ事ナシ、玉作ハ半亡所
安喜浜　半亡所、潮ハ田町十丁程迄、新庄新在家亡所
赤野　潮ハ田丁迄、流家ハ少ナシ
和食　潮ハ田丁ニ少シ入
香我美郡
手結　亡所、潮ハ山迄、山上家少シ残ル
下夜須　半亡所、横浜知切ノ家ハ悉ク流ル、潮ハ太宮の庭迄、北浜ノ笠松流ル、屈枝蟠根、無双ノ名木也、可惜
岸本　亡所、潮ハ山迄
王子　潮ハ田丁迄、家ハ山上ニアル故事ナシ
赤岡　潮ハ在所残ナシ、流家ハ三ケ一
古川　半亡所、流家少シ
芳原　亡所、浜ノ並松ノ外ニ古田出ル、畔ノ形顕然タリ、地一反許リハ並松ノ西ノ端ニアリ庄屋ヤシキヨリ申酉ニ当ル庄屋々数ハ古ノ土居ノ跡ナリ、地二十代バカリハ並松東ノ端少シ西ヘヨリテ、同所ヨリ辰己ニアタル、里人云、此所沙浜モ高潮権剥推流ケレバ、今ニシテハ此古田ノ幾ハク底ヨリ出タルト云コトヲ不知、但此松杉ハ昔ヨリ当所ノ墓地ニシテ、常ニ七八尺堀ルト云ヘドモ終ニ如斯ノ土ナシ、爰ヲ以テ相計レバ、深サ一丈ノ内ナラン、〇愚按ニ、右ノ古田、秦氏ノ地　帳ニモ不載、何レノ代没セシト云コトモ拠ナシ、上ニ三円ノ松樹生植スレバ、決シテ三四百年来ノ物ニアラズ
野市　潮ハ芳原境迄、家少シ流ル
物部　三ケ一亡所、廿四人死
上田村　在家中半迄潮入、流家少シ
下島　亡所
久枝　亡所
下田村　亡所
前浜　半亡所
長岡郡
里改田　潮ハ家迄
浜改田　潮ハ田丁残ナシ、家ニハ中半迄、流家ナシ
十市　潮ハ田丁中半迄
池　潮ハ田丁ニ少シ入
仁井田　潮ハ山迄、在家ニハ三ケ一
種崎　亡所、一草一木残ナシ、南ノ海際ニ、神母ノ小社残ル、誠ニ奇ナリ、溺死七百余人、死骸海際ニ漂泊シ、行客哀傷ニ不堪、且臭腐不可忍
下田　潮ハ田丁残ナシ、家ニハ三ケ二
衣笠　上ニ同
五室山　潮ハ山迄、家ニモ
吸江　上ニ同
八頭　潮ハ山迄、家ハ担ヲ浸シ、冬ヲ経テ干落サレバ、民居所ヲ失ヒ山処穴居ノ有様、目モアテラレズ
桂島　上ニ同
高須　上ニ同

高須　上ニ同
介良　潮ハ田丁中半迄
大津　上ニ同
土佐郡
布師田　潮ハ田丁中半迄、家ニハ少シ
一宮　潮ハ二王門迄
筋野　潮ハ田丁迄
比島　潮ハ山迄、家ニモ
泰泉寺　潮ハ田丁迄
江ノ口　潮ハ在所残ナシ、家ニハ三ケ一
高知　堅固ニ設タル家ハ、地震ニ倒レ、或ハ破損御城ハ全シ、潮ハ町ハ真如寺橋ヨリ北見通シ限リ、江ノ口堀筋ハ常通寺橋ヨリ、潮江川ハ常通寺嶋限、新町下知ハ海ニナル
潮江　潮ハ山迄、家ニモ
右内海分ハ、初ノ打入シ日ヨリ定潮トナリ、聊モ干満ナシ、潮江、下知、新町、江ノ口ヨリ、一宮、布師田、大津、介良、下田、衣笠迄、一般ノ海ニナリ、船ナラデハ通路ナシ
吾川郡
横浜　潮ハ山迄
瀬戸　潮ハ山迄
御曼瀬　浦戸亡所、潮ハ山迄、但家ハ三ケ一、家具計残ル、勝浦浜モ亡所
長浜　潮ハ雪渓寺ノ院内迄、西ハ日出野限、又ハ民家ニモ、流家鮮シ
東諸木　潮ハ大堤限、戸原ノ家少シ流ル
西諸木　潮ハ大堤限、西南ノ在家ニハ入
甲殿　亡所、潮ハ山迄
秋山　潮ハ甲殿境ノ田丁迄
仁ノ村　亡所、潮ハ山迄
西畑　潮ハ山迄、流家少シ、二淀川ノ潮ハ、入田村ノ渡場迄
高岡郡
新居　亡所、潮ハ山迄、山腹ノ家少シ残ル
宇佐　亡所、潮ハ橋田ノ奥宇佐坂ノ麓萩谷口迄山上ノ家軒残ル、在家ノ後ノ田丁ヘ先潮廻シケル故、通路を失ヒ、溺死四百余人
渭浜　在所悉ク海ニ没シ、深サ五尋六尋アルナレバ、別ニ記事ナシ
福島　上ニ同ジ、溺死百余人
龍　亡所、青龍寺客殿斗残、蟹ガ池海ニ没ス
井尻　亡所
浦ノ内　谷口多キ村ナレバ、詳ニ難記、大体潮ハ山ヲ限、海際ノ家不残流ル
東奥浦　潮ハ山迄、東横浪、西横浪ノ家ハ、屋具計残ル、鳴無大明神ノ拝殿モ潮入、潮田ハ海
西奥浦　潮ハ山迄、家ハ高キ処故ニ無事、潮田ハ海
押岡　潮ハ在所中半迄、流家ナシ
神田　亡所、谷々民家田苑少残ル
吾井郷　潮ハ名越坂麓松ガ浦川ノ奥迄、家ハ少シ残ル
土崎　亡所、民家田苑海ニ没ス、山上ノ家少シ残ル
多ノ郷　潮ハ本村ハ賀茂明神ノ奥ヲ限リ、大間ハ山迄、流家鮮シ、大間ヨリ名越ノ麓迄、一面ノ海ニナリ、往還山ヲ続ル
池ノ内　潮ハ田丁迄、当所ノ池今在家ノ二ツ石ト云所ヨリ突抜ケ、海ニ連ル、家ハ事ナシ
須崎　亡所、潮ハ山迄、池ノ内村ノ池ヲ、近年新田トス、其溝渠深サ二間、横三間許、当所ノ故倉ト云処ヘ通ル、初ノ地震ニ橋々落ケルニヨリ、湊ヨリ湧入ル潮ニ、溺死スル者三百余人、今在家モ亡所
下分　亡所、潮ハ山迄、坂ノ川ト云山渓ノ在家少シ残、樹木竹篁尽ク流失シテ、望洋如無涯
下郷　半亡所、潮ハ上分村ノ大境遅越ノ川限
野見　亡所、潮ハ山迄
大谷　亡所、潮ハ山迄、山腹ノ茅屋三軒残

安和　半亡所、潮ハ焼坂ノ麓迄、山腹ノ家ハ残ル
久礼　亡所、潮ハ南ハ逢坂谷迄、中ハ常源寺ノ植松限、北ハ焼坂ノ麓迄、市井三ケ二海ニ没ス、死人二百余人、凡国中潮入ル所々、溺死スル者五人十人、或ハ二十人無事能ハズ種崎、宇佐、福島須崎、久礼ノ大ヲ書メ小ヲ書セサルハ、事繁ケレバナリ
上加江　亡所、潮ハ山迄
小矢井賀　潮入ケレモ、事ナシ
大矢井賀　上ニ同
志和　亡所、潮ハ山迄
小弦津　潮入ケレモ、事ナシ
大弦津　上ニ同ジ
興津　亡所、潮ハ山迄

幡多郡

鈴　半亡所、潮ハ山迄
佐賀　亡所、潮は伊与喜ノ大境白石迄、山間ノ家少シ残ル
井田　亡所、潮ハ山迄、白浜モ同ジ
有井川　半亡所、潮ハ山迄、家ハ山上ニアル故、多ク流レズ、一ノ宮親王ノ古跡多ク埋没ス、衣懸嵓ト云岩モ、定潮高クナルニ依テ不見
上川口　半亡所、潮ハ山迄、家ハト上ニ有故、中半残
蜷川　潮ハ田丁下モ迄
浮津　亡所
鞭　潮ハ山迄、上ノ家ハ無事
口湊　潮ハ山迄、流家鮮シ
入野　亡所、潮ハ山迄、此浜ノ松林八幡賀茂ノ両社潮入ト云ヘドモ流レズ、賀茂ハ式社也、右松林鞭ヨリ下田ノ口迄連続シ、其樹直キコト竹ノ如ニシテ、其長短モ無ク、一国ノ壮観也シガ、所々キレ、或ハ打ヲリ、根コギニシ、又ハ根ヲ洗ヒ出シケル故、大半ハ枯木トナル、林ノ中間ニ古ヨリ潮ミチタレバ、横二十間計ノ江湾有ケルガ、高潮ホリウガチ、横四五丁ノ海トナリ、田丁六丁程上ニ浪打際トナル、此村ノ地高千三百石谷々ニ残ル所ノ田畑、纔カ二九十石、里ヘ生業ヲ失フモ埋リ也。
鹿持　亡所、潮ハ山迄、山上ノ家ハ全シ、田丁ハ一面ノ浜トナル、矢玉猿飼ト云所ノ山間ノ薄田、少シ残ル、沙漠渺々トシテ、旅客迷洋
下田ノ口　亡所
上田ノ口　潮ハ銅山ノ下迄、流家少シ
田ノ浦　半亡所、潮ハ飯積ノ麓迄、平地ノ家ハ流ル
出口　半亡所、潮ハ在所ノヒキヾ所迄
井屋　上ニ同
下田　亡所、潮ハ山迄、山際ニ屋具計残ル、家少シアリ
鍋島　潮ハ田丁、家ニモ、窪田ハ海ニ成ル
竹島　上ニ同
井沢　上ニ同
小津賀　潮ハ田丁迄、家ハ事ナシ、窪田ハ海ニナル
佐岡　潮ハ田丁迄、家ハ事ナシ、後川ノ潮ハ敷地ノ中沢岩田ノ境大要寺の門前堤ノ下迄
中村　地震ニ家三ケ二倒ル、潮ハ田丁窪迄、渡リ川ノ潮ハ岩崎脇田ノ池限
宇山　潮ハ田丁残リナシ、津野崎境迄、十三端船一艘打上ル、家ハ高キ処故無事
津野崎　潮ハ田丁残リナシ、家ハ上ニ同
不破　潮ハ入幡ノ並松迄、家ハ上ニ同
坂本　潮ハ香山寺ノ麓迄、家ハ上ニ同
山路　本村ノ潮ハ田丁迄、木戸ト云所ハ家悉ク流ル、但窪田ハ海ニナル
真崎　潮ハ山迄、家ニモ、流家鮮シ、田地不残海ニ成ル
深木　潮ハ山迄、家ハ山間故全シ、田地中半海ニ成ル

間崎　潮ハ山迄、流家鮮シ、田地残ナシ
津蔵淵　半亡所、潮ハ山迄、田丁中半海ニナル
初崎　亡所、潮ハ山迄、一木一草不残
布　本村亡所、山腹茅屋二軒残ル、名鹿モ亡所、立石ハ無事
下第　亡所、潮ハ芦ノ木迄、浜ヨリ行程一里、故ノ市井ハ海底ニ沈淪シ、舸艦ヲ多ク繋ギヌレバ、外ニ可記ナク、船ヲ壑ニ蔵シ、山ヲ沢ニ蔵ス、驚動再三
鍵懸　亡所、田苑一面浜ト成
大岐　亡所、潮ハ山迄、念西寺ト云寺、幷民家三軒残ル、是皆山上ニアル故也、此外一草一木残ナシ、田苑ハ一般ノ沙浜ト成リ、浩浩乎トシテ、暗ニ胡国ニ迷フ
南ノ山下ニ湊生ズ、久百モ亡所
津呂　在所高キ所故、無事
大谷　モ同
以布利　亡所、潮ハ天神山ノ峠五尺計下迄、市井海ニ没
窪津　亡所、潮ハ山迄、一王子ノ社迄残ル
伊佐　在所高キ処故、無事
松尾　上ニ同
大浜　亡所、潮ハ山迄
中浜　上ニ同
浦尻　亡所、潮ハ山迄
清水　亡所、潮ハ越浦境ノ小坂ヲ打越シ、山間ノ家少シ残ル、鹿島ノ宮流ル
越　亡所、潮ハ山迄、賀久見ノ通路、舟ヲ用
賀久見　半亡所、潮ハ山迄、山間ノ家ハ残ル
養老　亡所
下猿野　半亡所、潮ハ田丁残ナシ
三崎　亡所、潮ハ山迄、山半腹ノ家ハ少残ル、田苑ハ一面ノ浜ニナル
龍串ノ奇石埋没ス、遺恨
爪白　半亡所、潮ハ山迄、汀ノ松樹悉ク流失
下川口　亡所、潮ハ山迄、山上ノ家少シ残ル
片槽　亡所　潮ハ山迄
貝ノ川　亡所、潮ハ山迄、山腹ノ家少シ残ル
大津　半亡所、潮ハ山迄
小才津　亡所、潮ハ山迄
才津野　潮ハ田丁残ナシ、家ハ無事
尾浦　亡所
西泊　潮ハ山迄
周防方　亡所
小間目　亡所
赤泊　亡所
柏島　島ノ四面潮湧出シ、堤ト一般ニシカドモ、在家ニハ不入、今年八月十九日大風雨、波浪雲ヲ捲、汀淵ヲ打ハキ、魚ノ網代モ損没シ、民家不残潮ニヒタリ、魚翁産ヲ失ヒ、悲歎セシカドモ、此程ノ難ヲ遁レ、愁喜怱地ヲカヘタリ
一切　無事
天地　亡所
橋　亡所
泊　亡所
榊　亡所
福良　亡所、山渓ノ家少シ残ル
小尽　亡所
湊　亡所、民家田苑海ニ没
伊与野　潮ハ田丁残ナシ、家ニモ入レドモ不流
田ノ浦　亡所
小浦　亡所
内ノ浦　亡所
外ノ浦　亡所

呼　崎　亡所
坂ノ下　亡所、山腹ノ家少残ル
宿　毛　亡所、潮ハ和田ノ奥、或ハ牛ノ瀬川ヲ限ル、初ノ地震ニ、士館炎車輪ノ如ニシテ、良久ク波上ニ浮沈シ、後ハ悉ク土居ノ前ニ漂ヒケルガ、第三番ノ津浪ニ沖ヘ流出デ、土居計残ル、浦樺、宇薄、藻津、右悉ク亡所

〔未世可相考事〕〈「田村太郎氏（高知市本与力町）所蔵文書」、橋詰延寿刊、昭39〉

一、宝永四丁亥十月四日晴天ニシテ午ノ一天大地震大地割レ家コワレテ被打殺或大土内江入死婦人目奔シテ死ヲハ高山下ニ住者山崩テ死者アリ、然所同未刻ニ俄ニ磯ヨリ沖ヘ三丁余も干、其儘大汐入家財宝悉流失怠慢成者又ハ不達者成者成山遠キ者共不残大汐ニ被引取死

一、高知近辺一平ノ大汐石淵ヨリ城下迄大道筋船ニテ往来船賃弐拾文宛

一、浦戸御殿幷種崎ノ御船倉此時ニ流

一、城下ヨリ東安喜浦迄大汐高ク揚リ田野、安田差テ不上、奈半利浦野根山ノ大道下拾二三端ノ廻船打ル

一、次川ヨリ東野根浦迄ノ内は潮高ク揚ラス甲浦不残流失、夫ヨリ東阿州地汐上ル由

一、羽根浦尾浦僧新幷船場前浪打際ヨリ壱町半潮上ル、最川筋四町余上ル

一、右同日ヨリ二十日頃迄大汐入ト申、尾僧夷町ノ者共、後口ノ一段高キ田江小屋作リ退ケリ、船場ノ者共山ノ下高キ所或平野山上ル

一、地震右四日ヨリ不得止明ル五年八、九月迄昼夜軽重六七度或壱ニ度宛ユルナリ

右大変御一国流失覚

一、死人　千八百四十四人、男女
一、過人　九百二十六人、同
一、潰家　四千八百六十六軒、御船屋共
一、流家　壱万壱千四百七十軒、浦戸御殿共
一、破損家　千七百四十二軒
〆、江戸江言上趣
其外米穀諸品損失難記、愚筆

一、百四十年以前慶長九甲辰年大地震大汐此時ニモ当地中江汐不入当社御八幡御神力云云

宝永五年九月二十八日

作者　桧垣左近右衛門正治
筆者　松垣新兵衛息　治賢

（此書付板ニ書シテ羽根浦八幡宮ニ納ム今猶存スト云）

〔土佐遺事雑纂上〕

法師ケ岬ニ松アリ、元親公ノ時朝鮮人感称シ詩文ヲ賦ス、其松元禄十一年十月六日城下火災ノ時飛火来リテ焼失ス其古木枝ナガラ残リテ邦君愛シ給ヒ人ノサワルヲバ制セラレツルニ宝永四亥年地震ノ際流失セシトカヤ。

〔同書中〕

浦戸御殿、観海亭一ニ子根崎御殿又磯崎御殿ト云フ、浦戸村小字磯崎ニ在リ、当時（第二世山内忠義のころ）稲荷ノ森東麓ニアリ相尋テ忠豊、豊昌、豊房、豊隆ニ至リ宝永四年海嘯ノ流却スル所トナリ則該森ノ西足即チ今ノ所ニ建築セリ。

○

又其頃（〇万治年ごろ）野中大夫兼山ノ亭アリテ山崎闇斎題榜シテ観海ト曰フ此亭モ宝永四年ノ地震ニ破壊ス。

〔丁亥変記〕〈橋詰延寿刊、昭39〉

※『宝永四年丁亥十月四日天気晴朗暖気殊ノ外に而諸人単物幃を着す、けふはいかなる事ぞやといふ中巳の刻より大地震起り、其の騒動言葉

にも不尽、坤軸砕るとは唯此時也、若輩達者たりとも一足も歩行ならず、山々の崩るゝ土煙四方に渡り、忽闇夜の如し、男女泣きさけぶ事限りなし、扨未の上刻より大汐溢れ入り人家悉く流れ死人桴を組が如し、昼夜汐入来る事、明る五日の暁まで十一度也。予、山の峯にのぼりて眺むる須崎より三里沖に見へる石カ嵜よりは海上静也、是より内の方大きに騒ぐ、戸嶋と長者の渡間へ懸ケ汐干付きしばらく沼となる。此の沼へ小船に二人乗り流れ来りけるが壱人は船より下りて沼に入と見へしが行ゑは見へず成りぬ、又壱人は船に有よと見へしが大汐来りて此船も行方不知成にける。後に聞ば、壱人は新町の何がし、壱人は須崎浦夷屋左五衛門にて有つるよし哀も悲も唯此時に極りぬ。』

（Ⅱ－114）※『岩永より門屋敷までの間道筋海と成に付、鳥越坂の峠より池の内へ横道を通る、下分村岡本へ越す笹ケ峠と云古道を往還として門屋山際道と成、諸役人の送り番所も池の内村に当分有之也、』（Ⅱ－116）

送夫ノ者とも爰に詰る、丑ノ年の秋今在家町本番にかへる※『池水の中に死人筏を組たる如く有之、尤衣服等見知るべき覚ある族は是を引取ル、可求便なき者は、池中に浮き沈み鳶烏の餌となる。誠に目も当られぬ次番也、依之、公儀よりかねて村かり屋の後に長十間斗の大穴を二行に堀らせ此の穴に取入、土に埋む、当所の死人四百余人とぞ聞へし。

流助の者飢餓に及に付公儀より御救米被下男に三合、女に二合づつ日数三十日、或四五十日の間、面々家業に取つく迄被下、外に小屋懸材木等年よりの山にて被下、其時須崎より下浦々御救役人

無足新扈従　田中善八

此大変に付諸人以落着す、明日を知らぬ命と路頭に迷ふ折からなれば非道の溢れ者盗賦の族有之に付御詮義の上其役人に

無足新扈従　朝比奈忠蔵

此時御奉行　宿毛七千石　山内蔵人

アキ千石　五藤外記

高知千石　山内主馬

郡奉行　祖父江作蔵

堀部七太夫

浦奉行　安藤儀兵衛

近藤与三衛門

須崎浦庄屋　太郎左衛門

同　年寄　助九郎

同　年寄　与八郎

同年寄海部屋　勘之丞

一、此度大変ニ付大守様御参勤不相成江戸へ御断の御使者

山内主馬』（Ⅱ－116～117）

江戸江被差上御書付

（〇「土佐妖変記」中の一、流家壱万百拾七軒に始まる被害リストありまた「史料」（Ⅱ－121～122）と同文であるから略す）

依右御願相叶御参勤一ケ年御赦免也。

〇須崎今在家町の事

※『大変前は二ツ石より沖の方十五六間町並成けれども大汐に地崩レ海弐百間余地方寄町に成ゆへ、只今の所へ町割被仰而面々住居する、大変より前は大橋通りの横町両端に並松有之、人家なし、

橋のツメ東の方、今の谷屋の辺にかう介といふ者一人居し也、其在家郷町筋二ツ右より宮原へ続き、大木の松林にて昼も日あたらず、物くらき所にて小児共おそる。右の松原の所、今の町並也、今の畑になる所は皆芝原にて衰虫の名所也、西今在家の町先年の町より十間斗山の方へ寄る。西の町はづれ五郎左衛門屋敷は中ノ洲辺也。』（Ⅱ－118）

（〇須崎八幡の神輿伊豆漂着の条は、「南路志」にあるので省略する）

高智本町住居宮崎高門竹助雑記ニ云、右大変ニ付江戸御注進ハ山内主馬殿御越亥の十一月十五日江戸着、同十二月四日江戸発足帰国也、亥十一月二十五日膳御使者高屋惣兵衛と有、来年御参勤の儀御伺仰上置候処、同二十七日土居相模守様へ高屋惣兵衛罷出候様に有之、仰ニハ

土佐国地震高汐ニ付過分損亡の旨被為聞召、本年参勤御免と被仰出候也、又来冬に至り重而参勤の儀、伺候様との御奉書ヲ以被迎出候也、右、左右同二十八日道中五日の使を以御飛脚御指下也と私家の雑記ニ有、又云宝永丁亥十一月二十三日昼時分より富士山自焼出、十二月二日迄数日武相駿三ケ国ニ砂降ル、此砂払金として知行百石ニ付金弐両づつ懸ル、此方様弐千五十二両、翌子ノ三月十六日上納ト旧記ニ見、百石ニ二両ナレバ四千両上納の筈、四ヲ弐と誤ると山崎方成記録ニ記ス、高門按るに御国の大変ニ依て半納ニ成タルニヤ猶可考。(〇中略)

同記ニ云

一、丁亥ノ変ニ御城大手門脇屏下石垣表裏共ニ三所孕、城中所々塀倒、或傾損ス

一、北ノ口櫓門潰幷門脇屏崩ル

一、同所櫓ノ石垣長十間崩る

一、同所西ノ方塀下長九間崩る

一、二ノ丸下曲輪塀下ノ石垣長七間の内数々脱落

一、三ノ丸石垣際の地所長四十間斗割、塀際地所下石孕小石抜落

右

文政癸未年七月二十日写終、佐川西谷、伊藤乗秋□

(裏表紙内)文政六年山内家より拝領

下ノ茅大庄屋　田村新十郎伸光

蔵書

〔土佐国史談〕〈〇上田虎雄編、明治27、県図〉

宝永の大震は、*之より一層太だしく、火災なきも、海嘯、一時に襲ひ来り、流失、潰崩、相交り、親は子を助け、壮は老を救ふの隙なく、北は久万、秦泉寺。西南は、小高坂より、朝倉、潮江、東は一宮、介良等、一面の海をなれり。高知市街は、水深きこと、二丈に及びしと云ふ。時時大小の震動、翌六年に達し、全国の流失、潰壊の家屋、一万二千七百有余、死人、千五百余人あり。宝永は安政より、百四十六年前、東山天皇の御世なり。

(〇注*安政の地震の事)

〔土佐妖災記〕〈県図、(Ⅱ－119～123)の「弘列筆記」の文を抄約した文面である。本文献の解読には宇佐美龍夫教授のお世話になった。〉

一、白鳳十二甲申年十月十四日土佐国大地震之後大潮入人家田地大半流失す此時三拾万石余流滅す根元五拾弐万三千七百三拾八石なり

一、宝永四丁亥年十月四日巳ノ上刻より大地震今日晴暖気甚し皆人単物を着す山々の崩れける土畑四方に満て方処を難分地さけてハ外備山に登るものハ岩におされ死す未ノ上刻より大潮溢れ人家流死人筏を組ケことし潮の来る事翌五日まて十弐度也戌之刻より潮来らす洲崎より三里沖にある石のはへより先ハ海上静なり石のはへよりうち潮大に動く山の峯より臨見るに戸島長者の渡間へかけ潮悉く干て暫の間沼となる此所へ小船壱艘弐人乗りて流来りけるか壱人船より下りて沼に入と見へしか行方不分残る壱人船に居りしか無程大潮入来り行衛なくなれり

一、此地震五畿内東に豆州箱根を限りしと聞内摂州紀州等大潮入九州も東南を請たる国に大潮入四国ニてハ御国々阿州専大潮入種崎より宿毛まて浦々大潮入赤岡辺より上灘ハ少々宛潮入須崎浦へ入来る潮半山川筋ハ下郷の内の天神宮の上四五丁斗多野郷ハ加茂の宮の前来て吾井郷は為貞といふ所迄右皆川によって溢れ入土崎之人家流失押岡神田ハ土崎続之人家少々流失池の内村無別条

一、須崎浦にて死人四百余人是ハ池より出る堀川の橋地震に落ける所へ潮先入来り悉く堀川へ打入れ死を遁る者すくなし

一、岩永より門屋坂迄往還の道没而海となりしニよって鳥越坂の峠より池の内村へ横道を通り下分村岡本へ越す笹の峠といふ古道を通り門屋山際道となる当時医宿所池の内村にあり午の秋今在家町本宿所になる但大間より原町古倉へ灘道あり諸人往来して原町辺賑々敷しに此時道

没す其後も干潮の時ハ灘道通行す

一、池の中の死人数を志らす□□村かりやの後に長サ数十間の穴を二行にほり此所に死骸を悉く埋めり

一、須崎より下浦々の人民家業に取付迄日数三四十日斗御救米被下三合男米弐合女米御救役新小性田中善八被仰付盗賦改役是も新御小性朝比奈忠蔵被仰付両人共同年冬新知弐百名被遣小化道ニ仰付也郷土数々昼夜廻番被仰付盗賦を改む

一、大地震の後安喜郡津呂室津の湊地形上りて荷船の大なるハ入津する事不仕也今在家町も大変以前ハ二つ石より沖の方十五六日町並なり大潮に地崩れ海弐百間余地方へ入込し右只今の所へ町割被仰付人々住居す

一、大変より以前大橋の南北人家なし東の方並松ニて今の畠の所皆芝原也今在家町の筋二ツ石より宮原へつゝき大松林ニて日中もこくらき所也し即今の町並なり二つ石は人家の裏にすこしの岩小路脇にある然るに大変に地崩れ大岩二つ顕れ出る也

一、須崎浦八幡宮の神輿大潮に流失す然るに伊国下田浦の漁船同八日沖ニて是を拾ひ社を立新八幡宮と祭けるに無程大漁をしけれハ遠近浦人是を尊崇しける処ニ御国田野浦の商船下田の御番所御改と請む為に入津し右之趣を及聞尚相糺しミれハ証跡顕然たる故所の役人へ相届是を乞けれ共浦人おしみて事行かざりしか絶て乞請来り須崎浦へ送り越し今八幡宮の内殿に収め有之也

一、流家壱万千百七拾軒

壱軒　浦戸御殿　四拾弐軒　御船屋役屋敷共　八拾九軒　浦々分

内　一屋弁御米蔵共　七拾五軒　寺社

壱万九百六拾三軒　民家　内五千百拾七軒郷　五千八百四十六軒浦

一、潰家四千八百六拾六軒

五軒　御舟家　百七軒　侍屋敷

内　弐拾四軒　寺　四千七百三拾軒　民家内弐千廿二軒町家　千九百九拾四軒郷　七百拾四軒浦

一、破損家千七百四拾弐軒

三拾五軒　御舟屋　拾弐軒　赤岡より野根迄道筋御殿弁分一家共

内　九拾三軒　侍屋敷　四軒　堂社

千五百九拾八軒　民家内七拾五軒町家　千五百廿三軒浦

此外小破ハ屋並残無之

一、死人千八百四拾四人　内五百六拾壱人男

千弐百八十三人女

一、過人九百弐拾六人　内八百九人男

百十七人女

一、流死牛馬五百四拾弐疋　内百六拾八疋牛

三百七拾四疋馬

一、過牛　六疋

一、流失米穀弐万四千弐百四拾弐石

米壱万四千百八拾四石

内　籾七千九百四拾石

麦千九百九拾弐石

大豆百弐拾六石

一、濡米穀壱万六千七百六拾四石

米八千四百拾八石

内　籾八千弐百三拾壱石

麦百拾五石

一、流失塩四百八拾石

一、同茶　三百三拾丸

一、同鰹節　五拾万八千

一、流失弁破損船七百六拾八艘

内　百七拾弐艘　御手船　百三拾六艘　売船

四百六拾艘　漁船弁艀共

一、流失網四百三拾九帖

一、浦々塩焼道具不残流失

一、流失材木五万四千六百本
一、保佐松節共六百八艘荷　但壱艘拾端帆之積
一、起炭弐拾艘荷　但右同積
一、損田四万五千百七拾石余
一、井関川除堤破損四千百ケ所
一、流失板橋百八拾八ケ所
一、同井流六拾七艘
一、同筧九拾弐艘
一、亡所之郷四拾弐ケ村
一、同浦六拾壱ケ所
一、半亡所之郷三拾弐ケ村
一、同浦四ケ所
一、山分山嶺畑作之雑穀類大分損失仕事

湊三ケ所大破其外御国中往還之道筋及破損往来之不自由之所数ケ所御座候事

右は亥十月四日地震大潮ニ而御国中ニ而流失幷破損之品相縮如此御座候以上

亥十月廿四日

右文化六年春三月七日抄出也

〔土佐遺事雑纂中〕

日本山妙喜寺禅宗吸江寺未、（〇中略）中興者天正年中僧永順建立亦根木山大門ト謂所之八町峯ニ観音堂（九尺四面）有之宝永四丁亥地震ニ及破壊享保七壬寅年以願於妙喜寺近辺堂床地賜之建立。

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教協会刊〉

〇安芸郡甲浦三社権現の条

往古ハ社領壱町四十代余有之由右スミヤノ者共神楽躍と申家族子供迄躍り候其例を以神躍りの形儀有之毎年九月十八日二子島へ船子ニ而渡り輿有之右船先年ハ五端帆位之船にて日覆御紋付之絹幕有之由御備被仰付候哉又は地下仕成哉不相知千光寺記録宝永四亥年大変ニ流失その以来市艇ニ而渡島有之。

〇同郡甲浦

那智山竜花院千光寺

寺領四反　豊昌公御代之御寄附先住有永住職之時分甲浦於片谷散田開発仕則寺領ニ被下段延宝二寅七月廿九日ニ願之通被仰付候趣上野半右衛門書付有檀中ニ預り居候処宝永亥大変ニ二反流失弐反有地ニ候

〇安芸郡崎浜、成就院大日寺の条

後人書添　于時宝永年中ひのとのい十月四日大地しんこのときは板ぶき家ゆりみたれやねより石おちける人おゝし大地十間二十間ほど大われ申地より水わき出せんちこゑ町へあかり山ハ川へじんみんおとろきあるひは気をうしないなきわめくことたゞかのなくことし或は寺山かんおんへにけはしりみなとうくにてはこひあるひハ戸しよふしにてかりやをたて十日ほとすまひ仕右大ぢしん北南へゆり申ゆへ大しほかみへのほりかみハ甲浦よりかみへ入の手浦ハ入ふ申とう浦はと下へしほ打つむる

〇同郡奈半利

八幡山西勝院神宮寺

観音堂　境内にあり宝永四亥年八幡社焼失之節堂も焼失也

〇同所

仏迎山浄閑院西連寺

寺記云草創不知天正年中以来往持連続古ハ奈半利浦御殿の西に寺有之　宝永大変ニ流失其時分より奈半利郷長田と申処江引移元文二年また先年之地床へ引移

〇同郡松田島村

若宮八幡新町

社記云往古松田嶋領主竹崎木工左衛門大坂陣ニ討死空墓若宮と奉称絵像有之処宝永四亥年十月四日大変ニ流失

〇同郡赤野

住吉大明神川久保

社記云神体鏡当社は昔此地より辰巳之浜ニ有宝永四亥年十月四日大潮入社殿棟ノ上壱丈余ニ及則流没ス僅社殿之形西浜辺に漂着し神体ハ此

川に留ル三十日余を経て当村ニ拾上同五年戊子九月下兆之上此所に社を建立す

○香美郡夜須村

八幡御旅二ケ所　横浜村ヤマ子小宮

社記云虚空蔵堂へ行幸御旅社也　天正地検帳社領廿九代有宝永大変以前笠松有高さ八間三尺東西十七間南北十三間昔ハ大木ノ本ニ小社有松ハ波ニ失右社今ハ潮留堤ニ有右笠松高サ八間四人本廻リ三抱半四方へ枝配り南北へ行枝十八間東西へ栄枝十七間地より云る事五六尺不過傘之如く成故カサ松と云砂地生立たる故根悉く顕れ見事也豊房様御賞美被遊宝田御山之桧を以垂たる枝に悉く枝ツカを被仰付江府御上下之度毎ニ斎藤唱水御供にて松之下枝ニ暫く御遊覧被遊候然ニ宝永四亥年十月四日高潮ニ右松根こげ赤岡之浜へ寄候得共神木を恐れ人不取或時□□枝を取薪ニ仕候処忽眼病腹痛する者数々有之故今下砂ニ埋有之又子年ノ春右替松を三本備へ御聞を以一本植此松往古之松ニ不賛如傘なる事妙也

○香美郡岸本村

月見山多聞院常楽寺

寺記云行基開基と云伝岸本町丑寅之山根ニ在昔土御門院当国へ被為移玉ひ此所ニ皇居を構へ月見山ニ而常に月を御覧せられし故に山号を月見山と申由先住申伝来暦証文等ハ宝永四亥年大変流失

○香美郡赤岡村

須留田八幡御旅宮中浜

立仙大明神御旅宮同

明神　両社地五代

社記云明神本地地蔵菩薩木像　此神体永禄年中地引網海中より引上る処一旦海へ流申処又地引網に入来候故其節在所より小社建立然に宝永四亥年大変に右神体社共流失其後同六丑年小社建立

○香美郡久枝

室岡山宝積坊福楽寺　真言宗前浜村正興寺末

寺記云開基不知　宝永四年大変ニ堂寺共流失

（○中略）先年寺床は　八幡宮馬場の西に有之処宝永四年大変に流失先々住頼堅郷之地へ移尤此所にも先年阿弥陀有之宮の西の下にも本尊地蔵堂有之候へ共流失以後只今の堂へ安置尤地蔵堂床は今竹林に成る

○香美郡前浜

南光山現智蔵院正興寺

寺記云開基年暦不知開山良秀上人　宝永大変に大潮入旧記等流失

○香美郡下嶋村

十八所大明神　十八所

社記云神体丸鏡に画像有　先年石丸主計と云人本地画像寄進宝永四年大変に社と共に流失

○香美郡下田村

田村山極楽院本堂寺　真言宗正興寺末

寺記云旧号極楽寺　何之比本堂寺と唱来候哉然に前浜村地検帳に本堂寺と有之宝永四年大潮入堂寺流失旧記無之其後先往栄雅堂寺建立近年瑞長今之寺建立也，

○香美郡物部村

八幡山南光院真福寺

寺記云宝永四亥年大変に古来之堂寺安置之諸仏共悉流失　先住頼智今之寺地に自力を以新に建立　（○中略）先年之寺床は当村之内中浜に有之、今の寺床はホノキ北嶋同東

○香美郡柳瀬村、柳瀬五郎兵衛重貞所蔵古文書

木綿仕成といふこともなく太布糸をひくにはへそは四分より売に来り買用ける也日ノ御父村（子カ）くだ売りばゝとて常に来り宝永亥ノ地震に平井の向にて石にあたり死ける由祖母の咄也木綿を在所一同には成けるは宝暦年中よりの事也

○長岡郡種崎村

神　母イヤカハナ

宝永四年丁亥十月六日大地震種崎亡所一草一木無残溺死七百四人其中ニ此神母之社不思儀ニ残れリ其時迄東ニ町有今御畳瀬より渡場之通ニ頂本寺有今之町ハ大変後西へ引移といへり

昔妙国寺　今潮江村ニ有旧号桂昌寺　当村ニ有慶長六年国沢城跡を寺地ニ賜リ掛川町江引移其跡へ慶長七年頂本寺建立今御畳瀬渡場の通りニ有亥年大流失其後今之地へ移

○長岡郡吸江村

又法師か崎に松有元親公の時朝鮮人感称し詩文を賦す其松元禄十一年十月六日城下火災の時飛火来りて焼失す其古木枝なから残りて邦君愛し玉ひ人の障るを制せられつるに宝永四亥年地震に流失せしとかや

○土佐郡小高坂村

寺　町

寛文十一年辛亥四月伊達兵部少輔宗勝公御預りの節此所配所に相成三方堀にて南一方出入口なり延宝七巳未十一月四日兵部公於配所卒去其後宝永四亥年大地震後今の寺町に成

源信山浄福寺正林院

当寺最初成山村に有或云横山九郎兵衛介良村城主たりし時浄福寺介良に有九郎兵衛法名清寿院浄誉一峯横山氏菩提寺也其後浦戸町江引慶長年中新市町江引移元禄十一年回禄其後下地寺町江引宝永四年大地震浪入其後今の地江引移旧記無之故不詳

智福山西念寺願正院

当寺者旧介良村岩谷釜嶋両城主横山左京亮道範か菩提寺にて介良村に有其後種崎浦赤岡町江引慶長年中紺屋町江移元禄十一年回禄後下知寺町江引宝永四年大変後今の寺町江引移

山泉寺

旧慶長年中蓮池町江建立元禄十一年火災後下地寺町江引宝永四年大変後今之地江移

専修寺

旧浦戸町に建立元禄十一火災後下地寺町江引移宝永四年大変後今之地江移

真光寺

当寺旧種崎浦に有慶長年中紺屋町江引元禄十一年火災後下知寺町江移宝永四年大変後今之地江移或云旧浦戸に有盛親公没落後種崎町今之弘小路東角より東江寺地を賜ると云

○土佐郡潮江村

花園山善法寺

当寺ハ旧ト材木町ニ有元禄十一年回禄後下知寺町へ移す宝永四年大変後今之地潮江村江移ス度々寺破損ニ付記録焼失或流失して来暦開基等不知寛政四年大風雨に破損し享和二年新建立也

○土佐郡下知村

畝丘樹（ウイゲ）

寛文四甲辰年従吸江小一宮勧請塩田村氏神とす宝永四亥年大変之節在所破損依之古寺町江塩田村並右社共引移

○土佐郡高知

新　町　東西百八十間　東北百七十九間

元禄十一寅年火難ニ而町々寺院焼亡其時此所鉄鉋町ニ而有之処新ニ寺町ニ成東西百十四間南北百七拾一間寺数十八ケ寺内五ケ寺工物立十三ケ寺免許也西念寺、浄福寺、真慶寺、真宗寺、遍照寺、長泉寺真光寺、真証寺、真立寺、金剛院、善法寺、大超寺、山泉寺、泉修寺、大善寺、安養院

或云右寺々宝永四年地震後今之地移

滝本山金剛院

旧長岡郡滝本村ニ有御入国後朝倉町江引元禄十一年火災後下知寺町へ移宝永四年地震後新町江移

真立寺

旧農人町ニ有元禄火災後下知寺町江移宝永大変後新町江移

真証寺

旧新町ニ有元禄火災後下知寺町江移宝永大変後又新町江移

○吾川郡浦戸村

野中伝右衛門屋舗跡　今之分一役所是也礎石今猶残て有也野中氏改易之後御殿と成宝永四年御殿地震ニ破却其後今之地江被移

分一役所　野中伝右衛門屋敷並ニ御殿跡也　昔ハ大倉谷ニ有宝永四年大変後此処へ被移也

或云承応元年御国中地請被差止分一ニ被仰付役人被差置

御　殿　子根崎又磯崎御殿とも云

額　観海亭　闇斎筆

此御殿本ト野中伝右衛門屋敷今之分一ニ有宝永四年大変ニ流其後此役所也

地江被移尤も南国の勝景也忠義公御参勤の節繋船晴を待せ玉ふに宴遊の地也闇斎扁名して観海亭と号す

○高岡郡東郡新居村

新楽山観音院池浦寺

寺領弐反従一豊公御寄附御書附宝永四年大変流失

○高岡郡宇佐村橋田

観　音　先年沖より流来祭候処宝永四年流失其跡へ堂建立

○高岡郡奥浦村

鳴無大明神

社記曰淡路廃帝天平宝宇年中之頃より之御神と申伝尤一宮大明神と同体則大明神鳴無へ御幸之節金剛丸と申御舟に召船越と申山を越御木給依右船越山と于今申伝右之御舟祭之儀は御供並社人十五人より祭申段縁記に有之処先年源光寺焼申節焼失仕其後常通寺に写有之借寄写置候処宝永四年大変に大潮入流失仕尤御宮之古之御厨子にも書記候へとも此時分文字聢と見へ不申其外一条殿御詠歌三首被遊候由申伝

○高岡郡土崎村（吾井郷之内）

医王山宝珠院真福寺

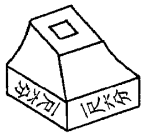
寺記曰慶長九年土崎御免町被仰付候節為町中旦那建立宝永四年大変に旧地（記か）流失不詳

○高岡郡多野郷村賀茂宮

石之塔

台石弐尺五寸四方厚一尺地附より立頭迄一丈六尺余台石の上の四方石壱尺六寸五歩四方高サ一尺六寸四方の角の反りたる石組下の一番横の長二尺三寸五歩四方也角々の反たる所は六寸弐歩又中にての厚み三寸三歩四方反り重石十三有但台石と其上の四方石を合て十五重有九輪の石は其外也





（○中略）燈籠と九輪は伝右衛門殿方にて新に仕成置しと也其数十七重は御影石成れども右二ツの石は余の石と同しからす後に出来たるもの可成燈籠石は高サ八九寸四方にして円形三角半月円形を四方にすかして東西南北に頒け其内を四角に彫明て中央の象ちとしたり是則燈を立る所也宝永四年亥十月四日大変に崩れ損して今は九輪も無し

○高岡郡野見村の条

戸嶋大明神　戸嶋

往昔津野領之時地引網に入引上申由其頃之御船頭高野氏御移被成我は戸嶋大明神也年久敷海底に在只今此網に入上る往々漁事之守に可成宮を戸嶋に建可祭と有夫より祭来由御神体宝永四年の大変大浪に祠流失年数廿年過享保十一午年八月上旬東勢井村百姓五郎右衛門と申者夢に戸嶋大明神此浜に上る我を戸嶋へ可送と夢見翌早朝浜に出草むらを見候処光さし教の如く御神体に行逢五郎右衛門其儘乱気に罷成最初夢に見る通の申口に付類族隣家の者共否や野見浦へ告来り直に野見浦人迎に参当時弁才天の社へ納置其後今の処へ奉移

鎮海山江雲寺

寺記曰当寺は往古江雲菴と地検帖に出○十一面観音堂宝永四年大変に当村之内戸嶋と申所より浪に漂来る其大変以前は戸嶋の人家千軒も有之今に戸嶋千軒と云伝

○高岡郡須崎浦

八　幡　天照大神　八幡林
春日大明神

社領津野氏寄附地検帖に有○鎧一具津野親忠奉納之節大潮に流失之処此鎧宝永四年大地震左之品々取集め置　腹巻一頬当一涎掛一臑当二鉄具一○武形人形二　彩色等痛物大変流失所

ニより取
集納置

○神輿一基

宝永四年十月四日大変に流失同十月八日豆州岩地へ流行彼地の氏神へ奉納仕有翌年子ノ六月四日安田浦長左衛門江戸廻船之刻伝承否船乗込神主へ遂断右之神輿長左衛門船へ迎同六月六日志州島羽浦へ入津然る処当国高岡郡志和浦弥一兵衛船居合弥市兵衛船に而当国へ送り参候

○宝永四亥年十月四日地震大潮之節当社之神輿流失之記

一、須崎浦八幡の神輿十月四日の大潮に流ける伊豆国下田浦の漁船同八日沖合に而是を拾い見れは神輿也疎にすへきにあらすとて仮に別社を拵へ新八幡宮と祭ける然るに拾得たる漁夫時運を得けるにや大漁をして徳付けるにより遠近の浦々是を尊み崇めける然処に当国田野浦の売船江戸へ渡海の折柄下田御番所御改を請入津する其砌件の旨を聞彼社に行神輿の内の書付を見れは土洲須崎浦八幡神輿寄進施主の姓名を記有是こそ疑所にあらす我には同国の神輿争か其儘に閣へき様なしとて所の役人所へ子細相断是を迎へ帰らん事を強て願けれとも浦人是を惜み奉り中々六ケ敷有りけれとも器物とは違い神輿の義に付終には望に任せもらい得たり右田野浦船東武より還楫の刻志和浦の弥次右衛門船に行逢い須崎近浦なるにより神輿をことつけ善越下着して右の赴を申来り神職之面々迎に参受取来る今の八幡の内殿に籠メ有之修覆は無し右神輿伊豆国より還行之節伊豆下田問屋役人送り状之写其外右の来暦悉敷書附八幡宮宝殿に木札に記有之也右札の裏に大変の節当所の一巻等悉く書記有之右施主川淵太次右衛門筆者二標八郎兵衛と有

一、当八幡宮は津野親忠公御建立代々也大変に流失の宮迄則御再興の宮也親忠公御寄附之品数多有之処大変に流失今纔に鎧一領残り切れに有大変に灘より拾い集め申由惣毛曳と申おとしと申也変の前の宮まで㊀の御紋有

八幡山明星院　旧号曰量寿院　大善寺　真言宗　和州長谷寺小池坊末

寺記曰宝永四年之大変迄須崎古市町に有之処津浪に流失依之来暦等不詳以後古城山へ移る往古は脇坊等有之由言伝○護摩堂本尊不動大変之時古城山へ供奉堂弐間に弐間半○八幡社鎮守境内に有但須崎本村八幡の別当故宝永四年大変以後寺建立　○寺領六石九斗七升三合一豊公以来御寄附　但御書附流失今無之昔之時勧請也

津野家祈念所故四十三石五斗五升六合須崎本村並下分村地検帳に有之

円龍寺

本尊阿弥陀　寺地先年は久礼八幡林之脇に有之宝永四年大変之後久礼町に移其後当村に引移也

○高岡郡下分村

龍吟山元亨院

甫之梅画掛物従往古有之処忠義公御所望被遊奉献其節塩田一町分作式に拝領仕処宝永四年大変に流失也

○高岡郡久礼村

宇佐八幡　正八幡　相殿

往昔社領地検帳に有右宇佐八幡元来上ノ加江村氏神之処年暦不相知小社共久礼江飛光同村之内川*端と申処江鎮座依御勧天神森境内に奉移正八幡は佐竹玄蕃頭元祖より子孫久礼村に四代住居有之右孰之代ニ哉応永年中佐竹氏関東より勧請有之由申伝棟札は宝永四年大変に流失（*の所にイ勝とそえ書きあり）

棟札奉造立大檀那松平土佐守従四位下侍従藤原朝臣豊隆公御武運長久宝永六巳丑年九月氏子中

正徳元辛卯年八月十五日御輿惣氏子中助成奉荘厳

古来之棟札宝永四年大変之節流失

住吉明神　同（湊浜）　正体鏡宝永四年大変不流

由王山金沙寺　同（大川谷黒石野）　退転

先年は薬師堂と言後金沙寺と改宝永四年大変流失寺床は今之御蔵床也

八幡山量寿院　一日吉　東林寺　真言宗洲崎祥院　大善寺末

寺記曰寺三間に八間自分作事　宝永四亥年三月八日堂寺焼失同年十月四日大変流失住持栄宥員本尊立去後同六年寺建

立棟札有
○護摩堂本尊阿弥陀安阿弥作
○開基不知旧記等宝永之大変に流失

○高岡郡大野村
池之神浜
大野村九反と云処ノ本田往古は池に而有之海手へ水堀抜干シ上ケ地方に開発右水門之井流に黒長き縄と見へて水を防申に付地下人之中剛成者切々に切落引上候処大きな成蛇に成池之主成を害するにより祟りを可成と申により崇め祭夫より池近辺之蛇を殺不申右小社之辺之蛇今に尾切片目白し先年は九反地に社有大変後爰に移す

○高岡郡安和村
八幡山豊寿院普済寺 真言宗洲崎
本尊地蔵 弘法大師作 大善寺末
此本尊宝永四年大変に流候処矢井賀浦漁師南海に而見付迎来候赴承候に付翌五子年当村之役人彼地へ参遂断当寺へ迎来安置

○高岡郡上加江村
弘野大明神山崎
棟札天正元酉年霜月十五日大檀那源朝臣佐竹弁寿丸大願主福寿軒沙門此棟札宝永四年大変に流失
月江山禅源寺
本尊阿弥陀 寺記曰寺地上ノ加江村山崎と申所之南の谷に有之処元貞と申住持之代に今之寺床へ引越元貞病死盛吟と申住持相勤其弟子不白相勤右不白時代宝永四年大変ニ本尊什物流失

○高岡郡与津村
西宝寺
寺記曰開基之儀一条康政卿より渡辺主税介に仰せて一向宗建立弘治三年康政卿より宗旨御免之御書頂戴当寺代々持伝候処宝永四年大変ニ流失

○幡多郡佐賀村
寿福山本智院願成寺
寺記曰年暦世代未詳慶長二酉年以前ハ禅宗ニ而寺領廿八石五斗余寄附有之由同三年右寺領上ル同五子年浄土宗ニ開基称名寺末寺に改替
寺地宝永四亥年大変ニ流失
護国山円光院妙光寺
寺記曰寺天正年中開基客殿三間半ニ七間庫裡三間ニ七間半ニ而上使駒井七郎右衛門殿御宿仕也宝永四年大変ニ流失其後小屋掛也
安養寺
寺地道場屋敷ニ有宝永四年流失旧記無之
明専寺
寺記曰開基先祖福田万左衛門光信と申者永享年中当村カリヤ屋敷ト申処ニ住居万左衛門より六代之末福田孫太郎躬真宗法師と成証文等宝永四年流失右法師西本願寺より寺号木仏拝領仕寺地宝永四年大変以後法華堂と云処江移ス

○幡多郡入野村
賀茂大明神八幡宮 相殿 賀茂社者式社之一也
右八幡ハ石清水八幡奉勧請但八幡社ハ旧ハ在所早崎ト云所ニ八幡原と云処有此地ニ有之今畠方作目ニ成賀茂社ハ在所之内賀茂と申所ニ有之今ハ松原之内ニ両社一宇ニ有之何之時松原へ移候哉年暦不知尤棟札ハ無之候へ共応仁之頃藤原家基再興之由申伝○宝永四年亥十月大変ニ本村大潮入亡所ニ及候程之義ニ付此社拝殿共々松原とひとしく石の口を離流れ上り候処潮干るに随ひ本の柱口の石へすわり社少しも不損社内へ逃入候而命助かり候者有之也
大方山長泉寺
寺領拾石 御免許寺領宗伝様御書附等宝永四年大変ニ流失旧ハ寺領拾四町七反三拾九代入野鞭出口田野浦田野々鹿持右村々等ニ有之地検帳ニ出此外入野海辺塩浜高七拾四浜之内右村々ニ而弐拾一浜寄附有之

○幡多郡山田郷坂本村
*宝生山求聞持院 一日南見山高寿院 香山寺 真言宗石見寺末
仁王弐躰仁王門宝永四年退転ニ付仮立被仰付候処享保三年八月十三

日破損其後観音堂之内へ右仁王納置

＊鼈頭転記　原本ニ

香山寺古文書今蔵足摺山

○幡多郡石原村

赤剥大明神　英通言昔年有小宮中頃無宝前神躰元禄十五午年一人工匠来時哉幸哉下村貞右衛門山本左五兵衛繇発起小社造営欲安置神躯彼工匠神像請彫刻諾造之不好不図作體小児像矣黙按之赤剥謂歟所謂慶長末於大阪童謡門城戸櫓諷大阪起事宝永初末松山浪越共諷宝永四年亥十月四日大地震忽山崩潮満山谷地割成海皆是乾坤自然気然則渠非所知気導之像造躯不淵霊妙敢凡慮所暨非邪

○幡多郡布立石村

西光寺　真言宗足摺山末

本尊正観音　恵心作

寺記曰去ル永禄年中下茅光明寺掛持之砌右本尊並薬師大師之御影等再興有之其後宝永之大変に浪入本尊及破壊其節繒彩色等仕也

立石摂津守墓　松かハナ

碑名前守高嶽雲公覚霊天正二甲戌九月三日　旧石碑宝永四年流失延享元年ニ布立石村より新ニ石塔建立也

〔高岡郡興津村誌〕〈作不詳、昭23？、県図、K 217－41〉

西宝寺廃寺跡

又外ニ宝物等数品アリシ事ハ宝暦九年御使僧広泉寺殿へ口上書ノ一札次ニ延享四卯年ノ差出其外過去帳ノ前文亦系図ノ内ニ詳也大変ニ流失云々可惜々々　以下略文此大変宝永四年ノ海嘯ナルヘシ

〔佐川町誌〕〈西村亀太郎著、大8〉

宝永四年十月四日大地震アリ須崎浦船倉ニ潮水浸入シ十五端帆櫓五十六挺ヲ備ヘタル御用乗船一隻外小船四隻流失ス

〔土佐大震記〕〈高知市民図書館所蔵、（Ⅱ－119～123）所収の「弘列筆記」と重複する部分あり

宝永四年大地震

白鳳年間の大地震について、宝永四年十月四日未刻に起りたる大地震は我が国記録の上に於ては、最強の地震にして、西国・中国・畿内・南海東海の三十余国皆之れを感じ、此時の土佐の地震は、最も詳かに伝へられ、死人の数は割合に少なかりしといへとも、家屋田園社寺等の、津浪のため流失せる数意外に多く、其損害は実に夥しかりしなり。

神武天皇、御即位よりこのかた、二千三百七十年、ケ様なる緊しきことを聞かす、別而も駿河・参河・遠江・紀伊・摂津の五州は、津浪押入りて諸人死すること夥し。

土佐の国にては、其の騒動殊に甚しく、在々浦々到るところ家たふれ、大きなる立木も根こそきに打たふされ、地さけて三四尺より六七尺にもおよび、中より泥水おびたゞしく湧き出て※『老幼は殊に難儀ニ及ふ間もなく、地震の跡より大浪打入り、御城で廻り堤不残打こえ押やふりておそろしき大潮入込ミ西は、小高坂、井口、北八万々久万、養泉寺、薊野、一宮、布師田、東は介良、大津の山の根まで一面の大海と化す。大浪打よすること前後、都合七八度にして、その浪の高さ五六丈もありぬべし、されとも西孕の山にて波をふせきけれハ、御城下の方は大浪入らす。大潮うつまきておしこむはかり也、其の外海浜の在々同時に大浪打入りて其損害は挙げて数ふへからす、やがて其の日も暮れに近づけとも入込したる潮は不引』又地震も、大小引つゝきて止む時なく、人々最早逃るゝ処なしと覚悟しぬ、浦戸御畳瀬あたりは、後に山あるゆえ、それに逃れて、幸にも死する人少なかりしも、種崎の浜にては、死人最も多し。

一時に押よせたる大浪は、磯崎御殿残らず流失し、これにつれて処々の民家は、たやすく暫時のうちにゆりたふしては大海へおし流しぬ。着るに衣なく、はちに食なき飢人苦を救ふため、此時国守より、御侍数十人東西へ遣はされ、其節より□□には、諸民を救はせらる。此の地震にて城下廻りは数里の間大地ゆりさけて卑くなり、津呂の港あたりは、これに反して高くなりけれハ、船の出入自由ならす。依りて急に御普請

ありしかとも、もとのことくならず、やがて同九日十日に至りて潮も引き浪も静かに成て、山々にこもりたる人々もそれゝゝ家あるは、わが家にかへりて住居しぬ。

此ころ大門筋、帯屋町下より一丁二丁のうち投網、あるひは、すくひあミにて海魚数多とりし也。また愛宕山のふもとにてハ、鯖鱈などの大魚夥敷捕りしとそ。

此地震は、月の末まで止ます。日中七八度ゆり。夜にかけては二十度にも及ぶこと毎日なり。大地ゆぶつきて定まらさること前に同じきなり。ゆり出さんとする時はかならず、側にて大筒を打ちはなつ如く、心地あしき音して鳴渡るなり。

此地震は、日本国中感せさる処もなし、但京都のミは其損害少なかりしか、東海道筋は、大抵破壊尤多し、又九州路にも少々破損あり、四国も甚しくして別けて土佐は大破なり、今其一二を挙くれば、

一、流家　壱万千百七拾軒
一、潰家　四千八百六拾三軒
一、破損家　千七百四拾弐軒
一、死人　千八百四十四人
一、流失牛馬　五百四十二疋
一、亡所之浦　百三ケ所
一、半亡所　三拾六ケ所
一、山分　山崩畑作雑穀苦過分損失積不知
一、港　三ケ所、大破
一、御国中　往還の道筋及大破往来不自由之所数ケ所

此の宝永年度の地震は、白鳳大震後、一千二拾三年を経過したることにして、此の時、土佐の国の津々浦々は、大抵亡所或は、半亡所となりて初の地震に侍殿、御屋敷民家等、一時に転倒し、忽ちにして、諸所に火起り、炎は天を焦す折しも、高潮押入りて、田苑は海に没し、草木家畜は言ふに及ばず、逃げ走しる諸人たちも、多く圧に折れ、浪にさらわれて、行方も知れす成り果てしなり。

国中在々所々山まで打詰めたる潮三分ノ一迄に減り、三分の二は定潮と成る、風そ潮の及ぶところの田畠は、すべて惣荒れとなり、餓孚野に満つる悲惨なる出来ごとなり。

阿波にても、徳島屋敷二百三十軒民家四十軒潰れ、由岐、牟岐など皆亡所となりぬ。

伊予に於ては、宇和島領城破損し、潮の高さ平地より一丈斗り上る。今治・松山・吉田・大州領も海辺の□浦悉く大潮入りしなり。

当土佐にては前にも記せる如く、山のいたゞき近く大潮入りしより田園市町は、大半海底に没し、□山却って平地となる。実にもゆゝしき珍事なりける。

阿波国海部郡鞆浦
宝永四年地震記念碑

※『宝永四年、丁亥之冬、十月四日、未時、地大震、乍海潮湧出、丈余蕩々襄陵、反復三次而止、然我浦無一人死者、可謂幸矣、後之遭大震者、予慮海潮之変、而避焉則可也』（Ⅱ－206）

〔神社明細帳〕〈県図、K175－7、原本成立は大正年度か〉
高知県土佐国香美郡田村字龍光寺鎮座
郷社
伊都多神社

由緒、寛文九巳酉年有故還社当所、但宝永四丁亥年大地震十月四日津浪入宮居大破加修覆。

○

高知県土佐国香美郡三島村久枝村字夷子堂鎮座
無格社
西宮神社

神社記云、浜西ノ宮小社（一云西宮大明神）右勧請年暦不相知但宝永四亥年大潮入流失其後再興有之

○

高知県土佐国香美郡三島村下島村字溝マタゲ鎮座

村社

十八所神社

由緒、享禄二年之旧記二十八所大明神ト崇祭之由申伝、先年御改ノ節ニモ大明神ト記之、宝泉坊ト申者建立之由申伝、宝永四年大潮之節社流失。

神体記云十八所大明神神体鏡本地之絵像宝永四年流失。

○

高知県土佐国安芸郡甲浦村字甲山鎮座

無格社

熊野神社

由緒（○前文略）毎年九月十八日二子島へ船ニテ渡輿有之、右船先年ハ五端帆位ノ船ニテ曰覆御紋付之絹幕有之由御備被仰付候哉又者地下仕成哉不相知、千光寺記録宝永四亥年大変ニ流失、ソレ以来市艇ニテ渡島有之。

○

高知県土佐国長岡郡種崎村字御神母（貴船ノ森）鎮座

無格社

貴船神社

一、拝殿神社一社

神母神社

由緒（○前文略）又云慶長年中柏原市太夫造立之由縁起有之候処去ル亥年大変之節古堂共流失。

南路志云イヤカハナ神母宝永四年丁亥十月六日大地震種崎亡所一草一木無残溺死七百四人其中ニ此神母之社不思議ニ残レリ、其時迄東ニ町有、今御畳瀬ヨリ渡場之通頂本寺有之、今之町八大変後西へ引移ストイヘリ。（○日付はもとのママ）

○

高知県土佐国長岡郡種崎村字漁師町蛭子松鎮座

無格社

恵美須神社

神社牒云、漁師町北ノ浜端、浦恵美須小社右勧請年暦不相知、宝永四年大変之節流失、其後又取立祭之。

○

高知県土佐国長岡郡種崎村字板倉（○校カ）鎮座

無格社

桑野神社

由緒、神社牒云、新地北ノ浜端桑野明神小社右勧請年暦不相知但桑野明神ト云伝、元親之時代、南之浜ニ有之、大変後当所へ移ス、又云七十ケ年中以前ヨリ祭之由来書付宝永四年大変之節流失。

○

高知県土佐国土佐郡下知村字東堤倒鎮座上知依

無格社

畝丘樹下神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳元ト当社ヲ距ル三町余艮ノ方ニ金田ト称シ少林アリ其地ニ鎮座ス、該地ハ洪水潰水ノ災ニヨリ爰ニ移スト云未、其年詳ナラス、神社牒塩田村条云、オイケ畝丘樹下神社、（○中略）右寛文四甲辰年従吸江之小一宮勧請之称号畝丘樹下崇敬塩田村氏神、宝永四丁亥年十月大変之節在所損亡、依之右寺町へ塩田村弁右社等引移之、享保四年九月再興社、以前之棟札ハ流失不知

○

高知県土佐国長岡郡本山郷本山字東谷鎮座

村社

尊姫神社（○末谷神社と書いて訂正してある）

由緒、古老ノ伝説ニ宝永年以前ハ当社及氏子家屋当村字窪屋敷ト云地ニアリシニ地震ノ際洪水ノ為ニ社殿流失ス。其下流ニ於テ拾ヒ揚ケ今ノ末谷ニ鎮座スト云、又古来ヨリ敷守大王権現ト称ス、明治元年辰三

月改称ノ達ニヨリ未谷神社ト改称ス、宝永五戊子九月ノ棟札アリ、（○以下別筆）昭和六年十二月二十三日尊姫神社ト改称。

○

高知県土佐国吾川郡秋山村甲殿住吉字住吉山鎮座

郷社

住吉神社

由緒、神社牒云、従往古当村氏宮也、亥年大変社拝殿御正体共流失且勧請未歴不相知。

吉本虫夫住吉記之略ニ云、宝永四年丁亥地震大波ニ宮社跡モナク流亡シ神宝一ツモ不残、今ノ神器ハ皆後ノモノナリ。

○

高知県土佐国高岡郡新居村字八幡林鎮座

郷社

新居神社

由緒、古来ヨリ当村ノ産神ナリ、旧記棟札等宝永四年亥十月地震ノ際怒涛ノタメニ流失シ今不伝。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村字卯沢鎮座

郷社

宇佐八幡宮

旧記等宝永四亥年十月四日大震波涛為流失シテ不伝、古ヨリ当村ノ産土神ナリ。神社牒云、八幡原、八幡宮 正八幡 右勧請来歴不相知。但宝永四亥年大変大潮入旧記流失也。

棟札文曰「正徳元辛卯年八月吉祥日再興八幡宮」裏面ニ当社所由来ニ久馬茲宝永四丁亥年十月四日大地震津浪ニ旧社流失也、歴ニ数日ニ而於ニ塩間浦ノ海浜ニ偶得ニ神鏡ニ此及古来之神体也、於レ是翌宝永五戊子年八月五日建ニ小社乎旧地ニ而致ニ祭礼拝趨之敬ニ也、

宝暦十辰年神社就御改指出控帳写云、正八幡宮、談議所ニ有、本社五尺四方、九州豊前宇佐八幡宮勧請ト申伝候得共、宝永四丁亥十月四日大地震津浪入、宮社不残流失、御神鏡ハ右同郡浦ノ内村潮間ト申海浜へ流寄候由、今之御神鐘是也、依而勧請ノ旧記等無御座候。

一、境内神社一社

八坂神社

勧請年月縁起沿革等未詳旧記等宝永四亥年十月四日大地震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村字佐字宮ノ前鎮座

無格社

若一王子宮

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月四日大震ノ節波涛ノ節流失シテ不伝。

棟札文曰正徳四甲午年九月吉祥日再興若一王子宮、裏面ニ宝永四年丁亥十月四日大地震津浪ニ旧社流失セリ焉土人嘆レ之、五年戊子九月五日建ニ小社乎旧地ニ以僅存ニ祭奠之儀ニ而已。

又享保三戊戌年二月吉祥日、勧請若一王子神鏡一面札ノ裏ニ若一王子御神鏡宝永四丁亥十月四日大浪ニ流失ス、其後旧地ノ土中ヨリ雖レ得ニ神鏡ニ氏子依ニ願望ニ、享保三戊戌春新ニ神鏡奉勧請者也。

宝暦十辰年神社就御改指出控帳写云、勧請鎮座之旧地ハ右八幡宮同時之変ニ流失都テ相知不申、宝永五戊子年九月五日建小社其後正徳四甲午年再建以後棟札御座候。

一、合祭神社一社

神母神社

勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ不詳

一、境内神社一社

天満宮

勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年大震ノ節波涛ノ

為ニ流失シ不伝。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村字西浜東町鎮座

無格社

日吉神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、記録等宝永四亥年十月四日大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ不伝、

神社牒云、荒神山、山王権現小社、勧請年歴不相知、但先年宇佐西浜ニ有之候所宝永四年流失翌年建立尤此時移荒神山中

一、合祭神社二社

竈戸神社

勧請年月縁起沿革等未詳、旧録宝永四年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス

愛宕神社

勧請年月縁起沿革等未詳、旧記宝永四亥年大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ不伝、

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字三島ケ原鎮座

無格社

三島神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ不伝。

一、合祭神社二社

竈戸神社

勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月大震波涛ノ為ニ流失シ不伝。

愛宕神社

勧請年月縁起沿革等未詳、旧記ハ宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字新町鎮座

無格社

神母神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月四日大震ノ節波涛ノ為ニ流失シテ不伝。

神社牒云、町廻り神母、荒神両神名併書両神一社也、右勧請来歴不相知、但古ヨリ有之、宝永四年流失故同五年再興。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐町宇佐、字馬詰鎮座

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ不詳。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村字宇佐浜鎮座西浜

無格社

廃、恵美須神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等八宝永四亥年十月四日大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字岩崎鎮座

無格社

神明宮

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月四日大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ不伝。

神社牒云、岩崎新在家山太神宮小社、右宝永元年地下人建立候所、宮床ノ岩崎同四亥年大変之節流失仍之翌年当所へ移之。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字荻崎鎮座

無格社

磯部神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月四日大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字東中町鎮座

無格社

恵美須神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等ハ宝永四亥年十月四日大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ不伝。

一、境内神社一社

愛宕神社

勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村字東中町鎮座

無格社

神母神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失シテ不伝。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字神母屋敷鎮座

無格社

神母神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等八宝永四亥年十一月四大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ不詳。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字渭浜鎮座

郷社

厳島神社

由緒、古来ヨリ福島村渭浜村ノ両村産土神也、元ト弁財天ト称シ辰、（明治元年）三月改称ノ達ニヨリ厳島神社ト改称ス。宝永四年十月又嘉永六年地大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ記録古器物未詳

一、境内神社一社

竈戸神社

勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四年地大震ノ節波涛ノ為ニ流失シテ不詳

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字馬詰鎮座

無格社

神母神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、古来ヨリ福島村渭浜村ノ両村ノ敬神ナリ、旧記等ハ宝永四年地大震ノ際波涛ノ為ニ流失シ未詳

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐、字馬詰鎮座

無格社

神明宮

由緒、古来ヨリ福島村渭浜村両村ノ崇敬神ナリ、旧記等ハ宝永四年亥十月四日地大震ノ節波涛ノタメニ流失シ不詳。

神社牒云、宇佐村ノ内馬爪家掛リ林山太神宮小社、右先年ハ福島渭浜惣鎮守ニ候所、亥年大変ノ節流失、仍之元文三年小社再興右勧請之。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字曽我鎮座

無格社

曽我神社

由緒、古来ヨリ福島村渭浜村両村ノ崇敬神也、旧記等ハ宝永嘉永ノ地大震ノ節波涛ノ為流失シ不詳。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村　福島村浜村字鳥ケ巣浜鎮座

無格社
恵美須神社
由緒、古来ヨリ福島村渭浜村両村ノ崇敬神ナリ、旧記等宝永四年地大震ノ節波涛ノ為メニ流失シテ未詳。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村宇佐字鳥ケ巣鎮座
無格社
神母神社
由緒、古来ヨリ福島村渭浜村両村ノ崇敬神ナリ、旧記等宝永四亥年地大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ未詳。

○

高知県土佐国高岡郡井尻村字日和山鎮座
郷社
丹生神社
勧請年月縁起沿革等未詳、宝永四亥年十月四大地ノ節旧記流失ス。神社牒云、宝永四年大潮入其節宮本尊共流失。
一、境内神社二社
神母神社
勧請年月縁起沿革等未詳、旧記類宝永四亥年大震ノ節流失ス。
竈戸神社
勧請年月縁起沿革等未詳。旧記等ハ宝永四亥年十月大震ノ節流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡井ノ尻村字仙月鎮座
無格社
太神宮
由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等八宝永四亥年十月大震ノ節流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村井ノ尻字南渡上リ鎮座
無格社
天満宮
勧請年月縁起沿革等未詳旧記等ハ宝永四亥年十月大震ノ節流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村井ノ尻字北渡上リ鎮座
無格社
恵美須神社
由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記ハ宝永四亥年十月大震ノ節流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村井ノ尻字宇津賀山鎮座
無格社
神母神社
由緒、勧請年月縁記沿革等未詳、旧記等ハ宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村龍村字旧寺山鎮座
村社
白山神社
由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。古来ヨリ当村ノ産土神ナリ。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村龍村字旧寺山鎮座
無格社
山津見神社
由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記ハ宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村龍字山ノ神鎮座

無格社

佐婆神社

勧請年月縁起沿革等未詳旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村龍字崎山鎮座

無格社

天満宮

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村龍字後川鎮座

無格社

恵美須神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失ス。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村龍字神母谷鎮座

無格社

竈戸神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失シテ不伝。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村龍字神母谷鎮座

無格社

神母神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳旧記等宝永四亥年大震ノ節波涛ノ為ニ流失シテ不伝。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村龍字崎山鎮座

無格社

海津見神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失シテ不伝。

○

高知県土佐国高岡郡宇佐村龍字神母谷鎮座

無格社

国沢神社

由緒、勧請年月縁記沿革等未詳、旧記等宝永四亥年十月大震ノ節波涛ノ為ニ流失シ不伝。

○

高知県土佐国高岡郡奥浦東分村字鳴無鎮座

郷社

鳴無神社

由緒、神社牒奥浦村東分一ニ鳴無村ノ条云、高賀茂大明神、但正一位也、又鳴無大明神共唱、右勧請来歴不相知、但縁起等宝永四亥年大変ニ流失（〇中略）、右御船祭之儀ハ御供仕ル社人拾五人ヨリ相祭候、段縁起ニモ有之候所、弐拾六年以前御殿源光寺火災之節焼失ニ付、記録モ無之所、常通寺ニ其縁起写有之、又写有之所亥年大変ニ大潮入来流失ナリ。

一、御旅所一社

本村字ヘイノジョウヤマ

鳴無神社旅社

本社ヨリ内海差渡シ西ノ山端ニ有之、社九尺四面茅葺公義御仕成、大変ヨリ前は小扮葺

○

高知県土佐国高岡郡多ノ郷村多ノ郷字竹ノハナ鎮座

郷社

加茂神社

由緒（〇前文略）灯籠と九輪八伝右ヱ門殿方ニテ新ニ仕成置しとかや（〇中略）灯籠石ハ高サハ九寸四方にして円形三角半月円形を四方に求して東西南北に頒け其内を四角に彫明て中央の象前としたり。是則灯を立る所也、宝永四年亥十月四日大変に崩れ損して今ハ九輪も無シ

〇

高知県土佐国高岡郡多ノ郷村神田字下川内鎮座

郷社

八王子神社

由緒、宝永四亥年地震大潮の節神体幷納物等悉皆流出ノ所、神体ハ須崎浦字高洲磯辺へ流掛り有之由ノ注進有ニ依テ迎取。

神社牒云、神田村上ノ在所入口、八王子（一云八王子大明神）右八王子宝永四亥年大変ニ流失須崎高須磯辺ニ流掛リ有之、則如元安置其節福生寺住僧宮再興

〇

高知県土佐国高岡郡神田村字赤ハケ鎮座

無格社

須賀神社

由緒、神社牒云、天王山（一云北神田天王頭大王）右天王宮往昔当所城山之鎮守之由云、伝右城主姓名等不知一先宮退転、福生寺住僧一元法師只今之所へ建立ト申伝、然ニ此社宝永四亥年大変ニ流失以後造立之。

〇

高知県土佐国高岡郡多ノ郷村神田字神子谷鎮座

村社

天満宮

神社牒土崎町吾井郷枝村ノ条云、マツノモト天神右勧請年歴不知、且去ル亥大変流失唯今本ノ鏡籠有之、但先年山潮ノ節土崎へ流、社則此所へ安置。

〇

高知県土佐国高岡郡多ノ郷村大石字戸島鎮座

無格社

戸島神社

由緒、往古ハ三柱ノ神表ノ島、中ノ島、戸島ノ三所ニ奉斎シ二先年時変ノ為ニ社殿流失ノ所、津野氏当地ヲ所領ノ代、神体地挽網ニカヽリ船頭高野長左衛門者ニヨリ、ワレハ戸島ノ神ナリ、海底ニ年久シクアリ、今此網ニ入ル、往々漁事ノ守護ヲナサント、ヨリテ宮殿ヲ戸島ニ造築シ崇祭スト云。

神社牒野見浦条云（〇中略）但御神体宝四亥年十月四日大変大潮有之社流失。

〇

高知県土佐国高岡郡須崎町須崎字南古市西分鎮座

郷社

八幡宮

由緒、神社牒云、（〇中略）鎧壱具親忠奉納但宝永二酉年仕置役仙石勝蔵松下長兵衛時分有之鎧繕被仰付由云伝、然ニ宝永四亥年大変ニ流失其内左之品所々ニ有之取集如此」、腹巻一、□当鉄形二ツ津野親忠奉納尤彩色悉傷物、鰐口二ツ内一ツハ元禄七甲戌年佐伯孫介娘寄進、一ハ宝永二丁酉年須崎村寄進トアリ、但古来有来分亥年大変流失右一ツ残リ有、神輿一ツ、但宝永亥年時変流失然所ニ豆州岩地へ流行キ、彼地氏宮へ納有之由習年致伝様右神主へ申出廻船使ヲ以神輿迎来之、宝永四亥年十月四日地震大潮之節当社之御輿流失之記云、須崎浦八幡ノ神輿十月四日ノ大潮ニ流ケル伊豆国下田浦ノ漁船同八日沖合ニテ是ヲ拾ヒ見レバ神輿也、疎ニスヘキニアラストテ仮ニ別社ヲ拵へ新八幡宮ト祭ケル然ルニ拾得タル漁父時運ヲ得ケルニヤ大漁ヲシテ徳付ケルニヨリ遠近ノ浦乞是ヲ尊ミ崇メケル然ル所ニ当国田野浦ノ売船江戸へ渡海ノ折柄下田御番所御改ヲ請入津スル其砌件ノ旨ヲ聞彼社ニ行御輿ノ内ノ書付ヲ見レバ土州須崎浦八幡宮神輿寄進施主ノ姓名ヲ記有是コ

ソ疑所ニアラズ我々が同国ノ御輿争カ其儘ニ閣ヘキ様ナシトテ所ノ役人ヘ子細相断是ヲ迎ヘ帰ラン事ヲ強テ願ケレバ、浦人是ヲ惜ミ奉リ中々六ケ敷有ケレバ器物トハ違ヒ神輿ノ儀ニ付終ニハ望ニ任セモライ得タリ、（〇中略）右御輿伊豆国ヨリ還行ノ節伊豆下田問屋役人送リ状ノ写其外右ノ来暦委敷書付八幡宮宝殿ニ木札ニ記有之也、右札ノ裏ニ大変ノ節当所ノ一巻等悉ク書記有之、右施主川倒次郎右衛門筆者ニ標八郎兵衛ト有。

当八幡宮ハ津野親忠公御建立代々也、大変ニ流失ノ宮迄則御再奥ノ宮也、親忠公御寄付ノ品数多有之所大変ニ流失今纔鐙一頒残リ切々有大変ニ灘ヨリ拾ヒ集メ申由惣毛曳ト申オドシト申也変ノ前ノ宮ニテ丸ニ一ノ御紋アリ。

〇

高知県土佐国高岡郡須崎郡須崎字南新町鎮座

無格社

住吉神社

由緒、神社牒云釣町ノ東住吉大明神右ハ観請来歴不相知、尤去ル亥年大変大潮ニ流失、棟札等不相知、且延享二丑年十二月焼失有来之場所ヘ拝殿等来春ノ内再興ノ筈ト有之。

一、合殿神社ニ社

若宮神社

神社牒云釣町ノ東若宮大明神右之勧請来歴不知、但津野時代以前ヨリ有来候由、尤去ル亥年大変流失以後建立然ニ延享二丑ノ年十二月焼失本社取除候ニ付、有来之通拝殿ハ今来春迄之内再興ノ筈ト記有之。

〇

高知県土佐国高岡郡久礼村字松原鎮座

県社

八幡宮

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳当社ハ宝永四丁亥年地震暴潮ノ為メ宮殿破壊シ棟札ノ類流失往古ノ事不詳、古来ヨリ当村及上ノ加江、安和、三ケ村ノ惣鎮守ト奉（〇中略）前記ノ如ク宝永怒涛流失且正徳ノ記録存セス。

神社牒云久礼村浜宇佐八幡正八幡、両神名ヲ併書相殿但久礼村上ノ加江安和此三ケ所惣鎮守、（〇中略）宝永四亥年大変ニ宮不残流失棟札等数々有之所悉流失依之来歴不知（〇中略）鰐口歌仙三品、宝永四亥年大変ニ流失品之内流上リ此外太刀脇差弓矢等数々流失。

〇

高知県土佐国高岡郡久礼町字小鎌田港山鎮座

無格社

住吉神社

由緒、神社牒云、湊口住吉明神右者古来ヨリ勧請有之尤宝永四亥年大変之節流失無之鎮座来歴不相知。

〇

高知県土佐国高岡郡久礼町字船付山鎮座

無格社

厳島神社

由緒、神社牒云湊山ヨリ東ヘ放レ沖間小島ノ内鎌田沖島弁才天、右者古来より当島ニ有之所、宝永四亥年大変流失以後勧請年歴不相知。

〇

高知県土佐国高岡郡久礼町字湊崎鎮座

無格社

海津見神社

由緒、神社牒云、湊山龍神右者往昔船乗共風波為立願安置然ルニ宝永四亥年大変ニ流失以後勧請鎮座来歴等不相知。

〇

高知県土佐国高岡郡久礼町字井流ノ本鎮座

無格社

天満宮

一、合殿神社二社

池神社

池ノ神先年ハ池九反之地中二社有之所宝永四亥年大変之時分海ニ成リ、今天神林へ移シ今以鎮有之、宝永七庚寅年正月廿五日再興ノ棟札アリ。

○

高知県土佐国高岡郡与津村字馬場屋敷鎮座

郷社

八幡宮

神鏡及歌仙短冊宝物幷棟札等宝永四年亥十月四日地大震ノ時為怒涛流失ス。

神社牒云、ハチマンハラ、八幡一云正八幡大神宮右勧請来歴不相知脇立左勢至右観音但古来ヨリ有之尤宝永四亥ノ大変ニ流失、享保三戊年勧請之、又云八幡本社古宮林ノ内東ノ端ニ在之、亥大変流失廿間許高キ所へ遷宮。（○中略）宝物歌仙三十枚鏡三十面一条公ヨリ御寄進亥ノ大変没ルヨシ。

○

高知県土佐国高岡郡上ノ加江村字大田原鎮座細代山崎

郷社

広埜神社

由緒、勧請年月縁起沿革等宝永四年十月地大震ノ節、怒涛ノ為ニ旧記流失シ未詳古来当村惣鎮守ノ産土神ナリ。

神社牒云、山崎、弘野大明神一ニハ広野大明神ト書、右者天正元酉年霜月十五日大檀那源朝臣佐竹弁寿丸大願主福寿軒沙門ト云棟札有之所宝永四亥年流失只今棟札無之由有記、但社帳ニ宝永四亥年大潮之節社流失、正徳元年再興棟札有之。

○

高知県土佐国高岡郡上ノ加江村字九番小路（○「字浦ナ」とあるのを別筆で消してこう訂正してある）鎮座

無格社

須賀神社

由緒、神社牒云、右勧請来歴不知、元禄十五年棟札有之、但右宮宝永四年亥大変流失旧記無之。

○

高知県土佐国高岡郡越知面村字宮原西分鎮座

郷社

三島神社

五社神社

由緒（○前文略）然ルニ先年流失之節古キ御神体鏡残リ有之、（○中略）正徳元年再興之節ヨリ改之三島大明神ト崇之。

○

高知県土佐国安芸郡伊尾木村字西浜鎮座

無格社

恵美須神社

由緒、神社牒云、五本松、夷大明神、勧請年歴不相伝古来有之所宝永四亥年大変之時流失同七寅年地下中漁師共建立。

○

高知県土佐国安芸郡川北村字松田島門前鎮座

無格社

若宮神社

棟札ノ類宝永四年亥十月四日地大震波涛ノ為ニ流失ス。

神社牒云、（○中略）右画像有之所宝永四年亥十月大変之時流亡之由言伝

○

高知県土佐国安芸郡赤野村字住吉鎮座

無格社

住吉神社

由緒、勧請年月縁起沿革等未詳、往古ハ川久保ト云処ニ鎮座ス、宝永四乙亥十月四日地震ノ際激浪ノ為ニ流失ト成、神体ハ童子拾揚り、翌五年九月爰ニ新殿ヲ建立ト云、乃チ同年ノ棟札アリ。

神社牒云川久保住吉大明神勧請年歴不相知、但昔此地ヨリ辰巳ノ浜ニ在宝永四乙亥十月四日ノ大潮社殿棟ノ上壱丈余ニ及則流没僅社形西浜辺ニ漂着、神体此川ニ留リ三十日ヲ経テ後当村ノ童児拾上之。同五年戊子九月ト兆之上此所ニ社建立。宝永五年戊子九月、享保七王寅九月元文五年霜月ノ棟札アリ。

○

高知県土佐国香美郡赤岡村字本町南東鎮座

無格社

綱曳神社

由緒、神社記云、宝永四年之大変ノ節小社神体共流失、其後宝永六年右ノ通ニ再小社建立、社地三代、棟札文曰、宝永六己丑年霜月吉祥日新造立大明神社。

○

高知県土佐国香美郡吉川村吉原村字住吉畠鎮座（〇三字別筆挿入）

郷社

西徳善八幡宮

神社記云、宮内ヤシキ西徳世八幡宮勧請来歴不相知、但宝永四亥年大潮之節古記等流失、（〇中略）宝永五年、正徳三年、享保七年同廿年各棟札ニ西徳善ト相記。

○

高知県土佐国香美郡吉川村吉原村字東狭間鎮座（〇三字別筆挿入）

村社

大八幡宮

神社記云カニミテン太八幡宮田井八幡宮勧勧（〇ママ）年暦不相知、但宝永四年亥年大潮之節古記等流失。

○

高知県土佐国香美郡吉原村字住吉丸鎮座

無格社

住吉神社

神社記云、浜、住吉太明神一、カイウバタ南住吉太明神宮、勧請年歴不相知但宝永四年大潮之節古記等流失。

○

高知県土佐国幡多郡有井川村字有井神地鎮座

無格社

有井神社

宝永四年十月大地震ノ記云、有井川半亡所潮ハ山迄家ハ山上ニ有故多ク不流、一宮親王ノ古跡多ク埋没ス、衣掛岩ト云、岩モ定潮高ク成ニ依テ不見。

有井庄司塚、有井川村長尾山東の畝崎に有、高さ七尺斗大きなる五輪を中に立四方へ四尺許の五輪を立並へ有、此塚ハ根元山の峯ニ有、宝永の大地震に崩れ落ち散乱して今の所に有けるを地下人取繕ひ建置し也と云伝フ也、又外に一町程西に高野堂の崩れて有、是は庄司の墓所にて可有か是も宝永の大変に崩落しと見へ分りかたし。

○

高知県土佐国幡多郡山奈村山田字宮尾鎮座

郷社

八幡宮

宝永四年大地震忽山崩潮満山谷地割成海皆是

○

高知県土佐国幡多郡下山郷下分大宮村字大宮鎮座宮ノ首

郷社

大宮神社

一、合祭神社七社

曽我神社

楠目某常記云、幡多郡西の境与州吉田御領目黒村土州の大宮也

目黒村川奥谷に色(○カ)ニ古跡有之、之奥屋内番人中平五兵衛黒沢谷へ参候所鬼王の墓有高六尺の石宝永四丁亥十月大地震にシケ一ゆり込申由

○

高知県土佐国幡多郡清松村(○三字別筆挿入)中ノ浜村字神ノ山鎮座

村社

天満宮

由緒、神社牒云、天満宮一曰天神又天満大自在天神黒岩ノ鼻但宮林之内荒神一社有之右勧請年歴不相知但宝永四年社流失翌年当地地下人建宮又及大破享保廿卯年地下ヨリ建宮

○

高知県土佐国幡多郡清松村中浜(○三字別筆挿入)村字音無川東地鎮座

無格社

厳島神社

由緒、神社牒云、岡ダバノ鼻弁才天女脇立大黒弁天童子右勧請来歴不相知但昔之宮宝永四年流失

○

高知県土佐国幡多郡入野郷入野字東浜松原鎮座

郷社式社

加茂神社

（「史料」〔Ⅱ－109〕所引「谷陵記」入野の条を全文引用）

○

高知県土佐国幡多郡下田村字木船谷山端鎮座

郷社

貴船神社

由緒（○前文略）大膳様御代之節八年ニョリ御来被遣候、御書付ハ宝永四年流失、（○中略）旧社領御朱印社考証書宝永四亥年大変流失。

○

高知県土佐国幡多郡上灘村大岐字内沢鎮座

無格社

三島神社

神社牒云、先年浜松之内浜ト云所ニ有之所亥年流失其後宝永六年焼野へ設社地地下人勧請之。

○

高知県土佐国幡多郡上灘村大岐字宮ノ前鎮座

村社

三影神社

神社牒云、光景大明神氏神小社、右勧請来歴不相知、但先年大岐左京之助建立之其棟札ハ宝永四年流失、宝永六地下ヨリ再興。

○

高知県土佐国幡多郡宿毛町宿毛字山王田鎮座

村社

日吉神社

由緒（○前文略）宝永四年冬洪水ノ為ニ神社宝庫一切流失シ只社林アルノミ、宿毛ノ領主安東氏社殿ヲ再造シ尋テ修繕ノ社トス。

○

高知県土佐国幡多郡宿毛町宿毛字木戸屋敷鎮座

村社

八幡宮

由緒（○前文略）旧記等は宝永四年丁亥震地の際流失シテ伝ハラス即今当村ノ内沖飛島部落ノ産土神ナリ

○〔神社明細帳〕に明記された、宝永地震記事は以上の通りである。なお宝永四年から宝永八年までの年次の棟札を有する神社名を次に記しておく。棟札は社殿が新、再築された年次を示す史料である。これらの中にも地震・津波被害をうけた神社がいくつか含まれているであろうと推定される。リストには所在地、神社名、および宝永年月を示しておいた。

安芸郡

・佐喜浜村サテジリ、白髭神社、7－Ⅸ
・野根村中村神明谷、神明宮内若宮神社、7－Ⅸ
・野根村松尾東、竈戸神社、6－Ⅸ
・野根村名留川堂山、八幡宮　7－Ⅰ
・同所金峯神社、七年正月、若一神社、7－Ⅰ
・吉良川村黒耳妙見デン、星神社、7－Ⅺ
・羽根村露窪、八幡宮、5－Ⅷ
・奈半利村野川、庵谷大久保丸、王大神社、7－Ⅸ
・中山郷別所村鍛治屋敷、熊野神社、7－Ⅳ
・唐浜村地石谷、神屋神社、8－
・下山村永楽、熊野神社、5－Ⅲ
・畑山村宮ノ本、水口神社、6－Ⅰ
・井ノ口村利賀ノ向、利賀神社、7－Ⅳ
・安芸町六番組、八幡宮、5－Ⅸ
・赤野村入江、大元神社、6－Ⅸ
・馬上村仁井田、仁井田神社、6－Ⅸ

香美郡

・山南村幅ノ後口、八王子日吉神社、7－Ⅱ
・徳王子村、若一王子宮、5－Ⅸ
・香宗村中ノ村紺屋屋敷、日之御子神社、7－Ⅸ
・美良布村吉野仁井田、仁井田神社、7－Ⅸ－9
・暁霞村五百蔵、宮ケ畝、御崎谷竈戸神社、5－Ⅸ－16
・暁霞村有瀬、高アゼ、伊気神社、5－Ⅸ
・韮生郷中上村東谷、仁井田三所神社、5－
・在所村清爪村大宮、杉尾神社、7－Ⅸ
・在所村朴ノ木、大小合、須賀神社、6－Ⅸ
・岩村郷神通寺、西ノ内、神奈地祇神社、6－Ⅸ
・立田村字西ノ内、立田城八幡宮、7－Ⅻ

長岡郡

・稲生村堂ケ内八坂神社境内西神社、7－閏Ⅷ
・本山郷尾生村岡、星神社、4－Ⅺ
・豊永郷八川村宮ノ谷、竈戸神社、7－Ⅷ
・豊永郷庵谷村上ノ宮、星神社、5－Ⅸ
・本山郷本山村東谷、尊姫神社、5－Ⅸ
・本山郷下関村字石、十二所神社、7－Ⅺ

土佐郡

・領家郷牛追村イツミ、北神社、6－Ⅺ－12
・森郷地蔵寺村押谷、大北神社、7－Ⅺ
・本川郷下分高野村サケハミ、地主神社、5－Ⅺ－28
・本川郷下分井ノ川村古森、地主神社、7－Ⅺ－26
・本川郷脇ノ山村古畑野、地主神社、4－Ⅺ－25

吾川郡

・弘岡上ノ村八幡、八幡宮、8－Ⅲ－15

高岡郡

・熊津村本村天神、天満天神社、5－
・能津村名越屋、コマシ越、星神社5－
・吾桑村　谷、天満宮、7－

播多郡

・三崎村三崎、八幡、八幡宮、6－
・三崎村下益野あみだ屋敷、金峰神社、5－Ⅲ
・橘浦村下轟山、稲荷神社　6－Ⅱ－22
・古津賀村カドノハナ、土岐神社、4－

〔高知県神社誌〕〈竹橋五郎著、昭6〉

西徳善八幡宮（〇香美郡）吉川村吉原字住吉畠

宝永四亥年大潮の時古文書等流失したことや、社領本田二反三十二代を有していたことが神社記にある。

八幡宮（〇高岡郡）久礼町字松原

勧請年歴由来等未詳。当社は宝永四丁亥年地震暴潮の為め社殿破壊し棟札の類流失し、往古のことは詳かでない、正徳二辰年八幡宮由来記に嘉吉の頃建立とあり、又永正年中再興、文禄の頃佐竹竹寿丸本願中城平次兵衛とあつたといふも、宝永の怒涛に流失して何等見るべきものはない然るに神実鰐口の名に

「敬白御実前土佐州庄内明徳三年壬申三月六日願主内蔵助」

とあり、嘉吉の頃建立云々は再建であらうといふ。

新居神社（〇高岡郡）新居村字八幡林

古来より当村の産土神で、旧記棟札等宝永四年亥十月地震の際、怒涛の為に流失したという。

宇佐八幡宮（〇高岡郡）宇佐町字卯沢

神社牒、八幡原八幡右勧請来歴不相知但宝永亥年大変舊記流失也。

厳島神社（〇高岡郡）宇佐町字佐字渭浜

古来福島村渭浜村両村の産土神である。宝永四年十月又嘉永六年大地震の節波涛の為流失し、記録古器物のないのは惜しいことである。

八王子神社（〇高岡郡）多ノ郷村神田字下川内

古来当村の産土神である。神社牒云、神田村上の在所入口八王子（一云八王子大明神）右八王子宝永四年大変に流失須崎高須磯辺に流れかゝり有之則如元安置其の節福生寺僧宮再興。

八満宮　須崎町須崎字南古市西分

神社牒に依ると社領六十三石余を有し、津野時代には三十四石二斗寄附あつたことや、宝永四年の地震大潮の時神輿流れ伊豆国下田へ漂着全地に奉納してあつたが、種々交渉の上迎え帰つた事などが記いてある。

八幡宮（〇高岡郡）興津村字馬場屋式

明応年中一条房家公幡多郡中村在府中崇敬あり、神鎮三十枚、歌仙三十枚、陣刀二口奉納社領一町八反寄附の所、長曽我部元親換地の節上り地となつた。尚右実物棟札等は、宝永四年亥十月四日大震の時、怒涛の為め流失したという。

広野神社　上ノ加江町字大田原

創建年代縁起、沿革等宝永四年十月大地震の時怒涛の為に旧記流失して窺ふ由なしという。

丹生神社　宇佐町井尻字日和山

勧請年代由来等未詳。宝永四亥年大震の節旧記実物等流失。

宇佐町

白山神社（龍字旧寺山）

旧記宝永四亥年十一月大震の節、波涛の為に流失したという。鰐口銘「文永五年戊辰五月廿七日妙楽寺賓殿藤原次郎兵衛」

郷社加茂神社（〇幡多郡）入野村東浜字松原

古来当地方の産土神で、応仁の頃藤原家基が再興したと社記にある。当社は宝永四丁亥年の地震に、社殿全部流れたが、不思議にも再び元の所へ流れ還り、少しも損傷なく、宝物等も流失しなかつたという。

鹿島神社（〇幡多郡）清水町清水字鹿島山

古来より当村の産土神である。当社はもと海浜にあつたが、宝永四年流失後山ノ内へ移し、六年地下人が建立したということが神社牒にある。

上灘村（〇幡多郡）

三影神社（大岐字宮ノ前）天三影命を祀る。先年大岐左京之助建立之と其の棟札は宝永四年流失したと伝う。

〔土佐を語る〕〈重松実男著、成立年不詳〉

更に下知の宝永町は、江戸時代の中世宝永年間に大海嘯の苦杯をなめた後、ここに堤を築いたのに始まるといふから、こゝから東は二百三十年前にはまだ完全な陸地ではなかつたものである。

〔皆山集〕

樹下神社（下知村）

下知村　延享年中取調之神社帳ニ云

塩田村ヲイケ畝丘樹下神社祭神三座相殿　高加茂大明神、宇迦能御魂神泣沢女神、傍書ニ神母ト云アリ右寛文四甲辰年従吸江ノ小一宮勧請之称

号畝丘樹下崇塩田村氏神宝永四丁亥年十月大変之節在所損亡依之古寺町へ塩田村幷右社等引移し享保四年九月再興社以前之棟札ハ流失不知別当ハ寛文四年以来寿性院勤之

畝丘樹下神社（塩田村）

一別当山伏安祥院寛文四甲辰年従吸江小一宮勧請塩田村氏神とす宝永四亥年大変ノ節在所破損依之古寺町へ塩田村幷右社共引移　境内　荒神

享保十三申年三月為地鎮ニ勧請

神社記云寛文四年小一宮より勧請之称号畝丘樹下崇敬塩田村氏神宝永四年十月大変候節在所損亡依之古寺町へ塩田村幷右社等引移之享保四年九月再興社以前之棟札ハ流失不知別当寛文四年以来寿性院勤之」

○

宝永四年丁亥十月四日未ノ上刻大地震同下刻津浪打テ海辺ノ在家一所トシテ残ル方ナシ未ノ下刻ヨリ寅ノ刻迄昼夜十一度打来ルナリ中ニモ第三番ノ津浪高ク山ノ半腹ニアル家モ多ク漂流ス国中ノ死人二千余人当国ニ限ラズ伊与阿波紀伊摂津長門ノ海辺モ頗ル破壊ニ及ブ其他西国中国関東ハ地震斗ト云

○

戸島千軒（○幡多郡）

同郡大谷村鎮坐小社戸島神社祭神三女神古老伝云往時津野氏世或時地引網に三箇同形なる石を引上しが忽船長高野某に神託ありて我は戸島の神なり海底にあること年月久し今此の網に上る爾後漁業を守護すへし宮居を戸島に作るへしと故に彼島に斎奉しか宝永四年の津波に宮居神体とも流失所在を知らさりしに享保十一年丙午八月本村東瀬井の農民五郎右衛門なる者卒然発狂して云我は戸島の神なり我体此湾所ニあり急き戸島ニ送るへしと湾所草荊中に彼三石を見得るに及人皆驚怖し同郡野見村の漁民に事故を告く漁民尋速に同村の山上ニ暫く斎奉り幾程なく戸島に移し奉りしが（○以下略）

○

韓川筆話云　俊山候宇津野より種崎を御覧し給ひ危く思召し松を植させ給ふ其後大地震ニて口波入来りしにこの松ニて大ニ捍き人もおほく生をとれりとかや候宇津野山を愛賞し花時の遊度々なりし内にも仁心のふかきより見聞につけ民の事を忘れ給ハされハかゝる遠識の人ニ及へるも常ニ保赤子の心を存し給ふ故なるへし故ニ候の御詠月ニも花ニも旅ニも常ニも民を思ひ給ハさるハなきを拝吟セハ候の斯心をもうかゝひ奉るへし（○＊字は水の下に旧とあり、ツナミとふりがながある）

○

○南路志云巴堤ハ押切破損す高知新町商人半分より東ハ悉く潮入侍町も堀部七太夫蔵人殿あたりまで潮のまへ廿日比より潮間ニハ大道を通る事有

○聞出文盲云高知地形より二丈も潮高き程也大御門前迄海の様ニ成る

○秋暮獨覧集云四日以後十一月十七日迄大潮小潮とも干潮なし新町分ハ住宅床の上一間或ハ九尺斗りも潮いかり西横堀限東方へ艸船ニ乗りて往来す侍屋敷へも東より西へ二三町の内満潮の時ハ土俵を以潮留す

○某家蔵願書控云私儀農人町の内菜園場端ニ住居仕候然ルニ去々年大変以後去夏迄ハ大潮床の上迄上り住居不罷成云々其後塩留堤御普請被仰付ニ付住家へ安坐仕候云々

○宮地某日記云日数経ても尚潮同前差込都て下町ハ家々内に不被居寄々上町へ引退

○万変記云半時斗りありて沖より津浪押入り御城下廻り堤残らす打こへ押切西ハ小高坂井口北ハ万々久万秦泉寺云々山根迄一面の海と成云々此比ハ大門筋帯屋町下一丁の内投網或ハすくひ網ニて魚数多取し也

○神谷庄屋家記云津浪松ケ崎打越し巴堤を押切新町へ溢入其勢ひに三ツ頭ニ積たる材木又何間か有宍両なと何百本となく押込散乱すたまたま大震に残り米漬の家蔵も是か為ニ打乱され微塵ニ成て流失したれハ新町ハ樹木の外残る物なく満々たる海原となりたりし由

○

夜須傘松ノ記

手結浦日抄　日抄は同浦湊番浜口関右衛門重敬享保年間より明和比

迄の筆記也

香我美郡夜須村の内横浜の町八幡宮の御旅宿の傍に生り何の比誰人か植けん自生の物なるや所俗語伝へてしれるもなし松寿千年といへは幾年過しか聞覚へし老父もなし木の囲一丈六尺余地より八間四尺直に立て大枝八方にわかれはびこれり北南拾七間東西十六間惣囲四十八間余あたかも傘を開きたることく成つる故笠松とは名付たるべし（〇中略）

かくて此松宝永四亥年の潮の変に流れぬ郷人高山に登りて是を望むに枝はびこりて浪しぶきけれハとみにひかれやらで漂ひゆらへたり終の波にねもごろにこげいにけり皆人涙を流しておしミあへりさて此松洋中へひかれ行けれとも又浪に打あけられて赤岡の浜によりぬ快哉此松枝葉いささかも取さる者あれハ其崇り立どころなりしよしかく成し後ニもかゝる奇瑞の有つるハ神木のかしこきしるしいちじるしくいと尊くいとかしこき事かきりなしことし元文四とせまて三十余年の霜露経りて猶朽滅せず

〔皆山集一〕

◎住吉神社、吾川郡第二十八区甲殿村磯山に鎮座

甲殿テフ村ハ海涯ノ片灘ニテ昔ハ人モ不住村ノ名モ立ザル時ヨリ住吉ノ社ハ有シ由シ村ノ古老云へリ云々宝永四年丁亥地震大波ニ宮社跡モナク流亡シ神宝一ツモ不残今ノ神器ハ皆後ノ物ナリ社モ昔ハ山下ニ有シ由今ハ山ノ半腹ニ移リ云々

◎鳴無神社、（〇高岡郡）奥浦東分村鎮座

一高賀茂大明神　鳴無大明神ト共唱　但正一位也

勧請来暦不相知但縁起等宝永四亥年大変ニ流失（〇中略）

二拾六年以前御殿源光寺火災之節焼失ニ付縁起も無之処常通ニ基縁起写有之又写有之処亥年大変ニ大潮入来流失也宮ノ古キ御厨子ニも書記有之候得とも文字聢ニ不分明候由其外一条様御歌も三首被遊有之候由云伝但棟札数々有之候得とも書写無之尤一枚分有之候へ共勧請年不知

一鳴無大神社　土陽渕岳志云在高郡

名ニシアフ人ノシラヌモコトハリや浦ノ内ナルオトナシノミヤ

正一位高賀茂大明神又鳴無大明神トモ云奉唱但本地仏十一面観音勧請年暦不知旧記録起宝永四丁亥歳流失本社九尺二間舞殿二間三尺廊下一間九尺拝殿二間五間

◎八幡宮、高岡郡第四十八区久礼浦浜辺に鎮座

一此社宝永四亥年地震暴潮大に起り宮殿を一掃し棟札類流失往古の事不詳旧記に久礼、上ノ加江、安和三ケ村鎮守神にて往昔上ノ加江村産土神なりしを後久礼に遷宮ありて更に一社を合祭す

◎加茂神社

一加茂神社　入野郷入野村

延喜式所載ノ社　訂正土佐国式社考曰此社今入野松原ニ在リ八幡と同宇ニして南ハ加茂、北ハ八幡なり八幡ハ石清水を奉祀セリ旧ハ八幡原ニあり加茂ハ本賀茂地ニ在しを何時此ニ従併するを知らす応仁比藤原家基此社を再造すと云宝永四年丁亥十月四日大震して社地海嘯の為ニ没セられ神宮も流れ行けるか潮涸ニ及て本の礎石ニ止る其社少も破壊せず云々

〔皆山集二〕

真證寺　古新町ニあり元禄十一年十月火災ニヨリ塩田寺町ニ移る宝永四年地震大潮ニ付再北新町二丁南側に遷る

〇長岡郡吸江寺　五台山村

吸江寺塔頭五ケ庵　待月庵開基ハ登兵和尚天正十五年也慶安元子年顕洲和尚　忠義公為御請待書院庫裡廊下新ニ建立夫より自分作事也但書院ハ宝永四亥年大変石垣崩ニ付取こハし今ハ無之寺ハ大通院自分作事也

〇長岡郡、滝本寺、滝本村

元禄年類焼ニ付新町の東ニ代地を給ひ移る由宝永年大潮溢入の故新市町筋新町西一丁ニ自ら寺地を求て寺再建す明治維新の際廃寺

〇土佐郡高知街、滝本寺、新町

新町（章行云南新町上一丁中程ノ北側ニアリ）
右当寺往昔滝本村ニ在由云伝慶長年中御城の下於朝倉町寺地賜寺建立元禄年類焼ニ付其後於新町之内地賜再建宝永年中大潮溢入故其後於新市町筋新町之内寺地以自力買求之寺造立但先年ヨリ度々所替或火難等ニ付旧記紛失故委細不詳

○同、真立寺、高知新町（章行云南新町西ヨリ三丁ノ南側ニ有）
開基来歴不相知元禄十一寅年十月類焼ニ付旧記等無之古高知菜園場ニ在火災後引移于塩田寺町之処宝永四亥年地震大潮之時流没其後遷新町今之地

○同、真証寺　高知新町（山田町筋二丁目南輪）
一開基年暦不相知元禄十一寅年十月類焼ニ付旧記等無之古高知新町ニ在火災後引移于塩田寺町之処宝永四亥年地震大潮ノ時流没其以後遷于新町今之地

○同、十楽寺、高知廿代町
元禄十一寅年火災ニ依て焼失同十二卯年於新町代地賜寺坊建立宝永四亥年大潮溢入故同五子年廿代町今之寺地買求之同六丑年寺造立毎度火災之節旧記等焼失

○同、安養院、高知廿代町
慶長年中御入国之比於高知蓮池町寺地賜之引移元禄十一寅年火災之節類焼同十二卯年於新町の内寺町代地賜寺建立宝永四年大潮溢入故其後於廿代町御貢物立之地買求之引遷新町控之古地五世以前住侍（自栄智以前代）商家江売放之処後右地被召上之由今之寺地を後御免許被仰付候年歴不詳

○同、真宗寺、高知浦戸町
忠義公御代第四世祐念代門前南側之地拝領寺家二宇建立亦同代子細有之自本寺改号真宗寺且転飛担官賜余間官職元禄十一寅年御城下大火之節類焼就右両所替地於新町被仰付之引移候処宝永四亥年地震潮入以後居住難成故以願遷于浦戸町今之地尚新町旧地今以御免許控成

○同、長泉寺、高知浦戸町
開基年暦不詳了順元高知浦戸町ニ在元禄十一寅年類焼就右替地於新町被仰付之引移候処宝永四亥年十月四日大地震之時潮入居住難成故其後以願今之地買求之造営尚新町旧地今以御免許控来

○同、遍照寺、高知浦戸町
一開基年暦不詳永現天正年中住務元高知浦戸町ニ在元和十一寅年類焼就右替地於新町被仰付之引越候処宝永四亥年十月四日大地震之時潮入居住難成故其後以願今之地買求之造営尚新町旧地今以御免許控来

○同、善徳寺、土佐郡潮江村
旧高知材木町ニ在元禄十一戊寅年十月六日焼亡同十二己卯年第四世学乗院日習代要法寺十一世日受聖人遷于同新町再興宝永四丁亥年十月四日地震之時流亡第五世稚円院代右寺地差上之替地相願同八辛卯年五月要法寺十一世日純聖人於今之地再興

○同、大善寺、土佐郡江ノ口村
古高岡郡蓮池村ニ在之処檀中悉高知蓮池町へ引越候故同節第二世願宗代引移于同時下ノ端元禄十一寅年類焼以後依被仰付引越于新町宝永四亥年大地震之時潮入寺堂流没其後再遷于蓮池町享保十二未年類焼同十六亥年亦類火同年買求江ノ口村今之寺地引移

○同、大超寺、土佐郡小高坂村
一豊公御入国之節随来為称名寺末寺元高知細工町（古称大超寺町）ニ在元禄十一寅年寺堂過去帳等悉焼失同十二卯年春遷新町宝永四亥年地震之節及破壊同五子年春今之地へ引移仮造之処享保十六亥年第九世円的以町家修行本堂庫裏共建立

○同、山泉寺、土佐郡小高坂村
一右開基来歴不相知右高岡郡蓮池村ニ在之其後高知蓮池町ニ引移元禄十一寅年寺並過去帳等悉焼失之由亦其以後新町ニ遷宝永四亥年地震之節寺及破壊同五子年御断ヲ遂今之地へ引移

○同、専修寺、土佐郡小高坂村
一右開基来歴不相知往昔高岡郡日下村ニ在慶長年中引移于高知浦戸町元禄十一寅年寺焼失以後新町南端へ所替被仰付候処宝永四亥年大変

後亦小高坂村今之地へ被引替之由云伝

○同、浄福寺、土佐郡小高坂村

一右開基来歴不相知往昔長岡郡豊岡ニ在其後移于吾川郡浦戸亦高知新市町元禄十一寅年回禄過去帳等悉焼失同十二卯年春遷于新町宝永四亥年地震之節寺及破壊同五子年春小高坂村今ノ地へ引移

○同、真慶寺、土佐郡小高坂村

一開基来暦不相知高知新市町ニ在元禄十一寅年火災ニ付過去牒等悉焼失其後遷于新町南端宝永四亥年大変後小高坂村今之地へ被引替

○同、西念寺、土佐郡小高坂村

一右開基不相知往昔長岡郡種崎浦ニ在慶長年中移于高知紺屋町之由元禄十一寅年回禄同十二年春遷于新町宝永四亥年地震ノ節寺及破壊同五子年春小高坂今之地へ引移

○同、真光寺、土佐郡小高坂村

一豊公御入国以後引移于高知紺屋町元禄十一寅年焼亡同十二卯年春以被仰付遷于新町東端宝永四亥年地震之時寺破損ニ付同五子年春小高坂村今之地御引替被仰付候

○同、真光寺、土佐郡井口村

右開基年暦不詳亀岡民部与謂る者及老年薙髪自本願寺受法名教乗於土佐郡福井村亀之森寺建立慶長六丑年引移于同郡井口村謂ル中之城所元法名寺之処同十二丙午年十一月二日第四世勝慶代自本山御門跡以直筆免許寺号永福寺勝慶後相譲于嗣住宗悦改道札於川原町隠居寺建立是亦自本山請寺号千蓮寺元当寺末等二十五ケ寺有之内続縁之末寺江ノ口村大玄寺水道町善龍寺為隠居附故以来為千蓮寺末寺拾ケ寺宝永四丁亥年改派真宗寺末寺右法名等除之相残拾三ケ寺退転各在所年暦等不詳寛永十癸酉年第五世宗悦代遷于井口村今之地当寺此時代西本願寺末寺ニ而有之処京都直達等之儀不便利万事真宗寺へ相願自夫漸々為末寺分之由云伝宝永四丁亥年第八世祐元与千蓮寺第四世学清上京東本願寺へ帰参同六己丑年免許飛担臣第九世法全享保五庚子年四月免許飛担宦同年十一月律師官勅許

一七高僧御影　一幅　宝永四丁亥年請成

一聖徳太子御影　一幅　右同断

一親　聖人影像　一幅　右同断

一一如上人影像　右同断

○同、法仙寺、土佐郡福井村

右開基不詳昔高岡郡蓮池村ニ在妙蓮寺ト号慶長年中高知蓮池町寺地賜引移蓮乗院と革元禄年中火災之節類焼此時伝記等焼失十一寅新町へ遷宝永年中大潮溢入ニ付寺地差上於潮江村西入庵之旧跡元禄十五午年十一月御遺付を以御免許地拝領寺建立享保年有故法仙寺ト改其節無住ニ付寿命院憲応兼帯此節宝暦元再興寛保元酉年本寺より清滝寺長如弟子栄如へ住職申付暫寺務之処寛延二巳年能津村善住寺へ移転之後無住ニ相成再寿命院兼帯

○同、五法院、土佐郡福井村シロノ南

右開基年暦不相知古高岡郡日下村奥ノ谷ニ先住恵深在山内将監帰依ニ付寛文年中被遂御断高知へ引移於廿代寺地賜寺建立之由言伝元禄十一戊寅年焼亡其後於新町之内寺町替地賜寺建立宝永四丁亥年大潮溢入故寺為修覆難相調故暫無住を以寺領物成納集置追テ住職可相備旨申出御聞届之上同年より十ケ年以無住寺役本寺より兼帯之由申伝承

○「称名寺幷末院明細書」

浄土寺、田野郷

一庚申一躰　木像　作相知不申候

但厨子高二尺五寸横二尺

右は往昔境内ニ小堂御座候所来暦等相知不申候然ニ先年大変之節及破却堂退転仕候依之唯今迄寺内ニ安置仕有之候是亦時節ヲ以建立仕度奉存候

○この記事宝永地震記事とは限らない

一寺壱宇　浄土宗　幡多郡佐賀村

高知称名寺末寺　願成寺

寿福山　本智院

慶長二酉年以前者禅宗ニ而寺領弐拾八石五斗余寄附之由同三戌年右寺院上ル同五子年浄土宗ニ開基称名寺末寺ニ改替宝永四亥年大地震ニ寺地江潮入縁起証文等悉流失来暦彼是不分明候（寺社帳）

一四反田寺壱宇　浄土宗　土佐郡小高坂村

土佐郡潮江村称名末寺　専修寺

慶長年中御城下浦戸町江引越元禄十一寅年火災之節右之寺回禄其後新町江移住之処宝永四亥年大地震大潮入住居難成今之所へ引越

寺慶長年中ヨリ高知浦戸町ニ而御座候処元禄十一寅年火災以後新町南ノ端江所替被仰附候由又其後宝永四亥年大変ニ付小高坂村只今之地江引替被仰附候由伝承申候

○

「土佐国堂記抄録」

高岡東郡

一宇佐浦本町弘路観音先年沖間より拾来り建堂候処宝永四年大変之節流失翌年堂を建立候得とも観音の正躰は未揚無之

一井ノ尻浦田願寺役行者木像一尺三寸前鬼後鬼二体古来之儀ハ亥ノ年大変之節流失故不相知然ニ浦中以信心延享三年従大坂右三躰買下之安置也

一同村（○浦之内村）深浦観音七寸大変之節流寄在之此処へ取上ケ安置之

高岡西郡

一須崎村原町地蔵堂行基作津野親忠公以前之開基と云伝棟札宝永四亥年時変ニ流失故来歴不知

一同村今在家ノ二ツ石地蔵古仏京都ノ作須崎浦添山ノ麓海蔵寺之本尊ニて其旧跡有之往古天武天皇白鳳十三甲申年十月四日当国大潮騰ク民岳悉溺没旧地三拾乃束流失故海蔵寺境内闕亡即今在家へ移住す寺領五反余之趣矢倉帳ニ見末世寺及退転以本尊地蔵地下人為守護仏二ツ石ニ安置之宝永四年大変之時荒神山へ遷座其后安喜郡吉良川浦海部屋清九郎依深願九尺二間之庵を建享保廿乙卯天三月」

一同村右同地蔵堂床ノ内石地蔵宝永四年大変流死之者三回忌ニ付元文四未年為追福之上分村蓮花寺建立之

一同浦浜町阿弥陀新仏腕勢至観音右来歴不相知宝永四年大潮之節堂宇流失正徳六丑年浜町中より再興

一同村同谷下池田地蔵石仏宝永四亥年大変以前同所ノ下モ川渕ニ有之其以来当処へ安置

「亀暦通記」

十月四日土佐国大地震海潮上レ岳男女及牛馬死者不レ知二其数一

○「配流」の章

有井庄司塚　有井川村長尾山東の畝崎ニ有高さ七尺斗り大キなる五輪を中に立四方へ四尺斗りの五輪を立並へ有此塚ハ根元山の峯ニ有宝永の大地震ニ崩れ落ち散乱して今の所ニ有けるを地下人取繕ひ建置しとの言伝へ也此塚ハ親王御誓願ニて一石一字書写の経塚とも言伝へ又外に一町程西に高野堂の崩れて有是か床司の墓所ニて可有是も宝永の大変に崩落しと見へ分りかたし昔世のさわかしき比ハ此辺の里人も散々に成り可住人もなく虎伏野原と成りしとそ年を経て集りたる里人なれハ何の訳可知様もなく取違へ呼違て来ることのミ也

〔安芸郡史考〕（安岡大六著、昭30）

大浦新田　加領郷の東から羽根崎にかけて大浦があつた。土佐国郷村調査書に石高八〇石と記されているが、宝永四年（一七〇七）の大地震に陥没して、人家は加領郷の東へ移転したと伝えられる。現に加領郷の谷から東を「おうら」と云うのは大浦の転じたものだろう。

○

宝永の地震　それから百二年後の宝永四年（一七〇七）の大地震は日本記録あつて以来最大のもので上下左右にゆれ、翌朝まで千回余りの大津波がよせている。

安芸郡の被害は甚大で、甲浦は潮が山際まで入り、白浜・生見は波が入つて、家が少々流れた。それから浮津・元までは田地の三分の一、吉

良川・羽根から川北までは平野の全部に潮がおしよせ安芸平野は半分程赤野は全部潮が入り、和食は平野へ少し入つたばかりであつた。元・奈良師・浜津・耳崎の家が三十軒程流失した。

〔田野文化史〕〈安岡大六著、昭27〉

それから百二年の後、宝永四年十月四日（一七〇七年）の地震は、日本記録あつてから最大のもので上下左右にゆれ、翌朝まで十回あまりの大津波が寄せている。この時町辺の家は非常な被害を受けた。

〔安芸郡のあゆみ〕〈安岡大六著、昭24〉

宝永地震　それから百二年の後宝永四年十月四日（一七〇七年十二月二十八日）の地震は日本記録あつてから最大のもので、上下左右にゆれ翌朝まで十回あまりの大津波がよせている。安芸郡の海岸はその害多く甲浦では山まで、奈半利の浜の人家は皆流れ、潮は平野全部、安芸平野は半分

〔室戸岬町誌〕〈安岡大六著、昭28〉

（〇津呂港）宝永四年（一七〇七年）十月四日の大地震に東部海岸は一米位も隆起し、港底堀下げている。

〇

三津港の起工　三津にはもと自然の船溜りがあつたようであるが、それを多田助之亟が享保三年（一七一八年）に修築したことは、その差出によつて明らかである。

差　出

一、椎名の鯨場は宝永四年の地震から次第に浅くなり、近年は船の出入が至極不自由になつて、鯨を突留め曳き寄せるにも波立ち、鯨を渚で切るにも難儀である。しかし三津浦には船を引揚げる所もないので、網船は津呂港から通つているが、岬で廻るので掛合にも都合わるく、羽差や漁夫たちが迷惑している。だから三津浦に船入場をつくつたなれば、永く網代として続かせてゆくことができる。只今は財政手詰まりの時御願い申は恐れ多いけれども、末々網代とするに困難だから右御願申すのでよろしく御了けん下さいませ。

享保三年八月廿日

多田助之亟

御奉行所様

第一回改修　その後、三津港は浅くなつたので延享元年（一七四四年）津呂浮津両捕鯨組から、米五百石余出して改修し、船の出入に便となり口銀（税金）も増すようになつた。

〇

港が浅せて干潮には船の出入が困難となつた。だが人畜には被害が少なかつたと云われる。

〔安田文化史〕〈安岡大六著、昭27、安芸郡〉

十月大地震、津浪安田に入らず、唐浜四丁許り北へ潮入る。

〔羽根村史〕〈十兵衛会、山本武雄編、昭32、安芸郡〉

一、宝永四丁亥年十月四日晴天豊シテ午ノ一天大地震大地割シ家コワレテ被打殺或大工内エ入死婦人目舞シテ死又ハ高山下ニ住者山崩テ死モノモアリ。然所同日未ノ刻ニ俄ニ磯ヨリ沖へ三丁余モ干基儘、大潮入家財宝悉流失怠慢成者又ハ不達者成者或ハ山遠ク者共不残大潮ニ被引取死。

一、高知近辺一平之大潮石淵ヨリ城下迄大道筋船ニテ住来船賃弐十文宛

一、高知ヨリ下浦幡多郡海辺ハ不残流失ト有リ

一、浦戸御殿並種崎之御船倉此時ニ流

一、城下ヨリ東安喜浦迄大潮高ク揚リ田野安田ハ差テ不上奈半利浦野根山ノ大道下モ十二三端ノ廻船打揚ル

一、須川ヨリ東野根浦迄ノ内者潮高ク揚ラズ甲浦不残流失夫ヨリ東阿州地潮上ル由

一、羽根浦尾僧新町並船場前へ浪打キハヨリ一町半潮上ル最モ川筋四丁余揚ル

一、右同日ヨリ二十日迄大潮入候申尾僧夷町ノモノトモ後ノ一段高キ田田へ小屋作退ケリ船場ノ者共ハ山ノ下高キ所或平野山上ル

一、地震右四月ヨリ不得止明五年八九月迄昼夜軽重六七度或一二度ヅツユル・

右大変御一国流失覚

一、死　人　千八百四十四人　男女

一、過　人　九百二十六人　同上

一、潰　家　四千八百六十六軒　御船屋共

一、流　家　一万千四百七十軒　浦戸御殿

一、破損家　千七百四十二軒

江戸工言上越

其外米穀諸品損失難記愚筆

一、百四十以前慶長九申辰年大地震大潮此時ニモ当地下ニ潮不入当社御八幡御神力

宝永五戊子九月二十八日

作者　桧垣左近右衛門尉正次

筆者　桧垣新五兵衛息治堅

右ハ八幡宮ニ納

○・

之より一〇二年後宝永四年（一九〇七）十月四日の大地震は日本の記録以来最大のもので日本三十余ケ国に及び、今の十二時から二時迄の間で、一時余して津浪が翌朝迄十一度も押入って居る。

羽根浦八幡宮板書に末刻俄に磯より沖え三丁余も潮干其より大潮入る財宝尽く流失達者でない者や逃遅れた者は残らず大潮に引かれ死とあり桧垣左近右衛門の記録によると当日は晴天で大地割があり家が壊れ下敷となったり、婦人は目舞がして死んだり、山崩等で死者が相当出て居り末刻に磯より三丁余も潮が干き沢山の死者を出し、高知近辺は大潮が石淵から城下迄入り、大道筋を船で往来し船賃二十文とあり、奈半利は野根山の大道下に十二三反の廻船が打揚られ、羽根浦では尾僧新町（戒町か）船場前は浪打きわより、一町半、川筋は四丁余潮が揚り、四日から二十日迄大潮が入って居り、尾僧戒町の者は後の一段高い田に小屋を作って往み、船場の者は一段高い山の下や平野山に上って居る。余震は明五年八、九月迄日に六、七度から一、二度づゝ揺れている。

○

中　山　はもと御留山で寛保二年（一七四二）に大浦新田八十石とあるのが中山だと考えられる。八十石と言うと約八、九町で、この大浦新田は一部に宝永四年（一七〇七）の大地震に陥没して人家は加領郷に移転したと伝えられるが、これは誤だと考えられる。

〔手結浦日抄、浦中記事〕〈浜口関右衛門重敬、享保二十年筆、高知地方史研究会刊〉

○沖見坂　在二于西岡下一里人伝謂往古号二於君一□女此所ニ仆ト□シ而後有二此号一重敬按ニ附会□合不可信此所至二宝永四亥年一町続ノ往還ナリ有家六軒ニ南方晴朗而沖ヲ望見スルニ□良漁者浦人者常ニ望見天気ニ而為二産業営経一故ニ沖見坂ノ号得（○中略）今於御分一之後ニ望レ沖亥年変後ノ事云々

○手結浦湊埋申ニ付砂何方より来候　否之諸説集記

一、大変以後より湊漸るにおせ申ニ付享保九巳年に至り（○以下略）

一、大変以後御蔵の下より知切までの往還有之堤築出し有之候所今は無之候爰に得言ひほとかさる所有故口状を以演説する筈

○秀蒼一社　但御分一ノ後北波戸ニ鎮座南向、宝永四亥年十月四日ノ大潮ニ小社流出知切村へ流寄其時恵美須大黒ノ御ニ躰流失以後神体再安置云々

○手結枝浦新町

承応元辰年三月新町手結浦ニ奉願被仰付庄屋七丞年寄関右ノイ門願書

ノ控有予関右衛門宅今新町笑子堂ノ東ニ村ヲナシテ住居セシカ宝永四年亥年潮変ニ不残流失今ノ新町へ引移スト云

〔大野見村史〕〈編纂委、昭31〉

（〇年表中）

大地震、大潮十二回来る。

〔村のことども〕〈三里尋常高等学校、郷土調査部（代表　横田末雄）編、昭7〉

一、神母神社（〇貴船神社合殿、種崎）

右勧請年暦不相知、但長曽我部氏時氏より以前之由伝、又云慶長年中柏原市太夫造立之由縁趣有之候所、去る亥年大変の節古当共流失。南路志に云ふ、「いやはな神母宝永年丁亥十月六日大地震種崎亡一草一木無残溺死七百四人、其中に此の神母神社不思議に残れり、其時迄東に町有、本御畳瀬より漁場之通に頂本寺有。今之町は大変後西へ引移り」と云へり。

〇

十津の地の今昔

彼の亥の年の大地震に桂浜の住民大津浪のために溺死し死体塁々として十津中山附近に漂着す。それを南無妙の石碑のある東方石灰納屋のある地に埋葬す。故に此の谷を人谷といふ。その供養に高知の豪商川崎氏の南無妙法蓮華経の碑石を立てたるものなり。

〔土佐国旧事大集上〕

青竜寺

弘法大師一夜建立、忠義公御再興宝永地震堂床潅へ崩レ正徳二壬辰年二月豊隆公御建立昔ノ堂床ヨリ五間余西脇ニ立ツ、什物不動板一枚（但弘法当開基ノ時龍崎赤浜ノ沖ノ岩ニ海上平隠ノ為メ切リ付ケアリ毎年三月三日摺写ノ所宝永四年地震ニ右岩沈ミ不見依之板ニ写シ弘法大師作号浪切不動）

〔土佐遺事雑纂下〕

細勝寺　在二香我美郡上田村一、寺院牒云、寛永年中忠義公御代被掛御腰ヲ以木材拝領建立、其後修覆無之元禄年中退転、宝永四亥年大地震之時寺破損同子年以自力再興

〔土佐郷土志料四〕

安喜郡甲浦長十郎記事

土佐国安喜郡ノ甲浦長十郎ガ者漁人ノ伍長也（〇中略）長十郎ガ姉夫市右衛門没シ且妹夫平八患ヒ眼疾ヲ二終ニ喪フヲ一明ヲ、嘗以二市艇一為ス二生産ノ基址一ト、宝永四年丁亥十月初四大地震逆浪懐襄海郷民屋無子遺矣、於レ斯時ニ也子八ガ之市艇漂流為二鳥有一ト不堪困迫ニ乎八妻忽発シ二心疾ヲ一狂悖殊劇シ長十郎撫育シ市右衛門平八両家ニ居宅尽ク為スツ営弁且為二平八夫妻ガ一新造二市艇ヲ一以慰メ二病悩而妹ノ病竟ニ不レ愈挙家為ニ長十郎ガ見レ養ハ焉有ニ長十郎ガ族弟勝之介三太郎者一、勝之介幼失レ怙ヲ三太郎丁亥厄欲レ営ス二草廬ヲ一借米於知浦庁、長十郎於二両家一猶待二姉妹。三太郎ガ借米亦自為レ償ワ之宗族之間愉々怡々吉凶有無共ニスレ之。

〇（語釈）「伍長」五人組の組頭を漢文風に表現したものか、「孑遺」はのこり、「怙」、は父親。

〔土佐寺院誌〕〈竹崎五郎著、昭7〉

徳法寺　岡豊村中島字灘ノ宮

宝永四年火災に罹り、寺宝旧記等を焼失したといふ。

西法寺　御畳瀬村字西法寺

宝永四亥年津浪のため旧記流失して、由緒は詳かでない。

善法寺　池川町土居

元と高知材木町に在り、元禄十一年十月六日焼亡、全十二年第四世日習

の代、本寺要法寺第十一世日受これを高知新町に遷し再興、宝永四年十月四日大変の節流失、第五世雅園院の代同八年五月本寺要法寺第十三世日純又今の地に移して再興した。明治三十三年二月十日現在の地に移転した。

青龍寺　宇佐町龍一六三、一六四番

僧空海の開基で、七巨剝の一である。宝永四年、海嘯の厄に逢ひ旧記悉く流失して由緒は詳かでない。

円教寺　須崎町字刈谷

延享二乙丑年七月二十二日創立、僧龍観の開基である。宝永四丁亥十月津浪の為旧記流失して由緒は詳かでない。

正念寺　宇佐町字中町一、八〇二

長宗我部氏の臣山本磯之進なるもの大阪落城後僧となり当寺を開創した。慶長十六年中興乗栄、寺号許可を得、正念寺と号した。宝永四年激浪の為旧記流失して由緒は今に詳かでない。

清宝寺　宿毛町宿毛

もと本郡坂ノ下村にあつたが、慶長年間宿毛村池松屋布に移転した。宝永四年激浪の為め旧記流失して、開基年暦未詳である。

○右のほか宝永年次の棟札をもつ寺院は次の通り、すなわち寺名、所在棟札に現われた宝永年月を記すと

- 観音堂、大杉村立川上名字千本、7－Ⅺ
- 地蔵堂、大杉村尾生字忌、7－Ⅸ
- 観音堂、大杉村津家字松葉、6－Ⅺ
- 観音堂、大杉村中村大王字イタバシ、宝永九年創立。
- 阿弥陀堂、東豊永村西峯字土居、宝永七年
- 阿弥陀堂、東豊永村西峰字ウシロ、宝永五年
- 大師堂、佐川町字阿弥陀堂、7－Ⅷ－1再建

〔拝当家年代略記〕〈宮地仲枝編〉

※『宝永四年十月四日大地震津波御国中大破損死人千四百四十四人江戸へ御届御使者山内主馬差立』（Ⅱ－104）

宝永四年十一月廿七日御奉書御国大地震ニ付来年御参勤御免

宝永五年去冬富士山焼灰取除役金四千五十二両可被出旨台命有

宝永四年十二月

地震破損ニ付万事御省略御書付出ル諸士他国御国共奉公用ノ為物成廿分一被召上

宝永四年十二月御郡御普請御山御浦代官五役一支配郷浦居役十二人被仰付岡田又兵衛郡代トシテ頭取被仰付

〔高知県史下〕〈津村久茂編、昭26〉

十月四日には大地震があつて津浪がおこり家屋流失千六十七軒・倒壊五千六百八軒・死者八千八百四十四人・損田四万五千百七十余石・米の流失二万二千二十余石その他損害甚大であつた。

〔北川文書〕〈「高知県史・近世史料編」所収、安芸郡野根郷〉

宝永四年亥ノ十月四日之地震大潮ニ付国中之痛

覚

※『一　流家壱万千百七拾軒

浦戸御殿・御船倉幷御役屋敷・浦戸御分一屋・御米蔵・御番所

又ハ郷浦之民家・寺社共。

一　潰家四千八百六拾六軒

御船屋幷侍屋敷・民家・浦郷寺方共。

一　破損家千七百四拾弐軒

御船屋、赤岡よりのね迄道筋御殿幷分一屋共、又侍屋敷・民家堂社共。

一　死人千八百四拾四人　男女

一　過人九百弐拾六人男女

一　流死牛馬五百四拾弐疋

一　過牛六疋

一　流失之米穀弐万四千弐百四拾弐石
一　ぬれ米穀壱万六千七百六拾四石
一　流失之塩四百八拾石
一　同茶三百三拾丸
一　同鰹節五拾万八千節
一　流失幷破損船七百六拾八艘、但御手船幷商船・漁船又ハ艀船共
一　流失網四百三拾九帳
一　浦々塩焼道具無レ所残流失
一　流失材木五万四千六百本
一　同保佐・松節共六百八拾三艘荷
　但拾端帆之積り
一　起炭弐拾艘荷
　右同断
一　損田四万五千百七拾石ほと
一　非関・川除堤破損四千百九拾ケ所
一　流失板橋百八拾八ケ所
一　同覚九拾艘
一　同井流六拾七艘
一　亡所之浦六拾壱ケ所
一　半亡所浦四ケ所
一　亡所ノ郷四拾弐ケ村
一　半亡所之郷三拾弐ケ所
一　山分山崩畑作之雑穀類大分損失
一　湊三ケ所大破、其外御国中往還道筋及二破損一、往来人不自由之
　所数ケ所。』（Ⅱ－114）

　宝永五年子ノ九月朔日ニ書写

○「聞出雑話」

一　宝永四亥年十月四日地震、津波、人亡、人家・田畑破損之事、上
より　大公義へ御届ニ相成、旧記写浦々庄屋ニ有。
　但以前と此度之異事とハ何れか兄か弟ナルカと知ルべし。
　右安政二酉年二月廿二日川村隠居より廻り写。

〔奈半利町史考〕〈安岡大六著、昭28〉

なお元禄十三年（一七〇〇年）の御国絵図によると、羽根崎附近に大浦村（新田石高八十石）があつたが、宝永四年（一七〇七年）の大地震で津波のために人家が流れ、そこの人々は他に移転した。現に加領郷の谷の東方を、おうらと云うのは大浦の名残りだろう。

○

桜花山善照寺（堅横町乙一六六七番地）

宝永四年（一七〇七年）十月四日、大地震の時、大潮のために寺院や町家が流失或は大破し、藩から来た使者の宿舎がなかつたので、自力で寺堂を修理し使者を宿泊させた。

仏迎山浄閑院西蓮寺（正覚寺の前の畑の処）南路志に、「浄土宗京都知恩院末で、開基は不明だが、天正年中から住職が連続して伝えていた。古は善照寺の南方の西（町役場の処）にあつたが、宝永四年の大地震の際に流失し、奈半利郷長田へ移転していたが、元文二年（一七三七年）元の地床へ建立された。」とある。

○

宝永四年（一七〇七年）十月四日の地震は、地震記録があつてからの最大のもので、土地が上下左右にゆれ、翌朝まで十回の大津波が寄せ、浜辺はもとより、堅横町、西町に波が打ちよせ、大円寺を始め多くの家が流れ、潰家も大分あつた。

〔室戸町誌〕〈編集委、昭37〉

尚前記「港番久保野家に伝わる書」などを典拠として記録した久保野繁馬の著「室戸港沿革史」によると、室津港の深さは次の通り記録されている。

宝永ノ地震（一七〇七）前

満潮　港内　一丈四尺　　港口　一丈二尺
干潮　〃　八尺五寸　　〃　六尺五寸

宝暦九年（一七五九）
満潮　港内　八尺七寸　　港口　六尺九寸
干潮　〃　三尺六寸　　〃　二尺二寸

安永七年の「磯辺のもくず」には、室津の港の状況を
宝永四年丁亥の変に由り、港口に大石現われ、現在干潮にも水深一尺を剰すのみにて、船舶出入の大支障となる。

〔高知県香美郡立田村誌〕〈宮地美彦編、昭13〉
所謂ゐの大変である。（二三二年前）此年は立田村の被害も相当大きく、上咥内の竹が端堤防もきれ東西の田地も残らず損田となつて長く免租になつた様子である。此から十一年後の享保三戌年以来の旧記中に「蔵福島、立田村御普請詰十五ケ年間御米四萬石余の御積り場所」とあるを見ても「竹が端堤防復旧工事が如何大仕事で村民若痛難渋の程が察せられる。南路志に此時の大地震で種崎一村亡所となる、溺死者七百余人云々とあるも、立田村のことを記したものは見当らない、古老の伝へに宝永四年の地震は激震で微震はなほ半年はかりも絶えざつたと云ふことである。又此時の海嘯は前浜と下島の海浜切戸を押切り西は琴平山の東麓を浸し、猶は北流して立田往還まで来たとのことである。

〔前浜村誌〕〈浜田善一著、大5〉
因に記す、西代は元公家前付近なりしが宝永の大変に人家流失して今の所に遷りしなり。

○
本堂寺、元田村山極楽院本堂寺と称す
元本堂坊と称せり、南路志寺院帳等に宝永四年大潮に堂宇流失せしため開基年月詳かならさるやう記せるも正興寺第十三世堯快の隠居せしものか。

○
宝永四年十月四日大大地震、南路志に種崎一村亡所と為る、溺死者七百四人海嘯のため一草一木も残るこれとなし其の中に神母祠一宇不思議にも残れり民家は旧村の西へ移すとあり、本村の如きも多大の被害なりしなるべきも記録の拠るべきものなし、古老伝説に云ふ宝永四年大地震の海嘯は当村三嶋村下島の海浜切戸を押切り西は浜改田の低地を打越し北流して立田村往還に至りしとぞ現今村役場の辺りには人家ありしものが当時の海嘯の為に流失又は半潰れの災害を受け住民は浜分の砂丘又は里分の高地西代と称する所へ移転せしとぞ微震は半年計りも絶へざりしよし

〔高知県香美郡立田村、上咥内提要三〕〈宮地美彦著、昭15〉
宝永四丁亥年大洪水アリ此時竹カ端堤決潰シ田畑悉ク荒地トナリ後竹ケ端堤防ノ普請ヲ永年継続シテ漸ク完成セリ

〔斗賀野村史〕〈明神健太郎編、昭29、佐川町〉
こけ石（落石の意）西組栗林山の中腹にある大岩、昔時二度の地震に再度落下したという。

○都司注　宝永、安政の地震であろう。

〔日本の地震と津波〕〈沢村武雄著、昭42〉
物部川河口に近い吉原は隆起したと伝えられているが、
「浜並松の外に古田出る。畦の形顕然たり…中略…三、四百年来一丈位の地中に埋れし田一旦勃然隆起す。非常のことというべし。」
とあり、古田が津波によって、上部の土砂を剥ぎ洗われて現われたものか、隆起との関係がすこぶるあいまいで、これをもって広い地域の隆起運動の一部と見なすことは早計である。

〔山田文化小史〕〈鏡野小学校創立六十年紀念会編、代表米岡猛馬、昭

9〉
四年十月四日、山田に大地震あり。山崩れ地裂け屋舎顚覆し民物驚走す
（秦山集）

〔奴田原泉氏文書〕〈橋詰延寿刊、史談117、昭42、「北川文書」との異同に注意〉
（橋詰注）南国市後免町東町二七七番地奴田原泉氏所蔵の古文書で、幅十三センチ、長さ二メートルの紙に次の通りに認めてある。
宝永四年亥十月四日地震就大塩流失破損覚
一　流失家壱万千九拾三軒内
　壱軒　浦戸御殿
　八拾九軒　浦分一屋御米蔵御番所共残る壱万九百六拾二軒民家
　　内　五百拾七軒　郷
　　五千八百六軒浦
一　流家　四千八百六拾六軒
　　内　五軒御船屋
　　百七軒侍屋敷
　残る四千七百三拾軒民家
　　内　二千二拾二軒　町
　　千九百九拾四軒　郷
　　七百拾四軒　浦
　　弐拾軒　寺
一　破損家千七百四拾二軒
　　内　三拾五軒御船屋
　　拾弐軒　赤岡より野根迄道筋幷御船屋　分一屋共
　　九拾三軒　侍屋敷
　残る千五百九拾八軒　民家
　　内　七拾五軒町　此外小破損家残り無是
　　千五百弐拾三軒　浦
　　四軒　寺社
一　死人千八百四拾四人
　　内　五百六拾壱人　男
　　千二百八拾三人　女
一　過人　九百弐拾六人
　　内　八百九人　男
　　百拾七人　女
一　流死牛馬五百四拾二疋
　　内　百三拾八疋　牛
　　三百七拾四疋　馬
一　過牛，六疋
一　流失米穀　弐万四千弐百四拾二石
　　内　米　壱万四千百八拾四石
　　もみ　七千九百四拾石
　　麦　千九百九拾二石
　　大豆　百弐拾六石
一　濡米穀　壱万六千七百六拾四石
　　内　米　八千四百拾八石
　　もみ　八千二百三拾一石
　　麦　百拾五石
一　流失塩　四百八拾石
　　同鰹節五拾万八千節
一　流失幷破損船七百六拾八艘
　　内　百七拾二艘　御手船
　　百三拾六艘　売船
　　四百六拾艘　猟船幷艀（ヒラダ）船共
一　流失　網四百三拾九帖
一　浦々塩焼道具不残流失
一　流失保佐松節共六百八拾三艘但壱艘拾端帆のつもり

一　流失材木　五万四千六百本
一　同　墨炭　弐拾艘　但拾端帆
一　損田　四万五千百七拾二石余
一　井関川除堤破損四千九百九ケ所
一　流失板橋百八拾八ケ所
一　同懸樋　九拾弐挺
一　同井留　六拾七挺（〇井留は「ユル」とよむ）
一　亡所浦六拾壱ケ所
一　半亡所浦　四ケ所
一　山分の山くづれ畑作ざつこく類大分損失仕候
一　湊　三ケ所大破損其外御函中往来道すぢ及破損往来不自由に御座候
　処数ケ所有之候也

右は亥ノ十月四日
　大地震ニ付右之通に御座候　以上

〔土佐国古代編年史料〕〈「高知県史、古代編」所収〉
大港ハ、コシ方長岡郡十市ノ浜ノアタリニアリシトセシト見エテ、元禄年間桂井素菴ガ望大港ハ長岡ノ郡十市蚊居田村ノ東畔ニアリショシ云、ソノ後享保年安養寺禾磨ト云人、土佐幽考ヲ著シテ、ソレニモナホ大港ハ長岡ノ郡十市ノ浜興二池ノ浜一之堺、有レ称二古港一処上蓋是也、中古為二怒浪一所レ没、トシルセリ、シカレドモ、十市ノ浜ハ浦戸ヨリワヅカ一里バカリアレバ、浦戸ヨリ出シ船ノ、更ニ泊リシトセンコト、オホツカナキコトナリ、サレバソノ後野見嶺南ト云者、香美ノ郡下島村ト云処ニ住メリシガ、曲ニ地ヲ見定メ、熟考ヘテ、我廬ノ直南前浜ト云ル地イニシヘノ大港ノ蹤ナリト云テ、安永年中ソノ図説ヲ著シタリシガ、ナホイブカル人モアリシ趣ナルヲ、果シテイニシ文化十二年乙亥ノ洪水ニカノ嶺南ガ云シ、港ノ蹤ノ砂石ヲ海ニ流シ、広ク大キナル凹ノ地ニナリテ、マコトニ港ノサマアラハレタリシガ、ソノ後自ラニ沙入リテ、又本ノゴトク潰レシトゾ、シカレバ大港ハ嶺南ガ説ニヨルベシ、カクテ岡本信古ガ云シハ、大港ノ所在ハ、嶺南カイヘリシニイサゝカタガフコトナシ、但シ香美ノ郡物部川ノ川末ノ地、ソレナルヨシニイヘド、モトハ今ノ物部川ノ外、西ノ方ニ別ニ川アリテ、前浜久枝村ノ間ヲ流シテ海ニ入レリシカバ、其ノ流ノ末ノ弘クナリシ処、スナハチ大ミナトニテ、今ノ物部川ニハアラズ、ヨクセズバマガヒヌベシ、サルハソノ川スヂヲ、寛〻年中ニ、当国ノ執政野中氏埋メテ、ソノ水ヲ今ノ物部川ニ落シ、一派ノ流トナシ、跡ヲ田地トセシヨリ、大港ハ自ニ浜レシナルベシ、サルニヨリテ、ソノ所ヲ古港ト称ヒ、沙地凹ニナリテアリシヲ、寛永四年丁亥ノ高潮ニ、右凹ノ処ノ砂打ナガサレ、海ト一ツニナリ、港ノ如クナリテアリシガ、ヤウヤウ沙入テ本ノゴトクナリシヲ、又シモ文化ノ洪水ニ砂ナガレ、港ノ如クナリタリシヲ、又ヤウヤウ潰レシナリ、サレバ大ミナトハ、今ノ物部川筋ヨリハ、酉ノ方ニアリシナリトイヘリ、（〇寛はママ）

〔船匠・岡家記録〕〈岡毅筆、史談48〉
宝永四亥年十月四日地大に震ひ種崎全浦高潮の没する所となり、吾祖代々の記録挙で此の災に流亡すと云ふ。

〇
後白河院より頂戴の巻物私迄（四郎右衛門迄）持続候処、宝永四亥年大変に流失仕候事。

〇
一、宝永四年十月四日の変に、午中刻大地震　未中刻高潮　古代の祭文家伝曲尺系譜の巻物証文等悉く流失、五台山の野人拾ひかくす由、本主に返し遺はす旨を示し下さるべしと頻りに郡所に訟屢々穿鑿有りと雖も、瀬戸流の一巻を返し、其の外の書は後年に家に現再之を整ふ。
一、宝永四亥年十年大浪ニ爾来種崎浦御船蔵御用ニ無之、依右場所長浜横浜村可然哉、何も御見□、依之仁井田村ニ相極り。
（〇次は頂本寺過去帳）
　円寂真空現震位　　岡　源右衛門妻

〔浦戸港の沿革と其の史蹟〕〈松山秀美著、史談22、昭2〉

然るに宝永四年十月四日の震災は、土佐の受けた損害最も甚大であつて、此の時種崎村の横町新崎町と唱ふる人家は海嘯激浪の為に沈没して海となり、折角前年営繕の箇所も亦全部海中に崩れ込み、加之年々夏期の大雨洪水に、土佐長岡吾川三郡の諸川が吐出した土砂は、一雨一水毎に港口に堆積し、自然内外は浅淤して港内は殆んど湖水と化せんとした。斯の如く一国の呑吐港の閉塞は人躰の咽喉を梗塞したる如く、全く国内の衰微を来すの怖れがあつたので、震災後の藩庁は財政の窮乏を顧るの暇なく、直ちに土工を起して復旧の修築営繕を完了し、漸く昔日の形勢を挽回して爾来安政元年まで百四十八年間、航海者や漁民などは何れも安堵して其の業に従った。

〔潮江村誌〕〈西本明四編、昭4〉

宝永四年十月四日未の上刻土佐国大地震あり大地鳴動して山岳崩れ河川埋れ道路欠裂して人家倒壊し　死するもの総て千八百四十四人負傷者九百二十六人而て震後未の下刻より津浪打寄すること尽夜実に十一度に及へり中にも第三番の津浪は最も高く山の半服に達し人家多くは破壊漂流せり高知の如きは住宅倉庫大抵倒壊し或は破損せざるなく真如寺橋より北方江ノ口常通寺橋迄潮水浸入し来り潮江下知江ノ口秦泉寺比島布師田大津下田衣笠に至る迄一面洋々たる入海となるに至る本村の如き当時潮水山迄来りて干満なく人畜産物の損傷寡からざりしと称すれども記録の存するなきか故に其詳細は得て知るべきなし。

○

善法寺

旧と東西十八間南北十一間の式地を有せり今梅ケ辻電鉄倉庫のあるあたり即ち是也開山は宝寿院日秀にして本尊釈迦如来、多宝如来、日蓮大師を安置せり元と高知材木町にありしか元禄十一年十月六日回禄の災に罹り十二年下知寺町へ移転す宝永四年十月四日大地震大津浪にあい破損せり後五世稚円院旧地を藩庁に献し要法寺十三世日純師の寄附地に移せるなり。

本寺に関する記録は或は流失し或は焼亡して縁起等詳ならす。

〔土佐古事雑纂甲〕〈県図、K270－4〉

有井庄司塚、有井川村長尾山東ノ畝崎ニ有、高サ七尺許大キナル五輪ヲ中ニ立四方ヘ四尺許ノ五輪ヲ立並ヘ有此塚ハ根元山ノ岸ニ有宝永ノ大地震ニ崩レ落チ散乱シテ今ノ所ニ有ケルヲ地下人取繕ヒ建置シトノ言伝ヘ也、此塚ハ親王御誓願ニテ一石一字書写ノ経塚トモ言伝ヘ又外ニ一町程西ニ高野堂ノ崩レテ有是カ庄司ノ墓所ニテ可有力是モ宝永ノ大変ニ崩落シト見ヘ分リカタシ。

（○「土佐遺事雑纂」同一文あり）

〔同書乙〕

（○「土佐日記」に現われる「大港」の所在を論ずる文中）、岡本信古ガ云ヒシハ大港ノ所在ハ嶺南ガイヘリシニイサゝカタガフ事ナシ但シ香美郡物部川ノ川末ノ地ソレナルヨシニイヘレドモトハ今ノ物部川ノ外西ノ方ニ別ニ川アリ前ノ浜久枝村ノ間ヲ流レテ海ニ入レリシカバ其流ノ末ノ広クナリシ処スナハチ大港ニテ今ノ物部川ニハアラズヨクセズバマガヒヌベシサレハソノ川スヂヲ寛永年中ニ当国ノ執政野中氏埋メテ其水ヲ今ノ物部川ニ落シ一派ノ流トナシ跡ヲ田地トセシヨリ大港ハ自ニ潰レシナルヘシサルニヨリテソノ所ヲ古港ト称ヒ沙地凹ニナリテアリシヲ宝永四年丁亥ノ高潮ニ右凹ノ処ノ砂打チ流サレ海ト一ツニナリ港ノ如クニナリテアリシガヤウヤウ沙入テ本ノゴトクナリシヲ又シモ文化ノ洪水ニ砂ナガレ港ノ如クナリタリシヲ又ヤウヤウ潰レシナリ

〔森沢保如家文書〕〈桑田精一筆写、大15〉

宝永四年亥十月四日大変ノ事（○文化十三年筆）

此日ハ甚暑キ事夏ノ如シ日和ハ晴天ナリシカ四日ノ午ノ上刻ヨリ大地

震シテ地トビワタル程ワレ井戸ノ水干上リ申ウチ大潮ケシカラズタヽヘ来ル事（四日昼八ツ時ナリ）山ノゴトシ寄来ル潮ヨリハ引汐甚アラク滝ノナカレノ如ク如此ナルコト三度ナリ此時覚悟ヨリ米ナド袋ニ入用意シテ山ヘ逃上リシカ一度ノ潮ニテ又二番来ルコトハシラズ、我家ヘ再ビ立帰リ銭金着用其外道具等取ニ帰リニ番潮ニ引流サレテ死スルモノ多シ、欲を捨引地山ナドヘ上リ申モノハタスカリ申也漁業ニ沖ヘ参申船只沖合ノ潮大キナルウネリハカリニテ箇様ノ事トモシラズ戻リテ浦中ノ有様人家コトコトク引流シ方角サヘシレズアキレタルコトト云伝フ。

九十九浦流失イタシ死人数限リナシ大地ワレ山々大石崩レ在々人死積リシレズ、御城石垣クヅレ十一日ノ朝迄地震昼夜何度ハ不知也、紀州摂州大浪打人死多し我考ヘ申処其昔段々大潮入申事皆大地震毎ニ致スモノト見ヘタリ、其心得シテマサカノ時ハ引地山ヘ逃行ガヨシ外ノ山ノ手ハ福島ノ方ヨリ潮廻リ込ミテ山ヘ行カタシ尤引地山ノ方モ川尻ヨリ潮廻リ込候得共山ノ手近キ故勝手ヨシ。

○

地震記

千時宝永四年丁亥十月四日昼午未間ヨリ大地震後浦々不及申大浪四方江入込シ家人共流死スルコト夥ク右地震ニ付道筋割ルコト幅壱尺斗山分ナドハ大岩崩レ来山人迷惑スル也、右地震後井戸泉水悉ク切人々水飢ニナリ明ル子年二月大雨降井戸泉水増シ人々水ニ悦フナリ、（○中略）

右地震亥十月四日ヨリ明ル二月迄震フルコト不止初メノ如ク強キハナシ或ハ日ニ五六度ヅヽ大筒ノ鳴カ如ク響キ初ハ鳴度々ニ地震スルコトナリ後々ハ鳴迄ニテ地震セヌコトモ有、右地震大浪ノ入シ節ハ御城下トモ在郷共山々江逃上リ昼夜篝ヲ灯シ三四日モ山上スル人夥シク尤其夜ハ何モ山ニ住居スルナリ、夜ルノケシキモノスサマシク地震否大浪他国モ同前ノ由尤浪華等ハ夥ク死人有ト言同年同時ヨリ富士山焼ルコト三日也。

同十一月廿六日晩ヨリ砂降出同十二月三日平地ヘ五六寸斗積ル同年十月ヨリ明ル正月頃迄諸方ニ蚊柱立事多シ山々或ハ松木ノ上ヘ立上ル長サ三間或ハ四間斗リ立上ルナリ何レ地震ノ年並ハ暖気ニシテ寒気不知言伝同年九月十五日御銀札通用止ル右地震ノ後富士山ノ脇江小山出来ル則宝永山ト名付ルト云、右地震ノ後十月十二月初メヨリ平地ニ白髪ノ如ク成ルモノ出ル長サ三寸斗尤家ノ上ニモ出ル也、右地震五ケ年之内震ル也、尤鳴ル事ハ不絶鳴ナリ都合六ケ年折々震事ハ不止也。

右高岡村今村権平蔵書ト云フ。

○

宝永四年亥年十月四日未ノ上刻大地震同時ノ中刻ニ静否浦ヘ大潮両三度入三度目潮就中高ク当宮社檀流失天之変気者奈何成哉乍恐御神力ニモ御叶ヒ不給ヤ然トモ無勿体茂御本尊無御恙御厨子ニ為籠浦内灰方村流給フ処明ル五日夜ニ入彼村ノ百姓磯辺ニ往来折節不思儀御光リ暉不審ニ在立寄見レハ御厨子ナリ乍恐彼ノ村百姓奉抱揚諸方触ヲナシ井尻氏子早速立越青竜寺江頼奉還云々

右大震否静一両日ノ内ハ一刻ニ四五度程斗翌子ノ年中少々之地震不絶事

右之書付無鳴村神職方ニ在リト云

安政四己年十一月中旬写置

岡俊蔵正道蔵書

〔柏井氏難行録〕へ山ノ内文庫、県図、K453－9、この文書の解読にさいしては、宇佐美龍夫教授のご支援をえた。〉

享保甲寅三己の日

国君参勤として高知の城発駕し給ふ予は船廻りの数につらなり城東農人町といふ所より船にのりおりし日の黄昏に浦戸の港に到りぬふねは国君の乗らせ為ふ御船なれは高きいやしきおのおの一ふねにのり侍りぬおともに旅泊の身にしおれは千里港遠きを憂ひみなみな往事をのミ語りぬ予か家族宝永丁亥の年此浦のとなりなる種崎浦にて大地震網（○ママ）波の変災に逢ひ予綱波の中より希有にして命をのかれし事をいふ皆其次第を具に語れとしきりにしいられありしむかしを思ひ出れはむねふさかり言葉しふりてやうやうその大概をのふといふ

宝永四年丁亥十月四日家族病ありて家にあり日午にちかつくころ地大に震ひ家転倒せんとす家内男女老たるも若きもみな後園にはしり出つ予は家族と共に南の庭に出て門外の浜に出つ。宅種崎の南門外は則の端にあり海畔なり海中を見れは満たる潮忽かれて潮薄となり百尋の海底も徒跣にてつたりすへし躰なり東西海畔およひ市中を見れは平地のふるひ動きてうねとなり谷となり地の升降する事只大海の浪打か如し家族老母の事を思ひ後園にいたらん事を欲して道なし東隣に明屋鋪あり其境にいたれは垣堅固にして通行を得ず予垣の上にのほり梅樹の枝をよぢて家族をしてつゝきのほらしめつゝに後園にいたる事を得こゝにて家族に逢ぬ地震ふるハ猶やます老祖母渭曰これなやと云ものなりかゝる折しも藪中に入事也とて家族を伴ひて北藪の中に入りぬ暫時有て東方海畔の町より呼て曰大浪市中に入みな山にいたるへしと爰にをゐて家族五歳になる女子を背負ひ老たる母の手を引予か兄専五郎此年十二歳ハ母を伴ひ弟三五郎此年二歳奴婢に命して懐抱きしめ後園を出んとす家兄転倒之家に入重代の刀を取出これをおひ予にも腰刀をあたへて一同に西隣同司国裏門沢七右衛門を出仁井田の山をこゝろさし御座町といふ所に出北にむかひ逃行事凡十余町其逃行人に稲麻竹葦のことく逃るもの何かわしらずかなしき声を出しわめきておほえす跡にしりぞく事一町はかり忽然として潮足下に溢れ其色黒くして煤のことく塵芥小砂を捲出其水先電光のことく忽綱波溢来其声雷霆の地に落ることく逃行数千の人の声ハ只わあわあといふて蚊虻のことく是東北池十市の海畔より綱波溢来る其音也須臾の間に綱波頭上をひたし人皆沈弱す予は行手の左なる生垣にのほり流れ来れる板戸にのぼらんとして乗得す忽浪中に沈む浪中にてたれとハしらず人に流れかゝりぬ其人の腰刀をつかミとりはつし又とりつきてはなれしと帯にしつかりと取付ぬ浪中の事なれば誰とハしらずしかるに其人の家族なり綱波溢行漸潮家族の肩をひたすはかりに成ぬ其時家族かへりミ見れば老母破屋のほとりにありて危き躰也家族おとろき其所へゆかんと欲すれ共背中に女子を負ひたりゆかされハ母をうしなふせんかたなく負たる女子を浪中に投捨浪をしのきかろうして母のもとにいたりぬ破屋にあからんとすれと潮はむねをはらふはかりにて腰はおもく予かいたきつきぬる事ハしらすして塵芥の身をまとうかとわれをして押はなたんとする事たひたひなり家族破屋にあからんとしてかへりミ見れは腰なるものは我子也おとろきたすけんとて地下に足を付れは予ハ又浪中に沈むせんすべなき所に人ありて家族を見付忽来りて先予をして破屋の上に投上け家族をもたすけ上らしむ家族老母のもとに到り老母を破屋の上堅固の所にいさなひ行て死をまぬかれぬ潮ハ須臾のうちに引落て平地となりぬ此難に逢し所行手の左ハ船倉のうしろにて堤有亦船有触寄ありそれゆへ海へ流れいてたるなりこゝにて家内のもの皆散乱して見へす即今甍をならへし数千の官舎民屋皆流没し庭樹垣墻或流或倒忽白砂となりぬ老母命を助かりし破屋ハ其所に蔵と船の弥平次ト云者土蔵大樹とありてこれに流れかゝ里し家也其破屋におされ半死半生のもの五七人あり家族これをたすけんと欲して人を集め其家をやぶらしむといへども大家倒れて棟梁かさなりぬれはたやすく除かたくして皆眼下に命をおとしぬ家族及老母家内の行へを尋見んとてぬれたる衣類をぬき予をしてこれを守らしめ四方にめくり行く只奴婢二人を尋得たり予母及兄弟の行方しれすぼうぜんとしてせんすべなし時に又大潮入ると呼るゆへ一所に相集り家族老母をすゝめてとかく仁井田の山に逃へしといふ老母のいわく是天地滅亡の時来ると見へたり何地にゆきて死をのかれんや只此所をうこかすして溺死せんのミと家族しるて曰のかるへきほとは遁れ見其行先にてとにもかくにも成へしと老母をすゝめ肩にかけ予か手を引てゆかんとすしかるに予比時纔に九歳綱波に沈て万死をのかれ身体つかれて一歩も引事を得す家僕三蔵と云譜代之者肩にかけゆかんとすれとかれも又足立得す綱波入るとよバわれとも一同にみな足ひかれされば其なやミたとへていわんかたなし只管砂中を一歩はあゆミ一歩はまろひ千苦万労して漸仁井田の五本松にいたりぬ其時綱波又うち寄浜を洗ひ土砂を崩すされとも此所ハ地高くして潮入来らす荊棘をしのきたとりたとりてはうはう聖導寺といふ寺にいたりぬ聖導寺真言宗仁井田山下ニアリ家族住持に乞て白米一嚢を得て母にすゝむ此寺江も潮入来るとてさわきぬればせんかたなく又山によちのほり浦戸種崎三畳瀬の浦をかへり見れは数千の家皆流没して白砂となりぬ大海を見れば沙浜半里斗の際は赤土をたてたるごとくそれより滄

海の方ハ其色煤のごとく神無月の神なれハほとなく日も山の端に入なんとすとかく寺に下りて庭上に畳をならへ居侍りぬ扨浦戸三畳瀬の山上山下に火をとほし親は子をたつね子は親をよびさけぶ其音たとへていわんかたなし五日といふになれとももとより朝飯とて喰へしものもなくやゝ阿りて一人役人申出けるハ大坂へ積登る米船きのふ浦戸を出帆せし船此大変ゆへ又港に只今漕戻りぬと家族其人に命していうやりはやく其米取揚貴となく賤きとなくそれそれにわかちあとふべし後難はわか身一人に蒙り申へくはやくとりはからへとそれよりほとなく俵物とり来清導寺の庭上にて石をならへ鍋を求てうすつかぬ米を炊けとも飯とならすされともそれをもてうへをしのきぬ其日の昼過大津氏（喜衛門ト云）務右衛門（且譜代家僕）尋来りぬ　大津氏喜衛門高知より仁井田にゆかんとしてふねなし潮江より西孕山にいたり山内監物永屋々々下りふねを求れともふねなし海畔に一丈斗の宍科あり両人それにとり乗舟として、嵩口をもて櫂とし其後高知御仕置て東孕の磯に漕寄せ其所より山を越清導寺に尋来りぬるなり　其所より家族国沢氏へ書状来各存命之段聞伝候弥其所にふミ留り相勤候様ニとの御奉行所おほせのよしなり其舟使に高橋氏（務兵衛ト云）尋来ければ老母予ハ務兵衛に附して古郷久万村にかへし家族は其儘清導寺に侍りぬ

嗚呼家族いかなる前世の宿業にや高祖父以来百十有余年住刻し古郷を離れ此浦に来住する事纔に七年にしてかゝる変災に逢妻子四人一時に流没しぬ任役によ里て住ぬる宅と思へは

君の為に身を致すの忠清とやいふへしなげきてもあま里ある事なり

柏井貞明録之

吉凶禍福莫非命也而人之所自取亦有不可誣者焉柏井貞寿君四世之祖実慎君在種崎之官舎宝永丁亥十月四日地大震海嘯遽至家人四人溺歿君及令堂次子貞明君三人得免後貞明君因人問海嘯之変叙其事為一巻名曰柏井氏難行録其年沢之書有故蔵於好円谷先生之家今茲貞寿君切請得之因謄写此巻以報之請予書其事於巻尾予読ミ再三毎至実慎君捨所負子而救令堂之危難及散官粟与飢民曰檀命之罪我任之未嘗不舎書而感歎也宜哉君之税万死而救母存子家系永世之基一無所欠及其所自取非所謂順受其正命者也耶嗚呼君之孝慈如此然而貞明君以来三也無子皆養宗族某子以継家亦非天乎至貞寿君有螽斯之慶又将使子孫永蔵此書時省不忘此予之所以不辞此予之所以不辞其請也于昔弘化甲辰嘉平月竹邨修拝撰

〔北町誌〕〈松野尾章行著、明治13、県図〉

（〇前欠）地震ニ悉く倒る御城ハ全シ、潮ハ町ハ真如寺橋より北見通し限り江ノ口堀すぢは常通寺橋限り潮江川ハ常通寺橋限り新町下知ハ海トナル云々又初メ打入シ日より定潮トナリ聊モ干満ナシ潮江下知新町江ノ口より一宮布師田大津介良下田衣笠迄一般の海ニナリ舟ナラテハ通路ナシ

（〇右の記事のあとに享保十二年、一七二七年の記事が続くので右の記事は宝永地震の記事であると推定する。）

〇

西頭横堀と下知用水の間に南北する四丁間を井手端或ハ井手側と称す又東方北鉄砲町より南新町に至るの地元足軽者居住するを以此もまた鉄砲町と称せしに元禄十一年城下火災の節回禄にかかる、数寺に地をこゝに給ハり移転せしむ故にまた新町新寺町とも称す宝永四年地震の後下知下外輪の堤防破却し潮汐溢するの憂あるより諸寺また各所ニ散移すと云。尋て潮田村の人戸をここに移すに至れり、此時南北ニ内堤ヲ築く是ハ宝永（〇後欠）

〇

新寺町

新町東詰、元禄十一年城下大火之節焼亡にかゝる数寺を此地に移さしむ依て新寺町と称す、宝永震後諸寺また各所に転移す、寺院各号等今詳細なりかたし

（〇頭書別筆）今□名ニ、大善寺真楽寺長泉寺永国寺等の名称寺跡□□。

〔野中兼山〕〈川添陽著、昭40〉

此の大港たる物部川口は堤防の創築並に古川敷埋立と同時に不用とな

り棄てられてより、南部は埋まり砂浜となりて跡方もなきに至り只凹字形の地面と古港の名を存するのみとなつたが、川口としての最終より時代も遠からぬ宝永四年十月四日の午の刻（正午）全国に大地震あり此時地震と之に伴ふ津浪の為に各種の被害甚大は勿論で、土佐のみにて流失家屋二萬余戸あり、浦戸の御殿も災害に罹つたといふ時であるが、此の時の津浪の為に当所の凹字形の所が真先きに海水の浸入乗り越の所となり、たけり狂ふた高き潮水が怒号して物音凄ましく襲ひ来る勢は何に譬へん様もなき荒ましさで、元の川口たる関係上忽ち元の港に相似たる入海と変化した久枝の室岡山が此の時の避難所であつたと謂はる。それよりして年月幾程もなく港口は元の砂浜となり例の凹字形の越戸となりて其儘久しき歳月を経過したが、其後宝永の大地震より百九年目の文化十二年乙亥七月八日に大洪水あり、所謂亥の年の洪水又は亥の大変と称して、河川整理の築堤以来空前の大災害で、片地以南沿岸の村落は殆んど皆め尽され、多大の損害を被つたことは勿論、其暴威の為に堤防決潰頗る多く、下流の村落は恰も海の如く、避難所たる久枝の山は恰も島の如くで、此の横溢満々たる大水の吐け口が古港の門字形越戸であつた。先には海水漲流が彼方より襲来し、今回は淡水濁流が此方より勢凄ましく滔々として奔出するその結果如何に、遂に又々元の川尻の如くなり、元の大港の如く変化した。爾後又々元の砂浜となりて歳月を経過し約百二十ケ年間何等の異変なく依然古港又は切れ戸の称を存して今日に至つたものである。大港に関する旧記の一節を左に抄出す。

今の物部川の外西の方に別に用ありて前浜久枝村の間を流れて海に入れりしかば其流れの末の弘くなりし所すなはち大湊にて今の物部川にはあらずよくせずばまがひぬべしさるは其用を寛永年間に当国の執政野中殿埋めてその水を今の物部川に落して一派の流しとなし跡を田地とせしより大港は自然潰れしなるべしさるによりてその港を古湊と称ひ沙地凹になりてありしを宝永四年丁亥の高潮に右凹の所の砂打ち流され海と一つになりしがやうやう沙入れて本の如くなりしを又しも文化の洪水に砂ながれ港の如くなりしを又やうやう潰れしなりされば大港は今の物部川よりは西の方にありしなり云々

〔高知県史〕〈編纂委、昭33〉

地震や津浪のために郷、浦分で荒廃した場所は百三箇所、半荒廃した場所三十六箇所に及び「山分崩、畑作雑穀過分損失積り不知」と記されている。道路の損傷も甚大で、翌五年（一七〇八）正月四日から山田橋と石淵の間が復旧した。「比島より山田橋までは大部分繕ひ、塩田橋の詰より比島の人家までの堤は新に築成して潮留す」とも見え、これが宝永堤と呼ばれた。

〔高知市誌〕〈市役所編、大9、大15改〉

六代　豊隆公

宝永四年十月四日大地震あり、国中、被害多く死者千八百余人に及ぶ、高知市内は海嘯数回侵入して非常の惨害を受けたり、因て幕府に請て明年参勤の礼を免ぜられ、又国中に令して万事省略の令を発す、花鉾を禁止せしも此時の事なり。

○

宝永四年十月四日、未ノ上刻（午後二時）より土佐国中大地震起り、郡市の官舎民屋多く転倒して人畜の死傷算なく惨状を極む、同下刻（午後三時）より海嘯襲来して海辺の家屋人畜流亡するもの数を知らず、寅の刻（午前四時）までの間に昼夜十一回に及び、就中第三回の海嘯最も高くして惨害非常なり、此時高知市中は高二丈の海嘯松ケ鼻を打越し巴塘を決潰して新町、下知方面より侵入す、其勢実に凄しく、暫時にして西は小高坂、井口、北は久万、万々、泰泉寺の山根に及び、市内は真如寺橋より北へ見通し限り、江ノ口川筋は常通寺橋限り、一望渺茫たる大海原となる。就中下知、新町方面は巴塘決潰の鋒先に当りしを以て、水勢猛烈を極め損害特に多く。以後十数日間は潮水減退せざりしといふ、此震災の損害土佐国中を通じて流家一万余戸、潰家四千八百余戸、死者千八百余人に及び高知市内の潰家のみにても二千百二十九戸に及ぶといふ

而して市内の流家及死傷人員等は不明とり、是を宝永の大変といふ、因に記す下知の宝永堤は此震災後に築きしものなり。

○
細工町

昔は横町西側に大超寺といふ寺院あり、一豊公入城当時の建立にして称名寺の末寺なりしが、元禄の大火に焼失して新町寺町に移り、後、寛永年間又小高坂に移りしが廃寺の時代詳かならず、

○右の記事中、寛永というのは元禄より古い年号であるので、宝永の誤りと考える。

鉄砲町

鉄砲町四町五町の間、東西百十四間、南北百七十一間の地は、元禄十一年大火災の後、市中の寺院を再興して此所に集合し新寺町と名づく、当時寺院の数十八ケ寺あり、後僅に九年を経て宝永四年大震の時海嘯の為破壊流亡して再興しがたきにより、寺院は小高坂村新寺町及潮江等に退転せり。

真宗寺（真宗本願寺派）浦戸町に在り、

当寺は元土佐国吾川郡浦戸村に在り、（○中略）元禄十一年城府火災の際に類焼せるを以て土佐郡新町に移る、宝永四年地震潮溢の災ありて壱宇庫裏悉皆流失せるに、再び浦戸町に移す、享保四年堂宇再建（檀家の作事とす）安政元年地震火災あり市街延焼堂宇亦焼失、安政四年仮堂並庫裏を建設すと云ふ、遍照寺（真宗本願寺派）浦戸町に在り、本尊は阿弥陀仏なり、本寺は古来屢々水火の災に罹りて旧記なく縁起詳ならず、

善法寺（日蓮宗）、潮江土居西森に在り、本尊は釈迦多宝なり、開基年暦不詳旧と材木に町に在り、元禄十一年焼亡同十二年第四世日習代本寺要法寺第十一世日受高知新町に移し再興宝永四年十月四日地震潮溢れて流込第五世雅円院代同八年五月本寺要法寺十三世日純今の地に移し再興す、現時は只寺号を存するのみ。

〔土佐の伝説〕〈桂井和雄著、昭26〉

荻千軒のこと

今から数百年前、高岡郡宇佐郷の荻には、たくさんの人家があったといわれ、これを荻千軒と伝えております。（○「萩」であろう。）

ところが、宝永亥の年（或は白鳳十三年とも申します）の大地震のため、ことごとく陥没して海になってしまったと言われ、その時やっとのことで逃げてきて、宇佐に住んだものが多く、屋号を荻屋と呼んで残っているのは、その時の人たちであると言われております。

〔四国八十八ケ所〕〈平幡良雄、昭44〉

第三十六番、青竜寺（○宇佐町）

弘仁六年（八一五）嵯峨天皇に奏聞して一宇を建て、自刻の浪切不動明王を安置し、恩師を慕って寺名を青龍寺とした。その後宝永四年（一七〇七）の大津波で本堂以外の建物をすべて失ったが、嘉永四年（一八五一）には山内藩主によって護摩堂、鐘楼門、客殿が建てられた。

〔介良風土記〕〈橋詰延寿著、高知市〉

源信山浄福寺正林院で、高知市小高坂にある浄土宗の寺である。（○中略）その後、下地（知）の寺町へ引き移る。

さらに宝永四年（一七〇七）大地震の時津浪が入り、その後、今の地（小津高校のところ）に引き移った。ふるい記録がないのでくわしいことはわからない。

（○智福山西念寺願正院は）

慶長年中に高知の紺屋町に移り、元禄十一年（一六九八）火事。のち下知の寺町へうつる。宝永四年（一七〇七）の大変にあい、今の寺町（小津高校一帯の地）に引き移った。

〔高知市沿革略誌〕〈松野尾章行著・浜田真澄校・県図、山ノ内文庫〉

一細工町

此町ハ帯屋町より入りて数間にして横町に出つ横町ハ南ハ種崎町に界し北ハ蓮池町に接せり縦町ハ北種崎町と蓮池町との中間にて横町より入る一町五間の町なり東ハ播磨屋橋筋を跨きて新市町につゝけり昔ハ諸職人の多く住居する所なりしより町の名となれり（〇中略）大超寺ハ元禄十一年の火災に罹り一旦新町に移り宝永四年重て小高坂村ニ移転せしかいつ廃寺となりしや詳ならす（〇以下略）

一紺屋町

真光寺ハ一向宗京都仏光寺の末寺にて慶長十五年乗春といふ僧開山して浦戸にありしか後年此地に移りたりしを元禄の火災に罹り新町に移りしが宝永四年の地震に破壊し此時小高坂村に移り天明二年寅八月西本願寺の末となると云。西念寺ハ知福山願生院と称し京都智音院の末寺にて往昔ハ種崎にありしか慶長中此所ニ移したりしも是も真光寺と同しく回禄の災に罹り翌十二年の春新町ニ移り宝永四年再び小高坂村に移し維新後廃寺となれり（〇以下略）

一新市町

此町ハ紺屋町材木町の北に並行し西ハ細工町に界し東ハ横堀を渡りて南新町に入る東西三町二十三間の町なり（〇中略）寛文九年図ニ東一町南側西角に真慶寺又二町東の南側に浄福寺といふ寺あり浄福寺ハ浄土宗ニて源信山王院と号し旧豊岡ニあり後浦戸に移し又此町ニ移し元禄の火災後新町ニ移し宝永の地震後更ニ又小高坂村に移す真慶寺ハ浄福寺の末にて同しく新町に移し又小高坂村に移しとか後ニ寺とも廃寺となれり（〇以下略）

一蓮池町

此町ハ新市町の北に並ひ西ハ追手筋に接し東ハ堀川を以て中新町と堺を分つ四町四十六間の町なり（中略）又二町目の北側西角ニハ安養院といふ寺ありし安養院ハ真言宗常通寺の末寺にて旧ハ吾川郡長浜村ニありて良福寺と称へしを後に安養院と改め慶長中此町に移し元禄の火災後一旦新町に移し宝永地震の後廿代町に移せり（中略）山泉寺ハ院号を念仏院と号し浄土宗称名寺末ニていつの頃にか蓮池村より此町に移し元禄の火災に新町に移転し宝永の地震の後に小高坂村ニ移せり三寺とも今皆廃寺となれり」又大善寺といふハ摂州天満の定専坊末寺の蓮池村にありしか是も檀家と共に此町に移りしか元禄の火災後一旦新町ニ移し宝永の地震後再ひ此町に移しとか享保十二年同十六年両囲禄の災に罹り終に江ノ口村ニ移し今に存せり（中略）

一北新町

中新町の北にあり此町ハ西ハ井手渕より入り東ハ下知村に界し東西四町一間二尺なり（中略）二町目南側に京仏光寺の末寺に真澄寺といふ一向宗の寺ありしか明治維新の後廃寺となるか今ハなし此寺昔ハ同町の北側ニありしか元禄の火災ニより新町の新寺町ニ移し宝永地震ニより再比ニ移せり文化文政年間の住侶に大信といへるかあり儒学にこと通し門人多かりしと云

（中略）

其新に寺町と成る地ハ東西百十四間南北百七十一間寺数十八ケ寺なり其内五ケ寺ハ公物立十三ケ年ハ免許と云へり今寺院牒によりて調査するに十九ケ寺あり其寺名ハ西念寺浄福寺真慶寺真宗寺遍照寺長泉寺真光寺真証寺真立寺金剛院善法寺大超寺山泉寺専修寺大善寺安養院十楽寺蓮乗院五法院なり」其後宝永四年の地震に此寺院倒壊し加ふるに下知の外堤決潰し潮汐浸漬して再興なりかたきにより其寺々ハ多く小高坂村の伊達兵部謫居の跡地及潮江村其余各村町に移転せしめたり小高坂村なるハ今の第二中学校の所にて近く維新後迄寺町と称へて寺院立つゝきたるハ比所の寺を移したるもの也（〇以下略）

附録

（〇前略）円満寺ハ本願寺末寺ニて桜馬場にありしが又廃寺となれり寺町ハ今の第二中学校の所在地なり最初伊達兵部か配所なりしか其没せし後明地となれりしか元禄十一戊寅年市街に大火ありし時回禄にかゝりし寺院を市の新町に集め寺町と称せしか間もなく宝永四丁亥年に大地震ありて其寺々破壊し且潮汐浸入しけれハ更ニ其寺々を潮江と　所等に移転せしめ因て寺町と称せり、といふ其時此所に移りし寺ハ真光

寺西念寺ニ寺共年暦等紺屋町の条に出　浄福寺真慶寺ニ寺新市町条出　専修寺浦戸町条出　山泉寺蓮池町条出　欣浄院とす欣浄院ハ旧ハ旭村の石立ニありて元和二丙辰年の開基と云」。（〇中略）

一下知村

高知市の東に続く村なり村中ニ新町農人町常磐町稲荷新地等の字ありて戸数七百人口三千七百十四人を有せり此村の境域ハ江ノ口川を跨りて其南北ニ及へり旧ハ村名を塩田村と唱へて人家ハ江ノ口川の北なる此島に至る中堤の外ニありしか宝永四年の大地震ニ潮汐浸入セしかハ遂に新町古寺町の跡ニ移れり

さて下知といふ村名を考ふるに此村ハ昔上知寄下知寄との二つに分れたりしもの、如く而して上知寄といふハ市の農人町と田渕との間に深くさし入りたる辺なりしと思ハるゝなり今市の小学校のある南の方ハ昔ハ知寄か渕といひて深き渕なりといひ伝へたり此所より流るゝ溝渠を今も知寄川といふハ昔の名残なるへし此地に対へる下知寄といふハ中堤辺より東一円をいひしなるべし享保四年丁亥九月畝丘樹下神社の棟札に下知塩田村庄屋惣中とあるによりて思ふに素下知寄の地に村を開きしにより下知塩田村ともいひしなるべし其后延享の頃までハ塩田村の村名物に見えたり単に下知とあらためしハいつの頃にか有けむさたかならねと或ハ宝永の地震の後塩田村を古寺町に移せし時の事ならむかさて下知といふハ下知寄を下略したるものなるへくおもへと知寄といふことハいかなる意味にやあらむ今ハ考へかたし。此村の北鉄砲町より南三ツ頭に貫く中堤ハ宝永の地震の後正徳元辛卯年に大ニ修築せしものにて宝永堤を称すきを宝永堤と名つけしハ地震の記念の為めなれハ正徳堤と云ふへ正徳に築造せしものなれ名つけしも　此地震に外輪堤も悉皆破壊せしか正徳元年大土切を起し修築せり其普請等用牒によれハ此村の為六郡　幡多郡ハ除之に割付し人付実に弐拾五万九千三百六十三人三歩の多きに上れり而して此内にて寺町内堤より東角折廻り南渡場より農人町番所迄延長合千九百九十二間横平等四間高平等一間四寸五歩土壱万弐千五百五十坪地取幷船士とも取役土場拵役とも坪ニ平等十二人九歩余土切の大なしりを想ふべし」（〇以下略）。

〔高知市史跡めぐり〕〈橋詰延寿著、昭41〉

宝　永　堤

鉄砲町から南三つ頭に貫く中の堤である。宝永四年（一七〇七）の地震でつぶれたので、正徳元年（一七一一）修築した。地震を記念する名称であろう。

下　知

土佐郡の一村であったが大正十五年（昭和元年一九二六）市に合併した。昔は塩田村という。（延享（一七四四－一七四七）の項まで）

中堤は宝永四年の大地震に潮害でつぶれた。

〔高知県の歴史散歩〕〈県高校社会科教育研究会、昭49〉

入野駅の南一帯にひろがる県立公園入野松原は、砂浜に幅五五〇メートル、長さ四キロにわたって数万本の松がならび、樹姿が独特の景観をなすため、昭和三年高知県の名勝に指定された。四〇〇年ほどむかし、長宗我部元親の老臣で中村城監となった谷忠兵衛忠澄が囚人を使って松原に補植し、さらに一七〇七（宝永四）年の大潮以後毎年一家族ごとに野生の黒松六本ずつを植えさせたのがしげって今日の美林となった。

〇

下ノ加江の中心集落から国道三二一号線にわかれて、海岸線を東へ四キロ、バスで約一〇分ゆくと布という小村落がある。この村落の北のはずれ、松ケ鼻というところに、天文年間（一五三二～五四）一条氏の後見役として豪勇をうたわれた立石右京進、口碑に立石摂津守といわれる布・立石村の領主の墓がある。墓は宝永の大地震で流失したものを一七四四（延享元）年、村人の手で再建したものだ。村人はその戒名から、〝高岳さん〟とよんでいる。

〔宇佐町誌〕〈「南海大震災史」（広木三郎編、昭24、所収）〉

宝永四丁亥年十月四日、大地震と共に海嘯が起り、惨状を極めた。其日は一天晴れ渡り、十月というに単物、帷子を着る程の暖さであつた。午の上刻（午前十一時）より大地震動し初むるや、其騒動は実に言語に絶した。地軸の砕くると共に山岳崩れ落ちて、土煙は天に揚り、凄惨の状、何に譬へんようもなく、只驚愕と恐怖のため心も空に、親は子を呼び、子は親を求めて泣き叫ぶ有様は目も当てられず、やがて未の上刻（午後一時）より大潮入り来り、人家は悉く流されて、溺死する者数を知らず、死屍累々として恰も筏を組めるが如く水上に浮ぶさま、まことに悲惨の極みであつた。

〔南海大震災誌〕〈広木三郎編、昭24〉

高岡郡須崎町北横町の堀川に、メガネ橋という石橋がある。その橋の袂に、お伊勢の松と呼ぶ大松が、最近まであつた。幹の廻り二丈余樹齢四百余年という巨木であつたが、何故にその松をお伊勢の松と名付けたか茲に面白い伝説がある。かの宝永の大地震の節、堀川の橋は全部落ちて流れ、川より南に住む人々の内、逃げ遅れたものは西へ西へと駈けこの松の辺りまで殺到して来た。津浪は容赦なく押し寄せて来る人の命も危く見えた。咄嗟の場合、この松へ登れる丈の者は登つた。然し女子供は意の如くならない。只救いを求めて泣き叫ぶのであつた。この時現われたのがその当時村でも有名な大力のお伊勢と呼ぶ（宝永の大地震史には此のあたりに住居せし渋谷金の王と云える力士とある。）大兵怪力の男である。（或は女ともいふ）見る々々内に片つぱしから向う岸へほうり投げて数多の人々を助け最後には自分は其の松に挙ぢ登つて命を拾つたというので、それより此の松をお伊勢の松と名付け、その伝説と共に有名となつたとのことである。このような大津浪でも高い山の頂へまで登るにも及ばないこの松でも助かつている。今回の大地震でも街の高い処の住家には津浪は押し寄せていないのである。

〔新編物語藩史十〕〈草雍金四郎著、昭51〉

宝永元年（一七〇四）（〇山内規重は）奉行職に進んだが、経世の才を振う間もなく、豊隆が藩主となるに及び一時失脚した。宝永の大地震で規重は江戸に赴き、幕府に実情を報告して参勤交代を免ぜられたが、豊隆は強いて出府しようとしたので、諫止して職を免ぜられたのである。

〔高吾北文化史・郷土史編〕〈佐川町誌編纂委・明神健太郎編、昭33、高岡郡〉

同四年十月四日大地震起り、佐川近郷にも所々崩壊など多少の被害があつたが、須崎浦には津波が押よせ深尾家の船倉に潮水浸入し御用乗船や小舟を流した。

〔土佐古今の地震〕〈寺石正路著、土佐史談会、大12〉

稲尾氏記録に曰く大地震の年は随分暖なる冬にて十一月十二月迄は衣類も袷一つかたびら一つにても暮す事年明けても寒不レ参右の砂（大地震後二月目程余震己まざる中に富士山破裂し所謂る宝永山を生ずこれは宝永山の灰の事にて同本中前段の所に其記事見ゆ）十一月二十六日より降り十二月三日迄降り平地に五六寸程積上る

又曰く宝永四年九月十日十一月迄長日でり十二月八日の夜雪降り高さ二尺程積上る尤三日降り其内大寒限なし右地震三年ばかり少々づゝこゆるなり

又曰く大地震明る二月迄ゆりやまず初の如く強くはなし大筒など打つ如し日々五度六度夜も同じ也大地鳴る度々に地震するなり

又曰く明る五年十月迄地震折々尤も鳴る事はたへず鳴れども右度々に地震は無之

又曰く右大地震より井戸泉水迄もきれ人々難義する事なり明る二月中旬頃より大雨降り水出で人々喜び申すなり

羽根浦八幡宮板書に曰く未刻俄に磯より沖へ三丁余も潮干其より大潮入る財宝尽く流失不二達一者成者或山遠き者は残らず大潮に引取られ死

長岡郡海浜

柏井難行録に曰く忽津波溢来る其声雷霆の地に落つる如く是東北十市の海畔より津浪溢れ来る音なり須臾にして頭上を浸し人皆沈溺す

高知市

聞出文盲に曰く高智地形より二丈も潮高き程なり大御門前迄海の様に成る

高岡郡海浜

丁亥変記（津野山庄屋筆記）に曰く未の上刻より大潮溢れ入り人家尽く流れ死人筏を組が如し晝夜潮入り来る事明け五日の暁迄十二度なり

志和浦竹村孫平筆記に曰く良暫く経て大海打の波聳へて津浪に打入人家の財宝悉く浪中に沈貴賤男女に限らず波に漂ふて苦む事多し

又安芸郡田野村福留氏記録によれば高潮は三年を経て治定せしといへば大震後三余年の間は小震に連れ海嘯も猶已まぎりなり

○

文化年間彼の本邦の沿海測量を以て有名なる地学の泰斗伊能忠敬翁が同測量用を以て土佐国に来りしとき右の事実につき国人と問答せる佳談あり其要領を左に録す

宮崎竹助高門が筆記に曰く

文化五年戌辰余測量使伊能勘山に随行す宝永四年の変東は地高くなり西は低くなりしといふ談に及ぶ使答て曰く地の高下することは国々に多し怪むに足らず且南東に海を受ける国は漸々に浜出来て海地となり北西に海を受けたる国々は浜減て地海となる吹上の地紀伊国人の知る所其外諸所に多し奇談なれば記す云々

宝永地震に就て阿波国海部郡鞆浦に記念碑あり其銘文の写左の如しといふ

宝永四年、丁亥之冬、十月四日、未時、地大震、乍海潮湧出、丈余、蕩々襄レ陵、反覆三次而止、然我浦無二一人死者一、可レ謂レ幸矣、後之遭二大変一者、豫慮二海潮之変一、而避焉則可也、

余前年同地に漫遊せしことありしも当時はかるゝ石碑の存在を聞かざりしかば之を里人に尋ねず今其存否を確む能はずといふ

〔須崎村誌〕（古屋造作編、明治12）

陸墓

津野孫次郎親忠城内ノ鎮護ナリシカ鰯振ノ城郭守衛ノ為メ今ノ社地ニ移スト云フ、長宗我部元親ノ嫡男信親豊後国大友退治ノ節信親初陣ナル故元親無覚束同行出陣アリテ無難ニ帰陣有ラン事ヲ当社ニ祈願シ鎧一領武者人形一体奉納ス、宝永四年丁亥海嘯ニ什物尽ク流失ス、鉢咽輪ノミ残レリ。

○

錦浦山円竜寺

村ノ卯ノ方位ニ在リ、往古同郡久礼村ニ在リシカ宝永海嘯ノ後本村ニ転セシト云、古記尽ク流失シテ年号干支等未詳即今開祖祐誓ト名ツクル位碑アルノミ。

○

阿弥陀堂、古老伝、宝永津浪以前ハ村ノ卯辰ノ方位字上浜町ニ西願寺ト名ツクル寺床ナリシ、住僧侶ノ頻ニ死亡スルハ西ヲ願フ名称宜シカラスト、発生寺ト改メ村ノ寅ノ方山端エ転セシト云フ、其跡東西拾五間五合南北九間三合ノ地所小堂碑石存在セリ、花蔵坊廃寺跡、一樹の老松ノミ残リテ村ノ辰ノ方位ニ畑中ニ、（〇空白、ママ）

宝永丁亥嘉永甲寅両度津浪寺地ハ海底ニ沈。

（付紙）

前略慶長五年庚子九月廿九日ニテ津野親忠自殺セシヨリ津野氏諸士是ヲ悲歎シ洲崎ニ空塋ヲ築キ菩提寺建立シ考山寺ト号シ、毎年九月廿九日同氏ノ家臣タリシ者ハ言ニ及ハス農工商漁夫ニ至ル迄厚ク祭祀セシニ宝永四年丁亥ノ津浪ニ空塋碑石モ流散セリ、大善寺廃寺跡、東西八間南北拾三間四合村ノ子方ニ同郡池ノ内村地所ニアリ、（〇中略）往古ハ本村字北古市東分ニ在リシカ宝永ノ海嘯ニ流失シテ今ノ廃寺跡ニ移スト

○

広恵薄序

宝永四年丁亥十月初四我土佐国大地震山崩地裂屋舎顚覆民物驚走食頃大潮俄至如雲奔山来平地水高丈有五尺不問遠近径格于有山処而止、大呑吐七八回民居蕩掃人物溺死不知紀極潮退三四日登高観之四望粛条無一物之在遺民岩棲谷汲僅保余喘闔国皆然而幡多郡下田浦為甚於斯時也。人皆然錯愕失惜浦人奥坂氏伝兵衛正好性好救済亟弁炊□汲樵之具及眠食雑細什物百万惜画列之、（○以下略）

〔須崎の屋号、宝永津波以前の須崎浦商家〕＜中田稔著、「須崎史談28」＞

鍛冶橋の前身播磨屋橋架橋の播磨について

三郎兵衛は『陋巷浅説』によれば、宝永元年甲申年、山本藤兵衛、吉岡屋善兵衛その他大浜氏子の有志で多の郷加茂神社の御奥を寄進している。

従って宝永津浪前既に播磨屋の屋号で、須崎浦屈指の商家だった貴重な文献である。須崎浦の貴重な文献、史料は宝永四年丁亥十月四日亥の大変で殆んど失われた。この記述は久松三助清秋のもので、後年の長谷川文書と共に、須崎では貴い文献である。

サンマより大善寺山に改葬移転した墓碑も、子孫断絶と共に一ケ所にまとめず分散放置したため、この三郎兵衛その他の墓石も失われた筈だが、残ったものでも前記の系譜が出来た。

さて、「播磨屋橋」は誰が架設したか。

恐らく三郎兵衛が最初に架橋し、亥の大変で流失、二代金助、三代藤之丞時代に架橋して、四代金八恒実以後は絶家となったと思われる。

「三代続く長者なし」栄枯盛衰常ない世の荒波に四代を以て終り、立派な墓石が昔日の盛□を無言の内に物語っている。

大津浪で殆んどの文献を失ない、享保七年以後の発生寺過去帖が商家の文献である須崎浦で、津波前の有力商家（屋号のある家）として特筆すべきである。

亥の大変で流失した橋が播磨屋の誰かにより、復元せられたと思うが安政元年寅の大変も現幼稚園の場所にあった当時の庄屋川淵専平邸の地上六尺（一、八二米）の所迄水が来たと文献にある以上、百米足らずの下流である現地の木橋は多分流失か大破したと思う。

宝永津波より安政津波迄百四十七年の年月は木橋故、度々架け代えたり修理しただろう。

寅の大変で流失若しくは大破したと思われる。この橋が播磨屋の架橋したものか、それ共当時の庄屋により公費で架橋したかは明らかでないが、村誌に「播磨屋橋」と記されている以上、この家がいつの世にか架橋したものを後世に伝えるものとして、注目に値する。

〔須崎町史〕＜「南海大震災誌」（広木三郎編、昭24）所収＞

宝永四年丁亥十月四日巳の上刻より東南方の大鳴昔と共に、大地震起れり。此日天朗かに気暖く人々単衣を纏ひたりしが変起るに及びて其騒動一方ならず、今こそ天柱の折け地維欹くるかと思ふ許りにて如何なる丈夫も歩行し難く山嶽の崩るゝ土煙四方に漲りて天地□ち晦冥稍々暫くは咫尺を弁せず為に方角を失ひし老若男女哭き叫ぶ様実に悲惨を極む。而して地震の裂罅より潮水湧き出で人家は倒れ、無難にて存するもの一軒もなし。山里の樵夫は家業の為山に行きけるにこの難に逢ひ落ち来る岩石に圧されて死する者数を知らず。未の上刻より大潮浸入し来りて人家は悉く流れ、死人筏を組みたるが如く、牛、馬、犬、猫等亦皆死す。幸ひにして山に逃げ上り辛ふじて死を免るゝ者あり。親兄弟下に流れ死するも助くる力及ばず。哭声山谷に響き渡り、惨担たる光景はよく筆紙の尽す所にあらざるなり。翌日の晩迄潮水の来り侵すこと十一回。然るに須崎の沖なる石ケ礁より沖は海上頗る静かなりしと言ふ。恰も此時角谷の山頂より眺め居たる人の話によれば、戸嶋と長者の鼻との間潮全く干き暫くは沼の如く此処に小舟に二人乗り、流れ来りしが一人は船より落ちて沼に入り行方知れず、残れる一人は舟に在りと見えしが忽ち大潮来りて小舟と共にその影だに見えずなれり。其後聞けば一人は新町の何

某、今一人は恵美須屋五右衛門にてありしと。

此地震には畿内紀州の海辺は言ふに及ばず、東は豆州箱根より、西は九州の東南岸、何れも大潮に侵され、阿波の国も亦潮高かりしと当国の中種崎より宿毛迄の内浦には大潮侵入し赤岡より東の灘辺は多少の浸水に止まりしとぞ。

須崎浦に入り来りし潮は半山川筋（新荘川）は下郷の中、天神の上四五丁の所に及び多ノ郷は加茂宮の前吾井ノ郷は為貞といふ所まで侵入せり。これらは何れも川に沿ひて侵入せしなり。土崎は在家の悉く流失し押岡、神田は之れに次ぎて人家の流失あり、池ノ内村は在家被害なく、須崎は死人四百余人あり。斯くも死人の多かりし所以を考ふるに糺池より出づる堀川の橋は地震のために落ちし所へ潮入り来り、人々渡るべき便なく、後より大勢押掛け先なる者堀川へ圧し込まれて大半死したるなり。然るに水練あるもの或は天運に叶へる者は偶々死を免れたり、此時此あたりに住居せし渋谷金の王と言へる力士大橋（今のメガネ橋）の元に来り多くの人を援けて其身は遂に伊勢の松に登りて助かりしといふ。

此時も家屋を流されたる人々は皆山に仮住居し、縁を求めて流れざる住家を頼み飢寒を凌ぐなど目もあてられぬ有様なり。大潮に家財道具、着物、食物等の流れたるを流れざる在家の者共是幸なりと理不尽に拾ひ取り罹災者の憂を顧みず、賊徒同様の振舞ありしかば官府より須崎庄屋年寄に仰せ付け屹度穿鑿せしむ。然るに隠し置きて出さざる徒多きに付被害者等在家に入り込み無断にて家宅を探し口論、闘争に及びしこと多かりき。糺の池には死人流れ集りて筏を組める如し。其中にて衣類其他にて見覚えある者はこれを証に己が身内を尋ね出せり。左もなき者は仮令父母兄弟と雖も面影変り果て求むべき便なく、却つて物凄き躰となり尋ねる術なしとて街道に泣き叫べども其甲斐なし。池中に浮沈む死体は鳶、烏之を啄む噫、何等の惨ぞ之に就ては官府より指図に従ひ、□□村刈谷の後に長さ数十間ばかりの大坑を二列に掘り、之にその屍を埋めたり。後安政三年其百五十年忌に当り古屋竹原（尉助）当町大善寺谷に碑を建て題して宝永津浪之塚と云ふ。此の変災に家を流されたる者等は飢饉に及ぶに付官府より救米を定められ男三合女二合にて三十日、或は四五十日の間其家業に就く迄給せられ、小屋掛、材木等手寄りの山より給付されたり。此大変ありて人心悄々たるに乗じ逃道の暴者盗賊の類これあるべしと官府に於ては詮議の上役人朝日奈忠蔵を須崎に遣はされたり岩永より角谷迄の間往還道筋或は海となり、或は海水溢れ、往来する能はず、即ち鳥越坂の峠より池ノ内村へ横道を作りて下分村岡本へ越す。この外笹ケ峰といふ古道を往還の道として門屋山際に通ぜり。諸役人の送りの番所も当分池ノ内村にあり、送夫の者共此処に詰めたり。翌々年の秋今在家本番所に帰る。（〇Ⅱ－116と一部類似の文あり）

〔須崎の屋号二〕〈中田稔著、昭50、「須崎史談16」〉

須崎浦商家の歴史をひもとくと、その家号の主が、当時浦（村）の主要な商家だったから、その記録は貴重な資料である。

然し須崎は本誌で度々記した通り、宝永津浪で、諸記録や建造物、その他貴重な資料が殆んど失なわれた。

商家も家屋、家財、商品の大部分を失ない、現金持参避難した少数の店もあったであろうが、貧富の序列も大きく変ったことだろう。

須崎の家号を調べる最も古い記録は、発生寺の過去帖だが、これとても津浪に流され、享保七年（一七二二）以後のものである。

〔わが故郷の故事〕〈橋本増治著、「須崎史談」昭51〉

串の浦の中ほどに、観音山という小さい森がある。頂上に観音堂があつて、その南側に小祠があるが、その由来について、祖父母から度たび聞かされた。

宝永の大地震に津波が起こり、須崎は堀川から南の逃げ遅れた人びとが、増水した堀川を渡れず、必死で助けを求めていた。そこへ長谷川弥左衛門という大変力の強い人が来て、その人たちを向う岸へ投げ渡してたくさんの人を助けた。しかし、自分は力尽きて津波に呑まれ行方不明になった。

その後、彼の着衣だけが串の浦の浜辺に打ち上げられ浦人はそれを身代りにして、ここに祀り今もその徳を慕っている。私たち悪童連もこの話を聞くと神妙に、また涙をにじませたものである。そしていつまでも私たちの心の中に、長谷川弥左衛門は生きつづけている。

〔宝永津浪溺死の塚〕○須崎市

※『此塚ハ昔宝永四年丁亥十月四日大地震して津浪起り、須崎の地にて四百余人溺死し、池の面に流れ寄り筏を組か如くなるを、池の南地に長き坑を二行に掘り、死骸を集め埋め在し、を今度百五十年忌の弔に此処に改葬するもの也。其事を営まんとする折しも、安政元年甲寅十一月五日、又大ゆりして海溢しけるが、昔の事を伝聞且記録もあれバ人々思ひ当りて、我先にと山林に逃登りけれハ、昔の如く人の損じハ無りし也、唯某中に船に乗り沖に出んとして、逆巻浪に覆されて、三十余人死たり。痛ましき事也。何なれハ衆に洩て斯ハせしかと云に、昔語の中に山に登り落かかる石にうたれ死し、沖に出たる者恙なく帰りしと云事の有を聞誤認ししもの也。早く出て沖にあるハしらす其時に当りて船出する事ハ難かるへし。戒むへき事にして、将昔の人ハ地震すれハ迚津浪の入る事を弁へす、浪の高く入来るを見るよりして逃出たれハ、おくれてかくの如き難に逢り衰にも又悲まさらんや。地震すれハ津浪は起るものと思ひて油断ハすましき事なり。されどゆり出すや否浪の入るにも非す、少の間ハあるものなれハ、ゆりの様を見計ひ、食物衣類等の用意して、扨石の落さる高処を撰ひて逃るへし。さり迚高山の頂迄登るにも及はす。今度の浪も古市神母の辺ハ屋敷の内へも入らす、昔も伊勢が松にて数人助りしといへハ、津浪とてさのみ高きものに非す。是等百五十年以来二度迄の例しなれハ、考にも成るへきなり。今茲此営を成すの印、且、後世若斯る折に逢ん人の心得にもなれかしと、衆議して石を立、其事をしるさんことを、余に請ふ。因て其荒増を挙て為に書付る者也。

安政三年丙辰十月四日　　古屋尉助　識』（Ⅱ－118）

（上段台石の裏面に次のように刻してある）

本願主　発生寺現住　智隆房松園

世話人　亀屋久蔵　鍛治活助　橋本屋吉左衛門

この塚は大善寺墓地の下、旧道の傍にあり、県下では珍しいもので、須崎市の文化財に指定されている。

〔発生寺の変遷〕〈市川豊八著、昭48、「須崎史談七」〉

ただ、古屋造作著「慶長年度ヨリ宝永大変以前ニ於ケル須崎地図」には、西願寺が現在の青木町九の一植田玩具店付近になっている。この地図の津野は、安永須崎古地図の孝山寺の位置と一致するので、孝山寺の位置は慶長から安永まで変っていないのは確かなようです。

○

洲崎の長宗我部地検帳にでている番匠西内氏の末孫であるといわれる西内豊氏（鍛治橋のもとで電器商経営）の家に伝わる話によると、西内氏の先祖は、もと、植木氏の先祖とともに、現在の住吉神社の西の方に住んでいたが、宝永の津波後、現在の位置に移住したようです。

現在の西内氏宅の北には、鉄砲鍛冶植木氏の鍛冶屋敷もあったので、この付近を今でも、鍛冶町といっているが、これは安永須崎古地図にでてくる職人町とは違うようです。西内氏の伝承からすると、宝永津浪以前には、現住吉神社の西の方、つまり、浜町二丁目、六・七・八の付近に西内、植木氏の所謂職人が住んでいたことが推測される。

○

この職人町を現浜町二丁目六、七、八付近と仮定すると、職人町の北孝山寺の南にあった西願寺の位置は「慶長年度ヨリ宝永大変以前ニ於ケル須崎地図」の記載と一致する。つまり、西願寺は元禄時代は勿論、いや、天正から宝永まで、現在の青木町の九の一付近にあったことになる。

ところが、武市佐市郎氏は、「土佐の史蹟名勝」で、「発生寺は、元竜樹山西願寺と称へ、浜町にあった。宝永地震前この鍛治町に移った。

旧本堂は元禄二年八月の建築である。（中略）大正三年に改築した。（以下略）」と、述べている。

発生寺過去帳には、「宝永津浪ニヨリ過去帳古記録ヲ一切流失シタ」と、記されているので、西願寺が宝永津浪の難にあったことはわかるが津浪当時、すでに現在の位置に移っていたかどうかは知るこちができない。

また、これには、寺の移転のことは記されていないが

寛保二年（一七四二）壬戌寺建立

寛延元年（一七四八）三月十九日

法印栄伝西願寺一代

と、でている。註（ ）内は筆者記入

それで、わたしは、武市氏の元禄二年の旧本堂建築は、寛保二年の誤りで、過去帳にある「寛保二年壬戌寺建立」の記事を寺の移転建立と考えたいのです。

つまり、西願寺は、天正検地当時から、現在の青木町九の一付近にあったが、宝永の大変にあい、過去帳薄を一切流失してしまい、その後、寛保二年栄伝住職のとき、現在の位置に移転したものと思う。

〔渋谷金王と金目石〕〈堀内仁蔵　、昭48、「須崎史談六」〉

刀士、渋谷金王（こんのう）

一七〇七年、宝永四年十月四日、己の上刻（午前十時頃）突如、東南方に当っての大鳴音とともに大地震が起り、やがて大津波が須崎湾に襲来した。――宝永の大地震である。これはその規模の大きさ、災害の激甚さから今も私たちに新な恐怖と要心を呼びかけているが、古い記録を読むと、あたかも「ボンベイ最後の日」を見るようで、この世の生き地獄が大写しに再現され、身の毛もよだつ思いがする。

（前略）須崎は死人四百余人あり。斯くも死人の多かりし所以を考ふるに、糺池より出づる堀川の橋は、地震のため落ちし処へ潮入り来り、人々渡るべき便なく、後より大勢押しかけ、先きなる者、堀川へ圧し込まれて大半死したるなり。然るに水練あるもの、或は天運に叶える者は、たまたま死を免れたり、

この時、このあたりに住居せし、渋谷金王と言える力士、大橋の元に来たり、多くの人を援け、その身は遂に伊勢の松に上りて助かりしと言う。」

と、ある。

私がここでとり上げたいのは、文末にある力士金王のことである。残念なことに、この金王の活躍の記述は斯く簡単で具体的でないので「多くの人を援け……」だけの文字で推理しなければならない。

「阿修羅の形相の金王が、堀川大橋のたもとに立って、逃げまどう老幼男女に「ここでむざむざ川に命を落すより、天命あれば、怪我しても助かれ。」と叫びつつ、一人また一人と、頭上高くさし上げては、対岸の糺目がけて投げ飛ばした。まことに仁王か夜叉の金剛力であった。」

「次第に推し迫ってくる津波に、もうこれまでと金王は近くの伊勢の松（今の法務局のところに戦後まで残っていた）によじ登って助かった。」とは父の話。

大善寺の「宝永津波溺死の塚」には、この碑の建立をした願主たちの願望がこめられているが、私は今、眼鏡橋を「堀川大橋」と改称し、この橋のたもとに、力士金王が、仁王立ちとなって避難の人を投げようとするポーズの銅像を建てて、勇壮の権化であるこの力士の美談を永く仰ぎたたえたいと夢みるものである。

〔陋巷浅説〕〈久松三助清秋筆、「須崎史談21」所収〉

予も又髫童のころ母が語りしにハ、われ若キ時分赤崎の前に潮満ちたる時ハ其上の山路を通りし事も有りつるが、連々干潟と成りて、赤崎の前に潮浜を拵へけれ共、高潮の時山際まで満ち来り潮浜に妨げあれば、其構へに漸々と潮を留め、それより次第に築出し今の往来の道は古の海中に有りつる事を語りし也。又先考先妣が語りし昔の跡の噺より遥かの後に予少年のころ也しが、岩永の谷川のすへ海蔵寺なり。

（海蔵寺ト云フハ多ノ郷ト吾井郷トノ昇ノ谷川アリテ其水ハ西崎ノ方へ流レ落ツル也。又其谷川ソリ西ハ岩永山ナリ。此ノ山岬ヲ海蔵寺ト云フ也。）

其海蔵寺の前に広き入江ありけるが、其の江の辺に今より四、五十間も巽の方の海中に当って老木の松二木有有りつる也。今此松を考ふるに先考の少年の比まで其の辺より西の方へ行く。今の道筋ハ大間までの間ハ深き蒼海にて、洲崎浦の漁人来りて岩永口或ハ赤崎の沖、或ハ大門の内にて網を引き其外色々の諸漁を仕りたる所也しと語りき。由って今之を考ふるに二本の松ハ此海中に上古より島ありて其島もいつとなく崩れたる其の跡に残りたる松にて有る可きかとも思へども去りながら海中に有る島ハ巌高く波かかざる所にこそ、草木も生じての島也。草木のなきは海中にては磊（イワ）と云へり。予が見たりつる物ハ岩に生じたる松にてもなく水のただよう田畔にあり。若し又古ハ此嶋ありと云ハバたとひ小嶋にして是を後に取避くべしと思ふとも、いかでかたやすく□徒の力及ばん。然らばいつまでも有るべきに其の跡とも見えず、葭原の広江の辺に在りしは不審也。

古老の物語にも此事を聞かざりし也。岩永口より西の崎の前惣分、但此地高ハ覚えざる也。寛永十五寅の春より寺西権之助之を築く云ふ事旧記に見へたり。然れば、宝永四年亥の年までわずか百余年にして此辺の潮田悉く元の海になりたり。

○

（○賀茂神社の宝物を列挙したあと）

是ハ頼顕別当覚付ノ写シナリケルガ其後宝永四年ノ亥ノ大変ニ悉ク流失ス。

寛政十二庚申十月廿八日写之

岡田相模正　藤原重賢　所持。

〔宝永津波と八幡宮ミコシ漂流の実記〕へ中田稔著、昭49、「須崎史談14」〉

私が現に総代をしている、須崎八幡宮に社宝として保存されている木札の事実を、橋田義寿先生の読解したものをもとに記してみる。

(一)　製作者川淵太惣兵衛

十二号に川淵家の略譜を記したが、その二代目の庄屋太次右衛門（後太惣兵衛と改む）は、元禄十四年より宝暦元年迄、五十一年も長期勤続した人で、就任七年目の宝永四年十月四日「亥の大変」は、記録の不備な「白鳳」は兎に角として、土佐では古今最大級の地震津波であった。

暗黒の中、全村が水没、建物は流失、破壊、一夜明けると、ヘドロに埋った家屋、家財の残骸、地震津波の予備知識のほとんどなかった人々が、闇のなかを逃げ後れての溺死体、惨状実に目もあてられない有様だったであろう。

夜盗略奪など横行、物騒な世相の中、藩より役人が派遣され、救援、復旧措置などに努力されたが、南海地震の時と異り、交通、通信共に不如意、物資の少ない時代であったので物言ひ語にも、随分悩まされたであろう。

藩全土の大被災であったので、外よりの救助にはそうたよれず、最高責任者として長らく日夜身命をとして、救援及び復旧に奮闘を続けた庄屋川淵太惣兵衛の功績は、実に偉大といわなければならない。

彼はこの事実を津波後十年、復旧成った享保二年（一七一七）二標八（ニシモト）良兵衛の見事な筆蹟で、木札に記録さし、現に須崎八幡宮に、社宝として保存されている。

(二)　地震津波の被害

木札表面（扉絵参照）

宝永四丁亥十月四日時変大潮入須崎本村浦分共亡所有増記

一、損田　五百九拾弐石　須崎本村　内百九拾石余　本田
　　四百弐石　新田

一、流家　四百三拾弐軒　内弐百十六軒　本村
　　弐百十六軒　浦分

一、流失　三百三拾一人　内男女百九十六人　浦人

男女百弐拾九人　本村
男六人　他国者

一、寺　三カ所　大善寺　西願寺　孝山寺
一、堂社　十ケ所
八幡宮二社（本殿、西鴨神社）
若宮一社（住吉神社）、夷堂一宇（東古市町）
阿弥陀堂一宇（青木町西内一郎氏宅前領木商店裏昭和の初発生寺上薫的堂に合祀）
観音堂一宇、地蔵堂二宇（原町）
虚空蔵堂一宇（東古市町福永一郎酒店裏の小路）
大師堂一宇（西町）（注カッコ内は筆者記入）

以　上

一、御制札場幷御分一屋御米蔵廻船漁船網猟具地下人財物不残
一、潮高サ四方山根ヨリ二間斗近郷ハ上分遅越関限、吾井郷ハ鯛ノ川関限、押岡ハ在所中、神田ハ八王寺奥限入
一、地下人当時及即餓国守より飯領被為成下日数十日御救請面々小屋懸古城山下一両年令住居段々町割仕堀より南住宅其後辰九月御地詰地面相極り安座仕也
一、八幡宮再興宮林立枯百本余申請売立幷氏子加奉銭成就則棟札明白也
一、御輿従豆州子九月十一日御下向奉納畢此送状志州鳥羽船宿斉藤林之介方より指下故永く伝氏子為祈万歳此裏板写置本紙各別封置所也
右此寄進施主洲崎本村住人本村浦共支配庄屋
川淵太次右衛門好維　好維
奉掛宝前者也

敬　白

享保二丁酉八月吉辰日
（側面）二標八良兵衛　書之

右の文をわかり易く書くと大体次のようだろう。

一、役所の制札場、即ち今日の掲示場、漁師の売上に対する歩合（今日の税金）をとる役所、御米蔵、廻送船、漁船、魚網、猟具など一般庶民の財産は流失して、残っていない。
一、潮の高さは四方の山の元から一丈二尺（三、七米）近郷は上分では遅越の関、吾井郷は鯛ノ川の関、押岡は全部、神田は八王寺の奥迄浸水した。
一、一般庶民は当時食糧はなく、食うに困った。国守より救援として、十日分の食糧が支給され、城山の下に小屋掛をして、しばし居住さしてもらった。
その後次第に南の住宅に町割をし、五年目の正徳二年（一七一二）九月迄に、住居やその他の建物及び土地の割振も決定し、皆が安住した。
一、八幡宮の再興は、境内の神木が倒れたり、塩づかりやヘドロに埋れて、百本余立枯した。これを申請して売り氏子の奉納金と合わせて、再建したことは棟札に明白にしてある。
一、御輿は伊豆へゆき、宝永五年九月十一日御下向、元の宮に納めた。
この送状は志州鳥羽浦の船宿斉藤林之助よりのもので永く氏子に伝え、万歳を祈るため、この裏板に写しおき、本送状は別封して保管してある。

(三)　ミコシ伊豆へ漂流前後の状況

ミコシが伊豆に流れ、後に八幡宮に戻ったことは、須崎では古老の中では知っている人がある。私も父生前に聞いている。
然し、これらの多くは伝説的に伝承されたようであるが、この正確な文献により、これが実話として永く氏子民に伝えることが出来るのは、誠に喜ばしい。
この事実は表面最後の項と次の送状写しで実証する。

木札裏面（扉絵参照）

覚　　写

一、御八幡宮様
右は亥十月八日豆州岩地御上り被成候処土州安田浦長左衛門聞付彼

地へ船乗込而御向土佐へ御送り申度旨而神主へ申達得ば然るに御神薬御門上ケ申所弥御国元須崎浦へ御戻り被成度旨御門おり申に付則船より御向に被参而子六月四日に長左衛門船へ御乗被成得は同六日ニ志州鳥羽浦へ御着船ニ御座然所志和浦弥一兵衛殿船居被申而右之段々長左衛門被申而鳥羽浦より弥一兵衛船ニ而御国元へ御送り上申

以　上

宝永五子年六月十五日

志州鳥羽御舟宿

斉藤林之助　㊞

これは送状故簡明だが、説明を加へると、

宝永四年十月四日の大地震津波で、八幡宮は水深四米以上（山の元で三、七米故）社の大部分は水中に没し、倒壊、ミコシは潮の流れにのって太平洋を漂い、流れ流れて五日目の十月八日、伊豆の岩地にうち上げられた。或は漁船が沖で見つけて、拾ってきたかも知れない。

土地の人々は神官と共に丁重に祭り保管していた。内容の品からこのミコシは、土州須崎八幡宮のものであることがわかった。

この由を知った当の八幡宮は、津波の大きな傷手に苦しんでいた。その上数百里はるかかなたの伊豆迄受取りに行くのは困難な状態だったかも知れない。

土州安田浦の廻船業、長左衛門がこれを聞き、商用旁々お迎えに岩地に廻船、須崎にお返し願いたいと申し入れた。

拾い上げ八ケ月も大切に護り祭ったこと故、村人と相談した神主だがミコシのことでもあり、その主からのお迎とあってはすておけず、ご神楽を奏しておみくじにより神意をお伺したところ、ご帰国したいとのおつげがおみくじに出た。

そこで別離を惜しむ神主や村人の了承を得、先方の労を深謝し長左衛門の船に積込み、宝永五年六月四日出航六月六日志州鳥羽港に着船、同港の船宿斉藤林之助方に宿泊した。

丁度、土州志和浦の廻船業弥一兵衛の船がこの港に寄港していた。長左衛門は安田より須崎は廻りみちだが、志和は須崎が途中で近いので、弥一兵衛に相談して快諾を得、ミコシを積みかえた。

こうしてここでの所用を終えた弥一兵衛の船は六月十五日、同日附の八幡宮宛林之助の送状を添えて、国元へお送りした。（原文解説）

以上に一つの疑問がある。それは木札表記最後に、み輿は豆州より九月十一日ご下向、奉納したとある。

然し裏面送状よりすると、六月十五日鳥羽を出航、途中商用で寄港しても、六月末か七月初に須崎に着いた筈である。

この七十日位の空白は何か？、津波で破壊された八幡宮は未だ復旧に手がつかず、直ちに受入れ出来ず、この間何処かに安置、九月十一日正式受入奉納したものと、筆者は思う。

追　記

このミコシ漂流の記事は南路志にも記録されていて、木札が万一失われても、土佐最高の史書に百六十余年前、既に記載されている以上不滅であると思う時、幕末土佐の史聖武藤致和先生に敬意を表する次第である。

然し、本木札は正真正明、本家本元の文献で、その誤りは次の通りである。

一、伊豆国下田浦の漁船が沖合にて拾いは、岩地にお上り　二、土州田野浦は、安田浦　三、伊豆下田問屋役人よりの送状は、鳥羽船宿斉藤之助よりの送状

〔須崎地震記〕へ「室戸町誌」所収〉

※『大地震の後、安喜郡津邑室津の港、地形上る也。先年大船荷積みても入津自由成るところ、大変の後、荷積み大船入る事ならず。此の港石の切抜きにて、底まで石なる故、泥土に埋まると云う事なし、されば地形上りたる証拠分明なり。』（Ⅱ－117）

〔久保家文書〕〈「室戸町誌」所収〉

宝永四亥年十月四日午ノ刻、晴天大地震所々山崩ル。大地壱尺より下われ、水かきたのごとくりごり出ル。同未ノ刻大潮入、室津浮津の内、水尻、耳崎多田助丞前ノ大道越戸ヨリ潮入、家数弐拾三軒湊ノ内へ流レ入又奈良瀬家五軒、元分家弐軒都合三拾軒流し、地下人耳崎浜にて弐人流死。云々（○「りごり」は「にごり」か）

〔夜須町風土記〕〈橋詰延寿著、昭43、長岡郡〉

夜須駅の北方、国道ぞいの喜久屋のところ。

宝永大変以前に松があった。高さ十六メートル、東西三十一メートル南北三十メートル。昔はこの松の大木の元に八幡宮のお旅所があった。松は波のためになくなり、社は潮留堤にある。

ところが宝永四年（一七〇七）十月四日地震のあとの高潮のため、この傘松は根こぎになって赤岡の浜へついた。

○同書夜須八幡宮の項にも同旨の文がある。

〔上ノ加江町誌〕〈小島弥三次編、大4〉

弘野神社　郷社

祭神　気長足姫命

勧清年月縁起沿革等宝永四年十月四日大地震の節怒涛の為め全部流失せし為の其の洋を知るを能はざれ其古来当村惣鎮守の産土神なり

神社牒云山崎弘野大明神（一に広野大明神と云ふ）右は天正元酉年霜月十五日大檀那源朝臣佐竹寿丸大願主福寿軒沙門と云ふ棟札有之所宝永四年十月流失只今棟札無之由記有但社帳に宝永四年の十月大潮の節社流失正徳元年再興棟札之社床一段二十代本田荒蕪貢社二間凹面扮葺長一尺並六寸尉子有之

善賢寺（禅宗　曹洞派）

寺記曰　寺地上ノ加江村山崎と申す所の南谷に有之候所元頁申住持の代に今の寺床へ引越元貞病死盛吟と申住持相勤其の弟子不白相勤右不白時代宝永四年大変□尊什物流失

宝永の大変に流失し一時に廃寺の姿となりしを其の後寛政の頃（年月未詳）再興せしものにして（○以下略）

〔新荘村誌〕〈河上幸馬編、大6〉

普済寺跡

由緒　当本尊仏体宝永四年大変ニ流レテ矢井賀浦漁師南海ニテ見附ケ迎来ルヲ承ルニ付翌五子年当村ノ役人彼地へ参り○○○○○当浦へ迎来り安置（○丸印は元のママ）

〔中村町誌〕〈町編、昭25〉

（前略）亥の大変とは何ぞ。今三、四の文書の収録する所も総合して之を記すれば、事の起りしは今を去る事二百六年前宝永四年亥十月四日なり。此日空晴れて満天雲を見ず、且つ風なくして煙塵動かず、暑き事盛夏の如く帷子を着、単物を着する者もありたり。午前十一時の頃東南の方角にあたりて大なる音響あり間も無く大地大震動を初む。旧記の録する跡を辿りて老ふれば海嘯は地震歇みてより後来りしが如く且つ其間に多少の余裕ありたるものの如し。及べる区域は広くして且つ高く、昼夜に亘りて襲来する事十二回、五日の暁に至りて漸く歇む。之がため人畜の死傷家屋の倒壊田園の荒蕪其他船舶米粟薪炭の流亡せしもの夥しく沿岸村落の物件烏有に帰し殆んど棲住に堪へざるに至れり。当時の言にて所謂亡所となりたるなり。（中略）変災録によりて幡多各村の被害状況を記せば左の如し（中村町関係のみ抜萃）

中　村、地震に家三ケ二（三分の二）倒れ、潮は町まで、渡川の潮は岩崎境脇田の池（ワイタ池か）限り。

宇　山、潮は町まで、津ノ崎境え、三十端の船一船打上る。家は高き所故事なし。

津野崎、潮は町残りなし、家は上（右の意か）に同じ。

不　破、潮は八幡の並松迄、家は上に同じ。（下川口村亀井丈夫（号

釣月）編「幡多採古資料」より）

〔大方町史〕〈編修委、昭38〉

（○賀茂八幡宮の説明文）

松原（入野東浜六九三○）

伝えいう宝永四年（一七○七）亥十月の大潮の時、社殿が石口を離れて浮さ上ったが、潮が干るに随って元の柱石へすわり異状がなかったといわれる。

○

宝永四年（一七○七）十月四日の大地震は、（○中略）「この日白昼正午過ぎ、諸人広場に走り出ずるに、五人、七人手に手を取り組むといえども、うつ向けに倒れて、四間の内を転がり、あるいは仰向けになり逃げ走ることも容易ならず」と万変記に記されてある。

谷真潮の西浦廻見記（安永六丁酉）に

「昔入野の松原六十余町続て吹上川まで生たりしが、亥の大変（註、宝永の大地震）に松原こけて砂浜となれりとぞ。すべてこの浜本田なりしがその時に浜となれりと云」

とある。

〔佐川郷史〕〈副題、佐川町斗賀野、高吾北の歩み、明神健太郎著、昭47〉

重方蟄居の後をついだ嫡男孫八は長じて第五代重峰を名乗った。職をついで間もなく、宝永四年十月十四日に大地震あり、佐川近郷にも崩壊などの被害があったが、とくに須崎浦にあった深尾家船倉に津波が入り十五反帆櫓五十六挺を備えた御用船一隻と小船四隻を流失した。

〔窪川町史〕

僧智隆

智隆の活躍時代は須崎発生寺の和尚のころである。

安政三年には須崎の儒医古谷竹原に、宝永四年十月四日に起こった地震津浪について、その避難の心得を書かし、須崎池の内池のかたわらにある宝永津浪溺死之墓に左右背の三面に草体平仮名交じりで刻するように命じた。

〔吾桑村の歴史と伝説、伝承〕〈橋田定男編、昭25〉

記録に依りますとこの日は朝から少しの風も吹かず、一天晴れ渡って秋と言うのに真夏の如く人々は帷子を着て暑をさけるという有様でした。ところが末の刻（午后二時頃）東南の方で一大音響がすると同時に大地震が起り人家は将碁の駒を倒す如くバタ、、と倒れ、やがて山汐がおこりその為死者続出し一瞬前の平和郷は忽ち修羅の巷となり、更にそれより一時間の後には大津波が起りました。一度二度は余り強くなかったそうですが三度目には波の高さ七、八丈ばかりの物凄い津波が家を流し人を奪い、幸山え逃げた者は死をまぬがれましたが親兄弟が流されるのを眼の前に眺めながらどうする事も出来ぬ惨な有様でした、大潮の来襲は翌朝まで十二回もあり死者二千余人と言はれています。吾桑は海から相当離れていますのでさしたる被害はなかったようですが、松ケ瀬附近は一面の海であったと申します。多ノ郷は最大の被害を受け加茂様の境内迄潮が打ち寄せ、押岡は貴船神社の処迄津波があったと申します。土崎は勿論海の底になり所在の家はことごとく流失しました、須崎浦は死者四百余人と言はれ「渋谷金王」という相撲取が堀川の大橋のたもとで多くの人々を助けた事が今に伝えられています。

〔上ノ加江町史〕〈編纂委、昭31〉

上ノ加江で、禅源寺や弘野神社も流失の災を蒙ったのはこの時である。

○

弘野神社（郷社）　上ノ加江、網代山崎鎮座

勧請年月、縁起沿革などは、宝永四年十月の大地震の津浪によって旧記流失のため、知ることが出来ない。

なお天正元年酉年霜月十五日大檀那源ノ朝臣佐竹弁寿丸大願主福寿軒

沙門という棟札があったが、宝永の津浪に流失したということが、神社牒に記載されており、其の後、正徳元年卯年九月九日（宝永の津浪より四年の後）再興の棟札がある。

熊野神社（無格社）　上ノ加江、山崎、中山鎮座

上ノ加江で一番古い神社であるといわれている。社地が小高い所にあるため、宝永、安政の津浪の災に逢うこともなく、神体、宝物など今に存しているのはまことに幸である。

須賀神社（無格社）　上ノ加江、浦九番小路鎮座

天正地検帳に、牛頭天王と記されているのがこの須賀神社である。二度の津浪に流失、くわしい事はわからないが、四百年以上の古い歴史をもつものである。

月光山禅源寺

（〇前文略）其の後（年代不明）元貞と申す住持の時に、山崎中町に移った。元貞から盛吟らを経て不白という住職の時に、たまたま宝永の大地震があり、津浪のため本尊までも流失、その他宝物なども失ってしまった。このため廃寺のやむない状態となっていたが、其の後（寛政の頃ともいわれる）石庵礼菊大和尚が再興した。

〔涛原町史〕〈編纂委、昭43、高岡郡〉

（〇年表中、宝永四年頃）

十月四日大地震井戸水ことごとくきれる。大潮あり（土佐）

〔多ノ郷村誌〕〈小野弥太郎編、大6〉

〇八王子神社　郷社

一、鎮座地　神田字下川内四百十七番地

由緒、（〇中略）又同年（〇延享四年）届書控ニ曰ク、「当八王子宝永亥地震大潮ノ節、神体並ニ納物等悉皆流失ノ処、神体ハ須崎浦字高須磯辺ニ流レ掛リ有之由注進有之、依テ迎取リ其ノ頃当社別当福生寺住職一元自ラ以テ奉草創」トアリ

又宝永四年十月四日未刻大地震大潮ニテ当社流失高須ノ浜ニ懸リ神主大野伊豆正藤原好友上半山郷氏子共同道ノ上

奉祈国家安全氏子繁栄五穀豊登敬白トアリ

〇天満宮、村社

一、鎮座地、神田字神子谷二千百九十六番ノロ、

由緒、神社帖ニ曰、「土崎田（吾井郷枝村）ノ条ニ云、マツノモト天神右勧請年暦相不レ知、但シ去ル亥ノ大変ニ流失、唯今水ノ鏡有之、但先年山潮ノ節土崎ヘ流社則此ノ処ヘ安置」

〇戸島大明神ノ伝説

（〇前文略）後宝永亥ノ大変ニ神祠神体流失シ　来二十年ヲ経即チ享保十一年八月上旬、東勢井ノ百姓五郎右衛門（〇中略）ココニ於テ親族知巳相共ニ神体ヲ野見ニ送リ同地　財天ノ社堂ニ合祀シ、後戸島神社ヲ造立シ今ノ如ク神体旧体ニ復スト、（古記録承古老伝）

〔佐賀町郷土史〕〈大塚政重編、昭49〉

この地震の津浪に、佐賀妙光寺は客殿、庫裡を流失、願成寺、安養寺明専寺は、過去帳その他を流失した。また坂本、門脇両家では、系図などを流失した。

この地震は山潮（山崩）が非常に多かったと云われている。伊与善森家の先祖はこの地震の時、幡多郡塩塚城に居た。この地震に山潮湧出居宅流失して信長公、元親公、盛親公から下賜された感状、家宝など一切流失したと、同家の記録に残っている。

この地震は広範囲の地震で、土佐国中の死者二千人を超えたと云われているから、伊与木郷も甚大な損害を蒙ったであろう。

〇

寿福山本智院願成寺（佐賀）

由来　宝永四年大地震の津浪に寺記流失して、由緒は詳らかでない。地検前は寺領二十八石五斗であったと云われているので。天正時代には

既に開基されていたものである。

護国山円光院妙光寺（佐賀）

開山　円光院日円（天正年間）

由緒　始め枚光寺と称していたが、宝永四年津浪に流失、改築后妙光寺と改めた。伊与木郷に唯一寺だけの法華宗の寺であった。

上使駒井七郎右衛門の宿舎であった三間半に七間の客殿、三間に七間の庫裡が、宝永四年津浪に流失して改築された。

明治四年退転したので、法華宗の寺がなくなった。

安養寺（佐賀）

由緒　宝永四年の大津浪に寺記流失して由緒は不明である。寺は始め浜町にあったが、後明神に移ったとのことである。

〔津野山異談続編〕〈中越穂太郎著、昭30〉

宝永四年十月四日大地震あり井戸水悉く切れ人々水飢饉に泣く。

〔戸波村誌〕〈村役場編、昭5〉

宝永四年（一三六七）十月四日大地震あり大地の震動甚だしく所々亀裂を生じ、民屋の倒潰、山岳の崩壊其の数を知らず殊に海岸の地津浪高く家屋の流失人畜の死傷夥たし就中近郷に於ては須崎の被害最も甚だし、左に当村の状況を記せる本越文蔵の文を録せん

宝永四亥十月四日、大変天下大地震地割民屋地の底に埋る南海潮溢津浪高くして人馬多く死す、浦里田畠数万町流失世界滅するかと民強動するなり

〔幡多郡中浜・池文書〕〈史談61、昭12〉

宝永四年亥十月土州郷浦大変記

一、宝永四年丁亥十月四日未ノ上刻より大地震同時之中刻ニ静り否浦々大潮入こと三度尤三度目就中高し当宮社檀流失可恐哉さながら御神力ニも御為ゞ叶不給哉然共勿躰なくも御為躰は御厨子に為ゞ籠龍浦の内灰形村に流給ふ処明五日之夜ニ入彼村之百姓礒辺に往来せしが折節不思義ニ御光暉不審にそんじ立寄て見れば御厨子なり乍恐彼村の百姓奉抱揚諸方へ船を廻し井之尻村氏子共早速立越青龍寺え頼ミ奉還上候

一、右大地震ハ否静り一両日之内ハ一刻ニ四五度斗りもハ少々のゆり有り翌子ノ年中少々の地震ハ不絶事

一御国中流失左ニ記

一、破損家千七百四十二軒
一、死人五千八百四十人
一、失人八百四十四人
一、決家四千八百六十六軒
一、潮田四万五千百七拾石余
一、七百六十八艘
一、材木五万四千六百本
一、福島渭ノ浜二ケ浦海底ニ成死人三百人余
一、亡所浦六十七ケ所
一、亡所郷四十二ケ村
一、山分崩所数百ケ村
一、流死牛馬五百四十二疋
一、けが人九百二十六人
一、流家一万千百七十二軒
一、流失畑四百卅九帖
一、流失米弐万四千石余
一、流鰹節五十万八千俵
一、川除堤破損　四千九百ケ所
一、半亡所浦四ケ所
一、半亡所郷四十ケ村
一、湊三ケ所大破損

〆土州郷浦あらゝゝ左之通

寛保二戌年　　庄屋　泰兵衛　記之

一、右御神躰ハ龍浦之内灰方村百性惣助ト申者奉抱揚青龍寺へ奉納候
一、右大変之委曲古反ニ記有之今般掃除之砌東林坊坂下之小溝之辺ニて見出し後代有変之時為知此度一帖ニ記之置候以上

文政午年　　現住

閏正月十五日　　□識誌之

此書白王山瑞道法院所持有之則為後世借求写置者也

嘉永七甲寅十一月　　池　清澄助花押

右亥ノ大地震ニハ大浜中浜清水辺も家不残流失ト聞

将軍源吉宗公様ト
土佐国主松平土佐守豊隆公様
土佐国御奉行所　山内蔵人
五藤外記
山内主馬
同郡奉行　祖父江治蔵
堀部七太夫
同浦奉行
安芸儀兵衛
近藤與三右衛門
宝永大地震之時之役人
大地震之時船ニのりても沖高きわ不苦岡へよりてハ可恐前日より海の底まぜると見へあみ或ハさげづり等ハ迷惑いたしけると聞
（補注、幡南探古録）○亀井釣月著、沖本樵児補注
更に大に下りて宝永四年十月五日の震災に於ける海嘯の災害は、其の及ぼす区域大略知る事を得、即沿岸より約三十町に及べる区域の低地は家宅田園殆全部流亡して荒蕪に帰したり。年恰も丁亥に次す。世に之れを亥の大変と云ふ。
○
大岐
海嘯旧念西寺の最下段に迄来ると。以下口碑
伊布利浦
防波堤の長約百八十間南方低くして北方高し。海嘯は南方天神ケ森下より六十間位堤を押し切りて襲ひ来り、田園を全く砂浜となす。浪先きは海岸を距る約七町の西方字月の口と云える所へ迄達したり。砂浜となりたる田園は復旧の難き所より、時の庄屋某なる者に与え同人更に開拓す。現今の田圃の中央に島の根と云ふ周囲凡そ五十間高さ九尺位の島の如き高地あるは、即其際取り除きたる砂礫を堆積したるものなり。
以上口碑
中浜浦
「福萬寺。宝永四年大潮ニ寺流失。享保元年地蔵馱馬ト云所へ移ス。」（土佐国寺院名記）
清水
海嘯今の村役場床に上る。石段を下より七段迄の所に及ぶと伝へ、又蓮光寺の石段を上より三段の所に及ぶとも云へり。
〃清水浦添誠に無双なり。本清水と云所有むかしの清水なり。大変の後にや今の所に移れり。家数ありてあしからず。こゝは大変におとろへ其後に又よくなりなりと見えたり。十五年前迄は猟船十四五艘ありしが今は三艘のみありとぞ。〃（西浦廻見日記）
越
海嘯は南は上原屋敷と云ふの段を限り、北は庄屋ヤシキとて其頃庄屋ありし屋敷に及べり。家宅の残存したるは此の庄屋のみにて他は凡て流れたり。庄屋の家族は其の背後の山に避難し且公簿など取り出したるも海嘯の為に皆濡れたり。越より清水へ通る街道は一面の海となりたれば舟にて辛く往来を為したり。又其頃迄の氏神は天神宮なりしが、海嘯に御神体漂ひ去りて加久見の川尻なる今の宮床と云へるに着せしを、加久見の村民拾ひ上げたり。之れを耳にしたる本部落の者迎へ奉らんと交渉するも肯ぜざるより、已むなく別に八幡宮を勧請す。即ち今の村社之れなり。口碑
三崎
海嘯は下の段の高さと斉しき高さを以て襲ひ来る。田ビラと云ふに糸車の漂着せるあり。矢野川家の祖先拾ひ取り近年迄存しありしが今はなし。
平の段の東方字松の下に潮の打止めと云ふ所あり。（旧三十三番の名の内）此所は当時の海嘯の及びたる最端なりしより此の名ありと云ふ。
小石山の付近及桜花の北方の本屋敷、龍串北方の三助屋敷、爪白堺の勘六屋敷等其の住民が去て平の段へ移住せし所以の者は、皆此の海嘯の

襲来より将来を恐れての事なり。

大正六年電柱を樹立す。中町と村道斧積線との交叉点を西方三間の処の地中に、径約二尺七寸の大釜の西に向て横さまに埋没しあるを発見す。（釜はそのまま）是れ疑ひもなく当年の海嘯に埋没せる者なり。

下川口

浦分谷屋敷墓地にある蘇鉄に海藻のかかるあり、波は正善寺（今の村役場のある所）の板塀に及び、浦分の家一切流失す。此際分一役場在勤の吏員屋上に登りて海面を見張り、周章狼狽する衆民に向て絶えず海嘯襲来に就ての猶予の有無を警告し、大に避難上の利便を与えつつありしが、不幸にも自己は打ち来る波浪の為に家宅と共に漂ひ去り遂に溺死す。波浪は遠く宮尾の前に及び退潮はアコギ出シ迄の間干潟となる。　以上口碑

（前略）去年亥十月四日大地震後入高潮令流失趣依訴来遣謄写畢云々

以上地検帖末文

浦分街路の中二ケ所よりほちろ様と云へる石各一個を発掘す。ほちろとは田中甫仲の刻したる六字の名号を刻したる石にて、田中は宝永年中下川口浦に棲住せり。

浦分若宮口の河川の辺りより、大釜二三枚合はせたる者を発掘す。

以上は此の海嘯に埋没せる者なり。

著者の亀井釣月がその著「川陽叢話」に〝亥の大変の記念碑春日神社鳥居の南約一間の所にありしが、往年大波の為砂礫の下に埋没すと云ふ。いつかは発掘せま欲しき者なり。碑は自然石に素人細工に文字を彫り付けありと云ふ。思ふに当時は奇人田中甫仲の棲住せし頃なるを以て同人の建立せし者ならん〟と述べているが、この記念碑大正六七年の交著者の念願通り著者の手によって発掘せられ、春日神社鳥居の南側に建てられてある。高さ一・五メートル余の自然石で、未完成で碑面に「宝永（少しく横に）、十月四日」と、稚拙な彫刻がしてある。一見して素人細工ということがわかり、ほちろ様などと照合して田中甫仲の作ということがうかがわれる。

片糟

宝永四年の海嘯には亡所となり住民他に出で去り、夫れより七十年を経たる安永の交に於ては居住者僅に一戸を見るに至りしが、爾後漸々増加するに至れり。

戸数　天正十八年四戸　安永元年一戸　享和文化ノ交二戸

明治五年九戸　明治十年十二戸

片粕に三十八戸の住民があったという口碑は事実に近いものであることは、西浦廻見日記の中の次の一節でうかがわれる。

〝三右衛門は片粕本田、新田八十三石余の地やうやくに荒れて近年迄生地五反あり。百姓壱人居りしがこれも後居らずなりたるを願ひて引こし五十石ばかり聞きし由。猪鹿多き故荒しなり。お留山の間なり。片カス七八十年前までは庄屋もありて一村の所なり。地検帖に見れば郷浦と見え水主も有し様子なりとぞ〟

西浦廻見日記は安永七年（一七七八）時の浦奉行谷真潮の書いたものであるが、安永七年から七八十年前というのは宝永四年前後に当り、宝永四年亥の大変で亡所になった傷手が回復されないままずっと続いたものと想像される。亡所になる前は庄屋もあり水主もあり一村の所であり、しかも郷浦にわかれていたとあるから三十八戸の住民があったということがうなづかれる。

土佐州郡志「片糟村」の条に、寺社善願寺今属川口村正善寺とあるがその寺屋式跡といわれる所に数基の五輪塔・石碑があり、また部落の入口松林の上方に無数の墓のあるのも、そうした口碑を裏づけるものであろう。

貝ノ川

海嘯山の神の渡瀬を過ぎて尚竹ガ市に及ぶ。口碑

〔下川口村誌〕〈田村信吉編、昭10〉

宝永四年十月四日此日朝より風吹かず一天晴れて片雲を止めず、暑き事極暑の如く為に単物帷子を着せし者ありと云ふ午の上刻東南の方角にあたりて大なる音響あり間もなく大地震動を初め暫で海嘯襲来し、沿岸の

低地にありし建物及其他の物件は之れが為殆ど全部流亡に帰せしのみならず人畜亦多数の死傷あり、土佐全州に於ける当時の調査書によれば流失家壱万壱千九拾五軒、死人壱千八百四十四人と註せらる、吾が村内に於ける流亡戸数死傷の人員は詳ならずと雖も下川口浦の建物が此際全部流亡に帰せしは口碑之れを語るのみにあらで事実は明かに証明する者あるが故に争ふべからず、先づ口碑を挙ぐれば

一、分一役場（当時の役場は下モ町防波堤の東端にありしと云ふ者もあり）在勤の官吏高所（松の枝と役場の屋上との両説あり）に登りて海面を見張り周章狼狽する農民に向て絶へず洪波襲来猶豫の有無を警告し、大に避難上の利便を興へつゝありしが自己は艫て打ち来る波浪の為に足場と共に洗ひ去られ遂に溺死す（屋上にありて京都訛りにて助けて呉れよと連呼しつゝ流れ去りしと云ふ）　下川口浦に残れる口碑

二、当時の海嘯は谷屋敷墓地の下段と酒造場との間にある蘇鉄に迄及びたり（一説には下段の榎の木の枝に海草掛かり居りしと云ふ）

右　同

三、波頭正善寺（今の村役場床にありし）の板縁に及べり

下川口郷に残れる口碑

四、宮尾の前川に梭魚七尾の漂ひ入れるありて同地に七かますの名称あるは即ち此事実を記念する者なり。　宗呂下川口に残れる口碑

五、片粕全部亡所となり住民四方に離散す。　片粕に残れる口碑

六、貝ノ川海嘯山の神ノ渡瀬を過ぎて尚竹が市に及ぶ。

貝の川に残れる口碑

七、大津寺の石段下より三つ目迄及ぶ。　大津に残れる口碑

以上の口碑の外文書に残れる者を掲ぐれば

一、宝永四亥年十月大変にて地中家並網具不残流失仕候処右舒網仕出銀弐貫又々拝領被仰付候

下川口浦庄屋より差出したる御入国以来年譜書中の一節

二、正　辰

童名牛之助中略明和八年領知職分共他譲安永元辰年新規拝領奉願片粕村拝領ス領知三十石ノ外御貢物立ニ開ク安永六酉年開発相済翌戌年七月十八日郷士職ニ被召出片粕数百年亡所開基ノ元祖也

片粕細川家系譜の一節

三、右地検帖先年書写地方役人之校合雖為所持去年亥十月四日大地震之後人高潮令流失趣依訴来遣謄写畢且興本帖令校合違ノ処直々地面ホノキニ印判四ツ押之此外削字直字無之者也　宝永五子年正月廿一日

下川口地検帖の末尾の文

四、前略　私先祖上岡中亟ト申者右知行ノ作配役仰付数年相勤申候由申伝候然ルニ先年大地震大潮ノ時先祖書流失仕相知不申候云々。

大津の庄屋たりし上岡家より指出したる書中の一節

此文中にある先年の大地震大潮とは宝永の変災を指したる者にて同家が元下地に邸宅を構へありしを今の処に移転せしは宝永の変災に遭遇してより将来の危険を慮りしによる者と云ふ。

更に編者の父の筆せる本田貢物噺なる記録を閲すれば左の記事あり。

前略　昔宝永七寅年改正と有其改正の訳を考ふるに本田屋敷を鍛冶大工上り地と云ふ是は定て宝永四亥十月四日大汐入て地下悉く流れしと云ひ伝ふ其時上り地と成たる者か云々

宝永七年改正とは同年に於て浦部落の邸地を改正検査せしやと云ふ事にして其改査の必要起りしは他なし、同年より四年前は宝永四年にして即ち世に所謂亥の大変のありたる年なれば此大変の為に浦分の全部荒蕪に帰したるが故なり。而して父が此改正ありたるを確めしは浦分の邸地貢物の一件に付浦分の民衆を代表し当時の里正に交渉を為したる場合、時の里正の提供したる改正薄を見たるによる者なり（編者が明治廿一年の頃村役場の書記として在勤中一見せし事ありし者之れなり、今は村衙になし）又元禄より宝永享保の交に跨りて医師田中甫仲と云ふ者の下川口浦に住居し其生前に於て手づから石に六字の題目を刻し幷を各所に建立せし事ありしが此石往年市内の地中より顕はれたり（詳しきは田中甫仲の条にあり）即ちホチロ様と云へる石是なり。近年に至りては中町の或る邸内より鍔鉄を発掘し若宮口の河岸よりは大なる平鍋を掘り出したり

是等の事実によりて考ふる時は下川口浦の如きは啻に家屋の流去したるのみにあらずして凡ての邸地は洪波の捲く処と為りて全く砂礫の下に埋没したる者なり。片粕の如きは伝ふる如く村落挙げて荒蕪となり大津の如きも里正の邸宅流れしと云ふの一事に徴すれば是亦人家の過半は流亡に帰せし者と云はざるべからず。詮じて茲に至れば当時の海嘯の如何に大ひなりしかを窺ひ得たると同時其猛威の分一役場を呑みて更に寺院に及び尚余波遠く宮尾の前川に達したると云ふ。口碑の彼此能く相一致するに点頭せざるを得ず、今専門の技術者をして海嘯襲来の高度を測らしめしに明治四十五年六月三日（満月五月二十一日六月三日の月の出九時十六分）午後六時の海潮面より実に二丈五尺九寸二分なる事を測定せり年恰も丁亥に次す世に亥の大変と云ふは之が為なり。

亥の大変の紀念碑春日神社鳥居の南約一間の処にありしが往年大波の為砂礫の下に埋没すと云ふ。いつかは発掘せま欲しき者なり、碑は自然石に素人細工に文字を彫り付けあると云ふ、思ふに当時は奇人田中甫仲の棲住せし頃なるを以て同人の建立せし者ならん。

○古老遠近専次郎の祖父長兵衛と云へるが父に当たる人の代の出来事なりし迚専次郎幼少の頃昔語りし談に曰く

分一役場の吏員が流れしは退潮の場合なりし、当時は震動するに非ずして凄じき響を為して鳴るのみなりし、衆民は一たび上の山へ迄逃れしも家財を取るべく家に帰りし者海嘯の為に流されたり云々

○海水の退きし時はあこぎ出し迄干潟となりしとの伝説あり

○海潮襲来の高度を測量せし標点は今の下川口村役場玄関柱の礎石の上面にて高度は此度数の上に尚三尺を加へし者なり、蓋正善寺は今の村役場床にあり且海潮は此椽板に及べると云ふにより後に加へし三尺は椽の高さを想像してなり

○測量者　長橋太郎　西森宇太郎

此人々は当時郡道改修工事の監督として久しく下川口に寄寓し居れり

○海嘯の襲来は十二回なりしと、須崎円教寺の記載にあり

○

（○片粕の沿革、前文略）而して是等の住民の子孫は爾後連綿として此村に棲住せるか、決して然らず皆他方に移住して一人も今日に残れる者はあらざるなり、口碑に曰く亥の大変の為亡所となり、住民出でゝ他方へ移ると、是宝永四年の地震及海嘯の変災なり、当時調査せる土佐全州の統計書によれば亡所浦六十一ケ所半亡所浦四ケ所亡所郷四十二ケ所半亡所郷三十二ケ所とあり、片粕は即ち其一なり、今の細川家の祖先三右衛門正辰と云へるが此村に来住せる時は長八と云へる者のみ居住せしが間もなく去りて宗呂に移れり、是同家に残れる伝説なり、今同家の系図及年譜を見るに左の如く記せり。

正辰、童名牛之助中略　三右門と革名中略　安永元辰年新規拝領奉願片粕村拝領知三十石の外御貢物立ニ開ク安永六酉年開発相済翌戌年七月十八日郷士職ニ被召出片粕数百年亡所開基之元祖也　系図

一、明和八卯年領知職分共云々中略　安永元辰年片粕村新規ノ拝領知奉願御聞届被仰付候吉米三石四斗八升片粕村百姓名頭長八御貢物未進米仏替片粕村へ移住仕候　年譜書

宝永四年より安政七年迄は此間七十年なり、系図に片粕数百年亡所開基云々とある数百年は数十年とあるべきを、誇大に書したる者と見て可ならん、要するに宝永の海嘯の為に亡所となりし事、及当時の住民の漸々出て、他所に移りしは事実なり。

（○遠奈呂の沿革）此地は高地なるが故に亥の海嘯の為に害を被りし事あらざりしなり、

（○歯朶ノ浦の沿革）歯朶の浦は近代迄樹林のみにて寸土も耕地なき無人郷なり（○中略）

天正の地検帖によれば約八反の耕地ありて、太郎三郎なる者棲住せし証跡あれば、往古は耕地住人共にありしも、爾後変災の為に荒蕪となり人は去て他に移りたる者ならん、天保七年の地押帖を閲すれば全十筆の土地の下に皆荒字を記しあり、即全部荒蕪となり居れる事実見ゆ、天保七年は亥の大変を下る事、百十八年の後にあり、其荒蕪となりしは思ふに

片柏と同じく当時の海嘯の為ならん。

29 宝永五年（1708）六月、土佐洪水、安芸郡、長岡郡に山崩れあり

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教会刊〉

○安芸郡成川村

十一面観音堂　アミタ山

于時宝永五戊子六月洪水湧出而山崩谷埋而池山之霊場既危雖然仏光新而無何煩矣因茲野根郷諸民悲危而移於成川堂山池建立三間四而之堂宇云々

〔神社明細帳〕〈県図、K 175－7〉

高知県土佐国長岡郡豊水郷安野々村字日浦宮鎮座

村社　貴船神社

神社記云、ヒウラ木船大明神、右勧請来歴不相知、但古来有之社也、縁起書付等無之、宝永五年山中崩掛り氏子共建立之

30 宝永六年七月七日（1709－Ⅶ－12，2345483）、幡多郡に洪水、山崩れあり。

〔神社明細帳〕〈県図、K 175－7〉

高知県土佐国幡多郡下山郷下分橘村字大川平山鎮座土居ノ奥山

無格社　白岩神社

中平氏古記録曰、宝永六年丙午（〇宝永六年は己丑）七月七日ヨリ八日迄幡多郡大川小川共大洪水北山谷々崩レ山塩湧出

31 享保六年（1721）七月から八月まで洪水、高岡郡仁淀村、伊予久万山で地変あり、また享保七年六月二十三日（1722－Ⅶ－2，2350221）にも洪水、山崩れあり。

〔仁淀村史〕〈編纂委、昭44〉

別枝の中越律所蔵の記録には、

享保六丑歳七月ヨリ八月マテ三度風雨洪水山里損田弁ニ民家流失至分其節吾川郡名野川之内大渡村壱在所民家不残流失、又予州久万山ノ内ニテ所々ニテツエニウマリ、或ハ野ハキニナガレ死人里分ニテモ同前享保七寅歳六月廿三日風雨洪水田畑流失右ニ同、高岡郡別枝村氏神春日大明神社而ノ山崩、川ヲウメ水サカマキ社トコ地共流失御神躰も同断、則同十月ニ社トコカマエル四社之内壱社後見へ申趣。

とあって、享保六年（一七二一）に仁淀川流域が、大洪水にみまわれ、田畑、家屋、死者等の被害をこうむったことがうかがわれる。

32 元文元年（1736）、香美郡に洪水、山崩れあり。

〔神社明細帳〕〈県図、K 175－7〉

高知県土佐国香美郡佐古村東佐古字白岩鎮座

無格社　白岩神社

天文元庚辰年洪水ノ際山崩岩穴ヲ埋ム。

33 寛延元年（1748）、土佐郡大川村に山崩れあり。

〔大川村史〕〈編纂委、昭37〉

観音堂

川崎字松ケ畝九十二番地、官有地にある。

寺領田記

夫当院者開祖大智海禅師及吾先師大方年代四百余年其間梵宇在井之川年代深遠也故盛衰移時已向沈於此大方願奉国君開本郷薬師如来山林

名仏餉田彼此欲為相続基焉時哉命哉廿年爾寛延戊辰大風雨連日山崩地裂罹此天災堂宇尽滅絶又投国君於実本郷易地鼎新梵宇而宿志未発起有本山高命焉（〇中略）現延命禅寺智白

明和四丁亥六月吉祥日

34 宝暦六年七月二十六日（1756－Ⅶ－21，2362659）、土佐に地震ありまたこのころ沿岸暴風で波高く被害あり。

〔津野山異談続編〕〈高岡郡中越穂太郎著、昭30〉

宝暦六年七月二十六日地震あり。

〔森沢保如家文書〕〈吾川郡宇佐、桑田精一筆写、大15、原本は文化十三年成立〉

宝暦六年丑ノ七月二十六日時変ノ事

我等居宅浜辺ニ有リ是ヨリ以前度々浪立候節家囲ヒヘ波打込地面引流レ候ニ付隣家四五軒申合セ前ヘ囲ヒ岸ヲ築上地底五尺斗堀リ丸木ニテワイヲ組入段々モヂヲフリ大石ヲ船ニテ取寄セ地底ヨリ一丈余ニ築イカナル大浪ナリ共是ヲ崩スコトヨモ有マジト思フ処ニ右ノ時変七月二十四五日頃ヨリ浪立ニテ同廿六日ニハケシカラヌ大浪ニ成リ其上地震シテ風雨スサマシク弥浪アレテ前ノ囲ヒ岸ヘ打掛浪打越シテ家蔵ヘ浪先近ク来リサマサマ波防キ致スウチ早岸モ打崩シテ中々寄リ付レズサレドモ家蔵ハカマヒ有マジト前ノ蔵ヘ当分ノ衣類其外諸道具等入置戸前イタシ扨内ノ諸道具有増ハ後ノ店ヘ運ヒヌ蔵ヘ持行ウチ岸ハ次第ニ崩レ浪家蔵ニ打掛詮方ナク後ノ蔵店ノ戸マヘ有増サシ堅メテ皆々谷屋ノ酒屋迄立退申処猶地大ニユルキ家モ危ク若家崩レ候時ハイカ成ウキ目ニアワンコト恐ロシリヌ夫ヨリ一家引ツレヘイデノ山ヘ趣ク処洪水漲リ風スサマジク中々歩シカタキコト何ニクラベガタクサレドモ漸々山ニ取着キ暫ラク山中ニ居申処諸木吹倒レテ物スゴク飛散ル事身ノ上モ危ク夫ヨリヌハゲ谷福田藤次殿方ヘ漸クタドリ着キ粥ナドヲモラヒタベ其上着類等ノ着カヘ迄念頃ニ預ル扨浜辺ノ家々ハ勿論宇佐福島ノ人々皆山ヘ逃行モ有或ハ遅ク逃出申モノハ家崩レテ棟木梁ニウタレ過チスル者モ有、洲崎辺ハウシロノ川ヘ水マサリテ山ノ手ヘ渡リガタク前ハ波打カケ是非ナク家ノ棟ヘカケ上リ家共ニ其儘ニ流レ死スルモノモ有、其外漸々ニ逃出ルニ水ニ溺レ危キモ有命カラカラ親子兄弟チリチリニ逃行山ヘカケ上リ其外山際ノ家ヘ逃行モ有テ親ハ子ヲ呼ヒ子ハ親ヲ尋ネ逢サルモ有レハアフモ有リ或ハ悦ヒ或ハ悲シミ呼ハリ叫フ声山ニコタヘ谷ニヒビキ誠ニアワレ成事目モアテラレヌ有様アワヤ此世モ此儘ニ相果ルカトヲソマシク思フ処ニ風モ夜ニ入バ少シ和キテ地震モヲサマリ風和ラキテ程ナク明レハ廿七日ノ朝波モ静マリテ皆々我家我家ヘ立帰レド崩レタル家ノ町中ヘ数多倒レフシテ通ルベキ道モワカラズ方角サヘウシナヒテタマタマ残リ居ル家蔵ヲシルベニシテ我家漸々尋ネ猶キノフチリチリニ成行シ者共親ハ子ヲ如何シツラン子ハ親ヲ何処ヘカ逃ツラン又ハ倒レシ家ノ下ニ有ラン扨ハ波ニヤ流レツルカト呼リ待ル内面々家ヲ尋ネ来リテ親子兄弟顔見合イツクニ居ツルヤカシコニ逃行シト云アヘテ命ニ有ベキトハ思ハザリシニ再ヒアフ事此上ナシト無事ナル者ドモ悦ビアヘル去テカ浦ノ有様キノフ似タル処モナク一日一夜ニカク成事シバシノ間モ千年モ経テ立帰リタル心地又本ノ柄ノムカシコソ思ヒヤラレテ扨我逃出タル跡蔵見世二ケ所ハ残リ候得共何ノ家蔵納屋共浪ニ引流シテナシ入置シ着類其外諸道具流レ残リタル家モ多クアリ元ヨリ浜辺ノ家地床トモ皆々流レ其上町一筋浜ニナル夫ヨリ見世ノウラヘ又家ヲ立ル其外宇佐中皆々上町ヘ退ク。

35 宝暦七年六月一日（1757－Ⅶ－16，2362988）、地震度々あり、また沿岸暴風波高く被害あり。

〔森沢保如文書〕〈吾川郡宇佐、桑田精一等写、大15、原古文書は安政四年に筆写されたもの、岡俊蔵正道蔵書が原本という〉

宝暦七丁丑六月朔日ヨリ雨風波ニテ地震モ度々仕リ夫故諸人波ヲ気遣船持ノ人ハ船ヲ問前ヘツナキ（〇以下暴風高潮の説明）

福島浦役人　渭浜浦庄屋
岡　久太衛門
福島浦庄屋
本田惣左衛門

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教協会刊〉

○高岡郡仁井田郷与津村の条

湊　川湊東西横壱町斗奥行三町斗干汐之時ハ小船も不出入満汐に深五尺湊口波戸根置六間ニ高サ弐間長四十弐間宝暦七丑年大浪ニ崩るなり

36　宝暦十二年六月二十六日（1762－Ⅸ－15，2364844）、幡多郡暴風雨山崩れあり。

〔中村町誌〕〈町誌、昭25〉

宝暦十二年（一七六三）六月廿六日大風雨、山潮、享保六、七丑寅洪水以来の大洪水であつた。

37　宝暦十二年九月二日（1762－Ⅹ－18，2364908）、土佐に強い地震あり小被害を伴う。同月中旬まで余震続く。

〔森沢保如家文書〕〈高岡郡宇佐、桑田精一筆写、大15、原本は文化十三年成立〉

同年（〇宝暦十二年）九月二日ノ昼八ツ時大地震致シ家蔵ノ瓦等落山ナト崩レル夫ヨリ同月十六日迄少々ヅヽ地震スル依是イツレモ驚キ大潮入ルト申諸道具山へ運ヒシモノモ有。

38　明和五年六月六日（1768－Ⅶ－19，2367009）、箱根に地震あり、山崩れを伴う。

〔富士日記〕〈池川春水筆、清水孝之刊〉

○筆者は明和五年六月二十九日箱根を西行していた、その日の日記文、

廿九日　朝五ツ時前、関を開き通る、関所は山の麓也。是よりとふげ迄弐里登る。坂けねしからず、馬にて越。馬子は矢倉沢の者也。道すがら四方山の咄す。今年六月六日地しんす。矢倉沢大地じんに而、田畠大きに破損す、馬子か家の馬の食を煮る釜四五人にてかく計なるに、釜石四五間脇ゑ崩れとふ。しかるに一里脇ははや少計の地震也。昔日六十六年計前大地震す。其後三年過富士の土降る。三日の間暗く天燈をとほす。我親の咄に、人々世界の尽るといふて、近所近所相集り燈明の本にて念仏を唱ふ計也。平地へは土砂弐尺三尺計も積り、片岸斜なる所には五六尺も積りたるよし。今も此辺山の崩れ口を見れば一二尺も破あり、焼砂に而色黒し、とふげより前に后に矢倉嶽といふ山、左に入道嶽又金時山といふもあり。

39　明和六年五月一日（1769－Ⅵ－4，2367329）土佐に甘露降る。

〈（Ⅱ－447）、五月三日から諸国降灰あり〉

〔森沢保如家文書〕〈桑田精一筆写、大15、原本は文化十三年成立〉

同年（〇明和六年）五月朔日ノ朝土佐国へ甘露降是御国ノ吉事ト申。

40　明和六年七月二十八日（1769－Ⅷ－29，2367415）、日向、豊後、伊予、土佐幡多郡に強い地震あり、各地に小被害あり、薩摩に津波おそう

〈（Ⅱ－448～449）〉

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教協会刊〉

一　右浦之儀先年より為御振替米年々百八十石允相渡候由之処宝暦年中下代類丈七右は振替米之儀に付存寄申出其以来明和之頃御作配替りに相成年々百廿石宛相渡る尤三拾石は三浦氏太郎殿格に替付を以受取九十石を以地下人諸作米被仰付候内拾石分は前方水主足役銀上納相滞候訳を以石七拾五匁定御相場を以拾石允御引落被仰付相残八拾石允を以

諸雑用作配米に被仰付置候也右鹿垣並畑開発之儀右丈七御分一役号を以相勤候砌両条共存寄申出夫々仕成出来年々相応之所務仕申之処厥后大地震にて悉荒損じ捨り候由安永年中右浦下代次郎助同弥五七両人石垣開発等之儀再興願出御聞済之上是又出来年々畑作物相応に所務仕今以不相更出来候由尤安永年中口ニも出候通鍬抜尻と申場所新に鹿垣間数百間斗開発共出来候由

41 明和八年（1771）六月、土佐に毛降る。

〔池川年代記〕〈竹本源治校訂〉

同八年卯六月、無名の毛降、長四寸斗り長短有、赤事栗毛の如、未少白く馬の毛に能く似たる物なり。立所に七八本又十二三程も有、地面は元より木草の上にも降掛る体也。七月初の雨降てやまる。

42 安永五年（1776）、高岡郡四万川の川峯の古池の沼崩壊する。

〔津野山異談続編〕〈中越穂太郎著、昭30〉

安永五年申、四万川中の川峯の古池の沼大崩壊し田地流出す。中の川部落民池の主を蛇王権現とあがめ祭る。

43 安永八年十月一日（1779－Ⅸ－8，2371138）、桜島噴火し、土佐をはじめ諸国に灰が降る〈（Ⅱ－506～548）、このうち（Ⅱ－548）に〔室津湊番役久保野氏旧記〕の記事がある。〉

〔安芸郡史考〕〈安岡大六著、昭30〉

桜島の噴火　浮津港番久保茂左衛門の記録に『安永八年（一七七九）十月一日桜島噴火す、夜十一時頃より灰の様なる砂ふり出で、翌二日頃迄降り、それより曇りたれども、朝の様にはなし。右の砂家々の内に夥しく入り、木の葉は勿論灰積り、昼頃迄七分計り積り、前代未聞の事なり。佐喜浜より羽根迄大いに降り、其の余は少しづつ降り、大山より下（西）は降らざりきとある。』（Ⅱ－548）

44 天明二年七月二十二日（1782－Ⅷ－30，2372164）、高知市域に山崩れあり。

〔皆山集九〕

（〇高知市龍乗院の条）天明二年寅七月廿二日大雨洪水比島山崩死人有

45 天明七年二月三日（1787－Ⅲ－22，2373829）、吾川郡に地震あり。

〔天明逃散記〕〈吾川郡「安部家文書」、池川町文化財叢書一所収、西川安穂校注〉

（〇前文略）之にて二月三日の逃散出発はやまりぬ。

かかる騒ぎの中に地震あり。天狗の変化あり。夜中数百人過ぎ行く声を聞けども夜明けに至れば何事もなしという。この異怪そこそこに度々あるなど奇怪の風説とりとりなり。

46 天明八年五月二十九日（1788－Ⅶ－2，2374297）、安芸郡に山崩れあり。

〔東郡巡見日記〕〈葛目守稚筆、天明八年五月〉

〇卅日曇五ツ頃押谷を出大栃七十石の所中谷川蕨野卅石余の所夫より葛橋此橋といふハかつらをもて谷をあなたこなた引渡し其間に折々木を横に渡したり是をふミて通る為也されともことの外ゆるきて行かたし下をミれハ瀧川にて甚おそろしく見ゆる所也過て白石八ツ半頃着谷川とまりけれは名本清五郎宅宿す行程弐里あるといふ此辺きのふの風雨に山余程崩本田九反斗の破損也又云去年ハまだ夥敷事にて本田壱丁三反の損失也しと誠に易からぬ事に聞ゆ

47 天明八年七月五日（1788－Ⅷ－6，2374332）、香美郡上韮生村柳瀬に山崩れあり。

〔皆山集〕○「仁井田神社由緒」

柳瀬貞重筆記云仁井田古宮此宮昔ヨリ有来リシカイツノ頃ニカ洪水ノ節川ノ北山潰枝水溢レ宮神地トモ押流サレケル横山郷大栃村シマヤシキノ先人魚捕ニ新敷網ヲ初テ持行シニ此神ヲスクヒ上ケ有之ヲ所ノ者迎来リ又々洪水危シトテ氏宮へ納メ一所ニ祭リケル由村老慥ニ云伝レト年暦未考夫ヨリ此所ニ宮ナク古木有古宮床ト云其酉ヲ宮ノマヘト屋敷名ニ呼来リシ也今ノ市助祈願所ノ事有明和年中宮ヲ建紙幣ヲ神体トシ氏宮神事ノ序ニ祭来ル也又天明八年七月五日タキシリ山潰抜タル時此宮ヲ押流シ田中ニ掛リ有シヲ後日又取立ケル也。

○「神社明細帳」に同旨の文あり。

48 天明八年七月二十四日（1788－Ⅷ－25，2374351）、香美郡に豪雨、山崩れあり。

〔物部村志〕〈松本実編、昭38〉

天明八年七月二十六日夜半、豪雨のため安野尾の地盤がゆるみ高井に向け崩壊した。その被害は死者二十八名、流失又は埋没家屋二十八軒に及び、未曽有の大惨事を引起した。当時の様子は、南路志にくわしくのせられているので、左に掲げ当時の様子をうかがうことにする。

天明八申年七月廿六日久保村流失記

注　進

一、男女上下八人　　窪源兵衛家内

上　男一人　廿八実ハ二十九　　源　兵　衛

女二人　八十八　　源兵衛祖母　やつ

六十三　　同人伯母　ちよ

下　男三人　十九　　奉公人窪村百姓　庄　助

十六　　譜代　　又　助

同　同　　弁　内

女二人　二十四　槙山郷大栃村利右衛門姪　こめ

十四　五王堂村兼太郎妹　いせ

〃

一、男女六人　　家来　半兵衛

男三人　三十七　　半兵衛

十弐　　舅　勘太郎

二ツ　　二男　銀　次

女三人　六一　　母　ゆき

三二　　妻　まつ

八　　娘　なを

〃

一、男女四人　　家来　勇　平

男弐人　四二　　勇　平

八　　舅　鉄太郎

女弐人　三十七　　妻　さく

五十弐　　養育人　いせ

〃

一、男女二人　　家来　七　平

男一人　二十八　　七　平

女一人　七十　　母　まつ

〃

一、男女六人　　五人組頭　次郎吉

男二人　四十二　　次郎吉

三　　舅　次太郎

女四人　六十三　　母　はつ

三十二　　妻　なつ

六十五　　妻母　ゆき

十　娘　きく

一、男弐人　〃　五十三　百姓　七亟
　　二十二　名本専蔵家同　権八
　但此二人ハ源兵衛宅にて死
〃　流死二十八人　内　内
一、牛　三匹　窪源兵衛家来半兵衛　百姓次郎吉所持
一、本　家　一軒　六間梁長九間半　窪源兵衛
一、長　屋　一軒　弐間梁長三間半
一、矢倉門　長一間半横一間
一、物置小屋　一軒　弐間梁三間
一、牛　屋　一軒
一、雪　隠　三軒　一軒番所一軒矢倉門一軒長屋五軒本家内弐間地下人三軒家来四軒部屋内一軒地下人三軒家来十六軒牛屋雪隠小屋とも
〃　二十八軒

一、鉄　砲　五挺　玉薬三匁五分
一、小とち　一本　小道具とも
一、弓　三張　但矢とも
一、差　又　一本
一、手　鎧　弐つ
一、しつてい　一本
一、貝　一つ
一、縄　五筋
一、御先代様御折紙並古証文
一、前々より御山遣付
〃　右流失又は埋候品々

御郡方え差出口書

名本　専　蔵

廿六日夜九ツ時物音相聞候に付否近所村中触渡御番所へ欠付見申処大潰に付夜中大雨方角も無御座体翌廿七日に至尚々大潰に相成否大庄屋惣老江矢文を以申通久保彦九郎へも同断万端無手抜相勤申候地盤御用方堅固に相勤御用達之者旁宜御詮議被仰付度奉存候

新　蔵

新蔵義右物音呼声仕候に付否名本処江罷越候而名本所御番所江欠付候へ共右に記申通に付残る家之者共万端世話仕其外銀米等かし方無差　随分急用間を合せ用達之者に御座候

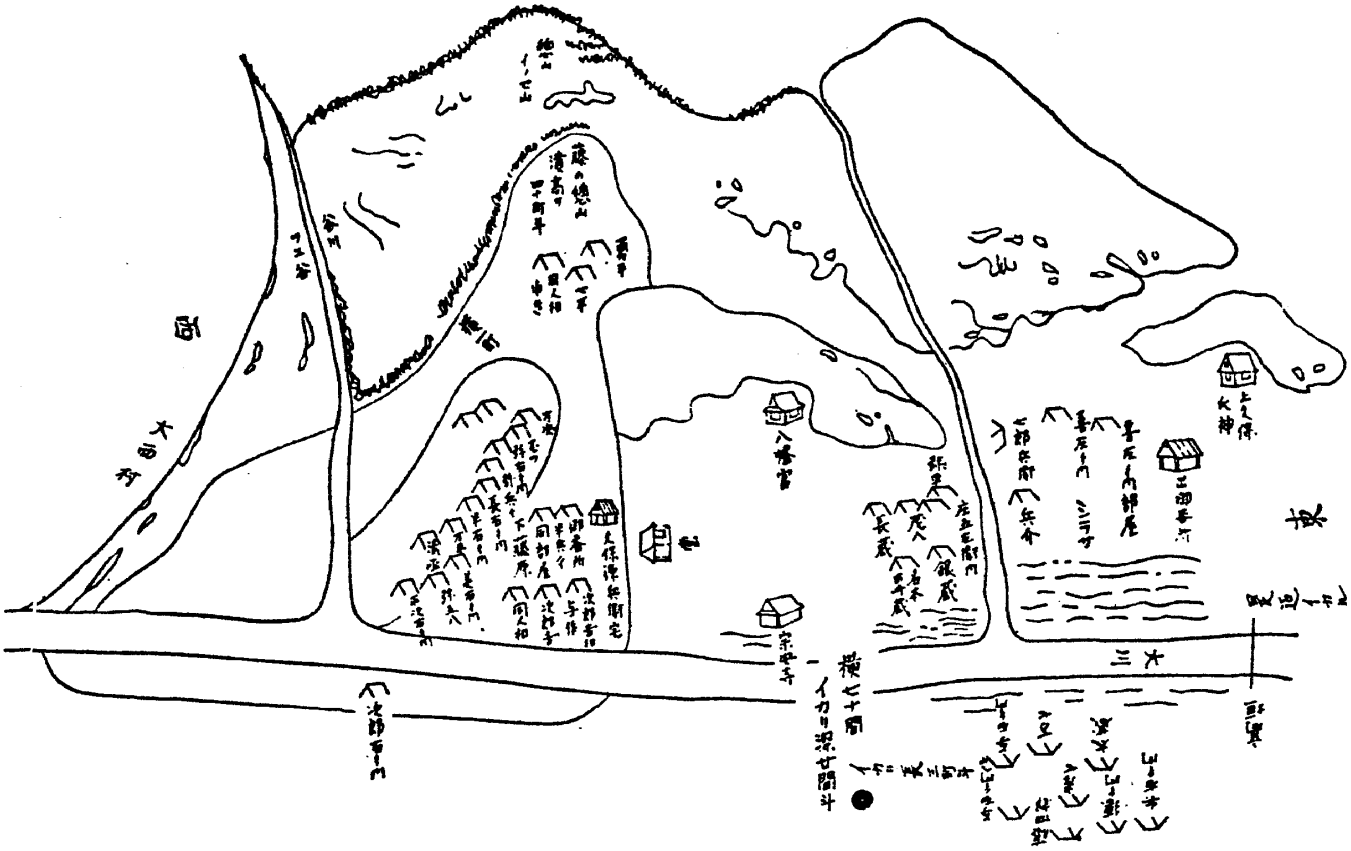
萬　平

廿六日夜九ツ時御番所大潰来候音聞付尚又名本より触有之に付相速欠付候へ共大潰に付不及力近辺傍輩共呼揃翌朝矢文之世話並残る家足弱之者を相助諸道具等持運ひ相働申候此者格段御詮義被仰付度奉存候

二十一人

右面々名本組頭呼声承り否欠付申候へ共御番所之儀ハ右記申通に付不及力残り家之者を見繕皆々相応世話仕赴に御座候
右大庄屋より御郡方江差出ス

天明八年七月廿六日久保村藤のそふ山潰抜絵図



〔香北町史〕〈松本実編、昭43〉

七月二十二日より二十五日まで連日大雨洪水、二十六日物部川大洪水、久保の大山崩れで久保源兵衛ほか二十八人邸宅田畑所蔵の宝物悉く埋没久保の小潮番所も埋る。

〔総合美良布文化史〕〈美良布第一尋常高等小学校、昭11、香美郡〉

未だに明けやらぬ天明八年八月二十四日。昨日来の豪雨、暴風は息をもつかず、其の猛威の限りを尽してゐる。四辺はまだ淡暗い頃ほひ、源兵衛の屋敷裏の藤原山に怪しい「うおー。」といふ声、それは人間の叫びではなく、幽鬼の叫んだ様な高い鋭い心をえぐるうなり声だ。其の瞬間大地が「ごごーうつ。」と震動し、更に其の上手に高く聳える大山が名状しがたい大音響と共に一時に崩れて、源兵衛の家族、家来、雇人、合せて二十八人一人残らず埋没して悲惨なこの世の地獄を現出した。源兵衛のカラ川流しの際に発頭人として働いた木挽の藤次は惨害はまぬがれたけれど、八歳になる一子源次が、山伏姿の男にさらはれて消息を絶つたが、彼をさらつたものこそ誰あらう轟の釜の主だと言はれた。不思議はこゝにも亦一つ。それは藤原萬次だ。彼は独りわびしくあばら屋に細々と其の日を送つてゐた。生れつき愚で、仕事をさしても半人前も出来ない程ののろまだつた。人々からは相手にされずカラ川流しにすら入れなかつた。運命は皮肉だ。それが却つて幸ひしてか、彼の家は源兵衛邸のすぐ隣り、崩壊した山の中央にありながら、当然埋没すべきだのに不思議にも何等の損傷も受けなかつた。

高峯の崩壊した土砂や、岩石は東西三百三十米、南北二百二十米の広大な地域に拡がつて、藤原川をせき止めて、附近一帯は見る見る中に渺々たる湖水に変じた。民家の多くは浸水し、やがて水面は屋根よりも高く蒲団を背負ふ者、箪司をかく者、炊事道具をになふ者、老いも若きも入り乱れて、山の中腹に避難した。中には倉の屋根に穴を開け、米、大豆などの穀物を運んだものさへあつた。

〔物部村志〕〈松本実編、昭38〉

時は天明八年七月二十六日、まだ明けきらぬうちに藤原山の頂上と思われる方から怪しい声がして「行くぞ、行くぞー」と叫ぶものがある。何物だろうと耳をそば立てるいとまもなく、天地も裂ける様な大音響と共に神子ケ平山という藤原山より尚二三十町ばかりかみ手の大山が一時に崩れて、源兵衛宅の後になだれかかった。さすがの源兵衛ものがれることが出来ず、一家二十八人は一人も残らず埋まってしまった。のみならずその余勢は藤原川の水をせき止めたので、付近一帯はみるみるうちに湖水と変り、逆巻く水は滔々と上流に押寄せ、二年の後ようやく決壊して水量が減じたという。此の時幸にして助かった者は泣く泣く僅かの家財をまとめて上久保に転住した。

49 寛永四年七月二十六日（1792－Ⅸ－12，2375830）、高岡郡に暴風雨山崩れあり。

〔池川年代記〕〈竹本源治校訂〉

一、寛政四年丑子七月二十六日、神風神雨古今まれ成、大荒にて山岳崩れ深山は七分根こけ、中折れ、家傷満足の家は更に無し、草木吹散りかれ山の如也。

〔津野山異談続編〕〈中越穂太郎著、昭30〉

寛政年間、四万川中野川大地すべり連日続く

家は呑まれ、田地変じて山岳となる。悲惨全く眼もあてられず、住民等　路山古城に避難す。是蛇王権現の怒りなりとし神号を竜王権現と呼び四万川村民総氏子となって尊び奉る旨を奏上し神の怒り和ぎ地すべり止る　……と考う。

○

ところで安永五年中の川の「池が峠」の大決潰ありその被害大、人々は神の怒りと考えて祀を建て祭ったが寛政年間、今度は大の地すべりあり続いて山崩れあり部落民は「しまがうね」にむしろを敷いて避難し恐れ戦く。雨も風もないのに大音響と共に山は崩れ川はせかれ水は怒って田畑を荒す。再び起る大音響に大木も根こそぎ倒れて畑に腹ばう。先祖代代住み慣れた茅葺きの家も岩石に打たれ土砂に隠れ見る影もなし。霊媒者は云う。「中の川部落の四郎衛門、我が住む池にカナハダを投げこみ大蛇の住いを荒せしは不都合千万、是より部落を崩し野原と化す」と。

毎日々々此の山崩れを「島がうね」から戦きつゝ眺める部落民は生きた心地とてはなかった。四万川の他部落の人々は飯や団子を持って御見舞に出かけるという始末。

50 文化六年四月十日（1809－Ⅴ－23，2381926）、土佐に地震あり。

〔燧袋〕〈楠瀬大枝筆、高知市民図書館刊〉

（〇文化六年）四月十日巳の中刻小ク地震

51 文化七年八月廿四日（1810－Ⅸ－22，2382413）、土佐に地震あり

〔燧袋〕

（〇文化七年）八月廿四日未ノ中刻地震

52 文化九年三月十日（1812－Ⅳ－21，2382990）、伊予松山を中心とする強い地震あり、土佐、因幡でも強く感じた。土佐は家屋に小被害あり余震が三月下旬まで続く。〈（Ⅲ－195～196）、このうち土佐の〔宮地日記〕には余震が三月二十三日まで続いたこと、幡多郡中村では高知城下より格別強かったと記してある。〉

〔燧袋〕

〇文化九年三月十日

同夜戌ノ上刻地震寅ノ時迄都合五度震初度ハよほとゆりたる也土蔵の

かべ屋根の瓦など落し所もあり古き家ハつふれたるも有よし就中からつやにおひたゝしく陶器ヲ損し醤油酒あふらなと売所に大分まけ候よし也五十年前の地震おほきかりしか共是ほとにハ無之由也

三月十二日大雨未ノ刻少し地震

三月十三日雨卯ノ中刻地震これハ昨日ノよりハよほと強し浜ニハ津波入来ルとて騒動之由種崎ノ浦人仁井田へにけ来ルト云々当地も今夜寅ノ刻潮入と云て婦女子ことの外かまひすし赤紙ノのほりに

浪風子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥無し

書て戸口へ立れハ其災難をのかるゝといひて家々にこしらへのゝしる

深尾ノ玉江といふ妖女かいひ出セしと云々かやうの口ばくちさきさきも多少ある事也赤岡安喜なと其余浦々大騒動家ヲあけ資材道具を山分へ馬ニつけ人担ヒ大さわきのよし也

三月廿日ノ夜風雨廿一日之朝少し地震十日大ゆり以来ハ今日迄少々ツゝ震上下灘筋ハ高知よりもひとく幡多郡ハ中村御蔵などもよほといたミ候由也讃州金毘羅辺もよほ震たるよし也今ニ津浪ニ恐人気おたやかならぬ事也

〔新井来助日記〕〈「北川風土記」（安岡大六著）所収、原本は羽根村竹崎重三所蔵〉

文化九壬申年、三月天気よし、十日晩五つ時に大地震、其夜十度ゆる。夫より少々づつゆる。百六年以前宝永四亥の大地震に続くと云う。浦辺は山へ逃る者多く騒動する。

○〔安芸郡史考〕にこの文の引用あり。

〔森沢保如家文書〕〈桑田精一筆写、大15、原本は文化十三年成立〉

文化九年申ノ年三月十日ノ夜五ツ時大地震致ス大坂迄ユリ申也シカシ九州ハ地震セスト云。

〔津野山異談続編〕〈中越穂太郎著、昭30〉

文化九年申三月十日大地震、高知城の石垣も崩れる。

〔香北町史〕〈松本実編、昭43〉

（○年表中）三月大地震

53 文化九年四月二十八日（1812－Ⅳ－7，2383037）、同年七月十七日（1812－Ⅶ－23，2383114）、および同年十月九日（1812－Ⅹ－12，2383195）、土佐に有感地震あり。

〔燧袋〕

○文化九年四月

廿八日ノ夜五ツ頃小地震

○文化九年七月十七日

今朝六ツ前地震之由、熟睡故不知。

○文化九年十月九日

同日七ツ半頃地震（○夕方）

54 文化十二年七月六日（1815－Ⅷ－15，2384201）、土佐に暴風雨おそい、物部川、仁淀川流域各所で山崩れおこる。

〔燧袋〕

○文化十二年七月十一日

十一日早天

周右衛門様切レ口御見合御出収辺御駕馬等之御用意もなし○橋沢書状

十二日ニ到来ニ淀川洪水高岡外輪堤中島渡場迄すへて崩レ渡場ノ家皆皆流失野中迅ノ刎二ツ此度始テ崩云々家テ流したる者も家財の寧ハ不言此ハネハ中島村之命なりしとて嘆惜スト云々橘次方も床迄水来ル例の戸波より蓮池迄一マイの水ニて其のまへト云々○安喜洪水僧津村ニて七軒井ノ口ニて一軒流レ土居家中へも坐上へ水来ル云々○安田川洪水家四十軒計流失コレモ人いたミハ無之云々

同日注進矢文ト云々

生山久保大崩物部川の水ハ此山潮と云々　御山方役人杉本助八コレハ井口村田村庄屋又十郎養子也　幷杣流しの天八十八計行方しれすト風聞有之杉本幷杣等ハ無事韮生郷久保ノ内土居番ト云所山大崩ニ而土人四十余人埋死内孤独者壱人助カルト云々久枝ニテ七人惣而百余人流死云々　〇此節水難ノ民即餓ニ付御救ノ御作配のミ也物部川筋安喜谷中などハ已屋を打それニて粥或ハ米御渡云々

〔神社明細帳〕〈県図、K175－7〉
高知県土佐国香美郡佐古村戸板嶋字宮ノ丸鎮座
村社国史現在社
堰　神社

文化十二亥秋物部川洪水ハ七月六日夜ヨリ風雨烈シク水源十四里奥ヨリ山ヲ崩シ木ヲコカシ上ハ山田堰ヨリ下モ川尻迄両堰無残所郷村広ク大海トナリ家ヲ破リ入ヲ損ヒ流失アクルニイトマアラズ、前代未聞ニ変災成リ中ニモ戸板嶋ハ水ナギリ山ノ如ク、水底ト見ユルニ漸ク九日ノ日暮ニ及ンテ稍々水落人命覚束ナク又ハ飢餓ノ□モ有ヤ急ギ川達ノ者ヲマネキ船ヲ寄岩積ノ社ニコギ付シニ不思儀ナル哉去刻ハ水高ク仏レ岩上ニ御厨子幣一本其儘有誠ニ希有ノ事成哉「本此社地大成巌ナリ北岩ヲ則御社体成り迚御岩権現ト崇メ来ヌト也、又此社跡水勢ノ突当ヲ受テ肝要ノ場也、往年モ此辺大ニ破損シ御普請ノ節御先君様御来駕ニ付御参詣被為遊御額御寄進有之シナリ」、夫ヨリ戸板嶋村ニ入人痛ミアラント尋ルニ老幼一人モ怪我ナカリシハ、神徳ノ加護ナラン、本社拝殿等流レ来リ人家ニ懸リシヲ村人是ニテ水難除レシメタマフ。

〔暁霞村史〕〈松本実編、昭30、香美郡〉
天災も度々起ったが、ひどかったのは文化十二年の年の大水害で「七月六日の晩より九日まで大雨、しおう電雷鳴り、七日の日トチが谷へつえこみ、六平と申す者の家屋敷つえに埋り候えども人のいたみは一人もなし。」又川向うの太郎丸においては「大風雨、洪水、山しお所々ぬけ出ること大方ならず、岩がら抜けおちる。時は酉の刻、山震動して水煙白雲の如し。先後沢々畠、円岡、山下、府川造り、山根、谷川のへだてなく、洪水大海の如くにしてつえ落つれば、伝七家は埋れども大木重りてせきとなる。人々この難を避けんために、皆とるものもとりあえず命こそ物種よと、簑を着れども笠をつけず、笠を着れども結びをしめず風に吹き取られ、素肌になりて田の中あぜの分ちなく、夢路をたどる心地して、親をすて子を忘れ、我先にと野尻をさしてのがれける。山本谷大水故、橋々ことごとくおちて、谷川の水矢をいる如し。はしごをもって橋とし、手をひき渡るもあり、負い渡るもあり、田の中をたて横にかけるものあり、大方ならぬ震動なり」と。続いて「八月九日に山しをぬけこみ、シタク保、ヲカヤシキ本田一反四十代、新田とも損田になる。トチガ谷本田十五代、新田十五代ばかりつえ、ノシリ五代残らず損田になる。ジョウゲ本田十八代フジカフチ十五代新田共捐田になる。上ミヤ十代、川ナロ四十代、川口一反十代うち二十代捐田、その他大峯名本屋敷少々づゝ捐田、高畑四代捐田。郷中村々おびたゞしく御国半石損田になる。笹村申上は人家共山しおぬけこみ、大川つきとめ候時、人は川より向うへ上り申候につき、まことにふしぎ、きたいのわけなるぞ、神仏の御恵みぞと申すことなり。人のいたみは一人もなし」という大きな災危の年であった。

〔総合美良布文化史〕〈美良布第一尋常高等小学校、昭11、香美郡〉
天災も度々起ったが、ひどかったのは文化十二年の亥の年の大水害で「天地の間の事覚附」に七月六日の晩より九日まで大雨、しおう雷鳴り七日の日トチが谷へつえこみ、六平と申す者の家やしきつえにうもり候へども人のいたみは一人もなし」とみえ又太九邑誌に「大風雨・洪水・山しお所々ぬけ出ること大方ならず、岩がらぬけ落ちる。時は酉の刻、山震動して水煙白雲の如し。先後、沢ケ畠、九岡山下、府川造り、山根谷川、のへだてなく、洪水大海の如くにしてつえ落つれば、伝七家はうもれども大木かさなりてせきとなる。人々この難をさけんために、皆と

るもののもとりかえず、命こそ物種よと蓑を着れども笠をつけず、笠を着れども結びをしめず風に吹きとられ、すはだになりて田の中あぜの分ちなく、夢路をたどる心地して、親をすて子を忘れ、我先にと野尻をさしてのがれける。山本谷大水故、橋々ことごとく落ちて、谷川の水矢をいる如し。はしごをもって橋とし、手を引きわたるもあり、おい渡るもあり、田の中をたて横にかけるもあり、大方ならぬ騒動なり」と

55 文化十二年八月九日（1815－Ⅸ－11，2384228）、香美郡に山崩れあり。

〔総合美良布文化史〕〈美良布第一尋常高等小学校、昭11、香美郡〉

続いて「天地の間の事覚附」に「八月九日に山しおぬけこみ、シタク保、ヲカヤシキ本田一反四十代、新田とも損田になる。トチガ各本田十五代、新田十五代ばかりつえ、ノシリ五代残らず損田になる。ジョウゲ本田十八代、フジカフチ十五代新田共損田になる。上ミヤ十代、川ナロ四十代、川口一反十代のうち二十代損田、その他火峯名本屋敷少々づつ損田、高畑四代損田。郷中おびただしく御国半石損田になる。笹村申上は人家共山しおぬけこみ、大川つきとめ□□人は川より向うへ上り申し候につき、まことにふしぎきたいのわけなるぞ、神仏の御恵みぞと申すことなり。人のいたみは一人もなし」という大きな災厄の年でかった。

56 文化十四年（1817）二月、安芸郡に地震あり、

〔新井来助日記〕〈羽根村〉

文化十四丁丑年、二月地震あり。

57 文政六年（1823）、高岡郡に大洪水あり、仁淀村で山崩れ、新湖出現する。

〔仁淀村史〕〈編纂委、昭44〉

文政六年（一八二三）に大洪水が起こり、そのとき、犬飼が大崩壊し、岩屋川をせきとめたため、湖水と化し、下流である窪居野部落が危険となったので、九軒というものが、先祖代々住みなれた土地を離れて、松原に移住するの止むなきに至った。このとき深尾佐川領主のゆるしをうけて、松原の大自然林にいどんで、あらゆる苦難を克服して、開拓に余念がなかった。ここが松林であったことから、松原と名づけ、今日の部落の基礎を築いたのである。

58 文政六年十二月二十七日（1824－Ⅰ－27，2387288）、大阪、広島、高知に地震あり。〈（Ⅲ－243）〉

〔燧袋〕

○文政六年十二月

廿七日、雨、午中刻地震、戌下刻地震。

59 文政六年五月十四日（1823－Ⅵ－22，2387069）、同年六月二日（Ⅶ－9，2387086）、三日、および同年十一月三十日（Ⅻ－31，2387261）、高知に地震あり。

〔燧袋〕

○文政六年五月

十四日、雨、九ツ前地震、雨止

○文政六年六月

同二日晴、亥ノ刻地震

同三日晴、申ノ刻地震

○文政六年十一月

同卅日、雨、六ツ過地震

60 文政十年七月六日（1827－Ⅶ－27，2388596）、香美郡に大洪水、山崩れあり。

〔総合美良布文化史〕〈美良布第一尋常高等小学校、昭11、香美郡〉
文政十年七月にも大暴風雨があり、特に六日に柚ノ木の大己屋をおそった集中豪雨は夜に入って益々はげしく、大洪水が岡をひたし山を猛威をふるったので、人々は相たづさえて柚ノ木山頂に難をさけ、ようやく命を全うした。翌日水が落ちたので帰ってみると、家や耕地はことごとく泥土に埋り手の施しようがなかった。早速藩庁に惨状を報告し、藩からは執政が視察に来たが、復旧の見通しがつかなかったので住民を西部の郡へ移住させたという。
○「香北町史」に同一文あり。

61 文政十年十一月一日（1827－Ⅺ－18，2388709）、高知に地震あり。

〔燧袋〕
○文政十年
十一月朔日、晴、申刻地震

62 天保元年七月二日（1830－Ⅷ－19，2389684）、京都に大地震あり、死者二百八十人を出す。〈（Ⅲ－286～391）、このうち（Ⅲ－289）〔御当家年表〕は山内候の記録である。〉

〔元越口番人代、村山藤兵衛手帳〕〈文政十年七月〉
文政十三年七月一日より七日迄、京都大地震

〔池川年代記〕〈竹本源治校訂〉
一、天保二辛卯年、京都大地震に而屏、門、蔵、御館大傷、同七月迄震つづく。然に当国辺は少しもゆらず雖地震と遠方懸て震物に不有也。
○天保元年

63 天保二年六月十四日（1831－Ⅶ－22，2390021）、吾川郡に洪水あり山崩れおこる。

〔池川年代記〕〈竹本源治校訂〉
六月霖雨にて十四日より荒雨と成、十五六七日神雨甚しく少も無止時無上の洪水にて、山岳崩れ河添の諸作流る。

64 天保三年九月十一日（1832－Ⅹ－4，2390461）安芸郡に津波おそう。

〔室戸町誌〕〈編集委、昭37〉
天保三年（一八三二）九月十一日津浪おし寄せて室津港再び大破した。
（翌年修築）

〔安芸郡史考〕〈安岡大六著、昭30〉
天保三年（一八三二）九月十一日津浪があって、津呂・室津の両港が破損し、翌年修築したが、天保八年（一八三七）八月六日大浪立ち、両港は又も大破した。

65 天保九年（1838）高岡郡東津野村に山崩れあり。

〔津野山異談続編〕〈中越穂太郎著、昭30〉
天保九年、船戸村に大地すべり山崩れあり。
○「東津野村史上」に同一文あり

66 弘化二年八月五日（1845－Ⅸ－6，2395181）、香美郡山崩れあり。

〔大変記〕〈県図、K 254－22、香美郡〉
カ様の山汐（○安政四年七月二十二日の高岡郡の山汐をさす）去弘化二年乙巳八月五日ニも香我美郡東川始其近村惣山より起ル、山ニはウネタニあり、溶（○つつこ）よりは不出、谷々悉ク八九目位イより水沸出ル、余り大雨降水川ニ不合東川より川末迄田も川もワカチなく一面原ラ押川筋損田不

及云ニ、王子村田丁真中へこみイアケ損田夥敷出来、半免許より始二年且ハ三年御免許あり、此村□たる人の云ニは是社山汐ト申者なりト云々其後又高岡郡伊野川滝へも山潮出たるとも云

67 弘化三年四月二十三日（1846－V－18，2395435）、同十二月八日、（1847－I－24，2395686）、および同十二月十四日(I－30，2395692)高知に地震あり。

〔万雑控〕〈県図、K 254 － 2〉
○弘化三年四月
廿三日、曇、同夜七ツ前地震
○十二月
八日、晴、七ツ過時余程地震スル
十四日、曇、同夜四ツ過時地震。

68 弘化四年二月四日（1847－Ⅲ－20，2395741）、高知に強い地震あり

〔万雑控〕〈県図、K254－2〉
同（○弘化四年二月）四日、日和、同夜五ツ過時余程大地震夫より朝六ツ迄さんさんゆる。

69 嘉永元年五月八日（1848－Ⅵ－8，2396187）と十一日、高知に地震あり。

〔万雑控〕〈県図、K254－2〉
同（○嘉永元年五月）八日、曇、同夜七ツ頃余程地震
同（○五月）十一日、雨、同夜八ツ頃余程地震

70 安政元年六月十四日（1854－Ⅶ－8，2398408）、伊賀、伊勢、大和を中心とする大地震あり、伊賀、上野、奈良、郡山、四日市、福井で多くの死者を出した。「安政伊賀地震」

〔森沢保如家文書〕〈桑田精一筆写、大15、未尾に岡本屋喜代亟蔵書を写したものという注書きがある〉
奈良
寅六月十四日夜八ツ時ヨリユリ始メ明六ツ時迄少々宛フルヒ十五日ノ朝五ツ時ヨリ大地震ニテ町家一軒モ無事ナルハナシ勿論一人モ家内ニ居ル事ナラズ皆々野亦ハ興福寺其外広キ明地ナドニテ夜ヲ明カシ大道往来ノ者一人モナク皆々内を貫ヨセイヅレニ居ルトモ不分毎夜々々野宿ニテ目モアテヲレヌ次第ナリ、南方清水通リ不残家クズレ木辻四ツ辻ヨリ西十軒斗リ崩レ鳴川町ニテ二歩通リ残リ北ノ方西手貝通リ南北大崩レ川久保町大崩家二軒残ル中ノ方細川町北向町北風呂辻子町右三町別シテ大崩其内ニモ三条通リヨリ北ハ少々崩レ都テ奈良中ノ大損シ前代未聞ノ大変ナリ死人風二百五十人小児五十人ケガ人数シレズ古市木津モ家四五軒残ル十六日暮方迄ニ七十三度ノ大地震ナリ。
伊賀
上野十四日夜九ツ半時ヨリ大地震コリ始メ御城大手門大ニ損シ市町ハ風六歩通崩レ四歩通リハヒシニナリ猶又鍵ノ辻ヨリ出火ニテ黒門町前迄焼失ニ及ブ夫ヨリ嶋ノ原ト云処ヨリ大川原ト云処迄螺ノタメニ一面ノ泥海ノ如ク其泥乱筆ニ尽シガタク十六日暮方迄ニ七十五度ノ地震ナリ
郡山幷南大和
六月十四日夜九ツ時ヨリ少々ゆり如メハツ時ニ大地震柳町一丁目ヨリ同四丁目迄家数風三十八九軒クヅレ其外市町風三歩通リ家崩レ其外奈良同様ナリ死人凡百二三十小児十七八人ケガ人多シ誠ニ哀至極ナリ是モ十六日暮方迄ニ七十三度ユル南大和ユリ出シ同時ケガ人死人ナシ家少々クツレサ程ノ事モナシ。
江州
六月十四日夜九ツ時ヨリ少々ユリ始メ七ツヨリ大地震ニテ三井寺下ヨリ尾花川ト申処迄家数百軒余崩レ其外膳所ノ御城少々損シ土山ナドハ四五

軒宛七八ケ所崩レ此内ノ人六歩通ヲシニウタレ四歩ハ助ルヌ石山ハ別シテ大成岩ナドモ崩レ落誠ニ大損ジ其外御城下在町大損ジ是モ十六日暮方迄大小トモ六十八度ユル。

勢州四日市

六月十六日ノ夜四ツ時ユリ始メ暮六ツ時ヨリ大地震トナリ家数三百軒余崩レ昼五ツ時ヨリ出火ニテ家数四百軒余焼失死人凡百四五十人シレザル人二百人余其外勢州尾州其辺ノ国々大ニソンジ候。

越前福井

六月十三日五ツ時ヨリ塩町貸屋町ヨリ出火東西南北共不残焼失其朝大風ニテ九十九橋々ヨリ二百丁斗寺院百ケ所両本願寺共焼失近在凡十ケ所焼失其夜四ツ時ニ鎮ル、又十四日ノ夜八ツ時ヨリ大地震田地等モ泥海ト成諸所家崩レ死人凡四五十人誠ニ々々其混乱筆ニ尽シガタク十六日暮迄ニ大小六十七八度ユル

京大阪堺河内紀州播州丹波丹後其外国々少々宛ノ木同ハアレドモ大テイ同時同格ノ大地雲誠ニ稀ナル珍事

〔大変記〕〈県図、K 254－22〉

一、同年六月十四日子刻至良半時斗小サキ地震スルヌ寅刻ニも小シ之淘あり此時江戸道中伊勢尾張其余諸国も殊之外之大地震ニ而夥敷家倒レ人傷多シト哉就中四日市ニハ諸事傷数不知ト哉扨又四日市より讃州川之江迄里数凡九十里歟若は百里位イモ有之哉往来人六月十八日ニ四日市を出足川ノ上江同廿八日着夫迄地震も震動も不絶有ト云御当国江入(カ)而は右大変之気もなくト哉此他国大変ニ大坂人は地震ニ恐れ船ニ緊高名者たるト哉

71 安政元年十一月四日（1854－Ⅺ－23，2398576）、朝九時ごろ、熊野灘、遠州沖、および駿河湾湾奥にまで及ぶ海域を震源とする巨大地震が発生し、東海地方全般、天竜川流域にそって松本まで、および富士川にそって甲府までの地域での家屋被害が特に多く出た。地震後大津波が発生し、伊豆下田、内浦清水、浜名湖口地方、熊野地方などでは多くの家屋が流失した。土佐でも強い地震を感じ、津波の余波を受けた。「安政東海地震」

翌十一月五日（1854－Ⅺ－24，2398577）夕刻、四国沖、紀伊水道沖を震域とする巨大地震がおきた。紀伊田辺、大阪、伊予松山城下、丸亀徳島、高知をはじめとして南近畿、四国の各地で倒壊家屋が出た、地震後南関東から九州に至る沿岸地方に大津波がおそい、紀伊、阿波、大阪土佐の各地で流失家屋が出た。室戸岬付近で土地の降起、高知以西の海岸で沈下が認められた。土佐国宇佐では十年をこえる期間、余震が観測された。「安政南海地震」。〈（Ⅳ－75～468）、このうち（Ⅳ－122～124）には〔続地震雑纂〕のうちの土佐の消息記事が、（Ⅳ－160～167）、には土佐藩士細川盈進筆の〔地震日記〕が、（Ⅳ－167～182）には〔三災録〕の土佐国記事が、（Ⅳ－189～192）には上の加江の〔利岡清左衛記録〕が、（Ⅳ－193）には室津の〔久保野繁馬所蔵記録〕が、（Ⅳ－194～210）には江口具渚の〔大変略記〕が所収されている。この〔大変略記〕は「史料」では徳島の史料と記してあるが、実は高知で書かれたものであるらしく、浦戸、宇佐、須崎など土佐国の地名が多く出てくる。原本は現在高知県立図書館に所蔵されている。さらに（Ⅳ－273）には〔高知県下に於ける津浪災害予防施設に就て〕が、（Ⅳ－308～327）には稲毛実筆の〔三災録抄録〕が、（Ⅳ－355）には大方町の〔安政大地震碑〕と、宇佐萩谷の〔津浪の碑〕が、（Ⅳ－379～383）に〔嘉永七寅大変記〕が、（Ⅳ－408～409）には〔浦戸港沿岸震浪記〕が、（Ⅳ－422～426）には〔玉簪花知気種〕が、（Ⅳ－435）には〔九桂草堂随筆〕が、（Ⅳ－447～448）には〔土佐地震月表〕が（Ⅳ－451～454）には〔温知録〕が、（Ⅳ－459）には〔土佐古今の地震〕が、収録されていて、おのおの土佐の事情を伝えている。〉

1854年12月23日，24日，25日の潮汐表

地点	H_0	満潮		干潮	
室戸岬	109 cm	23日9時9分	172 cm	23日2時9分	−12 cm
		23日19時59分	168 cm	23日14時35分	89 cm
		24日9時57分	165 cm	24日2時57分	0 cm
		24日20時53分	158 cm	24日15時27分	88 cm
		25日10時45分	158 cm	25日3時47分	17 cm
高知	110 cm	23日9時5分	170 cm	23日2時8分	−13 cm
		23日19時58分	168 cm	23日14時33分	86 cm
		24日9時52分	164 cm	24日2時56分	−1 cm
		24日20時52分	157 cm	24日15時26分	86 cm
		25日10時41分	157 cm	25日3時46分	16 cm
土佐清水	102 cm	23日9時5分	176 cm	23日2時12分	−12 cm
		23日20時3分	172 cm	23日14時40分	87 cm
		24日9時53分	168 cm	24日3時0分	0 cm
		24日20時57分	161 cm	24日15時33分	86 cm
		25日10時42分	161 cm	25日3時51分	17 cm

〔吾桑村の歴史と伝説，伝承〕〈橋田定男編，昭25〉

宝永四年の地震から百五十年を経た孝明天皇の安政元年申寅十一月五日，又大地震がありました。前日五日は朝五ツ刻（午前八時）小地震がありましたが気にも止めず須崎の浜の蛭子祭の大相撲見物に人々は出かけました，その頃から潮が狂い河川に逆流し始め人々は恐れて早くも山え逃げる者もありました，七ツ頃（午后四時）頃より夜にかけて弱震数回あり不安の中に一夜は明け五日となりました，この日空は晴れ渡り風も吹かず人々は漸く安心しましたが十一月とは思はれない暑さでした。午后四時頃になって突如大地震が起り，地面は数尺も裂けて中から潮を吹き上げ土砂を飛ばし，人家はみるみる倒れ山崩で死ぬる者かず知れずその上一時間後には山の如き津浪が来襲し，人々は取る物もとりあえず命からがら近くの山え走せ登り，泣く者どなる者父を呼び声，子を捜す顔の叫び等々凄惨な地獄絵を現出しました。

渦巻き来る津浪は引いては満ち満ちては引き前後七八回にも及び一進一退の都度家を漂はし船を浮べその有様は形容する言葉もありませんでした。此の寅の大変の覚え書きが山崎にあります。それに依りますと，山崎桃仙翁はこの日親友中平善之助氏（土崎庄屋の子）と二人で猟銃をかついで押岡に遊び丁度この大変に遭遇し津浪進退の状況を押岡で見たと申します。又吾井郷竹崎の下方に土崎町の人家が流れてき東西に並んでいた。後日土崎の中平家を尋ねたところ長押に藻屑がかゝっていたという。又松ケ瀬の上の方に須崎の船が流れて来ていたし，赤崎の下にはウツボ，百貫の腐敗したものが累々として臭気堪しきものがあったと言います。この時には吾桑の被害も相当ひどかった様で家の流されたものが数多くあったと言います。

〔安政大地震，絵本大変記〕〈県図，K 453−13，前ノ浜，本文書の解読にあたって宇佐美龍夫教授のお世話になった。〉

義道侍腹

君か為　をしからさりし命とハ
地震津浪に　出食ぬ人

安政元年寅中五日のゆふへに四国地及大地震始り翌卯中冬ニ至まで昼夜止時なふして幾万人の愁ひ大方ならす山川海郷浦市中一円たり鳴呼かなしひかなかなしひかな歎へし哀むへし高府の下町一度に崩れとつともえ立火焔乃最中親子兄弟夫婦子孫主従尊卑の差別なく家に打たれ木に鋪かれ土蔵をかふり二階に其儘逃行もの亦は火道を切られ叫ひくるしむ有様は八艱地獄に呵責の有様たまたまのかれ生有も我身を夢とも現とも志らぬ山路にさまよふて，夫をたつね子を尋ね殿よさねともなくこゑの山路に充て哀れ也。光陰の移り替も世の習ひ死に遅れた老若男女半死半生の者ともは元の屋しきに杭を建柱となして苫を霰雨露を凌も凌ぬも喰事は更にあらされは御補の粥により少は□ゆるゝゝと年も替れ婆卯のはるに

門松たてす七五三引す死別れたる尊霊へ念仏申斗はるにかゞる大変に落
ふれたる人気を表ん為絵本大変記と題号して児童の機嫌直し町々を繁昌
のこと祈らむため人々の筆跡を求め白紙の残りたらん所へ百人首に事よ
セ狂哥を加へとつと笑ふハ蛭子大国福のかみの旦那さんお気にさわるは
御免そふ老三拍百拝（〇以下」印で原文ページの切れ目を表わす）

明畑の仮屋の□□越もる霜につまや子供の尻は冷つゝ
天地転倒」
柿本一人者
ゆる迚も起してくれる人はなしなかななかしよを独案じる」
田子のこへいれて城下へ出て見ればたゝ丸焼け乃灰はふりつゝ
山辺商人」
山合の里人
やまも岩もくつれておつる大地震はけしかれとは祈らぬものを」
潮江の河原に出しておく荷物大汐見れハ志ろじろとして
鰯場家持（しじゃこばのいえもち）」
してあみとられし浪に数々の見れは拾ふてあまの命
網引仲間（あみひきのなかま）」
貧家の幸
わかいほはほ柴多立□て良しかもど萬地震によきとひともいふなり」
くるい浪直りにけりといふうちもむたひ七度ゆらぬよそなき
浦辺小町」
久鋪振小屋出（ひさしぶりのこやだし）
本の家に移りにけれといふものの己が身おもへに寝られこそ勢年せね
関泣（せきなき）
妻や子が汐と火事に別れては命有りやト又泣もかな」
□□
満さりはらにかゆの地震のあるものを汐干ていつもわかからた」
哀ともいふべきひとは死うせて身のほどしらぬ破我ぞ残れり
不孝之朝臣」
無難の家持
潮江にワたせるはしの中程であか起を見れば余ほど焼たり」
辺路宿
土佐なだは辺路ふ道へ汐か来てまづおとまりとしばし留めん」
其時と死ぬ覚悟ニ己屋をたち踏あらしたる麦をしぞおもふ
瓦葺之難大臣
孝行息子
ふた親を野に負ひ出して介抱す我身ばかりに雪は降つゝ」
高知市人
逃わかれ小高坂山の峯におる汐干と聞ば早帰り来む」
織延内侍（おりのべのないし）
思ふへは今機織りてなにかせむ綿は高ふてあはんとぞおもふ」
棺屋安売
ゆるからに数人々の死ぬれバ安うりにして逃んとぞおもふ」
家中先生
此度は負つかたひつ提さして人におくれな逃よとぞいふ」
庄屋見識
源のきれて流れぬいづみ口苗代水にこまるかといふ」
焼跡小屋懸朝臣
春雨の降夜淋しさまさりけり人魂も出りや幽霊も来ぬ」
浦辺朝臣
浦家屋の軒による浪よるならて菅ならなくに人や流れん」
汐こぬといふてもきかす逃たよとたゝ子供等をづれて移れり
落付自悟」
高持大津内侍
心あてに逃しやおらむ機屋にもおり捨て有しら糸のくだ」
坂上声々
あた呼ひになるとも志らす大汐と麓の町へふれる高声」

春道津良幾

山道は去年の地震に岩こけてたちんもあわぬ物と成けり」

貯之置風

誰もかもしる人そなき宝永の汐のはなしニ記録出しつゝ」

山路深簸

其わ来また大ゆ里と人毎に虎の住居にすむよしもかな」

卯の春季

冬の日は唯ゆりながら明ぬれと春めきもせて家やめりつく」

施行

白粥の釜をかけたる大手筋取巻人を餓鬼とそ思ふ」

大震

わらはるも事はおもわす飛ひ出ん人よりも我命をしけれ」

ゆすらるゝ身を波おもハす近付乃うたれて死る思そかなしき

盛乃仲間呂」

汐こんとわめいて逃る人声に家内残らず立出るかな

億病家主」

かなしけれ焼る人ぞ木に敷れ我身斗の事ニあらねと

大屋乃戸口」

ワが家は汐干しニ見ゆれとも人の住居のなるよしもかな

葛島家持」

年季奉公朝臣

弟来て焼たる跡を尋れば只兄姉の骨ぞ残れる」

強欲大臣兼輔

北風に棚曳火事の絶間より逃出る人の顔の黒さよ」

高岡も町の家蔵さけにけり其儘にしてたてすも有哉

前中納言政安」

下地家持

床下に汐満来ればかれきすこ鱧鰺もわくさよりさよりと」

思ふえはまた此頃も恐ろしやうしと見しよの大地震かな

一人寝後家」

須崎浦人

我家は戸島の沖へ流されて潮見えたりまた隠れたり」

桂浜家持

浪のおと絶て干塩に成ぬれば津浪恐れて山の間に間に

新宅家主

百鋪や古き軒端は崩れても人の命の有そ目出たき

〔吾川郡村誌〕ハ「土佐遺事雑纂上」所収ノ

深浦池ハ長浜村元標ノ丑寅方字柏ニアリ其反別一反三畝歩其東西約廿間南北約二十五間周回約六十五間内海ニ通セリ

安政元年ノ地震マデハ泥沢ニシテ多少ノ紅白蓮妍ヲ争ヘリ然ルニ該震ニ罹リ当時殆ント海トナリシモ今日稍旧観ニ復セリ。

〔土佐遺事雑纂中〕

浦戸津浪標、浦戸村小字稲荷坂ニアリ。

右標柱ハ元稲荷神社ノ神門ナリシニ該震動ニ倒仆破折セラレルモノヲ請テ造営セリ、其大サ一囲円形ニシテ其高七尺許。

今土人ニ当年海嘯ノ状況ヲ聞クニ浦戸港口ヨリ来ルモノ概ネ三派トナリ一ハ磯崎ノ森ニ激スルニ因リテ字浦戸分ハ惨刻ニ至ラズ字柱浜市房ハ尤其衝ニ当ルヲ以チテ人家悉ク其流亡スル所トナレリ、翅人家ノミナラス巳ニ波戸場ニ掲シ潮流ノ為往々海トナリ云々モ当時既ニ該地ノ大半ヲ失ヘルモノヽ如シ、而シテ一ハ対北長岡郡種崎村ニ抵ルモ其並松多少茂生シ大ニ拒守シ罹害甚シカラズ一ハ港口ヲ過ギテ本村ノ西北部及藻洲潟村ニ衝突セリト云フ

地震行　竹酔処士

嘉永年甲寅冬十一月庚子夕地大震動山欲崩今日堪懐宝永昔旦見烈火起城東、灰燼城東幾千百不但財宝滅火中、害人害馬数千魄、又見海水浸郭西沈浸郭西幾田宅、不但民屋沈水中、漂米漂麦数千石、人得平土不能居、

閉戸走登山突兀親方尋子々尋親、可憐水火銷骸骨、吾亦尋児登北山、児幸免為黄泉客、山中相逢喜可知、後宵忍寒坐苔席、仰看明君深行仁、烹粥賜民満腹食、且営茅店住窮民象蒙雪霜白、天災既遍一国中、逢無餓莩是誰力。

乙卯狂詩　　暦七十六翁東浜戯作

大地震起去霜月、五度六度日驚人、況復水火ニ変有、八九分通富不貧、小屋仮住重数旬、老幼少安三四辰、極月晦未還正宅、十中七人不知春

家に帰りけるに庭もせに汐のたゝへ来るを

夏ならは涼しからんおにはたつみ
　霜降月に見るもめつらし

我やとのゆかまてしほのさしくれは
　厳島かとおもふあやしさ

或人の発句

地震して藪に臥寝や虎の暮

〔四国巡礼〕〈小林正盛著、昭7〉

船にて対岸の宇佐村に着して、宇佐村にて端午の幟の翻へる中にカツオ形の幟を見る風の変れるものもあるかなと行脚僧もちょっと驚かさる。途に文政の地震罹災者の為めに建てられたる六字名号の塔あり、坂を過ぐれば、直ちに高岡町に入る。

○安政の誤であろう。

〔土佐好古史談〕〈寺石正路著、昭2〉

又安政元年十一月五日所謂る寅歳の大地震は丁度午後四時の突発で上町川原角力の真最中であったとは当時遭難の老人より承はつた事であつた。

〔香南伝説散歩〕〈市原麟一郎編、昭51〉

傘松は、車の洪水にゃ負けたが、昔、夜須の町（まち）〔商店街付近一帯の総称〕が、白浜のようになった大津浪にゃ、見事生きのびたがの う。

その大津浪は嘉永七年いうきに、今から一一八年ばぁ前になるが、その年の十一月五日の午後四時頃〝天地も崩る如く〟と、記録されるほどの大地震のあとに、来たわけじゃが、此の時は、太平洋岸の西日本全体がやられて、大津浪は房総半島から、九州東岸までの海岸に押し寄せ、土佐沿岸も、軒並み洗われたが特に、手結・赤岡辺より西は、こじゃんとやられたらしい。

十ノ木〔部落名〕の小笠原さんくに残っちゅう日記にゃ「一仕事終わつて、馬を引いて帰りよったところが、急に大地が揺れだいて、人も馬も歩けんようになった」と、あるきに、たいちゃ揺れつろう。

町へんの者は〝亥の大変〟の話を、覚えちょったきに（嘉永七年より数えて、一四七年まえの宝永四年十月四日、南海道沖に大地震があり、その直後、夜須の町は大津浪に襲われた。宝永四年が〝亥〟であったので、世に〝亥の大変〟という）その時の例になろうて、大急ぎで観音山〔町の西方に有る約四十メートルほどの小山〕へ逃げ上ったところが、やっぱり津浪が来て、一番浪、二番浪でひと休みあって、三番浪で町一帯を、きれえに洗い流いたと。

この年が、寅年じゃったきに、それを〝寅の大変〟いうわけじゃが、その時の浪先は、浜から一・五キロメートルも入った。土居山の裾までとどいたいうきに、めっそうなもんよのう。

津浪いうたら、入ってくる時は、ムクムク水が、ふくれ上がっていくような感じで、どちらかいうたら静かにくるが、その引く時のえらいこと、家も木も何もかも、一思いに引きちぎり、ねじ切っていくそうな。

十ノ木へんの人は、そのゴーッ、バリバリ、ズシン、いう音を聞いて目の前の城山（じょうやま）が、崩れて来たかと思うた、いうきに、なんともすさまじいもんじゃっつろのう。

その頃の夜須の町にゃ、三百軒ばぁの家があって、かなり繁盛しよったらしいが、観音山寄りの四、五軒を残いて、二百五、六十軒というも

んが、アッというまものうに流され、手結（てい）の港周辺で百軒、千切（ちぎれ）〔部落名〕でも五軒流れたということじゃ。

町の者が逃げ上がった観音山は、見通しのえいくで、夜須全体の南半分ばぁは、ひと目に見えるくじゃぁきに、我が家が、押し潰ぶされ、引きちぎられて、夕闇のせまった。はるかな沖へ流れていくがを、ただただ呆けて見よったということで、まっこと無惨なことよのう。

ところが、三番浪で一瞬のうちに廃墟になった町跡に、残ったもんが二つあったと。

その一つが傘松じゃが、他の浜の松は根こそぎ流されたが、傘松は、そのたれ下がった枝の先に、箕（み）〔竹や藤づるなどを編んでつくり穀物や豆類を入れて、両手で揺り動かし、風であおって皮、ぬか、ごみなどを、ふるいのぞく農具〕を、一つ引っかけて、見事に残ったと。その姿は〝傘松の力強さと、人間の無力さ、哀われさを現わして、今でも目に浮かぶ〟と、安岡のお婆ァが、びっしりいいよったきに、よくよく心に残ったもんじゃろのう。

もう一つ残ったもんは、川村の銭蔵（ぜにぐら）よ。当時の川村は歳増（とします）屋いうで、造り酒屋をやりよって、えらいまっ盛りじゃつたきに、銭蔵には、いっつも天井へつかえるばぁ、銭が入っちょったそうな。ほんで銭の重みで蔵が流されざったいうて、たいちゃ評判になつたがのう。

この噂は遠方まで聞えたかしらん、その当時、高岡郡宇佐浦橋田真覚寺で、後年〝真覚寺日記〟いわれて、幕末・維新期の世相・風俗を研究するのに、貴重な文献となった日記を、井上静照いう坊さんが、つけよったわけじゃが、その中に

「夜須浦歳増屋といえる富家、去る寅年大変のみぎり、歳崩れず。あとにて見れば正銭一杯積み上げたる故、それにてつっぱりしていたりという。お国中にて、現金一番というほどの家なり……」

と、書いちゅうがのう。この〝お国中一番〟いうがは、ちくとおおげさにしても、銭の重みで流れざったがは、まことぜよ。

この歳は、そのまゝありよったけんど、十年ばぁ前に解体して、西山の北岡いう農家がたばこの乾燥場に建てなおして、今も使いゆうが、たかあながもちするもんのう。

まあ、こんなことで、家やら道具やらは、根こそぎのうなったが、そのわりに人の傷（いた）みが少のうてのう。それというのも、地震から津浪まで、一時間ばぁあったし、〝亥の大変〟の教訓が、まだ生きちょつたきにじゃおが、ほんでも十五、六人は流されたいうことじゃ。〝沖へ流失した死体、相わからず候〟と、記録にあるきに、どこまで流れていたもんやら……。気の毒なことよのう。

無事じゃった者は、一夜明けた六日から、跡片付けをはじめたが、なにさま、浪に洗われて、ノッペラボーの、なんちゃこなし。何から手をつけてえいやらわからん。ほんで行き先のない者は、なんとかなるまで観音山から下ちるわけにもいかいで、郷（ごう）〔夜須町北部〕から、ムシロやなにやかや借って来て、しばらく観音山におりよったと。

その時、炊出しに使うたいう大釜が、夜須中学校に残っちゅうが、その大釜が、人間のように口がきけたら、観音山の生活のもようなんか、詳しゅう聞けて、おもしろいと思うけんどのう。

さて、跡片付けも跡片付けじゃが、流された人も探がさにゃいかんし沖へいたら、ひょっとして、なんぞまだ使えるもんが浮いちゅうやらしれんと、何杯も船を出いて探しよったところが、三日目に、とっと沖の方に、なにやら浮きゆうもんがある。なんじゃお思うて近づいていたらどうやら屋根にかあらん。それをジッと見よったら、どうも屋根の上で動くもんがある。

「おい、なんぞ動きゆうぞ。早よう寄せてみよや」

いうて、どんどん近づいて行くと、それが人間じゃったと。

「早よう、早よう、まだ生きちゅうぞ」

と、あわてて、船へ引き上げてみると、これが、中屋銀次いう人で…。そうよ。今もあるあの中屋よ。

〔中屋は屋号。現当主は、常光健市さん（四九）。家業は漁具製造販売

で、創業は天保時代。健市さんは五代目で、銀次は二代目」

銀次は地震のあと、当座必要なものを持って、観音山へ逃げたけんど商売上のだいじな帳面なんかは、一ぺんに持てんばぁあったきに、そのまゝ置いて山へいたと。ほんで山の上から見ゆうに、一番浪、二番浪は大したこた無かったし、二番浪のあと、汐が三十丁ばぁも沖へ引いたもんじゃきに（一里は三十六丁、約四キロメートル）このまにと思うて、大急ぎで下りて来て、帳面を持てるばぁ持って、外へ出ると、すぐ近所の湊屋いうて、鶏卵問屋をしゆう、高橋仲蔵いう人にバッタリ会うて、

「ありゃ、銀次、おんしも下りて来ちょったかや」

「うん、仲蔵さん、早よういこ、三番が来るやら知れんきに」

いいゆうところへ三番が来て、これが町を根こそぎ持っていた大津浪じゃったきに、たまるか、二人共流されて……。

しばらく銀次は、必死にもがきよったら、何やら手にふれたもんがある。ようよそれにつかまって、どうもこれは屋根にかあらんと、気が付いた時、その屋根の向側から、ウンウンうなる声が聞えてくる。

「おいッ!!　そっちゃにおるがは、誰なら、わしは銀次じゃ、中屋の銀次じゃ」

「おう!!　銀次か、仲蔵じゃ」

「エッ、仲蔵さんつかよ。おまん大丈夫かよ」

「うん。ちくとどこやろ打ったようなけんど、こたない」

「えらいことになったのう。こりゃどうなるろうのう」

「どもこもなるか。とにかく手を離すな。この屋根が浮いちゅううちは死にゃせんきに」

「わしゃぁ大丈夫じゃが、仲蔵さんこそ気をつけよ」

いうような、やりとりがあって、まっくらい海の中で

「銀次よう」

「仲蔵さんよう」

と、声をかけおうて、一晩中流されよったが、夜明け前頃になって、仲蔵の声がせんようになったと。

「仲蔵さん、大丈夫かよ、仲蔵さん」

なんぼ呼んでも返事がない。

「とうとう仲蔵さんも沈んだか」

と、思うと、こおうて、こおうて、涙があとから、あとから出たいうがのう。

夜が明けてから見てみると、やっぱり仲蔵の姿は消えちょったが、明るうなったがで元気が出て、つかまっちゅう屋根を見ると、どうやら人間一人ばぁなら、上にあがれそうな屋根じゃったきに、その上へ這い上がって、

「死ぬるが先か。船に見つかるが先か」度胸を決めて待ちよったけんどその日はとうとう船が来いで、もう一晩、流れる屋根の上で待って、次の日の昼過ぎに、虫の息になっちょったところを、見つかったわけで、この時、銀次二十八才、仲蔵四十四才。

昔の十一月いうたら、旧暦のことじゃきに、もうたいちゃ冷やかっつろと思うけんど、その海の中で、二晩も生きちょったち、まこと若さよのう。大したもんじゃ。

そのあと、銀次は七十才まで生きて、明治三十三年十月五日に死んだが、銀次の経験を生かして、観音山の津浪記念碑には

〝思へば　天変あるまじき事ばかり　かたく　宝物家に残すとも　再び　我が家に帰るべからず　必ず　必ず　これ肝要なり〟

と、書いて、世人を戒めちょらよ。

この話は、古老の話を主にし、ところどころ、左記の資料で補足・訂正しながらまとめました。

家系ならびに履歴　〔夜須町十ノ木　小笠原家所有〕

大変地震扣帳　〔夜須町西山　有安家所有〕

嘉永津浪記念碑・碑文〔夜須町観音山〕

高知県災異誌　〔日本気象協会高知支部〕

なお、津浪は嘉永七年十一月五日のことで、同年十一月二十七日に、安政と改元されました。したがって、世にいう〝安政津浪〟は、〝嘉永

津浪〟というのが、正しい呼び方です。（採話　高橋涼介）

〔土佐遺聞録〕〈寺岩正路著、明42〉

安政元年十一月五日所謂寅の年大地震の大火人家千六百七十六軒焼失潰家更に多く火元数所一々枚挙し難し。

〔近世土佐遍路資料〕〈土佐民俗叢書3、土佐民俗学会、広辻清編、昭41〉

覚

此度之大変ニ付別而里前往還筋大破ニおよび辺路共順路難相成ニ付入込居ル所之地下役ヨリ覚書相添村継ヲ以可送出旨辺路街道地下役共江及不知ル条尚於脇道も無油断可遂詮議也。

安政元寅十一月十四日　　後藤助四郎

後川筋村ニ庄屋中

〔智隆和尚年譜付堀内氏略系〕〈市川豊八著、昭48、「須崎史談五」〉

智隆は俗名を堀内勇次といい、文化十三年（一八一六）六月三日、長岡郡仁井田村（現高知市）浄福寺に入り、剃髪して法名を智隆と改めた（〇中略）。

後、福生寺（現須崎市神田、子安地蔵地）の住職を経て、嘉永三年（一八五〇）十二月三日、三十五才の時、発生寺の住職となつた。

また、彼は宝永、安政両度の地震津波の大変により、多くの人命を失つたことを痛く嘆き、古屋竹原等と計り二大災害の概況をしるし、斯かる天災の時の心得となるものを、後世に残そうとし、土地の素封家（亀屋久蔵・鍛冶治助・橋本屋吉左衛門）の協力を得て、安政三年（一八五六）四十一才の時、大善寺の路傍に「宝永津波溺死者の塚」を建立した。

〔野中 兼山関係文書〕〈高知県文教協会刊、昭40〉

又南海岸種崎村に旧波止あり南方に向ふ構造石材五尺より三尺迄数年土中に埋没し其上而草木繁茂せしにより村民惣て之を知る者なし安政紀元地震の災怒涛の為に土砂流亡し初て其構造を観る茲に於て村民等野中氏の大に予防を永久に計られしを感ず現今水中に見る僅かに十間高長とも土中にあるを以て詳にせすといへども長さ凡四町余にして深く沙中に入ると云其築造甚堅固也。

〔わが故郷の故事〕〈橋本増治著「須崎史談20」昭51〉

つぎに、安政大地震の時、祖父はまだ十才位であったそうである。この時も大津波が襲来して田畑の作物はほとんど失ってしまった。そこで口減らしのため、兄弟三人が百姓奉公に出されて、苦労した話をよく聞かされた。度たびのことで、話の筋道が判っていたから、その先取りをしていうと、祖父は急に機嫌を損じたことであった。

この時の地震は珍しく前後にゆれ、さあ津波が来るというので、家の中の物を山側の高い所へ持ち出した。ところが恐れた津波は来なかった。

夜が明けると上天気であったので、家の中が空になったついでに煤はきをやり、夕方持ち出した荷物を全部運び込んで、さあ食事をしようと箸をとったところ、今度は前よりもっと強い地震が起こった。みんな腰を抜かさんばかりに驚いたが、これではならんと必死で、また元の所へ荷物を運び始め、半分位い出したところで、再び大ゆれがあった。どんどん潮が増し遂に家が流されるようになり、大きな網で大木へしばりつけたそうである。そのしばったという太い金具が本家の古い家に残っていたのを覚えている。

その頃は、今と違って土木工事も進んでいない時代であったから、復興も随分遅れたようである。祖父たちには津波の恐しさが、いかに深刻であったか、その後の田畑は全部山に近い所に集めた。それで収穫した稲などは海岸に運び出し、舟に積み込む手間が他の人の何倍もかかった。私は祖父のこうした苦労話に耳をかさなかったことが、今に心の奥にしこりのように残っている。

〔高知県の昔話と伝説〕〈土佐民話の会、富川光男、市原麟一郎編、昭53〉

津波が来るぞう。大潮が柴折りが峠を越えて来るぞう――。どこからともなく伝わって来た噂は、村から郷へ、部落から部落へ、人から人へと伝わり村人達はあわて出した。まず、老人と子供から先に逃がして、壮者は馬の背に鍋釜の類から蒲団、米などを積み、高い山、高い峰へと駆け上った。

時はこれ、安政元年十一月四日の昼下がりに起きた有名な安政地震から三日たった十一月七日の午後の事であった。この噂は電波の如く伝わり、見渡す山々の頂には夜の燈火が明か明かと燃えていた。しかし、大津波は来らず、避難した人々は不安を増しておった。そんな時、どこからともなくこんな噂が流れてきた。留守になった村々を盗人が荒し回っておるというのである。人々はわれ先に荷を負うて山を下りたという。いかに人々が地震を恐れ、津波を恐れていたかを知るに足る昔話である。これに関した絵馬が入寺山、阿弥陀堂に今も残っており、その物語りを伝えている。

〔田野郷土誌〕〈安岡丈六編、昭7、安芸郡〉

有名な安政の地震は、安政元年十一月五日に起り、此の時も亦震動はげしく、人家の倒れるものも多く、老幼男女泣きさけびて走り、多く赤地・岡地の藪の中に難をさけた。強震の時は歩行さへ出来ず、空飛ぶ鳥も地に落ちたと言ふ。土佐国では到壊家屋二萬二千、死者三百七十余であった。田野では殆んど死者を出さず、其の時米屋は酒造米を難避民に施した。倒壊家屋は数軒であった、後三年間時々地震があり、或る時佃島附近へ夜間大浪押寄せ、人家及び家畜の被害を受けたと言ふ。今尚其の地震に会ふた家少し存してゐるが皆多少の損傷を受けてゐる。

〔夜須町風土記〕〈橋詰延寿著、昭43、長岡郡〉

観音山と津浪記念碑

ここには安政の大地震津浪の記念碑が建っている。

碑の高さは台石共高さ約二・三メートル、幅一・二メートル厚さ二〇センチである。筆者は福重鉄次郎。

碑文は次のとおりである。

奉納延命十句観音経一百万辺也

為万民安全長久

附たり大変津浪の記。去る嘉永七寅（改元して安政元年＝一八五四年）十一月四日早朝より地震致し、夫より大汐一日に七八度の狂有之、衆人只不思議と怪ぶ斗也。

翌五日、青天にて暑さ憂（昼？）の如く同日夕七ツ時（午後四時）大地震。天地も崩る如く、老若男女夫に驚救の鳴く如く騒ぎ立ち、同日入頃一番波打入り、当西町より東へ打ち越し、諸人是又、驚有言之。食物着用手毎に引提け、此山上へ持運数百人。相助。実に当山は命山と永賞致す也。二番波少し波間有之。其時、大汐沖へ引取事、二三十町斗。夫より三番波？（有か）之。五ツ時（午後八時）打入り、一度に家、蔵流失致す。跡白浜と相なり、目も当てられぬ如く也。思へば天変有間式事斗。かたく宝物、家に残すも再。我家に帰るべからず。必ず必ず是肝要なり。

筆者　福重鉄次郎

岸本の安政地震記念碑

この碑は香我美町岸本の飛鳥神社境内にある。夜須町のこともでているので特にのせた。徴遜の題名で、次のとおり。

※『誠に油断大敵とは、深意あることにて、仮初におもうべからず。安政元寅年（一八五四）十一月の事なりき。朝五時頃常に覚えぬ程の地震して、岸本の浦塩のさし引十間余りの違あり。また、手結の港内も干揚りて鰻をつることなど夥し。同日両度小震すこしばかりあれど、さばかり驚く人もあらざりしを、翌五日八時過ぎ大雷鳴の如き、どうどうと響して、ひとしく大地震す。

こはいかと衆人驚く程こそあれ、家蔵高塀器物の崩れ破るる音さら

にいう計なし。逃んとすれど日くるめきて自由ならず。はうはう家を出けるに、津浪打来りて当地は徳善町より、北の田中赤岡の西浜並松の本、吉原は庄屋の門までに及び、また川尻の波は、赤岡神輿休のほとりまでいたり、古川堤、夜須堤も押し切られて夜須の町家など過半流失す。

かくて人人は、老を扶け、幼を携え、泣きさけびつつ王子須留田または平井大龍寺の山へと逃れ登りて命助かりぬ。

この時、国中の官舎民屋多く転倒し、就中高知下町、幡多中村等に失火ありて、一円焼亡し、凡そ怪我横死何百人ということなし。

幸甚なるかな、この地は神祇の加護によりて一人の怪我もなく、彼の山山に、こ屋をかまえ日を経るに随いて震いもいささか穏になりしかば、恵あまねき大御代の忝を悦びつつ、みなおのおの、家に帰りきぬ。

そもそも宝永四年（一七〇七）の大変は、今を去ること百四十八年になりぬれば、また、かかる年数にも必ず変事の出こんなどという人もありなめと、世変はいつあらん事予め知りがたし。されど常に菟あらん時は、とにかく心せば、今その変にあいて狼狽せざるべし。

今の人、ここ宝永の変を昔ばなしの如くおもいて既に油断の大敵にあいぬ。

さるによりて後世の人人、今の変事を、また昔咄の如く思いて、油断の患なからしめんためことのよしを石に彫りて、この御社とともに動きなく、万歳の後に伝えんとふるいおこしたるは、里人が誠心のめでたき限りこそありける。千規たまたま高見（高知市）の官舎に祇役して、ともに彼の変事に逢いたれば、そのよし書てよの人人の乞うにまかせてかくは記し待りぬ。あなかしこ

安政五年戊午季秋毅旦

徳永千規誌

前田有稔書

沢村寅次刻』（Ⅳ－451）

〔津呂郷土史〕〈坂本甚吉著、昭26〉

よく晴れた小春のように晴れて暖かった午后四時頃大地震がおこり一時間後には大津波があった。この時は津波のくる前に避難していたので土佐でこわれた家の二万二千戸に対して死者わずかに三七二人であったが数年間余震があり天候が狂い土地が隆起した。

△〔土佐古今の地震〕〈寺石正路著、土佐史談会、大12〉

又同地震経験者の話によれば田舎村落の水田にて田水の氷結し居りたるもの此大震の為め揺り動かされぼらぼらに砕けて両側周囲の畦道等に打ち上げられたるもの沢山ありしといへり是又地震の縦横動非常に激烈なりしを証すべき一材料なるが如し

〔皆山集〕

百四十八年目

十一月五日申下刻大地震 大小震昼夜百七八十度 津浪御国中大破損郭中郭外及東西民屋転倒不少別而城東市中悉転倒且出火翌六日酉刻消火高潮入来御城内初各其手寄ノ山へ逃登国中男女死失三百七十二人怪我人百八十人損田一万四千百二十一石三斗汐湛七千四百九石五斗御国内委細御取調十二月廿六日公辺へ御届ニ成

御国中二千五十六軒　焼失　内千八百七十六御城下下町

三千百六十四軒　流失　御城下ニハ無之

二千三百五十一軒　潰家　内五百六十八御城下　上下町

二百七十七人　死人　内百六人御城下上下町

地八千六百七十五石四斗七升六合　本田新田共損田幷汐入

○幡多郡大谷村鎮座小社戸島神社の条

嘉永甲寅の津波に宮居流失すれども神体は正しく其地に留在せり又一古書に曰前略須崎と申由又此港の左右を神か小浜と申此湊の沖ニ神の小島とて沖の島中の島戸島と云三ツの島あり皇大神心化の三神沖中戸を祭る故ニ神の小島と申也国俗今ハ上島と唱へ候へども実ハ神が小島ニて候

云々後略土佐物語曰前略又戸島と申は今見へ候ハず古老の伝ニ昔ハ経島千軒と申て民家一千余軒立並べ宮居も巍然として赫かせ給ひける云々後略往昔ハ三女神を三島ニ一神づつ斎ひ奉りしが年号支干詳かならされとも戸島一島へ合祭せしと思ハる又土佐物語曰前略神の御議より行にや又ハ尽る時節ニや浪風も無きに或時此島俄に動きて海底に沈没すと云へり今も風静ニ浪平々たる時舟より海底を見れば家の礎又は石ニて畳ミたる井の形なと見へ候也後略実に然り是レ戸島千軒の遺跡なりと云伝へしに嘉永甲寅津波の後は又見る事なし

○

三災記ニ云安政元年甲寅十一月四日辰ノ下刻地震す尤も家の傷ニハならす然共沖間狂ひしとミへて朝五ツ時六歩の満潮なるか引返しと成し比ハ早瀬となりて押入間もなくして引くかとミれハ又押入八ッ時迄の中三度の差引有同夜小震三度斗り有りし也五日朝一天晴渡り凪も雲なし昼比となりて潮行おだやかニ見ゆ七ッ時過となりてためしもなき大地震前後覚へず家々将棋倒しとなる　賤逃行既ニ親子人々ちりぢり間もなくして町々より出火下市中斗也云々（谷脇某日記）

大震後の高潮浦戸より内ハ地潮より三尺四五寸高かりしと云同六日下知村北の丸堤切れ新町へ押入満潮の時ハ船を乗る（家々屋敷ニ入潮高下ありて浅深ハ記しかたし尤差引ありて十二月五日迄入来る也）十六日潮高し同廿五日前日より波立風雨雷鳴して潮猶々高く新町東ハ座上ニ上る西ハ床限り下知村堤より東ハ座上より五六尺上る或ハ軒を払ふ同月末方より切口御普請ありて十二月五日より新町ニ潮差引入来る事ハ自ら止ミたりし也

焼失家数千八百七十六軒　城下
潰家数　五百六十八　同
死人　百六人　同

十一月八日　思案橋山田町三ツ頭其外市中町々へ建制礼
此度之時変を伺ひ令盗業の者ハ召捕勝手次第尤手向等いたし候者ハ貴賤ニかゝわらす打捨不苦候事

十一月　御目付方

○火難なかりし町々ハ南ニて唐人町（上散田より下雑喉場迄）広岡町朝倉町ハ南側米御蔵共」西ニて掛川町要法寺町境町八百屋町京町ハ焼たれとも町会所御蔵とも残る東ニてハ農人町（さえん場町堺より東松ケ崎迄）同裏町新町ニてハ北新町鉄砲町残る下知村も西なる足軽町ハ皇等多く家まばらニて焼通らされハ残りたり

○

渡辺利行か乞食袋云馬詰丈右衛門先年野根在番之時分所之老人咄ニ先年大地震之時甚塩干候哉野根沖ニ一ツの山出る其大サ玉島ほと有否船ニて行見候所上ハ一面の岩ニてカキガラ有其頭上ニ大松のかぶ有廻り二カゝへモ可有松の皮有之たる也所の老人へ尋候へとも終不見申候又島有と云事も不承候然を終ニ出申事の無之と存候イツの時分ニ沈ミ申たる山ニて候哉不審也其時分の塩干程塩の干候事ハ無之由所の老人共申候珎敷事ニて候由

〔高知史跡めぐり〕〈橋本延寿著、昭44〉

立志社、町会所、土陽新聞、社倉あと

新京橋二六大丸のあるところ。碑は公園入口、ねぼけ南側にある。

町会所は元文五年（一七四〇）蓮池町から移ってきた。会所の東北側に社倉があった。これは寛政十二年（一八〇〇）奉行の馬詰親音が非常の場合にそなえたもので、高知市社会福祉施設の最初のものである。

安政元年（一八五四）の震災ですたれてしまった。

狭　島（桟島）

御畳瀬の沖、袂石の向うにある。周りが五十メートルの小島である。この狭島は安政元年（一八五四）の大地震で地ばんが沈下したのでほんの数坪の面積である。島には市杵島姫を祭る厳島神社がある。付近には何時も釣船がむらがっている。この島も浦戸湾改修のため爆破してなくなり人造の島にまつってある。

津浪記念碑

稲荷神社境内坂の北面アコウの木の傍にある。安政元年（一八五四）十一月五日大地震の時、津浪が入って桂浜の民家が浪にのまれてしまった。それで後の時代の戒として碑を建てたものである。

碑面には

※『安政元寅十一月五日大地しん津浪、後世大地しん有時は津浪入と心得べし　大黒屋嘉七郎建之』（Ⅳ－326）

とある。

〔大正町誌〕〈高知県幡多郡、昭45〉

安政元甲寅の年十一月五日大地震あり、又五日ぶりに大地震あり、都合七日間ゆりつづき、其後大雨降りて、方々に大なる潰へがぬけて大出水であったとのこと。

〔高知県史下〕〈津村久茂編、昭26〉

宇佐町誌によると安政の大地震は午後五時ごろ俄に薄暗くなつたかと思うと大地震に次ぐ大津浪が七回にわたって襲来し海岸から十五、六町離れた山際の家まで押流されて唯一戸だけ山の上の家が残ったとある。その後十年ほどの間は毎日五、六度から多い日は三、四十度の地震があり村民は不安な気持で日を送つたという。

○

安政元年十一月四・五日大震あり人畜の死傷その他の損害甚大で死者三百七十二人・負傷者百八十人・家屋焼失二千五百軒・流失三千二百余軒・倒壊三千余軒・半壊九千余軒その他被害甚大に上った。

〔北川文書〕〈「高知県史・近世史料編」所収、安芸郡野根郷〉

○「野根郷中凶年飢歳手当諸指出帖、嘉永元年五月」という表題「覚」

という項名中

同年十一月十三日　　中村間人

一、同拾五匁也　　鶴　蔵

但同人義地盤極困ニ有レ之処当月四日巳来大変ニ付、忽即餓同様之躰ニ罷在候趣相聞へ補遣。

同年十二月卅日　　右　同　人

一、同四拾匁也

但同人居宅今十一月四日巳来大地震ニ付崩れ家ニ相成住居難ニ出来ニ、追々悩ニ相成候へ共、極困之訳を以居室建替難渋之趣、右村名元より申出如レ是補遣。

○「露ケ谷開発文書」

奉　願

安喜郡野根村之内押野露ケ谷　　野根村惣老柳助損作人同村之内押野

一、新田壱反也　林下々畑　惣堀明　　弥三衛門

（〇説明文略）

同所続キ

一、同三反也　下田　　右同人

（〇説明文略）

元来東南ハ高山御留山を引請ケ、右山根北西請ケ谷入之土地ニ御座候而、山影ニ相成日当悪敷湿気強く諸作物生立不レ宜、尤開発仕候節ハ土新敷故作物相応生立居申候処、根元石砂ニて埋上之場所ニ御座候而薄地ニ有レ之、此節ニ至リ千万粒毛生立悪敷、不ニ而已一人家を隔候ニ付、作物生立之場合猪・鹿・兎等喰荒、不ニ一ト通ニ防方之費用等も不レ鮮、其上去ル嘉永七寅年大変之節ヨリ水請弱く相成、日数十七八日計照続キ候時は用水切ニ相成、干損毛不レ少大ニ迷惑仕申義ニ御座候。且又右三反下田新開之分御免壱ッ八歩上納仕候処、右申上候通大変以来水請弱く相成ヨリ干損毛不レ少訳を以、既ニ他借米を以御貢物上納仕申為レ躰ニ罷在、将又去ル天保度以来野根山筋大潰出来、出水之度々別役谷川筋一円ニ石砂ハケ出次第ニ川原高く相成、川筋百八拾間計も水囲不レ仕而ハ、顕然石砂ハケ込損田仕候

（〇中略）

安政七年申三月　　野根村庄屋　大井猪太郎

同村惣老代　良　五　郎
同村当分年□　賀　四　郎

御免方
御下役所

本文願書安政七申年三月八日出立賀四郎出府、同月十日御免方へ願出ス。

○「同文書」

野根村之内押野露ケ谷上ミ弐拾代地ヨリ同し下モ谷入小高壱反四拾六代林下々畑之内

一、地壱反也　惣掘明　格免下田
一、同三反也　右同し　下田

元来石砂喰上ケ之所柄殊ニ東南ハ高山御留山を引受、右山根ニ御座候而北西請ケ谷入之土地ニ有レ之ヨリ日当リ悪敷、湿気強く山影枝露ニ相成年増粒毛生立不レ宜上人家相隔リ候ニ付、作物生立之場合猪・鹿・兎等喰荒し防方等之費不レ鮮。且又去ル嘉永七寅年大変之節より井掛リ之水請弱く相成日数十七八日計照続キ候時は、惣用水切ニ相成干損毛不レ珍右田方畑方ニ成替不レ奉レ願而ハ、惣代粒毛作付難ニ相調一迷惑之折も御座候へ共折角田方ニ開発存付候場所ニ付、井筋種々セ話方仕漸々取繁申義ニ御座候。不ニ而已一右田地野根村之内別役川筋ニ有レ之右川請之義ハ、野根山諸谷々ヨリ落合流れ出候処、去ル天保度以来野根山之内五台と申処ヨリ大潰出来、出水之度々川筋一円ニ石砂吐ケ出、次第ニ川原高ク相成、（○以下略）

戌八月　野根村庄屋　大井平左衛門
同村惣老代　良　五　郎

御免方
御下役所

○「日記」

嘉永七甲寅年十一月四日、晴天有レ之処日輪黄バミ、辰下刻稀成大地震長く陶。同日船積有レ之不レ叶。汐差引有レ之と申候ニ付、地中一同大騒、同日申下刻諸所鶏啼、同夜甚不安心ニ而臥候へ共何事も無レ之。

同五日晴天ニ候へとも、日ウルミ昼ヨリ風吹止リ四方シンシンと物淋敷相成候処、中下刻不レ計大地震ニ相成、座上ニ居リ候事難レ成、矢庭ニ門前江立出候処、諸所之家・蔵・納屋・雪隠・石垣・塀など傷掛ケ陶事甚敷胡乱々々見廻り居候処、何方より歟、津浪入と大声聞候ニ付、陶中千鳥足ニ而一同来迎寺之西畑迄逃者、理不尽ニ来迎寺・永徳寺ヨリ畳・戸・障子等取出し、其儘敷付居り順次蒲団杯持参り、ふとんニ巻居り候者も有レ之、火ヲ焚アタリ候者も有レ之、同夜右お左おニて其所ニて夜明し、尤同夜戌刻頃大陶ニ而、家・蔵・納家・雪隠等大概其時相崩、然共地震朝迄大中小陶事無ニ際限一、且同日申刻頃犬数々列り北山ノ如く逃込由見及申候。同夜ヨリ凧など立退キ家ニ居合不レ申候。

同六日晴天、早朝ヨリ三人四人其余組合ニ而木家ヲ建飯ヲ炊、木屋ニ而一同寐臥致申候。時々陶事無レ定、十二三日之頃迄昼夜陶事中ゆりニ而同様、十四五日頃ヨリ家近明畑有レ之所は、其所江木家建帰ル者も有、又居ル者も有レ之。七八日已前ヨリ男子は居宅ニ寐臥致者も有レ之、又昼は自宅へ帰り何角片付、夜は木家へ帰り寐臥スル者も有、当日ヨリ五六日之間自宅へ番を付候者も有レ之、又昼夜時々明家見合ニ参ル者も有レ之。

十七日薄曇、追々雲立雪少々降。

十八日、日之内より大西風翌朝迄吹、廿三日迄晴天、地震日々同様。

廿四日曇天、夜戌刻頃ヨリ雨降出し浪立荒風吹。

廿五日大風雨大浪立、朝五ツ時分中地震、昼九ッ時分大雷、八ッ時迄六七度鳴、大洪水。夜五ッ時分ヨリ雨折々降切れ、地震昼夜六七度、小陶不レ絶。

廿六日大風雨、八ッ時分ヨリ日和ニ成。然共地震昼夜五六度小陶有。

同廿七日晴天、二三度小陶有レ之。晩六ッ時頃胆おどろく陶有。

同廿八日晴天

廿九日・十二月朔日・二日・三日・晴天。昼夜四五度小陶あり。

四日晴天、朝七ッ時分ヨリ同日七ッ時分迄三四度陶。

五日晴天、朝七ッ時分ヨリ朝五ッ過迄五六度中陶交リ有。（以下欠）

○「差出」

一 家高弐百五拾弐軒　野根浦
但野根浦住居組外吉松立純、郷士安岡善次家来貞平、
同浦大庄屋・惣老以下地下人共門立隠居共。尤先達而御届高弐百
四拾七軒之処、浦人三軒、郷住居之分他支配弐軒共、合五軒相加
へ如レ此。
右之内
弐拾五軒　潰家
百五軒　大傷
但取繕仕候ハ、住居相調申候。
百弐拾弐軒　少々傷
〃
一 土蔵四拾七軒　右同断
但右同断
右之内
九軒　潰
拾六軒　大傷
但取繕相調申候。
弐拾弐軒　少々傷
〃
一 納家百軒　右同断
但右同断
右之内
七軒　潰
拾五軒　大傷
但取繕相調申候。
弐軒　少々傷
七拾九軒　無傷
〃
一 雪隠弐百弐拾五軒　右同断
但右同断
右之内
三拾軒　潰
拾四軒　大傷
但取繕相調申候。
四十三軒　少々傷
百三拾八軒　無傷
〃
一 寺三宇　来迎寺
永徳寺
浄念寺
但本堂始庫裏幷納家・雪隠共傷無二御座一候。
外ニ郷人共浦住居御座候へ共、郷分ヨリ御届可レ仕奉レ存候ニ付指除申候。
右は此度之大変ニ付、野根浦人家・土蔵・納屋幷雪隠共潰傷、他支配地
下人扣共夫々相縮右之通御座候ニ付、此段御届仕候。已上
寅十一月廿日
安岡時次
岡直五良
御郡方
御下役所

○「聞出雑話」（Ⅳ－382）の文と比較注意
嘉永七寅年十一月四日以来大地震
幡多郡之傷
一 御普請所八百五拾八ケ所　御役御郡共　間数凡壱万八千六百五
拾弐間半
一 田役所八拾六ケ所
一 損田五千九百四斗壱升九合也　御本田・新田・給知共
一 潰家六百八軒

一　半潰家千百拾弐軒
一　半流失家百五軒
一　流失家七百六拾軒
一　船百三拾壱艘　内拾三艘流失　百弐拾八艘破損
一　網六拾弐帳流失
一　井流四拾弐ケ所　破損流失
一　川船七拾艘　流失
一　御米蔵八ケ処　潰込崩傷共
一　御分一家四軒　内三軒流失　一軒半潰
一　御高札場四ケ所　流失
一　のろし場壱ケ処
一　遠見番所壱ケ所
一　六拾五人死失
一　馬拾壱疋死失
一　宮・寺堂拾三ケ処　潰込半潰共
一　炮台五ケ処
一　吉籾千百六拾弐石七斗　流焼失
一　米八百四拾弐石壱斗七升也　流焼失
一　麦五百拾五石壱斗也　右同し
一　大豆弐拾七石五斗五升也　右同し
一　金五百廿弐両三歩　右同し
一　八銭壱貫百四拾匁五分也　流失
一　小豆壱石弐升五合也　焼失
一　蕎麦四斗也　流失

〆

覚

一　潰家　御郡方外輪長屋共
一　同御免方　長屋共
一　潰焼町会合処御蔵共

〆

中村市中

一　焼家百軒計
一　潰家百五拾軒計
一　半潰家七拾軒計
一　焼米七百九拾石余
一　同金七百両余
一　麦五拾石余
一　大豆弐拾石余
一　小豆壱石五斗
一　死人弐拾九人

〆残而家無事成ハ無ニ御座一候。

一　亡所入野浦町並郷浦共　残家三軒　潮入流失
一　同下茅浦　流失　残寺庄屋迄
一　同小満目浦　流失
一　同湊浦　流失
一　宿毛様御領分宿毛町焼　潮入流失

但市中弐軒残リ　家中大半右同し

〆中村共六ケ所幡多郡之内大傷、此外迚も傷多シ、惣分郷中・山分共格段なし。

一　与州宇和島・吉田共格段なし

〆右安政二酉年二月十八日川村隠居ヨリ之書付写。

〇「覚」

一　家高弐千七百五拾五軒
　右之内
　千八百七拾六軒焼失内千六百弐拾九軒　御町人
　弐百四拾七軒　他支配
　弐軒半焼内壱軒　御町人
　壱軒　他支配
　五百六拾八軒潰家内四百拾壱軒　御町人
　百五拾七軒　他支配

三百九軒半潰家内弐百五拾四軒　御町人
五拾五軒　他支配
八百壱ケ所焼失蔵幷物置共内六百六拾八ケ所　御町人
百三拾三ケ所　他支配
百弐拾ケ処潰家幷物置共内九拾六ケ所　御町人
弐拾四ケ所　他支配
九ケ所半潰蔵幷物置共　御町人
焼死男壱人　御町人
過死男女百五人内九拾四人内男三拾九人　御町幷郷人
女五拾五人
八人内男三人
女五人他支配
過人男女三拾九人内男拾人
女弐拾五人　御町人　四人男壱人
女三人　他支配
行衛不レ知男女四人　御町人内男三人
女壱人

一　焼失馬五疋
一　焼失寺堂社拾弐ケ処
一　潰寺幷半潰社四ケ処
一　焼失御蔵弐ケ所
一　同御役家弐ケ所
一　同橋六ケ所
一　半潰橋壱ケ所
一　焼失御囲籾七百石計
一　同米四千六百九拾六石二斗
一　同大豆九百三石弐斗
一　同菜種百三拾石
一　燈油弐百挺
一　同麦四百七拾四石弐斗
一　同小豆七拾壱石六
一　同糯米百五拾弐石計
一　同黒大豆壱石八斗也
一　同蕎麦三石六斗也
一　同エントヲ三石弐斗也
一　同空大豆四石也
一　同古麻四斗也
一　同五形花種壱石也
〆　以上

右同し

高岡郡之傷

一　家数三千九百弐拾弐軒
内
一　千九百五拾六軒　流家
一　弐百五拾五軒　潰家
一　百九拾九軒　流納家
一　四拾三軒　潰納屋
一　千三百五拾六軒　半潰家
一　七拾弐軒　同納家
一　七拾壱軒　汐入家
一　流失船百九拾艘
一　死人五拾弐人
一　死馬拾疋
一　行衛無レ之五拾五人
一　過人拾八人
〆

〔奈半利町史考〕〈安岡大六著、昭28〉
明信寺（奈半利町東浜乙八五七番地）
安政元年の大地震の時、東浜は倒壊家屋相次ぎ、猛火になめられ、やがて寺の附近まで延焼したが、本堂のみは毅然として白煙の中に聳えていたが、遠くからこれを望むと、本堂の棟に白衣の仏体らしいものが、衣の袖を振りながら火の粉を防いでいたが、間もなく火災が鎮まると、その白衣のものは東天を指して飛び去つたと伝えられている。

○

今から百年前の安政元年（一八五四年）十一月五日は、快晴の天気だったが、午后四時頃大地震がおこり、午后五時頃から大津浪が打ちよせ人々は皆あわてふためいて山辺の葱地へ逃難したが、強震のため歩行も困難で、空飛ぶ鳥も地に落ちたと云う。野村佐太郎は避難中に生れたと伝えられる。

〔室戸町誌〕〈編集委、昭37〉

八王子宮御当家記帳ー安政元寅十一月四日。正四時。五日正七つ時同五時七ツ半時、稀成大地震、津浪入り大変ニ及ぶ、誠に恐驚ー室津港の潮四尺計も足り不申様に相成て、両津（室津、津呂）は申すに及ばず、諸船入津出来申さず指悶え○○に相成此度御普請見積、凡そ弐万人程の見積と申す様大いたみに相成候云々。

○

室津・浮津の情況は当家記（西宮）にやや詳しい記事がある。

「五日。七ツ半時（暁の五時）稀なる大地震、津浪入。大変に及び誠に恐驚至極——一統我先に立退事のみ。大騒に至り候——誰と無く只右往左往にて山へ山へと逃退いた場合——西の方から大音にて申し来るは……引き潮烈しきにつき、片時も油断為し難しと……沖合を見渡せば……易からざる次第に成り行き——既に奈良師の前のシバエ（師濱）と申すは昔より見たる人無之に此の度は（引き潮がひどいので）、濱の根より長さ一丁ばかり山の如く相見え候」（と云う異変を見せた。今度のこみ潮に大津浪が襲うて来るのではあるまいか、と人々は大いに恐れふためいて）「只神仏を尊び、人力の及ばざる次第」——と運を天にまかせていたが……しかるに神慮に叶ひしか汐の上りも少なく——（津浪の難もまぬかれる事が出来てまづ安心。）あまつさえ、室津港の潮四尺計りも足り申さざる様に相成りて、両津は申すに及ばず。諸船入津出来申さず指つかえ……。

と云う様に地盤の隆起を見た。この一事をもってしても仲々激しい地震であった事が充分に理解された。地震の直後——浮津下町から出火し大騒ぎとなったが、間もなく鎮火した。

「浜辺の納屋は引きこワれ」「殊に川の西側は大半つぶれ」て仕舞っていた。

室津湊がこの地震のため、四尺も隆起して港内が干上り、船の出入が出来なくなった事は既に一言した。ここに室津港普請の問題が起ってきた。「この度、御普請見積凡そ二万人程の見積と申す様の大いたみ…」と云われたが、実際のいたみは今少しひどかったようである。その後三年たって安政四年二月下旬頃から、普請はやっと始まった。

「御普請、御積人夫凡そ五六万、湊口に中ばいと申す石御座候処、波止場え、ろくろすゑ、毎日男女赤手拭にて大石引き賑々敷く、内は水車をすえ、潮をせかせ、ごみをさらえ、凡日数七十余日も懸り、程無く五月節句相済……」（当家記）

かくて、目に青葉して初鰹釣りの櫓声に港の活気をとりもどす事が出来たのである。

尚この地震については、元脇地の坂本勲の曽祖父十郎（当時二十一歳）の書いた大地震洪波事記（大ぢしんつなみの事しるす）が現存していて克明に当時の情況を伝えている。

「干時嘉永七歳寅十一月四日□つ時近年珍ら敷地震いたし、皆々大気におどろき候処、さしての事も無御座候と皆々安心致候処、其日は無事に有之候処、其翌日五日ひる七ツ半時頃、十郎三津鯨場用事にて参り申候て、保馬様より御酒拝領被仰御馳走被仰下候て、直様七つ頃宿元へかへり申候処、実は大酒仕前後もしらずたどりたどりて帰宿致候処、不計蔵戸の宮の下に小き川有、於此所大地しんいたし道中あるくことかなはず、ようようと山中虎衛門殿宅のほとり迄参り候処早蔵のひさしおち、僅に其時はも早死るは今なるかとみのけもよだつばかりに候処、大分やわらぎ候て、それより直様足に任して浮津をさして行ける処に、道々はわれ、人家みだれ、僅にその有様何にたとへんかたもなく、浮津に参着しけるに、数人中道寺山へ逃げ登りける。

皆々浮津の人の言分には、早磯がした（ひいた）というて、洪波がくるとそのさわがし事言ばかりなし。それより十郎浮津西町に行ける処に、人々町中に雨戸を敷、その上に坐する者もあり、逃る者もあり、その有様目もあてられぬ次第也。それより十郎足に仕して岩戸奥宮さして急ぎける処に、浮津の磯田のほとりより浜を見物いたし候処、沖に有之諸人存じ候通しばいの石と申て山の如くみえ、浜は壱町余りしお引、しばらく見物いたし候へども余りおそろしく候て、小山の方に逃行候て、ようすを見合候処、波山のごとくなりてなら師川へ打込あり様、おそろしく事いうばかりなし。且又六地蔵（今の造船場）のほとりは大海となり、それより十郎行ことかなわず、浮津有之長仙寺山五合目迄逃登りようす見合、岩戸さして行ける処、岩戸御家内様早御本家へ御出被遊、あとをさして行ける処に、不計岡山の下にて御目にかかり、直様岡山五合目へ逃登りけるようすを見合、御本家へ行けるに、川はわたりぜ迄波打込、橋の下迄波来り候□□御座候。それより御本家に行けるに、屋敷外かわの塀きしかけあるいは長家のかわら七分どうりおち、皆々御家内様山王様へ、西の方の桜の木の下へ戸いた畳などを敷御出被遊、その夜四つ頃又大きなる物ゆり申候。これより六日七日八日九日十日十一日十二日十三日十四日十五日十六日十七日十八日十九日廿日廿一日廿二日廿三日廿四日廿五日廿六日廿七日廿八日廿九日朔日十二月二日三日四日迄地しんいたし申候。皆々ハキ地（脇地）の人は崎山へ逃登りける。あるいは元坂の常平作りの田へみなみな小き小家を打、十四日五日暮しける。皆々大気にめいやく（めいわく）をいたし申候」云々。

地震の際に、八王子宮の境内の石燈籠三対と狛犬（コマイヌ）が倒れ、御影石の鳥居も一本折れ、中の通りぬきも同様折れていた。石燈籠と狛犬は直ぐさま建て直したし、折れた柱は棟梁の甚五郎が工夫して建て上げた。

〔土佐国旧事記大集上〕

一、安政元年十一月大地震津浪桂浜流失。

〔同書中〕

旧波止、本郡種崎村ニアリ南方ニ向ヒ浦戸港口ニ築ケリ田材三尺乃至五尺ノ大石ヲ用フ此波止ハ古来土中埋没シ其上面ニ草木繁茂セシニヨリ村民凡テ之ヲ知ル者ナカリシニ安政震災ノ節土砂流亡シタルヨリ初テ之ヲ震出セリ、是ニ於テ村民等兼山ノ大ニカノ港湾ノ事ヲ用ヒラレタルヲ嘆セリ現今水中ニ見ハル、所僅二十間ニ過ズシテ其全長ハ知ルニ由ナシ高サモ亦然リ但シ築造ハ極メテ堅固ナリ。

浦戸城墟

（〇前文略）元標ノ東隣稲荷坂ハ該城追手ノ外門ニシテ□巌ヲ鑿開シ坂路トナセリ左右ノ巌壁ニ添フテ穴アリ城門ノ柱跡ト云フ安政元年甲寅年地震ノ際海水漲溢セルヲ以テ今一標柱ヲ建テリ。

〔仁井田村史〕〈仁井田高等尋常高等小学校編、大正年間、県図K217-42〉

大日本国南海道土州高岡西郡床鍋村円福山永禅寺現住持比丘義締謹誌嘉永五子年紀州若山城北山園部村宗泉禅寺ヨリ勧請来安政元寅之秋鎮守堂建立ノ左定ヲ以テ勧化相始候処十一月四日ヨリ七日迄前代未聞ノ大地震ニテ浦々者津浪入来リ大半流失郷山分者山崩田畑大傷城下者下町一軒モ不残焼失惣而国中言語ニ絶スル事計也卯之正月日夜五六度之震動不止漸三月中旬堂成就ニ至四月八日鎮座之祈祷修スル者也。

〔西分村史〕〈小田玉城編、大4、県図、K216-10-1〉

安政元年寅年陰暦十一月地震アリ数日間ニ及ビ就中強震数時間地面ニ亀烈ヲ生シ流水動濫シテ川底ヲ涸ラシ倒壊セル家屋アリ人心恟々難ヲ山間竹林中ニ逃レ家居セザルコト老幼ハ数十日間ニ及ヘリト云フ

〔土佐大震記〕〈高知市民図書館所蔵〉

地震日記

白鳳大震後壱千百七拾余年を経たる　孝明天皇之御宇、安政元年甲寅十一月五日　当国に又大震あり高知城下　鷹匠町水門の番人嘉久助の手記

※『地震度数覚

一　安政元年十一月分　合二百四十七度
　内大六七　中四十四　小百九十六
十二月　合九十六度
　内大三　中二十　小七十三
一　安政二年正月分　合百十五度
　内大　無　中　八　小百七
二月分　合六十三度
　内大　無　中　七　小五十六
三月分　合四十八度
　内大　無　中　六　小四十二
四月分　合四十六度
　内大　壱　中　四　小四十一
五月分　合三十三度
　内大　壱　中　二　小三十一
六月分　合三十二度
　内大　無　中　一　小三十一
七月分　合三十六度
　内大　無　中　六　小三十
八月分　合十九度
　内大　無　中　十　小九
九月分　合二十一度
　内大　無　中　十　小九
十月分　合弐十九度
　内大　無　中　一　小二十八
十一月分　合十八度
　内大　無　中　無　小斗
十二月分　合十四度
　内大　無　中　無　小斗

〃　総合度数八百十七度』（N－170）

此の大地震の起りたる時刻は、申の下刻にして、其前日の四日には関東一帯大地震大津浪あり、其翌五日に当国に感じたるものにて

十一月四日　には地震十六ケ国
　津浪十四ケ国
十一月五日　には地震三十ケ国
　津浪之に伴ふ

当国高知城下は

十一月五日大潮入り瞬く中浦戸港内地潮より三尺四五寸高くなり城外新町下知一円海となる。

同十六日潮高し。

同廿五日、暴風雷鳴潮高く、下剋辺りは床上五六尺より或ハ軒を洗ふ

十二月五日　堤防成り、新町下知潮退く。

安政二年四月十六日　連日風雨。

鏡川出水潮高し。

同年七月十四日より風雨、潮は大震の日より二尺も高く、平潮より都合五六尺四五寸高く、海辺にては七尺高し、城下一円海となる。

潮口、比島、大津、鹿児、介良、衣笠、下田、安台山の諸村は、潮水一面皆山麓まで押し来る、大震後八ケ月を経たるも猶潮の狂ふことかくのごとし。

浦戸にては、五日津浪起りては村浜は一軒も残らず流失す、浦戸は人家床上五尺以上も海水浸る。

宿毛　にては、海水山手に達し人家全く浸る。

其外在々浦々多少とも其難を免れず。

※『十一月四日辰ノ下刻、地震ること度々、同夜二度ハ微細なり。

此日須崎、久礼辺には甚しく津浪来る、東国所々大震あり。

五日申ノ下刻、地大に震ふ、初め乾の方より鳴動する音暴風の山林に

響き渡るが如く聞ゆ、同時に大地の動揺すること大浪の荒るゝがようにて、やゝ久くして止み、又頻りに震ふこと歇む間もなく、昼過ぐるより暮に至るもなほ止ます、酉の上刻頃に及びて津浪来る。

続いて、高知大火、幡多郡中村町及宿毛町にも火災あり、同夜震ふこと七十度、寒強くして大霜降る　偖も此の大地震揺り初めし時　天地動転　山崩れ地は裂け　河水俄かに漲りあふれて涯上まで上り　巌落ち　家は壊れ　堤破れ　道損じ　橋墜ち　立木の類風で倒れ　一軒として破傷せさるはなし　瓦壁崩落せし時ハ　土埃煙の如く立騰りて家宅も焼け失せるかと疑はれ　道具の類は　縦横に散乱して　微塵に破裂れ　家財道具器物夥しく壊損して其形も無く　幼童婦女　若きも老ひたるも　壮者も病者も　慴れをのゝきて　啼きさけび　周章狼狽するさま　実に凄惨を極めぬ

暫くして城下に火□り　炎天に沖し　煴煙高く登りて雲に入るかくて　夜に入れハ　火炎天を焦して　四方を照らす事白昼の如し　初めの頃に至り諸方にはかる大に騒動して　あちらこちらに叫く声す

即ち大潮来ると呼ぶなり　人々　我れ先に山の方さして逃け行け走る

其物音　遠近に聞之渡りて　暫くの間鳴りもしづまらず　世間騒がしきこと限りなし　かくして五六日がほとは過きたり

七日　震すること五十三度　昼暖かにして夜は殊に寒し　昼二十六度
　夜二十七度

八日　地震　昼十六度二度強く　夜二十六度　昼実に暖なり

九日　震ふこと四十四度　昼十五度　夜二十九度

十日　昼十八度　朝一度強し　夜十一度　一度長く強し

十一日　地震　十七度　西風吹き寒さ募る　昼七度　夜十度
　公儀より禁令出づ　即ち諸直をむさばらざるようにとなり

十二日　朝の間七度　夜八度

十三日　地震十五度

十四日　震ふこと十六度

十五日　震ふこと少し

十六日　微震　大雪降る

十七日　小震　朝の間雪少しく降り　西風烈しく吹く

十八日　地震十一度　昼六夜五

十九日　昼五度　夜三度

二十日　九度震ふ　昼二夜七

廿一日　地震八度　昼三度夜五度

廿二日　微震

廿三日　同

廿四日　同　浪高鳴し夜大雨

廿五日　小震　風雨電雷甚し　昼五度　夜三度　晩浪強く潮高し

廿六日　微震　昼より西風大に吹きつのる

廿七日　微震　雪降　西風烈し

廿八日　小震　西風又強し

廿九日　同

十二月朔日　微震

二日　地震　昼夜五度　昼より小雪降り晩にやむ

三日　今日より大寒に入る　夜四つ時強震一回　昼少し震る

四日　微震

五日　同　昼二度夜一度

六日　同　昼夜各五度

七日　同

八日　同

九日　同

十日　少く震る　昼九ツ時一度強し

十一日　微震　五度

十二日　同　八度北風吹く

十三日　震　夜更けてより頻りにゆれる

十四日　丑の刻一度強し　晩に霰降る　此十二日より地震の度数繁く且強くゆれるなり

十五日　少震　夜半より小雪降る
十六日　同
十七日　地震夜に入りて頻りなり
　日暮頃鳴動はけしく聞えて一頻り強く震ふ
十八日　大震　今暁七ツ時
十九日　小震　昼一度夜四度
廿日　夜に入って強く震ふ　今夜半頃　雷の如き響しきりに聞え　大に地震ふこと続きて　又其鳴動の音　大筒を連発するに似たり
　此の中潮江村に火起り　恰も西風大に吹き出しをもて　しばらくの間に百四十五軒の家屋焼亡
廿一日　小震　朝雪降る　午時より西の烈風吹き　家屋をゆるがし
　砂石を大に飛ばす　寒強し
廿二日　微震　昼一度夜三度
廿三日　同　昼一夜二
廿四日　朝屢々震ふ
廿五日　少震
廿六日　同
廿七日　同
廿八日　微震　昼二夜一
廿九日　昼地鳴り度々あり　地震昼一度　夜五度　微震
大晦日　辰ノ刻大に震ふ　続いて一刻斗りの間　地鳴りすること頻りなり　此日連続して震ふ数約二百度斗
　今朝は諸人歳暮の調度なにくれと営みつゝある所に　地震俄に大ゆれになりけれハ皆々周章さわぎて　物事手につかず　たゝうろうろとするのミなり　出店の商人たち　掛先ともゝ　これに恐れをなして　急き存所へ逃け帰り　暫くの間ハ　道の往来するものもなかりけり
　斯る間に　地鳴りもやゝ静まりけれハ　斯くては果てしと　漸くに迎春の準備に手をそめて住連引渡し　門松迷飾物など　あらまし調へけれとも　人皆落付きたる心地なけれハ　万事粗忽なる節多かりき
　やがて明くれネ　安政二年乙卯の歳甫なり　去年十一月改元
正月元旦
　朝　晴天なり　かく年改りぬれとも　地の震ふこと止ます　目出度き歳の首の賀客の往来も　あわたゞしげに覚えられて屠蘇の酒祝ふ間も　たゞ心しづまりがたく　寛きたる寿きもなりかぬる体なるそうたてけれ
　此の日地震ふこと昼夜合せて数十度の多きに及ぶ　中にも戌の刻に一度稍強かりき　午時より西風大に吹き出てハ　砂埃を飛颺す寒更に募る　かくて未の刻より小雪ちらちらと降り出てぬ
二日　微震　風寒く雪又降る
三日　少しく暖かにて　少震数度
四日　少しく震ふ　暁方氷雨降る　后晴れたり
五日　微震　終日西風烈しく吹いて屋を揺かし枝枝をならすこと間断なし　夜に入りて止む
六日　震同　夜半二度強し
七日　震　昼頻りにして夜少し　朝合十度斗
八日　昼七度　夜三度にして其中二度は強し　朝り小雨暮れ頃より大に降り夜半に至りて止む
九日　震　昼五度　夜十五度　戌刻一度強し
十日　震　朝の間三度　晩方より夜にかけて　はげしく且強し
十一日　震　八度　朝三　夜五　風雨甚しく　初雷鳴　終日大雨　東風吹くこと強し　此の年柄に付　御□初無し
十二日　朝微震三度　夜五度　二度強し　西風大に吹き　屋を鳴らす　晩雪降り大に凍る
十三日　少震　前夜来寒威強くして終日凍解けず　西風吹き　雪微しく降る
十四日　震ふこと十余度微細朝雪

十五日　震同
十六日　少震
十七日　同　昼夜各三度
十八日　同　時に強く震いて　鳴動度々あり　小雨
十九日　微震　昼三度　夜二度
二十日　数々震ふ又鳴動度々あり　朝より雨降り　夜二更の頃風吹き出　電雷　電続いて夥し
廿一日　地震　十数度
廿二日　同
廿三日　同
廿四日　微震　昼二度　夜一度
廿五日　同　昼三　夜一　鳴動あり雨降
廿六日　微震　朝来雨　昼より晩迄野鳴り数度あり　都合三度震ひて昼一度　夜二度』（Ⅳ－160～167）（〇「細川盈進日記」の要約文。）

此の地震は　其の後月を経れともゆり止ますして　猶三四年の間継続して　時には強く　或時には弱く　人々いつのほどに至れハ　安堵せらるべきやを　ひたすらに論して　実に常日頃　兢々たる思ひの間に　年月を過ごしぬ

〔土佐国史談〕〈上田虎雄編、明治27、県図〉
世に寅の年の大変と言ふは、嘉永七年、十一月（同年十二月安政ト改）の地震なり。此年、十一月四日より、少しく揺り出し、五日の午後に至り、轟然震動して、人家、倉庫、多くは顚倒し、次て海嘯来り、海岸近き地は、悉く其浸す所となり、家財、流れ、人畜の死傷、其数を知らさるに至れり。高知市街にありても、震動のため、家屋、倒れ、処々火を失し、ついで海嘯、上街、小高坂に及び、下街は床上を浸し、近傍、一面の海となれり。斯く地震、水火の天災、一時に起りしことなれば、人々の驚き迷ふさま、いはんかたなく、老幼婦女、号泣の中に狂奔し、実にすさましきことなりき。翌、安政二年、十二月まで、時々震動あり。各地の損家、一万千余に達せり。

〔補注、幡南探古録〕〇亀井釣月著、沖本樵児補注
安政の震災の如きは倒家流亡之れありしと雖、宝永の夫れに比べては物の数にも足らず。

大岐
海嘯の及べる区域は南は大岐下港海浜より、新庄田浜より約八丁に来り、竹の鼻通寺の下を経て坪の内に至る。北より侵せる波は、上港海浜より屋敷通り万ケ谷浜より約八丁に来りて、茲に坪の内にて双方の浪相合し、一大高波を揚ぐ。田園の被害は弐拾町歩に及ぶ。

此海嘯の襲へる時、内沢鎮座の三嶋大明神、舟に御して沖合遠く出づるが如く衆目に映ず。衆初めは神職橋本某の乗りて出づる者の如く思へり。後其然らざるを知るに及び皆是を以て三嶋の神の出でし者と云へり。

伊布利浦
天神の森南方に中嶋と云ふあり。此付近の人家は海嘯の為一戸も残りなく浚へられて、北西方の田の中へ押流さる。又中嶋海浜に曳き上げありし漁船の中の一隻は、天神の森にありし馬目木（水面より一丈斗りの高さ）に懸りたり。田園一面海と化す。

窪津
海嘯は広小路迄。川はなばたけの付近迄及ぶ、貞屋と云へる家の床を浸す。

中浜浦
嘉永七寅年地震津浪記（〇池道之助清澄筆、清松村の中の浜）
嘉永七甲寅十一月五日申の下刻大地震静る否浦々へ大汐入事四五度、尤二三度は就中高くあがる一丈或は二丈斗り。
右地震静り一両日の内は一刻に四五度斗りゆり申候。翌卯の年中少々の地しん不絶大筒の音の様になるも有、又は家の鳴ほどのゆりもあり、後々は少々のゆりはかまわず渡世いたし候、恐るべし

一、右十一月五日の暦かのへ午やぶるちいミ天火ろうしゃく

一、大地震の時には急に井の水へる物なり。へらぬ井戸はにごる物なり大ゆりには井を見るべし。井戸の中にかわることなければ気遣なし。但し此時の濁りはくまざれども濁るゆへ地の底より吹出すと見え候。所により井の水干かれる所有、然共地しんせぬ前に干ゆえ気のつかぬ物也。地震すれば猶又濁る。或はかれる物也。此時五日の朝水にごり或は水へり候へ共、晴天打続事故水干候と思ひ気の付かぬもの也。大ゆりの朝は猶々へりにごる也。大ゆりの下地なり。

一、汐のくるう時井戸の水にごれば必大地震の下地なり。

一、大地震すれば大津浪入事ゆだんすべからず。此時ゆり静る否湊の内の汐引干し事おそろしき也。中浜浦など湊の口まで汐引川原のごとし真中くぼみやげんのごとし。みぞの所々小川のごとく汐ありて飯しのわく様にあわ立見ゆ。

一、清水湊の内渡し舟なくして渡れる様に引かれ候。

一、一度引かれてすぐ大潮入くる者也。引は甚はやき物也。入り来は少しおそし。幾度もさし引之時。

一、入海ふかき所は別而汐高く入る物なり。

一、大地震する時は四五年も前より天気不順するものなり。此度のゆりの時も四五年前よりせり日和のみいたし四日より五日の朝までは風有然共其風不定一いき吹ては静り風の方角不定、吹き様もそろはず。

一、大ゆりの時分は天に雲なく青空に風不吹、海上ひかり惣分しづかにて天気とろけ実におそろしゝ。此度地震する迄は三四月の心持にて甚あたたかにて寒きことなし。宝永の地震は十月に帷巾にて往来せしと聞候。

一、前日四日の朝より入江の所は津波入る。尤も常の津波と違ひ惣分海底をまぜるごとくうづ立濁り入る也。此日の終日不止入る。ゆりも少少あれ共不知人も有。高知辺は四日家を出るほどゆりしとなり。

一、五日の朝津波もしづまり天気もよく甚あたたかにて何心なき所へ大ゆりになり、大走動。尤も八ツの時刻なり。実に此日大ゆりのする迄は誠に静に御座候。

一、大ゆりの時の有様野山惣分を見るに大風吹ごとし。大木も枝をたれ或はたおれ竹のうら地をはらひ、家のいたみ山の崩れ火事のごとく煙立、すべて世界おぼろ月夜のごとく見ゆ。

一、大ゆりの時とびからす諸鳥飛事あたわず、地へ落てころび候。

一、中浜辺は汐格別不入。上ミの橋の下迄浪先あかり候、いたみ家無、惣分山近き故すぐ山へにげあがり人いたみもなし。ゆりも外々よりかろき由

一、ゆりは国によりかろきおもき有。一ト在所にても地底のかたき所はゆりかろし。

一、猪の尻浦宇どん屋の老人は此時亥の大変之記へ有て、前日四日朝のくるいを見て荷物等山へあげ用意致候故、諸道具散失なし。五日に至り少しも走動せざる由。此用意を見て隣家共乱心者の様にいいしとなり。

一、五日の朝より昼過八ツ比迄何心なき所へ大地震になり、人々足元不立大酔えごとくはい廻ることも不成、たまたまかきなどへすがり居候者は、夫れなりにころび一足も逃る事出来ず一統にうろたへ候、ゆり止り候より子を尋ねいろいろそうどういたし、少し安堵の思いたす所に、又々湊に汐無き故大汐入ると云ふ、亦大走動になり有合の食物をかかへ老人子供をおい泣きわめき、右往左往に山へ逃げ上り行内、間もなく湊口山のごとく汐入り来り、一同死するは今かと相決し無欲になりしかども、汐の干しを見合、よふよふむしろ一枚有合之飯きりにて、其夜は畑のきしにもたれあつまり居る。朝迄は五六十度もゆり候。其内大ゆりすればなく者あり夜の明るを待兼候。無程夜明るよりゆりも少しはほそくなりけれ共、諸道具いも米等色々山へとり上、むしろ明表等取寄己家を作り我家へかへる者一人もなし。七日に至り少々ゆりも小ゆりになり雨ふり出し迷惑いたし候故、思ひ思ひに我家へかへり諸道具を取込み居候場合に、又少し大き成ゆり致し一同さわぎ出し又荷物を元の山畑へ上、夫より己家も丈夫に直し十五日迄居候。而十

五日の晩迄に山より下り我家我家へ入り候。然共ゆり出せば火けし飛出、後々はくどのはたへ水をすえ置ゆり出せば水をかけ家を飛出し事実になんの心もなく只々おぢおそれて世渡の業等も不致、実にあわれ成事どもなり。然共当辺は流家死人等もなき故後日には悦び候。

一、山へあがりし五日の夜の寒サ甚し。翌卯の年には老人小児寒気にいたみ候故病人夥し。

一、六日に至り川或は井等へ水ましけれ共格別無

一、足摺山伊佐村共はゆりもほそく別条なし。

一、松尾浦も右同断

一、大浜浦も汐さき川をのぼり同所の下ちつき迄入

一、中浜浦も汐川をのぼり橋の下迄浪先入

一、清水浦は町の家ののき限りつかる。此時塩浜海となる。まきの浜小春と申女、塩浜の堤をとうる場合汐入来り堤ミこげ共共に流れ死す。

一、浦尻村も田へ汐入る。越浦別条無。加久見村同断。ゑた村流失

一、川口浦格別無、貝ノ川浦其余浦々同断少々の事、小間目浦家不残流死三人。柏島無難、其余浦々汐入候迄格別なし。

一、宿毛村町へ汐入、出火、流家死人夥し。

一、大岐村浜われ汐入損田あり。

一、下の下ノ茅浦汐大入流家有、ゑごの田へ廻船市艇干あがり候、ごみの家の田に市艇あかる。下茅の浜分不残家流失。

一、下田浦つぶれ家数々出火無し。家ニしかれ死人数人、平田屋の家内家にしかれ死す。

一、中村かやり家より出火京町辺不残焼失。家にしかれ死人数々。吸田屋と申家内脱か小児二人連いろりのはたに居て三人共家にしかれ死す。此時父足をしかれ其子親を助けんといろいろ致すうち火近寄て不叶、父子念別を申別れやけ死する者あり。

蔵ら或は家の二かいへあがり家ねぢれ戸不明出ること不成、声をあげる中火かゝりやけ死する者有り

いろいろむごき死人数々あり。

一、入野村浦大いたみ　　一、上ミの茅不残家流失

一、久礼格別なし。

一、須崎浦不残流失。此時舟へのりし者舟かやり弱（溺か）死する。

一、福島浦大いたミ流家死人夥し。同浦久市屋老人汐の間を見て金子とりニ行弱死家内も同断

一、宇佐浦流家死人夥し。千軒の浦にて二十軒斗つぶれなりに残りし也

宇佐浦久礼須崎三ケ浦にて六十人斗り。

一、宇佐浦小松と云医者汐間を考道具を出しニ行婦夫共流死、又婦人子をいだき松木へのぼり居る時松たをれ流れ死す。其外残念の死人いろいろ多し。

一、高知上町は格別なし。下町は大いたみ。其上出火あり死人夥し。いろいろあれ共筆に尽せず。高知別而ゆり強し。翌卯の年中家を出る程のゆり月の中に四五度あり。

一、此度の地震海辺斗り大いたみ郷中は無難也。

一、御当国汐田損田多し。

一、どことも二三年の間は月に一二度づつの小地震不絶事ゆりなをしと見へ候。

一、瓦家はつぶれやすし、別条なき家は柱のさし口いたみ出来候。

一、茅家はつぶれがたし。大ゆりの所は茅家もかやり候。

一、大ゆりの時雨戸樟子を明る事。又火をけす事是第一也。家の中高きしの下に居るべからず、此時家にしかれ死する人夥式候、家のひさしは一番にこける者也。角様の時心得べきの第一也。

一、宇佐浦小松と云医師両親は宇佐にて流死。むす子は高知へ引越出医業致し候所、此時もりに子を負せ婦夫三人が家を出逃行しが町々の塀かやり掛り女房と子供もり共にしかれ死す。実にあわれ成事。此小松左伝太と云ふ人は十ケ年前に中浜浦へ医執行に参り居候故、替々知人なる故能相しれ候後日見舞状ども出し候事也。

一、窪津浦より大谷伊佐松尾中浜辺迄は地ゆりあがりし様子。其内伊佐浦は爾来より五尺ばかり汐たらず、汐ミちの時見えざる岩つからず。

一、清水より以布利大岐下茅間崎宿毛迄は地下りし心地にて、爾来汐の来らざる所へ汐来るという也。
一、高知辺も下りし趣、汐みちの時爾来のらぬ所へのる。
一、上ミの津呂浦の湊舟の出入出来ぬようになりしとなり。
一、二三年も少々づつゆりしは元のごとくゆり直しいたす様の事歟、四五年をしては格別の違い不見、又は気をつけぬゆへかためし見す。
此時流失物夥敷有し所盗ミかくす者いろいろありしゆえ、御上より右之通りの高札を津々浦々の辻々へ御立なされしなり。
此時御召捕ニ相成候盗人ハ辻の道のはたへくゝり付、食させずほしころせし也。
此度之時節を窺盗業いたし候ものハ貴賤にかゝわらず召捕勝手次第尤及手向候時は打捨たりとも不苦事　年号
右者私儀前日四日に浦尻村へ用事に付参り候所津浪入り候事甚し、爾来の津浪と違イ汐色赤土の如くにごり幾度といふ事なく差引あり。山きわにはへしたき木共なかれ行事夥し。天気は不順なることゆへ気がかりにて翌五日甚気遣、亥の大変昨日の津浪等の咄いたし居候中大ゆりに成候故、彼是に付後世心得の為に自力を以是を立る。益野村に石きりありて是にたのみ為仕成候。清水浦へ越す峠道のかたわらへ立る、尤此所先祖墓ありけれ共祖父駒八の代に寺へ石ひをとり申候。尤四国へんろ通行之時分墓所にて休み候をひらい夏は此所にて涼み候故是きらいし事也。
一、宝永四年亥十一月四日未ノ刻大地震静否浦々大潮入流家死人夥シ。翌子ノ年中少々ノ地震タエス。
※『一、大地震ノ時火ヲケシ家ヲ出ルコト第一也。家ニシカレ且やけ死者多シ。
一、前日より汐色にごり津波入並に幷の水にごり或は干かれる所もあり兼て心得べし。
一、此時諸人　悲歎難尽言語仍而為後世謹建之
中浜浦　池道之助清徴』（Ⅳ－326）
一、裏へ池氏先祖の墓所とあり。
一、右之文字を碑にかき付立申候、実に此時諸人の筵儀言語につくしがたくゆへに後世のためにも相成るべき　与ぞんじ見之者也。
一、此時太守様にも御城をさがりて苫巳家を御立被為遊一ケ月程御巳家住被為遊候。
清水
越と清水との間は双方より浸し来れる海嘯の為、陸地僅に残りて帯の如き地狭となり、蓮光寺の下方にある家の仏壇には磯魚を打ち上げ、塩浜の方より貝塚へ向て帰りつゝありし小春と云ふ女、塩浜の往還にて溺死す。
越
寅の海嘯　清水へ越す道路の石段三段迄及ぶ。（此処は道路改修の結果旧形を存せざるが、旧道路の石段三段は今の道路面最高点より約二尺の上にありし）浜際にある家は軒に達し、或る家は蛭子棚に海藻を打ち上げたり。
加久見
加久見川を溯りて堀元に及び田園は旧街道の左右を浸す。
下猿野
安政の海嘯　源左衛松のありしと云ふ下方の田迄。川は白皇の前の堂の鼻の小川迄及びたり。
左は年代記と題せる当時の記録を其儘転載するものなり。
五日七ツ時に大揺り夫より汐が入、一番の潮は格別無く二番潮は堤を押し切り、三番の潮は上神母大明神の下迄、東は川限り西は田の内の田限り、昼の七ツ時より夜の五ツ迄、揺り日の七ツより人々は山へ皆遁げ込、五日より十二日迄居り十三日にて内へもどり、大揺りは五日七ツ時に一ツと其夜の四ツに一ツと其間一時に二ツも又三ツもこゆるき有、其十三日の四ツ時に治世也。
大地震の時家を出る時は火は消して出る事第一也。大地震の時は前の日の日の出入が、前の日の出入より違ひ且潮色が濁り、井戸の水が濁り

三四日前に津浪が入、此事人々心得る事也。

三崎

当麻口より上りし波は当麻の平地にありし建物を全部漂はして、東に向ひて三崎川に至る。上手は香仏寺の附近高仏より下の段に至る道路を限る。

大変記〇三崎村矢野川正保手記

嘉永七甲寅 安政元ト改元 十一月四日晴天にして暖なる事弥生中半のごとくなりしか四ツ時比地震ス。昼夜二三度なり。此日所に寄りては津浪入海上少シ濁りけれ共何之気も付す 尤高知は大震にて潮余程高けれども差たる事なければ只地震に驚き騒けれども 世上静なれハ元の家に帰りぬと云

同五日如前空晴暖にして一天に雲なく四ツ時比よりして西に風少し吹出し 白雲坤方ニ有りて雲脚少早けれとも何之心付す民家のもの共は重ね着したる者も抜捨て野方に出る者も有り 或は出漁なとして家内の者は夕飯の構しけるか申の時刻頃より震出し煙草一二服斗りの間有之大震となりて 俄に門倒れ家潰レ石垣竹垣柴垣ニ至迄毎々倒れける 其音百千の雷一度に落掛るが如くなれハ人々途を失ひ足不立倒れ臥るもの多数いやが上におり重なり踏潰さるるもの幾許人と云事なく潰家は猛火立登り 白昼なれ共闇夜の如くして焼死るものも有或は家にしかれ垣なとにうたれ死もの挙てかそへかたく同申下刻頃漸々地震静りて少し人心地しける所に 井ノ水干上り滄海十四五丁干潟となりけれハ是只事にあらすと大に驚き生残りたるものども 幼なるは背おひ老たるを肩に掛け山上或は薮を目掛逃延ひて本の家居を見れは灰となりたるか津浪入て滄海渺々となりて一塵も不残して野原となりぬ 憐なる有様なり 其夜中潮の差引八九度に及ぶなり 其初め三ツの浪甚強く四ツ目より次第に減す 宵より夜明迄震事廿余に至る 初の地震ほとにはなけれ共度々に至れハ人々生たる心地せす其夜は古今珍敷大震なりとて山中薮中にてふるいふるい夜明しする 同六日晴天少々震不止海上潮ふくれて指引なく常よりも静にして浪風も不立 この時海近之ものは潮の行詰りの所へ行き磯魚二ツ三ツ程捨ひける

同七日朝西風少し吹出小雨降る 巳上刻頃大震にて半潰の家は本潰となり五日のゆり程にはなけれとも 中中歩行なとは思も寄らす人気何となく騒しく誰云となく山潮来ると大に驚き暫く鳴り止さりけるか 不思議なる哉枯川へ水五六合俄に出渡り難き程なり地震は昼夜十五六度に及べり

同八日前日の如く晴天なり海上は初の如くして差引なし

同九日大震昼夜震う

同十日地しん右同じ晴天 十四五日の間は昼夜五六度地震ス 次第に潮もなをりゆることも大に減しけれとも少々宛度々の事なれハ山薮なとへ仮屋を構へ我家へ入るものなし 漸々廿日頃に家有ものは元の所へ帰る也 所に寄て色々あれどもしるすにいとまあらすして書洩しぬ

大潮 土佐国西大関紀伊国東大関江戸角力坐ニ配有と云

土佐国中大傷所々

御城下より東甲ノ浦過半流失其余ハ格段なし

同西 宇佐浦毎々流失福島渭ノ浜右同断須崎過半流失ス 佐賀上川口流失入野新町流失其後に海トナル 下ノ茅浦一軒も不残流失尤浦庄屋の表口にて浪おりかえし障子杯流又庄屋寺ハ残ル 同郷庄屋の屋鋪に潮入る田中ハゴミノヌケト迄潮さかのほる鍵掛無難・久百々潮入けれども流失なし大岐大損田郷中家五六軒流失 □□一軒もなし

以布利過半流失久保津 足摺山其外七ケ浦無難其内清水は軒口迄潮ニ浸ス無難 浜益野替る事なし清清水塩浜堤切レ大いたみ下益野奥益斧つみ替事なし三崎浦流失なし□□五十六軒流失郷中平段家毎大傷ミ其余ハ格別之事なし 下川口 下筋宿毛迄ハ格別なし其中宿毛は家中に浪入市中毎々焼失流失死人数々あり 中村大傷ミ焼失死人多し 其外格別なし高知は左に記ス（御城下分略）

三崎分

寅十一月四日少震当麻に少々津波入

同五日申刻大震下刻ニ止ルヤ否潮ハ当麻川尻御手洗三方ヨリ入当麻ノ潮

ハ川限リ北ハ寺ノ前迄　川尻御手洗西方ヨリ入時ハ北ハ古川下限リ西ハ川限リ　御手洗ノ潮ハ北ハ御蔵ノ下限田中地蔵ノ後ニ而行合当麻ヨリ潮入時ハ川尻御手洗之潮引カハルカハルニ指引アリ　浦ハ中ノ四辻ヨリ西潮入西ノ端ノ家ハ軒口迄流失ナシ田ノ中ハ益野川尻ヨリ入城ノ峯鼻限リ北ハ岡崎山ノ後口迄　一番ヨリ三番迄之潮殊ノ外高ク次第ニ減シ八九度ニ及　最少々宛ハ夜明迄指引有鳴動スル事ハ大風ノ吹カ如ク也

当麻ヨリ西

当麻ハ海底トナリ龍くしセン源三往還入江トナル市艇出入スル程ナリヒエノ段奥迄入ル大今奥迄大師ノ川入江トナル地蔵山右同田畠三百石余損田西ノ十畑毎白砂トナル

升屋新助回船天神ノ前江碇泊しけるが船子壱人船番ニ残りけるが、陸江得不揚壱人して能船扱して懸留無難なり

大和屋住右衛門船はセンバノ前ニ掛居けるが縄をおろし船子共扱ける内　毎毎縄切れ川尻江潮ニつれ流込ミける故船子共陸に下りければ次第に川上江流れ行　田中江じりおふして小川口にて居り四五日先夥敷人夫を以川を掘りけれども不出廿五日之大雨に水増し滑出シ無難尤カヂ傷ム

橋屋仁三郎船は大阪にて右大変ニ逢けれども無難して下る

俵屋虎吉船は室津湊に入り無難ニて此浦江廻り廿五日風雨難義ニあいけれども無難なり　右四艘の廻船無患なり　小船は数々流失あり

国中珎事　荒損と化す

高知才谷屋江山分之者買物に来りけるが　地震に逃おくれ家潰れ出る事あたはす　六日掘り家を取除き見れば　彼男息絶絶にして死なす　様々介抱して蘇生ス

ハタ郡中ノ浜婦人高知へ出で何某の方江奉公をしたり　大地震と思ふより牢に入し気違之娘を肩に掛ケ　其家の内室の手を引出テ見れハ家潰れ亭主ふせられけれハ　直に飛込ミ是を助ケ暫く庭江戸敷坐せしめけるか　近所に火の手見へけれハ気違の娘を背にくくり付亭主夫婦手を引所所能所に差置　家に帰りめしつきにありしめしを新敷着用につつみ背おい三人を介抱してじんせん寺村と云所の山に上り　かのめしを三人にあたへ残りはかつへがつえに逃来りたる人江手のくぼへ入あたへしとなん

此家は四人の家内惣領は江戸江行不在其妹は乱心亭主は中風にて歩行不能　妻はよはき人にて夫婦とも皆老人也　家は焼失して流れし也

下川口

及べる区域は下町の裾を襲ひ、向地の田園は高岸を限り、西の久保より生玉の森の附近一帯の田園は全部を没して奥の谷川に及び、川は大井出に達して波頭は尚之れを打越したり、此際六十石積みの小廻り船一隻生玉の森の上ミの道路に迄漂ひ行きて此所に擱座し、別に三十石積ミの舟ハ米を満載したるまま向地の田中へ迄流されて擱座したり。退潮は主潟の処迄にて此間の海底凡て干潟となり、此際帰帆中の漁船一隻主潟の附近にて擱座し、乗組の男は直に船より飛び下りて、いつもは海底なる所をひた走りに走りて逃れ帰りたるが、途中に磯魚ェガミ一尾の尭刺として砂上に躍れるありを認めて捕へて帰れり。

安政の海嘯の記念碑は、横吹峠に建てられてあったというが（山下一格編「下川口村誌」、明治三十年ごろすでに所在不明になっている。三崎は三崎中学校の東側道路のそばに現存している。中ノ浜にも同地池道之助の建てたものが池家旧墓地にあり、他に一基海岸沿いの台地にある。

貝ノ川

浦分は庄屋々式の下段に達し、郷分は今川を限りて左右の田園を侵し川は下より二番目の堰に及ぶ。退潮は浦の　を限りて海底干潟となる。

〔高吾北文化史、郷土史編〕〈佐川町誌編纂委、明神健太郎編、昭33、高岡郡〉

越えて安政元年十一月五日（昭和三三年より一〇四年前）申ノ中刻（午後五時頃）より四国中国に大地震あり、震動半時に及んで人畜、家屋にも多数の被害があつたが、大小の余震はその後もしばしばに及び、人々は十一月中は殆んど屋外の小屋などに寝て人心恟々たるものであつた、発震の日から三日目七日の未明突然何処からともなく蟠蛇、虚空蔵の山脈を打越して大海嘯がおし寄せて来るとの流言が村から村に伝わつ

た、すわ一大事、われ等の村は深く海底に没すると戦いた村人たちは手に手に松火をかざし、肉親、近親相呼び、隣人相助け、老幼を背負い、牛馬に家財食糧をつけて必死にその尻を引つぱたいて少しでも高いところへと最寄りもよりの高山の峯に登つたので、その夜の山々の尾根や頂には無数の松火の行列が天をこがして悽惨を極めたと云う。（この有様を描いたものが斗賀野入寺山のあみだ堂にある）

この時領主深尾氏の一家も土居の裏山古城山に避難して松火をたいて一夜を明したがさすがの豪傑、勤王の志士だつた深尾の家臣那須信吾も大風呂敷包みを大刀の鞘に吊して引つかつぎ味噌桶をもつて悠々と木の根を踏んで山路をのぼつて行くのを見かけたとのことである。（河添亥平翁の温古録にあり）まことに無稽の奇談ではあるが、地底にひそむ大鯰が寝返りを打つものと信じられていたそのころの庶民の科学知識をもつては笑うにはあまりに痛ましい惨事であつた。

〔上ノ加江町史〕〈編纂委、昭31〉

〔川　港〕

南路志、上ノ加江村の項に、

「港、川港御普請所波止廿五間横六間」とある。今の両栄川口である。両栄川は元、港川と称し、川口広く水深く小港をなしていた。安政元年の大地震に津浪のため廿五間の波止は大部分破壊せられ、接続の土地も亦浸蝕を受け、広い地面を失つて網干浜もなくなつた。

〔海岸堤〕

安政の大地震によつて、地盤沈下したためか浦分は時々海水浸入の危険を見るに至つたので震災後、藩の事業として笹村某工事監督となり、「赤土堤」を浦分北端より広埜神社の前浜まで構築し、内側に土用笹を植えた。

然るに怒涛に対する抵抗不十分であつたので、更に海に面した片側を石垣として補強したけれ共猶安心する事が出来ず、其の後内側も石垣とした。爾来格別の天災もなくこの石垣堤は波浪を防ぎ民家を護ると共に海岸南北の交通路として重要な役割を果してきた。所が、昭和二十年十二月の南海地震の際、大津浪のため堤の中程三十米程破壊せられた。而かもこの地震のため地盤沈下し、これまでの高さでは防潮護岸の不安甚だしく、仍て破損個所の修復と同時に約一米のかさ上げをし、尚波の激突甚だしい所には外側にコンクリートの補強を施した。

〔築　港〕

上ノ加江港は古来天然の良港をなし、台風、高浪の際に於ける避難港として県下有数の港湾であつた。更にこの湾に続く釜ケ窪地を内港として人工を加えれば完璧の避難港となるのである。この窪地は安政の震災以来次第に浅くなり大船巨舶の繁留に不便であつたので、茲に県費を以て修築することとなり、大正三年釜窪地の外磯より防波堤百三十間を海中に突き出し釜窪地を掘つて内港とし、更に防波堤に囲まる外港をも浚渫する事として総工費八万六千円が計上せられた。

●上ノ加江の状況

安政元年十一月四日、午前九時頃、大地震があり、川筋にあぶき汐が指し入る程度であつた。翌五日は青天日和で三月頃の陽気であつた。人々は皆安心していた所、夕方五時頃にわかに山も崩れるほどの大地震が起つて、家ゆり動き、道をいく人もころぶ程で、土煙立ちこめて、人々はあわてふためき。泣きさけぶ者もあるほどであつた。やがて、ゆり止んだと思つていると、しばらくして大津浪が襲来し、前後十二回も押し寄せたが、三番汐、四番汐と次第に引き汐が強く、浦分の民家は全部流失した。人々は夜の深まるにつれ、一そう恐れをなし、ただ神仏に祈つてひたすら夜の明けるのを待つた。両栄川をさか上つた汐は、あたり一面にひろがり、汐先は和田ノ川関まで押寄せ、浦分の流失物は、そのあたりや越の谷山際に多くかかつていたということである。

又大川内の原千代重氏が、祖父兼作翁より聞かされたという話によると、当日は丁度、山本屋敷（現在建石のあたり）で角力をしていたが、土俵の上の角力取りが取り組んだままころんだ。又あたりの麦畑は畝がくずれて平地になつてしまつた。大汐が和田ノ関まで押しよせたが、来

る時は、だぶだぶとやつてきて、歩いてにげられる位だつたが、引き汐はものすごく早かつた。中山が汐に取り囲まれ孤立の状態であつた。と。

●矢井賀の状況

岡田牛太郎老人（九十歳）が、その父から話し聞かされた事の口述によると、大地震の当日、父（半次）は祖父と共に、田仕事に出ていたがにわかに大地震が起り、山鳴動し、各所に大山崩れがおこりその土煙り物すごく村中がくらがつた。急ぎ家に帰ろうとしたが動揺が激しくて、なかなか歩きにくくて、僅か二、三町はなれた田から家まで帰るのに、ずいぶん時間がかかつたという。帰つてみると、祖母は家の中で、茶釜をそのふたでたたきながら、「カアカア、カアカア」と大声で叫んでいる。（昔から地震よけのまじないといわれる）「早よう出てこんか」と叱りとばしておいて、馬駄屋へ行つた。既に馬小屋は傾き木戸は動かない、柄鎌で桟木を切つて馬をひき出した。

津波のくるのを恐れて一同山の方へ避難した。地震は其の後、何回も起り、家に帰るのも心配で、三日の間山ごもりして、食料や衣類など時々家に取りに帰つたということである。

又津浪の被害も仲々大きかつた。村中が津浪で洗われた。松尾神社の上の方へ小船が三艘流されてきて坐つた。

○

安政年間、上ノ加江浦庄屋に、岡村広蔵という人があつた。

たまたま、安政元年大地震があつて、大津浪のために浦分はすつかり押し流され、家財道具一切を失つた村人たちは、寝るに家なく、食うに食なく、その悲惨なさまは目をおほうばかりであつた。

この窮状を救うため、庄屋岡村広蔵は早速分一に願い出て、倉庫を開き蔵米を村民に分配し、更に藩有の山林を伐り、家屋を建てさせ、救恤に精魂を傾けた。このおかげで村人は窮地を脱することが出来た。

村民は長くその功を徳として語り伝えている。

○他に宝永地震の伺書須賀神社の頃を参照

〔尾川の郷土誌〕〈佐川町誌編纂委、明神健太郎編、昭31〉

地震国に数多い大小地震の中でも、特にこの村に直接の影響を及ぼした大なるものは安政元年十一月四日四国、中国にわたつた大地震と、昭和二十一年十二月二十一日午前五時に四国、近畿地方に震源を紀州沖として起つた南海大地震である。両者とも全村にわたつて、石崖、堤防、道路の欠壊、落石、亀裂などの大小被害を担当被つたが人畜の被害はなかつた。

〔椙原町史〕〈編纂委、昭43、高岡郡〉

一一月五日大地震七日続く、大蔵谷村卯吉けが、川井村徳弥死。

五日より六日の朝まで三六ぺんゆれる（大蔵谷大変覚にあり）三島で五千度祈願。

〔東津野村史上〕〈村教育委、昭39〉

その後安政元年（一八五四）大地震七日七夜の間天地震動し多大の損害を与えた。

〔とさおきのしま〕〈沖本白水著、昭10〉

安政の大地震に母島の人々歩行困難にてよろけつゝ声の方へ逃げゆきけり。然れどもさしたる被害はなかりき由。（母島嵐庄三氏談）

同じ時弘瀬の人々は山の岩の転げ落ちむを恐れて御先祖に避難せり。鳥さへ空を飛び得ずはたはたと落ちしとなむ釣舟など俄の波にまきこまれて死にし人も多かりしといふ。（弘瀬金子達馬氏談）

同じ地震に鵜来島には津浪あり。庄屋の井京に鰯あまた入りけるとなむ。日向岬の大巌の二つに裂けしもその時の事なりといふ。（鵜来島松浦増太郎氏談）

〔西土佐村史〕〈編纂委、昭45〉

高知市の被害

死者、三百七十余人
人家倒壊焼失、二万二千余戸
人家は大半が倒壊し、火を発し、老幼男女の泣叫び、逃げ惑う惨状は凄惨の極みであつたという。
中村町の被害
家屋全壊　一五六戸、同半壊七〇戸
焼失家屋　九〇戸、死者　三〇人
下山郷においても家屋に被害あり。石垣等も壊れ、強震のために逃げるにも歩けず、立木にすがり、やや震動の治まるをみて竹藪へ逃げ込み夜の明けるのを待ったと古老はいい伝える。
この安政の大地震については郡下各地に記念碑が建てられているが中でも入野・伊田・中浜等は有名で、色々と後世を戒めたものもある。「沖一里出れば津波も安全」「前日より潮色にごり井戸水濁る、又干せて渇れる、」等である。
下山郷でも地震の前には雉が鳴き、鼠が逃げ、兎が走り廻ったといわれている。

〔大内町史〕〈田中八束著、昭32〉
安政元年（一八五四）十一月五日午後四時また大地震がおこった。下川口村誌によると、この日は頗る穏な無風の日で、三日前より海潮に変化がおこつて毎日スズ浪が続いていたが遂にこの日大地震がおこり、強烈な震動は約十分間位であつたが微震は少しも止まず、一週間も続いたと言う。
この事に関し弘見金積寺の僧、祖恵も筆の序に記しているので意解すると
安政元年、十一月の五日、午後三時、大地震がおこり、又七日八時（午前、午後は不明）大地震がおこつた。宿毛は大火事になり、大海、榊浦、湊浦、泊浦、小間目、其他、近郷、近浦処々家が倒れ、浦々には津浪があがり、諸人は心魂を失つて了つた。前代未聞の大変である。と書き残している。
柏島はこの時大被害があり、当時宿毛安東家の家臣として柏島詰役であつた一円嘉平次は次の如書翰を以つて報告している。
五日七ツ半頃（午後四時）ユリ出シ別而震強ク取アヘズ御用家ヲ立裏口ノ畠ニテ四方見合候処暫時ニ惣囲ノ石垣不残崩レ見ル中、庄屋ノ居宅モ一時ニ潰レ込、石垣ハ高六尺余ニシテ上ノ石拓ノ如クニテ其間ニ間余モ相隔候、畠ヘ飛ヒテ頭上ヲカスリテ二ツ斗飛越、其石中々四人昇ニ而一貫頃ノ石ハ彼是モ無ク微塵、巷事言計ナシ（ムシ）海上見合候処湊内ニ掛リ居ル数十艘ノ漁船市艇ノ爾来目通見請候、船市艇ノ屋遥見上ル程ニ成海フクレ行山ニ見ヘ扱又沖島ノ近辺ニ当リ海上ヨリ真黒キ雲ト片面ハ火炎ノ燃ル様ニ火ト雲トノ気立上リ、実ニ二タ目トハ見ラレズ、悪シキ景色何共可申様ナク（ムシ）先其ノ難ヲ凌キ山上ニ登リ漸ク一息継き地震少シ静マリシ後、船中ニ出居候者上リ来リ、咄承リ申処海上ニテ見及申処騒動中三斗計山ノ如キ浪押入、ソリヤ見ヨ柏島浦トモハ残ラズ押潰シタリト見ル所勿体ナクモ稲荷宮ノ安子木一様ニユルキ地ヲ撫ルカト見レバ、波退キ右ノ危難ノ様ニ三度ニ及申ト聞云々
翌々七日頃迄震動絶ユル間ナク五日夜三十度程ハ数へ候得共、其ノ後ニハ数モ知レ不申候（岡崎房松氏調査）
この地震津浪によって災害をうけ、奉行及び弘瀬徳政によって修築された。（土木工事参照）
古満目では夕方遠見山が火事となつたので男は皆消火に出かけていた。ところが大戸沖合より物すごい音がし、やがて地震が始まった。さあ大地震だとあわてふためいて帰ると既に津浪は遥か奥地の平山頭集に上りその引潮によって古満目全戸は沖に引流されていた。昔の波戸（堤防）を二十間沖合に突出し大船繁場の船溜りを構築しておつた為めに引潮はこの堤防を越す事が出来ず全部古満目の町中に入って押し流してしまったのであり、やがて部落評議の結果波戸が長すぎるのでこんな災害をうけたと皆異口同音に話し合い遂に堤防を取除いて了ったのであった。当

時網頭をつとめていた泉漁吉は神楽箱に入れていた水主の歳取金を責任上氏神春日神社に担ぎ上げた。ところが失明の老母はこの時引潮の為めにさらわれて了ったのであった。又安岡光次は三歳の時であり碇泊中の大船に乗船しておりそのまゝ沖合に船もろ共引流され三日間漂流の後古満目港に帰りついた、古満目部落は春日神社とその下二三軒を残すのみで皆流失し平山頭集の親籍知己を頼って仮住いしていた、安岡家族も親籍の浜田家に寄寓して子供を失い毎日泣いているところへ船頭が首馬に乗せてこの家まで連れて来たと云う。この喜び如何ばかりか、当時幡多最大の富豪布袋屋こと後藤浅蔵も大船二艘を流失して了うと共に浦尻住吉谷の畠全部を流失した。（昭和初年吉田によって埋立）

弘見馬路では馬路峠三の桜迄大海栄喜の小船が打あげられ、中山勢以は芋壷の中で磯漁を三尾もとったと語ったと云う。

○

弘瀬徳政の修築（○柏島の築港）

安政元年十一月五日（寅の大変）（天災史参照）により防波堤や網代はいたんで了ったので、やがて二年後の三年（一八五六）に奉行によって修復されたのであったが、それだけでは完全とならず老役であった弘瀬徳政は自力を以って手古前（石工）を雇い、地引場所の落石を取除き網代浜辺共更に修築し又地下人は困窮の為め家居の修復も出来ず小屋掛けをしていたのでこれらのものにことごとく米飯を与えていることによつて褒賞を頂戴している。

安政七年中略、大変の節地下人共己家掛いたし罷在中、飯米に補遣し居浦波戸御普請取引払段、手古前相雇地引場所落石取除ケ網代浜道共自力を以相築、漁師共為ニ相成

○柏島、稲荷神社

又安政元年大地震があり、（災害史参照）柏島の被害の少なかったのは稲荷神社の加護によるものとして臨時祭を行い、又神祇伯家より神体及称号と鳥居額字御染筆をうけた。

嘉永五甲寅年大津波ノ際危害無ク、依テ神祇官ニ申出テタレバ同所ヨリ正一位ノ尊称ヲ賜フ、同年八月臨時祭執行ニ付此ノ札ヲ納ム（註、甲寅は安政元年に付嘉永は間違い）

表面

天下泰平、治国万歳、国君安穏国内謐

神主　宮林和泉　藤原吉平

正一位稲荷大明神宮　土佐国幡多郡柏島浦鎮守

当分　宮守　久之丞

天気和順風雨随時大漁満足浦中繁栄　京都取結　高知　松介端

御所願所　稲荷祠官

久我山城　源　幸磨

裏面

当社従住古当浦為生土而鎮座之所著明也、干時嘉永五甲寅年冬十一月五日依災異而諸国大地震人家多潰、浦々処々郷々大潮溢、依是流失不鮮又姓娥過多雖、然於此浦免其危難無其患、都而得福昇意、依神明冥介也、弥益尊敬競発生上一統将為賽謝神同心之厚希神祇官統領神祇伯白川資訓王、以於彼地今六月十五日以良辰奉崇斉、以神輿彼授正一位依是同年八月以吉日行臨時の祝祀者也、稽首謹言

安政四丁巳年八月吉祥日

荘屋　浜田米右衛門

年寄　浦林竹四郎

組頭　平吉、八十八、嘉蔵

清次、新八、恵右与門

今般依懇願‖（土佐国幡多郡柏島浦ニ有之、稲荷之鎮守江）‖奉勧遷正一位稲荷大明神之神爾、奉勧遷於其請地有也、神爾到日宝祓除其社永世奉安鎮之祭礼祝無怠慢於令尊信者土地潤沢村中繁栄幸可有、守護者也

神祇官統領　神祇伯王殿　公文所

安政四年六月十五日　願主氏子中（皆山銀）

〔下川口村誌〕〈田村信吉編、昭10〉

安政元年寅十一月五日は頗る穏なる無風の日なり、三日前より海潮に変化起りて毎日「スゞ浪」の入る事ありしが遂に此日の七ツ下がり（午後四時過ぎ）大地震起り鳶落来り地裂け一たび倒れたる者は起つ能はず、強烈なる震動は約十分間にして歇みしと雖も微弱なる震動は少しも歇まず後ちには断続しつゝ遂に一週日に及べり。強震歇むや踵で海嘯来る、其浸水の区域左の如し。

下川口　向地（浦民の亀のコウと云ふ地）の田園は高岸を限り西ノ久保より生玉の森の附近の田園は全部を浸して奥の谷川に及び川は大井出に達して波頭は之を打越したり。

貝ノ川　浦は庄屋屋敷の下段に達し郷分は今川を限りて左右の耕田を浸し川は下モより二番目の井堰に及ぶ。

海嘯の襲来せしは三回にして二回目のもの殊に大きく一たび寄せて退きし時は下川口は主砦（一名カゴハヘ）片柏は嶋砦、貝ノ川は浦ノ砦を限り全く干潟となりて海底を顕はせり。実地を目撃せし者の談によるに海嘯は寄する時は徐々にして烈しからざるも退却の際は勢頗る猛烈を極め轟然たる凄しき音を為すと云ふ、震動の後には海嘯来ると云ふ事は民衆凡て之を予知し居りて直に高所に避難せり。是前の大変の伝説に鑑みる処ありしが故なり、然れ共其避難せしは強震歇みてより後の事にて強震の際は歩行の自由ならざると且狼狽混雑の余り到底避難は為し能はざりしと云ふ。

当時は全部草屋なりしが故に倒壊したる家屋は無く（瓦葺家にして瓦一切崩落せしはあり）従て火災もなく人畜は死傷もあらざりしか共爾後数ケ月の間は再演を慮り火災の予防に迚水を桶に盛り夜間之れを枕頭に備へて寝たると云ふ。又当時避難の為家を去るときは皆かまど炉に水を注ぎ或は大根の葉などを覆ひて出火を予防せしとは用意周到の事なりしと云ふべし。

此震災後は久しき間海潮に変状を示して干満と云ふ事無かりしと故老は云へり、父の録せる地震高潮記によれば海水は此時より約五寸高くなれりと民衆皆之れを云へりとあり。

震動の起りしは七ツ下りにして黄昏には間も無き頃なりしにも拘はらず大に時間に余裕ありて夜に及ぶ迄の間頗る永かりし如く感ぜられたりと云ふ。故に当時の人は此日は日輪吾人々類の苦患を憫みしばし逆戻りを為したるにてあらんと云へりしとぞ。

附　記

○（スズ浪）海水に変動ありて徐々として進退を長くする波を云ふ。恰も此際変は二番中の頃なりしが海潮の為作士と共にさらわれしを以て再度種子を下せり。

○宿毛町は此時火災起りて人家多く焼失す。

震災遭難実話　一　　編者の母

編者の母語るらく、下川口に於ける地震の光景は知るべくもあらね共吾れ此家に嫁ぎ来りて後聞く処によれば後に吾が夫となりし人、即ち御身の父なる人は此時廿二の男盛り、恰も此日は姫ノ井より瓦を積み来りし舟ありて卉を陸揚げなしつゝあり（此瓦は本家の新築用なりしならん）又吾が舅となりし此身の祖父上は晩酌の肴に迚ヒメ市を調理し居りしと云ふ。祖母上は稚児を伴ひて下モの親戚の許に行きをり、地震起るや直に稚児を背負ひて帰る途中誰かに行き当りて倒れたる儘大地震の已む迄は一歩も起き上る事は能はざりしと云へり。

元来震動烈しき時は逃れ出づる事能はざりし者と見へ一同の者が上への山へ（墓地床）遁れ行きしは皆大震動已みてより後の事なりしと云ふ、躰て大震動は已みたるが誰云ふとはなく大潮来るぞと喧伝し、さらば是より上への山へ遁れよとて多くの人々押し合ひつゝ上への山指して走せ上りしが一時は余り多くの人込みの為途中一歩も進み得ざりし事ありしと云ふ。

御身の祖父上なる人は此時恰も炊きかけありし「夕飯」の殆ど出来上らんとしつゝありしを羽釜其儘引き抱へて遁げ出でしは実に用意周到の挙動とや云はん、斯くて吾が一家は他の人々と共に上への山へ迄遁れ来れるが御身の父上は兄なる人に向て金は如何にせしか携へ来しにやと問ふ

に全く忘却して家に残せりと云ふ。幵は安からぬ事なり、いで帰りて取り来らん迚兄弟諸共家に向て馳せ行く後より其父親なる御身の祖父上は二人の者よ命は惜しくなきか、やめよやめよと大声に叫ぶも其筈よ、此時緩徐なる震動は持続して少しも歇まず且大潮今にも来ると言しればなり、二人の兄弟は耳にもかけず家に馳せ付き扨鍵は何処にぞと尋ぬるに周章の場合の事とて生憎存在一向に知れず、兎やせん角くやせんと云ふ内に、御身の父上は力任せに草鞋の儘なる土足にて一踏ドンと蹴破りしに、非常の時には非常の力の出る事よ、二枚の戸の内の一枚は物の見事にメラメラと内部の方に踏み込まれたり、夫より手もて戸の横ザンを一本宛取外すに何の手応へもなく外したると云ふ、本家の金戸棚の戸の二枚の中の一枚の新しかりしは此時破りたるを新調したるが故なり、吾が一家の露宿せしは祖先の墓地床なりしと云ふ事なるが此上への山に遁れし時は背に負はれたる子供迄も皆今少しく上への方へ逃げよと云ひたるとぞ。

附記

○母幼名馬、後慶と改む、才角溝渕伝之進長女

○上への山　谷屋敷墓地を云ふ

其二　田中粂太郎爺

地震の初まりしは霜月五日の七ツ時なりし能くは記憶せぬ共此日より三四日斗り以前より毎日スゞ浪の入る事ありし、自分は一日小川の辺りより舟を出して居りしが川は俄に干潟となりて舟は全く擱坐せり（川の干潟となりしは小川の事なり）。是は易かならぬ事と思ひ居る中、見る間に潮水潮し来り容易く舟を出せし事ありし、斯くの如くスゞ浪の入る事一日中に幾度と云ふ事なくありしが遂に五日の地震となれり。恰も此時朋友の浅吉と云へるが自分の宅に来り居りしが地震起るや直に二人外面に出でしに浅吉は出るや即時に轅ひたり、専次と云ふ人は此時頻に犬を打て打て犬を打てば地震が己むぞと云ひて只犬の事斗り云ひて居るを見受けたり、見れば此時早や中町（粂太郎当時中町に住せり）は巾五寸斗り裂目を生じあり、夫より大潮来ると云ふ者ありて大混雑となり遂に上への山へ逃げ行きし、同所に居りしは十一日斗り（此十一日と云へりしは粂太郎の考へ違ひにして七八日間なりし）初め七日間露宿し居りしが七日目に大分己みしより帰宅しても苦しかるまじきとて帰りしに又動き出して又逃げたり。

間もなく大潮入れり、此時湊に繋ぎ居りし六十石積の小廻り船は生玉の森の上みの往還へ迄流されて此処に擱坐し外にアマイの三十石積の舟是は此時米を満載して入港し居りしが積荷其儘亀ノ子（向地）の田の中へ迄流されて擱坐せり、二番目の潮は最も大きく自分は其浪が引き取りて行く有様を上への山より目撃せしが「市ノ盥へ」突き当りて飛び上る光景は大きゝ帆船の帆を展べたらんが如くに真白く空に揚がりて壮観なりき、ずつと引き取りし時は主盥の処迄引きて其処迄の海底は全く干潟となれり、力と云ふ男は此時湊にて駒蔵と云へる舟に乗りて居りしが引き取られて沖の方へ漂ひ出でしも、都合よく主盥の附近にて擱坐したるによる、力は直ちに船を飛び下りて、いつもは海底なる処を、ひた走りに走りて帰る途中に一尾のエガミの潮水に引き取られて発剌として砂上にあるを認め、幵を拾ひ取りて上への山へ持ち来れり、又福平と云ふ男は此日アカボを釣る為沖へ出て居りしが、其帰路にて大潮の入るを見、地震と云ふ事を覚り、家には帰らで沖の方へ漕ぎ出したると云ふ事なり、此時代は家は多く草葺の掘建てにありしが故に、倒れしものはあらざりしが、粟屋の本家は瓦葺なりしが故に倒れたり、自分は是を見し時は火災の起りし者と思ひたり、幵は倒れると共に濛然として土煙りの揚りしを見し故なり。（○主盥は「をもはへ」）

附記

○吾村に古来地震のとき犬若くは雉子鳴けば震動やむと云ふ事あり

○地震の時　人々口々にコツコツと云ふ、何故なるかを知らず、犬を鳴かしむれば地震やむと云ふ故コツコツは犬を呼ぶ為なりとも云ふ又一説には地震のするときは川井等要するに地水を見るの要あり、地水にして涸るゝときは大地震至ると故にコツコツはカワカワと云ひて川を見よと云ふのカワカワなるが後に約めてカツカツ又転じて

コツコツになりたるものとも云ふ

○市の礁　下川口河口にある礁

其　三　　井上総次郎爺

地震初まりしは七日過ぎなりし自分は此時小網（磯立あみ）を立てに迚沖に出て居りしに、ふと見れば脇ノ川附近を初め磯崎辺の絶壁崩落して土煙盛に揚り居るなり、当初は何事の起りしぞと不審に堪へざりしが驚て地震なる事を覚れり、間も無く大潮来りて自分の乗れる舟は其浪に送られつゝ浦庄屋々敷の下た段に漂ひ来りて茲に上陸せり云々。

其　四　　編者の母

母語るらく吾れの此家へ嫁き来りしは十五年にて地震は其五年前の十一の時なり、吾れは此日の夕方風呂に入るべく近隣の親族なる扇屋と云へるに至れり母（編者の祖母にて即母の母）は妹の政野（八才）と扇屋の娘（七つ）とを連れて先きに入る、吾れは其間、扇屋の叔母（母の従妹達）の機を巻くを手伝ひつゝありしが、ヅーンと大きゝ響にて大地動き初めたり、すは地震ぞと思ふや直に轅ぶが如くに庭に飛び下りたり、此時扇屋の叔母は茶釜を叩きてコツ、、と云ひ母は風呂場を出でゝ天を仰ぎ今の響を訝りて呆然たり、吾れは母に向て一声高く母様地震と云ひ棄てをき幾度か仆れんとする身体を支へて辛くして障碍なき田の畦に迄遁げ延びたり、此瞬間に母は再び風呂場に入り今しも湯に投ぜんとしつゝありし二人の子供の内の吾が子政野を引き抱へ大道に迄走り出で声を限りに吾れを呼び居れり、吾れは田の畦に居りて震動の有様を見しが、或は家の納屋は礎石より五六寸斗りも上へに飛び上りし儘宙に於てユラユラと震ひ、下たの礎石へつく様には見へざりし、扨父は如何にぞと云へば父は地震起るや直に厩に馳せ行き馬を牽き出さんと轡を啣ませ力の限り曳き出すも馬の性質は奇なる者哉斯る場合は一歩も外に踏み出でざると云ふ、故に父は烈震の歇む迄は唯馬と一種の綱曳きを為したるなり、強震、やむや馬は漸く厩を出てたるが父と馬とが門前を出でし刹那に於て門の塀は倒れたり、政野と共に湯に入り居りし扇屋の娘は風呂より飛び出でゝ己が母を慕ふて家に入りしに母は此時伝に負はせたりし末ノ子の身の上を案じ外面に出でゝ其名を呼びて居らざりし故娘は更に家を出でゝ母の許迄馳せ行く途中三度迄轅びたるが其附近には沢山の丸木薪を積みてあり、娘の其場を去ると同時に崩れたると云ふ、斯くて大地震は一先づ已みたる後皆の人に大潮来ると騒ぎ出し、先づ庄屋（編者の母の実家の本家）の前の丘上に遁れ行きしが此処にては尚不安と云ふ者あり左らば是より小才角越への山上（寺のうしろ）へ遁れよと犇き合ひ人々是に向て行る事となるや、吾れは他よりも早く上の大屈りの道迄馳せ上れり、此時庄屋の伯父様の云はるゝに、若云ふが如く此山に迄避難せでは叶はざる程の大潮来るとせば一時の生命は全ふするも食に事欠く道理なれば、一時を助かりしとて何かせん、先づ初めの処に避けて然るべしとて、人々を制し再び初めの丘上に皈りしが、言ふ如く其処迄も大潮は来らざりしなり、避難せし丘上の畑には四方へ草莚を張りて、自他の界となし、青天上の儘に之れに宿し、夜は其処彼処に大なる篝火を焼きて非常を戒め、主人達に交代に家に皈りて、盗賊の警戒を為したり、吾れは小供心に此俄作りの家に起居するを頗る心楽しく思ひたる事なりし云々（当時の遭難談は他の古老よりも多々聞きしも略す）

〔中村町誌〕〈町編、昭25〉

智円寺（大字中村、字青木森）

その後天保元年　辺家の火災で焼失したので同六年九月若狭（南京町の南裏）の三反ばかりの土地に移転再建したが、安政元年の地震で倒壊してからは、久しく右山の風辺家を仮本堂として本尊を奉安し、安政七年二月から智円寺と公称、明治二十六年現在の所へ移転した。

〔中村魚市場記録〕〈「中村町誌」所収〉

一、嘉永七寅年安政元ト年号替ル、右十一月五日昼七ツ時（午後四時）大地震仕候、其夜大ゆり小ゆり共、又三日目大ゆり是モ同七日之七ツ時ムカワレ目迄少々づゝ毎日之事、其余もおりおり

一、入野地中半分ヨリ下モ通流失、中井早崎下田ノ口一流(れ)ニ流失カ

キゼ川添口ハゞ弘クきれ深サ三尋立千五百石斗ノ市艘出入いたし穀物沢山ニ積入、田ノ口ノ助ケニ相成申シ、田ノ口中井早崎ハ野地に相成潮先キハ上田ノ口丸山ノ下迄、中村之潮ハ崩岸ノ川一ぱいにて潮先きは大用寺之下迄、渡川ハ築地ノ沖ノ瀬迄。

一、家々相崩れ焼失家数軒おしうたれ人いたみ四五十人、残リ家山端ニ多シ、市中一統に山々へ己屋を打ち十日余り居申候云々。

〔右山、猿田記録〕へ「中村町誌」所収〉

嘉永七寅年（安政元年）十一月三日ヂシン仕リ五日大地震仕、右山村家皆マロビ村々土蔵不残、大シヲ馬渡リマデ来、秋作ワ大虫ハヤリ、スドウシ虫クイツケ、コンキユウ其上十二月一日大風水ニナリ、ヂシン少々ツヽ、マイニチユル、地ワレ申候。

〔中村、伊与田記録〕へ「中村町誌」所収〉

嘉永七年十一月五日夕七ツ時（午後四時）大地震津浪中村町家九歩通潰込の上焼失。（この伊与田家は松久屋と云い当時本町に住し組頭を勤めていた当主貞次郎妻たけは家屋倒潰のため圧死している）。

〔目代、横田記録〕へ（抜萃）、「中村町誌」所収〉

差出

一、焼失家　九拾八軒
一、潰家　百四拾四軒
一、半潰家　六拾六軒
一、焼失米　七百三拾六石弐斗五升
一、焼金　四百七拾七両弐朱
一、焼扨米　拾弐石
一、同小豆　壱石壱斗五升
一、同麦　四拾石六斗
一、同大豆　弐拾石弐斗五升
一、死人　弐拾九人

〆大変ニ而焼亡之品如此

右之通御座候也

寅十二月

横田金次郎
町老代　善次郎

御郡奉行所

（これは地震後約一ケ月を経過して、差出したもので十分調査済の正確なものと思う）

町別被害表（記録により筆者作成）

町名（現在の町名）	全潰	半潰	焼失	死亡者	罹災者
本町（本町）	三六（六）	二	一七	一二	二一七
上町（南、北上町）	一九（二）	〇	一八	三	二三七
紺屋町（紺屋町）	一七（一一）	一三（五）	〇	一	一二八
中新町（中ノ丁北半）	一〇	一一	一三	三	一五〇
本新町（中ノ丁南半）	三〇（九）	一	三〇（九）	五	二八八
京町（京町）	一四	二六	六	四	三七八
今新町（新町）	一六	九（一）	五	〇	二三七
下町（西下町）	九	四	〇	一	三七〇
計	一四一（二八）	六六（六）	八九（九）	二九	二、〇〇五

欄干（ランカ）南側、御貸家住拾軒分潰

新町西側　御貸家六軒半潰　翌卯二月風雨之夜潰家ニ成ル

記録には潰家（全潰半潰）と焼失家に区別し、町別に一々氏名を挙げてあり、氏名の脇に細字で蔵、控家、裏座敷等別棟と思われるものを書いてあるので（　）してそれらの数を示した。合計が前掲の差出の数字と若干喰違いがあるがそのままとした。罹災者の応急措置としては地震当夜の五日から三日間、山城屋清平、種屋富次郎の両家に命じて粥の焚出しを行い、その後十日間は藩の御倉の貯蔵米の下げ渡しを受け、一人

一日三合宛分配（被害表の罹災者数は其の分配人数に依った）。また新町、上町、小姓町の麦畑などに五十軒分づゝの御救己家を建て、百十九軒四百三十一人を収容している。

〔南海大震災誌〕〈広木三郎編、昭24〉

安政大地震に於ける中村町の被害数

当時の街名	現在の街名	人口	死亡数	全潰	半潰	焼失	計
本町	本町	二一七	九	二八	〇	一六	四四
上町	南、北上町	二三七	二	一九	〇	一八	三七
紺屋町	紺屋町	一二八	一	一七	一三	〇	三〇
中新町東新町	中ノ丁	一五〇二八八	四五	一〇〇三〇	一一	一三一一	三四六二
京町	北京町	三七八	五	一四	二六	六	四六
今新町	新町	二三七	〇	二二	九	六	三七
下町	西下町	三七〇	〇	六	三	〇	九
（所在不明）	愛宕町		三一	一〇	七	〇	一七
計		二、〇〇五	三〇	一五六	七〇	九〇	三一六

〔須崎町史〕

安政元年甲寅十一月四日朝五ツ時（午前八時）地震あり。敢て強きにあらざるも長震にして尋常に異なれり否や潮狂ひて堀川に逆流すること夥しく港内に碇泊せる船を東へ流し西へ引くこと終日なりき。此の日八幡磧に例の蛭子祭相撲興行ありて人々群集せしが、此有様を見て一方ならず心配し、早くも山に逃げ上り夜半に家に帰りしものあり。翌五日は天晴れ渡りて一片の雲なく、風なく、人々安堵の思をなせり。然れども暑きこと夏の如し。相撲の翌日の事とて酒宴を張れる家も多かりしが夕七ツ半時（午後五時頃）に大地震起り、漸次強くなり忽ち暗夜の如く大地は所々に二、三尺、四尺、五尺、六尺と裂け、中より潮を吹くあり、土煙を飛ばすあり、一開一合山崩れ、谷湧き居宅土蔵皆倒れて算を乱せり、人々五人、六人、手に手を取りて泣き叫び、東西南北に駈廻り、父子兄弟互に呼び、或は俯伏せに或は仰向きに倒れ、二三間歩みては又倒れ、歩行自由ならず。半時ばかりにて稍々小震となりたり。此時人々は宝永の大変の如く大潮溢れ来らん、早く山に登るべし、とて我れ先にと取るものも取り敢ず山に駈け登る。稍々心豪なるものは蒲団等を携へて逃れたり。時しも大潮天を蹴て海門に衝き入り来る物音凄まじく乾坤崩るゝかと思ふばかりにて光景転た凄惨なり。堀川橋は皆地震に揺り落されて其上に潮水二三丈高く数百の家又船を浮かし来ること実に目ざましかりき。之を見て逃げ後れし人々素破堀川は渡るべき術なし。

疾く西の五紋中山へ登れよ。と呼び、叫びたれば皆々先を争ひて刈谷の方へ走り行けり。然るに又二つ石の堤推し破られて大木人家等池中に

〔上ノ加江町誌〕〈小島弥三次編、大4〉

善賢寺

寺床を山崎中町に定め居りしが安政元年所謂寅の大変に又々堂宇流失しければ其の後旧佐竹氏城地なる大川内字タアトキヤシキに移りたり

推し流さる数百人の人々は打渡らんと駈入りて水中の洲上に躍る様誠に哀れに見えたり。されど幸ひにも宝永の津浪よりは潮嵩低かりしかば、潮の退く間を見て辛うじて西の山に登り死するに至らざりき。既にして日は暮れけるに、今宵は暗夜なり。地震は大小幾百度と云ふ数を知らず。人々暁まで一睡だにせず。相引合て神を念じ、仏を祈りける程に夜深くなるに随ひ着衣に置き凍れる霜は雪よりも白し、此夜山にて親子はなればなれにて生死も知らぬ者多く、親は子を呼び、子は親を慕ひ泣き悲しむ声哀れなり。夜は明け六日となりたるに此日は晴天にて日光人を射る。されど壮者は各家に帰り見れば昨日累の仕事を為せし儘にて戸障子は明放し適々閉し家ありても壁は落ち、柱はゆがみ、瓦は飛び、一軒として全きものなく、我家に入りて衣類、蒲団、米、味噌等を手当り次第に取り後をも見ずして又山に逃げ行けり、其翌日も地震は止まず、総て是より四、五日間は昼夜四、五十回も大震あり人々家に帰る能はず。何十日間も山にて暮せしが、十二月の末にもなれば稍々震ひも遠くなり、人々新年を迎る準備に忙はしかりし、其三十日に又大地震ありて狼狽し、東西の山に駈け上れり。越えて其翌年も時々震動止まざりしは左に記する如し。

安政の大地震一ケ月の記録

大震	一二回		
中震	一一一回	計	七一九回
小震	五九六回		

右の記録は高知市鷹匠町水門御番人嘉助（当時七十五歳）の調査せしものなり。

〔宇佐町誌〕ヘ「南海震災史」所収ゝ

宇佐は海浜にある為に津波に襲われ全町殆んど全滅の悲運に際会したのである。

安政元年十一月四日（町誌には八十年位前　九十二年前）午前十一時頃相当大きい地震が襲い来り海潮定まらず、平日より多く引き又寄せ来る事七八度に及んだが然し人家迄は来ず、翌五日は晴天で風なく殊に温暖の好天気であつたので、人々は安心して平常の通り家業に従事し、何等の警戒もなさなかつたが午後五時頃に至り俄に天薄闇となり俄然近代未曽有の大地震起り、山嶽崩壊、人家倒壊し人々救を求め忽ちにして阿鼻叫喚の巷と化し去つた所へ大津波が襲い来り、海に近い家々は悉く一呑に捲き込まれ宇佐村中残家六十軒、内造作にかゝるもの僅かに弐拾余軒、溺死十余名に及んだが、最も悲惨を極めたのは福島浦で（現宇佐町福島）引潮の為にさらはれ行く人々多く其惨状は実に見るに忍びずようやく残つた者も北方山地に逃れようとして走り出したが、後の川は橋が悉く落ちて渡れず、只あわてふためいて東方に走り遁れるより他に道なく、瞬く内に四十余人は潮の中に呑まれ、只水泳の達人は泳ぎ逃れ幸福な人は板に縋つてようやく生命のみ取止める事が出来た。

二番目に襲い来つた波は更に甚だしく、僅かに残つて浜分及十町程後方の部落を一呑にし、此処は全く一戸をも残さぬ廃墟と化し終つたのである。

このように寄来る波は七回に及び、中にも第四第五の波は最も甚だしく十五六町を隔てた山際の家も多くは流失し果てて残るは只一戸山の上にあつた源右衛門の家のみであつたと言う。以てその惨状の如何に大であつたかを知る事が出来るであろう。

其後十年間位は毎日少く共五六度、多きは三四十度の地震の無い日はなく村民は只戦々恟々として日を送つた、殊に同年大晦日の如きは夕方より夜明までに百二十余度ゆつたとの事である。

其後数ケ年の村民の生活は実に悲惨を極めたらしく真覚寺の僧静照の日記節分の日の条に。時節柄に付き鬼の窺ふ様なる家もなければ福の神の宿る家もなし。豆を投げて鬼は外福は内の声も聞えず、皆々己家にて窃かに大根の煮しめを食うて節分の心持をなす。と言又

橋田の者共毎日海に拾い来りし衣類を洗い乾かし家々に竿を渡さぬ所もなく蚊帳小袖等かけならべたる有様は時ならぬ土用干の如し。と当時の悲惨な生活の状態を述べてある。

又かゝる激変に際会し、精神的にも肉体的にも打ひしがれた人々は自然に気風も荒み来り所々に喧嘩口論も起つたと見えて、

正月は他に用事もなく日夜地震の度数をかぞへると喧嘩を見聞するのみの用にて誠に気易きことなり。と述べて居る。

かゝる惨状に加えて地震後の不自由、非衛生的な生活は遂に流行病を誘発し、死亡者相続いて出で惨憺目も当てられぬ状を呈したようである。

〔波介村四方寺部落誌一〕〈編集委、昭24〉

地震について若いもんに之だけは言い残しをしちよかんといかん事は天気がよいにツル井の水が濁ると言う事と水が急にがつそりへる時は地震の前兆ぢやきに気をつけにやいかん。地震のあげには低い山へいけと言う事を言うたのうし、つえが来るきにそこを言うたもんぢゃのうし。（森亀）

あの時は坂元の上の薮で一週間火を炊いた。大潮が来るぞうとこの峯を呼うで通ったと言う事ぢゃ。こりゃあ方々の人が聞いちゅうというよ（市原他）。

ヂエモンさんが南浦を呼うだ、沖で火がチラチラしゆうきにありゃ不思議ぢゃと云うのでこちらから川に狂いはないかやと言うと川に狂いはないぞーと言うたきに家へ入った。（註その人は南地の人ぢゃ）（森亀）

カミノキは早や白いぞと云うたがそれはすきざらしが月に光っちょった。

まあけちな話ぢゃのうし。（橋本長尾）

橋本と名乗っているが伊勢屋の本になった人でその大潮の時に茶旧山へ逃げちょった処が銭を一銭も持っちょらざってこりゃ忽ち困ると云うので取りに引返した。すると大潮がやって来て銭を袋に入れて長持の中のものを放うくり出いて長持へ入って蓋をした。一旦は龍王岬へ出た。えらいコツコツ鳴ると思うて蓋を明けてかぞくと龍王岬でこりゃいかんと思うて亦蓋をした。今度おりにコツコツ鳴るきにと思うて蓋を開けると灰方から福島へ越える坂の所にあるあの松の幹へ当りよった。どうもこゝでは上れんと思うて又蓋をした。今度にやガサガサいうきにのぞいたら地蔵寺が鼻ぢゃった。もうこゝで降りんといかんと思うて銭の袋を担いでそうから茶旧が森へ上ったと云う事ぢゃのうし。（森亀）

（〇「茶旧」は元のママ、「茶臼」か）

〔大方町史〕〈編修委、昭38〉

小野桃斎（伊田）の書に「嘉永七甲寅年十一月四日午前七時極々微小の地震ありて漣（本義はさざなみ。ここでは「すずなみ」の意に用いたらしい。）と云ふもの入来り、磯辺に干したる物など流るるとて騒ぎたり」とあり、又池内寿之助（鞭）の記したものには「十一月四日、川の水大分狂が附候へども何の気もつき申さず、只不思議なるは海の汐早朝より沖へ引ては又浜半ばより上へ迄参り候事幾度となく、諸人不審に思い、是は鈴浪とやら申す者と申候」とある。或は又安政津浪の碑にも、「潮海潟に流れ溢る土俗是を名けて鈴波と云ふ。是則海嘯の兆なり」とある。老助七（蜷川）の手記には

「嘉永五子年より同七寅の年迄三年之間大日照にてツルイモ等も手遅れに相成者は得植付不仕様なる事也。同六年丑の冬は二月中頃のやうのぬくさにて岩つつじの花等も段々咲申所も有り」

とあって気象の異変が地震の前兆となった如く記されてあるが、科学的説明の根拠はどうであろうか。

さてこの地震の経過はと云うと、同じ助七の書に

「七年寅の十一月五日昼七ツの下刻大地震ゆり出し山川もくづるるやうなる物音致し、石かけ・山のくづるる音実に言語に述べ難き有様なり。夫より直ちに大潮入来り、半時程之間に潮の差引五六度有り。初の潮少く弥増ふとり、しまいの大潮こざき（蜷川の下ばなれの地）のすそきせがいち（同）井手中迄来る。（中略）地震はその夜五ツ時又初のゆりより少しほそきゆり一度ありてより後、ほそきゆり幾度と数を知らず。又三日目同月七日昼四ツの下刻に二度目のゆり程のゆり有之。それより昼夜二十五度、四日目には二十二度、

五日目には九度と申すやうに次第々々にゆり遠くなり、卯の正月頃には日々一度又は二日に一度と申すやうになり候。然るに右大ゆりより家の内に居る者一人もなく、所々の田畑に、下にはしご等を置き、その上へ雨戸を敷き、家は物干ざわ又はおうくさすなどにて作り、その上へむしろを張り、七八日之程矢番（のじくと振りがなあり）致し、如何様物さびしき事言ひ尽しがたき次第也。（中略、避難の諸家人名等）都合十四軒の家内一小屋になり、人高六十余人、九死に一生は此時なりと恐れぬ者は無御座候」

と記されてあり、また他の諸記録から抜き書きすると

「伊田浦中一同は戎堂の上の畑に集りて避難し、振動の来る毎に婦女子の泣叫ぶ声甚しく云々」（小野桃斎）

鞭方面では、

「七ツ頃不計大震、暫くも止り不申候処、内に居る者は庭に這出て四ツ這に相成り、女子・童子などは泣叫び、野合に居候者は野役捨置不取敢内へ帰候処、人家は皆潰込み又は半潰し、無難の家は無御座候。大潮入来る由諸所にて声立て、それより老若男女牛・馬に至迄皆岡の山へ逃去申候処、早田町へ打込み天神の前まで来り、その次は上クボ迄来る。その次は余程高く参り、口湊川村ニウジの前関まで入り申候。夜に入りてカロウト坂石地蔵の少し下、森の坂井戸の少し下迄参る。弁財天宮本社床まで上り申候（中略）老少女人は十日程昼夜堂山に居り申候。五六日の間東西往来御座なく候（池内寿之助書）又吉田山城のダバ辺に小家掛致し、四五年も居る。十年も居る。追々元の屋敷に帰る者あり。新屋敷に移る者もあり」

（宮地直知）

つぎにこの災変の被害状況を見るに

「伊田の浜は一面荒磯の如くなり、小舟数隻六反の畑というへ打ち上げられ、八十石積の市艇が二艘まではまへ碇を引きながら打ち上げられ、人家は過半海上へ引き出されたり」（小野桃斎）

「上川口では大庄屋安光繁太郎方は諸道具・書籍・金穀一切を流失し、その他浜の家は高いところは座敷まで潮に浸り、低いところは押し流された。下田之口から入野・加持・鞭村あたりの田地も多くいたみ、大潮のために入野では人いたみ数十人、尋ね人十余人もあつた」（老助七）

「八反芝・惣七川原・古川のスソ辺の堤防が壊れて一面の浜となり吹上の南に唐人山というお留山があったが、それもこの大変で流出した。それから西田地合わせて凡そ百石ばかり浜海となり、吹上の舟渡しも三年程の間ヤモウヂ・岩崎通りとなっていた」

（池内寿之助）

「入野の中井・早崎では人家二三軒を残し、その他は全部流失した。その家数六十軒。本村・芝・新町・浜ノ宮も人家三ケ一位流失し、家のおしに打てて死んだ者も五六人あった。本田・新山ともに大分いたみ、其内西ひじり沖前浜田二箇年ほど海となったが、七・八年ないし十年ほどの間に元の地となった」（宮地直知）

※『安政津浪の碑

（入野加茂神社境内）

嘉永七甲寅の歳十一月四日昼微々の震動有潮海浜に流れ溢る土俗是を名て鈴波と云ふ是則海嘯の兆也其翌五日朝土俗海浜に至に満眼の海色洋々として浪静也欣然として家に帰り平素の業を事とす時に申剋(刻)に至て忽大震動瓦屋茅屋共崩家と成満眼に全家なし気埃濛々として暗西東人倶に後先を争ふて山頂に登山上より両川を窺見るに西牡蛎瀬川東吹上川を漲り潮正溢る是即海嘯也最初潮頭緩々として進第二第三相追至第四潮勢最猛大にして実に胆を冷す家の漂流する事数を覚ず通計に海潮七度進退す初夜に至て潮全く退く園は砂漠となり田畛更に海と成る当時震動する事劇しく曽聞宝永四十八丁亥歳十月四日も同然今に至りて一百四十八年今此石此邑浦の衆人労を施して是を牡蛎川の辺より採て此記を乞来是を後人に告んが為ならん鈴浪果して海嘯の兆なり向来百有余年の後此言を知るべき也

安政四年丁巳六月朔

野並晴識
入野村浦若連中』（N－355）

〔佐賀町郷土史〕〈大塚政重編、昭49〉

私の祖母は九十六才まで長生きしたので、祖母から度々地震の話を聞いた。この地震は祖母が二十四才の時であつたと云う。

四日の朝強い地震があり、更にその日の夕方、山鳴りと共に大地震が起つて、諸々に大きな山崩れが起つた。

五日にも大地震があり、余震が七日間続いた。人々は恐れ戦き、竹藪へ逃げこんで、余震が止むまで藪の中で暮したと云うことである。

この地震に伊与木川の水は一滴も無くなり、魚が河原一面に死んでいたと云う。この地震も津浪が大きく、大損害を蒙つたと口碑には残つているが、確実な記録はない。

〔津野山異談続編〕〈中越穂太郎、昭30〉

嘉永七年十一月五日大地震あり、七月七夜はげしき震動おさまらず人々家を出、あまどを田圃にしいて揺れの鎮まるを待つ。石に打たれて死するものも相当あり、便所のたまりに「こえ」は一しゃくもなくなったと伝う。四万川分丸、白王神社建築の半ばであったので「白王様のおたたり」と柱にうずみつき唱え言をいうものもあり。

〔仁淀村長者郷土誌〕〈難波誠一編、昭38〉

安政元年（一八五四）十一月四日午前九時頃地震が起つたが、気にする程のものでなかつた。翌五日は空に一点の雲もなく晴れ渡つて、風もない静かな気持ちのよい日和であつた。この日は丁度刑部藪三社大明神の神事で、部落の人々は杯を交していたところであつた。夕刻の七ツ半時（午後五時）ころ、突如として大きな地響きと空気の震動の音と共に大地震が起った。村の山々が崩壊する大音響は、この山峡に響き渡り、家屋は次々と倒れてゆく泣き叫ぶ女や子供…。辺りは全く生地獄のるつぼと化し、人々は算を乱して、漸く安全地帯へと避難した。明る六日も快晴で、日光は人を射る程の暖かさであつた。地震は段々と弱まつてはいつたが、停止するところを知らなかつた。人々は地震による亀烈を恐れ、雨戸を敷いて起居する者、あるいわ竹藪に避難する者、全く悲劇ともいうべく、悲哀そのものであつた。それに加えて死傷者も続出し、村人は地震に対する恐怖感に戦いていた。古味福寿郎文書によると、大津波の襲来によつて、底地は浸水し海になるとの流言が村々に伝わり、七日には家財道具を持つて高山に避難する者が続出する状態であつたが、今日のように科学の進歩しない当時のことで、重大惨事ともいうべきものであつた。飲料水の如きも地震の原因によつて、減水または渇水を生じた。古老の伝えるところによると、川も谷も渇水して長者村本村の如きは、僅か追槌に一ケ所水があるのみで、村人はここに水を求めて群集した。六日は大植高取八社大明神、七日は川又八所大明神の神事であつたが、祭典も行なうことができず、村人は七日七夜も地震のため一睡もしないで、唯安全を神に祈るのみであつた。各家のシヅ（肥溜）も全部打上げられたことは、その当時の激震を物語るものである。長者川は渇水のため一時川原になつて、太陽の光線に無気味な程白々と光つていた。十一月中は大小の地震が絶間がなかつたので、皆小屋を作つてここを仮住とした。

〔戸波村誌〕〈村役場編、昭5〉

安政元年（二五一四）十一月五日申の中刻（午後五時頃）大地震あり強震凡半時間計りにして其後微震強震間断なく起り各戸皆屋外に小屋掛なし避難す、同七日夜に至り海嘯襲来の呼び何処ともなく伝はり人心其の所を失し果ては山上に難を避くるもの多し是れ一奇談なり同十七日大雪廿五日大雨大風其間微震絶ゆる月なく十一月中は殆んど小屋に起臥し人々恟々として業に安ずるものなし

〔幡多郡史〕〈幸徳駒太郎、亀谷善三編、大5〉

安政元年寅の大地震憤起し、霜月五日より大小鳴動数日に渡り火災亦併発して焼燃三日に及ぶ阿嘆叫喚の声天を衝き全町修羅の巷と化す、何ぞ天帝の中村に炎を下し給ふ事の多き。斯くして明治初年頃迄に、西下町の南角より今の警察前迄家屋なく東下町天神橋の如きは狐狸の巣窟と化し彼の有名なる天神橋も板片を架して僅に通過し得る程になり小姓町及び南北桜町亦荒廃して田畑に変じ烏鷺の出没を見るに至れり当時中村には文人に遠近鶴鳴先生あり、武人に樋口真吉先生、同甚内先生あり、遠近豪庄の子弟の教を乞ふ者甚だ多かりしも商業全く振ず酢醤油の如き日常欠く可らざるものすら尠少にして米穀亦月三回の市（市の辻）にて其の需用を満すのみ、勿論旅宿の有る筈無く旅人は漸く因念に依れり。

〔後川村史前〕〈教育委、昭29〉

一、安政地震前に栄右衛門が中村へ来て、近い中に大地震があるから注意せよと云つたが中村の人は一向信用しなかつた。只一人築地でカラツを商つていた人がこれを信じて荷作りをして戸外においたところ、果してあの安政大地震があつて皆々この予言に驚いたという。（上岡）

〔佐川郷史〕〈副題、佐川町斗賀野、高吾北の歩み、明神健太郎著、昭47〉

安政元年十一月五日（昭和四六年より一一七年前）申ノ中刻（午後五時頃）より四国中国に大地震あり、震動半時に及んで人畜、家屋にも多数の被害があったが、大小の余震はその後も頻々につづき、人々は十一月中は殆んど屋外の小屋などに寝て人心恟々たるものであった。発震の日から三日目七日の夕刻突然何処からともなく蟠蛇、虚空蔵の山脈を打越して大海嘯がおし寄せて来るとの流言が村から村に伝わった。すわ一大事、われ等の村は深く海底に没すると戦いた村人たちは手に手に松火をかざし、肉親、近親相呼び、隣人相助け、老幼を背負い、牛馬に家財食糧をつけて必死にその尻を引っぱたいて、少しでも高いところへと、もよりの高山の峯に登ったので、その夜の山々の尾根や頂には無数の松火の行列が天をこがして凄惨を極めたと云う。（この有様を描いたものが斗賀野入寺山のあみだ堂にある）

この時領主深尾氏の一家も土居の裏山古城山に避難して松火をたいて一夜を明かしたがさすがの豪傑、勤王の志士だった深尾の家臣那須信吾も大風呂敷包みを太刀の鞘に吊して引っかつぎ味噌桶をもって悠々と木の根を踏んで山路をのぼって行くのを見かけたとのことである。（河添亥平翁の温古録）まことに無稽の奇談ではあるが、地底にひそむ大鯰が寝返りを打つものと信じられていたそのころの庶民の科学知識をもって笑うにはあまりに痛ましい惨事であった。

峯という峯に天をこがしていた松火の光が、やがて東天にかすかなしののめの光に薄れ初めるころ、足下の高北盆地に垂れこんだ朝露を見て山ひだを打越して浸入した大潮だとあわて者の目を疑わせたという。

その露もすっきりと晴れゆくころ、峯から峯に伝わった「津浪はウソだぞー」という声に人々はほっとして、帰宅を予期しなかった我が家に向って下山を急いだ。

下山してみると、残していった家財道具を盗まれている家が多かったので、世にこれを安政の津波強盗ともいった。

そして、声を口から耳に伝えるしか情報の方法がなかった時代に、どうしてこの流言が一瞬のうちに拡がったかと云えことは後世のナゾとなつて語られた。

〔仁淀村史〕〈編纂委、昭44〉

枝市川重利所蔵の文書に

安政元甲寅年十一月四日ヨリ地震大シヲ、高知ヲ始メ諸浦焼失、人家等シヲニ引ク、同七日四ツ時頃又大震、同三丙辰年迄ニ少しツヽ毎事震。

とあって、安政元年十一月四日午前九時頃地震が起こったが、気にする程のものでなかった。翌五日は空に一点の雲もなく晴れ渡って、風もない静かな気持ちのよい日和であった。この日は丁度形部薮三社大明神の

神事で、部落の人々は杯を交わしていた。ところが夕刻の七ツ半時（午後五時）ころ、突如として大きな地響きと空気の震動音と共に大地震が起こった。村の山々が崩壊する大音響は、この山峡に響き渡り、家屋は次々と倒れてゆき、泣き叫ぶ女や子供、辺りは全く生地獄のるつぼと化し、人々は算を乱して、漸く安全地帯へと避難した。明くる六日も快晴で、日光は人を射る程の暖かさであった。地震は段々と弱まってはいたが、停止するところを知らなかった。人々は地震による亀裂を恐れ、雨戸を敷いて起居する者、あるいは竹薮に避難する者、全く悲劇ともいうべく、悲哀そのものであった。それに加えて死傷者も続出し、村人は地震に対する恐怖感におののいていた。古味福寿郎文書によると、大津浪の襲来によって、低地は浸水し海になるとの流言が村々に伝わり、七日には家財道具を持って高山に避難する者が続出する状態であったが、今日と違って科学の進歩しない当時のことで、重大惨事ともいうべきものであった。飲料水の如きも地震の原因によって、減水または渇水を生じた。各家のシヅ（肥溜）も全部打ち上げられたことは、その当時の激震を物語るものである。長者川は渇水のため一時川原になって、太陽の光線に無気味な程白々と光っていた。十二月三日までの一ケ月間は大小七百十九回の地震があって、皆小屋を作ってここを仮住居とした。

〔多ノ郷村誌〕〈小野弥太郎編、大6〉

真福寺跡（土崎）

医王山宝珠院真福寺

位置、現今ノ土崎字為国五番イ（〇中略）

開基、慶長九年土崎御免町設立許可ノ節町中旦那建之（南路志）

変遷、安政元甲寅年十一月五日海嘯ノ為流亡

其後藤次ケ岡（俗称六堂）ニ一時仮堂ヲ建テ寺務ヲ執行セシガ何年此ヨリカ廃絶ス。

〔須崎村誌〕〈古屋造作編、明治十二年〉

地蔵堂、村ノ寅ノ方位字古倉ニアリ、嘉永七甲寅ノ津浪ニモ流失セス存在セリ、東西七軒南北九間

名勝

〇丘尼ノ穴ト称スル巌穴、嘉永甲寅津浪以前ハ広カリシカ後地震ニ土石崩レ入テ今ハ昔ニ似ス。

〇高洲・村ノ東ノ方ニアリ、洲ノ南方ヲ富士ケ崎ト称フ、其洲海水ニ出没スル、富士形ヲ成スヲ以テ名ツク、嘉永庚寅ノ海嘯後ハ満潮ノ時反別三反歩余ノ浮洲ヲ成ス、是往吉ノ高洲ナリ、東西七拾五間南北九拾五間周囲弐百八拾間（〇「間」の字の所四町とかいて頭注に誤りと記してある）

〔皆山集一〕

住吉神社、吾川郡第二十八区甲殿村磯山に鎮座

甲殿の海岸霊地ニ鎮りまします住吉大明神の御神徳ハ申もなかゝゝ愚かなる御事なから去冬の大変を敷地の者共ハ誰云とハなけれとも神託ニや兼日より沙汰しけると也扨十一月五日大震後の高潮最初ハ程能打入間もなく引取川も入江も暫く干潟と成たれハ其隙ニ老幼の足弱までも残らす山丘に登り怪家過せし者一人もなかりしと也御社の西のホケと云所ニいさゝか人家有此所ハ至テ低き海辺なれハ漁師ども家財をも打捨山上ニ遁れ見渡す所南海よりハ山のことき高波打来る事あまたたびあるにふしき成哉御社の沖ニ至れハ忽東西へ分れ此ホケの窪所も差なかりしと也又奇瑞なる事ハ此社内御内陣の扉ニハ平日錠を差堅めしニおのづから開て有りしを鍵取長吉といふ者見付奉り□ニ氏子ともニハ語り伝へいよゝゝ霊威を崇敬せしと其里人に聞所也

〔皆山集八〕

「土佐国白湾往来」

安政元年寅十一月四日辰刻地震同五日申下刻大地震二千五十六軒焼失三千百六十四軒流失二千三百五十一軒潰家二百七十七人死人一万四千百二

十一石三斗損田七千四百九石五斗汐湛

〔皆山集三〕

「高知城」

一安政元年十一月地震ニ付御城内南御馬場へ同二年一月新御殿建立但仮御殿也二月十四日御帰国ヲ以御住居萬延元年申八月此殿御取除ニ成

○

住吉大明神勧請

一稲毛実の白頭雑譚ニ云吾川郡甲殿の海岸霊地ニ鎮りまします住吉大明神の御神徳ハ申もなかなか愚なる御事なから去年安政元年冬の大変大地震ナリ十一月五日は敷地の者共ハ誰云とハなけれとも神託ニや兼日より沙汰しけると也扨十一月五日も高潮初ハ程能打入間もなく引取暫く干潮と成たれハ其隙ニ老幼等山丘ニ登ル云々御社ノ沖ニテ大浪ハ皆東西へ分れ云々少将様ニも此御神をいたく御信仰被遊今年安政二年立杉の御花壇の地ニ新ニ御社を建させられ神職ともを彼地ニ遣ハされ御勧請被遊御屋敷ニおいて御賑々敷御祭礼被遊云々。

〔皆山集九〕○高知市の章

片町幡多倉橋の西側の土手ニ古松一本ありしに安政元年震災の時焼失す。稲毛実云此町ハ文政七年迄は南輪斗ニて北輪ハ芝切の土手ニて西石切町まで並松ありし也、仍て今に片町と云、右松ハ其内ノ一本也。

神明宮　神社録云勧請録起棟札等之儀元禄年中類焼故不知但寛永八年辛未加藤六兵衛公務之□洪水甚候ニ付渡川之儀不能力候所幣帛之流寄候を取上渡川遂ニ公務ニ候義心願候処達ニ深望ニ候ニ付居屋敷之辺ニ建社仕幣帛勧請之由其後当社地ハ昔清浄之洲ニて候故社床と定め移社其以来段々社地開加之勧請以来三十八年之間祭礼無之処寛文九酉年より祭之候也天保九年十一月町中より後□堤を築立本社床として本社及舞殿新建立之且自来北町分迄神輿渡御之処此度より上下町共神行の願出許さる。

白頭雑譚云二代加藤六兵衛良正御城下洪水の節御作事方御用ニ付往来之節廿代橋浮き危く見へし時向へ渡らんと心中ニ祈念して橋半へ行所川上より太神宮御祓の御厨子流れ来り懸る取上無恙渡り御用相済帰宅して後ホコラに納め今の所へ居ゆ云々居屋敷も廿代橋南麓へ地面廿代を築立居住す夫より川下も町屋敷と成依て町名となる由也

○安政元年十一月五日地震の後翌六日ニ東西より焼来りしも当社の両側一両家限ニて火止り火災の難なかりし也

比島村　土佐州郡志曰江之口村ノ内比島依レ山為レ村曰比島村

○神明宮　渕岳志曰太守豊昌君武江芝ノ神明産社たるニよって元禄八乙亥年勧請して此地ニ祭り来れり

稲毛実筆記云今も神明祭ニ山田町より献る所の□灯燈の額ハ（山田町と隷書ニテ書）昔此町より出しダンヂリへ掲けし額ニて桂井素庵の筆也常ハ山田町蛭子の社内に蔵す墨色潤濃文字強壮見事成るもの也横額ニて高壱尺五寸ニ横二尺七八寸也文化元年再興して今此町の台灯燈にかくる旨を漢文ニて儒臣後藤薫道其裏ニ識す元禄の盛事まのあたり見る心地して珍らしく今市中無類の古物也又云安政元寅の大震破損火災此時額も焼失したり可惜々々。

〔皆山集七〕○「建白」の章

旧冬大変ニ付莫太之御物入殊ニ異船御手当等をも被　仰付候御時節旁以恐多次第ニ奉存候然ニ近年世上之奢増長仕所諸人財を以事を発身之安逸を好ミ有トモ不足亦無而不忍人心危キ時至申所折柄之天変不得止とハ乍申難捨置時節此度ヨリ実意ニ立戻申所を以　御国内之人民何卒御国中ニ生立申所之食物ヲ以向々不足不仕様之儀幷ニ海路を不便山ニ川ニ通路之便宜を求且山分筋を開き食物を仕付をも猶増育為仕申所御国益御一統之儀然ニ右等大儀之御場所ニ付農作等之妨ニも相成可申依右御家中始百姓共之疲労を介ケ且は面々非常之覚悟ニハ先以奢を遠避上下を近くし而身労之腐肉を滅し筋骨逞敷信を尽而実を求人心一致仕申所専一ニ奉存候然ニケ様之節面々勝手之風説等若今奢を継実意ニ基キ申所を失候ハヽいつの世ニかわ立戻可申時節間遠奉存候当難は一様之義何雨露寒暖之得凌食

物不足不仕候上は何等之不足仕可申実ハ是迄之所世上米銭等之余有を以奢増長仕所因而失実意申所謂所利を先而義を後ニすれハ奪ハされハ不足と如申是必西洋辺之風俗只今万国ニ渡不安時節と奉存候何卒此度屹度被仰付乍恐

御先代様方奉始御辛苦ニ被為　思召度々被為　仰出候処を以猶弥古風質素ニ労而実意を求倹約を相守　御国中留而不奢窮面不失義之所ヲ以愚案仕候処人遠慮無キ時是必近キ有憂と如申ニも御座候半段是今拾ケ年之間堪労心窮仕万歳長久之所希敷奉存候

右は不肖之身不能愚慮処とは奉存候得共九牛一毛御為之筋共相心得奉言上候尤委細之儀は無拠文盲無筆ニて不任心底大略仕候若前件一ケ条たり共可被及御詮儀義等御座候ハヽ乍憚罷出言上仕度奉存候然ニ不敬不当之段ハ不調法之不得止処以重々恐多奉存候　敬白

佐藤繁蔵

安政二卯八年　正月

紅白異船之儀以前とは大ニ御模様替ニ相成申処奉恐入居申候

〔皆山集四〕

又南海岸種崎村ニ旧波止あり南方ニ向ふ構造石材五尺ヨリ三尺迄数年土中ニ埋没し其上面草木繁茂せしにより村民惣て之を知る者なし安政紀元地震の災怒涛の為ニ土砂流亡し初て其構造を現す茲ニ於て村民等野中氏の大ニ豫防を永久ニ斗られしを感す現今水中ニ見る僅ニ十間高長とも土中にあるを以て詳ニせすといへとも長サ凡四町余ニして深く砂中ニ入ると云其築造甚堅固也。

○

○「寛文御改替記」のあと

右市正殿御手紙幷清七病死之一巻書附共天正三年五月十八日会所へ遣し帳蔵へ納置

此寛文御改替記ハ安政元年十一月　冬日部屋ニ於て　先考安助申行君の写し給ひしニ同月五日大地震にて家屋ハ倒れて火災に罹りしも部屋は倒れしも儘にてありしなり故に如此潮水に侵し且壁土のしみ込しものなり災後別に清書して家に蔵すといへとも之も亦記念の為如此存置して子孫に伝ふ

明治三十三年五月記

松野尾章行

松野　申行

安政元年歳次甲寅冬十一月上浣日写之松埜姓

○

「稲毛実記録」

一安政二卯年二月七日御馭初有候前年地震大変ニ依テ也

尤御名代斗也

〔鹿持雅澄日記〕（中島鹿吉刊、史談会、昭16）

安政元年（六十四歳）

一、十一月四日四ツ時前地震暫時にして止む、例の如く出勤北奉公人町程追々人の話を承るに是迄老人も不レ覚程の大動の由。当地山がゝりの処故歟左程にも覚えざりき。

一、十一月五日今日より戸部氏小父様十三回の法会に付役所頼み置き不ニ出勤一、然るに七ツ半時大地震、折節今日二町目河原に於て相撲の最中右の通にて角力場散乱、人傷も有レ之由承る、上町二丁横合別して壊家多く、其外大傷にて死傷も有レ之由。下町は壊家所々許多にて其上出火に成り、堀詰より東は大半焼失人傷も多く有レ之由なれども詳悉の処は未ニ承得一（千八百七十四軒焼失、六百二軒崩家、六十五軒半崩家）（御町方支配にて死人男女共九十一人、行方不知十三人、通り懸り死人四人、馬二疋焼死）、同夜六ツ半頃又々大動に付下の畠へ戸板敷き臥明す。少々の地震は数度なり。

この地震の間地震ならずして鳴動することたとへば大砲を発したる音の如し、これ（虫食）記にしるすところの屋鳴ならん、この後にても同じさまなり。

一、十一月六日　今日暖なること春日の如し　朝四ツ過頃又々地震強し、且大潮入来る由頻りに人々云ひ騒ぐに村上の山へ登り見渡す処、比島山の東弥右衛門

堤の内へは惣て潮入込様子に見ゆる夫より此方へは不二入込一。同日少々の動不レ絶。夜に入り同前。当夜より下の畠へ小屋構にて夜を明す。八ツ時頃宮地豪三郎殿夫婦おりん逃来る。夫より内田嫁子共二人（虫害）七ツ時大倉留守不レ残来る。夜矢部姉様善七妻、栄次郎幷子共両人卒る、柳原維沖夫婦子共来、明朝帰る。

一、十一月七日　今日も暖なること春日の如し　少々の地震不レ絶。四ツ時頃雨少々降る。四ツ半頃大地震。夜に入ても少々の地動不レ絶雨少々降る。

一、十一月八日　今日も暖なること春日の如し　地震少々不レ絶。其中両三度強し。

一、十一月九日曇。朝より静る。昼より晴、風吹く。八ツ時頃地震又間を置き震。又少く震ふ。今晩景内田家内主従帰る夜分折々震ふ。其中に暮に強震。

右地震中安喜より東方は不レ承。安喜の辺地震は強く潮は別条無レ之由。赤野亦同様、四和食辺は少々傷所も有レ之由手結夜浜へは潮のこみ、流失之家幷に死人等も夥敷有レ之由。

赤岡辺強て別条無レ之由。

仁井田種崎辺異条無レ之由。

宇佐福島辺流失有レ之由。

須崎町家流失有レ之由。

一、十一月十日晴。今日は震間遠し、今日宮地家内主従帰る晩景大倉他おもと、よね主従帰る。尤も亀、おもと、よね一両日して来る。夜分折々震。

一、十一月十一日晴。大風折々地震尤軽し。夜分同様風止地震。

一、十一月十二日晴。朝五ツ半頃少地震。四ツ時頃地震少強し。夜分折々震。

一、十一月十三日晴。今日は地震間遠き方也。今日福岡御家内衆、万々御山庄へ御立除有レ之に付為二御見廻一参上。尤参り込居節松本氏も御見廻に来り、夫より松本同道にて桜馬場谷氏へ参り、去六日より地震に付役場不二相立一に付出勤不二相調一罷在に付教授館御書物校合懸りの分取下け私宅において校舎仕度段々及二示談一。夫より北代喜五郎方へ参り明日教授館へ出勤校合。御書物取付けの手首尾示合せ帰る今晩景矢部姉様善七妻幷子共両人帰る、夜分地震折々其中強き地震両三度有レ之。

一、十一月十四日晴。今日も地震折々、今日松本吉右衛門北代喜五郎同伴にて教授館へ参り校合懸りの御書物取揃へ置教授方下遣忠五郎方へ立越し今日中取下げ来り候様申聞晩景取下げ来る。夜分地震折々。其中強き地震両度計り。

一、十一月十五日晴。今日も地震折々、今日四ツ時松本吉右衛門来候て御書物校合八ツ過頃仕廻ふ、夜分前夜に同じ。

一、十一月十六日曇、四ツ時頃より雪降る、松本氏入来七ツ時仕廻。八ツ時頃より晴。今日の地震は同断但間違し。夜分地震昨夜に同じ。尤大風共一度震強し。

一、十一月十七日雪。午刻より晴風吹地震折々。松本氏九ツ前より入来晩景仕廻。夜分地震昨夜に同じ。

一、十一月十八日晴、九ツ時頃より松本氏入来晩景仕廻地震昼夜共昨日の如し。

一、十一月十九日晴。九ツ時頃松本氏入来晩景仕廻。地震昼夜共昨日の如し。但夜分地震少し。

此度の大変に付五日の晩景より天満宮に相詰平穏に相成迄祈念方仕候様少将様より被二仰付一間隙なく執行仕候所今以平穏に不レ至に付又々少将様御心痛被レ為レ有に付片時も平穏に可レ成候様抽二丹誠一祈念方可レ仕段御仕置方被二召呼一得二此御旨一無二油断一祈念可レ有様被二仰付一。昨日より宮地大和、宮地上野両人共参籠にて祈祷致候段大和より申越す。尤右祝詞の文加筆頼越候事。

一、十一月二十日晴風。九ツ前より松本氏入来晩景仕廻。今日は地震稀也。夜分地震三度計強し。

一、十一月廿一日晴。今日は地震少し。松本氏九ツ半頃より入来夜分も地震少し。

一、十一月廿二日晴。今日四ツ半頃地震別て強し人々恐る。今日松本氏

不参夜分地震少し。
一、十一月廿三日晴。今日九ツ頃より松本氏入来晩景仕廻。昼夜共地震少々。
一、十一月廿四日晴暖。地震折々九ツ時より松本氏入来晩景仕廻。夜分九ツ頃より雨降る。
一、十一月廿五日大雨。四ツ頃より雷鳴数度。其後大風九ツ過頃漸止。地震折々夜分晴雨不定。比島より東潮高く入込む。
一、十一月廿六日晴。九ツ時頃より松本氏入来。晩景仕廻。地震昼夜共昨日の如し。
一、十一月廿七日晴。今日松本氏不参。地震昼夜共昨日の如し。
一、十一月廿八日晴。九ツ時より松本氏入来。晩景仕廻地震昼夜共昨日の如し。
一、十一月廿九日晴。九ツ時より松本氏入来。晩景仕廻地震昼夜共昨日の如し。
一、十二月朔日。今暁七ツ時頃地震強し。今日土用。松本氏休日に付不参。地震日中昨日の如し。夜分両度強く震。
一、十二月二日晴。九ツ時より松本氏入来。晩景仕廻。地震昼夜共少々。
一、十二月三日雪少降後晴。今日大寒入。松本氏不参。昼地震稀夜分地震折々。
一、十二月四日晴。九ツ時頃より松本氏入来、晩景仕廻、今日地震昨日の如し但昼夜共。
一、十二月五日晴。松本氏不参。地震昼少々夜分静。
一、十二月六日晴。九ツ時より松本氏入来。晩景仕廻。地震昼夜共昨日の如し。
一、十二月七日晴。九ツ時より松本氏入来。晩景仕廻地震昼夜共如ニ昨日一。
一、十二月八日晴。今日松本氏不参。地震昼夜共如ニ昨日一。
一、十二月九日晴。九ツ時より松本氏入来。晩景仕廻。地震昼夜共如ニ昨日一。
一、十二月十日晴。今日九ツ時過大動八ツ時頃より松本氏入来昼景仕廻夜分静但一度計動歟。
一、十二月十一日晴。今日於ニ教授方一例年の通御補銀被ニ成遣一段被ニ申渡一有レ之に付出勤仕候様（虫）教授館より通達有レ之処当病に付出勤不ニ相調一に付松本氏へ彼是頼置事。
今日地震少々夜分同レ之
一、十二月十二日晴。今日八ツ時より松本氏入来の処病障に付早仕仕廻地震昼夜其如ニ昨日一尤夜分動少繁き方也。
一、十二月十三日晴。松本氏不参地震昼夜如ニ昨日一。
一、十二月十四日晴。今暁六ツ時地震強し。四ツ時頃より九ツ時頃より微雨降。松本氏不参地震如ニ昨日一。夜雨不レ止降。丑刻頃大なり。
一、十二月十五日晴。松本氏不参。今日地震静。夜分地震少々。
一、十二月十六日。今暁より雪降。尤晴或降不レ定地震度々其中強きもあり。今日松本氏不参夜分地震少々。
一、十二月十七日晴。風吹今日節分也松本氏八ツ時頃より入来。今日校合御用引仏に致事。尤廿日迄の処明日より松本氏類族に仏事有レ之に付断出如レ此。今日も地震少々有レ之夜分同。
一、十二月十八日晴。今日立春也。今暁地震強し昼少々夜分同。
一、十二月十九日晴暖。地震折々夜分同其中両度漸強し。
一、十二月廿日晴暖。地震折々晩景曇。夜中少し雨降雷三度小鳴又地震折々。
一、十二月廿一日晴風吹或少し曇雪少々降或止或降地震折々夜分亦同。
一、十二月廿二日晴。地震昼夜共少々。
一、十二月廿三日晴。今日終会興行。従ニ八ツ時一出席の面々山岡利喜蔵松本吉右衛門、宮地和泉守、宮地大和なり、地震昼夜共折々。
一、十二月廿四日晴。地震昼は静也夜分折々。
一、十二月廿五日晴。今朝両三度地震昼静也夜同。
一、十二月廿六日晴。地震朝少々昼より夜中静也。
一、十二月廿七日晴。日中静夜分地震度々。

一、十二月廿八日晴。地震昼夜共少々今日赤岡沖へ異国船参の由笹送夫を以注進有レ之由風聞あり。
一、十二月廿九日晴。地震昼夜共折々。
一、十二月卅日晴。今朝五ツ頃大震農人町辺家多く壊れ傷も有レ之由承る夜分に至りても度々震。

〔浦戸港の沿革と其の史蹟〕〈松山秀美著、史談22、昭2〉

安政元年十一月五日土佐の地また大に震ふ。勝浦浜人家及竹林樹木等何れも海嘯激浪の為に海中に崩流せられ、営繕の箇所は八尺余海底に陥没し、種崎村西鼻造船場地処は三十間海中に崩込みて渕となり、同処東貴船前汐刎波止も三十間余海中に崩れ込み、潮流は自然種崎地に通じ、千朝波立の際新浜崎を崩壊し、波涛は千本松原中央まで打越し、数百の松樹は崩流した。而して南風激しくして登潮迅く、仁淀川より東海浜に打上げた土砂は風波の為に押寄せられて龍頭岬の下に大なる砂浜を造り勝浦浜蛭子堂前に長さ約百間幅五十間余の砂浜を生ずるに至つた。港口の整理を歎願したので、文久三年四月に至り、藩庁は大に賦役を催し、各村より人夫を徴発して港口の堀鑿に努力したが、自然の大破壊は旧態依然として容易く変更することが出来ない。

〔反古住語〕〈建山迂史著、史談23、昭3〉

第二十二　安政地震潮来節

本会会員薮田銀馬太氏の家君陸平翁は、高岡郡佐川町の人にて、本年八十八歳の老人にて、□鑠壮者をしのぐ程の達者きであるが、其の上至つて記憶が強い、翁が十四歳の時に、彼の安政元年の大地震があつた、其の時高知小川渕の箕浦某と云ふ先生から、大地震の時の有様を潮来節につくつておるから迚、教えられたのが今に覚えて居るからといつて、左の通りのものを送られたから、当時を偲ぶよすがにもと書いて見やう。

今より七十五年前の事ですが、大地震がゆりまして、其の後高知小川渕の御方箕浦先生御出になりまして、大地震の有様を潮来節につくりてゐるが、教えてやる、唄ふてみんかとて習ひました、節は忘れましたが、つぶはそこそこ覚えて居りますから、書いて見ます。

一、都田舎も地震の騒ぎ、頃は嘉永の七年目、霜月五日七ツ過、六十余州のゆる中に、土佐は四国の南方、広い百里の海原も、つなみの景色すざましく、程なく地方へよりまして、宝永四年もこんなもの。
二、家中立退けに勇ましく、家内一同残りなく、下女になぎなたかつがして、久万や愛宕や秦泉寺、俄に建てる仮己家は、草の下根に柴の屋根、雪の夜さむにこまります、これ迄しなれぬ鄙ずまひ。
三、城の東の町々は、地震の中の出火にて、死骸のかずも夥し、湯桶飛出て走るやら、女の裸もありました、これ亦あばれたことかいな。
四、絶海田辺島葛島、だんだん潮入りました、ひん田なども海となりほしぼ鰈こちうきすずき、ぼらや鰻のすみどころ、あこぎの平次よるの網、大公望の楽しみも、益々盛になりまする、いつ頃潮が引やらも。
五、寺も地震に破却して、あまりあわてて坊さんは、耳に簪さして行く、鋳掛の娘共々に、袖の振合他所の縁、ここは讃州こんぴらの、町人足何をかついだが、程なく迎へ行まして、故郷へ錦の袈裟ぐくり、杉の柱にしもと竹。
六、義倉のうちの囲る紐、夫々国中へたまわりて、既に今年も暮にける、明れば安政二年なり。

高岡郡北部主人　薮田陸平

〔福島浦〈現高岡郡宇佐町大字福島〉安政大震考〕〈江口又衛著、史談47、昭9〉

嘉永七年巳の刻（午前十一時頃）可成大なる地震があり、潮が狂ひ平日より多く引去りてはまた打ち寄せたる事七八度、人家までは来ずに終つた、翌五日は晴天にして風なく殊に暖き平和な好天気で、その日において天地も顚倒する如き大騒動が目前に迫つてゐるとは神ならぬ身の知る事もなく、否神様も知らなかつた思はれる、若し神様が知つてをれば何か警告を伝へくれたのであらう。

人々は何の気も付かず昨日の地震等の話をして平素の如く職務に従事してをつた、申の下刻（午後五時頃）何の予感もなく俄然天地大震動、山嶽崩れ人家顚倒し人々号泣の場合、何ものも一呑みにせんとする大津浪が沖合より逆巻きつゝ覆ひ来り、福島の浜分百余戸は忽ち一呑みとなり、その潮の引去る時は家財道具は元より子供、老人数多の人々を引去つて行かれ、その惨状は実に見るに忍びず、漸くにして残りし者も北方山際に逃れんとして走り出たが、同所は後に川がありその橋は皆落ちて渡る事を得ず、たゞ東の方に逃れ走るより致方なく、忽にして四十有余の溺死者を出し水泳の達者なものは泳ぎ、家具に取つき怒涛に揉まれて他に漂着したものが助かつた位で、その惨状は想像に余るといはれる、悪潮はなほもやまず二番の津浪が来て前よりも甚だしく浜分の僅かに残つたものと、十町後方にもあつた村落を一呑みにして全く廃墟と化し去つた。

× × ×

なほかくの如く寄せ来る浪は七度で、中にも第四、五両度が最も甚だしく、十五六町隔てし山際の家も多くは流失し、残る家は怒涛に打抜かれて柱のみが寂しく立つてゐるのみ、私の家も夜の亥の刻（午後十時より十一時の間）までは存在してゐたが、第五番目の潮のために山際に押し流され、屋根許り残し幸ひ物置きの二階が残存して衣類雑具が少々残つた程度であつた、当時において潮の入らなかつたのはたゞ一軒、山の上にあつた源右衛門の家ばかりであつたと、それより日夜少くとも五六度、多きは三四十度の地震のなき日はなく、その後十年間はこの地震が続いたのを、亡父はその大なるものは大丸を、小なるものには小丸を附して記録してゐた。

〔潮江村誌〕〈西本明四編、昭4〉

安政之地震　附新築堤防之復旧

安政の地震は世の所謂寅の年の大変にして安政甲寅元年十一月四日朝小震あり尋て其翌五日午後四時頃地大に震ひ国中其災難罹らざる所なし就中高知及江廻の諸村損害最も烈しく家屋倉庫の土崩瓦解する響老若男女の号泣禽獣驚起の音地震と輿に惨然人耳をつんざき河水枯れ堤防破れ樹木倒る北町の如き忽ち失火して人家数百千を焼亡し次て海嘯襲来して潮江新町、下知、比島、田辺島、新木、高須、葛島等一面の大海となる海上は人家諸道具散乱漂流し津浪は来去常なく数度に及ひ北町は野原となり新町は水中に沈むに至る此震災の損害は実に非常にして当時藩応より幕府に報告せる届書中より其二三を摘録すれは便ち左の如し。

市郷の焼潰家数一万七千四百六十九軒
焼潰流家共亡所四ケ所土蔵納屋三千九百六十軒
破損田地二万千五百三十石九斗
神社四十六ケ所焼潰諸堂百三十七宇
流失崩潰土堤五万三千五十二間破損往還九千二百二十七間
井流破損三十八ケ所　橋梁破損六十五ケ所
流失米一万七千五百八十九石　焼流濡傷籾二千九十四石
雑穀三千六百三十九石
怪我人百八十人　死人三百七十二人　牛馬死三十八疋

当時鷹匠町水門の老番人喜久助の地震当日より翌安政二年十二月末に至る一年間の震度記録にれは大震十二回中震百十回小震六百九十五回なりしと伝ふ以て其災害の万一を想察すべき也。

此時本村の新築の堤防崩潰して新田の田地水中に没し復旧修繕の見込なきに至り藩応は正に荒廃に委せむ意向なりしを本村庄屋森沢清五郎深く之を歎き斡旋大に努め漸く藩許を得本村人は寄附夫役を以て今日の如く修繕復旧することを得たりと称す。而て此時の役賦は一人三十人役以上なりしといふ。

〔高知市誌〕〈市役所編、大9、大15改〉

安政元年十一月五日、四日辰の下刻（午前九時）小震あり、其頃より何となく潮汐に変状を呈し、八ツ時（午後二時）までの間に三回の干満あり、此夜小震又三回に及ぶ、明くれば五日の朝は一天快晴にして一朶の

雲を見ず、正午頃に至り潮汐も亦平調に復して人々安堵の思をなせり、然るに此日七ツ過（午後四時頃）に及びて未曽有の大地震起りて、家屋の倒潰するもの宛がら将棊を倒すが如く、折から戸々晩餐炊事の際なりしかば、火災忽ち各所に起りて、光景凄惨を極む、加之のみならず、少時にして海嘯浦戸口より押込み来り、先づ下知堤を決して下町に侵入せり、尤も此海嘯の害は幸に軽微なりしも、震災と火災は宝永の大変に劣らず惨状を極めたり、旧上町及郭中は火災なかりしを以て損害も亦少かりしが、下町に至ては損害非常に多く、即ち火災の難を免れし町を挙ぐれば唐人町全部、弘岡町及朝倉町の南側米倉共、掛川町、要法寺町、境町、八百屋町、京町（町会所及官倉とも）農人町、北新町、鉄砲町及下知にして其他町方目貫の市街は悉皆烏有に帰せり、数を守政寅年の大変といひ、今尚ほ老人の記憶に存ぜり、市内の損害を掲ぐれば左の如し。

流家　一千六百七十六　潰家　五百六十八　死人　百六

○

町の西詰なる現時新世界の地は寛文元年に藩の使者屋を設置し、後、元禄七年に至り美濃屋忠右衛門に下附せられしが、元文五年又買上げて町会所を蓮池町より爰に移し、以て明治維新の際に至る、会所の東、北側に町方の社倉あり、寛政十二年奉行馬詰権之助の創立する所にして、本市に於ける社会政策最初の試なりしが、安政元年の震災に罹りて後、幾くもなく廃絶せるは惜むべし、

〔森沢保如家文書〕〈桑田精一筆写、大15〉

嘉永七甲寅歳

此度大津浪大地震ニ付日本ニテ大変ノ国々廿四ケ国公儀へ御届尤荒住連ニ相成候荒増長文故略シテ写左之通

天地不時之変動ハ陰陽混ジテ雷雨ヲナス地ニ入時ハ地震ト成神仏之力ニモ不及申頃者嘉永七年寅十一月四日五ツ半時大地震先伊豆国主領分大島カンス・三倉・三宅・下田浦・其外島々大震崩下田浦色ケ崎（〇石廊崎のことか）戸田御津イナシ（〇江梨？）赤沢伊藤北条ニラ山仁田修善寺辺リアタミフセ石等ハ地ヲクツガエシ海ト成申候、人間幾カ人ト申流失ニ及申候右修善寺山ト申ハ豆州一ノ大山一度クツガエシ崩申候此物音スザマシカリシ事譬ン方ナシ扨亦下田浦ハ千五百間ノ浦至テ大湊ニテ日本船入津且此度ヲロシヤ船渡来中此ヲロシヤ船乗組日本人ヲ助ケント働キシニ船中卅六人死失且船ヲ少々傷候由ニ候此浦人家弁ニ人一人家不残高浪ニ押流ス尤此オロシヤ船渡来ニテ国ニヨリ港番船数万艘港口ニ掛り居候処不残押流シ申候唐人船ハ公儀ヨリ御修復被仰付候扨又相州遠州参州ヨリ段々西国へ海辺大津浪浦々不残流失相州箱根中宿山中三谷道ニ大磯宿ハ大荒レ地ヲ覆シ申候三島ノ宿モ不残崩レ落ル駿河ノ国大津浪五万石水野出羽守様御城下家中町方共不残潰浜ノ手ハ津浪ニ押流シ原宿柏原吉原宿扨富士ノ先市場富士ノ根共大ニ地割レ崩レ富士川カゲ崩レ埋ミ富士川水横ニ溢レ人家夥ク流失人流候扨亦サツタ峠高山大崩レ沖津川大水人家流失且出火夫ヨリ清見寺三保松原辺別而甚敷潰レ亦駿河国府中御城東海道第一ノ御城成処城崩レ江尻宿皆潰レ家中町方不残潰ル且郷方焼失安部川水高ク溢レル小島一万石松平丹後守様御陣家ノ下鞠子宿ウツノ谷峠崩ル岡部ノ宿ノ内弁藤枝宿等大潰レ且焼失仕リ宿町一軒モ不残島田宿町不残潰レ大井川雨モフラズニ稀成洪水此川筋両ガワ流失死人難算遠州金谷宿不残潰レ地割ル也、小夜ノ中山大山ノ処皆覆リ遠州掛川六万石太田摂津守様御城下甚敷潰レ且焼失原川宿袋井宿見付宿池田皆々流失焼失地割レ埋ム天竜川日本第一ノ大川大高水堤五百間斗切レ水溢レ人家共流失数万人難分リ横須賀三万三千石四尾隠岐守様御城下扨遠州相良一万石田沼玄番頭様御陣家扨浜松六万石井上河内守様御城下大潰レ且焼失扨尾州地割レ甚シク箱根山御関所辺並ニ畑宿湯本宿皆々潰レ埋ム鎌倉ヨリ江ノ島至而震フ且大潮入家人共不残流失扨亦相州浦賀ヨリ金沢辺迄ハ大津浪入人家共流失肥後国熊本御大守細川越中守様御堅メ場所同品川戸塚宿大地震割埋ム江戸は余程傷ミニ相成不申人家少々許ノ傷ミ丸ノ内御大名様御座鋪崩レ申候甲府ハ御城下甚敷震地割埋ム家中町方大火ニ及ビ不残焼失ス且地割落ル武州ノ内秩父山ハ大崩レ信州地ハ和田峠ト諏訪、塩尻洗馬、元山、ナラハ、八五原、宮ノ越、福島御関辺山々大ニ崩レ埋ム山

谷ト成谷山ト成リ飯田二万七千石堀大和守様御城下潰レ片坂宮田損シ高遠三万石内藤駿河守御城下潰レ上諏訪高島三万石諏訪因幡守様御城下甚敷潰レ埋ム松本六万石松平丹波守様御城下是亦稀成損シ且大火ニ及フ松代十一万石真田信濃守様御城下上田辺飯山二万石本田豊後守様御城辺何レモ大潰レ埋ミ善光寺近辺地割埋ム三河ノ国ハ惣分大潮高ク人家押流シ難言語白須賀宿二タ川宿七万石松平伊豆守様御城崩レ目モ当ラレヲ次第ナリ遠州尾州伊勢山城大和摂津播州兵庫相州駿河下総上総下野上野房州奥州其余只今迄公儀御注進ノ国々廿四ケ国也四国路入廿八ケ所尤紀州和歌山城下大地震地埋ム和泉河内国大阪町々御城近辺堂嶋伝馬町新町安治川橋船門橋高橋安治川町辺惣而小橋卅六ケ所落大坂人家七百軒三千人死失堂頓堀芝居流ル十一月五日大潮入諸国同時也大阪川口日本大船小船三万艘流失尼ケ崎御城下ヨリ西ノ宮兵庫辺雲潰レ埋ムヌ焼失一軒不残駿河焼津郡田中四万石本田豊後守様田中ノ御城下不残焼失殿様一人家来四人此御城下ニ無難ノ人主従王人残ル貴賤焼失地埋等也阿州徳島御城下悉焼失一軒モ不残扨亦城モイタム御隠居様逃ル太守様ハ去年以前ヨリ江戸ニ御詰被遊候

讃州丸亀大地震埋ム

予州宇和嶋御城下大傷焼失甚敷趣紀州熊ノ浦大津波入高野山大崩レ余り長文故大略ス公儀へ注進之所御留守居方借写ス処略ス也

土州御留守居役弘瀬源三殿ヨリ此度国本大変飛脚到来着荒増之由大公儀へ御届

私領国去ル十一月四日巳ノ刻頃古来稀成大地震之処同五日申下刻一段甚敷大震ニテ城下詰士屋敷市中郷浦共破損幷ニ潰家等夥敷市中所々出火追々及大火六日酉ノ刻ニ鎮火猶其後モ震申候東西浦々大津浪高ク汐ニテ人家夥敷流失等不少趣ニ候得共未委細相分リ不申尤城内ハ無別条旨国許ヨリ申越候然ニ未震中不取敢右之趣申越候依之人馬怪我人其外委細之義猶近々御届仕候得共此段御届御達仕候以上

寅十一月廿三日　松平土佐守　判

紀州広浦津波入不残亡所浜口吉兵衛ト云富家有在所四百軒余ノ家ヲ本ノ如ク寸志ヲ以譜請ヲ願出御聞済ニ成向ヘ岸ヲツキ大譜請初ル店商業ノ家夫成ノ仕入等致漁商業ノ家百姓ノ家漁師ノ家モ皆夫々譜請料幷ニ商業ノ本ヲ貸付右ノ在所ニ成奇特成人也前々ヨリ名字帯刀御免之上侍格ニ成供廻リ五十人ヲ連レテ往来スト云、亦引馬モ御免。

〔津野山異談続編〕〈中越穂太郎著、昭30〉

嘉永七年寅六月大地震出火あり

〔地震日記一〕〈井上静照筆、土佐市宇佐、高知地方史研究会刊〉

○安政元年分

嘉永七甲寅歳十月廿一日仁ノ村火災四拾軒余焼失同月廿七日九ツ半時宇佐中町火事三拾余軒焼る霜月四日朝五ツ時地震海潮進退定まらす（此浪を昔より俗ニ鈴浪と申習ハせる由汐ニくるひ有て鈴浪来る）浦人共海面を伺ひ合点ゆかハ津浪のさきかけなるゆへ油断すまじき由言伝ふ　浦人共海面を伺ひ合点ゆかすと申内其夜も異条なし。翌五日晴天（今朝日輪赤き事紅のことし）晩方迄何事もなきゆへ人々不覚悟而已ニ罷在処七ツ半時俄ニ一天薄闇く相成近代未曽有の大地震山川鳴り渡り土煙空中に満チ飛鳥も度を失ひ人家ハ縦横無尽ニ潰崩し瓦石ハ四方へ飛ひ大地破裂してたやすく逃走る事も成難く男女只狼狽周章し児童呼叫の声おひたゝし間もなく沖より山のことき波入来り宇佐福嶋一面の海と成る今夜月ノ入迄ニ津浪入る事凡八九度壱番浪より弐番三番の引汐ニ浦中皆流るゝ（惣して大変の時の汐ハ進むハ緩く退くハ急也）福島中須賀の間ハ家壱軒も残らす渭ノ浜山際迄波溢入る宇佐ハ流残りの家僅ニ六拾軒計其中造作ニ懸り候もの弐拾余軒其余ハ家残りし迄の事にて取繕不出来浪の入し時諸道具打捨置山へ逃上ルものハ皆命を助り金銀雑具に目を懸油断せし者ハ悉く溺死す今日の流死福島ニ五拾余人宇佐ニも拾余人有也福嶋ノ浜ノ宮松岡ノ龍宮堂西浜ノ山王権現の社東町ノ小宮悉ク流るゝ扨寺院ハ福智院ノ傍へ迄市艇流込位之事寺内の汐是を以知るへし正念寺ハ本堂計残り仏具類過半流失庫裏ハ半町程北ノ方ニ流止リ柱折レ潰込む極楽寺ハ隣家弐軒境内へ流入し故庫裏是カ為ニ大傷ニ成る本堂ハ残リ釈迦堂ハ流れて跡方なし此釈尊の像ハ去ル宝永の大変ニ当浦へ流寄り給ひし由にて右寺ニ別堂造立し当年迄安置せし処此度また何方へ趣キ給ひしやしれす扨真覚寺ハ波先キ入来るを見て手早く什物不残長持ニ納メ本堂ノ巽ニ当れる地面ニ置守護する内浪門内へ入来り本堂ノ前より庫裏を廻りけれ共地形小高キゆへ礎をも湿さす引退く依而寺内什物本尊過去帳を始諸道具壱ツも流失せす橋田ノ家皆流れ漸く四五軒残る波先キ奥深く溢入り新居坂の麓ニ至る東町ハ北ノヒキチの山際迄新在家ハ曲田ノ家迄入ル中町ハ北ノ外レ田島片山等いふ郷士ノ家へ迄波打込む西浜ハ談義所ノ下タ迄入来る引汐ノ音百千の雷のことく波ニつれて家流れ五軒拾軒宛連り海ニ入る此時金銀米銭を始家々秘蔵の諸品海ニ流入する物夥敷男女児童の泣叫ふ声夜ニ入てもやます今日迄貯置し諸道具眼前海に入るを見る人々の心中推はかられて哀也夜ニ入れ共燈火の用意もなく暫くハ月の光を便りとして皆々山中ニ踞り波の音を聞ツゝ地震を凌ク当年より九十八年前宝暦七丑年七月廿六日大風雨大浪の節橋田一統ニ流れ当寺門前田ノ中へ小船を乗来り当寺の榎へ船を繋きし由此度ハ其時より汐高く入来れりと見へ本堂の前迄波先来る扨当山ハ巽ノ方なる畠ノ中にて終夜提灯照し幕を打罷在処へ山居の者共ハ此上又も波の入来らん歟と恐れ当寺の火の消さるを目当ニし夜の明ルを待も有又食事の用意なきものハ夜中当寺の幕中へ来り薪を集メ火を焼し寒を凌キ粥等すゝる者も有（橋田にて浪家ニ入さるハ当寺ト前隣弐軒ト薬師堂ト是計ハ浪不打入）今日七ツ半頃より夜明迄の地震凡拾四五度計也此度当国流損ノ在所夥敷浪入さる土地ハ地震の為ニゆり崩され無事なるハ一ツもなし今日同時御国城下大地震郭中町家共過半潰込む同し刻限より下町出火地震中の事ゆへ火を救ふものもなく自然と焼募り御町方会所より下モ新町農人町辺迄焼失地震火難一時の事ゆへ遁るゝ方なく死失のもの数百人有し趣同時大汐溢来り新町辺迄一面之海ト成ル右ニより家中町家共各広キ所又ハ藪中等へ這入難を遁れんとす惣して宇佐辺よりハ城下近辺地震甚しといふ弘岡森山辺之人々皆山へ逃上ル仁ノ村へ波入り其汐仁淀川を渡り西畑辺も大ニ騒クといふ今晩ハ人々只有頂天にて夜を明ス（今夜霜大ニ降リテ雪ノ如し）

（〇脚注）

此時山を目当ニ逃しものハミな命を助かる船ニのり難を遁れんとせし者ハ溺死多し沖より波来るのミニあらす海近キ土地ハ下タより汐を吹出スもの也能く心得有たし

〇

奥宮正明か記せる谷陵記ニ宝永四亥十月四日大変の節ハ宇佐ハ六所潮ハ

橋田ノ奥宇佐坂の麓萩谷口迄山上の家壱軒残る在家の後の田丁へ先潮廻しけるゆへ通路を失ひ溺死四百余人と有当浦ニハ亥ノ大変の慥成記録なきゆへ委敷ハしれ難し

○

当浦汐ニ残りたる家々見廻りける処橋田ハ瓦葺の家ニ波打込天井より二階ニ出ル西浜辺同断東町ハ天井限福智院ハ坐上六尺計迄浪入ル新在家曲田ハ坐上三尺計なりといふ

（○脚注終）

同六日晴天朝日ノ出ノ色紅赤昨日ニマサレリ橋田ノ者昨夜より飢渇ニ付山にて粥を炊キ芋を蒸し当寺より分与へ食せしむ浜ノ井戸へ悉ク汐入りける故薬師谷より水を汲ミ煮炊する昨日之汐引取さる故宇佐之中にても往来不相成又城下近辺大地破裂して容易通行なり難し当浦にても処々地さけ穴之如キもの数ケ所有今日ハ流レたる跡にて食物諸道具拾取ル者夥し藁葺家四五軒昼頃沖より流レ寄ル箪笥長持家具類を始とし衣類等ニ至ル迄砂中ニ埋るを拾取有船ニ乗リ沖ニ出争拾も有欲界之習浜辺ニ出ル人数百人也天気益よし朝より夜ニ入ル迄地震七八度暮六ツ頃より晩迄四五度ゆる今晩も右之処ニ而夜を明ス月ノ入頃西ノ方少し曇ル八ツ頃より一天曇ル

同七日地震も少しハ緩り天気ハ曇り懸しゆへ山際へ持出たる諸道具自坊へ運ヒ取ル五ツ頃より雨降出ス九ツ半頃やむ暫く有て橋田為平甚三郎清之丞良右ヱ門等之一家凡拾四五人打連来り己家之出来ル迄宿をかし呉度段頼来ル同時当寺江引移ル此者共我家流レ止りし故二階等ニ残リ留リ候品取出し諸道具当寺へ持来ル地震都而やます

同八日晴天男子分ハ各々浜へ出て竹木板柱之類拾取勝手宜敷土地を見受己家を作ル中ニハ拾取品入違有之口論ニ及ふも有日々喧嘩之声たへす今日公儀より流損之家々江御救米渡ル夜地震やまさる故蒲団を巻キ火を燃し寒を防キ夜明を待ツ

同九日晴天朝弘願寺より直人を以見舞ニ差越ス四ツ半頃左川光明寺見舞ニ来ル西畑左川両所共大地震ニ付家を明放し諸道具取片付皆山際ニ己家を構へ居ル由別而左川市中ハ家壱軒ニ提灯壱ツ行灯壱ツニ火を灯し置候様触渡し其余ハ於市中煙草呑む事も不相成程ニ火用心厳敷キ趣城下も同断ニ候へ共下町焼失已後諸物之取片付不調故盗人之穿鑿厳敷由今日須崎之役人宇佐へ来リ一通り見合セけル由夜少し横ニ成ル九ツ頃より又ゆり出ス朝迄五六度地震

同十日城下専修寺弘岡光壽寺見舞ニ来ル今日も晴天昼頃迄少々宛ゆる晩景少しゆるみ今晩始而一同寝ル夜半頃少しツヽ弐度地震

同十一日朝早々地震大風吹寒気甚し山際ニ己家段々出来ル七ツ頃迄ニ小ゆり弐三度風やます夜半頃より朝まて三四度ゆる　宝永四亥年大波ニハ宇佐福嶋ノ間ニ残ル家只壱軒瀧ケ谷ニ有之由且波此度より高キ事五尺計なるへしといふ

同十二日晴天五ツ時壱度ゆる七ツ頃又ゆる夜七ツ時地震今日己家懸ケ之者へ公儀より藁弐拾把ツヽ渡ル

同十三日朝弐度ゆる廿代類族より左右無之ニ付直人を以様子為承候処五日より六日之大火ニ居宅焼失家内壱人も怪我無之立退此頃元之処へ己家作り之最中之由申来ル昼之間三四度夜三四度ゆる今日橋田へ始て酒を売ニ来ル　過半水入ニテ咽ヲ通リ兼ル

同十四日晴天寒気甚し五ツ頃迄ニ弐三度ゆる今日橋田船乗之男他国より帰帆九州豊後辺之大地震之刻限当月五日七ツ半時ニて有し由彼地汐ハ格別無之趣芸州広嶋豫州宇和嶋地震ニ而大崩レ之由扨御国内ニハ幡多郡中村宿毛大地震死失顆敷古馬目ハ浦中不残流損大浜清水辺ハ格別なく須崎へも波入騒動致し候趣右地震大波之刻限何国も同刻同時なる事誠ニ奇代なるものなり昨日城下行直人之便を以上町之安否為聞ケるニ大徳屋柏原升永屋辺皆無異ニ立退罷在ル由今日晩景八ツ頃より夜中暁迄ニ七八度ゆる

同十五日晴天朝早々中ゆり弐度九ツ頃より後中ゆり壱度小ゆり弐度夜五ツ時壱度九ツ頃壱度今日ハ大汐時ゆへ少々波高く人々又波之入来ル哉ト恐るゝ此間流死之死骸五人七人磯辺へ打寄しといふ

同十六日曇天四ツ頃より雪降ル地動なし九ツ頃より雨ト成ル蓮池村正覚寺見舞ニ来ル晩景雨やむ暮六ツ時中ゆり夜半頃迄地震やます八ツ頃より

大風
同十七日朝雪ふる四ツ半頃やむ大風吹地動なし晩方ゆる暮六ツ時少し大ゆり夜八ツ時中ゆり壱度
同十八日晴天五ツ頃一両度昼頃壱度日没壱度夜七ツ前壱度ゆる今日直人を以城下入魂家へ見舞之品為持遣ル
同十九日少曇朝小ゆり弐三度七ツ頃壱度夜中弐度今晩橋田甚三郎ト申男大阪より帰ル彼地ハ当月四日五日両日共大地震当国城下よりハ軽キ方ト相見候へ共潰家千軒計死失之者凡千人位出火ハ無之大波溢レ候へ共人家へハ入不申川入之船両方より打合諸国之船千艘余砕け候由且大船の檣ニて処々之橋を打損し依右死人も夥敷趣中国往来之道筋七ツ頃より夜ニ入候而ハ宿壱軒も無之皆用心之体ニ候故旅人甚以当惑ニ及ひ候由讃州丸亀辺幷阿州徳島大いたみニ候而往来之道も無之ト申事右大阪地震之節宇佐福嶋之市艇於彼地傷ミ候故船方中国通帰国致し候由右男之咄し昨日当寺別条無之趣之差出寺社方へ出ス
同廿日朝曇昼晴ル五ツ頃壱度ゆる夫より夜ニ入迄地震なし夜半過より暁迄之間三四度ゆる今日大風吹一両日已前ニ当寺同居の者共己家出来ニ付引移ル今日郷廻り役地下役をつれ宇佐中之拾物之穿鑿有之一応家捜し同然当寺諸方壁之取膳致ス今日組合寺々江見舞状出ス
同廿一日昼之間地震なし風大ニ吹夜五ツ時同八ツ頃ゆる暁前頻りニゆる今日木仏尊像計檀上ニなをし奉る
同廿二日朝五ツ頃壱度晩景曇ル今日城下大ゆりと申事夜四ツ半頃より七ツ頃迄之間ニ五六度ゆる少々風吹ク
同廿三日晴天朝より九ツ頃迄之間ニ一両度小ゆり今日ハ風ハ吹かす夜八ツ時より朝迄三四度ゆる
同廿四日薄曇今日ハ都而地震なし夜ニ入小ゆり壱度限り
同廿五日、昨夜幡多郡中村引越御山方順助より状来ル此人廿九日城下出足五日ニ中村へ着否大地震ニ逢候由併家内一同無難ニ立退己屋ニ罷在ル趣申来ル彼地蓮光寺常照寺共潰込地震中出火中村八拾軒余焼失潰家夥敷彼是死失之者三拾八人怪我人凡六拾人計有之候由申来ル八ツ前雷電風雨共やむ地震する波おさまらす今日橋田大黒屋茂吉大阪より下ル彼地之様子ヲ聞ニ川入之船之破損ハ此間之咄ト同断大阪にて死失之人ハ凡壱万人程にて右船之損し候も不意ニ波高く入来り船々相騒キ左右上下打合程ニ破船数多く候由当月十日大阪市中江町奉行所より御触候ハ此度之大変死失夥敷ニ付先規之通死骸壱人ツヽ改申事出来不申間何方ニ成共見覚之死骸出候時ハ届出ニハ及不申死体引取葬リ可申ト之触達ニ成趣右茂吉大阪逗留中堀江ニも死骸拾壱人出ける故彼地之者相集り見候へ共似たる形チも無之哉其儘ニ打捨置有之由扨阿州牟岐浦此度之大汐ニ而七歩通り流レ死失夥敷有様帰り懸見及候ト之咄。今日之波橋田辺ハ人家之有し処まて溢レ来ル西浜辺ハ各元之屋敷屋敷へ己家を打居候処又波来り己屋を捨山へ逃上り大騒キ致せし趣先日之大汐ニ井尻ハ人家弐三軒残り余ハ皆々潰込む龍浦ハ都而波之難無之ト申事今晩弐度ゆる。昨日竈をぬり替ル
同廿六日晴天朝早々地震する晩景迄ニ弐度小ゆり惣し而地動やまり申さす候へ共当月四日五日両日之地震之ことき大ゆりハ其後なし此節ハ件ニ馴しと相見へ我人共ニ夜中之ゆり候時等しらぬ顔して寝て居るといふ位之事勿論昼之間ゆり候而も大半しらぬ勝也今夜九ツ頃小ゆり壱度
同廿七日五ツ頃雪ふりやむ今日ハ衣類諸道具共拾取者より役人之己家へ持出我物ニ相違無之品々ハ役人より貰受帰ル四ツ頃より又風吹ク扨此間中御正忌ニ入候へ共時節柄参詣もなく夜々弐人三人ツヽ来ル人を相手として法談する誠ニ末法濁世ニハかゝる大変可有トいふ仏説を今迄ハ余所事ニ思ひなし候所此度之一条経説之儘成事明ニ被惑怖右ニ付而ハ後世之大事猶々被尊信しふとき心根性落涙致ス計也此間中ハ四幅之御影御箱之儘奉礼拝事ニ候へ共今晩ハ大治夜也且地震も惣分始メよりハ穏也旁以今日ハ御掃除之上御腰延致し拝礼実ニ時変トハ乍申先日以来箱中ニ収メ置候事返ス返スも無勿体奉存事ニ候今日ハ八ツ頃迄地震なし中村へ之返状を認む日入頃又ゆる今晩寒気烈敷九ツ時より八ツ迄之間小ゆり弐度
同廿八日薄曇九ツ迄ニ弐度ゆる日中之勤行済より又御影を御箱ニ納ム当年之御正忌中地震すへてやます参詣人もなく近代稀成淋敷御法座ニ而大変ニハ驚キ申儀も無之候へ共眼前御法義弘通之害ト相成候事而已歎敷奉

恐入計なり夜半頃弐度ゆる　宇佐御蔵ニ入る所の米ハ俵甫淵之浜辺ニ在之彼地のもの拾ひ取ルといふ
同廿九日曇天大風吹七ツ半時ゆる夜九ツ頃より七ツ頃迄中ゆり五六度尤夜中ハ風なし
極月朔日晴天純肇を佐川へ見舞ニ遣ハす昨日御郡奉行坂井堅吾宇佐へ来ル今朝甫淵へ通ル九ツ時壱度ゆる風吹出ス日入頃ゆる夜八ツ頃より朝迄三度ゆる汐少し増ス
同二日曇天四ツ頃より晴ル五ツ時壱度ゆる寿念寺見舞ニ来ル昨日新川専右エ門来ル今日晩景仁ノ村忠兵衛来ル惣して当年之地震昼夜共ゆる度ことニ何方共しれす鳴動ノ声聞ゆ。日暮て後ゆる夜九ツ頃より七ツ迄之間ニ弐度ゆる
同三日朝早々少し雪降ル直ニやむ五ツ時壱度ゆる純肇寺町へ行此間廿五日より汐不引故新町より下モ一面海之ことく見ゆ又江ノ口と小高坂トノ堺なる田中ニ汐吹出し候よし何レ昔の大波よりハ卑き趣今日四ツ頃より大雪七ツ頃やむ晩方壱度ゆる夜九ツ頃より小ゆり弐度中ゆり壱度
同四日薄曇今日より明日へ又再ひ汐入来ルトて騒く者多しすへて左様の事なし至而寒し昼ノ間地震なし夜三度ゆる内壱度少し烈し今日仁ノ村源次見舞ニ来ル
同五日晴天五ツ頃より九ツ迄三度ゆる晩景風吹く二三日以前当浦御蔵ラ之濡米入札有此度之救米貰候者ハ入札不叶由夜弐三度小ゆり有橋田と新在家との間の塩田堤きれ入江となりし所今以波引かす船を入レ小湊のことく成ル
同六日晴天夜明頃ゆる四ツ半時ゆる少々風立曇ル晩方小ゆり弐度夜中弐度宇佐より奥浦之間ニおいて溺死の者之死骸三人五人ツヽ出ル然レ共日数歴るゆへ男女の差別しれさるあり腰より下モ之なき有衣類の見覚を以取寄葬る惣して今度の流死の有様をきくニ汐の入ルを聞まヽ家を捨欲をはなれて早く逃出候ものハ皆助かり金銀衣類等ニおしミをかけ立退事のおそかりしものハ其場にて直ニ波ニ引レたまたま逃出候ても裏道へ汐まハり木の上ニ昇りなから精尽て木より落死するも有家共ニ沖へ流出ル有哀レ千万成事なり又昔より言伝へニ大地震の時ハ井戸の水を見よ若井ニ水あれハ汐の入ル事なし井戸ニ水なくかわきたる時ハ油断せす直ニ山へ逃よといふ言葉をあてニして唯井をのそきつヽ流るヽ者ありとそ是一概成了簡なり此度の地震ニも各井戸を見ルニ大ゆりおハるや否や直ニ一滴もなくかわきたるも有又平生之通りにて少しも減ぬ有水をあてニするハ危き事なるへし地震の大小ニより水のかわくも有又新ニ地より水の湧出ルも有後世よく心得へし且山へ逃上ルニもくつるヽ山有崩れさるあり大木のある所ト壱本も樹木なき所江ハ近よるへからす其余中木のはへたる山ニ居るへし又地震の節一概ニ竹籔ニ走リ入竹の切かぶニて足を損せし者も有大声上ケて泣さけひ目の見へぬゆへ躓き怪我せしものもあり我道具を家より出し置其置所を忘れ人ニ横取ニセらるヽもあり孰レ時変ニハ気を落つかしむる事第一なるへし
同七日朝天けふ地震なし夜同断
同八日晴天地震なし昨日当浦御蔵濡米寺院計之入札有此間医者山伏浪人等之入札有是ハ壱俵より上ハ不相渡趣寺院ハ拾俵已下之定当寺より令入札候処五俵落札ニ相成大和屋儀八より所望申度段申出候ニ付其儘右男ニ遣ル壱石ニ付八銭五拾八匁位勿論汐ニ濡候義故壱俵之内四五升ハ糀之ことく相成居候由惣而濡米ニ上中下之差別有右寺院入札之米ハ其中チ上之分なる趣店売之直段一升ニ付壱匁より下米は四分迄有之其下米食し候ものハ多分腹痛甚く二三日も寝ル者あり此頃ハ病人有て医家へ相談しても薬種ハ勿論療治之道具匙迄も流失ト申事ニ付当浦病人大困リ扨此節宇佐之医者同士寄合評議之上薬壱服ニ付代五分ツヽ見替ニ相成候由膏薬も右同断是亦尤なる事也。最早地震も相止候やと思居候処今夜八ツ時又壱度ゆる
同九日晴天日出頃壱度ゆる五ツ時又ゆる九ツ頃弐度八ツ時壱度少々風ふく灸をする夜壱度ゆる此節惣して雨なく水少し谷の水ハ減り穢レ浜ノ井戸ハいまた汐気去らす日夜水の争論やます不自由なる事なり
同十日晴天朝早々弐度ゆる九ツ時大地震此間中数度地震せしニ霜月五日七ツ半時のゆりを第壱番トし今日之ゆりを第弐番とすもはや大ゆり有間敷と落付居候処思ひ懸なき今日之大ゆりニ人々騒き驚く。風吹出ス夜ニ

入三四度ゆる夜中風なし
同十一日晴天朝早々小ゆり壱度五ツ時弘岡会ニ行八ツ頃又少しゆる晩景風吹出ス夜弐度震る
同十二日晴天風ふかす九ツ前中ゆり地震弐度夜四ツ半頃より震り始メ暁まて間なし中ゆり四度小ゆり七度合して拾壱度ゆる本尊様を檀上よりおろし奉る
同十三日今日本堂の障子を残らす張替ル今日須崎より帰りし男の咄を聞ニ此間之大波ニ浦人三拾余人死失之由其中多く大汐入ル事をしる儘直ニ浜へ走リ出船ニのり其難を遁れんとセしニ波高くしてのる事も出来かたく兎や角する内船と船との間ニて摺きられ五体半分ニ相成死セしものおふき趣扨久礼浦ハ町より北ニ当りて竹籔有老人小児之輩地震中籔中ニ入踞り居る時俄ニ大浪入りきたり候と騒き各山ノ手へ逃走ルニ老人なとハ手足不叶なるゆへ籔際にて遂ニ浪の為ニ命を失ふもの七八人程有之由人家流損亦多しと只籔をなてこし地動の難を遁るゝ事をしりて浪の難を凌く事をしらさるハ誠ニ残念の至りといふへし。夜八ツ過よりゆり出し六ツ前まて凡六七度ゆる内弐三度中ゆり有昨夜今夜同し様ニ厳敷ゆるゆへ又波の入来ル事もやあらんと東町辺より西の方之人々大ニ騒キ一旦山より出て浜へ来り我屋敷屋敷ニ己家構せしもの共今夜また山へ逃上ル然ニ海面を見るニ汐の満干平生之通少しもか已りなし
同十四日曇天五ツ頃細雨少しふる同時ゆる九ツ頃弐度小ゆり晩景また雨ふり出ス夜ニ入壱度小ゆり八ツ頃思ひかけなき大地震勿論能く寝入たる事ゆへ俄ニおき上り雨戸障子を明ケ飛出ル覚悟をなす此時雨大ニふり様子見合セ居ル処先ツ格別無之ゆへ又寝ル朝迄ニ小ゆり弐度有今晩之ゆりハ先月五日之大ゆりと勝劣を争ふ程の事にてゆり始メハ頭上へ家潰落ることく覚へ戸障子暫く動キやます隣り之己家ニ居るものも皆一同ニ騒キおき上り火を焚く
同十五日晴天四ツ頃より大風吹ク八ツ時小ゆり壱度日ノ入頃ゆる夜弐度小震り
同十六日、九ツ半頃続ケゆり三度、夜五ツ時中ゆり
同十七日晴天大風四ツ頃小ゆり弐度七ツ半時ゆる夜五ツ半頃またゆる四ツ時小ゆり七ツ半過より夜明まて中ゆり小ゆり五六度続く新在家辺己家潰れ込なりとて声を立ルを橋田のものハまた汐の入来ルならんと大ニ騒く海面別条なし
同十八日晴天朝風吹かす昨夜節分にて有しか共時節柄ニ付キ鬼の窺ふ様成家もなけれハ福之神のやとる家もなし大豆を投て鬼ハ外ト福ハ内の声も聞へす皆々己家にて窃ニ大根の煮メを食ふて節分の心持をなす五ツ過より半時位ツゝ間を置て頻りニゆる恐れて家を飛出ル程の事なし今日ハ惣して風なく天気温和にして恰も春の如し。今早朝地震中新在家を往来せるもの戯ニ大声を上て大浪入来ル也と叫ひ行其言葉を信しいまた夜も明離れさる事なれハ一同ニ騒立取ル物も取あへす山へ逃ル有途方を失ひ泣叫ふ有其騒く声橋田辺ニも此音ニ驚キ少々さ已き候ものも有りし由夜明ケて聞ケハ新在家の男彼道とふりのものを引捉へ我等を山へ出しぬき跡へ這入盗ミとらん為の謀なるへしと罵りて大喧嘩せし趣此節の人心落付ぬゆへこれを笑とし騒キしも尤なり。けふ昼の間五六度ゆる夜小ゆり壱度
同十九日晴天風なく地震なし暖なる事昨日のことし此頃の米上ノ分壱升壱匁弐分五厘より三分位白米壱匁五分位唐芋壱メ目ニ付七分五厘同し赤芋六分位糸ひき車三匁五分より四匁五分迄塩入ノ篠巻壱斤ニ付弐匁位酒醤油髪附元結等之品日々他所より売ニ来ル又橋田辺の者日々船ニのり磯辺にて着物蚊帳類を拾取洗乾かし他所へ持出下直ニ売渡ス由世渡リハ種種有物ト見ゆ。今日壱度日入頃ゆる併小ゆり夜五ツ頃より四ツ頃迄之間ニ四度ゆる内壱度中ゆり八ツ頃又弐度ゆる
同廿日曇天四ツ時ゆる橋田の者共海にて毎日拾来りし衣類等を洗ひ乾かし家々ニ竿を渡さぬ所もなく蚊帳小袖抔かけならへたる有様ハ時ならぬ土用干しの如し。夜四ツ頃弐度ゆる鳴動の声頻りニ聞ゆ八ツ時より七ツ迄之間続けゆり四五度内ニ中ゆり壱度有
同廿一日、五ツ頃ゆる晩景少しゆる夜五ツ半時経て三度ゆる七ツ前壱度
同廿二日晴天純肇純下へ行昼之間地震なし夜四ツ頃壱度ゆる扨高知之左

右を聞ニ心易キ家々皆無恙趣新町辺之汐今以引不申浦戸より孕近辺へ汐見之番人役所より差遣し有之若万一高汐ニ相成時ハ大鼓を以為知申様之下知を伝へ守らしむ扨城下町之火用心厳敷夜中往来之者甚以少ナく無拠往来之者ハ壱丁壱丁継渡しニ致し僧分帯刀之身分ニ至ル迄独り往来難出来趣斯程厳敷御示之中ニおいてすら折々町中ニ火をさし置事有之城下之人々唯薄氷をふむ心地にて昼夜安キ心もなく心の落付ぬものハ上町辺より諸道具持出し朝倉鴨部辺へ預ルものも有之騒ケ敷事いふへからす一昨夜潮江ニ出火有て其火昨廿一日治りし所家数弐百軒余焼失町々自身番致し市中売物等も取引ハ七ツより日暮迄夜中ハ売買不相成此頃潮江天神之馬場前キ広小路等ニ御救小屋出来極難渋之者共へ日々食物被下置潮江ニも百五拾人計己家入之ものあり種崎町ニも五十人計居候由共余此度之大変ニ付潰家或ハ半潰之家々迄も御上より御恵として金銀米銭より材木等迄夫々被下置由誠ニ尊大之御入費国恩之辱キ絶言語もの也。鵜坂峠の菎蒻売ハ如在来山にて渡世致し居候由。四五日以前極楽寺之釈尊ノ像右寺より五六丁西ノ田中ニ埋れ有之を掘出し奉り候と申事。

同廿三日晴天風なし五ツ半頃ゆる水ニ乏きゆへ薬師谷の奥大谷を堀ル暮六ツ頃小ゆり夜五ツ半時ゆる七ツ頃又ゆる

同廿四日朝曇天五ツ頃晴ル同時両三度小ゆり有晩景より大風吹ク夜五ツ頃より四ツ半頃迄之間ニ五六度小ゆり七ツ半頃中ゆり。今日浦戸の様子を聞ニいまた波引さるゆへ恐怖して老若共我家我家ニ鎖をおろし置西方寺の越戸より南浦へかけ小屋を構へ移居候由長浜辺ハ東ノ方ハ申ニ及はす雪蹊寺の西の方より切抜辺まて汐入来り坡へ上り船なくてハ往来なり難しといふ

同廿五日晴天朝の間風なし四ツ頃ゆる八ツ時又ゆる七ツ頃より曇ル当年貢物来卯年三月限ニ取立四月ニ役所へ納ル筈ニ相成ル。夜少々風吹く今晩よく寝入地震之有無をしらす

同廿六日晴天五ツ時四ツ半時暮六ツ時三度ゆる今日も風なし夜四ツ頃小ゆり今夜閨寒し

同廿七日晴天けふハ弐度程鳴動の声計有てゆりなし夜四ツ前ゆる八ツ時又ゆる

同廿八日晴天風吹く五ツ半時ゆる九ツ時又小ゆり、今晩夜半頃弐度ゆる

同廿九日晴天五ツ半頃ゆる、夜弐三度ゆる惣してけふハあく共なく頻りニ鳴動する

同卅日少曇朝寝すぎ漸く五ツ前寝間を出て兄弟共本堂にて勤行最中思いかけなく大地震霜月五日之ゆりと全く同し本堂の柱くるいゆかむ法衣之儘飛出ル己家の者ハ皆家を出て山へ逃上ル当寺ハ本尊様を又長持へ納メ庭前へ出ス同所にて喫飯して少々道具を片付波のくるいあるなしの所気をつける壱時余り之間ニ三拾余度ゆる皆小ゆりハなく中ゆり計なり長ゆりしてやまぬ所ハ霜月五日よりハ遥ニ烈しゆりよりハ鳴ル音夥敷煙草のむ間もなくゆる其中ニも揚残り之餅をつくもあり注連飾りするも有人心種々有ルものと覚へておかしくけふの震りより算用すれハ当月十日同十四日両度のゆりハ物の数にもあらす海面の満干常の通りにして違わす近きほとりに居ル者皆小屋を捨手道具携へ足元へ汐の来たる如く言次々山へ逃上ルけふハ大晦日の事ゆへ其山中にて昆布醤油の類買も有売も有八ツ半頃迄大騒動当寺ハゆりハやまされ共大風吹出し寒気たへ難きゆへ内へ這入火燵ニ当ル今日五ツ頃より日暮迄の震り数凡八十四五返計其内小ゆりハ少く中ゆりハ多しゆる度ことニ空中にてじだんだふむことき音聞ゆ家の動く事此間中よりハ烈し夜ニ入候ても昼と同しく少しも間なく鳴動の声共ニゆる暮六ツ時より夜明迄又百二拾余度ゆる内七拾度程ハ十日十四日のゆりと同しく皆中の大なり勿論火燵にて夜を守り暁をまつ夜半頃提灯ともし隣家を見ニ廻ル家々皆火を焚キ寝す当年のよふなる恐しき大晦日ニ今まて逢たる事もなく又咄しニも聞かす嘸や年徳神此愁を見聞し迷惑からせ給ふらん。今日昼頃まて風吹かす九ツ過より大風ニ成ル晩景ゆりの間を見て本堂の掃除し御花を上ル七ツ頃山へ逃上りし者共当寺の騒かぬを見て道具を提また己家へ戻ル夜汐を恐レ山手の小屋へ宿をかりニ行ものも有昨日けふニ搗たる餅を神仏へ備へぬさきニ袂ニ入レ三ケ月なりニ喰きりて手ニ提つゝ水汲ムも有往来甚忙し我口ほと可愛ゆきものハなしと見へたり宇佐辺の魚売数人今朝新居辺まて行大ゆりニなる

といなや魚荷ヒ戻ル店方の掛集メの影法師も見へす夜淋しゝ

〔物部村志〕〈松本実編、昭38〉

安政元年は所謂安政の大地震で当時の記録に「八月五日より六日まで西川、東川より槇山まで大地震。同十一月五日より御国中大地震、その年十二月三十日まで夜昼ゆり止みなし。そのうち十一月の五日七ツ時より御城下は申すに及ばず、西東浦々町々は大いたみ、其の時津波うちこみ、浦々御城下共におびただしく人家大いたみ。もっともそのうちに十二月十日、十四日の夜、三十日大分えらくゆるなり。明正月もゆらん日は一日も一夜もなし。初めて地震揺る四五日前は、地がづんづん鳴る一、二年前どしより、粟、そばを虫食うなり云々」という状態で、度重なる災厄に生活に困る者が続出するようになった。

〔森村史〕〈長野千春著、昭30、土佐郡〉

安政の地震　安政元年（一八五四）十一月五日七ツ時（午後四時）土佐中心の大地震あり、和田喜久平の日記に左の如く記してある。

十一月五日七ツ時に大地震有、一昼夜に七八十度程ゆり、お城下にては家大方かやり火事に成り又津浪入り込み至る処大変なり、六日、七日の頃は薊野山江お城下より弐千余の人数逃げ来るつなみは新町より比島、たべ島辺迄大いかりにて麦作大傷みに相成る。家の大傷弐千五百軒余、一軒につき金一匁宛小屋料として御公儀より遣わさる、金高弐百貫目米に直して凡そ壱千七百五十石也。

翌卯の春は大分軽み候得共年中少々づゝゆり辰の年も折節少々づゝゆり、何時とものふに暮迄に止まり一同安心致し候。

と記してある。余震も後二年間も続いたようである。森郷あたりも中々烈しかったようで倒壊家屋もあったらしく、竹籔に小屋がけして避難した旨古老によく聞かされたものである。

〔安芸郡史考〕〈安岡大六著、昭30〉

安政の大地震　安政元年（一八五四）十一月五日は、よく晴れて小春日のように暖かつたが、七つ時（午后四時）急に大地震がおこり、暫くして大津浪があつた。それから後、十年ほどの間は毎日数回の地震があり、人々は不安ながらも日を送つたと云う。しかし、この時は宝永の地震の津浪にこり地震が始まると同時に人々は直ちに山地へ避難したので本郡の死者は七十一人にとゞまつた。

しかし、社寺大破七一、倒壊半壊家屋三六〇、雪陰五〇四、納屋・馬屋三二九、土蔵一〇八、其の他建物八二で、船六十艘、牛三頭流失し、御留山二二ケ所・塩田八ケ所・普請七四ケ所大破した。

〔稲生村史〕〈編集委、昭30〉

一、安政元年十一月四日午前九時頃五日午後五時頃の大地震は被害甚大にて多数の家屋が倒壊した様である。

〔田野文化史〕〈安岡大六著、昭27〉

今から九十七年前の安政元年十一月五日（一八五四年）は、快晴であつたが、午後四時大地震が起り午後五時頃大津波があり、人々は、西福寺や岡地の藪の中へ避難したが、強震の為歩行も困難で、空飛ぶ鳥も地に落ちたと伝えらている。この時米屋は酒造米を避難の人達に施したという。

〔高知市史跡めぐり〕〈橋詰延寿著〉

狭　島（桟島）

御疊瀬の沖、袂石の向うにある。周りが五十ｍの小島である。その昔仲哀天皇が御巡幸の時この島に桟をかけて上陸せられ島の風景をながめられたので桟島の名があると伝えられている。

第五代藩主山内豊房がこの島に綾の小島と名をつけられたことがある。なお砂島、狭島、座島とも書く。この狭島は安政元年（一八五四）

の大地震で地ばんが沈下したのでほんの数坪の面積である。岩の上に数本の松が生えて盆石のように見られる。

津浪記念碑

稲荷神社境内坂の北面アコウの木の傍にある。安政元年（一八五四）十一月五日大地震の時、津浪が入って桂浜の民家が浪にのまれてしまった。それで後の時代の戒として碑を建てたものである。

碑面には

安政元寅十一月五日大地しん津浪、後世大地しん有時は津浪入と心得べし　大黒屋嘉七郎建之

とある。

〔公文家文書〕〈高知市比江、「国府村史」所収〉

覚

安政元年寅年十一月大地震、同四日朝五ツ半時少々揺、同五日昼七ツ半時大揺、高知揺別、下町大焼つゞいて揺次第に小揺に相成、十二月四日迄揺、同三十日大揺、それより小揺、四月廿四日大揺それより小揺に相成、嘉永六年よりあめりかのふね来始めこうえき致しくれ候様に申かかりそれよりいろいろくるいあり。一文銅銭二文に遣四文になり十六文になり候。それより世のこわれに相成りいくさあり、慶応四年辰年正月よりいくさ烈しく同八月にせめかたふけそれより金銀の銭へり天札金札に相成通用致す事、米相場高く相成慶応二年寅年ころより五百目になり一貫になり十貫となり明治三年午年のころ二百貫の相場となる。

〔野中兼山〕〈川添陽著、昭40〉

港口保護の波止　兼山は浦戸港の口が海水のために平地部を浸蝕せられ又要所の深みが土砂のために淤浅するを憂ひ之を防止するために両側に対し波止突堤を築造した。一は東側なる種崎に於て北より南に向ひて築き、之に使用の石材は三尺乃至五尺の大石で頗る堅牢を極む。然るに築堤以後年を経るに従ひ波止は土砂のために埋没し、其上面は草木に掩はれて、後年に至りては殆んどこれを知る者もなかつたが、安政元年十一月震災事変の時、掩ひたる土砂は津浪のために流去し、突堤の上面これがために露出して当時の人の認むる所となりしを、その後復た元の如く土砂のために深く埋没された。

〔安芸郡のあゆみ〕〈安岡大六著、昭24〉

安政地震　今から九十八年前、安政元年十一月五日（一八五四年十二月二十四日）は、よく晴れて小春のように暖かつた。午後四時大地震がおこり、午後五時頃大津波があつた。この時は津波のくる前にひなんしていたので、土佐でこわれた家の二万二千戸に対して、死者わずか三百七十二人であつた。

〔室戸岬町誌〕〈安岡大六著、昭28〉

安政元年（一八五四年）十一月五日大地震がおこり、土地が隆起して、干潮時に船の出入が困難になつたので、翌年二月七日港普請の願書を藩庁に提出し、その許可を受けて港を掘り下げた。

○

（○三津港）

安政元年の大地震のため港底が隆起したので、新港を造つたが、港口に岩礁があつて船の出入に不便のため廃港になつていた。

○

昼の七ツ時（午後四時）大地震となり、間もなく大潮が入り、人々は狼狽して山地にかき上つて難をさけた。

年寄役四手井重之丞の土蔵へ、山から大石がころがつてきて壁がいたんだが、他に大した被害はなく、土地が四・五十糎位上り、津呂港が浅くなり船の出入が困難となつた。（津呂庄屋多田五郎左衛門信量の手記による）

〔佐喜浜村を語る〕〈小堀春樹著、昭5〉

安政五年の大地震は、古老の話によると、相当にひどいものであつたらしく木の宮（中里の前）の大杉のさきにタチ魚がひつかゝつてゐたとの事である。

有名なカノギノツエ（大地裂）もこの時に出来た。

〔羽根村史〕〈十兵衛会、山本武雄編、昭32、安芸郡〉

五日大地震三十余ケ国に及んだが、宝永の地震の経験から被害は少くてすんだ。

〔大津村史〕

安政の地震については明見村の年寄浜田万次が郡代から授与さた御褒文中に「安政寅十一月五日、大地震ニ而御城下専打揃出火相成リ下町不残即度津浪ニテ北下知、潮江、江ノ口、比島、新木、高須、大津下ノ村、介良、屋頭、五台山、島、垂見、葛島、大イカリニテ…」と記録され、田辺島福永家の記録によると国分川を舟で渡って〃うちつけ〃に上り一宮の徳谷に避難し留守番は型板を櫓に組んでその上に据っていたという。

〔神社明細帳〕〈県図、K 175－7〉

高知県土佐国高岡郡多ノ郷村大石字戸島鎮座

無格社

戸島神社

由緒、嘉永甲寅の津浪に宮居流失すれとも神体は正しく其地に留在せり

○

高知県土佐国高岡郡与津村字大財野鎮座

無格社

熊野神社

由緒、往古紀州熊野ヨリ勧請ニテ（○中略）嘉永七寅年十一月五日地大震入潮ノ節神端アルヲ以テ大波別神社トモ云

○

高知県土佐国幡多郡宿毛町宿毛字天神ノ本鎮座

村社

天満宮

古老伝説ニ云、往昔筑前大宰府ヨリ勧請ス后本社ヨリ紺紙金泥ノ真筆ヲ送リ来リ神宝セリ、此品安政紀元冬震地ノ際怒涛ノ為ニ鳥有トナリ今不伝

〔野根諸記録〕〈山岡亀太郎編〉

嘉永七年十一月四日寅大変日記覚

これは高知県野根浦大庄家安岡家に伝わりたる安政地震の記録にして安岡十三代尚隆の実父時次の製作にかゝる。時次は香美郡東川村羽尾の郷士伊藤作蔵の四男で文政四年五月二十日出生、弘化五年安岡家の養子となる。

＊

一、寅十一月四日五ツ時（九時）すぎ地震。人家等傷みこれなく四ツ頃（十一時）沖合ハエ六、七尺ばかり潮引きまた元の如く満ち候事三度ばかり。甲ノ浦はユリ仕舞より御分一前まで潮引き再び満ち候節人家庭まで潮入候事。

同夜八ツ頃（五日三時）少々ゆる。

一、同五日七ツ半頃（十八時）大地震。ユリ永し。人家石垣等多く傷む。

同時所々出火。潮入り、人家流失、焼失多くこれあること。

荒増左に記す。

夜六ツ半頃（二十時）大ユリ。同四ツ頃（廿三時）大ユリ。此時西南より鳴り来ること山海も轟く如し。尤も七ツ半大ユリより此時まで小ユリ少しも止みなし。四ツ頃より六ツ頃（六日七時）まで小ユリ一刻に拾弐参度ばかり。夜明け頃より少し静まる。

一、同六日小ユリ一刻に七、八度ばかり。前日大ユリより諸人家族引連れ小高き山根等に逃げ退り。夜八ツ頃（七日三時）少々雨降り出し、傷まざる人家、寺等に逃げ込む。
同日沖合に諸魚夥式見え大変に躍る。網遣い等致すものこれなき事。
一、同七日、日の出頃より日和になり。小ユリは同断。
野根浦人は五日晩より観音寺跡畑え一同集り野宿。翌六日同所来迎寺の後に西ノ内三ケ所え浦中挽板取集め銘々小屋を取拵え昼夜帰り申さざる事。
付たり。同所え罷越候節相集り候人数永徳寺、来迎寺の辺に戸障子取来り囲い、式物等致し候事。此時川村蔵馬瓦屋の南に作事致す筈にて仮家拵えこれあり候につき右ふき板諸人借り小屋に相用い候事。
一、同八日次第に静まり小ユリ一刻に四、五度ばかり。同日より網遣い始めアジ、小勝魚、カマス少々取り候事。
一、同九日、右同断。日の出頃より雨降り出し晩方止む。野根山は大雪。押野山白く雪見え。
一、同十日、昼夜二十四、五度ばかりになる。
一、同十一日、十二日、十三日右同断。
一、同十四日、小ユリ十四、五度ばかりになり、同日まで人家取繕い七八分通り相済み過半帰宅す。
一、同十五日、右同断。追々諸人帰宅す。
一、同十六日、五ツ頃（九時）より雨降り出し同七ツ頃（十七時）止む。野根山大雪。押野山まで積む。同日、日入り頃より六ツ半（廿時）頃迄三度計り爾来より太くゆる。日の暮より俄に西南風、浪立ち海中鳴る。右に恐れ諸人元の如く永徳寺辺え逃げ小屋を立つ。五ツ頃（廿一時）より大風になり小屋夫々吹きまくられ諸人大いに迷惑す。
一、同十七日、浪も静まる。九ツ頃（十三時）霰少々降る。
一、同十八日、小ユリ昼夜八、九度ばかり。
一、同十九日、右同断。
一、同二十日、次第にユリも静まる。男は過半帰宅す。老婦人、子供等は小屋に居り帰らざる事
一、同廿一日、廿二日右同断。
一、同廿三日、四ツ頃（十一時）爾来より太くゆる。同夜五ツ半頃（廿二時）右同断。同七ツ頃（廿四日五時）右同断、〇〇より此頃まで震動すること一昼夜に十度ばかり。
一、同廿四日、小ユリ昼夜六、七度計り。仝夜九ツ頃（廿五日一時）より雨降り出す。
一、同廿五日、大浪立ち大風大雨。九ツ頃（十三時）より大洪水。実に中々右様の事は浦中老人共相覚えずと申す事にて諸人大いに恐る。浪は浜八九合計り、ホウノ木の際まで上る。水は堤八九合の出水。〇〇〇〇〇八ツ頃（十五時）までは北東風、八ツより西南風になり、六ツ時（十九時）より風雨共止み、浪静まる。翌廿六日四ツ時（十一時）より天気になる。
付たり。廿五日八ツ頃（十五時）鴨田の堤切れ候由、諸人申候につき、中村地下人共牛馬引き山根え逃げ夜分は永徳寺、御馬家等に集る。
一、同廿六日、昼夜小震七、八度計り。同日四ツ頃（十一時）天気晴る。廿五日の風雨にては永徳寺辺の小屋屋根吹きさかれ下は水田の如く相成り諸人大いに迷惑す。過半永徳寺に逃げ込む。廿六日は九分通り帰宅す。同日より人気相直り諸人渡世初め所々流し初む。
一、同廿七日、昼夜小震四、五度計り。
一、同廿八日、右同断。同日船積初む。半蔵船壱隻、長右エ門船壱隻ノ〆て弐隻積み。
一、同廿九日、右同断。友三郎船、寿三郎船、政次船、藤助船荷積み。此節人家繕作事、船作事等に大工行届き申さず。浦中大工廿三人他支配働き指留め毎夜配合遣はす。
一、十二月朔日、二日、右同断。
一、同三日昼夜二、三度ばかりゆる。
一、同四日晩より同五日昼頃まで五、六度ゆる。中に二、三度案外長くゆる。一同恐る。

一、同六日、七日昼夜小震三、四度ばかり。
一、同十日まで右同断。但し赤岡辺より御城下（高知）までは九日大震と申す事。
一、同十一日、十二日昼夜四、五度ばかり。
一、同十三日、夜五ツ頃（廿一時）三、四度一時計りにゆる。〇〇〇〇。
一、同十四日、九ツ頃（十三時）より雨降り出す。同夜八ツ頃（十五日三時）大震。同時より天気になる。
一、同十五日、十六日共少々雪降る。小震昼夜三、四度ばかり。
一、同十六日、右同断。
一、同十七日朝夜明け頃二度ゆる。
一、同十八日、十九日、右同断。
一、同廿日より廿六日まで小震昼夜一、二度宛。
一、同廿七日、廿八日、廿九日、小震昼夜四、五度計り。
一、同卅日、朝五ツ頃（九時）中震。同日四、五度ゆる。
一、同日安政元年と改年の御触れ（達示）来る。大風。同日御城下は大震の由。
一、安政二年
正月朔日、大風。小震一度ばかり。
他村の模様
一、庄屋初め浦人三拾軒ばかり流失　以布利
一、流失五十軒ばかり　大崎村
一、在所残らず流失　久〇〇村
一、流失弐百五十軒ばかり　下ノ芳浦
但浦分残らず流失。死人これあり。廻船市艇六隻ばかり壱〇〇奥ノ〇イツタ坂の下迄流れゆく。
一、在所半分ばかり流失　布浦
一、同残らず潰家。死人わからず　下田浦
但青砂島の女四十人計り廻船に乗り其儘沖へ流れ行く。未だ相分り申さず。同浦庄屋妹も同断。
一、参百軒余焼失　中村町
一、山汐、大雪　江ノ村
一、過半潰家、大雪深さ四尺位　具同村
一、在所残らず潰家　松尾浦
〆此外未だわからず。
一、幡多郡足摺山と布山と臼碆山と三カ処より黒煙飛出し、右三カ処の煙一カ処に相成り足摺山沖拾一里ばかり向うえ黒煙相立ち次第次第に薄く相成り実の海上宮の形に相残り候事近々辺の者見奉るとあり。上川口辺より足摺山を見渡し候処右御山中の処々に燈明上り居り候由、見奉るもの諸人胆を消し神国霊山の有り難きを感じ候由、同郡伊佐浦浪人武山命助より申来候処を記す。
付たり。足摺山は度々珍事これある由。年々ミソカの夜龍燈上り候由爾来承り候処、此度の義も龍燈にてこれあるべく候哉。
一、嘉永七寅年十二月廿四日夜御城下北山に火柱建ち諸人大いに恐る。其時天文者より少将様（藩主）え申上候に大地震の後は火気の発する故に火柱立つ事あり、既に宝永四年十月四日大地震の後も火柱立ち候事筆記にこれある段申上候より諸人伝え聞き心を安んず。
一、同年九月頃京都に光り物出る事度々。将門塚鳴り諸人天変を恐る。
折柄右の大変に及びたりと。
〔同　書〕
野根の損害高につきては浦だけの記録あり
一、家高弐百五十弐軒　潰家
右之内　大傷
弐十五軒　少々傷
百五軒
百弐十弐軒
一、土蔵四拾七軒
右之内

九軒　潰家
十六軒　大傷
弐十弐軒　少々傷

一、納屋百軒
右之内
七軒　潰家
拾弐軒　大傷
弐軒　少々傷
七十九軒　無傷

一、雪隠弐百弐十五軒
右之内
参十軒　潰家
拾四軒　大傷
四十三軒　少々傷
百三十八軒　無傷

一、寺三宇、来迎寺、永徳寺、浄念寺。
但本堂始庫裏並に納屋、雪隠共傷御坐なく候。

外に郷人共浦住居仕居候へ共郷分より御届仕と存じ候に付取除申候。

寅十一月廿日

安岡時次
岡直五郎

御郡司以下役所

〔宇佐町荻谷碑文〕

※『　南無阿彌陀佛

安政元甲寅歳十一月五日申の刻大地震日入前より津浪大に溢れ速こと八九度人家漂流残る家僅六七十軒溺死の男女宇佐福島を合て七十余人なりき都て宇佐の地勢は前高く後低く東は岩崎西は福島の低みより汐先逃路を取巻故昔宝永の変にも油断の者夥敷流死の由今度もその遺談を信じ取あへず山手へ逃登る者皆恙なく衣食等調度し又は狼狽て船にのりなどせるは流死の数を免れず可哀哉其翌日は御倉開けで御救米頂戴し凍餓に至るものなく誠に難有御仁澤下りければ後代の変に逢ふ人必用意なくとも、早く山の平なる傍に岩なき所を択びて逃よかし且流失の家材衣服等を拾ひ得し人暫時の内福に似たれども間もなく流行の悪病に染み悉皆なくなりしを眼前見聞したると告げ残し殊に両度溺死の人の菩提を弔ん為にと衆議して此碑を立てるものと云爾

安政丁巳十一月

西村畊助識
緑屋傳平
久市屋菊右衛門
梶和屋源次郎』（Ⅳ－355）

〔安政大地震日記〕〈「雑切抜帳八」（大正11年刊）所収〉

予一日憲政会高知支部にて知人島崎濟氏に面会す氏は懐中せる一小写本を視さる披き見れば一個の日記にして其の一節に今を去る七十ケ年前、本市に起りし大震災の状況を実見の儘に筆記せる壬寅歳処治録と題せる一小冊子なり、予は大に喜び直に持ち帰りて之を熟読せしに同記は島崎氏の祖父医師洋庵の遺記なり、洋庵は初め耕雲と称し山内昇之助の騎馬田ノ内左伝次の弟にて出て長岡郡篠原村の医師島崎吉右衛門の家を継ぎ其の世業に従ひ後本市に移り廿代町に住す、（今豪商桜屋の前隣）壮年の頃長崎港（当時日本唯一の開港場）に遊学し和蘭人に就き深く其の医術を学び技大に進む、帰国の後不世出の名君山内容堂公の選抜を以て公の御側医となる、洋庵は公の命名により改名せるものにて洋庵と大書し武陵罪人と署名せる公真筆の扁額は恰も公が徳川幕府の忌諱に触れて東京品川の別邸に名誉の蟄居を命ぜられたる際の恩賜品にして今尚島崎家に保存せらる余も一見の光栄を有せり、洋庵の一女隣（濟氏の母堂）も公の命名によりて敏と改名し英国製の皿鉢一組外種々の拝領品あり以

て如何に公の信頼ありしを知るべし予は本記によりて当時大震災の梗概を詳にせしより時節柄之を読者諸氏に紹介するを得たるは全く洋庵の遺愛と島崎氏の芳志に基くなり、爰に其の顛末を書して緒言となし洋庵の事歴功績は他日を期して詳記し世に紹介する事あるべし（森下高茂記）

壬寅歳処治録

嘉永七甲寅の年十一月四日即ち己巳冬至後の第一日（同年安政改元せるを以て世に安政の大地震と云ふ）早朝辰後（午前八時）天神橋（旧大橋）の東片町田村玄濬を訪ふ、面談中に俄に大地震動と共に樹木の撼揺するを見る平常に比して頗る激し去つて唐人町寺尾庄助の病を診す宿疾の尿閉前日再発加底的児を施す病症軽快、夫れより菜園場町を東に過ぐ途中一男子云ふ今暁の満潮は平日よりは非常に高く今は又引潮時、五つ（六時）の干潮なるに頓に溯り来ると、衆人之を聞き走り行きて其の潮状を見て奇異の念を生ず、路を転じて新町田淵島村団六妻の病を診す此の時家僕岩次来り伝ふ井水俄に減少し且つ混濁すと互に奇を談じて別る、新町中の病気を巡診するに潮水の状況を見て人々或は怖るべき変異なりとし或は決して驚くべき事にあらずと笑ふ、午の刻（午前十二時）前に家に帰る同夜九つ時（午後十二時）に至りて遅く食事に就きしに此時再び震動す、家婢お松側に給事せるに地震に驚き壁に掛けある紡車（当時の習俗各家にありし木綿車）を取り卸すべしと云ふ、同夜七つ時（翌五日の午前四時）亦震動す而も軽微なり去月以来は降雨少く且つ寒威平年より微なり

同五日庚午申（午後三時）配剤は終て蓮池町二丁目南横町楠木屋某当年六十一歳を往診す既に三日尿閉を患ひ衆医手を束ね予は亦た加底的児を施す、術終つて器を外管螺旋蓋に納めんとする時に突然として空中響鳴すると共に大地の震動頗す激甚予は思はず前に顛伏す、螺旋管の蓋を捨て急遽左手に刀剣を執り右手に測胞子及煙管を携へ席を起たんとして亦忽ち顛倒す、此際病室の東口崩れ落ち彼の妻女も周章て其の病夫を抱き起すを見たり予狼狽戸外に駈け出で其の所にある柱に抱き附く殺那西側にありし土蔵崩壊して土煙りは空中に飛散し天地曇暗咫尺を弁ぜず、佇立須臾にして北方に逃げんとすれば其の隣家なる岩村屋新兵衛の二階西に向ひて崩れ倒る其の壊家の上を越して北に走る、一婦人あり破壊せる家屋の材木に圧せられて仰ぎ顛れ悲鳴を上ぐるを見たるも救助する暇なかりしは愁ふべく悲しむべし、漸く四辻に出てたるも散乱せる崩家の木材堆積して西又は北に進む能はず将棋倒しの如くに潰破せる家屋の上を斜に東北に走りて山田町の中程に至れば北側に板塀ありて其の破れ穴より一少女の走り去るを見る、其の後を追ひ匍匐して廿代町の或る家に至る（誰の家なるを知らず）其の風囲を蹴破ぶりて街路に出で直に西に折れて神明社前に達す（当時神明社の境内は広濶なりし）初めて稍や安心す

神明以西も悉く家屋倒潰しあれば其の梁桁の入り乱れたる間を飛び過ぎ乗り越へて西自宅に向ひて疾走す、同町の東角にも倒れ家に圧せられたるものありて衆人来り集まりて救ひ出さんとするを見る又一少女の顔面に数ケ所に打撲傷を負ひて鮮血の淋漓たるを見しも療治を加ふる暇なし漸くにし自宅に帰着す

帰り見れば二階建は東北に向ひて門と共に倒潰しあるも老少婦女悉く微傷を負ふも打ち揃ふて庭前にあり、是を見て心神大に安し唯だ家勢尚逸、塾生壬生常彌、野村元治、岡田台次郎四人の居らざるを怪しみ之を家人に質せば此日上の川原に荒神祭りの大相撲ありて彼等打ち連立て見物に行きしと同塾生小牧誠斎は数日前に仏事の為に帰省して居らざりしは、幸なり少時にし四人帰り来りて互に無事を祝し大変を語る、彼等此日常の如くに塾舎にあれば其の二階建の倒潰と共に圧死を免れざるべきに荒神祭相撲の為に生命を全ふするを得たり、予は戸板二枚を取り来りて菜園に敷き蒲団を並べ之に坐せしめ又急に食事を取らせ衣服を改めしむ、此時に当りて市中数ケ所に火を失し猛火黒煙空中に渦巻き上るも素より一人の消防に意を用ゆるものある筈なく火勢益々暴威を逞ふし忽ちにして堀川以北は悉く火煙の街となりし、折柄又潮水大に増し来り諸堀川に溢れ堤防を越して各人家を浸害するありて衆人皆震水火の三大災難に襲はれ悲鳴叫喚の声四方に聞ゆ、予は老少をして其の災難を小高坂山に避

けしめんと岡田生をして之を保護せしめて出立せしむ、此時同苗の長甥耕吉走せ来り尚逸と共に七十八歳なる老母の手を取りて西横町に導き出して岡田生と小高坂に至らしめ耕吉は直に役所に出勤し尚逸は家に引き返す

予は尚逸、常彌、下婢と共に家に在りて家財を舁ぎ或は担ひ又は堀り出し菜園畑に畳集して後下婢をして精米衣服を携へ小高坂山に至らしむ、此時居屋及び宝蔵南に傾き亦た庇崩れ落ち薄暮に至りて震動尚止まず、堀川は潮水滔々として溯り来りて人家を浸し猛火は炎々として四方に拡がり一天紅赭暗夜を輝して人顔を弁ずるに至る帯屋町下一丁追手門筋下一丁、北与力町、永国寺町下一丁、大川淵、水関の西より八軒町辺は潮流の為に畳、箪笥等夥しく流れ来り小舟を以て往来す、海魚も潮水に随ひて溯り来り神明宮の少しく西溝堀に長さ二尺許なる、鱶の死せるを見たり、廿代町二丁目半より西横町及び与力町北角より北の橋までは汐上らざりしと

衆人は思ひ思ひに城門に走るあり山村に避るあり附近の堤藪に入るあり南川原に懸るあり何れも家財荷物を送る（川原に送りし物品は悉く水の為に流失す）更に又四方の親戚を便りて離散する人あり家屋塀籬の為に圧せられて半死半生の人もあれば亦為に即死せるものもあり逃げ路を失ひ或は倒潰の木材に手足を絡まれて脱出する能はず焼死する人もあり、遭難の状悲惨の様言語筆紙の表現する能はざる所なり同夜戌後（午後八時頃）尚逸、常彌と共に蒲団、衣服を携へ本家田の内家（尾戸小川淵に住す）の安否を訪ひ夕食を終へて小高坂山に至り親戚衆庶と一団となりて夜を徹す此地は震動他に比して頗る軽微なり、又震動の前に南方加亜加亜の声音蛙鳴の如きを聞くこと三四回なり、深夜の東天紅色を呈し且つ数々爆声を発す其の夜は一同寒を侵し霜を戴き暁に至る大凡大震一次（初度）中震四次小震数知れず四更の頃に当りて藤井某氏の高老突然腹痛を発し敗血を吐く緩和済を与ふ少時にして治す此際熱湯及び薬袋なし手帛に包み冷水にて振出す

同六日暁親戚皆々霜を踏み山を下り田の内家に至りて朝食を取る常彌を

して澤田忠蔵の安否を訪はしむ忠蔵の妻は予が姑又常彌の母にて不幸の身此家に再嫁する者なり男子等三人打ち連て自宅に立ち帰り見れば居家は三分一婢屋、浴室、水室、便所悉く焼け矢せ火煙尚存す常彌尚逸の両人水を汲みて之に注ぎ消す、前日菜園に出す所の家財を櫻屋北隣の庭に送る同所は広濶なりしによる、此時元治来りて取り片附けを手助す暫時にして父母の安否を気遣ひ帰村するとて立ち去る、三人共に櫻屋にて午食の粥を啜る同家の宝蔵前夜の四つ（午後十時）焼失し一品も出す能はず、此の日晴朗一天雲なく温暖なること前日の如し唯だ少しく西南の風あり、溯潮、類焼、震動尚止まず人々津浪の襲来を怖る四つ時（午前十時）強震あり家族再び小高坂山に至り翌暁に及びて自宅に帰る此日より尾戸井上某氏の堤藪中に仮己家を造りて之に滞留す

廿代町にては北方堤防の低下なる所、小川の水潮水と相通ずること前日の如し、八つ時（午後二時）に至り火煙の中に径一尺五寸許りの火柱三個空中高く建つるを見る夜に入りては火勢大に衰ふるも尚明月の如し、三人は桜屋の空庭にありて夕飯の粥を啜る深更二人の壮者は疲労睡眠を貪るも予は徹宵財貨を監護す夜半に及びて天曇りて雨を催す中震、小震終始絶へず

前日来猛火の為に焼失ひたる町々及び其の焼残りの箇所大略左記の如し詳細は後日に譲る

廿代町北側桜屋鹿蔵宅其の南側居家半焼、物置、湯殿、雪隠、水屋、土蔵、焼失以北は焼残る蓮池町北側御酒屋安平宅（現時森徳蔵氏方）土蔵一個焼失、其の南側櫃屋彦右衛門宅半焼以西は焼け残る、御町会所は使者屋橋と共に残存以南火災を受けず、京町、細工町、種崎町、菜園場町、播磨屋町、紺屋町、魚棚町、材木町、新堀町、新市町、蓮池町、山田町等は悉く焼失ふ、牢の町東半より牢屋山田町は新築羽根橋まで焼残る、中新町三丁目西横町東南角より辰巳の方角に向ひて焼け拡がり南新町三丁目半。柳原真流寺より田淵四丁目に至る其の東は各々焼残る、夫れより南に渡り農人町前後の上の丁半より東方残る、菜園橋、幡多口橋、材木丁橋、二個、新市町橋、播磨屋橋は焼け落つ、浦戸町同片町半より朝

倉町下一町北側まで及び納屋堀町全部焼失し御米倉残る
同七日曇天櫻屋にて三人朝食の馳走を受け麦味噌の汁を食ふ味頗る美なり五つ時（午前八時）より雨降り初め四つ時（午前十時）に大震動ありしも五日の如くに激甚ならず居家の庇崩れ落つ、隣家の左官亀介の居家も亦南に崩れ前日来持ち出したる貨財荷物を運びて半焼の居家に積む。午後（一時頃）雨具及び精米を携へて尾戸田ノ内家に至り植田作次郎と午食を共にす、此日御注進の御飛脚江戸表に向つて出発すと云ふ、植田御奉行方祐筆を勤め居る人なり中後（午後五時頃）十楽寺の裏堤防上に己屋を造り仮居せる樽屋源平其の愛児危篤なりとて来り迎ふ、往て診するに一昨日の大変に家材の為に圧打され、七竅出血、両眼昏脈、搏混濁且つ沈細、治すべからず通□飲二帖与ふ、又大工重兵衛来り姪中打撲傷を負ふ来診を乞ふと、行き見れば半戸を以て庇となし狭隘にして坐する能はず尚逸と共に敗輿を庭前に置き輿中にあつて消炊敷剤を与へて帰る、此日も震動溯潮前日の如く日没頃に少しく風あり所々焼残りの煙火尚全く滅せず同夜も家財を監護す夜半頗る空腹を感じ甘藷を焼て共に食す
同八日雨歇むも温暖にて快晴ならず五つ半（午前九時）池田大助の大変以来の愁傷に依りて脳性胃痛嘔吐を患へ自ら来りて診を請ふ其の妻女も亦従ひ来る格綸煉丸を与へ亦余飯を饗す、家甥手づから一昨日の焙米を以て雑炊を煮て朝食とす味甚だ美なり予笑ふて汝が初めての炊事上々の手際なりと一坐初めて微笑を漏らす、午前（午前十一時頃）入交氏の婢来る雇ふて以て我家の焙米を炊かしめ家甥も亦鶏卵に葱根を混じたる美を煮て副食として午飯を食す美味更に云ふべがらず、水室に焼残りの柱二本を存す別に亦二本の焼柱を持ち来り之を補足し戸板を蓋となし残敗の板を壁となし更に半焼けの畳を敷き亦巻席を展べて仮の居所となす、戸板島村の克蔵即ち旧婢小枝の父、蕎麦粉を持ち来る折□婢田の内家より帰り居り、以て雑炊を煮る、予は家用を勤め又再び田ノ内家を訪ふ此日潮水、震動、火煙、前日の如く夜分初めて甥と共に水室に就寝す
同九日曇微く温暖なり一竈を水室の北に建造す過る四日に炊く所の硬飯を取り粉土を洗ひ去り炊き直して朝食とし門辺に散乱せる瓦を取り集め積む、婢復た田ノ内家より帰り来りて午食の美の炊く、午後一時頃井口村泰平懇切に傭夫三人を従へ鍬を携へ来りて崩家の焼け木を片附く哺時亦た熔米の雑炊を煮て共に之を啜る、夕刻に至り傭夫は明日の再来を約して帰り去る昨日より震動漸く軽微となり燃焼も亦た大々減するも潮水のみは依然として高し此夜も、婢と水室に就寝す本日初めて金子橋辺に生魚の市ありと聞く
同十日寒且つ風あり常彌及び婢帰りくる前の日の傭夫三人も約束を違へず来りて己が家を建造す、下田屋彌久次其貯ふる所の干鰯十個宛を町内に配る震潮共に前日に同じ此夜四人初めて己家に同宿す、夏以来家に貯ふ茶俵梁上に□きしに五日の大変に類焼半焼となりし者水に浸潤して所所に散乱す婢をしてこれを拾ひ集め其の汚土を取り除かしめ日光に乾す又精米に混入せる土沙を取り去らしむ
十一日寒風前日の如し傭夫四人来りて東境の塀籬を作る耕吉も亦来りて助く夜に入りて家族悉く帰り来り唯だ老母一人は尚田ノ内家に残り居る、震潮前日の如く此日桝形及び上町辺は所々の街頭にて諸品を売ると聞く（爾後数日特異の記事なく略す）
同廿五日快晴ならず日暮益々曇りて波音次第に高し夜九つ（午後十二時）雨となり八つ時（翌日午前二時）頃に至りて雨は頻り潮は増して己家大に漏る、席を取り除けて一同部屋に移り就寝す此日佐古村の十平来りて北口を直す晩景梅之助は出て谷氏に宿る
同廿六日五つ時（午前八時）頃浪音高く聞へ黒雲西天に向ひて飛ぶ雷鳴り風起り降雨亦甚だしくて寒気更に激しく己家の屋根雨大に漏る、戸板を並べ竹木を蔽ひて之を防止す午後（午後一時）に至りて寒威倍々加はり火炉を擁し熱飯を食して寒を凌ぐ、此日潮水大に増し七軒町辺は石垣を越へ堤を浸して水面小川と復通ず此町も東より多後院旅宿まで潮水来る西町へは及ばざるも追手筋弘小路まで浸水す庶人恐れて西に走るもの多しと五日以来の大潮なり震尚止まず今朝梅之助潮を恐れて走り来る日暮雨止み夜半晴天となるも浪音は高く己家の床下雨水大に来り再たび根

太を高くす（以下数十日に渉るも繁を厭ひて之を略す）

右は当時の名医島崎洋庵老国手の日記中より抜萃せる者なり素より未曽有の大変災に遭遇中に手記せる記事なれば誤聞誤記もあるべく記載文字の間違も多かるべきは寧ろ当然の事なるべし予は事実は其の儘にして文字の読み難き所は少しく之を補足して世に紹介す我紙愛読の各位幸に之を諒せよ（森下高茂）

〔南海大震災誌〕

白田川村伊田の松山寺の麓にある安政大地震の碑

白田川村伊田の松山寺の麓に碑がある。風雨に晒されて、今では碑文が消えて読めなくなつている。しかしこの地にも津浪が来たことは事実である。この碑に残る碑文の一部に「一里以上沖に船を出したら津浪には安全である」との事をしるされてある。

市仁井田十津中山の鼻の安政大地震の供養搭

高知市仁井田十津中山の鼻に、安政の大地震の折り津浪のため死体が沢山流れて来て、其の場所に埋葬し南妙の文字をきざみ搭が建てられている。

安政の大地震と古老の実話（須崎町にて）

曰く、安政の大地震のあつた其の日は天気は良く、今も変らぬ正月の相撲気分で、朝から須崎の浜で蛭子相撲があつて、近郷近在から出て来た見物人で浜は黒山のようでした。夕方になつて相撲は首尾よく済んで優勝した力士は最負の若者等とともに大関大関と町を練つて家に帰つて来て、盛んに酒宴を催して居た。日も暮れかゝつたので皆夕食の準備をして居た。所謂黄昏の時分でした。突如大地震となつた。酒どころではない。そら地震だというので皆戸外へ飛び出した。見る見る大きな建物は次ぎ次ぎに倒れて行つた。然し人は皆津浪の来るのを恐れたが格別の事もないようでした。地震は漸く済んで日も全く暮れた。その時何処で云うともなしに空の方から大声で潮が入るぞ潮が入るぞと人の叫び声が聞えて来た。ソラ津浪が来ると云うので皆衣類や食糧等を抱えて城山へ逃げた。

地割れの所は雨戸をしいて通つた。やがて津浪は物凄い音をしてゴウゴウと押し寄せて来た。

八幡宮の社内は潮が来なかつた。然し堀川の橋は全部落ちてしまつた。町の東の方は家も船も皆流れてしまつた。勿論人も沢山死んだ。我は地震が済んでも毎日毎晩小揺がするので恐しくて一週間ばかり山に居たが、家のある人は地震の間に間に走つて来ては鍋釜等の日用品を取つて来て山で暮して居た。

なお古老の云い伝えによれば

一、大地震の時角谷の沖へ大きな火柱が立つた

二、大地震後必ず津浪が来るが、其の津浪は地震後直ぐ来るものではない。ゆつくり飯を炊くだけの余裕はあるからあわてず落付いて充分の用意をして、避難せよと云つている。

三、大地震の後で夜空に何処で云うとなしに大声で津浪が入るゾウー、とくり返し叫びましたのは実に不思議であるが、其叫び声が須崎中は勿論、近郷近在は元より、遠く斗賀野村方面まで同じ様に聞え渡つたという。

清水町蓮光寺の石段まで津浪が押し寄せた言い伝え

清水町へ安政の大地震のときの津浪は同地の蓮光寺の石段の三段目まで浪先が来たと云われているから、相当大きかつたと伝えられている。

上ノ加江町の古老の言い伝え

（イ）大変の時避難するには中山へ中山へといけ。

これは津浪に対する警告であるが、宇佐、須崎の土着のもので、古老の言に従つた者は皆事無きを得た。

（ロ）大変の後にはくれくれも第一に、井戸と便所に気をつけよ。

此れは伝染病予防上の警告で良教訓である。

三和村の古老の言

安政の地震と津浪について

古老の言によると『霜月八日黄昏から夜にかけての強震、村人は地裂

を恐れ、津浪を怖れて、もよりの山へ藪の中へ避難した。

物部川の川口から押し寄せた高潮は、浜改田の北側にドツトせまり里改田を洗い片山との村境まで迫つた。

村の大半は凄い海、沖合から流された舟は丸池の地蔵に激突したのもあり、中にはそれで命を失つた船人もある。余震旬日にわたり、その度毎に海水は襲つた。避難民が山に藪に小屋掛してくらし、人馬諸共の避難生活がつゞいた恐怖のあまり永い者は二十余日に及んだ』と。

『干潮の際は切戸の決かいで津浪の被害は少なく、地震のために所々に大きな地裂を生じた』

との事である。しかし被害の程度は不明である。

虚空蔵山の光岩の伝説

この光岩は安政の大地震で裂けたのだが、今回の南海大地震の時も頂上の大光岩が南側に転げ落ち虚空蔵山が真二つになつたと、村人に不安な話題を投げたこともあつた。

〔土佐寺院誌〕〈竹崎五郎著、昭7〉

発生寺　須崎町字鍛冶町

隆は勤王の外慈善の心に富み、浦人を勧化し、堕胎、圧死等の弊風を矯め、又安政地震の記念碑を池ノ内池の傍に建て（古屋竹原撰文）地震の心得を後民に諭して末世の鑑戒に供す等その功績莫大である。

〔勤王秘史・佐々木老侯昔日談〕〈津田茂麿編、大4〉

諸国並土佐の大地震――公の告諭書

十一月四日 安政元年 自分は山鹿流の操練で早朝から巣鴨へ行つて夕方帰つて見ると辰の刻強震があつて日比谷の御邸は所々壁などが落ちて居る。留守の者が大に驚いて種々其の模様を話した。南部侯の長屋は大分破損した様子花川戸からは出火して三芝居其の外餘程焼失すると云ふ始末。

一体此年 安政元年 は頗る地震の多かつた年で同日に遠州、駿州、豆州等に大地震があり海嘯があつて人畜の死傷も非常な者であつたさうだ。翌日中国筋から大阪四国へかけて大地震があつたが就中土佐が別てエラかつたとの事だ。併し其の当座は噂のみでどれ位であつたやら分らない。たゞ江戸詰の面々共相会すると皆留守の事を心配して居つたが漸く確報を得て安心致した。自分の留守宅永国寺町は大破に及んで住居が出来ぬ。ことにツナミが屋敷へ押入るといふ次第で已むなく屋敷の北側の土手の竹籔に仮居して居る旨を申越した。何に致せ此の時の地震は山内氏入国以来の珍事宝永以来の大変であつたさうで後にその光景を聞くと実に酸鼻を極め城下の如きも家屋の倒潰人畜の死傷算なく或は海潮の浸入あり或は火災の起るあり其の他の損害実に多大なものであつたのである。さういふ様な訳であつたから国許では大騒動。そこで太守公には御交代の時期には早いけれども御帰国になつて諸般の所置をせんければならんと云ふので幕府へ其の手続に及ばれた。が取あへず御親書を国許へ御送りになり執政以下の有司に示された。

先日国許大震ニ付此儘因循致居候ハヾ国家累卵ノ危ニ可至因テ御暇之儀願置候。帰国ノ上屹度可致省略乍去方天下ノ形勢文武ヲ以テ志気ヲ培養致候儀一日モ廃シガタク然バ手許ヲ始メ冗費ヲ省キイヅレモ非常ノ覚悟肝要ニ存候。

寅十一月廿六日

翌年 安政二年 正月十七日豊信公は江戸御発駕で二月十四日恙なく御帰国となつた。公は此度の天変に人心の動きたるに依つて一藩の士気を刷新し人心を和合さするには此の機会に過ぐる時はないことを看破せられた。どうも世が六ケ敷なつてくると何時の世でも党派が出来て互に中傷を仕合ふ。別して土佐等は人気がさういふ風の処へ太平の後急激の改革をせられたものだから猶更新旧両派の軋轢がひどい。少しの過失でもあると攻撃する。又当局者のやり口も面白くない処もある。所謂口耳相属するといふ有様。そこで公は二月二十三日諸士一統を城下三ノ丸に召し其の御意見を祐筆役をして読聞かしめられた。

昨年ノ天変ハ宝永以来ノ事国許ハ別テ海溢ノ災甚敷当時海防ノ初諸

事物入ノ折柄又々莫大ノ費用相加リ当惑ノ至リニ候因テ当年ヨリ年限相立厳略致シ候災禍ノ至候ハ所謂天数ニテ可有之候得共我等ヲ初執レモノ天譴ト相心得屹度令憤発万一ノ節不覚悟無之様転禍為福ノ深慮肝要ニ候

〔嘉永土佐地震記〕〈県図、K 453－10、田岡文庫、本文書の解読には、宇佐美龍夫教授のご支援をうけたが決し難い個所も少なからず残っている。本文書後半は翌年の江戸地震暴風の描写に及ぶが切りはなすことなくここに原文通り掲載する〉

嘉永七甲寅十一月五日

安政ト記元

地震記

國枝清貞君嘉永の地震の事を書集めて一巻とし附するに六七年間之事を漏さす記して見せられし後去年の江戸の喧嘩を記し己ニ見よと贈られしをかき志るし置しに去年の度君思ひかけす身まかられぬこたびその巻を返すとき彼喧嘩の記を巻末にとち添て贈りぬるは元請貞君之賜ハりし記なれハなり文久元年辛酉八月丹羽長宜識

一嘉永七寅十一月五日大地震是日天清朗として暖也日色赤が如し前四日五時過頃地震少也尤所ニよりてハ余程震由須崎浦江潮入来り御船倉ひたり候旨四日之夜池弥四郎より申来る今五日申中刻過大地震フ事一刻時辰を過宝永之旧記ヲ案スルニ茶四五服ノ間震と有り長短大抵同シカルヘシ左川御土居諸所之塀崩レ落チ長局ノ屋根崩レ込ミ北之御蔵辺地裂ケ御蔵之白壁尽く落チ二ノ御門辺も地裂ル御土居之諸役人取物モ取不敢御新宅江出勤上之御安否を奉伺上々様御機嫌能被遊御座御新宅御裏庭江御座被為成俄ニ仮之御己屋作事方江手筈ニ相及夜ニ入り度々地震フ初度ニ比スレハ皆少ナリ詰懸り之御役人ハ不及申諸士追々出勤致御安否ヲ奉伺諸士ハ一旦相仕敷御役人ハ不残終夜御客屋下江借り已屋為建相詰る同夜五時八歩又強震フ霜大ニ降寒気強し

一景粛宮幷青源寺御廟為見分不取敢御勘定方御作事頭取兼勤ニテ田村庫太立越ス

景粛宮御傷之無之御廟ハ御石碑過半地ニ倒ル

一御城下之事如何可有と思フ処夜ニ入ル頃より東之雲赤クシテ火事ト覚敷初ハ加茂岩目地村歟又ハ波川伊野辺ナリシト評議取ニナリ深夜ニ至り火光益甚しク東天都テ赤色トナル諸人皆高智之大火事なるへしと云夜八時頃又強震フ同夜御手許より高府江御飛脚被差立追々御騎馬川村次平御使者被仰付発足ス御城之一左右ニより鼎様御出府可被遊御用意有之宝永之例ニよるナリ

十一月六日晴

一今日も度々地震フ夜前より今朝迄凡四五拾辺程震フ今暁御勘定方山崎愛蔵御用人土井大丞御先達ニ出府同暁七ツ時旦那様御出府被遊今暁ニ到りても東天火光少しも不消夜明るに従ひて火光ハ見江されとも鋭して雲赤色を帯ヒ東方紫色を含が如し一同高府より之一左右を待てとも昼を過晩景ニ及べども曽て無音信皆々案し煩フ折柄川村次平帰宿之旨相聞江御月番役深尾休左衛門より使を立テ急々出勤之旨申達ス無程次平出勤仮已屋之中にて御城下之次第申述る地震左川より甚敷思案橋より御城下之間土屋鋪町家所々一軒も不傷処無之顚倒ス御城内角矢倉を始破壊之場所多く御屋鋪も同様大破之趣弁舌水之流るゝが如し聞者驚歎せさるはなし

少将様若殿様ニは御城内桜山江御立退被遊御連枝様ハ北之御射場ニ被成御座候由御城ヨリ上町之分は地震而已ニて大難にかゝりたる迄の事なれバまだしもの事なり下町ハ地震動くと間もなく京町播磨屋町より火起下地迄不残焼通り津波うつまき来り堀詰を越して本町三丁目ニ及フ前代未聞之事ともなり右川村次平申口是高智より御左右初て慥ニ聞也次平義於伊野村旦那様江御行逢申趣也依之御仕置役桑原恭蔵御作事奉行被仰付御勘定方森岡友右衛門御作事方加り片岡九右衛門加納孫十郎大工左官召連出府也同日晩景須崎浦池弥四郎より飛脚来る右浦江も大汐入り御舟ハ不残人家過半流没ス御水主共即餓之旨申越ス即夜御用人加り安原男内被差向救方手筈ニ相及昨日川村次平未タ帰宿不致内高智之御左右聞ん為飛脚壱人差立候得共不帰依之御用人加り小村善次安部熊之助門田勇蔵立辺敬吉差立る但御屋敷内ニ御用も可有之ニ付御用相弁様申含差立る也

十一月七日朝雨メ晴

一地震今ニ不休五日之日多之郷新田為見分門田衛門七立越処未帰り之左右不聞一同気遣候処今日罷帰る参り懸唐岩ニて地震ニ逢候由夥敷岩落かゝる趣之処大岩之陰ニ隠れて難をさくるよし夫より多之郷江立越見合候処新田ハ海底と相成空敷罷帰る旨申出る夜前迄一時一睡も不致相詰る処寒気強皆々労レ夜半過より仮已屋ニて枕をかたふける暁七時頃前記御用人四人共罷帰り高智之模様申出る川村次平申口と同断ニ付略ス旦那様ニは御屋鋪御傷ニ付朝倉江御立退被遊御宿陳被遊趣尤七時之御供揃を以御帰在之旨申来り其旨入御聴也今日は惣分穏ニ相成故一同仮已己屋を出御本家役席ニ相詰御用向被斗ニ相及処新御屋敷より雨天之節ハ大震有之故被仰出趣相聞江役席を退キ御用之間戸之口江一同相詰居候処四ツ時大ニ震依之又々仮已屋江相詰る右御屋鋪より被仰出候義ハ跡形も無之事なりと天ニ無口人を以今言なるへし

旦那様四半時頃御機嫌宜御帰在被遊恐悦申上る御領内所々より潰家怪我人等届出る当夜初夜之頃何となく世上騒かしく呼声致ニ付人皆火事を畏る時節ニ付如何と承り合する処潮入来ると呼声致スト斉く四ケ村所々之山々峯々火ならすと言所もなく人声喧敷潮入ト呼声四方八方ニ聞へ諸人何ト聞定たる方もなく周章甚しく老若幷馬牛引連レ我先ニと山々峯々江登らんと走る霧深暗夜之事なれハ或ハ路も無キ荊棘に行詰り或ハ険敷岩石江行かゝり進退きわまりたる有様記するに筆も不及語るに辞なし前代未聞之珍事なり周章半時斗にて人々夢之醒たる如く互ニ身之上を恥合たれと今更詮方なく我先に立帰んとすれと初登りし時ハひしめきのまきれに心ともなく上りし事なれハ今更足之踏所を知らすたとりたとり山上より下る壮強之者共如此満して老若婦女之類木之根岩角に下りかゝり千辛万苦して稍我家に帰りたる由すへて此騒動纔半刻斗之中に四ケ村ハ申スニ不及御領十八郷ヨリ東ハ波川伊野を過き高智ニ至り西ハ五名山より黒森を越へ予州之境を越し北南之山分かけて四方十里余之間同時ニ符を合たるか如く火之光りハ晴たる夜之如星周章一時ニ初けり又一時ニ静りしも又不思儀なり加斗之大騒動なりしかとも一人之怪我なく盗賊火事といふ事もなく一刻半斗之事にて静りしも奇也妙也是をおもへハ人心之弱に付入天狗狐狸之所為にて人を驚せしも不可知とてもかくても一時之訛言誠ニ奇代之事共ナリ後ニ聞ハ御領外高岡半山黒岩ニて盗賊之噂有レトモ虚実さだかならす御領民此変に依而不意死する者尾川之陰陽師山石大夫而已

楠正成宇都宮公綱ヲ欺カレ新田義貞義兵ヲ越セシ時天狗山伏越後勢ヲ催セシ類歟

御土居内仲間類之騒動を静メ訛言なる事を諸方江為吉盗賊之防致候様為心得ニ相及也

十一月八日晴地震今に不休

一安原軍内須崎より帰申出る左之通

御座舩幷松吉丸之御舟を始御舩倉共不残流失青木ケ辻より東ハ悉ク潮入り来り家居過半流失大間居も浪ニ引かれ汐満来り往来難出来土崎海底トナルヨし

宇佐浦も同様潮入り地震亦甚敷町家過半流失御須郷士居宅も浪入り御領之御武具（〇カ）無恙来為見分森小平次昨七日差立当夜罷帰り左之通申出る御当地よりハ地震余程強ク汐先ニ之村江かゝり御改新居浦江ハ不入宇佐ハ田島仙之助屋鋪内迄汐来るよし居宅ニ無別条家居ハ四五拾軒斗残る趣死人数不知御武臭無恙旨申出る

十一月九日曇同十日晴同十一日晴同十二日曇夜風吹雪降る地震不休

一当夜宇佐浦之商人庄八伺御機嫌罷出於役席之坪津浪地震之事を聞潮ハ四日四時より差引常ニ異ニして人之畏れ用心し居たる処果して五日之晩ニ至り津浪入来る人家不残流失之由画図ニ認差出ス庄八御蔵之上之山より沖を見合候処蔵の屋根と見へし上ニ一人不動立ニて悠然として詠候様ニて終ニ山ニ隠れて見江す後ニ聞ハ浦人ニて磯近くなり海をヲヨキて命を助ルと申ス水好者とおほゆる吾庄八根元御先代様より御刀拝領之趣申ス何之故拝領と申訳不知此度ハ御持浦ニ相成異舟渡来之節御用向厚致口話御為相働候者故罷出る依之銀子二百疋被下置也

十一月十三日晴地震不休雪少々降る寒風
一野見浦も津浪江雲寺之坪江迄来る浦人汐を避て山に上る水に渇し難儀仕るよし糸川了敬之咄なり
一幡多郡筋之事未実説ハ被聞へす宿毛火災大破中村も同断之よし
一高知之事追而聞由火元ハ蓮池町より起り新町紺屋町幡磨屋町辺より下町不残焼失大風之よし六日之夜ニなりても烟未消
一桜屋手代吉良川辺江取立ニ行帰り御屋敷江参り咄左之通
甲浦不残流失死人七拾人斗但舟ニ乗り汐を凌候趣之処舟損し如此野根少々傷之崎浜不残流失椎名津呂室津浮津元クロミ無事ハネ流失加須郷無事名和利田野大破安田唐之浜下山無事伊尾木半分傷ミ安喜松田島六拾軒流失西浜大破穴無より和食迄無事手結夜須大破赤岡町無事吉原島少々傷ミ桂浜流失浦戸御畳瀬種崎辺無事大坂辺無事一説大坂大火尼崎大火其余どやどや舟之者噺申候よし
十一月十四日地震折々震雪降る
一御勘定方へ小野儀助より之書状ニ五日之汐込之節仰山ニ音して渡合迄来り此所ニて三ッニ分れて高浪ハわれ申候其節潮江タルミ下地切れ申候御城下江込之候潮ハ七日大汐ニ御座候得共随分ユルヤカニて御座候と承申候未々下地ハ海底之趣ニ御座候東ハ赤岡辺無難夜須ハ残り家而已有之趣と聞申候六日ニ赤岡之漁師手くりより帰り候処沖合ニ家やら蔵やら諸道具たんす長持様之物ニて一向弘き沖漸々と漕入候様子私近族之者昨日罷出候を承り申候ニ付御咄申候家も五百や千と申事ハ無御座何万と有之丁度夥敷鴨の浮たる様ニ相見へ申候趣ニ御座候以上一説ニ異舟と見受騒動有之様敷左聞へ申候
十一月十五日晴地震不休
一宿毛之事慥ニ聞御土居向少々傷ミ有之由御惣方様三丁斗ミコモリ之社江御立退御異条無之出火町方より士屋敷大半焼失士分ハ死傷無之軽輩六人死失町家江ハ汐入候得共汐ニハ死失無之火事ニは死傷人有之よし
同十六日朝大雪深サ五六寸夜六時強震寒来強し大風
一御水主救米作配方として門田衛門七差遣ス池波四郎より咄衛門七より承る潮入来候時分漁師壱人小児をいたき家之上に登り居候処浪ニ取られ沖ニ漂イ漸々磯近く迄ハ家来り候得共陸江上り様無之父子海上をヲヨキテハ死失ニ相及可申ハ顕然ニ付不得止小児を海中江投込自身ハ漸く磯ニ上り候よし哀なる事ともなり
一別枝村より住進池之峠百姓亀本同村芋野鍛冶尾蔵家大破村中傷所数々有之人馬過チ無之旨届出る
一御留守居より申来る前田唯蔵同亀太郎糸屋藤助　但し藤助死失　下田屋茂右衛門右居宅丸焼才善屋助太郎家潰込桜屋鹿蔵半焼藤崎惣十郎同断左官楠吉川田良太坂本守蔵三人聞相成哉水深ク舟無之往来出来不申ニ付守合相調不申候段申来る右之者共ハ家来御出入町人なり
十一月十七日雪地震鳴物有り夜大風
一川村文定より富永新介へ高知之人傷之申来左之通
高二千五百四拾壱軒
内
千八百七拾五軒　焼失
六百二軒　潰家
九拾壱人　男女死人
拾三人　行衛不知
四人　怪我人
焼死馬　二疋
右御町方凡積之由十一月十一日頃迄詮儀有之分
桂芳院様当春以来御出府被遊候処大変ニ付御城内御射場へ南御屋敷御方々様御一所ニ御座被遊候処今十五日御屋敷江御帰由御馬場江仮已屋被仰付候趣申来る
一此度之大変ニ付坪内求殿早追を以江戸表江被差立候地下廻文来る
十一月十八日晴同十九日晴同廿日晴地震今ニ不休
一北添弥蔵大坂より御勘定方へ申越左之通
四日大地震同五日又々地震暮過津波ニ而西浜辺五六尺汐増申候死人夥敷橋々崩レ舟も九分通程之傷と申事ニ御座候惣吾義ハ昨六日早朝上坂

安治川ニ而津浪ニ逢堤之上江走り上り参着仕候処材木船兵庫江着候趣ニ付見合ニ立越宜かるへく段ニ承り合候処兵庫ハ強而の事も無御座趣相聞申候今朝は帰り可申多分異条無之旨申来るなり

同廿一日晴地震不休

一森岡友右衛門出府向より同改御勘定方へ懸合来る左之通

宿毛御在所ハ殊之外地震強潰家三ケ所ヨリ火起り家中町家とも焼失其上汐入り大変之由既ニ火急ニ至り御奥様方御家来漸奉助山上江御供仕家中一同山上江登り今に山中之寺地に住居之よしニ御座候御城下ハ一昨夜八半頃少震夜明前少し動ニて其以来一向穏ニ而次第ニ静り申候段申来る

同廿二日曇同廿三日晴同廿四日晴同廿五日風雨雷鳴余程ニて時候三四月頃之如し昨夜半より風雨ニて今朝四時前より雷鳴強し九半頃晴る越前川洪水御用村流る

十一月廿六日ヨリ十二月三日迄地震不休

一吉村儀蔵より御勘定方へ来る書状之写

自大坂一筆啓上仕候先以寒気御座候処各様益御安泰可成御座奉賀候随而私とも無異儀昨日御当地江着仕候乍憚御放意被下度奉存候然共当所江参り候迄ニ船中も隙取ニ而日々退屈仕候処大ニ化合ニて御座候御当地其外々大地震其上津浪ニ而誠ニ大変目も当られぬ次第ニ御座候道々右咄承り胆を冷し申候一同ニ大心配仕候然ニ御国出足も日延被仰付為又舟中も風あしく御座候而大ニ隙取ニ而右大変ニ出合不申誠以大化合ニ而御座候偏ニ神仏之御加護ニ而難有義ニ御座候承り次第荒々左ニ申上候御当地江着仕候得共二・三度程滞留留仕り御用向ニ取り懸り夫より上京之心得ニ御座候処今以人気落合不申其上また地震も日々少々つゝ仕り御故片時も上京致し候様弥蔵忠兵衛等も申事ニ御座候不而已婦人も恐れ候故直ニ今晩淀舟借り切りを以伏見江参り御筈ニ仕候故殊之外取揃荒増ニ申上候此義徳弘幸蔵帰国仕り由咄御伝承可被仰付候所詮懸筆ニ難盡御座候先は右之段得遣意度如此御座候尚跡後無之時候恐惶謹言

十一月五日　　吉村儀蔵

西村平次様

山崎愛蔵様

聞書

一当月四日朝五時頃大地震同五日夕方右同断右之節ハ惣而大坂ハ乗舟至居候得は過チ無御座候右一円大小之船家内とも乗セ申事ニ御座候所五日之地震後々引続キ津浪来り川口ニ懸り申候大船川堀より押込小舟を敷クダキ夥敷人死し勿論船ハ大小とも傷之数ハ不相分浪之押来候場合川ニ而老若之泣キ声一時ニ蚊之鳴く如く聞へ町々に居候男子一同に声を揚ケサケブ事誠ニ哀れ成る事ニ御座候口心同様ニ而東西南北欠廻り或ハ親を呼ひ妻子を呼候趣一千石以上之大船段々に押来り帆柱傾き家家之懸作りはらはらとなでこほち候趣男女死人数不相分其内ニ昨日迄ニ相見候死体五百余人と申事ニ御座候忠兵衛宅同町之内家内六人之処壱人残り其外死失五人之内四人死失其内ニ死体二人見へ候趣ドヲトン堀江大船押入り帆柱斗り流来る船ハ何方へ行候哉相分り不申趣さいわい町おやま稽古百五十人死失之趣川々堀々御用幟立小舟ニ而数艘カイを以て川底を突居候大分死体穿鑿と相見へ申候長堀は材木ニ而関船来り不申ニ付橋落不申水分橋ニ而死体五十人所々に御座候家蔵も夥敷かやりかゝりツ申木なし往来之不自由成場所ニ御座候境湊ニ大小之船幷橋大傷ミ之趣紀州泉州津浪ニ而大傷ミ淡州別而大傷ミのよし勢州同断志州鳥羽ハ家員百五拾軒斗土蔵よりコギ海中へ引取候趣尾州辺も地震浪入ニよし兵庫より下ハ地震ハなく候得共浪ハ来り不申候御国甲浦ハ傷之無之候趣白浜ハ寺壱軒残り其外ハ浜流レ候様承り申候此度之儀ハ中中筆紙に難尽御座候おいおい図絵も出来可申唯今之騒はほんの頭書ニ而御座候

御飛脚便ニ左之通聞るよし

吉田二タ川白須賀半潰荒井船壱艘もなし舞坂津浪入家一軒もなし浜松大地震見付半潰袋井懸川丸焼新坂無事金谷大焼島田少潰レ藤枝岡部東は潰鞠子半潰江尻丸焼府中江川より出火向尻道筋焼奥津ゝ浪入由井無事蒲原手前大焼岩淵半焼冨士川水無し歩行渡り吉原丸焼跡潰れ

右之通東海道御油より註進有之分

十二月四日晴夜四時頃強地震

一森岡友右衛門より御町方差出之写差越左之通

一家高二千七百五拾五軒焼失

右之内

千八百七拾六軒　御町人
　焼失
二百四拾七軒　他支配

〃

五百六拾八軒　潰家

内

四百拾壱軒　御町人
百五拾七軒　他支配

〃

八百壱ケ所焼失蔵幷物置共

内

六百六拾八ケ所　御町人
百三拾三ケ所　他支配

〃

九ケ所潰家幷物置共　御町人

焼死男壱人　御町人

過死男女百五人

内

九拾四人　御町人幷郷人

内

男三十九人
女五十二人

〃

過人男女三十九人

内

二軒　半潰

内壱軒　御町人
　壱軒　他支配

〃

三百九軒　半潰家

内二百五拾四軒　御町人
　五十五軒　他支配

〃

百二拾ケ所潰蔵幷物置共

内九十六ケ所　御町人
　二十四ケ所　他支配

〃

八人　他支配

内男三人
　女五人

三人出生不知者

焼死馬　五疋

焼失寺堂社　十二ケ所

潰寺幷半潰社　四ケ所

焼失御蔵　二ケ所

内

三十五人　男十人
　女廿五人　御町人

四人　男壱人
　女三人　他支配

〃

行衛不知者男女四人　御町人

内

男三人
女壱人

半焼失橋壱ケ所

焼失米四千六百二拾六石二斗

同菜種百三十石

同麦四百七拾四石二斗

同糯米百五十二石

同　麦三石六斗

同空大豆四石

同五形花種壱石

同御役所　二ケ所

同橋　七ケ所

焼失御囲籾七百石斗

同大豆九百三石二斗

同燃油二百挺

同小豆七拾壱石六斗

同黒豆三石八斗

同エンドヲ三石二斗

同胡麻四斗

十二月五日地震今に不休

一桑原泰蔵江与津村庄屋太郎八より書状之写

一筆啓上仕候先以寒気之節ニ御座候処御家内様被成御揃益御堅勝ニ可成御座珍重之御義奉存候誠ニ近頃は惣而以書中御尋向も不申上失礼肖本意候段真平御用捨可被仰付候然は当月四日より当辺大地震ニ相成五日潮入人家不残潰家ニ相成候得共人馬傷ミ無御座前代未聞之事ニ御座候左れとも海辺迄之大変ニて御当辺格段之御異条無御座候哉と奉存候御存知も被仰付候通郷浦境ニ有之八幡宮より東之田畑惣分海と成り只今往来ハ舟渡潮満候節は私宅之前田方迄潮来り申様ニ相成誠以恐敷事ニ御座候鳥渡御屋敷江罷出御機嫌可奉窺筈ニ御座候得共有之都合故已家懸最中之場合無拠不任心底当時得罷出不申候ニ付何卒御都合を以宜様被仰上被為下度奉之申上候御当辺之御模様御席も御座候得は為被聞被仰付度奉伏願候右之都合故当時鹿狩も出来不申兎角来春ハと只々相

楽居申候先は右可得貴意如此御座候恐惶謹言

十一月廿九日　　太郎八

桑原茂平様

同　東蔵様

十二月六日晴七日晴地震今に不休

一村島屋藤八より御勘定方へ申来書状之写

本文略ス然者当月四日朝五半より大地震夫より時々三四度つゝゆり候ニ付広キ所へ小家を建住居仕居候も有り又ハ上荷舟等申船茶舟等ニ而住居候者も有之然ニ翌五日昼七半頃又々大ゆり同暮半より津浪ニ相成川筋ニかゝり居候大小之舟一時ニ押登り道頓堀日吉橋唐金橋幸橋住吉橋打落し大黒橋迄千石以上御下之舟押登り横堀ニ而ハスレヤ橋堀江川水分橋黒金橋長堀高橋戒島ニ而ハ亀井橋安治川橋右皆々打落シ江ノ子島ト申処より博労下迄大小之船重り合有之候小舟ハ皆無之舟数忘れす大船之分も無事なる舟壱艘も無之候右ニ付前日ニ上荷船茶舟ニ乗遁居候者不残致死失死人ハ中々五百や七百之事ニ而ハ無之誠ニ目も当られさる事ニ御座候尤崩家ハ二百軒余菱なりニゆかみ候家ハ数しれす誠以おそろしき事に御座候尚又東海道其外志州伊勢地紀州泉州阿州淡州御国甲之浦辺大荒れ之よし粗相聞申候ニ付御地ハ御別条も無御座候哉大ニ心配仕居候何卒無難奉祈入候扨又当地ハ昨今小ゆり納り不申前申上候小家より我家江得戻り不申者数多有之候此度之大変ハ筆ニも口ニも尽しかたく古今稀なる事ニ御座候何卒此辺ニ而相納申様祈入居候先以混雑中右荒まし奉申上度早々如此御座候恐惶謹言

十一月十一日　　村島屋

藤八

山口儀三郎様

山崎愛蔵様

森岡友右衛門様

田村庫太様

十二月八日晴地震今に不休鳴物折々有り

一森岡友右衛門より左之通申来る書状之写

本文通例然は三日夜四半過余程地震去月五日夜左川之二番切レ位ニ奉存候四日に至大動之程難斗右訳ハ天ニ陽気鮮地ニ陰気深天文川筈より少将様江言上之由就而は御部屋様御立退之御用意御供配り等相整一同不気味相生し居候場合九ツ前西大門之方より龍舞来り下御屋敷東御屋敷福岡より土砂粉紙類巻上ケ板を打候様ホヲイホヲイと追声不謂時声とハかくやらんと仰山喧敷義ニ御座候福岡松辺ニ巻上表御門前より見物仕候処南をさして飛行申候形ハ見へ不申候得共土砂之勢イ実ニ甚敷ものニ御座候右之変地震ニ替り候哉当々震無御座候其後夜分四五度動ハ御座候得共家出等仕候程之義は無御座次第ニ穏ニ相成申候一向御門出も不仕其余何之咄も承り不申候尤坪内求馬殿一昨夜九ツ過出達早追ニて東都へ被相趣候由ニ御座候余ハ略ス

十二月九日同十九日迄地震不休強弱有之

一十七日頃六時過より潮江村焼失百七十八軒斗大風ニ而一時ニ焼通るよし

一森岡友右衛門より書状之写

本文略ス然は当地地震去る十五日暁八ツ時三歩位大震仕御用間御扉のほせを引裂懸壁も傷ミ申候又今朝六時二度大震仕候皆々十一月七日之震よりハ強と申事ニ御座候如何様諸方御取繕御座候故大傷ハ無御座候尤御張付しわを取壁之膳等少々傷ミ相成汐もくるい候と申事ニ御座候御座舟松ケはなへ又々相廻り申候誠ニ不安しわき事ニ御座候而込り入一統心配仕候末江略ス但十日九時一度十四日二三度十五日暁一度十八日暁六時一度強震初度ニ比スレハ皆々軽し

十二月廿日晴同廿一日雪少々降寒風夜前四時頃強震

一大守様御暇ニて近々御下り被遊候御模様ニ付地震已屋御城内堀之内と申所江為被建之趣ニて日々賑々敷旨御屋敷より申越ス

同廿二日より同廿八日迄地震不休次第ニ間遠ニなる

一安政元之改元之触来る

同廿九日晴同晦日曇

一今朝五時前余程強震十一月七日よりハ少し強シ小震数十遍夜九時頃又強震フ

一同夜御留守居より飛脚到来今朝之地震ニ御取繕之張付ことことくしわ出来其上所々御傷有之趣然とも御規式ニ間も無之御取繕被仰付而も又震候程難斗差懸り不被捨置御傷之場所迄御取繕可然就而は急々見分之旨申来る

安政二寅正月寒風雪少々降る

一地震今に不休晦日より小震有之遍数かそへかたし晦日施御取繕之場所ニ付其手筈ニ相及候様森岡友右衛門江懸合ニ相及

同二日雪少々降寒気強し地震今に同断

一川内谷百姓氏源義去冬廿九日赤岡へ立越晦日之地震ニ逢よし朝五時支度中強震家内不残家出致ス佐川よりハ余程強趣也夜須新町之入口迄津浪九度込来り町人諸道具雑具迄持運山上江逃登る旧冬五日之汐よりハ四五寸程低きよし枸梅茶屋之角辺り迄汐来る尤低き家ハ座上江上るよし枸木山之所辺ハ海低と成り舟之往来至ス由下田より大曽根辺も汐入来る下地ハ今に海底と成り始終舟之往来ならてハ通行難出来よし

一旧冬廿八日夕江南舟岸本之沖へ来り大騒キにて郷士共数人出張り御役屋よりも人数押出し通しを以聞合候処米薪水に渇し候趣漂流舟也依之米十俵薪五十荷水三拾荷被下由船之大サ廿四五間より三拾間斗帆柱三本有り牛ロフヲ商ふ舟と申事なり氏源咄なり

一須崎も浪高きよし晦日之地震に兎鹿野崎之方へ当り砂烟り立候由岩等も大分落候よし尾川奥も道潰込往来不自由之趣聞ゆ

同三日快晴春気を催し鶯初て鳴震大分穏なり

一卯歳之大小京都より来るよし

有変者大事

（梵字）雷地震火難洪水除祈之御守

無変様に小

正月四日暁より雨降夕晴地震今に不休

一夜前五時前異舟渡来之趣相聞出勤池弥四郎より左之通申来る

須崎沖合三里斗ニ異舟相見へ申候尤大船ニてハ無之風強く南向漂イ候趣注進有之夜九時過宇佐浦江出陳随勤井上信平池野宗吾□也夜半過より寒風強し夜明高岡町江参着宇佐浦江日之出過着ス

正月五日寒風夜雪降地震同断

一田島仙之助宅江参候右は昨年之地震ニ付本陳之場所急々相調不申によりてなり追々出張人数左之通

田所仁助徳久安三郎千頭義内千頭喜三郎今村孝太郎明神克助森敦次竹村楠源太森弥左平父子佐野郷右衛門父子中島柳助済原愛之助森作右衛門大久保鉄作父子千頭寿源太大妻又太郎父子伊沢善蔵千頭尾高明神喜久衛斉原傳太五藤嘉平辻弥平横川堅七中島庫太郎片山文蔵父子古田儀三郎田島仙之助兄弟

一異舟ハ此浦ハ不見直様遠見番之手筈ニ相及夕八半時頃大舟壱艘沖合を東向乗行候得共遠目境無之慥之義不相分旨申出る当地旧冬之地震津浪ニ家居大半流失兼而聞しよりハ仰山成る事ニて家居之残七八十軒斗有之也尤残り之家も大半傷ミに相成其内堅固成る家を本陳と定む地震之動鳴物等ハ佐川よりハ余程強也平地ニは青き物一ツもなし竹木菜園物皆々枯居り也本陳も過半之傷ニ付安座なりかたく夜に入り田島仙之助宅江立越休足ス浦人ハ大半山際江已屋懸して這入居候様子なり目も当られぬ次第也

一暁八時頃御月番役より異舟今暁西風烈ク何方へ行候哉不見退帖之旨須崎浦静謐ニ相成候ニ付宇佐浦ニ帆影相見へ不申候得は引払候様申来候

□郷士共江切紙を以為心得候相及

正月六日晴地震同断度数かそへかたし

一今朝日之出尚又沖合為見合候処帆影も不相見五時半頃宇佐坂迄引払候処郷士之内先江引払候者坂立之者より承り候処今朝東之沖合ニ異舟相見申候段申出候ニ付飛脚ニ右之段御月番役江懸合直ニ引かへし本陳江参者直ニ遠見番申付尚又片山文蔵ニ為心得沖合三里斗早舟を以為乗出為見合候処都而不相見旨申出七時頃此浦出立五時半頃帰陳ニ致ス也

一宇佐浦ニて廻文之写見分ス

一江南之商舟壱艘長拾五間幅壱丈三尺帆柱三木

右は旧冬廿八日岸本浦此方より拾五丁斗沖合江碇を卸し滞舟仕居候処

昨三日夜四時過碇引候様之声相聞へ候得共少々浪高く夜分之義ニ付為見合之船難漕出候処日和之模様悪敷相成候故手結浦掛り場江為漕入可申積りを以同浦より漁舟数艘乗出し為見合候得共都而右船近辺ニ居合不申由ニ付尚又今朝得度沖合為見合候得共弥出帆仕居合不申候ニ付為□心得右之段及御懸合申候尤西南之方へ乗行可申候哉と奉存候已上

赤岡岸本両浦庄屋
長屋与丞

久枝より福島迄灘懸り郷浦
庄屋所

一江南人之持居候チシヤ仙之助宅ニて為見申候葉之形当地之品ニ替り無も色ハ白く甚以艶よ路しく銀色ニ相見へ申候

正月八日雨夜来二三度少し強震

一井筒屋忠兵衛より左之通申来る写

下田沖江懸り居候異舟愈先月廿六日之神風ニ破艘仕漸五六十人斗助命之趣ニ而只今御救已屋等御出来ニ而御養之由ニ御座候乍併肝要之金物海没之訳ニ而は多分存命難相成様子と承り申候北西路は二拾ケ年以来稀成大雪ニ而豆腐壱丁代八十文と申事ニ御座候誠ニ当年ハ軽からぬ大変諸国一統之事ニ而実ニ恐ろしき世柄ニ御座候乍去安政之御触達も有之当所ハ人気も大ニ立直り諸紙等見分直行宜敷御座候先は無別条候得共右之段迄奉申上度如此御座候恐惶謹言

三月廿一日　井筒屋
御勘定方　忠兵衛
御役人所

小国之豆腐ハ大豆壱升を以代銭を定むと乗台寺法印物語のよし

二月九日晴夜五半時少強し同十日晴地震次第ニ穏ニ成る

一池野宗吾より咄承る旧冬十一月四日兵庫江着舟翌五日大坂江立越候場合七時過安治川堤ニ而大震ニ出合堤之上ニ着座致し漸震治り直ニ旅宿へ参り候処諸所大傷ミに候得共支度相調風呂ニ入可申心得ニて裏へ廻り候処津浪来ると申事ニて大騒きニ相成直ニ風呂敷包引提出見合候処大舟屋根之上を通り候様子ニ付舟頭と一所ニ往還を上江走り御城近ク逃ケ来り申候場所も高く数百人集り居候ニ付一所ニ相成申候殊之外寒気強く夜を明し兼申候粥とられ寒気を防き夫より井筒屋忠衛宅江立越申候惣分大傷ミて死人数知レす目も当られぬ様子ニ御座候と申出る

正月十一日雨十二日より同十七日迄地震今に不休十八日から二月廿一日迄地震不休次第穏ニ相成

一谷脇源十郎母江町田七蔵母より送り来し歌写留む

いにし月初の五日地震ひ火の神のわさわいさへ出来て家居焼うせ吾家ハおちこちさまよい侍りてよふよふ高須といふ里になんいほりして住むこのワたり後ハ千尋の山前ハ千町の小田なるか津浪打いりて引もやらすさなから大海のよふなるに水鳥のあさるさま山本の露棚引にいささこゝろを慰むになん

山姫の春の手初か遠近に

うすみの衣たちはへて見ゆ

となりなる家よりゆあミせさせゐへなといゝ来り阿れハまかてぬるに梅のいと盛ニ咲ける見るにも此宿ハ山本にて彼のわさわいニもすこしのいたミもなくおもひもなけに春をむかへゐふぬるも

うらやまし此山本に

庵しめて梅見る宿の花のあるしハ

正月十五日　しけ

谷脇おはあ殿の
もとへ

正月廿二日より三月九日迄地震不休

一二月朔日加賀国大地震二日三日大雷ニて四日迄強震趣井筒屋忠兵衛より申来るよし

三月十日より四月十九日迄地震不休次第ニ穏ニ相成

一三月に伊勢大地震之風聞有之とも実説不相分

四月廿日より十一月朔日迄折々震

一十月二日夜戌中刻江戸大地震御大名方幷寺院町家荒増潰込其上所々出火ニ相成日本橋より北之方ニ当り新吉原不残夫より五拾軒茶屋幷土手

下通り馬屋辺不残芝居丁壱丁二丁目山之宿聖天内蔵川戸浅草諏訪観音際通不残焼失東橋通ニ而漸三日未刻ニ火鎮り申候又一ト口ハ駒形小屋より出火諏訪丁三吉町黒舟町御蔵前木戸際不残焼失又一ト口ハ下谷御城屋敷上野長者町出火同丁壱丁二丁三丁目上野南大門丁新黒門町下谷同明丁上野広小路東川三枚橋迄橋迄不残幷上野町壱弐丁目西側不残焼失夫より池之端茅町壱丁目根津辺不残焼失

一御大名方焼失左之通

石川日向守様小笠原左京守様井上左吉様其外御家来御屋敷下残焼失夫より小石川*陸慶橋際迄大簇本幷町家共荒増焼失夫より本江加*見様御屋敷上辺町家*外焼場嶋天神下ニ而御屋敷三ケ所焼失水道橋通御簇本屋敷出火

一御大名様焼失左之通

松平駿河守様榊原式部少輔様松平豊前守様堀田備中守様内藤駿河守様御中屋敷伊藤若狭守様

右之通不残焼失其外半井御屋敷火消屋敷御簇本百軒余不残焼失

一丸之内ニて酒井雅楽守様向屋敷森川出羽守様右不残焼失

一大名小路ニて林大学様遠藤但馬守様本多中務少輔様永井遠江守様松原相模守様御屋敷向屋敷小笠原様織田様其外八代*久荻火消屋敷右不残焼失

一西御丸下会津御屋敷向屋敷松原下総守様松原玄番守様御屋敷不残

一外堀向焼失之分少々大毛利様鍋島肥前守様根木近江守様小笠原佐渡守様有馬備後守様大南部様少々亀井御屋敷伊藤様薩洲様水戸御屋敷向川安部様土手鍋島様右之通不残焼失芝柴居町壱丁目不残死人二百人余京橋辺ニ而鍛冶町三丁目五郎衛丁北紺屋町（三丁目大沢山様町竹町伝馬町）壱丁目二丁目具足町柳町鈴木町因幡町松川町本材木町七丁目八丁目八丁堀より鉄炮洲稲荷橋辺不残焼失（カッコ内はそえ書き）

一筑地門跡無事其辺少々焼失有り深川伊左之木町冬木町不残熊井町より一之鳥井迄不残焼失

一本町一ツ目より六軒堀不残焼失其外本所諸々出火有之委敷事ハ相分り不申追々御しらセ可申三日より只今御屋敷方幷町人寺院方迄本心取失ヒ雨露之手当も不致老若男女別而無難之者十方にくれ夜昼分り不申ほふせんと罷成我身を不覚此度之義ハ誠ニ世之中*なる夫より新吉原死人二千人余有之趣ニ而江戸中御屋敷町家ニ而焼死人即死人共何万と申事ニて御座候

一深川黒舟町相川町大島丁中島丁八幡前辺中町通石原舟蔵前通南森下町常盤町高橋際迄不残焼失井上様御*丁番焼浅草御坊前通り茶屋花屋近辺迄壱丁四方不残焼失寺院三ケ所一*家ニて今戸橋先通不残焼失新川大川橋通不残南新川西迄少々焼込只今以火事一日ニ数十軒ツゝ御座候地震之儀夜昼ふるい誠以前代未聞之事ニ御座候て恐敷事先は此段為御知申候（〇以上*印の所に「本のマヽ」とそえ書きあり。）

十月五日

十一月二日より安政三辰八月廿四日迄折々地震フ

一辰八月廿五日夜六ツ時頃より南山風吹出し其烈敷事筆紙ニ尽シかたく家を潰し家根を吹立川筋浪を打揚舟ハことことくこわれ眼も当られぬ有様なり此時雷鳴渡り地震出火等も有之珍らしき次第のあらましを書記ス日本橋南ハ通町筋格別之事なく中橋京橋同芝口辺少々之いたみ芝山内は大木を根から引抜又ハ打折しも有御堂も少々之傷ミ芝御門前より出火致し半町斗焼大門通少□門前町神明丁表通不残三島町側浜松町壱丁目片かわ宇田川町少々ニ而焼留り金杉本芝海片大方こわれ御屋敷海岸通り傷ミ多く芝田町七丁目半丁斗高輪辺品川海岸遊女屋不残こわれ山之手麻布白銀辺格別之事なく相見江辰己之方ハ四日市御納屋打倒レ材木町辺茅伯町北辺少々霊巌島鉄炮洲ハ川口より汐打上り海荒舟を打上土蔵人家等こわるゝ事多し深川熊井町新地海岸少々御屋敷浪ニ船を打上ケ家こわれ又ハ流し処多く蛤町長島町佐賀町土蔵大方傷ミ仲町遊女屋仮宅家根不残吹飛し八幡宮社無事ニ而開帳小屋物見セ処等不残打倒れ洲崎弁天社残り入舟町近辺小家不残こわれ流し一向不相分永代橋中程より折レ往来留る西舟御番所少々傷之川岸江帆掛大舟打揚り往来江茶舟四五艘打上り小家片側こわれ浜丁川岸通御屋敷表御門等大木を

打付多くこわれ往来江も船所々ニ打揚ケ有之大橋詰不残こわれ橋向ひ小家不残こわれ六間堀少々傷ミ柳川町新長家大方倒れ往来ハ山之如く御舟蔵四軒程こわれ同所仮宅遊女屋多くこわれ松井町同木所割下水通辺出火大川之地江御籏本屋敷こわれ多く亀井戸柳島押上近所百姓家こわれ処又ハ水出にて難渋之処多し子丑之方ハ十橋町堺町少之傷ミ両国橋無事店所小家不残吹こわし御蔵前無事並木茶屋町仮宅大方屋根吹飛し浅草寺地中少々の傷ミ大木多く倒る猿若町芝居同家根不残吹飛し花川戸山之宿三谷今戸辺川筋こわれ崩田町軒屋根等こわれ所々相見江豊島十橋出町少々傷ミ馬喰町横山丁油丁都て此辺傷ミ少く大門通伝馬町本町石丁室町両替町此辺格別之事なく三川町御屋敷数羽多くこわれ丸之内御屋敷方無別条山の手ハ水道橋小石川崩家多く崩小日南伝通院少少の傷ミ水通町少々大塚辺崩家有之*言羽大傷ミ家崩牛込小屋敷傷ミ多く赤キ明神大傷ミ市ケ谷所々傷ミ大木倒レ多く四ツ谷少々之傷ミ麹町通格別之事なく当町辺こわれ所々相見江赤*泊溜池近所こわれ家有之近郷近在百姓家等多く崩るゝといへとも死人怪我人あまり無之御恵ミ深き道にや難有御事なり只*事見聞の儘書記スたゝ知らぬ所見る所の次第ハ御用捨事ニ候（〇＊印同前）

大江戸表より申来る書附の儘写取るもの也右井筒屋忠兵衛より門田善八江来るを借り写留る也

一今廿五日夜六時頃より丑寅時化五ツ半頃より巽之方江替り九ツ半頃迄殊之外烈敷上御殿銅瓦小枌等吹剥き御居間御寝所廻り御立、御張付御畳等ぬれいたみ惣御長屋家切不残落チ御客様御供御人数休息所潰込之所々板塀共瓦等夥敷傷ミに相成

一築地御殿向所々同断御足軽部屋御賄方御小者部屋倒レ御小人壱人即死潮溢候而御屋敷内江も床限水揚りニ相成日比谷御屋敷家根小枌不残吹剥小壁悉ク落巣鴨御仮御殿之外大傷ミ品川御屋敷御殿向為差傷ミ無候由外輪囲板塀等ハ大傷ミニ相成申同所御台場ハ大変之跡傷居候処此度皆崩御備箇之内二挺水底江沈ミ候由高輪辺所々大傷潰家等大分御座候砂村御屋敷御殿幷籾蔵共大傷ミ尤潮嵩ニ而籾俵之根廻り高サ五俵斗濡傷ミニ相成御殿守慶次家内辛き命を漸助り座キ*堤江遁れ出同所酒屋ニ而樽上候板を買其上ニ而夜を明し素より諸道具等ハ流散未潮も悉クハ干落不申由ニ御座候大川筋より鉄炮洲江懸人家夥敷吹倒し仙台御蔵屋敷潰込跡江は廻舟等打上居候由諸船材木等永代橋江流懸り橋の中二ケ所切レ落申候此川筋ニ而廻船方*艘等多ク水中ニ慎リ或ハ岡上り致し居候而通る物胆を冷し申候築地門跡御堂潰込繕*所本多之御長屋同断数百人之叫声暫ク相聞暗夜風雨之事ニ而人痛之数ニ御座候と見聞申候市ケ谷四ツ谷浅草麻布芝都合五ケ所より出火廻候は存之外早ク消火尤芝片御門より北江三丁余焼る御屋敷近辺見受申候処因州様本田様等ハ別而大破土居様牧野様等ハ御長屋潰込阿州様ハ外輪不見受候時ハ此方様も御同様ニ而格別之傷とは相見へ不申なれ共内之処ハ大傷御座候内今朝風呂屋ニ而阿州様之人噺候を聞候惣体過チ人死人数不知哀れ成物語等段段相聞古今稀成る大風雨一昨年ハ御国之大変昨年ハ江戸之大震又も此度ケ様之大変ニ出逢未タ留守も已屋懸ゆ之義心中御察可相下候此度之変中ニ*□ケても筆紙ニ無尽先荒々承り候儘入貴□候（〇＊印同前）

八月廿七日　此分宮方類族江戸詰之者より申越ス

御留守居方中尾左源太より私共へ文通左之通

一去月廿五日夜雨風ニ有之候処次第ニ強寅上刻益大風雨前代未聞之事共古キ者も不相覚内実ニ申上様も無御座上御屋敷初諸御屋敷共大傷中ニも巣鴨ハ分而大破之様同所町並家無事一軒も無之大木立木吹倒ス上築地先ハ御殿向為差別条も無御座恐悦大唱申候築地ハ其上ニ御屋敷江津浪一尺五寸程水入り仕合ニハ早ク引申候一□□失老人子供泣キ立チ申上候も無之第一

椎木谷住人國枝氏（〇この行大字）

築地御堂吹潰し是ニ而余ハ御察し被成度候其外武家方町方吹倒し潰レ破損昨年地震より十倍ニ御座候大舟二舟傷数不知永代橋半ハ押流本所深川辺ハ一際烈敷御座候於築地も御小人長屋吹倒レ壱人即死両人大過チ存命斗れす様ニて候薩州様之唐人舟も金杉浜へ吹上居申候築地多様川岸之長屋其外吹潰し大蔵も数々同断見るも心苦敷寺共々御座候浅草

御門跡も潰レ申との義是ハ聢実事不承候去今大変如何成事ニ候哉只々行先を相恐れ申候追々可申上候得共先如此御座候実ニ不思議之大変世中ニ所々出火も有之筆紙ニ難尽御座候

七月廿七日

高見宮六
中島実之丞
長谷川万平

〔土佐国大地震幷御城下大火事且大汐実録、嘉永七年十一月五日〕

〈県図、K 453－6、本文献の解読には、宇佐美龍夫教授のご支援を得た。前文書と同様解読の決し難い箇所が数多くあることをおことわりしておく。都司〉

嘉永七甲寅年十一月五日土佐国大地震幷御城下大火事且大汐入之実録之事

干茲嘉永七甲寅年十一月四日朝五ツ時良暫之間小地震ニ而汐狂ルイ日中五六度急ニ汐之指引有此潮之指引狂ルイ有時ハ大地震発る事必定成るに諸人気モ付す居候中翌五日七ツ過時俄ニ大地震始る

抑是より弐ケ年以前嘉永五子年同六丑年同七寅年引続旱魃子年ハ四月より旱魃丑年ハ五より旱魃寅年茂春より日和続ニ付惣而山田野地町辺より北前植村新改植田久礼田笠ノ川八幡一宮薊野秦泉寺惣分稲作ハ不及言畑作等ニ至迄日損ニ而百性共大ニ難渋之処然ニ介良大津高須五台山比島下知江ノ口潮惣而江廻之百性共者豊年当寅年モ同断壱反ニ付米七俵余りも取入勿論麦作芋残等も十分ニ出来相願居申候処冬ニ至り而も日和続暖気ニ而相賑ひ居候場合十一月四日朝五ツ時良暫之間小地震有同五日上町荒神祭ニ而角力興行諸人郡集致し御方々様も御出被遊御見物之刻七ツ過時申ノ中刻俄ニ大地震発り申酉之方より大風之吹如空中鳴渡砂烟四方ニ巻上り中々歩行も難出来忽朧夜之如相成大地忽沈手と思処下町之人家ハ過半潰れ込ミ人損夥敷有之其場合拾六所より出火ニ成暖気ニは候得共北風余程吹候故其勢火烟天を焦し肝魂も消果周章騒きて欠出る処下町之家蔵委狩壁倒之如忽其□家ニ居撲土蔵ニ被打紺屋町小町ハ両方より崩れ込ミ夫々撲式庇ニ被挟梁ニ被押且ハ塀ニ被埋生なから焼死する人数を不知北風強く吹候故頓而火気一円ニ充満し無是非一命を失ひたる者多かりし干傍強気来盗業之者も有之志有勇気之者は老父母を引或小児病者を負たるも有人皆あ玉をあてともなく泣叫ひ北之山を指南之山を志しあ玉之無頓着勿論不仁可愛之指別なく助くる助ケらるゝかと言も理もなく頭面脊上江ハ壁土を戴きつも源敷姿ニテ家蔵之潰れ家を乗越乗越泣とハ悪し而無之失色失途方親ハ子を呼子ハ親を尋無理無窮ニ歩行兼て遁行有様社中々筆紙ニ難尽法を立るも道を守るも治世之時ニ社有人論之道忽ニ滅ス哀共不便共直詠敷共可譬様更ニ無之候右火事も日数十日程焼迄ニ承り候処家数千六百軒焼失橋ハ木屋橋幡多倉橋新町橋材木町橋はりまや橋等焼落町ハ山田町蓮池町廿代町新町新市町紺屋町更ニ棚広小路南新町種崎町京町農人町茶円場納屋堀浦戸町同中浦戸町新堀細工町九反田朝倉町之北潟石切丁之南迄不残焼失致し其中御町会所ハ不焼御米蔵も不焼又蓮池町之上少々廿代之上新市町之上ノ少し山田町之北少々残ル郷中ニは砂地村ニ壱軒焼失有追々承る処御町支配之怪我死人九十五人格別は不知然ニ其夜又々如前大震両度有之中震ハ数知す然ニ其火事中半時斗過ニ波所潰突浪と言潮即時ニ発り植潰之人家を押流し夫より内海江迅速ニ入来り仁井田種崎之人々如蚊泣叫ひし山遁上る其川ニハ不及言打来り諸々之堤等切レ潮溢レ入ルニ付下町近辺其砌路頭ニさまよひ残り居ニ人々も是ニ益々途方を失イ誠に哀かなしの所体ニ而何国と言宛所もなく市中之人々ハ是上町之如遁上ルも有多之人先南北之山を志し式久万秦泉寺諸寺諸山江雲闇ニ遁止り素り家蔵も焼次第汐も入次第と申ニ而命斗助り居申族夥敷有之所翌六日より忽飢渇ニ至り其場合産婦数人有之死るも有又運ニ叶ひて助る茂有実ニ不便至極ニ折節大家大寺より是を憐ミ粥を被遣漸命を繋斗之事ニて候乍去六日より向々日数不知事ニ候得共夫も続兼将又焼死之難ニ逢たる者旦遠族由体之無人と童共只路頭ニ泣叫有様社さも哀なり右六日より市中散々ニ来居候人々江は御町方より粥御恵被仰付候得共是も十七日迄

ニ而済候広小路江五六十間之長サ之御己家被建候得共是江入人は至而鮮事ニ候番家之面々よりも粥を第一とて米飯或銭等遣し雨森山ハ壱人前ニ米五合宛遣之介良屋弁助等は焼失致居得共米百五十俵賑遣し新堀伊藤善平等も焼失致候得共町内江金壱歩宛遣候由ニ候右大変之砌灘辺ハ不及言御国中大杣山江上らぬ所ハなかりけり其中可嘆事有韮生山分森本山之人迄も突浪ニ恐れて山江上りける然ニ右之節下町と下知村農人町とハ別而震烈敷依而家蔵不残潰込ム其砌葛島川より高須村江入来る浪高サ四尺斗ニ見ゆる右村渡場店屋文蔵其東組頭森次勝次等々ハ潮不入高須村も不残山江上ル追々仲間等江而己家を建日数六拾日余山己家を建寝起致居候中破損堤之潮切仮囲出来ニ相成汐四尺程低く成候ニ付又々我家之辺ニ己家を構へ夫々住居候

一突浪初而入来る時蔦島之外輪堤弐拾三間程切レ其処より潮漫皆入来ル右高須村之座敷潮之不入家は四五軒斗ニ御座候

一大守様ニは御在江戸

一少将様ニハ西之久保御釣御殿より御帰座之場合直様御桜山江御立退追追御仮御殿御造栄ニ而御座候被遊

一若殿様ニも御同断

一大隅様ニも早速比島山江御立退殿丑之助御之事其餘御方々様幷御家老中御中老御侍中段々御城内江遁込被居候処御仕置中より御城内は返而浮雲様ニ申来候夫より御方々様急々久万村へ御立退被遊候処御家老中を始中老衆御侍中御跡ニ付従尤其中ニ町人も付添不残久万村之有志先軍中落く之如御所体ニ而法度無礼之用捨なく泣怒斗ニ御立退婦人ニ帯をせさるも有其夜より翌日迄御供廻り中江ハ黒米之粥を被遣其余之御侍中も南北之山江と志し自身銭を肩き婦人ハ長刀を肩き周章騒移遁致しなり

一諸役所は追手御門前江求達是江出勤有之扨又々夜ニ絶間なく昼夜十四五篇中震ふ震発候故中々以人心地不致処当月十五日ニ大雪降夫より雨天ニ成跡ハ平常ニ替ル荒き大西風吹出誠に世界ハ無限をと不言共思ぬ人はなかりけり

去程ニ十六日夜無思掛大潮又々以前より高入来り是ニ又諸人大ニ驚御郭市中之人々夜分ニ位ニ上町之如遁込候下地之堤農人町之堤ニも其節已家を建集り暮居候処右之高汐ニ帰りし其騒動譬ん方もなく去共遁る有又船を便りニ居るも有候処天張震ハ不止故便を流し日を送り露之命を繋居候処同廿五日之朝俄ニ天気雨を催し大雨降出大時化大雷鳴ニ来其中ニ震も発し誠ニ是社世之未也と諸人心之内ニハ思ひけり其時化ニ半潰之家も風吹破り浪打破り委ク破却翌廿六日又々常□誠に烈敷大西風吹出誠ニ重々之大変何ニ譬へん方もなく哀はかなき世とは来ニけり先西にて潮江下知比島東は葛島高須村新木鹿児田部島絶海大島屋頭東崎孕下田介良一円国海相成日々夜ニ大浪立破損□も少々有其中大島絶海家頭田部島等山添之土地高き家江ハ潮不入高知も南会所之辺迄潮上ル右之内ニ而潮之不入処ハ壱ケ村四五軒七八軒斗也惣而天気平暑し誠成只荒々敷して大寒も有雪も成風出有とも一向震ハ不止而専烈敷大風雨也先浦戸ニ而は植潰之人家八拾軒御分一役場迄不残流失仁井田種崎ニは損傷なし藻洲潟之人家過半流失両所ニ壱人之損命有久持村ニ拾七軒流失流死三人是ハ船ニ乗候処浪ニ而突浪入来る時舟ニ不可乗四五度之浪より跡は乗ても不苦尤引塩ニは不可乗見合可乗芳原ニ拾五軒流失夜頃弐百五拾軒流失流死七人有鰹舟壱人助之宇佐福島不残流失須崎浦不残流失上之かへ不残流失宿宅之家中市中共焼失中村過半焼失入野失其流中蹉跎近辺ハ五日以後絶而不震由ニ候（〇蹉跎とは足摺岬のこと）

一追而市中之者江ハ為御補直加限立ヲ以升米御渡有之又名目有之者江は金壱両宛御貸付有之其内棺屋江は早速ニ銀壱貫目宛御貸付之米は家壱軒へ四升宛百拾壱匁相場ヲ以御売米出ル燈油ハ壱人前ニ三合宛七匁五分相場ニ而売之日数廿日過より燈油醤油蝋燭等売次第ニ成御侍中も四ケ村江転宅勝手次第ニ成諸奉公人江ハ籾米被売遣也

御町中之建札　御伺附方

此度之時変ヲ窺致盗業者不抱貴賤召捕事勝手次第若手向ニ及候時は打捨たり共不苦候事

郷中之建札

此度之時変ヲ窺致盗業者不抱貴賤召捕事勝手次第若及手向候時は打殺たる共不苦段御郡奉行所より被仰付也

嘉永七寅十一月七日

一其砌致盗業者夥敷有之且箪笥長持衣類等流来之品々拾取届方等も不致居候族御召捕ニ相成昼夜三日不与食物不為居座直立シテ御面縛捨也大島村ニ御召捕ニ逢者五六人有之御城下ニ数々有之候

一又奇異之事有旱魃致之事か六七月之頃あへて魚殊之外沢山ニ居ニ而壱人前ニ壱斗弐升程取彼魚仁井田より大津川口ノ口川比島川迄之藻ヲ喰収其故か鰡甚鮮くして川漁師困窮ニ及込り入候

一突浪之時高須村之川江も家弐軒流来候其浪初而打来候時高サ四五尺重り来ル依右前方より船ニ乗居候人は船覆る初之浪より跡ハ平日之高浪なり船に乗ニ而も不如右

一突浪之時大津川ハ関こたい迄潮来ル御城下ハ追手筋宿毛様之御門前迄大川端関より上江四五丁上江物部川ハ上岡村之下迄壱度一宮薊野ハ往還より上江石淵ハ人家前迄下地農人町北新町ハ座敷浸ル二淀川ハ中島之渡場より上江弐丁程潮上ル惣而御本田村江ハ潮不入して無障新田塩田江ハ潮入ル

一大突浪之時葛島之堤弐拾三間斗高須村左衛門之堤弐拾間之余弥右衛門之堤廿間斗此辺之中堤下地之堤潮江之堤中堤等潮押切る扨諸方之堤弐三尺四五割切る其内竹木沢山ニ生立たる堤ハ容易ニ切ス然処十二月十日昼九ツ時大地震同月十三日雨天之節夜明大地震ス同十四日夜九ツ時大地震実ニ天変難遁且潮も同ク高クして惣而郷廻り住居之者ニ浪大ニ難儀ニ及夫より日々日和続之処同廿一日潮江村役地辺り大火事起り西風強ク故都合家数百七拾軒焼失且潮モ干又其上右之通ニ焼失いたし哀不便成事実に絶言語候扨又夜分夜分に火玉飛事弐三度も有日数五十日過より只何国共なく天地之間トントンと響有之震も有又不震も阿り

一四国ニ売人は名々触たる商家浅井藤十郎も右之大火事ニ焼失致其砌井戸溝等江投入置其後取出たる金子拾七万八千両有しと言又貯之古銀ハ金箱たしテ其儘焼失ニ成拾七カマキ有之由実也

商家川崎源右衛門も数日両所ニ而数万人之粥を与へ其上御町方江金子千三百両早速ニ調達也

一十二月中頃より廿四五日迄之間地震少々鎮まり居候処廿七日より潮大ニ狂ルイ甚高潮ニ成扨ハ如何と諸人不審いた処(〇ママ)果而大晦日之朝五ツ時又は大震いたし良暫之間ニ而是に又人々大ニ驚キ心も益々不隠其上処々堤之切場公儀御手ニ不合右都而御普請無之シテ潮漬りし土地之人殊之外迷惑し其内葛島下地潮江三ケ所ハ人家有之故御普請成居候乍然潮狂ルイ高く成ル時ハ大地震する也心得而可宜

一其節日々烏の鳴声不宜又夜分ニも鳴ニ而諸人之気ニ障る事有或ハ処々鶏之霄啼する事度々有然ニ時は果而出火或大地震又勿疑之

一同月十三日偶雨天ニ而有之候処夫より又々日和続夫故之事か大晦日に右之通大震ニ成是ハ以前五日之震ニあまり劣らぬ震なり翌れは卯年ニ成元日之夜九ツ時又々大震有

一葛嶋堤之切場御普請十一月十一日より相初十二月十六日ニ相済

土俵弐万八千俵入ル潮切碇与不出来故潮夥敷漏入ル依而人家未潮不干去共堤より内分は三四尺低く成御普請方本陣は島田八十八土俵ニは高須村村井才蔵方控後之山を崩す

一其時分只日々平常ニ替気色ニシテ多分荒越大西風吹候処潮正月四日雨天同八日余程雨降其翌日又々大西風吹出夫より同十一日大風雨破春壱番と言時化ニ而余程洪水夫より又々大西風二日吹夫より潮暖気を催春気色ニ成然共小震ハ昼夜ニ七八篇勿論潮も高候処潮切出来候処ハ潮も低く成高須葛島大島絶海家頭東崎より介食之長崎迄ハ船往来也

別談他邦之事

一十一月二日三日関東希来大雷鳴ニ而処々江雷落即ニ日光山も過半焼失乍恐権現様御仏体茂焼失之由

一十一月四日大地震ニ而駿州九能山大崩致権現様之御神体破壊シテ不相知由ニ候

一豆州下田ハ右五日ニ高サ拾七八尋之突浪打来家数九百軒流失流死七百人其外ニ百人程魯西亜之ハツテイラニ被助其船も弐三篇碇綱切致し候

但此舟伊豆之
沖ニ懸り居候
一五日ニ遠州掛川之城破潰之由沼津之宿も右同断
一大坂ハ大震ハ不致とも突浪高成り然ニ夥敷船ニ乗居候而舟せり砕ケ千
人程損命有其餘ニ格別之愁なし
一中華ニ茂十一月四日地震致候由江南舟之者より実事直ニ承ル
但此舟ハ漂流いたし来り十二月浦戸江入津いたし居候乗組拾壱人也
則其江南船之銘
江南太字□壹佰
参拾号沙大寿商船
嘉永七年歳甲寅冬十一月庚午夕地震動山欲崩今日堪懐宝永昔且見烈火
起城東灰燼城東数阡陌不但宝財滅火中害人害馬幾千魄又見海水侵郭西
沈浸郭西数田宅不但民屋沈水中漂米漂麦幾千石人得平土不能居閉戸走
登山突□親方尋子々尋親可憐水火銷骸骨吾赤尋児入北山児幸免為黄泉
客山中相逢喜可知終夜忍寒坐苫席仰見明君行仁深賚粥賜民満腹食且営
茅廬住窮民窮民免蒙雪霜白天災遍及一國中途無餓学是誰カ
或人之哥に
大変を大平と読世直して
国も緩たり家もゆつたり
先日国許大震ニ付此儘因□致居候ハヽ国家累卵之危ニ可至因而御晦之
義願置候故帰国之上談度可致省略乍去古今天下之能勢□□士気ヲ致倍
養候義一日茂難廃然は手許ヲ始冗費ヲ省朝も非常之覚語肝要ニ存候以
上
公儀江御願書写
私領国此度稀成地震高潮ニ而城下郷浦共破潰焼失夥敷忽国民産業ヲ失
殊ニ死人怪我人不少且方今肝要海防之箸械流失与□之趣源心痛仕候然
ニ御晦之儀者重御観定之有之而容易儀ニは御座候得共国中ニハ急難不
得止早々御晦被仰付度奉内願候
松平土佐守
寅十一月廿二日
依右正月十七日江戸表御発駕被遊二月十四日御着城
地震之時覚語之事
先大地震発りたる時ハ無頓着座敷より外江飛出る事肝要也然後二階等
ニハ不可居焚火江ハ水を懸へし又竈火体之類江土瓶釜等懸りたるハ不
構勿論行燈ハ用心ニ不及家蔵惣而建物之中ニは決而不可居将又家土蔵
堀等之近ニは不可居居候時は被撲て即死する也又山地等居候時は山々
崩場等迄上ニ岩之有無幷居所能々見合用心致へし且海江続たる川筋入
江之平常潮之指引有之近辺江ハ大汐入来ると心得山添之高屋敷或ハ山
之側小山等江穀物ハ不及言諸道具迄も可運上大地震発りたる時ハ中々
四五ヶ月ニ而止ルと不可思慥五ヶ年ならでハ止る者ニは無之依而ハ小
き山之上或山添之突ニ岩も無之崩もせぬ所又高き土地之竹藪惣而竹木
之林之中又はハケ山も至而宜宜又御本田村ハ大抵あ□所ニ而も不苦程
より竹木之生立たる間等宜場所栖見合早速仮已家を結構ニしつらい風
雨ニ構無之様丈夫ニ修造致可住居也然ニ堤等ハ顕然割れる又平地之割
る事有其中潮くるいて高く来る時は震と可心得乍然後世ハ右嘉永之津
浪より弐尺高き覚悟致時ハ可宜哉既ニ宝永四己年嘉永七寅年より百四
拾九年ニ成之大変ハ嘉永寅大変より汐弐尺余り高キ由也地震中大時化
大雷鳴等ハ必定有之事と可心得日和長々続時は大震之程難斗毎々雨降
時は左程大変ニは成ぬと可心得之事
震南より北江揺時は汐高きと心得テ告西東より震時は左程ニは
無之か宝永は南より北江震候由嘉永ハ西南より震也
一去冬年号替り被成改安政元当安政二年卯正月元日之夜大震有誠ニ地震
何カ止ル哉と人眉を眉めて心不穏処正月四日漸雨天同八日雨天同十一
日大風雨彼春壱番と言大時化也夫より地震も大分穏ニ成同廿日之夜又
又雨天俄ニ烈敷大雷鳴良久敷間ニ而雪等も降り家住居之人々大ニ恐怖
致し実ニ人心地も不致処翌廿一日天気快晴随分春気色ニ而震も昼夜五
六扁斗ニ而有之処同廿四日より又々雨天廿六日之朝迄雨降続候震も余
程穏ニ成同廿八日又々雨を催し其夜大抵之風雨波春弐番と言時化也同
廿九日雨降続共震は不止しテ矢張有

一二月朔日彼岸ニ入候得共江廻之百姓共籾を漬る者壱人も無之其中偶汐
干ニ相成候田地等作る百姓は少々籾を本田村江頼朋候者も□候得共一
円国海と成日々浪立候ニ付中々稲作□付等之儀は存懸無之只昼夜不安
寝食人気欝々敷若田地汐干ニ不相成時は忽百性共渡世ニ可宜果哉と渡
世案し暮而已候

一正月十一日御馭初之御触有之其後御延引ニ仕触来り二月七日ニ御馬役
斗御名代相勤御馭初之御規式相済候

一十一月四日之震ニ大地震発ると言事考定したる者有猪之尻温陣屋之老
人八拾歳之由前日之震ニ鈴浪と言浪立たるニ依て大震大汐ニ成と言事
を知り諸人に舟之諸道具一切を山江運上したる由也

一三月十七日より又々高汐ニ成晦日汐ト同断有之処地震サエカエリ昼夜
之中ニ壱度程余程烈敷震有同廿日より汐三尺程低之儀候得共夫ニ而も
平常よりハ潮甚高く候

一高須左右衛門之堤下地弥右衛門之堤相場漸三月十日頃地下受普請被仰
付四月廿五日頃相済

一地震モ汐も先同断ニ而有之処四月十八日甚高汐ニ成大晦日汐よりも余
程高く然ニ其夜より大風雨ニ成洪水葛島前堤以前之切場浦度及破損汐
高く溢れ入溢凡之諸人大ニ騒動又々高き屋敷之己家入或は山江遁止ル

一四月廿四日之夜四ツ時又々烈敷大震有此震東郷中至而強くして植田久
礼田辺り家居少々潰込東郷中ハ随分騒動同廿六日昼夜又々大震有

一葛嶋以前切節二度目御普請二月中旬より腰養相勤り本陣之井上敬三郎
参り御成就ニ成候処右四月十八日之風雨ニ及甫□□而如以前潮入来り
新木之前介良長崎之西鹿児前等余程稲作致有之処哀成哉如□国海ニ成
稲作十分ニ出来候処其汐ニ四方千石損場ニ成る
右御普請仕来方不宜沢を以島田某後は井上某両人共　公儀より御叱
被仰付由

御台場仕損之事共言

一六月中地震不止昼夜ニ七八篇或五六篇中揺小揺有滞一両日止ルカニ思
ヘハ又々時々震

一絶海川ハ大象村之願ニよりて地下渡世川被仰付

一六七月ニ至り而も堤之切場如何之御詮儀振り哉御郡奉行所弐三度御廻
見茂有之候得共都而御普請不被仰付是ニハ諸人大ニ歎息し実ニ目も当
られぬ有様也

一卯之春鹿児村大津村より新木向に小キ塩切縄手三筋程拵候所始終切ニ
付鹿児人家前江大成潮切堤築立潮是ニ而堰留候也
我所卯七月大時化大洪水ニ成此堤切レ人家へ潮入ル

一介良村ハ長崎之水張堤初度ハ切候得共後々は関留候也
是も七月時化ニ切レ人家江余程汐入ル

一津呂室津之両湊ニ限り大変以後卯九月迄三四尺地形高く成り候而大船
不入処九月末頃ニ至り余程汐増ニ成り三百石積泣之船湊江入由
是は宝永之時も左有之なり

惣分上灘ハ浦戸近辺と汐高き事同断

一六月廿一日かり日和続居候処七月十二三日之頃震又々少強之成其上海
辺浪音大ニ高き鳴時化ニ気色を催し同十四日より東風之大時化吹出殊
之外高汐成先御城下近在ニ而は五台山之八助堤五郎右衛門堤二ケ所破
損潮江西之久保及大破丑之助堤彌右衛門之堤二ケ所大津出分之堤五間
斗切是は不日成地下普請ニ被仰付早速成就葛嶋之切堤次第ニ弘く成介
良長崎之堤坦両所切人家江汐入鹿児人家前堤切レ汐入御殿下迄汐入候

一高汐数度有之候得共其中別而高きハ去十一月廿五日時化之汐六月三日
大浪音ニ成北風吹候時之汐七月十四日東風吹大時化ニ成右之汐より七
寸程高く以前不入高屋敷江処江も汐入ル依而諸所之堤幷人家等破損此
汐高知ハ茶運場高橋之偶より北江汐越同町西之木屋前橋西より東江汐
越御郭も北与力町辺汐深くしテ人之股迄浸ル長浜も大荷船往来也

一近年惣而諸役人役替甚早クしテ去今御役人も段々替り候得共先六月頃
迄之御役人

御奉行役　　福岡宮内
　　深尾弘人
　　五藤内蔵之助

御仕置役　村田仁右衛門
渋谷　伝
末松務左衛門
御目附役　大崎健蔵
麻田構馬
市原八良右衛門
吾川土佐長岡　神山貞勝
御郡代高知詰　真部順馬
高岡御郡代　坂井健吾
須崎御陣屋詰　千屋勝守
香我美御郡代　浅井始馬
赤岡御陣屋　平井善之丞
安喜郡代　間　文右衛門
安田御陣屋詰

一田部島前稲作畑作等十分ニ出来居候処卯七月十四日東風時化洪水壱番之高汐ニ而右如申出分南之堤切候間汐溢レ込ミ稲作畑作等損傷ニ及勿論人家江過半候処堤切場ハ頓而地下普請ニ被仰付不日成就ス

平素可有心得事

一往昔白鳳拾三年甲申十一月大変ニ而星等降事如雨土佐国も大地震ニ而浦戸より南三拾万石余沈滅之由只今ニ而も其沈跡海中ニ有之趣漁父より承也夫より千二十年後宝永己十月四日大地震発り其節も数万石沈切ニ相成由其後百四拾九年を経

嘉永七寅年十一月五日大地震発り浦々川々江突浪打入諸方人家田地沈溢且焼失不鮮処

右住居不可致田地等不可求之土地大既等茲ニ記ス至後世子孫勿背之戒之慎之

一介良村之内長崎一大津村之内丸山辺り田部島辺り一高須村之内新木島島砂地大島絶海家頭西孕五台山東崎唐谷吹井前下知農人町潮江比島蔀野秦泉寺前・一宮前

尤格禄被下置人之住居ニハ不苦又漁師等之住居ニは至テ宜也

右之土地柄大地震発りたる時は突浪参り四五年沈地ニ相成り候時田地等不可求其内居家敷ハ碇与高地江右之心得を以住居致事ハ考有事ニ候然共大変発りたる時ハ大道往来不調ニ付成丈住居も深く可考合爰ニ一ツ有火事ハ常住遁事ニ付此用心ハ不及言大地震大変も天地之病ニ付百ケ年二百五拾年之内ニハ必定有之事也心得深可宜勿論也

一七月廿八日大雨降右ニ付洪水其上波ハ朔汐ニ向高汐ニ成乍然地震ハ余程緩ク昼夜ニ弐三篇発り候得共人ニ寄知りたる者有又不知者も有其中ニ徹ゆる震も有夫より専雨天続キ日和鮮く候八月十六日又々ハ朔汐と同断汐大ニ高キ然共右両度之汐盆汐よりは八九寸程低し

一高汐度々有之候得共十一月十六日之汐同廿五日時化之汐三月晦之汐卯六月三日汐七月十四日之汐同月廿九日之汐八月十六日之汐

一大変度々有十一月五日之震は絶言語候但一升震　十一月十三日夜明大震但七合震　同十四日夜大震七合五歩　十二月大晦日朝大震九合之震　正月元日之夜震七合之震　四月廿四日之夜大震八合之震　同廿六日之昼大震七合之震　九月廿三日之昼大震五合震

一八月十九日より雨降出廿日朝より門イタミ大時化ニ成大津村より下之神祭ニ候得共鹿児より下家来壱人も無之誠ニ沈地之事ニても有漸晩ニ景雪晴鹿児御宮方場ニ而御祭礼被行供水大高汐朝夕弐度去盆汐より六寸低し諸方数々及破損地震は段々緩り居候得共昼夜之内ニ弐三度ハ発ル左右衛門弥右衛門等之堤尽く破損致同月廿七日雨天夜より大雨降餘程洪水又々高汐ニ而

去冬大変之節

一焼失家弐千三拾弐軒、一流失家弐千八拾九軒、一潰家弐千六百四軒、一半潰家弐千九百四十軒、一怪我人七拾四軒（〇ママ）、一行衛不知者百八人、一損田一萬四千石余一葛嶋外輪堤八月廿七日より御普請相初り至而結構成御仕上ニシテ溢村住居之人々少々至開眉御普請方本陣ハ新階三八主之御普請奉行時ニ御見分有之庄屋相見ヲ以仕成也実ニ古今未聞之大普

請ニ志テ金千七十貫余之御積りト言顕十一月中旬頃成就ニ至
一高須葛嶋左右衛門下地弥右衛門潮江西之久保等諸方御普請所江廻り百性共抜土夫敷持□折柄暖気ニしテしテ昼夜之差別なく相稼る分之賃銭を設る
一十月廿四日潮水大ニくるい日中五六度汐之指引有之因而は諸人大ニ恐れ御城下之人を初トしテ郷廻り之人々遁支度等致者有諸道具を運ひ或焼飯弁当相調居候処震り潮共別条なく穏ニ光陰相過而三浦を初御国中之諸浦何所も右之通之覚悟ニ而有之由也
一始ニ如申江廻り田方江潮水溢水溢入湧候たる国海と成ニ而海魚夫敷居候ニ付内川漁師之者かれこち舫鮑等沢山ニ取将又川魚苗蝦海老沙魚鰡等ハ別而夫敷事ニ而投網壱挺打候得ハ鰡八九十或は八百弐百も取日々船壱艘ニ弐拾匁より三拾匁四拾匁程之銭を取於漁師ハ古今ニ無之国を没候尤田法之上ニ而は漁事一切御法度相成候而ハ犯之背者者数人有之其者等ハ追而小料ニ被行候
十月二日夜四ツ時江戸俄ニ大地震発り候而御大名屋敷市中共数不知破損其上大火ニ而焼失致死人九万八千人余有之絶言語候其余怪我人彼是一切准之候ニ付推而可知也然共土佐国御屋敷ハ大破而已ニ而焼失ニは不相成尤日比屋御屋鋪ハ潰込ミ其破損ニ被打安養寺夫婦御足軽壱人即死之由上々御方々等ハ巣鴨大塚御屋敷幷築地御屋敷両所江無御怪我早速御立退被遊先以恐悦之御儀奉珍重候当分此所ニ御住居被遊追々撰良晨御殿向一切御普請ニ相成候十一月十二月地震穏ニ相成大震等ハ決而無之様相心得諸人静謐相唱居候処不思寄十二月十七日夜七ツ時九月廿三日之震ト同断五合之震 大震両度相発人皆驚騒家より外江飛出候一此時分米穀諸品共随分下直ニ而先米壱石ニ付百弐拾匁ニ唐芋ハ五匁ニ麦ハ八拾匁ニ篠巻ハ弐両七分ニ
一明レハ安政三丙辰年ニ成地震ハ随分穏和ニ成候得共正月二日三日ト甚高潮ニテ去卯正月元日之汐ト同断ニ高く起る
一宝永之大変ニは仁井田種崎流失ニ而嘉永ニは桂浜不残流失ニ而仁井田種崎ニは無損失事
一御馭初も弐百名以上相勤に成与力騎馬ハ不及馭御触有小組頭も三人宛壱ケ年間相勤る様被仰付相済
一辰年二月朔日二日甚敷高汐ニて正月二日三日之汐よりも余程高く其上西風強く吹候故五台山前甚夫大島辺も大浪立小船等難乗先月雨降同廿二日之雨より日和続ニ而火玉等飛事両度有之将又異事有沙魚鰹春口鰡ザコ江蟹等夫敷水辺ニ死事有ニ諸人不審かり居候処朔日之夜七ツ時去年四月廿六日之震と同様之大震あり皆仰天し家より外へ飛出ル
一孕五台山山前高須辺江廻りニ死魚夫敷有之候得共是は其寒甚強起故之事ト評も決致去共惣而日和続ニ而地震は昼夜ニ二三度或は一日ニ壱度斗ニ不絶小震有其上三月朔日二日ト甚高汐ニテ正月二日之大汐二月二日之大汐より八寸九寸程高キ然ニ干ル事も能干候而今弐尺斗干候得ハ平常之汐ニ成右ニ付別而田方之汐大変以後下落之汐ニ成惣分江廻り小小之稲作仕付方地拵出来兼居候処も右之大汐其上時々震も不止故百性共浮雲加減ニ而光陰ヲ送り候
一此時分百姓専門之者共ハ渡世方無之ニ付諸々之御留山を渡世仕成ニ願御差明ニ成是ヲ潮家内共撫育方致兼居候三月十一日之夜五ツ前中々之大震有之人ニ寄家内より外江遁出ル一春以来惣而雨少く候処三月十五日昼夜ニ中震五六度発る
一惣而苗ニ生立至而悪く潮入之出地ニ不限三ケ村ニ弐ケ村は悪くしテ百姓共植付ニ四月上旬地震不絶小震有之候所同十一日頃より震随分共穏和ニ相成十五日之大潮も至而低く成りて□彼是惣分静謐ニ相見上勿より日和続御国中甚敷早魃ニ至り候得共都而地震之沙汰も無之漸廿日より廿一日大雨降諸人大ニ相歓麦作ハ古今稀来豊熟ニ而候
一五月朔日之潮又々高く地震モ折々発り此時分高須村左右衛門之堤御普請相初り段々結構ニ相成場合右堤之井流より高汐漏入り終ニ堤破損およひ此時其場江丸之上四五拾石稲植付也相応ニ出来居候所哀至極如以前国海と成人甚歎之其場所四五反之中御普請相初否御成就ニ成本陣ハ浜口貞右衛門勤也惣分江廻潮入之土地苗之生立ハ悪く候得共稲作植付ハ随分生立宜有之候処四月上旬頭より早魃ニ成夫より次第ニ潮湧出蓮

虫等害をなし稲作甚敷大痛ニ成百性共手入方□□手無其効込り入候然ニ其中一向潮出ニ不構初は悪く候得共得共次第繁茂し勿論太稲辺も大痛や尤掃留を入置候者ハ冷りニ不構痛ニも不成石灰等モ糞ニ随分宜由ニ候下知潮江比島等も高きハ随不宜候得共処ニ寄痛ニ成由ニ候猶委敷事稲作仕付等之儀は□記ス

一五月九日之夜より大風雨一同月十五日又々大風雨浦戸御畳瀬破損船拾艘死人拾五人有由ニ候足ハ浦戸斗之人之由

一此時分雨降山ニしテ半日終日或終夜大雨小雨共降続事三十日余有地震茂一日ニ二三度或一日一夜壱二度二三日一度斗不絶小震有

汐入田地稲作心得之事

一久敷汐ニ浸り居候田地は冬春耕割日数長く四五十日斗大陽ニ干置其儘打返し植付る事第一也将又田地植前土肥幷掃留肥を入直ニ稲を植るも甚宜左様良侯時は植以後格別手入ニ不及而殊之外大出来ニ成也又上より下江度々水を通スも宜候得共源水をも不可留冷り而必招腐葉焼之様ニ成込り入也又草をも毎々不可取不宜下地堅く致置植付以後枯候時は早速ニ植直スへし次ハ至而宜すト思へし又蓮虫沢山ニ居候田地ハ平常之二番草ト思しき時分ニ石灰を反ニ三四俵斗茂入候時は肥ニも成彼之ごかい（ハスムシ）七八歩死ス也冷りニ成或は本損する時は中々稲ニハ難成依而又々千堅く致ス時は其患なし屋敷田等ハ初ハ枯候而も植替以後ハ大ニ繁茂ニ成肥ニは不及程ニ出来る者也植以後ニ冷りニ成時は早速ニ干事肝要也

一塩田新塩之田地も右之通ト可心得肝要也

汐ニ強キ稲

一早戸弥六一遅仁井一太赤京伊勢弥六

右之稲随分本数を植べし

一権八返り早仁井は田地之更ニ依ニ付見合植也

一惣而苗も稲も四方も干ス事を最上トス第一トス貴べし

一六月十日より日和続廿五日之早魃ニ至七月六日之夜潮少し雨ニ移ル七月七日之昼地震中震同十七日之夜中震二度汐大ニ高く同十八日雨天去年盆汐よりも余程高く高須左右衛門之堤南之切場四度目御普請初り居候処此夜終ニ及破損諸方之堤既ニ危く見受候処数千之土俵を以潮防く

一八月中海汐随分高く指引有地震も時々発ル八月廿日大津神祭之節葛島往還取繕致し其砌折柄潮干スして爾来之通御祭礼行列等被行九月中地震折々発ル潮水も以前ト同断ニ高く指引有之

他邦之事

一八月十一日大坂表稀成大雷鳴ニしテ四十八ヶ所雷火落下致人損弐人有由八月廿五日江戸表雨降居候処夜五ツ頃より誠ニ古今稀成大時化吹出八ツ頃迄甚敷去年十一月二日大地震より茂三割程も家居之破損夥敷其場合出火ニ成人損も是又夥敷其上大潮高ク入来土州御屋鋪築地ハ床迄潮来り其上潰込ニ人損壱人怪我人数々有之誠ニ絶言語趣ニ候一八九月之頃大島左右衛門葛嶋下地之内川漁師夥敷魚を取売々致し壱人前ニ四五玉より百目余りも餘銭を求諸人大ニ羨也

一七八月頃より早続地震も不絶発り十一月ニ至海潮餘程涸下り朔日十五日ニハ平常之汐より八寸斗高き位満汐ニハ弐尺高き位之事ニ成り江廻り百性共翌年之作付ヲ楽者多かりし同月廿三日之潮七ツ半時地震中様良暫是ニ諸人大ニ驚家より外江飛出同十一月十七日地震冬サエカエリ昼夜五六度震同十八日中震弐度諸人内より飛出

一去ル寅之大変より四ケ年成当安政四己年正月元日之潮大ニ高く去卯年正月元日之汐ト先如同様見ゆる地震も昼夜之内ニ二三篇発其中余程恐る程之震ト有

一安政四己年正月廿二日夜四ツ時地震少長く大ニ震

一去辰十月より海潮随分低くシテ江廻り之田方窪地ニ至迄大汐之節ハ干落ニ成当己正月迄百性共実ニ相楽居候処二月ニ至り汐干不宜三月ニ至り而は又々如去冬干落ニ成右ニ付早春より高須村は汐切玉縁公辺へ相願有ニ候処四月上旬潮願満ニ成然処当年モ冬去年も同様下地高須新木鹿児辺江苗之生立甚不宜拾人ニ志テ八人迄も不生立其中弐人程ハ上出来もあり夫ニ付実ニ心疼ニ懸り殆及迷惑然ル上地御本田村ハ苗之生立

別而宜シテ江廻之百性又々貰ニ廻り所縁を求貰之漸植付等致場合右汐切玉縁急速ニ不仕成而ハ汐溢ニ成故百性共甚繁多殊ニ諸方御普請等有之故に雇人一向壱人も無之其上四月下旬数度大雨降植付たる農場ハ不及言往還ニ至迄大溢成百性共当惑至極実ニ以絶言語候

一下地潮江五台山等ハ汐切玉縁願村茂有又見付不出来故不願村も有又跡より願下ニ成も有又仕成方仕茂有

潮入之田地苗不生立所柄蒔付手入仕様之事

一籾を蒔時濁り蒔ニしテ翌日其濁り水を流スべし夫より深水を留ぬよふニ随分共干スへし夫より水を入流スへし又々如右水を入流スへし余程干ス心持ニ致時は無間速苗生立也

一五月節句前後久敷天気寒冷ニしテ既ニ当月八月九日玉泉陰様御法事之前日急速ニ御触出ル

此節不正之気候ニ付度冬取交之着服勝手次第ニ被仰付之

一五月中旬地震度々発り昼夜之中五六篇其中ニ発所長雨降続キ既ニ廿日昼風雨洪水之砌餘程徴ゆる震発人ニ寄家より外江飛出堀留玉縁餘程危キ見ゆる勿論植付之稲太く成居候得共大溢ニ成気毒千萬ニ至ル少々損傷ニ成閏五月廿二日より日和続ニ成居候処六月朔日日之入時地震中ニ餘程徹ゆる震発諸人家より外へ欠遁出夫より早魃ニ成同十九日夕立降諸人大ニ慌同月廿六日夜四ツ時前地震余程震

他邦之咄

一武州江戸閏五月八日地震中雷発諸人大ニ恐レ家より外江遁出ル

一閏五月十三日奥州大雪降事五拾里四方降積事壱尺五寸江戸米相場壱石ニ付代弐両也

一七月十五日潮水随分高く来ル山田町之北七軒町永国寺町之下追手筋之下納屋堀等汐差入ル

一七月廿二日一昼夜大雨降潮江川洪水出俄之事ニテ堤防方等間ニ合す終ニ大橋之南詰東西三拾間余及破損家数弐拾間流滅ニ成古今稀成事也

大変之時即死之人聞知之者

山田町佐田屋甚右衛門一ノ竹島屋捧平娘新市町仁尾順三郎方ニ八人壱人井之中ニ而死同町中村屋ニ八人同町御紺屋三木孫次方ニ下女壱人是も井之側ニ而火迫り死ス蓮池町治療医小松佐源次方ニ弐人是人故以須崎ニテ父母弐人流死田淵郷士島村達右衛門妻士蓮池町一屋町御用人池田末吉妻

茶円場潟屋之老婆同所門口ニ而三人新市町馬方人馬共ニ納屋堀酢屋ニ弐人新町他支配組秡勘丞妻八百屋町松屋岩蔵兄弟弐人農人町百性喜三丞嫁ト弐人播磨屋町京屋藤助弟材木町岡本屋妻

同丁山田町山田屋藤兵衛妻其懈ニ女壱人

農人町有沢藤太妻新市町大村屋向側高主ニ子被撲生なから焼死実ニ憐ニ而絶言語候

蓮池町加田屋亭主行方不知所翌卯八月□□之茂ニ被撲屈ル北新町久保氏孫組母弐人□□□□（〇原本やぶれ五字分）

一安政四己年七月廿九日俄ニ東風大時化七ツ時頃より吹出即時ニ堤切大洪水下地潮江五台山高須田部島布師田一宮村鮹野前之堤壱ケ村ニ七八ケ所不破損堤一向無之大変之汐より四五寸高し家居稲屋等壱ケ村弐三拾軒及破損勿論御城下迄新町農人町ハ不残水溢入近在ニ而下地村ハ堤江己家掛等致兼寝起も確ニ不出来実ニ哀成事無勝也六拾三ケ年振り之時化也ト言石淵川洪水ニ而布師田常□嶋辺夜分ニ寝たる者壱人も無之由ニ候

一葛嶋之堤五ケ所東崎一ケ所五台山八助五郎右衛門拾一ケ所下知南渡迄之間五ケ所左右衛門三ケ所弥右衛門同断母七塩田五ケ所潮江南之丸数不知其餘略之

一八月十八日朝地震餘程震大汐時ニハ不絶発

一天王前橋道御普請八月十六日より初ル

下知高須御普請八月廿五日より初ル

一八月廿五日地震中揺昼九ツ時発良長クシテ諸人大ニ騒動志テ恐ル此時分地震サエカエリ小震ハ昼夜拾篇斗震

一下知御普請之御積り□□弥右衛門□□（〇原本やぶれ六字程）

長場江左右衛門之堤壱万五千

下知高須九月下旬之成就葛島前十月上旬ニ成
一安政五午六未両年六月より十月頃迄とんころりト申病大流行ニ而郷町共人大ニ死ス右之病昔より無之趣
一同七申二月井伊掃部守様江戸桜田御門外ニ而水戸□家来十七人ニ而首打事

〔土佐室戸浮津組捕鯨史料〕〈渋沢敬三刊、昭14〉

かくて、以布利浦では、安政二年以後、年々八銭二百五十匁を網代除銀として下賜された。然るに二年後、浦人共衰へ生活困窮して来たので、事情をうつたへて除銀額を増加せられ度旨を、度々藩庁に出願したのである。

覚

以布利浦ノ義ハ従来網漁業致、就中冬春大魚漁仕来候処、年々鯨場所相初候ヨリ右網順番ヲ以テ夜立三帖被指明、昼分去寅年ヨリ網代除銀トシテ年々弐百五十匁両組ヨリ請取申候処、大変以后右浦人共相衰別テ困窮、外漁業等相止候処無拠仕入方不相整、一向大魚漁相歎キ委曲度々愁願指出候通、網代被差支候テハ生業相放、作配方難渋候得共、鯨方迚モ仕来ノ義ニ付指留ノ義当然ニ候へ共、外浦トハ違是而已ノ儀ニ付、鯨方ヨリ介補ニ不預候間、何分夜立ノ義ハ越方相定ノ通、昼分ハ網数ニ不拘五百匁増ヲ以テ都合七百五十匁宛為除銀被渡遣度段、両組鯨方へ御下知被仰付度、是迚モ直々右浦ニ遂詮義候ハヽ、無際限モ願出顕然ニテ、役場詮議振ヲ以テ御達仕候間宜御詮義ノ上急々御下知被仰付度御達仕候

巳十月

幡多御郡方

然し乍ら鯨方では、以布利浦の主張を容るゝ時は他浦よりも同様の陳状出ずべく、然る時は「取扱混雑ニ及ブ」につき、右主張を一蹴したのである。

本文以布利浦前ノ儀ハ、鯨漁業内懸網代第一ノ場所ニテ、夜分付込候鯨寝魚ト唱翌朝早々取留申儀ニ付、従古来両組共出張ニ相成候時ハ、昼分ハ不及申夜網迚モ屹度指留之儀旧例御座候処、近年右浦難渋ノ趣連々願出、夜立三帖被指明候、然ルニ鯨方業迚モ一段ノ儀、殊ニ莫大モ無之御本入銀ヲ以テ仕出仕候、右大魚網ノ為メニ壱本ニテモ取洩候時ハ、数十貫目ノ御損失至申儀ニ付、不容易ノ訳ニ候へ共、右ノ通御慈恵ノ御沙汰被仰付置候、其後依願寅年ヨリ両組格段詮儀ノ上相当除銀ヲモ被渡遣候処又々大変ノ後難渋ノ趣申出、幡多御郡方無余儀申出ノ儀、御聞込ヲ以テ、右此御場所御達ノ筋詮義仕候処、際限モ無之、且此上御慈恵被仰付候テハ、鯨場網代懸ノ浦々ヨリ、如何様ノ愁願差出候義モ難斗、取扱混雑ニ及候ニ付、御沙汰難被及儀ト両組共詮義仕候間、此段御達仕候以上

五年午二月

御手先鯨方

〔暁霞村史〕〈松本実編、昭30、香美郡〉

嘉永七寅の年（嘉永七年に年号を安政と改める）八月五日より六日迄、西川東川より槇山まで大地震。同十一月五日より御国中大地震、其の年十二月三十日まで夜昼揺り止みなし。その内十一月の五日七つ時より、御城下は申すに及ばず、西東浦々町々は大いたみ、其の時津浪うちこみ、浦々御城下共におびたゞしく人家大いたみ。もっとも其の内に十二月十日同十四日の夜、三十日大分えらくゆるなり。明正月二月も、ゆらん日は一日も一夜もなし。初めて地震揺る四五日前は、地がづんづん鳴る。一二年前どしより、粟、そばを虫食うなり。もっとも大ゆりの時、泉の水増し、其の後十二月二十日より、大峯谷水明正月末方まで一水もなし。正月末方より水出来るなり。四月五月頃も地震は揺り止まず、もっとも此の内はちくちく間はあるなり。九月十日の晩大分えらしと。もっともひどかった十一月五日には、家屋動揺し壁や瓦は落ち、戸障子がはづれはじめると、人々は驚きあわて、顔色をかえ、牛馬をひいて、附近の竹やぶに避難した。杉田では大きな岩が飛竜の勢で杉田井に落ち、白川では大音響と共に、有ノ木谷に山崩れがあって人家が埋り、西川、永瀬

でも岩に打たれて死んだ人があった。五日の夜は一夜のうちに三十五回も揺り、地面に板を十文字に敷き並べ、更にその上に莚をしいてそれに坐り夜を明かすこととなった。夜半になって突然太郎丸方面から盗賊が来たからめいめい手道具を持って出向へという大声が聞えて来た。それに続いて、津浪が来るぞ、大川の水が塩からくなったと叫ぶ声も聞えた。地震の為恐れおののいていた人々の心は益々動揺し、手に手にたい松をかざし、米袋を背負うて山へ山へと逃げ去った。五百蔵、白川、有瀬、日ノ御子、谷相、野尻、太郎丸、韮生野、小川、吉野、拓、永野、朴ノ木等目の及ぶ限り、たい松の明りが続いて星の散らばった様な状景を呈し、赤子を背に、老人を肩にかけ或は手をひき、又生んだばかりの嬰児を置き捨てゝにげる者もあるといったさわぎであったが、みな流言で津波は来なかった。(「香北町史」同文あり。「天地の間の事覚付」による)

〔山田文化小史〕〈鏡野小学校創立六十年紀念会編、代表、米岡猛馬、昭9〉

七年十一月五日大地震ありて東町の公儀釣井を掘りし時の廻り道など潰ゆ(中澤虎一記録)

安政(6)元年(八〇年前)山田大地震、高知市被害殊に甚だし(森本、岡崎登太郎記録)

〔国府村史〕〈竹内英省著、昭36〉

(〇比江公文家文書)

覚

安政元年寅年十一月大地震、同四日朝五ツ半時少々揺、同五日昼七ツ半時大揺、高知揺別、下町大焼つゞいて揺次第に小揺に相成、十二月四日迄揺、同三十日大揺、それより小揺、四月廿四日大揺それより小揺に相成、嘉永六年よりあめりかのふね来始めこうえき致しくれ候様に申かゝりそれよりいろいろくるいあり。

〔斗賀野村史〕〈明神健太郎著、昭29、佐川町〉

地震余聞　與七の釜かぶり

安政元年十一月五日の朝須崎浦え釜買いに行った川ノ内の片田與七は帰途から谷の山路で大地震にあい、頭上に落下する岩石をこの釜をかぶって危く帰宅したと云ふ。(〇中略)　安政元年十一月四日四国、中国地方にわたって大地震あり、本村も所所崩壊、家屋倒壊多く、人畜被害も多少あった、この地震に東組大平上方の光り岩の大岩石顚落したと伝へられるがその岩石は現在谷の北側にある。

〔佐川町誌〕〈西村亀太郎著、大8〉

安政元年十一月五日申ノ中刻（午後五時頃）ヨリ大地震アリ震動凡半時計リニシテ少シク歇ミタルモ時々震動止マス各戸屋外ニ小屋掛ヲナシ避難ス同七日ノ夜ニ至リ誰曰フトナク一般ニ海嘯襲来スト謂ヒ伝フ故ヲ以テ山上ニ避難スル者多シ是レ一奇談ナリ其後震災時々止マス十一月中ハ殆ント小屋ニ起臥シ人心恟々トシテ屋内ニ在ルモノナシ

〔日本の地震と津波〕〈沢村武雄著、昭42〉

一円嘉平次（藩の役人、沖ノ島に出張し目撃した書状）は、「扨又沖ノ島の近辺に当り海上より真黒き雲と片面は火災の燃ゆる様に火の雲との気立ち登り実に二た目と見られず恐敷気色とも何とも申すべき様なく、」と述べ、また、「鳴動西方角に当り、百目程の筒音の様に鳴るや。」と述べている。

また、安芸郡野根町立図書館発行の安政大地震記録（謄写版刷）によれば、「幡多郡足摺山と布山と臼婆山と三ケ処より、黒煙飛び出し右三ケ処の煙壱処に相成り、足摺山沖拾壱里斗り向うえ黒煙相立ち、次第に薄く相成り、話の海上宮の形に相成り候事、近々辺の者見奉る。」とあり、これは恐らく足摺半島東側の海岸地帯で山越しに黒煙を見たため、山から発したような錯覚を起こしたものであるまいか。

〔甲浦物語〕〈東洋町編、昭40〉

嘉永（安政）の地震と津浪（小池の村山氏記録より）

嘉永七申寅年十一月四日朝五ツ半時、大地震が半時ばかり甚しく、甲浦の港はあびきがあって町をひたし、小舩等を町へ打揚げたが人家の庭まで来ずに引汐となった。其夜二三度ゆったが何事もなかったので安心して居たが、家財は高い所へ運ぶなど大騒ぎであった。

翌五日も何事もないので荷物を家へ運んだところ、五日の七ツ半時大地震が来て前日より十倍も強かったので町も歩けず、人は皆門に出て垣などに取りすがって居た所、沖から二丈ばかりの大汐が押し来ったので、人々は大に驚き山に逃げ上る者、船に乗る者等で大騒ぎになった。

山に逃れたものはすべて無事であったが、船に乗った者は汐に引かれて死んだ者十八人に及んだ。

五日の夜になって、一晩中揺り明して、其の中でも殊の外に大揺りしたのが五六度もあり、其の度毎に汐が押し込んで来た。

夜明けて大分静かになったので、家の有様を見ると甲浦四五十軒浪に取られ、其外の残り家半潰れになって居る。お米蔵、お蔵番居宅共に流失して跡形もなくなって居り、金目浦より波打ち越したる為め、御船倉が倒れて御舩へもたれた為め関船四艘は大破した。

汐の先端は超願寺門前迄、万福寺経塚限り、小池坂中程迄。然し白浜人家は流失なく居宅は座敷迄汐が揚った。人命は異状なし。皆御殿山、玉泉寺山へ逃げ上る。御殿橋は三つ四つに折れて川内八幡宮鳥居前にまで来て止って居る。小池前の土手が切れて汐先は八王子権現石壇三つ残る。八幡宮境内へは満たず、横田下限り、浜田は中程迄、川内池の淵、久保限りに汐が来たのであった。

「此波、沖より来るにあらず、揺りに応じて世界傾き押来る也」

地震の揺り止むと同時に汐が来たとある。そして浪の為めに惣体が浜の如くなって野菜は勿論青きもの一本もなく只野原を見るが如しとある。人々は家財を高処や山に運んで小家を建て六日からは我家に住む者はなかった。毎夜五六度づつ揺れるので同月十五日迄は山小屋を住居となし、

其の後我家に戻ったが、明る年の正月迄両三度の地震やまずやはり逃任度をして居た。

「後代になり安政元年と記すも有るべけれども同年十二月年号御改元あって安政元年成るゆへ、大変は矢張り嘉永七年なり」

とにかく甲浦より幡多郡まで残らず大痛みがあり、其の中で地震だけで浪の入らざる土地は、生見村、野根、佐喜浜、田野、奈半利であって、手結と夜須は大流れ、赤岡は汐の難なしとなる。御城では汐入り揺り潰し、火難等甚しく、宇佐、福島は大流れ、久礼、須崎、上のかえ、下田、ハタ入野は大流れ、宿毛中村は大火事、揺り潰しより火起ると記してある。

阿波の方は、古月御番所、同御番外人家一軒も残らず浪に流され、大道筋大破損して往来に困った。宍喰浦は人家大流れ死人も少々有り、漁舩や潰れた家が鈴ケ峰の礎迄流れて来たもの数々あった。奈佐は山手の人家だけ残り、竹ケ島の人家流失なく、金目は一二軒流れた。朝奥は汐の入りが少く。浅川は人家も舩も全部流失寺二軒だけ残る。牟岐は東牟岐は人家も船もみな流失、木岐由岐も流失したのであった。

「徳島ゆり潰しより火起る、内町出火稲田九郎兵衛殿が島出雲殿両御屋舗より出火にて徳島四分通り火難」

今回の地震で白浜明神の鳥居が落ちて二つそつに折れ、前の堂は揺り潰しになって微塵となった。甲浦の舞台、道具納屋流失して、狂言の諸道具も流失してしまった。御殿は少しも難がなかった。元越御番所は無難、浅宇津は家の床迄波が上る。

此の地震の余波は安政二年四月頃迄折々地鳴りして地震が止せず、御城下は寅十二月二十日同地震、三月十九日大揺り、

「大守様にも仮御殿御住居遊ばさる也」

とある。そして安政二年十一月頃より鎮まり人々は安堵の胸をなで下ろしたのであった。

㊟村山氏（元越番所役人）

御殿山（御殿か。現在甲浦小学校附近であるからその背後の山を云うのであらう）

八王子権現＝現在の王子宮

〔大野見村史〕〈高岡郡、編纂委、昭31〉

検見は、お役人衆立会のもとで坪刈し、それを籾にして、必ず女手で箕にてさびた上で決定されたのであった。当時「お蔵（郷倉）」が大野見にはなかったので、藁で髪を束ねた農民達はわざわざ久礼のお蔵へまで旧坂越えに「かがり米」を運ばねばならなかった。且つ久礼でのお蔵入れ墨付きの納入証明書をもらった上これに藩庁からの認印を受けなければ、十二月の納期など正月準備は出来なかったのである。で、これが完了すれば惣老は帰郷早々、夜が夜中でも郷中を「正月をしてよろしいぞ」と「フレ」（通知）して廻り、家内中は手打そばで年貢納めを祝った程である。

安政元年寅の年の「お蔵入」として語られるところでは、十一月五日一番鶏に起き出て漸くお蔵入れしての帰途、丁度久礼坂の真中で所謂寅年の大地震に遭い立ちも這いも出来なかった由である。

〔高知県香美郡立田村誌〕〈宮地美彦編、昭13〉

安政元甲寅年十一月の四日五日と大地震があった。初め四日辰の刻に強震があつて海嘯が来、第二震の海嘯が第一震の時よりも益々高くて立田村の人は北方山田方面に避難したが海水は田村の伊都多神社々前までしか来なかった。避難は家を早く出て竹藪に入るがよいと云つて「カアカア」と云ひつゝ避難したと云ふ。カワは川で津浪の入り来れる川水を見よとの意かと云ふ。翌五日申刻又大震があつて、次で時々微震は絶えざつたがその夕方雨を催したから最早強震は無かろうとて人々己の住居に帰つて寝臥せしに其後も時々大音響を発し強震微震等起つて翌年正月まで止まざつたと云ふことである。此の時の損害は人畜の死傷其他が其大であつた。即ち死者三七二人、傷者一八〇人、焼失家屋二、五〇〇軒、流家三、二〇〇余軒、潰家三、〇〇〇余棟、其他被害が夥しと伝へられ

て居る。

〔稿本、佐喜浜物語〕〈植松棟造著、昭11〉

地震に続いて襲つて来た津浪は佐喜浜全村を一嘗にしてその先端は立花の辺まで届いたと云ふ。今、浪切不動のあるのがその地点であるさうだ。大揺の時には木の宮の大杉の尖端が、大地を叩くやうに見えたと云ふし、津波が引いた後にはその大杉のさきに太刀魚がひつ懸つてゐたとも伝へてゐる。（清岡駅大郎先生の父君秀璞先生の談として聞く。）

岩佐の産杉の東面にカノギの大ツエの出来たのもこの大地震の結果である。

〔吉野風土記〕〈本山町、長野徳次編、昭47〉

安政地震の屋所の模様　川村義信氏の話

此の話は私（屋所　川村義信）の祖父から聞いた話であります。祖父は弘化に生れて昭和四年八十六才で死去しましたが、祖父が十才の時安政元年十二月廿四日の事、弟六才と二人で家の西側の広場で小石を集めてお宮さん遊びをしていた時、突然づづーんと云ふ大きな音と共に地面が揺れ動いて、そのお宮さんの石がゴロゴロと落ちてしまい、自分もころんで起き上ろうとしても又ころび、近くの鳥小屋の鶏が驚いてバタバタカッカと鳴いて大騒ぎし、又向ふの山では雉子がケケンと鳴き、前の杉垣は倒れそうに左右に揺れていたと話しました。実に七日七夜地震が続きました。坂本の庄屋からお達しがあって、落石のこない大木のない安全な場所（出小屋）を造り、そこへ避難するようにと、又出歩く時は六尺の竹棒を持って歩くように、之は地割等があった時の用意にするために、村の人達は安全な所へ小屋を造って地震の終るまで此処に居た。明日の生命がわからないので良い着物を着て、ドブ酒とうまいものを持ち寄って毎日お宴をしたと。又子供は喜んで大はしゃぎであったと。祖父の話。

〔前浜村誌〕〈香美郡、浜田善一著、大5〉

前浜海浜の砲台も実に当時に成りしものなり、安政元年十月起工十一月四日九ツ時落成八ツ時諸役人引払ひ七ツ時大地震と祖父浜田恵茂次の日記にあり、

○

嘉永七年甲寅の十一月四日辰の刻強震ありて第一回の強震に起りし海嘯は当村東端切戸を打越し三嶋村下島十八所神社前に至り西流して当村後口川を溯り西琴平山東麓に至る南は今の神道の少し北まで波先き到り第二震の海嘯は溢々高く終に切戸を押切り当村と下嶋の境西窪川の辺りを北流して田村伊都多神社社前まで到り又西流する高浪は後口川の辺りより今の村役場の一丁斗り北を限り西に溢れて浜改田琴平山下に到りしより、其の時村民大ひに狼狽して浜分の人は伊都多神社境内に避難し又は遠く琴平山上へ逃け行きし者もあり、里分の人は北田村岩村等へ田村岩村の人は山田と漸次北へ北へと避難せしよし翌五日申の刻大震あり時々微震は絶へさりしが夕方に至り雨を催し最早強震はせざるものと信して避難者も帰村したるも尚家にはいらす伊都多神社の境内又は路傍等へ小家掛けを為し老人小児を寝臥せしむ、当時は海浜の砲台を築造せし時なれば其用材として氏宮の神木を伐採し其の餘木は本郡山北の某払下け薪材と為しありしを焚尽せしが其代金は翌年村民より弁償せしよし其の後は日々大砲の如き音響を発し強震微震は翌年の正月まで止まざりしとぞ当時の損害は刈谷部落の人家流失半潰れと又田面の冬作物麦野菜は全く皆無となり殊に野菜の欠亡には大ひに困難せしよし、大震当日四日の夜中二番浪の時伊都多神社社前御輿休みの辺りに大声にて助けを呼ぶものあり幸ひ社内に避難せし人々駈行き見るに此人は隣村里改田の兼蔵と云ふ者にて当日は天気もよく海上も穏かなれば平田船にて吉原へ瓦を送り其の帰途本村沖合にて一番浪に沖合へ押流され二番浪に此処へ漂着せしよしなり。

〔村のことども〕〈三里尋常高等小学校、郷土調査部（代表、横田末雄）編、昭7〉

安政元年十一月五日土佐の地又大いに震ふ。勝浦浜及び竹林樹木等何れも海嘯激浪の為に海中に崩流せられ営繕の個所は八尺余海底に陥没し種崎村西鼻造船場地処は三十間海中に崩れ込みてふちとなり同処東貴船前汐刎波止も三十間余海中に崩れ込み潮流は自然種崎地に通じ干潮波立の際新浜崎を崩壊し波涛は千本松原中央迄打越し数百の松樹は崩流した而して南風激しくして登潮早く仁淀川より東海岸に打た土砂は風波の為に押寄せられて龍頭岬の下に大なる砂浜をつくり勝浦浜蛭子堂前に長さ百間幅五十間の砂浜を生ずるに至つた。

○

種崎千本松原は松樹の数二千二百八十四本で風致林とし又防風波林として種崎の生命である。此の松原につきて種崎の歌人杉本清陰は安政大震記事中に左の如く云つてゐる。

「寅の十一月五日大変に付流家倒家死人共なし港口にて小家二軒流るこれは堺の外にありたり破損家蔵葺わらぶきなど多く傷みたる中に瓦葺は殊に強く堅固に設けたるだけ格別に傷む。わら葺きは後日少々繕ひて帰り住む事足れり、外曲輪囲土壁などは十に六七倒る倒れざる分は大傷になる。今東西二十町に余れる町筋浪の越したる所なし昔亥の大変の節西町沖通り浪越したる跡合じるし残れるを此度は人家近く沖通り松林の間近々のまえ込みたる跡見ゆる迄なり、近来この千本松原大いに繁茂して浪を防ぎたりと見えたり新地沖通二本松の側御台場より東一丁不足の間浪の打上げたる跡四五十間ばかり岡に上る西による程深し夫より西港口に廻る間千本松林なり、浪打掛け殊に強く磯に近き小松は根こぎになつて枯れたり、松林の上通り六七尺上りて磯の芥掛り浪の打掛けたる跡あり。此の松林稲麻の如く立続きたれば町に入る浪を大いに防げたる事顕然なり、亥大変の節は浅かりしならんか後にこの為に植次て生育せしものなるべし、誠に此の浦第一の浦囲にして後生一本も減すべからざる也石御台場より東の方へは往々栽次ぎて生育ありたきものなり」

千本松原の沿革は文献がないが宝永丁亥大震後に栽継いだのは事実であろう。

○

中島新田

巡航桟橋の北方新道路の外側に遠く石塊を築き出して囲める地あり。これは徳川初葉の頃埋立てられし新田なりしなり。その堤現道路程の高さなりしが安政の頃突如起りし大震災の為陥没し現今に於ては干潮時にのみその堤の跡を現はせり。

〔高知県香美郡立田村、上哩内提要三〕〈宮地美彦著、昭15〉

安政元甲寅年十一月四五ノ両日大地震、相当ノ被害アリ、微震ハ翌年正月迄続ケリ

〔福島浦（現高岡郡宇佐町大字福島）安政大地震考〕〈江口又衛著、史談47、昭9〉

その当時江戸地震の事も親戚よりの手紙によつて頗る詳細に記載してあるが、設備不完全の時とはいへその調査はよく行届いてをり、救護法も完全にて負傷者並に死亡者は

負傷者　八九三、八五〇人
死亡者　二三〇、四八五人

で、これを去る大正十二年関東大震災当時の罹災者の

負傷者　六五、〇〇〇人
死亡者　一〇六、〇九〇人
（内東京の分　九一、二〇〇人）

に比して、当時江戸の惨状を推察する事が出来よう。

〔大変記〕〈県図、K254-22、香美郡赤岡町〉

一同年十一月二日昏、雨降其中ニ而いつくともしれず遠音之雷之音哉且ハ震動哉、□ニは不分二ツ三ツ聞ユ、是迄ハ時節ニ違肌熱シ又同三日

日和ニ成大北風吹俄に寒サ強ク成水氷

昔宝永四年亥十月四日之大変ニは山に楊桜登(ミノリ)又躑躅花咲又大暑之如くとの云伝有此度大変寒強

又同四日辰刻地震常生の地震より少シ人驚ク尤長陶り、此日午刻岸本浦三番四番の網代地曳網弐挺綱十二三斗懸網曳居候所右弐挺の網三度斗沖之方へ引連取是不思義成哉弐挺の綱へ鯨等沖廻シ有之哉等ト云而打笑なから網は首尾能挽揚たり但登汐早シ是迄何之気も不付風と心付たるは夜須浜黒隈と云磯三四月の大汐日よりも満干強ク右磯之根見えたり沈たりする事、時之間ニ幾度ト云数不知満干、拙者然時けふの潮満干何時哉ト詮義スル所四日成七ツサシ五ツ六歩ヒキ八ツ六歩成共其汐ニかまわす右の次第なり、されども人は不驚何れの人も只不思義不思義と云而已ニ而誰レ壱人も驚ク者更ニなく是程目ニ物の見えたる一日の汐曲イにも不審不調法至極後ニテ思ひやられたり。

一五日津浪入但此日清天静成日和ニ而始終肌寒シ、申ノ下刻ニ至リ殊之外成大地震山の崩レル様ニ鳴響渡りて陶る。木茅群蝶の如く何も見分ケ不出来、良々長キ間動、此時大地一面動ク中ニも煙弐尺或は三尺位い程も赤子之躍子之様ニ踊揚ル所諸方ニ有。地震ニ随イ其所より砂吹揚ル。又所々より涛入時水吹上ル。此岸本枝村新在家新町之在所、草家は左程の事もなく、瓦葺は家蔵雪隠ニ至迄家毎不残、家の棟蔵之棟壁等崩レ爰彼家倒レ黒煙指事何者も難譬。夫レ火之用心ト云間もなく、村中浪入来り孰れの人も用ニ立申難、掌取物も取不敢、立出ル時も時哉、暮昏(ひのくれ)ニ転つまろびつ数万人窺所は王子ハ丁一筋道迄欠々訖先キ競つ人音は秋ノ田ニ居浮虚子之如く亦其中ニもととよかゝよ童子よ児よと泣韻は皐月之頃に夕昏の蚊の啼如くのありさま、扨又王子村へ寄り散乱したる家中を残し思ひ思ひの宿構へ、所縁有者は其所縁の方知人有者は其知人の方、よるへなき身に悲き者は此寒中も不厭に爰彼の竹籔借朽木の枝木葉等拾集テ四五日も、又は五六日も野宿スル。夫より我家へ帰りたれとも地震しんどふ不斜十二月十三日頃より諸方家毎ニ仮り籠家建、翌安政弐卯ノ二月中旬の頃迄我家て寝る者壱人なし。

猶右大変最中ニ米相場升ニ付百廿文かへ

一大変之時此岸本枝村新在家浜ニおゐて津浪始終窺見る所惣而海上静成物ニて浪の子一ツなし風子一ツなし沖合高ク陸地ひくき物なり只緩ニ水浪の打如くハタリハタリトシテ汐先キ届たる所立地より水泡クワクワトして涌キ立在所出口より常生海際迄も其中半トおぼしき所迄一番涛二番浪ト弐度来、其引汐矢を射如く諸船もろもろ索具等沖合へ引出柴の葉を漂シたる如く、是申下ノ刻なり又三番浪四番波常生之海際より右壱番波二番弐度之汐先キ届たる所迄之其中半トおぼしき所迄弐度来夫より引返ス是酉之上刻也又同中刻ニ至り大地震ス此淘り止哉不止五度目限りの波最初之涛とは勢違暴風之浪之打上よりもはげしく入来。人家出口岸の下タ迄一面ニ満合、引汐同断。尤岸本山の近辺は北汐田江押通流家少々あり。昔宝永年中之津浪潮先キは王子権現宮花表迄届たるト云。又岸本は不及申ニ、此新在家も亡所ニ成ト云。此度之汐先如此届尺ケ家之棟家道具船等洪ト流有。柴の葉を漂たるが如く扨又海上一円洪上。夜頃黒隈ト云高磯是ハ爾来三四月の大汐日満たる時ニ而も森高ク有所、今海立ニ成潮満干なし筋立浪なし登り下りの汐なし五六日至テ少々充潮満干出来ル、又十八日頃より波黒隈高森汐干之時海立ニ而少シ充、名乗たす然所ニ安喜郡津呂室津之湊常生より汐四五尺位イ干、下灘原生より汐四五尺位イ洪上ル。昔宝永年中亥大変ニも如此ト云、尤翌卯ノ三四月大塩日干汐之時に波黒熊高森少々宛見えだす又汐登り下りも出来浪ニ筋も出来。

一下之岬は上灘之如くト云。扨又右ニ云津浪幾度も曳たり入たりスル時此岸本片灘ニ而は幾ケ程引哉不知。餘所浦深き入江且は深き湊内諸船悉ク干スワル

一波五度目かきりの津浪酉ノ中刻ニ而いつくも不残皆々居宅を捨逃ル或留主を考御国中諸方ニ盗人数多あり。常生盗業面縛者は□□之番手付口賄も被遣或ハ御城下ニ而何日居村ニ而一日之所此度之大変ニ付盗業面縛者は番手なし、三日三夜具ニ引捨居村ニおゐて面縛素り口賄もなく、其上科之軽重ニより罰文あり且御城下ニ而は寒死(こごえ)あり。在郷ニ而

は親族之者より口賄も内ニ遣シ、夜分ニは蒲団ニて巻其上ほんそ等遣ス故歟、寒死なし。御国本諸方ニ面縛者多シ。此在所ニも盗人面縛者有。夜須町ニ而は大盗人も小盗人も数多有。大変已後ニ弥数繰ニシテ赤岡郡代江牽出シ面縛者多シ。扨又此時節不審成者在所へ理不尽ニ入来ルト見更多時一応及咎ニ其者返事ニより討捨不苦ト云御制札御国中難義スル村へ御措あり

一昔之人之云伝ニ浪之入時は井戸水二三日前方ニ干ルト雖此度之津浪ニ此岸本赤岡井戸之水出入幷此近郷之井戸は波入テ後夜ニ入テ水干揚ル井戸もあり。又大変弐参日過テ干上揚井戸もあ(〇り)。尤左右郷之井戸は津浪より二三日前方に水干上ル。又大変前より雨降ざりしに川之水増、廿日頃水減ル。扨又風雨之中ニ地震有物ニ而は無之、なき物と云伝あれとも其通ニ不行大変之時節ニは風雨雷電之中ニ地震度々あり且又此浜辺の井戸地震度数掏ル時は汐気来又地震穏成時は汐気減ル

一五日之大変より十日頃迄朝焼夕焼甚強、火玉度々出ル、扨又酉戌之間ニ宛リ日輪様之八ツ過頃ト可去居所時星ト可云様之星出ル。此星提燈之火之入刻限より弥々名乗出し燈道十四五丁踏隙ニ落ル。不怪足早の星なり

一同大変より御国中一日谷々之泉止ル、尤所ニより下江下りて泉出ス所もあり、又常生泉鮮ク土地柄大変より泉増所もあり猶又大変過テ七日頃より翌安政弐卯ノ三月中旬迄之天気高ナ之物七歩通、大西風弐歩通大北風壱歩通内ナキ惣而何風も烈敷寒甚強ク扨又始終之地震大小共掏ル時震動ト云物歟、且は鳴動ト云物歟ヅウヅウヅウヅウント云而鳴響キ渡り其中ニも訖を長く曳のもあり又少し挽のもあり又大筒の音の様に云のもあり、只一ツヅンと云のもあり右ヅンヅンの毎度地震スル一昼夜に大小共三十度餘も掏ル

一震動は安政三辰年迄にいつともなく止ル、地震は安政五午年正月頃より薄く成、然共毎月一ツ且ハ二ツ位イ掏未之冬位治世ニ成

一右大変後一両年は潮曲イ度々あり

一大変より四国辺路幷四国辺路御当国へ入事御指留ニ成、然共慶応四辰年軍上りより御政事薄成他国の破れ辺路夥敷入来シとも御公儀より御構イなし

一向後又々此様ニ浪入ト云時は船ニ乗逃工夫堅すへからす。其子細は昔の津波も曳汐矢を射如くとの云伝あり、此度迚も引汐矢の如く、其汐ニ向船乗上ル事人力ニ不叶、又碇遣而も甚た地堀レル物ニ而、碇かゝず由、又碇抓たる時は引沈メラルト知るへし、隠ニ此度の大変ニ大坂人は数万人船ニ乗入込潮ニ川上江登り其曳汐に女のクタを巻く如くきりきりト巻込レ夥敷人傷ト哉、扨又久枝色の者七人斗川船ニ乗組、物部川々尻より人家へ入込汐ニ上江上江ト馳登らんとする所へ夫婦の者子一人夫々負ヒ繋申様何卒其船ニ而命助ケ呉度様願入所波乗合之者返事ニは見及之通小サキ船ニ候得ば便船叶ぬとて込入浪ニ艫押立押立する所波曳汐ニ大坂の如く逆巻浪ニキリキリト巻込レ影も形も不見得ト云、其時波夫婦子連レの者茨ニ取付助ル、仍而船ニは乗へからす、尤無拠為替所なくして船ニ乗時は最初一番二番の入来浪に付出し沖の方へ乗出すべし、又其子細は三番四番且は五番目かきりの涛は込汐甚励敷最初之波は込汐弱り曳汐は右云通孰も矢を射如く沖の方なれば猶予あり、其試は今度の津浪ニ岸本三番網代ニ小市艘(イサバ)一艘小漁船一船〳〵弐艘網綱三ツ四ツ位沖之方ニ碇突入レ懸留ニ三日も居ル少シも構(カマイ)なく将又浜改田村の者塩売と弐人参合夜須浜ニ而入込涛ニ川船を沖之方へ突出し改田へ乗へり危はありたれども命チは助ル、況又一二里も遥沖合ニ而小サキ措網船数艘昼夜居所地震は夫々知ル、津浪は少シも不知と云ふ而已、沖合ニは諸方ニ大船も小船も居ルトモ皆無難。仍而は沖之潟より外(〇ニ)しくはあらす。尤昔宝永年中之津波ニも海上静成物ト云伝あり、此度迚も海上静成。其又往々カ様之時海上荒ル物哉、又は風雨有物哉其義を難斗、海上静成ト見定ル時は沖の方へ乗出し又浪鎮ルト見定時猶予すべからす。陸地肝要なり、且入江は此理に難計見斗るへし、又地震スル時家の内ニ不可居急而昔の人の云伝有之を不知。今度の大変ニ高知ニ而ハ家を不出して居た者は夥敷倒れ家に被伏人傷多シ。尚往々心得へし、又地震して汐曲ヒ等有時は由断すべから

す、浪入来ルト知へし。其訳は土佐物語と号ある古人の控ニ記有とも昔元禄十六癸未年十一月廿二日当国所々湊口汐満干日数三日不定一日之間ニ四五度も曲ヒ不審する所に東国大地震小田原崩レ安房上総江津浪入死人夥敷、皆人の知ル所也。此事已後ニ聞ユル他国之事成共心得のため爰に記トあり。又此度の津波迚も是より訖ニ記ス通、十一月四日地震して夫より汐狂ひあり同五日津浪入仍而右條々万端心得肝要の事なり、又昔の津浪の時ニも盗人たかりし云伝此度迚も右云通諸方ニ盗人おふし是又用心すべし。

傷あら増

一御国中奥山ニ而高山崩レ又高山われたる所多し扨又川提両脇放レタル所は悉くわれる。

一岸本ニ近辺十一軒流失潰家数軒あり小身の者面連者より補定ル。

一赤岡札場の南段下タ南江融ル道チより、西流家八軒半潰多シ、死人壱人此者沖帰り船曳掛ケテ流ル。扨又小身者本モ連者より補定ル。

一夜須町家数高弐百軒余之所四十軒斗残ル。餘は流失死人七人御公儀より御籠家建被下其上御補被遣。

一同村千切四軒流失。

一手結浦百五十三軒流失半潰多シ。御公儀様より御籠家建被遣其上御補被得付。

一赤野弐軒流失。

一安喜町地震強ク傷家多シ。

一同松田島家数三十軒流失死人十七人。

一安田々野奈和利浪不入。常生之海際より一二間位イ岡へ汐湛。

一津呂室津陸四五尺位イ上ル。其外下モ灘は陸四五尺位下カル、昔宝永年中の津波ニも如此ト云。

一甲浦大変已後潮湛揚。

一幡多宿毛御屋敷幷家中残ル、余は流失。

一下田中村大出火御役家斗残ル。

一上之加江亡所。

一久礼半なかれ。

一須崎御役家漁師町残ル。

一宇佐幷井之尻家数千四百軒の所千弐百軒流ル。

一福島千軒の所三十軒残ル。

一御国中ニ而も就中御城下大地震御家中町幷上町ニ而倒家鮮ク下町北向町は物ニ壁を□ニ而なんぞの埃をサヒルか様ニ東西南北皆一色ニ家蔵不残サヒ倒シ混煙闇の如く剥、数所之出火立拡十文字ニ焼ル人傷多シ扨又津浪汐先キは御家中各ら下モ一丁位イ浸ル市町江は汐不入。又下地は勿論新町近辺は是又各ら下モ一丁位イ浸ル昔宝永年中の津浪は大門前迄海之様ニ成ト云此度津浪汐先キ如此。

傷左之通

一家数弐千五百四十一軒　十五町
千八百七十四軒内　千六百五十軒御町　焼失
弐百二十四軒他支配
六百弐軒　内　四百二十六軒御町　他支配　潰家
百七十六軒
六十五軒　内　五十二軒　御町　他支配　半潰
十三軒

一九十一人死ス、内四十七人、新市町

一行衛不知　十三人

一過人　四人

一焼死馬　弐疋

〆　寅十一月十三日縮

外ニ他支配死人は病気の由ニ而未相分

※『御城下潰家焼失過人死人御町方縮左之通

一家高二千七百五十五軒

右之内

千八百七十六軒　焼失　御町人他支配共
弐軒　半焼
五百六十八軒　潰家　右同断
三百九軒　半潰

〆
八百壱ケ所　焼失蔵幷物置とも
百二十ケ所　潰蔵　幷物置とも
九ケ所　半潰　幷物置とも
一焼死男壱人　御町人　是は非なり焼死多し
一過死男女百五人
　右之内
九十四人　御町幷郷人
内男三十九人、女五十五人
八人　他支配
三人　出所不知者
一過人男女三十九人
一行衛不知者男女四人　御町人
一焼牛馬　五十五疋
一焼失寺堂社　十二ケ所
一潰寺幷半潰社　四ケ所
一焼失御蔵　弐ケ所
一焼失橋　七ケ所
一焼失御役家　弐ケ所
一半焼橋　一ケ所
一焼失御囲籾　七百石斗
一焼米　四千六百二十六石弐斗
一焼失大豆　九百三石弐斗
一焼失菜種　百三十石
一焼失燈油　弐百挺
一焼失麦　四百七拾四石弐斗
一焼失小豆　七拾壱石六斗
一焼失糯米　百五拾弐石也
一焼失黒大豆　壱石八斗
一焼失蕎麦　三石六斗
一焼失蕪豆　三石弐斗
一焼失空大豆　四石也
一焼失胡麻　四斗
一焼失五形花種　壱石也

〆』（IV－174）○「三災録」の一部に似る

※『土佐吾川長岡三郡郷浦破損左之通
一潰家五百三十六軒
一半潰家千三百二十八軒
一蔵納屋竈屋雪隠類千百拾九軒
一潮入家八拾八軒
一焼失家二十一軒
一蔵納家二十二軒
一蔵弐軒内壱軒御蔵
一流失家百弐軒
一過死男女十八人
一御普譜所百七拾弐ケ所
一井流六艘　内三艘流失　三艘傷
一流失地曳納四十壱挺
一流死男壱人
一破船三艘
一宮五社　内壱社流失四社潰
一筧壱艘流失
一橋十弐ケ所
一潮入田地千百八十三石余
一甘蔗千三百把流失
一同壱万六千八百貫斗流失
一□□家九拾四軒潰家半潰とも

一納屋二十一軒
一牛馬弐疋焼死過死』○（IV－174）に一部あり
　右纏ニ御町方縮之写
他国分
一大坂人傷は夥敷堀江大川筋長堀是無難之由
一阿波徳島大出火之由
一紀州熊野近辺大津波之由
一京都幷中国筋は軽ク由　但京都にては大変五日の夜御同様御弐体聞ス
　ト哉、当国ニ而は御同様之
一伊勢尾張地大傷之由　御入合御色合小豆之□ス汁の様なる御色ニ而甚
　恐多ク次第ニてあり
一此已後ケ様の津波にて草麦へ汐入たる時其儘ニ差置而は草麦枯ル物な
り、水口より幾重も幾重も水通し替塩出しスル時ハ草麦生立物と知へ
し、隠に此度試あり、扨又爾来晒苗床地潮入たる所苗生立間敷物な
り。是又此度の試に汐入嫌ヒ水田苗付たる者を赤サヒ或ハ青サヒ等出
惣而苗生立悪敷。汐入不構、苗付たる者はよきなゑ取なり尤時々節ニ
も可寄歟。
一安政弐乙卯年旱魃、諸作不能但正月元日辰之中刻辰巳之方より戌亥の
方へ火玉飛是白昼ニ怪敷事なり
　○
一去ル嘉永七寅之大変より安喜郡津呂室津汐四五尺位イ干ル夫より下灘
四五尺位湛揚、高知江廻りへ酉海立に成今安政四己年迄四ケ年ニ成共
如件随而人家々床迄汐□其中ニ壱尺より弐三尺浸りたる家村々に多し
又御家中各ら下モ之詰堀之取合汐満たる時は、町地形よりも　汐囲玉
塚あれとも汐潜り沼の如く爰も彼も兎ニも角ニも往来不自由、彼是難
義万人甚迷惑ス、就中百姓大迷惑渡世留り絶海之内且ヤヱモンノ丸是
爾来田地之所今は海立、此所ニ而鰡小鰺鮒鰌等古来なき魚を取内之女
房子時々持□□ニ遂調義を長き光陰送然所に昔宝永年中の津波古キ人
の記録を見る所今の如く津呂室津陸六七尺上ル下モ灘六七尺下カル入
込たる汐不減、高知近辺往来不自由船ニ而通路ス、翌年ニ成共替ル事
なし、堀端へ汐土手築、又石淵迄之内大還高ク築トあらましを記有而
已其後いつの時節ニ汐減たるト云控もなく、然時は年数経ニ随ヒ自然
ト汐減ニ戻たる歟、其子細は今度の大変寅の年迄往来不自由可去所聯
なく又彼沼地江家を建宛なき浮世を渡ル筈も有間敷、又彼記録ニ其時
の損日本国中に四万五千百七拾石と記有共其古跡寅之大変迄なし、仍
ては今案するにも及へからす歟、乍併我幼歳之時節老たる人の噺ニは
昔ト違近年和田の原沖の潟へ出張たるは必定也、其訳は第一手結浦北
磯、是は不及云ニ、岸本浦磯之端前ニは少しの浪立ニも山の根迄涛打
懸往来不自由□汐除道あり、右北磯迚も其通今は幾ケ程の浪立ニ而も
山の根迄波届クト云てなし、又北磯迚も日頃皆往来自由ニ成且又浦戸
湊出入口是又昔ニ替り浅瀬揚此浅瀬留子細は奥の入江古へは葛島タベ
鳴比島等ト云テ□然内海の島てあり今人家ニ成ト云伝也、又高知下モ
町は入江の沼を置上たる土地物ト云ふ而已其余莫太もなき新田拵以今
追々出来ニ付奥窪り夫故潮満干勢鮮、仍而湊之内癒上ルトの噺再三聞
シ事あり、依之我等今高所必湊奥窪り汐勢鮮湊癒上ルト云べきもあら
ス、又手結岸本両山の端へ涛不届は和田の原奥江出張たる故ト可去ニ
も不有、其子細は右推察スル通彼宝永年中の津波後湛上たる残汐年数
経ニ任セ自然ニ汐減たるニ付右弐ケ所山の根波も不届、彼の湊あせた
る様ニ成是□然指当りの所夫レとも不知只一渥に和田の原斗奥之潟江
出張ルト心得噺しつらん哉、乍去カ様ニ汐減詰たるは大変起ル基歟右
之次第ニ及今又汐湛上たるニ付彼北小磯塩間の往来又磯の端少しの浪
立ニ山の根涛□□□笑ふ又彼湊も深ク成彼是共昔の通ニ成然時世界は
うゑしづんづる物歟、尚往方万端止得由断すべからす

安政二年、土佐国、前年十一月四日、五日の大地震の余震続く。

和暦・西暦換算表（安政二年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月1日	1855年2月17日	2398632
2月1日	3月18日	2398661
3月1日	4月17日	2398691
4月1日	5月16日	2398720
5月1日	6月14日	2398749
6月1日	7月14日	2398779
7月1日	8月13日	2398809
8月1日	9月11日	2398838
9月1日	10月11日	2398868
10月1日	11月10日	2398898
11月1日	12月9日	2398927
12月1日	1856年1月8日	2398957

〔地震日記二〕

○安政二年分

正月朔日、四ツ頃去年中之垢を落さんと風呂を涌し入ル湯の中ニ有ル内弐三度ゆる丁度親の病気の枕元にて婚礼の盃するよふな心持也扨地震のもよふハ惣体去年分トハ違ひ地築石築するごときづんづんと大なる音して夫よりゆる余り長々の事ゆへ地震殿もゆりの流義をかへ人をして驚しむる手段と見ゆ又件の餅搗ク共思ふ程の事も有人心少しも落つかす勿論礼者もなしよい春といふも不釣合年始の礼ハ只笑ふて事のたるよふな正月またと有へき事ニもあらす。今日のゆり数かそへハせされ共大晦日と同断夜ニ入ても一向間なくゆる毎晩病人の夜伽する如キ訳もなけれハ今夜ハ蒲団引かふり家の崩れハ崩れ次第死なハ死次第と寺内一同寝ル暁まての内中の大共いふへきゆり三度有しか共首も上ケす寝ル

同二日朝より大風赤雲四方の空ニ見へる五ツ頃半時位ゆりの間あり地震殿の飯時なるへし扨一両日之地動ハ去冬長々のゆりトハ違ヒ鳴動の声烈敷ゆる度ことニ大地さけ地底へおちこむかと思ふ様なる事度々有日夜腹一杯ニ飯を食ひ家崩れなハ門口へ飛出んと思ふ覚悟より外なし四ツ頃より曇ル今日ハ少しつゝゆりの間有是ハ此一両日已前より之つゝけゆりニ地震も草臥二日の震り初メ済て暫く休息と見へたり四ツ半頃雪降ル直ニやむ今日ハ昨日と違ひ惣して度数少し然共大槌を以地をたゝく様成音ハやます人ありいわく此世界の大地を一時ニ動かすハ如何成からくりなるや地底の仕組を見たしといふゆへ我答ていわく地底ハ坤軸とて柱のことき心木有と申事なれハ此ゆる所の有様ハ狂言の廻リ舞台のよふなる細工にて下にて心木を廻すゆへ上ニ有大地一度ニ動クならんといへハ彼人一笑して帰りぬ扨けふハ隣家ニ弐所喧嘩有是ハ今年のいさかい初め聞ク我等ハ喧嘩の聞初なるへし夜ニ入てハどんどんと鳴響く音計にてゆらぬ事おふし今朝より今夜四ツ頃迄之間五六十返ゆる四ツ過寝ル少々の大ゆりも有れ共寝入りしゆへ暁までの度数しれす是そ地震国とも謂つへし

同三日晴天全体ゆりよふ少し緩にして昨日の如し小ゆり中ゆり取まぜ度数昨日より少しづんづんと打もぎなる鳴り様やミ石原にて車を引ことき音ありてゆる又其鳴動計にてゆらぬ事おふし此頃ハ人々地震馴て左程ニ怖レもせすゆるたひことニ今のハ先刻より烈しゝ或ハ音のミ有て存外ゆらぬなといふて事共せす其中ニ明四日五日両日共大ゆりにて又大浪入来ルとて宇佐のもの共又　家を取片付昼より山へ籠ルもの多し是ハ福智院住僧かうらない候よし其身も寺を明置山中へ逃入趣先月四日ニハ福嶋の陰陽師斯様之事を言出し人を騒かせけれ共何事もなし又今日ハ福智院より右之通言出し人を騒動せしむ誠ニ有間敷事なり天下一統ニ行なハるゝ暦書ニすら載さる地震末世の陰陽師や愚僧などのしる事ニあらす夫を実として騒くも又其党類なるへし笑ふへき事なり察する所去年霜月五日ニ大ゆり有しより只其日を覚へていふならん地中ニ日月なし地震何そ日を繰ル事あらん安房の一ツ覚へとハ斯様の事をいふなるへし。今日昼之間三拾余度ゆる夜拾返計其内中ノ大弐三度有夜半頃より曇ル七ツ前より雨ふり出ス

同四日雨天五ツ頃迄ニ四五度ゆるゆりよふ昨日の如し四ツ頃より晴ル昨

日ハ烟草のむ間ほと置てゆるけふハ雪隠へ行ほと宛間を置ゆる晩景ニなるほと次第ニ柔なり四ツ時より日入迄十四五度ゆる中ゆり三四度有風少少ツ　吹く晩方よりまた大槌にて地をたゝく様成ゆり有夜中拾四五度ゆる内壱度中ノ大有

同五日朝より九ツ頃迄拾壱弐度ゆる昼より日没迄七八度暮六ツ時より暁まて十返余但弐三度中ゆり有

同六日晴天朝大風吹く九ツ迄ニ四五度ゆる日入迄三四度小ゆり夜ニ入暁までの間ニ六七返ゆる内三度中ゆり然共闇より出ル程の事なし今日ハゆり惣して柔なり隣家山際ニ居候者四五軒浜へ　家構へして出ル城下より取売之酒壱升弐匁八分ニ成ル此頃福嶋の酒屋ハ壱升弐匁ト甲なり唐芋壱〆目ニ付七分五厘田芋は壱升ニ付四分八厘位燈油壱升ニ付代八匁五分より九匁位時節柄にて今日まて漁船元へ御蔵より米不　出及居船頭より船方へ前銀不　出米銭不融通此上なし

同七日八ツ時迄之間五六度ゆる日入迄弐三度小ゆり夜九ツ頃迄之内三四度八ツ頃より暁までゆり繁し凡六七度中ゆり壱弐返あり

同八日九ツ時迄ニ弐三度小ゆり晩景雨烈し弐三度身ふるひする如キ小ゆり有れ共雨の勢ヒよりハ劣れり夜五六度少々宛之鳴動小ゆり内壱度八ツ半頃中ゆり有

同九日今日ハ朝より日入迄之間ニ六七度小ゆり卅日以来今日ほとゆりの柔なるハなし暮六ツ時中ゆり壱度夜中四五度小ゆり四ツ半頃壱度中ゆり

同十日朝薄曇頻リニ小ゆり有五ツ半頃荻ノ浜へ行先日以来磯際の浪常よりも高く海岸ノ山三ケ所程浪打際へ崩れ落往来なり難し汐干時にても已前之通之浜なきゆへ岩の上を匍匐し行四ツ半頃帰宿同時尋念寺来ル申殿辺湊の口塞り村中ノ田地六七歩通り汐ニ涵り居候。朝より日入頃迄拾四五度小ゆり計暮六ツ時西畑より萬蔵使ニ来り泊ル夜半頃よりゆり少し厳敷なり中ゆりト成ル夜中拾返余りゆる萬蔵浜辺ニ馴ぬゆへゆる度ことニ浪の入ん事を恐れて熟睡せす

同十一日曇天朝ゆり少ナし、午時迄に弐三度小ゆり、入迄に壱弐度小ゆり、夜中弐三度中ゆり

同十二日、十日程已前より福嶋浜にて銭を拾得ルもの数多有之波打際より沖へかけて汐干を待て沙を堀り籠にてとふし銭壱人前弐匁三分位より精根の強キものハ波の中ニ入五拾目括りを拾ふも有銭ト銭とハくさり合はつれ難キ由又浜より四五丁沖にてハ大碇大釜様のもの船にて拾取ルも有此節の渡世出来かたき折には魚籠荷ひ廻ルより海にて諸品を拾取か遥ニ勝リ候と申事朝より九ツ頃迄之内三度位小ゆり八ツより七ツ半迄之内六七度夜中四五度其内壱弐返中ゆり有

同十三日、五ツ頃弐三度小ゆり、日入迄之間七八度ゆる日暮より暁迄五六度小ゆり

同十四日、五ツ頃より四ツ頃迄之内四五度ゆる晩景頻りニ鳴動の声聞ゆれ共音はかりにてゆり少し九ツ頃より日入迄弐参度小ゆり、音暁まて拾余度其内ゆりハ三四度

同十五日晴天朝より九ツ頃迄風なし弐三度小ゆり、晩景又弐三度小ゆり夜三四度ゆる七ツ頃続て三度ゆる

同十六日晴天朝五ツ時中ノ大といふ程のゆり壱度有今日ハ橋田の若者共先達而祭りの大幟を流失せしめ候ニ付再造之ため釣上ケニ出ル四ツ頃より日入迄之間ニ七八度ゆる内弐度ハ中ゆりあとハ小ゆり今日も暖和なり夜九ツ頃より暁まて中ゆり七度小ゆりなし

同十七日晴天日雇をやとひ波の入りし畠を打返し汐出しをする朝より日入迄凡拾度余ゆる其度ことニ鳴動の声頻リニ聞ゆ城下の咄しを聞ハ宇佐辺ほとニ鳴動の音はせぬ由又此頃大坂下り之人ニ聞ケハ大坂辺も唯ゆる計にてなる音は当国ほとニなき由其訳しれす今日晩方船にて井尻へ法用ニ行彼在所ハ家ハ大分残り有れ共悉く潰込目も当られぬ次第なり去冬大波之節女弐人溺死せし趣今年は当国へ遍路さし止メ入国を許さゝるゆへ井尻辺甚以淋しゝ、今夜九ツ過より暁まで六七度ゆる但し中之大

同十八日、九ツ頃続ケ震り三度壱番尤烈し、今日八十度程ゆる夜五ツ半時中ノ大壱度暁まで三四度ゆる皆中ノ中なり

同十九日曇天朝弐三度ゆる小雨ふる四ツ頃より九ツ過迄之内四五度小ゆり晩景日入迄弐三度八ツ過より雨やむ夜中四五度ゆる

同廿日雨天朝ゆりなし四ツ頃より日入頃迄七八度ゆる其内七ツ半時中ノ大といふ程のゆり有夜三四度ゆる四ツ頃より大雨夜半頃より大風雨加るニ大雷電を以てす大ノ字の付たるもの集り来り雨風雷地震とも各我劣らしと働く暁前漸くおさまる

同廿一日曇天朝より日没迄五六度小ゆり夜中五六度ゆる

同廿二日晴天暖和なり今日ハ頻りニ鳴動の声聞ゆ昼之間七八度中之小ゆり夜三四度ゆる

同廿三日、朝より日入迄三四度ゆる今日大阪之咄しを聞くニ彼地辺壱日ニ壱度位地震して鳴動ハすへてせぬ由此間聞しと同断今夜四五度小ゆり

同廿四日今日ハ朝より日入迄鳴動の音ハ七八度も聞へけれ共ゆりハ僅弐度位にてすむ夜雨ふるゆり弐度

同廿五日朝より晩景まで之内ゆり三度計夜中弐度ゆる

同廿六日八ツ頃いつく共なく雷の如キ音頻りニ聞ゆ半時計有てやむ今日ハ朝より日入迄六七度ゆる夜中三四度小ゆり閨よりおき上ルほとの事なし

同廿七日少曇四ツ頃より晴天ト成ル朝弐度晩方壱度小ゆりけふハ震り少ナし風少々吹ク夜中弐度中ゆり

同廿八日八ツ頃迄之内鳴動の声三度小ゆり弐度中ゆり、扨先達而江戸ニ大火事ありといふ去冬より之地震も東ハ豆州箱根限り江戸辺ハ震災無之由宝永四年之大震も箱根を限りて東ハゆらす此度も同断地震殿か箱根ニ関所ある事を知て山より西をゆる歟いふかし（日を経て後ニ聞ケハ江戸表も諸国と同しく同日同刻の地震にて尤五日のゆりよりハ四日のゆり別して烈しともいふ）、日没前弐度小ゆり夜中壱両度ゆる

同廿九日九ツ頃より晴ル今日弘岡へ経会へ行新居西畑辺の者波水の難を怖れて家を移すもの多し新川へ寄ル此辺家大傷ミけふハ歩行之間震りを覚へす九ツ半頃弘岡にて壱度ゆるを覚ゆ七ツ頃より夜五ツ頃迄五六度続て小ゆり

二月朔日晴天朝両度小ゆり晩方壱度ゆる夜中壱両度中ゆり

同二日曇天五ツ頃弐三度小ゆり四ツ過より雨ふり出ス九ツ頃壱度ゆる日入頃弐度小ゆり夜壱度中ゆり

同三日、今日昼弐度小ゆり夜ニ入三度ゆる其内七ツ頃中ゆり

同四日、けふハ弐度小ゆり夜弐度計ゆる

同五日、四ツ時ゆる但し中ノ大九ツ頃小ゆり壱度七ツ頃又ゆる中ノ大夜一天曇ル暮六ツ頃より暁迄中ゆり計凡拾度六ツ半頃漸くやむ此間中今夜の様成はけしきゆりハなし

同六日雨天朝より晩景迄之内小ゆり弐三度有また去冬大阪入津之異船其後関東沖へ廻り昨年之津浪ニ少々船を損し為取膳日本之地を離レ出帆之節風雨のためニ船破損致し溺死数多有之残生之者ハ日本之土地へ上り居候由大坂にて右咄有之趣、今夜弐度小ゆり壱度中ゆり有

同七日今日ハ於城下太守様御名代計御馭初之儀式相勤申趣御家老以下ハ乗馬なし、今以地震中ゆへの事ト申噂、殿様ニハ此度之大変ニ付去冬急急御帰城之御願有之処御暇被為仰蒙当正月十七日江戸御発駕当月十日頃ニハ御着城ニ相成可申趣ニ相聞ゆ。朝より日入迄之間ニ弐度小ゆり夜三度ゆる内七ツ頃中ゆり壱度あり眼りをさます程の事なし

同八日晴天四ツ頃中ゆり有鳴動の声すさまし田芋の種を出し植付ル晩方壱度ゆる夜九ツ頃より暁迄五六度中小取交てゆる地震の昼夜をしるも合点行かす

同九日薄曇風吹寒し八ツ過中ノ大ゆり七ツ頃小ゆり弐度夜弐三度ゆる内壱度中震り有

同十日晴天風なしけふ初て去冬以来之流失見舞ニ東町へ行追々浜へ出懸家作始ル今日御免方役人宇佐中改廻ル朝より日没迄之内弐度小ゆり。此間佐川住居の陰陽師当年之地震何月何日何月何日ニ大ゆり有之ニ相違なしと触廻り人を騒かせし咎を以左川役所ニおいて詮議之上三日面縛其上追放ニ逢候由。今日江戸下り之男ニ聞ケハ江戸辺も大震ニ候よし先日聞しとハ相違孰レか是なるをしらす。夜三度ゆる其内七ツ頃中ノ大壱ゆり余ハ小ゆり暁前より曇ル

同十一日曇天五ツ半頃雨ふり出ス小ゆり弐度晩方壱両度小震り夜中三度中ゆり有大抵昨夜と同し

同十二日雨天四ツ頃より晴ル風吹ク朝ゆりを覚へす晩方弐度小ゆり壱度
中ゆり有夜五ツ時より四ツ半迄之間中ゆり三度夫より夜の明ル迄ゆらす
同十三日晴天昼之間弐度ゆる風少々吹く唐芋種を畠へおろす当年ほと米
麦を始メ食物の沢山成年ハなし日々諸物橋田辺迄も諸方より荷ヒ売ニ来
ル家を流シ候もの迚も銭さへ持てハ不自由成事壱つもなし。夜壱度小震
り今夜至て寒し
同十四日晴天朝より日没迄之間三度ゆる、夜中弐度中ゆり風なし　此頃京都御本殿より御状到着去寅十一月四日辰刻過同五日申ノ半刻同夜亥刻三度大地震雖然御殿向御無難之由申来ル
同十五日昼之間三度ゆる中弐度小壱度　夜六ツ時より四ツ時迄之中中ゆり三度八ツ頃小ゆり弐度
同十六日、四ツ頃壱度ゆる九ツ半時より七ツ半迄の間ニ中ゆり三度夜壱
度小ゆり
同十七日、四ツ頃一度ゆる七ツ頃雨やむ壱度ゆる、夜中小ゆり弐度
同十八日晴天風ふく五ツ時壱度ゆる九ツ時ニ壱度八ツ半時ニ弐度中ゆり
晩方風大吹夜中弐度ゆる小
同十九日晴天風なし暖なり四ツ時壱度中ゆり七ツ時中ゆり壱度有夜壱度
ゆる
同廿日薄曇四ツ頃小ゆり九ツ過ゆる中ノ大　今日橋田の良左ヱ門と申男九州
より帰帆当寺へ来ル彼地之咄を聞ケハ豊後辺大震りニ而府内の領主城大
崩ニ付杵築へ被立退候趣右領分中山より石落かゝり人家潰込或ハ震り崩
しの家ニ圧れ死失夥敷由刻限ハ当国と同断。一両日已前当浦中町之浜へ
女の死骸壱つ打上ル。今夜ゆりを覚へす
同廿一日晴天至て暖なりゆりなし日暮頃小ゆり壱度夜六ツ半時又壱度小
ゆり
同廿二日朝より入日之頃迄ゆりなし夜同断
同廿三日晴天風なし五ツ時中ゆり壱度（〇朝）
同廿四日九ツ過潮江伝照寺へ行此寺本堂庫裏共旧冬の変ニ処々破損、渡
しを越へ廿代町類族を尋ル此辺の町不残焼失目も当られぬ有様也、今日
弐度ゆる
同廿五日晴天六ツ時中ゆり壱度　の間ゆりを覚へす（〇以上高知にて）暮
六ツ時中ゆり壱度（〇宇佐にもどって）
同廿六日、七ツ時小ゆり壱度六ツ時又壱度夜中ゆりなし
同廿七日雨天五ツ頃少し晴ル弐度ゆり、七ツ頃弐度小ゆり（〇夕方）
同廿八日曇天五ツ時壱度小ゆり、晩景三度ゆる、夜ゆりを覚へす
同廿九日、五ツ時弐三度小ゆり西畑新居辺の者寔キ屋敷ハ洪水高汐を恐
レ追々山際へ退キ移ル。夜ニ入弐度小ゆり
同卅日雨天夜明前壱度中震り九ツ過小ゆり壱度夜中ゆりを覚へす
三月朔日今日ハ壱度もゆらす七ツ半頃ニ至て壱度小ゆり
同二日、九ツ時壱度中震り
同三日曇天暁前大雨ふる同時小ゆり弐度、普請所今日も休ミなし夜中ゆ
りなし七ツ頃隣家ニ腹痛の者有とて南天の葉を貰ニ来ル同時地震中ゆり
弐度又続て小ゆり弐度（〇四日未明）
同四日、今朝夜明ごろ小ゆり壱度有、四ツ頃より八ツ迄之間ニ四度ゆる
小三中一　夜四ツ頃弐度ゆる七ツ頃大雨降ル壱度中ゆり
同五日朝より日没迄之間三度ゆる夜五ツ頃悔りする程ゆる尤中大ノ　夫より
続て三度各小ゆり
同六日晴天朝少々寒し九ツ頃壱度小ゆり晩方曇ル夜弐度少しゆる
同七日、九ツ頃中ゆり、夜五ツ半時中ゆり壱度
同八日、今日壱度ゆる
同九日晴天五ツ時弐度鳴動小ゆり、橋田浜ノ井戸今以塩気有て茶水等ニ
ハ用難し山際石ノ井戸ハ塩気なし宇佐ノ中にて東より西浜迄之間井戸ノ
水塩退さる事橋田ト同し、夜七ツ半時壱度小ゆり
同十日晴天五ツ半時小ゆり九ツ過又ゆる暁方曇ル夜ニ入弐三度鳴動小ゆ
り、七ツ頃ゆる（〇十一日未明）
同十一日、五ツ頃弐度ゆる中壱度小壱度　七ツ頃弐度小ゆり夜又雨ふる四ツ時中
ゆり弐度七ツ前中ゆり壱度
同十二日雨天朝弐度小ゆり、九ツ頃より晴ル同時壱両度小ゆり七ツ前雷

鳴のごとき声弐度する夜中ゆり壱度小ゆり壱度
同十三日曇天今日より新在家と橋田との間往来道の普請始まる晩方弐三度小ゆり、夜四ツ頃壱度小ゆり
同十四日曇天五ツ半時煙草壱服する間ニ三度続テゆる中ノ中壱ツ小ノ中弐ツ　七ツ時弐度ゆる夜壱度小ゆり
同十五日、八ツ時弐度小ゆり、暮六ツ時壱度小ゆり
同十六日晴天四ツ頃壱度ゆる八ツ頃中ゆり壱度小ゆり弐度同時曇ル七ツ時又中ゆり弐度夜壱度小ゆり
同十七日雨天四ツ頃小ゆり弐度、日暮頃壱度小ゆり夜格別なし
同十八日曇天四ツ頃より雨降ル同時弐度小ゆり、夜七ツ頃中ゆり壱度
同十九日、七ツ前壱度ゆる尤中ノ大臆病者ハ周章して門へ出走る程の事也
夜七ツ時又ゆる小ノ中（〇廿日未明）
同廿日、夜弐度小ゆり今日は大震り有とて此間中より恐ルゝものも有之趣格別なくして日も暮ぬ城下は汐少し高きとて下町辺騒ぐ由
同廿一日晴天五ツ頃より九ツ頃迄之間ニ四五度小ゆり、八ツ時小ゆり七ツ半頃弐度小ゆり、夜中壱度小ゆり
同廿二日晴天四ツ時弐度小ゆり風なし七ツ時壱度ゆる、夜中ゆりを覚へす
同廿三日曇天五ツ頃鶏動小ゆり、八ツ時壱度小ゆり、日入頃壱度ゆる夜五ツ前ト四ツ時ト弐度ゆる但し三ツ共中ノ小
同廿四日、九ツ半頃と七ツ時ト両度小ゆり、七ツ頃中ゆり壱度
同廿五日曇天五ツ半時壱度ゆるけふハ雨ふりもせす又てりもせす格別覚ゆる程の震りもなし七ツ半時壱度ゆる中ノ小夜五ツ時小ゆり壱度
同廿六日晴天五ツ時中ゆり壱度五ツ半頃小ゆり弐度、夜九ツ頃小ゆり壱度
同廿七日、四ツ時又くもる同時壱度小ゆり、今夜ゆりを覚へす
同廿八日曇天四ツ頃小ゆり、夜両度中ゆりあり四ツ半時のゆり中ノ大九ツ過ノ分小ノ中
同廿九日、九ツ半頃小ゆり壱度夜ゆりなし
四月朔日、九ツ時壱度九ツ半頃又壱度小ゆり七ツ時弐度小ゆり、夜中震りを覚へす
同二日曇天五ツ頃より雨ふり出す同時弐度小ゆり、暮六ツ時壱度小ゆり四ツ時又ゆる
同三日雨天四ツ頃壱度小ゆり九ツ時両度小ゆり、七ツ時弐度小ゆり夜九ツ頃小ゆり壱度
同四日薄曇四ツ九ツ之間ニ両度小ゆり、今年ハ国方役所より遍路入国を止メけるゆへ去年より壱人も遍路来らす至而淋し夫をあてニしておる札所の寺々幷ニ遍路宿等大ニ迷惑なりといふ、夜六ツ半時壱度小ゆり
同五日、八ツ半時より大雨ト成ル壱度小ゆり有夜四ツ時壱度中ゆり七ツ前又壱度中ノ中
同六日、昼の間ゆりなし、夜六ツ半時壱度小ゆり暫有てまた壱度ゆる
同七日、四ツ半時中ゆり壱度九ツ過小ゆり壱度、暮六ツ時ゆる中ノ大夜四ツ半時小ゆり壱度
同八日、五ツ頃晴ル同時小ゆり壱度七ツ時又ゆる、福嶋浦ニ久市屋只之丞といふ男有先祖代々真宗にて顕如上人御裏の本尊有此真向本尊ハ古へ宝永四亥年大浪の節荒神山の松の木枝ニ懸りましませしを御供し来り此家重代の本尊として毎年霜月廿五日ニ報恩講を勤む毎度不思議の告なと有し趣を以聞伝へ拝礼ニゆくものおふし然ニ去年霜月五日大浪の砌親子三人連にて家を逃出船ニ乗り潮ノ難を遁んとするニ船くつかへり壱人も残らす溺死せり其節彼御本尊をハ右只之丞妻首ニかけ罷在候由親子共死骸見へす百日余りの後彼妻女の死体出ける所衣類髪簪の類まて少しも損せす勿論死骸ニ疵壱ツもなく磯辺へ上りし趣誠ニ彼御本尊の霊験なるへしと信不信共ニ取沙汰あり惜哉右真向本尊何方へ流行給ひしや都而しれす化益の因縁懸させ給ふものなるへし。宝永四年の浪ハ此度よりハ五尺計高かりしといふ依而宇佐中にて瀧ケ谷の百姓家只壱軒残りし由此度ハ四五十軒残れるハ汐のひくき証なるへし。扨此節宇佐ニ時疫流行死去の人多し去年以来寒ニ傷ミ自然と発する病故治し難しといふ誠ニ昨冬の地震大汐の難を遁れし身の今又流行病にて死するハ実ニ残念なるへし。今夜ゆりなし

同九日晴天八ツ時ゆる中ノ八ツ半時又ゆる中ノ七ツ半頃小ゆり弐度夜七ツ前ゆる中ノ暫く有て又壱度中ノ小
同十日晴天六ツ半頃中ゆり壱度五ツ時小ゆり壱度九ツ時小ゆり弐度、夜ゆりなし
同十一日晴天五ツ時弐度小ゆり、晩方小ゆり壱度
同十二日雨天六ツ半時小ゆり壱度五ツ時弐度ゆる（〇朝）
同十三日、五ツ時少しゆる四ツ頃より晴ル同時弐度ゆる中ノ八ツ時壱度中ノ七ツ時小ゆり弐度夜中ゆりなし
同十四日晴天九ツ時壱度晩景壱度合して弐度小ゆり夜ゆりを覚へる人ハいふ今夜四ツ頃中ゆり壱度有と
同十五日曇天朝六ツ半頃中ゆり壱度五ツ半頃弐度小ゆり九ツ頃又ゆる中ノ西分光顕寺法座へ行八ツ時雷のことき声のミ有てゆりなし七ツ時小ゆり壱度夜五ツ時又ゆる七ツ頃中ゆり壱度有、宇佐福嶋の普請此頃相済大併、宇佐の町三筋有し所浜ノ壱筋ハ流れて跡方なし弐筋ハ町といふ之形残ル町壱つなく成し故、今度出来の堤を下道の往還とす
同十六日、今日弐度小ゆり、昨日より夏中之事故毎日九ツ時鐘を打ツ当浦寺々鐘傷みしや打つ寺なし
同十七日薄曇四ツ頃少し晴ル九ツ時壱度小ゆり大風ト成ル八ツ時壱度小ゆり七ツ前弐度ゆる中ノ小日入頃又ゆる夜浜へ汐を見ニ行夜四ツ頃小ゆり壱度
同十八日、五ツ半時雨ふる同時弐度ゆる、晩景壱度小ゆり、夜七ツ時弐度小ゆり
同十九日、四ツ頃より九ツ頃迄之間ニ弐度小ゆり（〇昼）
同廿日雨天昨日より波高し浜辺の家々軒下まて波打こむ昨夜新在家の山崩レ稲荷の宮潰込神体見へ給ハぬとて土を堀除騒キ尋ル橋田新普請の堤を波打越ス新町辺の堤も同断五ツ半頃雨少し歇む大風吹ク四ツ頃より晴ル浜ノ畠の岸崩レけるゆへ石を築なをす浪次第ニなく、夜四ツ頃中ゆり壱度也
同廿一日晴天五ツ半時小ゆり、九ツ時壱度小ゆり此間中東町の新堤石ノ間にて鰻を夥しく取ル者有、壱日ニ多キものハ七十或八十程ツゝ釣ル是より内ハ右之所にて左様之事なし此度鰻集まりしと見ゆ夜五ツ時小ゆり壱度橋田辺の田ニ植付ル稲苗処ニより枯ル汐退かぬ故也トいふ
同廿二日晴天五ツ半頃ゆる小九ツ時又ゆる中、夜八ツ半頃小ゆり
同廿三日、四ツ頃小ゆり（〇午前）
同廿四日、五ツ時より城下（〇高知）へ行、夜千蓮寺へ法座ニ付参詣法座相済て詣人本堂を出ルや否中ノ地震有惣して家ニ居ル人々門口へ飛出ル程ノ事也横町へ寄泊ル今夜晩迄之間ニ弐三度ゆる皆小
同廿五日晴天九ツ頃迄格別なし八ツ前又ゆる中ノ大臆病者ハ皆騒く昨夜之ゆりニ山田後免久礼田辺家蔵塀等まていたみしといふ今夜壱度小ゆり有電光秋の如し
同廿六日薄曇六ツ時中ゆり壱度、夜五ツ頃より九ツ過迄之間ニ四度ゆる皆中下町之人々大ニ騒クといふ昨夜秋頃の如く頻りニ電光見ゆ（〇高知）ノ大
同廿七日、九ツ時新居坂西ノ麓へ来ル時壱度ゆる中此間中宇佐御畳瀬之間之漁者沖にて名のしれぬ魚を日々釣帰り城下を始□□迄買求メ喰ふ此魚毒魚と相見へ腹痛致し或ハ顔ノ皮はげ死地ニ入んとする者数人有日を経てのち役所より右之魚釣ル事ハ勝手次第売買ハ不相成旨触示し有魚の価ヒ肝の潰れる程安し其形鱒ニ能ク似て其肉白しといふ昔宝永の変ニも此魚沢山ニ有しと言ふ能々心得置へき事なり。日入頃鳴動の声聞へて小ゆり有夜五ツより四ツ頃迄の間弐度小ゆり
同廿八日朝薄曇五ツ前ゆる小、九ツ頃弐度小ゆり、八ツ頃より七ツ半迄之間弐三度屋鳴して小ゆり
同廿九日晴天風有て寒し五ツ時ゆる中ノ大夫より弐三度屋鳴小ゆり晩方曇ル七ツ半時弐度鳴動小ゆり
五月朔日曇天朝五ツ時続て弐度小ゆり今日入梅宝永地震の記谷陵記と題せるを水通江口氏より借り来り一昨日写し始メ今日写終る夜五ツ半時中ゆり壱度七ツ過小ゆり壱度
同二日晴天九ツ時中ゆり壱度八ツ半頃弐度小ゆり、暮六ツ時ゆる中
同三日曇天けふハ鳴動の声計弐度聞へてゆりなし

同四日曇天四ツ頃晴ル小ゆり壱度、四ツ時中ゆり壱度
同五日小雨ふる五ツ頃より晴天ト成ル弐度小ゆり九ツ時悔りする程ゆる其音甚し但し中ノ大也暫く有て又ゆる小半時計有て又大ニゆる大ノ小其跡続て三度小ゆり例之五日之命日ゆへ烈敷ゆると見ゆ浜辺ノ家より衣類等山際の己家へ預ケニ来ル汐の入来らん歟と恐るゝより斯様ニ騒く也夜半頃より又浜ノ者大騒当寺へ長持を昇来り預置帰ルものも有暁まて東西奔走する当寺ハ人の騒を聞にて聞ツヽ寝ておきす不人情と八思へ共おきるもつらし依て如此
同六日晴天荷物夫々如元取帰ル徴賢御畳瀬へ行昨夜四ツ頃東町辺より西ノ方を今夜四ツ時か八ツ時か之内大波入来ルなり用心せよと町々を大音にてわめき走ルもの有其声を聞て俄ニ諸道具取片付山へ逃上ルもの夥し右騒動ニ付鰹船も出す漸夜明て後沖へ出ル今日ニ至リ又山より諸道具荷ヒ下ロし大ニ騒く笑ふも有腹立ルも有大成骨折損なり何者の言出したるやしれす。今日九ツ半頃小ゆり壱度夜中ゆりを覚へす
同七日、四ツ時八ツ時七ツ時右三度小ゆり（〇白昼）
同八日雨天九ツ前少しゆる、今日弐度鳴動の音聞ゆ
同九日雨天朝六ツ半時壱度小ゆり、日入頃壱度小ゆり
同十日、今朝日出頃中ゆり壱度有九ツ頃小ゆり弐度
同十一日、昼頃壱度小ゆり
同十二日、八ツ時小ゆり壱度八ツ半時雷鳴ル雨ふり出ス同時壱度中ゆり有夜歟む
同十三日、四ツ頃ト九ツ時ト弐度小ゆり、夜四ツ半頃ゆる中ノ大
同十四日、八ツ時又小ゆり壱度、夜小ゆり弐度
同十五日雨天鳴動の声両度聞ゆ（〇朝五ツ前？）
同十六日、四ツ頃小ゆり壱度（〇午前）
同十七日雨天五ツ頃やむ四ツ頃より九ツ半迄之間ニ弐度ゆる但し小ノ大（〇昼）
同十八日曇天五ツ時弐度ゆる小、九ツ頃より晴ル同時又ゆる中九ツ半時又小ゆり、今夜五ツ時壱度小ゆり四ツ半頃又ゆる小
同十九日、七ツ半時小ゆり壱度（〇高知にて、夕方）
同廿日、ゆりなし（〇高知にて）
同廿一日、今日八ツ頃中ゆり有し由歩行中ゆへ一向覚えす（〇高知から宇佐への帰路）今夜弐度鳴動の音聞ゆ
同廿二日、九ツ半時壱度小ゆり、夜五ツ時壱度ゆる
同廿三日、九ツ頃より八ツ半迄之間ニ三度ゆる小、今夜四ツ頃中ゆり壱度
同廿四日、四ツ時ゆる小九ツ時又ゆる小橋田文蔵と申男の位牌去冬の汐ニ流出横波ノ磯ニ止り波浦人浜へ上有之を文蔵孫駒太郎と申者彼地にて拾取、夜弐度鳴動する七ツ時中ゆり壱度有
同廿五日、八ツ時壱度中ゆり、夜五ツ半時壱度小ゆり
同廿六日、晩景晴ル七ツ時ゆる中、夜五ツ時ゆる中四ツ頃鳴動ノ音計する
同廿七日、九ツ時壱度ゆる小ノ中、夜壱度ゆる四ツ時小
同廿八日晴天五ツ頃より七ツ迄之間ニ弐度小ゆり、夜壱度小ゆり
同廿九日、昼の間ハゆりを覚へす夜五ツ半頃弐度小ゆり
同卅日晴天今朝六ツ頃弐度ゆる小、山ニ逃上り候もの共浜ハ家を立出懸ル大浪の時ハ東西の方角をいわすたゝ男女共近キほとりの山へ山へと逃上り金神塞り鬼門等の方角をいふもの壱人もなし無難ニ命助りたるを上とす扨此節浜へ出ルとて家作ニ付てハはや已前の事を打忘レ塞り金神の方より日の吉凶等をいひ暦穿鑿するもの多し是一笑するニ余りあるものなり福嶋ハ此頃迄ニ船道具の納家より鰹仕成の納屋なと四五軒出来候まてにて常居の家壱軒もなし此間已来日てり続キ水不自由ニ成ル。今夜鳴動の音壱度聞ゆ
六月朔日、九ツ半時中ゆり壱度（〇昼）
同二日、夜五ツ半頃少しゆる
同三日、今日九ツ前ゆる中ノ大、夜中ゆりなし
同四日、四ツ半時ゆる小、夜七ツ時ゆる中ノ小
同五日、九ツ時ゆる小、夜四ツ時小ゆり壱度有
同六日晴天朝六ツ時ゆる小五ツ時又ゆる中ノ小五ツ半時又小ゆり九ツ頃壱

度小ゆり八ツ頃より曇ル八ツ半時又中ゆり夜五ツ時曇四ツ半時ゆる中ノ小
八ツ頃又ゆる中ノ中
同七日晴天六ツ時ゆる中ノ小夜前以来橋田祇園社の祭りとて若者共提灯とほし今朝迄薬師堂にて通夜する宮ハ残りしか共惣分在所の家流失せし故至て淋敷詣人客来なし今夜も踊り有直ニ止ム。今日ハ昼之間壱度ゆる七ツ前又ゆる中ノ小
同八日、九ツ時壱度ゆる小、夜五ツ半時小ゆり壱度
同九日、今朝六ツ時小ゆり
同十日、今日九ツ時壱度九ツ半時壱度ゆる小
同十一日、晩方一度小ゆり夜ゆりを覚へす
同十二日、今日ハゆりなし七ツ頃より日暮迄之間ニ弐度小ゆり夜壱度ゆる小
同十三日晴天四ツ半頃ゆる小八ツ半時又ゆる小日入頃又ゆる小夜五ツ過壱度小ゆり
同十四日、五ツ時ゆる小、九ツ時又小ゆり、夜四ツ時ゆる小
同十五日晴天九ツ前ゆる小夜五ツ半頃壱度小ゆり
同十六日、六ツ時ゆる中ノ小（〇夕方）
同十七日、九ツ前ゆる小、八ツ半時ゆる中ノ中暫く有て又小ゆり、七ツ時ゆる小暫して悔りするほとゆる中ノ大又ゆる中ノ小三度続て震ル（〇昼）
同十八日、四ツ時ゆる中ノ小、八ツ時又小ゆり七ツ時又ゆる小
同十九日、八ツ頃迄頻りニ雷鳴する同時小ゆり壱度、夜に入小ゆり有
同廿日、暮六ツ時ゆる中ノ中夜半頃又小ゆり壱度
同廿一日、日暮頃ゆる小夜五ツ半時又小ゆり、今夜九ツ半時中ゆり壱度有
同廿二日、四ツ時小ゆり九ツ過又壱弐度ゆる小（〇昼）
同廿三日、九ツ半時ゆる小八ツ半時又ゆる小、日入前弐度続てゆる中ノ大
夜四ツ半頃小ゆり九ツ頃又ゆる小
同廿四日薄曇五ツ半時ゆる小八ツ時又ゆる小
同廿五日、夜八ツ時ゆる中ノ小
同廿六日、今日ハ四ツ頃と八ツ過と弐度ゆる小（〇昼）
同廿七日、九ツ頃ゆる小七ツ時又壱度小ゆり、夜中弐度ゆる
同廿八日、九ツ半時ゆる小八ツ半時又壱度小ゆり七ツ過亦鳴動の音計聞ゆ夜壱度ゆる中ノ大
同廿九日、八ツ時鳴動の声あり、夜ゆりなし
同晦日、四ツ時ゆる小九ツ半頃鳴動する八ツ時又小ゆり、今日橋田の山より猫をかり出ス是ハ昨年の大汐より山ニ逃入此節子を育て有之処飢渇ニ及ひ不計人家へ出来り食を求メ候より人々見附山へ尋行親子共取来ル人を恐レ逃廻り困り入ルといふ
七月朔日、今日ゆりを覚へす、夜鶏鳴頃より七ツ半迄之内弐度ゆる中ノ小
（〇二日未明）
同二日晴天六ツ時ゆる小、九ツ前ゆる、今夜八ツ半時弐度ゆる中ノ小
同三日晴天夜明前ゆる小、八ツ時ゆる中ノ小、暮六ツ過ゆる小
同四日、五ツ半時ゆる小、日入頃ゆる小、夜中壱度小ゆり
同五日、四ツ過弐度小ゆり（〇朝）
同六日、八ツ半時小ゆり（〇午後）
同七日、日出頃ゆる小五ツ頃鳴動の音計する、八ツ時弐度小ゆり夜四ツ頃ゆる中ノ小
同八日、夜六ツ半ゆる中ノ大
同九日曇天五ツ時小ゆり、夜五ツ半時ゆる中ノ小間もなく又ゆる小
同十日、今日四ツより八ツ時迄之間ニ三度ゆる中ノ小壱ツ弐ツ夜ゆりなし
同十一日、昼之間ゆりなし夜九ツ頃壱度小ゆり
同十二日晴天九ツ時ゆる小八ツ時又ゆる中ノ小
同十三日曇天五ツ頃ゆる中ノ中、七ツ頃ゆる中ノ小
同十四日、去年大晦日ニハ店方ニハ人を以て銀米の催促する場合寺々ニハ檀家の斉米を待つ折柄以の外なる大地震にて懸取の往来もなく勿論寺へ米壱合持来ル人なく泣々越年致せしニ其涙いまたかわかぬニ又当年の盆祭ニ此様成大風雨店方の迷惑ハいさしらす我等忽大困り積気の発るほとの事にて是や寺々の貧盆なるへし、四ツ頃ゆる小（〇夜）

同十五日、四ツ半頃ゆる小（〇夜）
同十六日、五ツ時ゆる小、九ツ頃小雨ふる直ニやむ同時ゆる小八ツより七ツ半迄之内三度小ゆり、夜九ツ前ゆる中ノ大八ツ時又ゆる小
同十七日、八ツ時ゆる中ノ小、暮六ツ時小ゆり
同十八日、昼頃壱度小ゆり
同十九日、八ツ半時よりおき出府の用意をなす七ツ半時出寺森山にて夜明ル壱度ゆる中ノ小、晩景ゆる小（〇高知にて）
同廿日曇天五ツ時ゆる（〇朝、高知にて）
同廿一日、九ツ過帰寺ゆる小、今夜弐度ゆる
同廿二日、八ツ時ゆる小、七ツ半頃より雨ふり出スゆる中ノ中、夜雨やむ
八ツ半頃ゆる中ノ小
同廿三日、夜ニ入鳴動弐度壱度小ゆり
同廿四日晴天九ツ半時ゆる小八ツ時同断小、夜壱度小ゆり
同廿五日、四ツ時弐度ゆる小九ツ時又ゆる小夜四ツ頃ゆる中ノ小九ツ時又小ゆり
同廿六日曇天五ツ時瀧ケ谷へ行当浦氏神八幡宮へ詣す此神林の大木三ケ一程枯ル去冬の汐ニ傷ミしと見ゆ此瀧ケ谷ハ宇佐の西北ニ当ル所山傍の小高キ土地ゆへ古へ宝永の変にも宇佐ニ流残りの家壱軒有しといふハ此所の弥平といふものゝ先祖なるよし此度の変ハ猶以汐来らす但し前ノ方福智院ハ浪入来り畳より上へ六尺計上りし由諸道具少々流失せし趣。夜九ツ頃壱度小ゆり
同廿七日、夜五ツ半頃ゆる小暫く有て又ゆる小
同廿八日、七ツ時ゆる小（〇夕方）、五ツ半時ゆる小（〇夜）
同廿九日、七ツ時ゆる小
八月朔日、夜八ツ時ゆる小ノ大又ゆる小ノ小、今日昼九ツ半時ゆる中ノ小
同二日晴天九ツ頃壱度小ゆり、夜四ツ頃ゆる小
同三日晴天五ツ時弐度ゆる小九ツ時又ゆる小夜五ツ半時ゆる中ノ中
同四日薄陰五ツ時ゆる小
同五日雨天九ツ時ゆる小八ツ時又小ゆり、七ツ時弐度ゆる中壱度小壱度夜五ツ半頃弐度ゆる小皆
同六日、九ツ時弐度鳴動七ツ時小ゆり壱度、夜ゆりなし
同七日、九ツ過鳴動の音計する七ツ半時ゆる中ノ中夜四ツ頃ゆる小
同八日、七ツ時ゆる中ノ小（〇夕方）
同九日、七ツ時雨ふり出ス同時ゆる中ノ大（〇夕方）
同十日、今朝続て三度大ニ鳴動する、夜五ツ半より四ツ頃迄之内三度ゆる中壱度小弐度
同十一日、九ツ時ゆる中ノ小八ツ時弐度ゆる小、今夜五ツ半ゆる中ノ小四ツ半頃又ゆる中ノ中
同十二日、夜四ツ時ゆる小日月ノ入又ゆる中ノ大
同十三日晴天五ツ半時ゆる小七ツ時弐度鳴動してゆる小夜四ツ半頃ゆる小
同十四日、今暁六ツ時ゆる中ノ大八ツ半時又ゆる
同十五日陰天五ツ半時ゆる小、今日弐度ゆる小
同十六日陰天朝六ツ半時ゆる小、四ツ半時ゆる小
同十七日、ゆりなし、夜壱度小ゆり
同十八日、七ツ半頃ゆる小
同十九日雨天朝出府（〇高知へ行くの意）四ツ頃ゆる小
同廿日、今日中ゆり有といふ事なれ共風雨中すへて覚へす、六ツ半頃ゆる小（〇高知にて）
同廿一日、六ツ時ゆる小（〇宇佐に帰寺後、夕方）
同廿二日曇天五ツ半頃ゆる小、暮六ツ時ゆる小暫く有て又ゆる小
同廿三日、四ツ時ゆる小、晩方又小ゆり
同廿四日、昼の間ゆりを覚へす暮六ツ時ゆる小、七ツ頃ゆる中ノ小暫く有て又小ゆり（〇廿五日未明）
同廿五日、晩景鳴動弐度夜七ツ頃ゆる小
同廿六日、九ツ時ゆる小、夜九ツ頃ゆる小
同廿七日雨天九ツ半時ゆる中ノ大重ねある所の皿鉢類皆鳴る、七ツ頃雷鳴夜ニ入ゆる小、九ツ時又ゆる小

同廿八日晴天四ツ時ゆる小（〇午前）、西ノ方ニ星少く見ゆる（〇廿九日暁方）壱度ゆる小
同廿九日、夜四ツ時ゆる中ノ小八ツ時又ゆる小
同卅日晴天四ツ半時ゆる小七ツ半時又ゆる小、夜七ツ時ゆる小
九月朔日晴天四ツ時ゆる小八ツ時又ゆる中ノ小七ツ時ゆる小、夜中壱度ゆる小、六ツ時またゆる小
同二日、今日弐度小ゆり夜中ゆりなし
同三日雨天九ツ頃壱度鳴動
同四日雨天四ツ半ゆる小、夜四ツ半時ゆる小八ツ時又ゆる小
同五日晴天五ツ時ゆる小、八ツ半頃ゆる小、夜九ツ時中ゆり　井戸の水濁りしとて汐の入を恐れ騒ぐ者有しといふ
同六日、五ツ半時ゆる小、夜三度鳴動する
同七日、八ツ半時ゆる中ノ中、夜七ツ頃ゆる中ノ
同八日雨天四ツ時小ゆり、夜七ツ時ゆる大ノ小此ゆり已前ト違ひ大ニ長し
諸道具動キ鳴ル
同九日晴天晩方曇ルゆりなし夜同断
同十日、夜四ツ半時ゆる中ノ小尤ゆり長し雨やます
同十一日、九ツ半時風雨同時小ゆり、暁前ゆる中ノ小（〇十一日暁）
同十二日、七ツ時ゆる小夜九ツ時鳴動ゆりなし
同十三日、夜七ツ半時ゆる六ツ時又ゆる中ノ大壱度小ノ大壱度
同十四日曇天四ツ時ゆる中ノ大暮六ツ時またゆる小夜壱度小ゆり
同十五日晴天五ツ時弐度ゆる共ニ中ノ小、夜四ツ時小ゆり九ツ時鳴動
同十六日、夜四ツ時ゆる小
同十七日、今日ゆりの有無を覚へす
同十八日晴天日出頃ゆる中ノ中、夜五ツ時ゆる小
同十九日、七ツ時ゆる中ノ小（〇夕方、高知にて）
同廿一日、七ツ頃帰宿同時ゆる小（〇夕方、高知にて、その後宇佐に戻る）
同廿二日晴天五ツ半時ゆる小、八ツ半頃ゆる小夜壱度ゆる小
同廿三日晴天九ツ時ゆる大ノ小近頃なき大震り也臆病なる者ハ家より飛出ル天井裏ニ釣りおける提灯又ハ籠の類暫く動きやます間もなく又ゆる小
七ツ時又ゆる中ノ小
同廿四日曇天五ツ時小ゆり四ツ半頃又ゆる小八ツ時又ゆる小同時少し晴ル夜五ツ頃ゆる小
同廿五日曇天五ツ時ゆる小五ツ半時又ゆる中ノ大、夜七ツ時ゆる中ノ小
同廿六日、今日壱度鳴動の音聞ゆゆりなし
同廿七日、夜四ツ前ゆる小
同廿八日薄陰り日出頃ゆる小、夜八ツ頃壱度小ゆり
同廿九日、八ツ時ゆる小、六ツ過漸帰寺同時ゆる中ノ小夜壱度ゆる小、暁前又ゆる小
同卅日曇天四ツ頃ゆる小、晩方弐度鳴動、夜中両度ゆる共小
十月朔日、八ツ時ゆる小暮六ツ時ゆる小五ツ半頃又ゆる小
同二日、八ツ時ゆる小夜六ツ時弐度ゆる壱度ハ中ノ大壱度ハ小
（脚注）十月二日夜四ツ時より江戸大地震同時出火諸候御屋舗より市中寺院社家迄も焼失夥敷潰家死人共萬を以て数ふ一向目も当られぬ有様ト申事御国城下へ彼地より御飛脚到着右騒動中江戸出立之趣近来未曽有之事なりといふ
同三日、九ツ頃より又陰ル同時続て弐度ゆる大小ノ八ツ時又ゆる小日暮小ゆり夜ニ入壱度ゆる小
同四日曇天六ツ時ゆる中ノ小九ツ時ゆる中ノ大、夜四ツ時ゆる小七ツ頃ゆる小なれ共至て長し
同五日、昼の間ゆりなし、八ツ半時ゆる小大ノ
同六日晴天五ツ半時ゆる小、夜弐度ゆる共小
同七日、昼九ツ前壱度小ゆり夜五ツ時ゆる中ノ小
同八日、四ツ時ト九ツ半時ト弐度ゆる中ノ大、夜八ツ半時ゆる小ノ大
同九日、八ツ時より晴天ト成ル同時鳴動夜ゆりなし
同十日晴天四ツ頃小ゆり、日暮頃またゆる小夜ゆりなし
同十一日曇天六ツ時ゆる中ノ小暫く有て又弐度ゆる小、五ツ時又ゆる小
同十二日、六ツ時ゆる小晴天五ツ時弐度ゆる小

同十三日、夜九ツ時ゆる小
同十四日、暮六ツ時ゆる小
同十五日、八ツ頃ゆる小日暮過又ゆる小
同十六日晴天七ツ頃ゆる小、夜八ツ時中ゆり
同十七日、今日ゆりなし、夜八ツ半頃ゆる小
同十八日、九ツ前より城下（〇高知）へ行
同十九日晴天五ツ時ゆる中ノ小（〇朝、高知にて）
同廿日、九ツ頃ゆる小（〇夜、高知にて）
同廿一日、今朝四ツ頃ゆる小（〇高知にて）、六ツ時帰寺
同廿二日、七ツ時鳴動する夜ゆりなし
同廿三日、今日ハゆりを覚へす、夜半頃壱度小ゆり
同廿四日、九ツ半時ゆる小
同廿五日、今朝五ツ半頃ゆる小、昨夜波幾度も狂ひしとて何方よりいふ共なくまた汐の入来ルとて宇佐中荷物を又山へ運ひ大騒動浜辺のものハ松明を灯し暁迄浪打際を往反して汐を伺ふも有夫ゆへ夜前ハ参詣別して少ナし汐の入ル事なきゆへ今日又山より荷物等元の所へ運ひ戻ス其狼狽誠ニ笑へし。夜四ツ半時鳴動の声聞ゆ　昨日之騒動城下辺も同断人気落今も同し甚敷者ハ荷物片付北在郷より上町辺へ立退候もの数多有之由
同廿六日晴天九ツ時ゆる小（〇昼）
同廿七日、ゆりなし
同廿八日晴天五ツ時ゆる小、夜ゆりを覚へす
同廿九日、昼九ツ時ゆる小夜八ツ時七ツ時弐度ゆる中ノ小
霜月朔日、八ツ時ゆる小六ツ時又ゆる中ノ小
同二日晴天九ツ時ゆる小、夜大風吹ク九ツ頃ゆる中ノ小
同三日晴天暁前より日出頃まて天ニ赤色の雲起り宛モ火の起ルか如し一時計有て収ル衆人皆恐怖す四ツ時よりまた陰ル九ツ時ゆる小夜六ツ時ゆる小
同四日、七ツ時ゆる小（〇夕方）
同五日晴天五ツ時ゆる小、七ツ時ゆる中ノ小（〇朝、夕方）
今日ハ去年大地震の日なるゆへ其事を思ひ出しいかゝ有らんと人心落付す、先何事もなきゆへ安心する
同六日曇天五ツ時ゆる小半時計有て又ゆる中ノ小（〇朝）
同七日、今日八ツ時ゆる中ノ中（〇高知にて）
同八日、今日ゆりを覚へす日暮頃ゆる小大（〇高知にて）
同九日、八ツ時横町へ行同時ゆる中ノ大、夜ゆりなし（〇高知にて）
同十日、七ツ時帰寺六ツ時ゆる小
同十一日、九ツ半時ゆる中ノ大、七ツ時ゆる中ノ小、暮合頃又ゆる小
同十二日、九ツ半時ゆる小六ツ半時ゆる小（〇帰寺は宇佐に戻るの意、以下同）
同十三日、日入頃風和く同時ゆる小夜五ツ半頃又ゆる小七ツ時雷鳴ふり出すゆる中ノ大
同十四日、六ツ時ゆる小、暮六ツ時ゆる小五ツ時又ゆる小、此節九州より帰帆ノ男の咄を聞クニ豊後佐伯辺此節地震すへてなし、但し十月廿三日四日之頃波平生と違ひ狂ヒ有之ニ付人々騒キ候由御国へ入りて地震のやまさるを知ルといふ
同十五日、暮合頃ゆる小五ツ時又ゆる小四ツ半頃又ゆる中ノ小
同十六日、今日八ツ時ト七ツ時ト弐度ゆる小ノ大夜五ツ半時又ゆる小
同十七日、夜六ツ半時ゆる小
同十八日、昼の間ゆりを覚へす、八ツ頃小ゆり壱度あり
同十九日、暮合頃ゆる小
同廿日、七ツ時ゆる中ノ小六ツ時又ゆる小（〇夕方）
同廿一日、五ツ時ゆる中ノ小、七ツ時ゆる小夜壱度屋鳴する
同廿二日、六ツ半時鳴動小ゆり（〇夕方）、夜中七ツ時ゆる中ノ小
同廿三日、六ツ頃鳴動する、夜中八ツ時ゆる小
同廿四日、今夜八ツ時ゆる小（〇高知にて）
同廿五日、七ツ時ゆる中ノ小（〇夕方、高知にて）
同廿六日、八ツ時ゆる中ノ中六ツ時又小ゆり（〇午後、高知にて）
同廿七日、夜中小ゆり有トいふ我等都而覚へす（〇高知にて）
同廿八日、今日はゆりなし（〇高知にて）
同廿九日、七ツ頃ゆる小（〇高知にて）

同卅日、ゆりを覚へす（〇高知にて）
極月朔日（〇高知、地震記事なし）
同二日、八ツ時小ゆり（〇午後、高知にて）
同三日、九ツ半帰着八ツ時ゆる小、暮合時又ゆる小
同四日、昼の間ゆりなし夜九ツ頃ゆる小
同五日、暮六ツ時ゆる小夜九ツ時鳴動小ゆり
同六日、夜八ツ頃ゆる小
同七日雨天六ツ時ゆる中ノ中四ツ半時又ゆる小間もなく又ゆる小、夜九ツ半時ゆる小
同八日薄曇四ツ時ゆる小六ツ半時ゆる小ノ大
同九日、夜四ツ半時ゆる小七ツ時又ゆる小
同十日、今夜ゆりを覚へす
同十一日、夜五ツ半頃鳴動小ゆり
同十二日、今日ゆりなし
同十三日、八ツ頃鳴動小ゆり夜八ツ時ゆる小
同十四日、夜四ツ半時ゆる小八ツ時又ゆる
同十五日、今夜ゆりを覚へす
同十六日、夜中風なし壱度小ゆり有
同十七日、五ツ半頃ゆる中ノ小、日入頃ゆる小、夜八ツ半時ゆる中ノ大七ツ時又ゆる中ノ大臆病ものハ家より飛出ル程の事也
同十八日晴天朝六ツ時弐度鳴動小ゆり、九ツ時ゆる小夜四ツ半時ゆる小
同十九日、五ツ半時ゆる小、四ツ半時又ゆる中ノ大、日入頃小ゆり
同廿日、今日ゆりを覚へす、夜同断、七ツ時ゆる小
同廿一日、八ツ半頃ゆる小夜五ツ半時ゆる小
同廿二日、七ツ時ゆる小夜六ツ半頃ゆる小七ツ頃又ゆる小
同廿三日、五ツ過ゆる小（〇夜）
同廿四日晴天七ツ半時ゆる小今朝風有四ツ半ゆる小、夜五ツ続て弐度ゆる小四ツ半時又ゆる小
同廿五日、夜六ツ半時ゆる小五ツ時又ゆる小
同廿六日、五ツ時ゆる小、九ツ半時ゆる小
同廿七日、夜八ツ半時より七ツ迄之間ニ弐度ゆる小
同廿八日、夜五ツ半時ゆる小

〔鹿持雅澄日記〕（中島鹿吉刊、史談会、昭16）

安政二年

一、安政元年乙卯正月元日、今朝五ツ過より御祝詞出勤。西御屋敷東御屋敷南御屋敷三御奉行中御仕置中御目付中左右御組頭幷福岡御表御奥共御祝詞に出る。御奥は未だ御小屋住なり。九ツ時前より雪降る最も寒し、晩景空晴る、今日も地震不レ絶夜分亦同。
一、正月二日晴、風吹く、産土神へ参拝。地震昼夜度々其中軽重あり。
一、正月三日晴稍暖、今日墓参地震昼夜共少々。
一、正月四日暁より雨四ツ時晴暖地震昨日の如し。
一、正月五日晴大風吹く地震昨日の如し。
一、正月六日晴地震昼夜共少々。
一、正月七日晴昼地震甚稀也晩景より曇る。
一、正月八日朝より曇九ツ時頃より雨降る、今日地震静夜分震。
一、正月九日晴風吹く地震昼静夜分度々震。
一、正月十日晴朝震其後度々夜分少々。
一、正月十一日曇四ツ時前より雨降地震折々夜分同。
一、正月十二日晴風吹地震昼共度々。
一、正月十三日晴餘寒甚し地震昼稀夜分度々。
一、正月十四日晴地震昼静夜分度々。
一、正月十五日晴地震折々昼夜共。
一、正月十六日晴稍春暖を覚ゆ地震折々昼夜共。今日教授舘出初之処当病に付出勤不二相調一趣松本へ頼み遣す。
一、正月十七日晴昼静晩景震夜分同。今日初会興行従二八ツ時一出席之面々五藤三郎右衛門渡辺禎吾山岡利喜蔵松本吉右衛門。
一、正月十八日雨地震昼夜共度々昼九ツ頃震稍強し夜分又一度稍強し。

一、正月十九日曇地震昼夜共折々。
一、正月廿日雨地震度々夜分大雨大雷地震折々。
一、正月廿一日薄曇地震折々夜分静。
一、正月廿二日晴昼少震夜分静。
一、正月廿三日晴昼少震夜分静。
一、正月廿四日雨昼夜共震少々。
一、正月廿五日雨昼夜共昨日の如し。
一、正月廿六日雨八ツ時前より晴地震少々昼夜共。
一、正月廿七日晴昼地震少々夜分静。
一、正月廿八日曇九ツ時より雨降夜分大風雨、今日地震折々夜分同。
一、正月廿九日雨九ツ時より稍晴地震昼夜共折々。
一、二月朔日昼夜共地震折々。
一、二月二日曇九ツ時過より雨地震折々。
一、二月三日晴地震昼夜共折々。
一、二月四日晴地震昼夜共折々。
一、二月五日曇。
一、二月六日雨地震静。
一、二月七日曇風。今日御馭初御略式に而御名代迄被二相勤一候由之事。
今日地震無し。
一、二月八日晴今日昼静夜震。
一、二月九日晴地震昼夜共折々。
一、二月十日晴地震昼夜共折々。
一、二月十一日曇晩景より雨になる地震昼夜共折々。
一、二月十二日雨九ツ時過頃より漸晴今日地震昼夜共折々。
一、二月十三日晴今日地震昼夜共折々。
一、二月十四日晴。今日五ツ半頃国君御着城有レ之自分事先例之通北御会所之南御道筋に於て御目見之事。今日地震昼夜共折々。
一、二月十五日晴今日四ツ時三御奉行中御宅へ御着城為二御悦一罷出尤御着城即日爾来御悦申上処昨日者御□□中に付如レ此也。福岡御家老昨日御供着有レ之に付御表御奥へ御悦申出。今日地震昼夜共折々其中一度稍強し。
一、二月十六日晴地震折々晩方より雨降夜中雷鳴。
一、二月十七日晴九ツ時小雨即晴風吹。今明日譲恭院様御七回忌御法事に付諸事穏便。今夜地震稍強し。
一、二月十八日晴風。
一、二月十九日晴今朝地震少強し。
一、二月廿日晴。
一、二月廿一日晴五ツ時過震夜五ツ時頃震。
一、二月廿二日晴。
一、二月廿三日晴。
一、二月廿四日晴日入頃震。
一、二月廿五日晴今朝六ツ頃震稍強し。
一、二月廿六日晴四ツ時前より雨降四ツ頃地震夜分時々震。
一、二月廿七日曇晩景より雨降。
一、二月廿八日少曇八ツ時頃震。
一、二月廿九日小雨朝五ツ半頃震其後二度斗震。
一、二月卅日雨。
一、三月朔日雨晩景降止。
一、三月二日曇八ツ時前より晴地震晩方より雨少々夜中又震。
一、三月三日雨。
一、三月四日曇九ツ時頃震夜雨。
一、三月五日雨今暁雷一鳴五ツ時頃震夜晴初夜震。
一、三月六日晴晩方曇地震折々夜雨。
一、三月七日雨八ツ時過より晴。
一、三月八日晴。
一、三月九日晴。
一、三月十日晴四ツ半頃震。
一、三月十一日雨。

一、三月十二日小雨夜中震。
一、三月十三日曇。
一、三月十四日曇九ツ半時頃より晴夜分震。
一、三月十五日晴地震少々。
一、三月十六日晴地震折々。
一、三月十七日雨九ツ時頃より晴。
一、三月十八日曇或雨。
一、三月十九日晴八ツ半時頃地震稍強し。
一、三月廿日晴。
一、三月廿一日晴七ツ時頃地震。
一、三月廿二日晴今暁地震其後折々震。
一、三月廿三日晴昼より曇夜雨降。
一、三月廿四日曇夜小雨夜中地震。
一、三月廿六日曇八ツ時前より雨降。
一、三月廿七日雨朝地震。
一、三月廿八日曇七ツ半時地震。
一、三月廿九日晴。
一、四月朔日晴。
一、四月二日曇或は小雨。
一、四月三日雨。
一、四月四日曇夜中地震。
一、四月五日晴九ツ時過より雨夜風雨小震。
一、四月六日雨。
一、四月七日曇九ツ時半頃地震稍強尤天晴。
一、四月八日晴。
一、四月九日晴。
一、四月十日晴。
一、四月十一日晴。
一、四月十二日雨。
一、四月十三日雨。
一、四月十四日晴。
一、四月十五日薄曇。
一、四月十六日薄曇。
一、四月十七日薄曇。
一、四月十八日晴。
一、四月十九日雨風。
一、四月廿日雨昼頃より晴天に成。
一、四月廿一日晴。
一、四月廿二日晴。
一、四月廿三日曇或は小雨。
一、四月廿四日晴今夜四ツ時頃地震稍強し。
一、四月廿五日曇地震折々。
一、四月廿六日晴夜分地震度々。
一、四月廿七日晴。
一、四月廿八日晴地震一両度。
一、四月廿九日晴地震折々。
一、五月朔日曇今日入梅地震折々。
一、五月二日晴地震折々。
一、五月三日晴追て曇九ツ時頃より少々雷鳴八ツ時過小雨夜に入地震。
一、五月四日曇晩方小雨夜風雨雷鳴朝に至る。
一、五月五日曇五ツ時頃より晴晩方小雨地震三度。
一、五月六日晴。
一、五月七日曇九ツ時頃より雨。
一、五月八日微雨夜大雨。
一、五月九日雨。
一、五月十日曇雨になる朝地震。
一、五月十一日雨。
一、五月十二日曇今暁地震八ツ時過より雨降雷鳴。

一、五月十三、十四日各晴。
一、五月十五日大雨。
一、五月十六日薄曇。
一、五月十七日雨。
一、五月十八日曇。
一、五月十九日曇今日半夏生也。
一、五月二十日曇。
一、五月廿一日晴小震折々。
一、五月廿二、三日晴。
一、五月廿四日晴雨不定尤雨少々降。
一、五月廿五日晴夜五ツ時地震。
一、五月廿六日晴晩七ツ時頃地震。
一、五月廿七日晴晩方暴雨雷小鳴即晴。
一、五月廿八日晴夜五ツ時頃地震。
一、五月廿九日晴夜分地震。
一、五月卅日晴。
一、六月朔日晴。
一、六月二日晴雨不定八ツ時頃暫時暴雨頓に晴。
一、六月三日雨追而晴風吹。
一、六月四日晴。
一、六月五日晴今日より七日迄三日。
一、六月六日晴。
一、六月七日晴土用入夜分地震。
一、六月八日晴或薄曇八ツ時地震。
一、六月九日晴夜曇南方雷小鳴幷地震。
一、六月十日晴夜地震。
一、六月十一日晴。
一、六月十二、十三、十四日晴。
一、六月十五日晴夜雨降。
一、六月十六日晴或雨風吹夜中大風雨。
一、六月十七日雨晩方より風雨。
一、六月十八日晴晩方曇初夜小雨微雷暫時にして晴。
一、六月十九日晴夜雨降雷鳴。
一、六月二十日雨。
一、六月廿一日晴夜地震暫時雨降。
一、六月廿二日晴。
一、六月廿三日晴晩七ツ時地震再度。
一、六月廿四、五日晴。
一、六月廿六日晴九ツ時頃より曇八ツ時前微雨八ツ時地震。
一、六月廿七日晴地震少々。
一、六月廿八日晴今明二日、真亮院様十七年御忌御法事に付諸事穏便地震折々。
一、六月廿九日晴地震少々。
一、六月三十日晴。
一、七月朔、二日晴。
一、七月三日晴地震度々。
一、七月四日晴地震少々。
一、七月五、六、七、八、九、十、十一日晴。
一、七月十二日晴地震折々。
一、七月十三日薄曇地震折々夜中又震。
一、七月十四日風雨夜に至止。
一、七月十五日晴。
一、七月十六日曇九ツ時頃過雨降出雷少鳴暫時にして止。
一、七月十七、十八日晴。
一、七月十九日晴晩方微雨直に止。
一、七月二十日晴九ツ前地震九ツ時過より少々雨降。
一、七月廿一日雨穏便。
一、七月廿二日雨七ツ時頃地震晩方大雨雷鳴。

一、七月廿三、廿四、廿五日晴。
一、七月廿六日薄曇八ツ頃微雨。
一、七月廿七日晴夜大雨。
一、七月廿八日雨夜風雨。
一、七月廿九日雨。
一、八月朔、二、三、四日晴。
一、八月五日雨。
一、八月六日晴夜中雨。
一、八月七日晴。
一、八月八日薄曇。
一、八月九日晴晩方小雨。
一、八月十日朝小雨南方小雷鳴四ツ時過より晴。
一、八月十一日晴八ツ時半頃より雨。
一、八月十二、十三、十四日晴。
一、八月十五日曇。
一、八月十六日大雨夜雷鳴　焼香に行。
一、八月十七日晴。
一、八月十八、十九日各雨。
一、八月二十日大風雨晩方晴。
一、八月廿一日曇。
一、八月廿二、廿三、廿四、廿五、廿六日晴。
一、八月廿七日雨夜地震雷鳴。
一、八月廿八日晴七ツ時頃雨降暫ありて止。
一、八月廿九、卅日晴。
一、九月朔日晴。
一、九月二日晴夜地震。
一、九月三日雨。
一、九月四日雨九ツ時前より晴。
一、九月五、六日晴。
一、九月七日晴九ツ半頃より小雨降。
一、九月八日雨夜中地震今日。
一、九月九日晴。
一、九月十日曇。
一、九月十一日雨。
一、九月十二、十三日晴。
一、九月十四日曇今暁未明地震。
一、九月十五日晴。
一、九月十六日小雨。
一、九月十七、十八、十九、廿日晴。
一、九月廿一日晴。九ツ時頃地震。
一、九月廿二日晴。
一、九月廿三日晴九ツ時過頃地震稍強。
一、九月廿四日晴。
一、九月廿五日曇八ツ時頃より雨。
一、九月廿六日雨。
一、九月廿七日晴昨日雨天に付　藤並大明神様御神幸御延引今日御神幸祭礼あり。
一、九月廿八、廿九日晴。
一、九月三十日九ツ時過より雨。
一、十月朔、二日晴。
一、十月三、四日曇。
一、十月五、六日晴。
一、十月七日晴四ツ時過地震。
一、十月八日曇。
一、十月九日四ツ時頃少々雨降雷小鳴即雨止八ツ時頃より晴。
一、十月十日晴。
一、十月十一日曇九ツ時頃より雨降今般　日光御本坊向其外御修覆御手伝御用無御滞被為候依之先月十四日御時服御拝領万端御首尾能被為候

右御歎今日四ツ時御奉行中御宅へ罷出夜雷鳴再度。
一、十月十二日晴今朝江戸より御飛脚早追到着今四日夜四時江戸大地震之由。（〇四日は元のママ）
一、十月十三日雨。
一、十月十四、十五、十六日晴。
一、十月十七日雨夜中雷小鳴。
一、十月十八日雨八ツ時頃雷小鳴。
一、十月十九、廿、廿一、廿二日晴。
一、十月廿三日晴夜雨。
一、十月廿四日雨四ツ時頃より晴。
一、十月廿五日晴今明日。
一、十月廿六、廿七、廿八、廿九日晴。
一、十一月朔、二、三、四、五、六日晴。
一、十一月七日雨。
一、十一月八、九、十、十一、十二日晴。
一、十一月十三日暁震雨降朝に至て晴。
一、十一月十四日早朝雷小鳴暫時にして晴風吹。
一、十一月十五、十六、十七、十八、十九日晴。
一、十一月二十日曇。
一、十一月廿一日晴風。
一、十一月廿二日晴九ツ時過雪小降。
一、十一月廿三、廿四、廿五、廿六日晴。
一、十一月廿七日晴今暁地震稍強し。
一、十一月廿八日曇。
一、十一月廿九日晴夜中地震。
一、十一月三十日晴。
一、十二月朔、二、三、四、五、六日晴。
一、十二月七日雨。
一、十二月八日晴風。
一、十二月九日晴小雪。
一、十二月十、十一、十二、十三日晴。
一、十二月十四日雨四ツ時過より止。
一、十二月十五日晴風夜小雪。
一、十二月十六日晴風。
一、十二月十七日晴風今日古義軒終会。
一、十二月十八日晴今暁地震二三度夜強し。
一、十二月十九日曇夜雨。
一、十二月廿、廿一、廿二、廿三、廿四日晴。
一、十二月廿五日晴小暖。
一、十二月廿六日薄曇晩方小雨。
一、十二月廿七日晴節分。
一、十二月廿八、廿九日晴。

73 安政二年十月二日（1855－Ⅺ－11、2398899）、江戸を中心として南関東に大地震がおこった。江戸城をはじめ民家一万四千軒あまりが倒壊した。藤田東湖がこの地震に圧死する。「安政江戸地震」（Ⅳ－476）

〔森沢保如家文書〕〈桑田精一筆写、大15〉

安政二年十月二日江戸大地震人家潰ウヅミ其上出火起リ大変限リナシ汐モ少々宛津浪上り候得共サシテノ事モナク汐ノイタミ無之様ニ相聞候
松平肥後守様御留守之上御屋敷惣潰死人三百五十人右死人車ニ積ミ鈴ケ森へ仮葬ニイ（〇タ）ス趣
津軽様上屋敷死人八十人右同断
酒井雅楽頭様御在府上御屋敷死人五十人
江戸町数五千三百七十町
諸御屋舗数二千五百六十余軒損シ寺院堂社三万九千六百三十ケ所土蔵五億八万千七百八十六ケ所　以上（〇億は十万のことであろう）

和暦・西暦換算表（安政三年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月1日	1856年2月6日	2398986
2月2日	3月7日	2399016
3月1日	4月5日	2399045
4月1日	5月4日	2399074
5月1日	6月3日	2399104
6月1日	7月2日	2399133
7月1日	8月1日	2399163
8月1日	8月30日	2399192
9月1日	9月29日	2399222
10月1日	10月29日	2399252
11月1日	11月28日	2399282
12月1日	12月27日	2399311

〔勤王秘史、佐々木老侯昔日談〕〈津田茂麿編、大4〉

江戸大地震と東湖先生の圧死

この年安政二年十月二日、江戸が大地震で、水戸の藤田東湖先生（戸田蓬軒先生も）が圧死せられたとの事で天下の志士は皆之を惋惜したのである。

○

尚此の地震に就いて思ひ出したが、去寅年以来諸国に地震が度々あるので、阿部閣老は庭前に竹籔を植ゑ、地震の時の立退の用意をしたといふ噂があつて、自分等は、どうも閣老の仕方としては、チト用意が周密過ぎると、知人と共に笑つた事があつたが、この時、自分が江戸へ見舞状をやつた返事にも、『阿部侯も御住居総潰にて、妾其外死人数多、侯も御刀一本にて漸く這出し被成候、竹籔の先見も用立不申、一笑に御座候』。とあつた。何でもないことだが、一寸面白いと思つたので、今に覚えて居る。

〔土佐藩政録〕

十月二日江戸ニ震フ死者甚多シ

〔地震日記二〕

○安政三年

正月元旦、夜四ツ過ゆる小

二日、九ツ時ゆる小九ツ半頃又ゆる小（○昼）、夜中風なくゆりもなし

三日、九ツ時ゆる小夜五ツ半時ゆる中ノ小

同四日、四ツ半時ゆる小九ツ時又ゆる小（○昼）

同五日、八ツ時ゆる小（○午後）

同六日、四ツ半時ゆる小、九ツ半時又ゆる小（○昼）、夜四ツ時ゆる小

九ツ半頃鳴動の音聞ゆ

同七日、九ツ半時ゆる小夜ニ入弐度小ゆり

同八日、晩方壱度ゆる小、夜中ゆりを覚へず

同九日陰天四ツ時ゆる小八ツ時又ゆる小、夜五ツ時と四ツ半時と弐度ゆる小

同十日、八ツ時ゆる小（○午後）、夜中壱度小ゆり

同十一日、八ツ時弐度ゆる小、夜四ツ時ゆる小
同十二日、九ツ時ゆる小（〇昼）、四ツ半時ゆる小
同十三日、九ツ時より日入迄之間ニ弐度ゆる小夜ニ入壱度小ゆり
同十四日、昼ゆりを覚へず、夜五ツ時ゆる小
同十五日、夜五ツ時ゆる小
同十六日、八ツ時ゆる小（〇午後）、今夜ゆりなし
同十七日、今日ゆりなし、夜四ツ半頃ゆる但小
同十八日、夜法座有四ツ半時ゆる小八ツ時又ゆる中ノ小（〇昼）
同十九日晴天七ツ時ゆる小（〇夕方）、夜四ツ時ゆる小ノ大暁前又ゆる小
（〇廿日未明）
同廿日、今日弐度ゆる夜九ツ時ゆる小
同廿一日、今日昼ノ間ゆりを覚へす夜弐度ゆる中ノ小
同廿二日陰天五ツ時ゆる小、九ツ時ゆる小ノ大、夜雨やむ四ツ時ゆる小
同廿三日、夜四ツ半ゆる小ノ大九ツ時又ゆる中ノ小
同廿四日、暮六ツ時ゆる小
同廿五日、九ツ半時ゆる小（〇昼）、順助来ル夜四ツ半頃まで咄ス九ツ半より七ツ迄之間ニ弐度ゆる小
同廿六日、昼ノ間ゆりなし夜五ツ時ゆる小
同廿七日晴天今朝七ツ前ゆる中ノ小五ツ半時又ゆる小四ツ半時ゆる中、夜ニ入五ツ半頃ゆる小
同廿八日晴天五ツ時弐度小ゆり、九ツ時ゆる小ノ大、八ツ時又ゆる小（〇白昼）
同廿九日、五ツ時ゆる中ノ中、日入頃ゆる小夜九ツ時ゆる小
同晦日晴天六ツ時ゆる小五ツ半時弐度ゆる中ノ小、八ツ時より陰る同時ゆる中ノ中
二月朔日薄陰朝六ツ半時ゆる中ノ中尤ゆり長し、八ツ時ゆる小、夜ニ入曇る七ツ半時ゆる大中ノ長ゆり諸物動き鳴る
同二日六ツ半時又ゆる小晴天八ツ頃ゆる中ノ大、夜風なし八ツ時ゆる中ノ小
同三日晴天四ツ時ゆる小九ツ半時又小ゆり、夜ニ入七ツ時ゆる小
同四日、五ツ時鳴動弐度、八ツ時又陰ルゆる小、夜中ゆりを覚へす
同五日、四ツ半時ゆる小八ツ時ゆる、夜四ツ時小ゆり
同六日晴天五ツ半時ゆる小（〇朝）、夜中ゆりをしらす
同七日、八ツ時ゆる小（〇午後）
同八日、夜七ツ時ゆる中ノ小（〇九日未明）
同九日、五ツ半時ゆる小（〇夜）
同十日、七ツ時ゆる小（〇夕方）
同十一日薄曇四ツ時ゆる小、八ツ時頻りニ鳴動の声聞ゆ、八ツ半時雷鳴夜ニ入空少し晴る六ツ半時ゆる小
同十二日、五ツ半時ゆる小（〇朝）
同十三日、夜九ツ頃ゆる小
同十四日晴天五ツ時ゆる小八ツ時又ゆる小、夜ニ入風なし六ツ半時弐度小ゆり
同十五日、此節汐干をためし見るに昨年より海潮卑ク相成しと見へ浜少少ツヽ出来其洲にて衆人馬刀を取ル福島ノ洲ニハ最多シトいふ。八ツ半時ゆる中ノ小暫く有て又ゆる小
同十六日、夜中雨ふるゆりをしらす
同十七日、朝小雨ふる五ツ時やむ同時ゆる小五ツ半頃より晴ル九ツ半時ゆる中ノ小七ツ時弐度ゆる共中ノ小同時又曇ル日没又ゆる小夜五ツ時ゆる小
同十八日、今夜廿代町へ行本丁へ泊ル今日ゆりを覚へす（〇筆者高知城下にあり）
同十九日晴天八ツ時ゆる小、夜中壱度ゆる小 今日の入日色の赤く恐ろしき程の事なるよし恐れ拝せし者数名有之（〇筆者高知にあり）
同廿日、今日八ツ時頃壱度小ゆり有（〇午後、筆者高知にあり）
同廿一日、今夜九ツ頃ゆる小（〇筆者宇佐に戻っている）
同廿二日、七ツ時ゆる小、夜中ゆりを覚へす
同廿三日、五ツ半時ゆる小、夜九ツ時ゆる小
同廿四日晴天五ツ半時鳴動小ゆり八ツ時又ゆる小、夜五ツ時ゆる小九ツ時又ゆる中ノ小七ツ時ゆる中ノ大

同廿五日、四ツ半時ゆる中ノ小、九ツ半時又ゆる小、夜九ツ時ゆる中ノ大八ツ時ゆる中ノ中
同廿六日、夜中弐度小ゆり
同廿七日晴天風吹く六ツ時ゆる小五ツ半時又ゆる中ノ小七ツ時小ゆり、夜四ツ時ゆる小
同廿八日、九ツ時ゆる小夜四ツ半時ゆる中ノ小
同廿九日、八ツ半時七ツ時弐度ゆる小夜九ツ頃ゆる小
三月朔日、五ツ時ゆる九ツ半時弐度ゆる小、夜壱度小ゆり
同二日、七ツ時ゆる小夜九ツ時ゆる中ノ中
同三日晴天昨日より今朝迄の間ニ橋田ノ中ニ当寺へ桃の枝葉ヲ貰ニ来ルもの凡弐拾人（〇脚注に「桃の木一昨年皆汐ニ流レ橋田ニ壱本もなきゆへ当寺へ所望ニ来れる也」とある）、昼の間ゆりをしらす、夜四ツ半時ゆる中ノ小
同四日、九ツ時ゆる小、夜五ツ半時ゆる小七ツ時ゆる小（〇五日未明）
同五日、四ツ半時ゆる七ツ頃又ゆる小（〇白昼）
同六日陰天五ツ時ゆる小夜五ツ半時ゆる小
同七日、夜四ツ半時ゆる小七ツ前又ゆる小（〇八日未明）
同八日、九ツ半時続て弐度ゆる中ノ大日入頃又ゆる小夜四ツ時ゆる小九ツ半時ゆる小
同九日雨天六ツ半時続て弐度ゆる小四ツ半時より七ツ迄之間ニ四度ゆる皆小、六ツ時ゆる小、夜中弐度ゆる小
同十日雨天五ツ時ゆる小四ツ半九ツ半時弐度ゆる小四ツ時又ゆる小
同十一日、今夜壱度小ゆり有
同十二日、今夜四ツ時ゆる小
同十三日、八ツ時ゆる小夜雲頻りニ走セ月見へす九ツ半頃ゆる小
同十四日、九ツ半時ゆる小、夜五ツ半時ゆる小
同十五日晴天五ツ時ゆる小、汐大ニ干ル七ツ時又ゆる小、四ツ半頃ゆる中ノ大七ツ時又ゆる中ノ、六ツ時続て三度ゆる小
同十六日薄曇五ツ時ゆる小七ツ時又ゆる小
同十七日、八ツ時又ゆる、夜ゆりを覚へす
同十八日、五ツ時ゆる小九ツ時八ツ時両度ゆる小、夜中ゆりを覚へす
同十九日、今日弐度ゆると申事我等ハ歩行中ゆへしらす七ツ時又ゆる小
同廿日、七ツ前ゆる小（〇午後、筆者高知にあり）
同廿一日、七ツ前帰着間もなくゆる小
同廿二日、九ツ時ゆる小、七ツ時又ゆる小、夜五ツ時ゆる小
同廿三日、四ツ時より八ツ時迄之間風別して烈し同時ゆる小、夜四ツ時ゆる小
同廿四日晴天五ツ時ゆる中ノ小九ツ時又ゆる小、七ツ時ゆる小、夜五ツ時四ツ半時弐度小ゆり
同廿五日晴天六ツ半時ゆる小四ツ時ゆる小（〇朝）、夜五ツ半時ゆる中ノ小
同廿六日、四ツ時より晴ル同時ゆる小七ツ時ゆる小（〇白昼）
同廿七日、七ツ時ゆる中ノ小（〇夕方）、四ツ半頃ゆる小（〇夜）
同廿八日、七ツ頃ゆる小（〇夕方）夜五ツ半ゆる九ツ時又ゆる共小、七ツ時ゆる中ノ小
同廿九日、今日ゆりをしらす、夜星見ゆる九ツ半時ゆる小
四月朔日、晩方薄曇七ツ時ゆる小、夜中壱度小ゆり有
同二日、八ツ半時ゆる小（〇午後）
同三日、八ツ前ゆる中ノ小（〇午後）
同四日晴天六ツ時ゆる小（〇朝）、日没頃ゆる小
同五日陰天五ツ時ゆる小（〇朝）、七ツ半時ゆる夜明前ゆる小（〇六日未明）
同六日、四ツ時弐度ゆる小
同七日九ツ半時弐度ゆる小八ツ時より晴天ト成ル同時ゆる小日入頃ゆる小七ツ時ゆる小（〇午前）
同八日、四ツ半時ゆる小雨やむ八ツ時又ゆる小、夜四ツ頃ゆる小
同九日、今夜大草臥にて熟睡地震の有無をしらす
同十日半晴五ツ時ゆる小、日暮頃ゆる小五ツ時ゆる小、四ツ時又ゆる小
同十一日、九ツ時ゆる小八ツ半時またゆる小（〇昼）、五ツ半頃ゆる中ノ小（〇夜）、四ツ時ゆる小

同十二日、九ツ時ゆる（〇昼）、今夜四ツ時ゆる小
同十三日、四ツ半時ゆる小、九ツ半時と八ツ時分弐度ゆる小、夜四ツ頃より天陰ル、同時ゆる小
同十四日、五ツ時ゆる中小ノ（〇朝）、九ツ時ゆる中大ノ、今夜の地震近頃珍敷大ゆりなり
同十五日、八ツ時ゆる小、夜中壱度小ゆり
同十六日、昼ノ間ゆりをしらす夜七ツ時ゆる小
同十七日、昼ノ間ゆりなし夜九ツ頃壱度小ゆり少々寒し
同十九日、日入頃ゆる小、夜更ル迄法話する八ツ頃ゆる中小ノ
同廿日、今日ゆりをしらす
同廿二日、八ツ時帰寺夫より半時計有てゆる小、夜五ツ半時ゆる小
同廿三日、九ツ半時ゆる小、夜九ツ頃ゆる中小ノ
同廿四日、八ツ時ゆる小夜星見へすゆりなし
同廿五日、九ツ半時ゆる中小ノ直ニ又ゆる小、暮合頃又ゆる小夜四ツ半時ゆる小
同廿六日半晴四ツ半時雨ふる同時ゆる小日入頃ゆる中小ノ夜五ツ時弐度ゆる小
同廿七日晴天五ツ時ゆる小四ツ半時ゆる小七ツ半時ゆる小夜九ツ頃ゆる小
同廿八日陰天四ツ頃より晴天と成る同時ゆる小八ツ時又ゆる小、夜星見へす壱度小ゆりあれ共時を覚へす
同廿九日、五ツ頃やむ同時ゆる小、夜星見ゆる同時ゆる
同卅日晴天七ツ半時ゆる五ツ半時又ゆる小八ツ半時ゆる小、夜壱度小ゆり

五月朔日、昼ノ間ゆりなし夜四ツ時ゆる小
同二日、八ツ時ゆる小夜五ツ時八ツ時弐度ゆる小
同三日、八ツ時ゆる小夜中大に寒く冬の如し九ツ時ゆる小
同四日、七ツ半時ゆる小夜ニ入、五ツ半時ゆる小
同五日、九ツ半時ゆる小日入頃又ゆる小
同六日、八ツ時ゆる小夜五ツ時ゆる小九ツ頃又ゆる小
同七日曇天四ツ半時ゆる小、夜に入大雨ゆりを覚へす
同八日、九ツ時ゆる小（〇昼）
同九日、九ツ半時ゆる小、八ツ時ゆる中小ノ、日入頃またゆる小五ツ半時小ゆり
同十日、九ツ半時ゆる小、夜ゆりを覚へす
同十一日、四ツ半時ゆる小、夜八ツ頃ゆる小
同十二日薄陰五ツ時ゆる小、七ツ半時ゆる小（〇夕方）
同十三日雨天五ツ時ゆる小九ツ半時又ゆる小（〇昼）
同十四日、八ツ時ゆる小、暮六ツ半時ゆる小
同十五日雨天四ツ半時ゆる小（〇午前）
同十六日、七ツ頃ゆる小、夜ゆりをしらす
同十七日（〇昼、筆者御畳瀬へ行き戻る）、夜五ツ半ゆる小八ツ時又ゆる小
同十八日、夜六ツ半時ゆる中大ノ近頃是程のゆりハなし暫く有て又ゆる小
同十九日（〇筆者高知へ行く）
同廿日（〇筆者高知にあり）、昨日より今日の間地震をしらす
同廿一日薄曇五ツ頃日輪見ゆる同時ゆる小大ノ（〇高知横町にて）、八ツ時帰寺（〇宇佐）七ツ半時ゆる小、夜中ゆりなし
同廿二日、夜五ツ半時ゆる小
同廿三日、五ツ半時ゆる小九ツ時又ゆる小、暮六ツ時ゆる小
同廿四日、五ツ半時ゆる小、七ツ時ゆる中小ノ（〇夕方）
同廿五日、日入頃ゆる
同廿六日、夜八ツ半時ゆる中小ノ
同廿七日、九ツ時ゆる小、夜四ツ時ゆる小
同廿八日晴天九ツ半頃ゆる小、夜星明なりゆりなし
同廿九日、夜半頃ゆる中小ノ
六月朔日、夜星見ゆる九ツ頃ゆる小
同二日雨天五ツ時ゆる小

同三日（〇筆者高知千蓮寺へ行く、地震記事なし）
同四日、五ツ時ゆる小（〇朝、高知にて）
同五日、今日八ツ前ゆる小（〇午後、高知にて、筆者が九日に宇佐に戻るまで高知にて地震記事なし）
同九日、七ツ時ゆる小（〇夕方、宇佐）
同十日晴天四ツ時ゆる小、此節諸所に蝮多しといふ
同十一日、今日ゆりを覚へす
同十二日晴天五ツ時ゆる中ノ小五ツ半時又ゆる小（〇朝）
同十三日、夜五ツ半時ゆる中ノ小七ツ時ゆる小ノ大
同十五日、暮合頃ゆる小
同十六日晴天八ツ時ゆる小（〇午後）
同十七日、九ツ半頃ゆる中ノ小夜よく寝入ゆりの有無をしらす
同十八日、日暮ゆる小
同十九日、九ツ時ゆる中ノ小（〇昼）
同廿日、夜九ツ半時ゆる小ノ大
同廿一日、今日ゆりをしらす夜同断
同廿二日晴天四ツ時ゆる小八ツ時又ゆる小（〇午後）
同廿四日、夜五ツ半時ゆる中ノ小
同廿五日晴天九ツ時ゆる小、夜八ツ時七ツ時両度ゆる小（〇廿六日未明）
同廿六日、五ツ時ゆる小（〇朝）
同廿八日、九ツ半時ゆる中ノ中、八ツ時又ゆる小夜四ツ半時又ゆる小
同廿九日、四ツ半時ゆる小（〇午前）
七月朔日、夜四ツ半時ゆる小ノ大
同四日晴天五ツ時弐度続てゆる小ノ大（〇朝）
同五日、両三日以前より海頻りに鳴ル
同六日陰天雷鳴のことく震動する、福島ノ陰陽師のいふニハ一昨日入来りしハ雄波と申ものにて一両年の内ニハ又雌波来ルへし油断すへからすと流言せしむる由夫ニ付児女子ハ海嘯を聞て又波入ル哉と恐怖するもあり、或男これを聞ていわく如何ニ世の中の義理とハ言ながら雌波雄波と事わけ夫婦つれにて御つとめニハ及ハぬ事と云々
同七日、九ツ半時ゆる中ノ大ゆり永くして筆司ノ環鳴り天井の瓢箪動き昼寝の者ハおき上ル程の事なり七ツ時又ゆる小（〇夕方）
同八日、古へ白鳳年中ニ海ト成し土佐田苑五十余万頃の跡今ニ海底ニ、東西数十里ノ間岸ノ如きもの残り漁者共其辺にて魚縄をおろすニ船より岸迄凡百五拾尋位有其岸を離レ南へ少し寄レハ海底迄三百尋程ノ深さなりと是昔の海陸ノ堺なるへし、今夜橋田漁者の咄しを聞記す
同九日、日入頃ゆる小
同十一日陰天五ツ時ゆる小、夜九ツ時ゆる中ノ中
同十三日、今日ゆりを覚へす
同十五日、波大に高し、昨今ノ波にて東町ノ浜大ニ崩レ新在家西外レ山際迄波打来り往来出来す
同十六日、九ツ時ゆる中ノ小（〇昼）
同十七日、夜九ツ半時ゆる中ノ小
同十八日、九ツ半時ゆる小（〇昼）
同十九日、八ツ時続て弐度ゆる小、日入頃又ゆる小
同廿一日、四ツ時ゆる小、今夜四ツ半時ゆる小
同廿二日、七ツ時ゆる小（〇夕方）
同廿三日、夜五ツ半時ゆる
同廿四日晴天五ツ半時ゆる小（〇朝）
同廿五日、七ツ時ゆる中ノ中（〇夕方）
同廿六日、夜五ツ半時ゆる
同廿七日、七ツ半時ゆる（〇夕方）
同廿八日、八ツ時戻ル西分の渡し場にて地震する中ノ中船中にて地震ニ逢し事けふか始なり、七ツ時帰寺同時又ゆる中日入過又ゆる中ノ小
八月朔日、夜六ツ半時小ゆり
同二日、暮六ツ時ゆる小
同三日、夜大雨風添九ツ時ゆる小
同五日、七ツ半時ゆる小（〇夕）

同六日、六ツ半時ゆる小（〇朝）
同七日、七ツ半時ゆる中大ノ（〇夕）
同八日、六ツ時ゆる小（〇朝）
同九日晴天五ツ時ゆる小八ツ時陰ルゆる小、夜中ゆりなし
同十日晴天六ツ半時小ゆり（〇朝）
同十一日晴天七ツ半時ゆる中小ノ、九ツ半時小
同十二日ゆりを覚へす
同十三日晴天九ツ時ゆる小八ツ時又ゆる小（〇昼）
同十四日、朝五ツ時ゆる小、夜九ツ時ゆる小
同十五日、四ツ時ゆる中小ノ九ツ半時又ゆる小（〇昼）
同十六日、九ツ半時ゆる小
同十七日、七ツ時ゆる小、日入過またゆる小
同十八日晴天五ツ半時ゆる中小ノ（〇朝、十九日から二十一日昼まで筆者高知にあり、この間地震記事なし）
同廿一日、八ツ半時帰着、一両日ゆりを覚へす
同廿三日、九ツ時小ゆり（〇昼）
同廿四日、四ツ時橋田為平方仏壇供養ノ勤行ニ行大変後仏壇なく此頃造立終りしゆへ今日移徙する
同廿五日陰天九ツ時ゆる小（〇昼）
同廿七日、九ツ時ゆる小（〇昼）
同廿八日晴天五ツ半時ゆる小（〇朝）
同廿九日、夜五ツ半時鳴動八ツ半時ゆる小
九月二日、八ツ時ゆる小（〇夜）
同三日、日入頃ゆる小大ノ
同四日、夜中鳴動の音聞ゆ
同五日、七ツ頃（〇夕方）雨やむ鳴動ノ声両度聞ゆゆりなし
同六日、小雨やます夜同断七ツ時ゆる小
同七日、夜四ツ頃小ゆり
同十一日曇天五ツ時ゆる小、夜九ツ頃ゆる小
同十二日、七ツ時ゆる小（〇夕方）
同十三日、夜又八ツ頃よりふる同時ゆる小
同十五日、九ツ時ゆる中小ノ（〇昼）
同十七日、夜七ツ頃ゆる小
同十八日晴天夜五ツ半時ゆる小
同十九日、今日九ツ時ゆるといふ歩行中都て覚えす（〇高知への途中）
同廿一日、九ツ半頃ゆる小（〇高知にて）
同廿二日、七ツ半時帰寺（〇夕方、高知から宇佐へ戻るの意）、日入頃ゆる小
同廿三日、八ツ時ゆる中中ノ（〇午後）
同廿四日、日入頃ゆる中大ノ夜七ツ時又ゆる小大ノ（〇廿五日未明）
同廿五日、七ツ時ゆる小大ノ日入頃続て弐度ゆる小
同廿六日、八ツ時ゆる小夜七ツ時又ゆる小（〇廿七日未明）
同廿九日、六ツ時ゆる小（〇夕）
十月朔日、九ツ半時ゆる小大ノ、日入頃又ゆる小
同三日雨天九ツ時ゆる小（〇昼）
同五日、四ツ時ゆる（〇午前）
同七日、今日弐度ゆる中小ノ
同八日晴天五ツ時ゆる中中ノ夜七ツ時ゆる中（〇九日未明）
同九日、夜四ツ半ゆる小
同十日、五ツ時ゆる中小ノ（〇朝）
同十一日、夜ゆりを覚へす
同十二日晴天六時ゆる長し中ノ、七ツ半時ゆる中小ノ（〇夕方）
同十三日、四ツ時ゆる小、夜ゆりなし
同十四日、今日ゆりを覚へす
同十六日、九ツ時ゆる小、七ツ半頃ゆる中大ノ尤長きゆりにて衆人皆戸外へ出ル亦波入来らんかと恐怖するもの多し近頃なき長きゆりなり夜四ツ時又ゆる小
同十七日、四ツ半時より高智へ行八ツ時ゆる小（〇午後）

同十九日晴天九ツ頃ゆる小ノ大（〇高知にて）
同廿一日、八ツ半頃帰寺、七ツ時ゆる小夜七ツ頃ゆる中ノ小
同廿二日、夜四ツ半時ゆる小
同廿三日、八ツ時ゆる小（〇午後）
同廿五日、晩方ゆる小
同廿六日、今日両度ゆる中ノ小
同廿七日、今日三度ゆる小
同廿九日、五ツ時より西分へ寄諸木御経会ニ行同時ゆる小
同卅日、今朝六ツ半時ゆる中ノ小
霜月朔日、夜九ツ半時ゆる小
同二日、九ツ半時ゆる中ノ大浦人共また汐の入らん事を恐レ騒くもの多し
夜橋田ノ家より蚊帳帷子ノ類を当分貯り呉よとて持来ル是も波ノ入ルを恐るゝゆへの事なるへし一笑、八ツ頃ゆる小（〇三日未明）
同三日、夜五ツ時ゆる小八ツ時又ゆる小
同四日、四ツ半時ゆる小（〇午前）
同五日、七ツ時ゆる小
同六日、今朝五ツ半頃ゆる小
同七日晴天六ツ時ゆる小（〇朝）
同九日曇天七ツ時ゆる小（〇夕方）
同十日、今日ゆりを覚へす
同十一日、夜四ツ頃ゆる小
同十三日、夜九ツ時ゆる小七ツ時又ゆる中ノ小
同十五日、夜五ツ時四ツ半時弐度ゆる小
同十六日、今朝七ツ時ゆる中ノ小暮六ツ半時又ゆる小
同十七日、夜九ツ時ゆる小
同十九日、両三日之間大ニ闇敷ゆりをしらす
同廿一日、四ツ時より高知へ行、九ツ半時ゆる小
同廿三日、七ツ時ゆる中ノ小今朝千蓮寺御法座中大ニゆる中ノ大参詣ノ人過半障子を明ケ外へ出し我ハ高座よりおりす直ニやむ（〇高知にて）
同廿五日、夜五ツ半時法座済ゆる小（〇高知にて）
同廿六日、八ツ時ゆる小（〇午後、高知にて）
同廿七日、四ツ時ゆる小（〇夜、高知にて）
同廿九日、森山にて宇佐庄屋と一所ニ成帰る
極月二日、今朝七ツ頃と思しき時ゆる中ノ大六ツ半時又ゆる小ノ大五ツ時ゆる小（〇午前）
同三日、夜両度ゆる
同四日、夜四ツ時ゆる中ノ小八ツ時又ゆる小（〇五日未明）
同五日、夜弐度小ゆり
同六日晴天四ツ半時ゆる小九ツ時ゆる小七ツ時又ゆる小（〇夕方）
同七日、夜九ツ半時ゆる小
同九日晴天六ツ半時ゆる小、夜八ツ時ゆる小
同十日、夜弐度ゆる小
同十二日晴天四ツ半時ゆる小、夜壱度小ゆり
同十三日晴天昼の間ゆりなし夜弐度ゆる小
同十四日晴天四ツ時ゆる小中ノ（〇朝）
同十五日晴天六ツ時ゆる小大ノ、七ツ時ゆる（〇夕方）
同十六日、夜八ツ時ゆる小
同十七日曇天六ツ時ゆる中ノ小五ツ時ゆる小四ツ半時又ゆる小、夜六ツ時ゆる小、夜中壱度小ゆり
同十八日晴天大風六ツ時ゆる中ノ小五ツ時又ゆる中五ツ半時小ゆり、七ツ時ゆる小（〇夕方）
同十九日、今朝弐度小ゆり夜ゆりなし
同廿日晴天五ツ時ゆる小、夜四ツ半頃ゆる小
同廿一日、夜、八ツ時七ツ時弐度ゆる中ノ小
同廿二日、夜ニ入て大風九ツ時ゆる小
同廿四日、夜八ツ時ゆる小
同廿六日、ゆりを覚へす
同廿八日晴天六ツ半時ゆる小、四ツ半時ゆる中ノ中

同廿九日、暮六ツ時ゆる小
同卅日（〇この日地震記事なし）

〔鹿澄雅澄日記〕〈中島鹿吉刊、史談会、昭16〉

一、同（〇正月）十七日、晴、夜中地震
一、同廿一日曇、五ツ時半頃地震
一、同廿三日朝、夜地震
一、同（〇二月）二日晴、今暁地震稍強し、其後度々震
一、同三日晴、夜中地震
一、同十一日曇、彼岸入晩方微雨、雷鳴夜中地震
一、同十七日曇、晩方地震三度位
一、同（〇三月）八日晴、八ツ時前地震両度
一、同九日雨地震度々
一、同十五日晴、夜中ヨリ暁迄地震三度
一、同廿三日晴、夜中地震両度
一、同廿四日晴、曙地震
（〇四月五月は地震記事なし）
一、六月十三日晴夜六ツ過地震
一、七月七日晴晩方地震夜中雨
一、七月十七日晴夜中地震二度
一、七月十八日朝より曇晩方風雨薄暮小雷一天赤気夜五ツ時に至り小晴
一、八月十六日晴八ツ頃地震夜雨
一、九月十二日晴夜中地震
一、十月八日晴地震
一、十月十六日晴七ツ時頃地震稍強
一、十月廿六日雨地震度々
一、十一月二日晴九ツ時過地震稍強シ
一、十一月廿三日晴今暁地震両度
一、十二月十七日曇朝地震夜雨
一、十二月十八日晴地震両度夜雪

75 安政四年、土佐国安政元年十一月四日、五日の大地震の余震続く

和暦・西暦換算表（安政四年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月1日	1857年1月26日	2399341
2月1日	2月24日	2399370
3月1日	3月26日	2399400
4月1日	4月24日	2399429
5月1日	5月23日	2399458
閏5月1日	6月22日	2399488
6月1日	7月21日	2399517
7月1日	8月20日	2399547
8月1日	9月18日	2399576
9月1日	10月18日	2399606
10月1日	11月17日	2399636
11月1日	12月16日	2399665
12月1日	1858年1月15日	2399725

また同年七月十四日、宇佐に暴風雨、高波、海岸崩壊する

〔地震日記三〕

〇安政四年
正月元旦、今日八ツ時ゆり初の地震有小（〇昼）
同二日、四ツ半時ゆる小ノ大（〇夜）
同三日、夜四ツ半時ゆる小
同四日晴天五ツ時ゆる小（〇朝）
同六日晴天五ツ時ゆる小（〇朝）、夜五ツ半時ゆる
同七日、暮六ツ時ゆる小夜四ツ時又ゆる小
同九日、夜ゆりをしらす
同十日、夜四ツ時ゆる中ノ小

同十一日、今夜六ツ時ト四ツ時ト両度ゆる小
同十二日、五ツ時ゆる小（〇朝）
同十三日、夜四ツ時ゆる中ノ
同十四日晴天九ツ時ゆる日入頃又ゆる小共ニ夜八ツ時ゆる小
同十五日薄陰四ツ半時ゆる中ノ小八ツ時ゆる小風吹寒し日入前ゆる小夜御法座勤行中ニ又ゆる小
同十六日晴天九ツ半時ゆる小、夜ゆりなし
同十七日八ツ半頃ゆる小（〇昼）
同十八日夜四ツ時ゆる中ノ小
同十九日、今日四ツ頃ゆるといふ歩行中ゆへすへてしらす（〇午前）
同廿二日、夜四ツ過大ニゆる中ノ大ゆり長し門口へ出ルものも有井戸を見ル有惣して大ニ恐レ騒く
同廿三日、宇佐にてハ昨夜四五度も続てゆるといふ今晩も弐度ゆる小
同廿四日、五ツ時ゆる小（〇朝）
同廿五日、七ツ時ゆる小（〇夕方）
同廿六日、九ツ半頃ゆる小夜四ツ時ゆる小
同廿七日、九ツ時ゆる小、夜九ツ時ゆる中ノ
同廿八日、夜四ツ時ゆる小
同廿九日陰天六ツ半時ゆる小ノ大
二月朔日、夜ゆりなし
同三日、八ツ時鳴動小ゆり（〇午後）
同四日陰天四ツ時ゆる小ノ大（〇午前）
同五日陰天五ツ半時ゆる小、夜四ツ時ゆる小
同七日晴天大風夜同断ゆりを覚へす
同八日、暮六ツ半時ゆる中ノ小
同九日、朝六ツ時ゆる小
同十一日、今日もゆりなし
同十二日、九ツ時ゆる小（〇昼）
同十五日、四ツ時ゆる小ノ大（〇夜）
同十六日、夜四ツ頃ゆる小
同十七日、陰天五ツ時ゆる小（〇朝）夜中ゆりなし
同廿日、昨日より今日までゆりを覚えす
同廿二日陰天四ツ半時ゆる小
同廿四日、七ツ頃ゆる中ノ小（〇廿五日未明）
同廿五日、七ツ頃ゆる小（〇夕方）
同廿六日曇天七ツ半時ゆる小ノ大九ツ半時又ゆる小（〇昼）、暮六ツ時より雨ふり出ス四ツ時ゆる小
同廿七日、九ツ時ゆる（〇夜）
同廿九日、夜五ツ時ゆる
同卅日、夜寒しゆりなし
三月朔日、五ツ半時ゆる小（〇午前）、夜八ツ時ゆる小ノ大続て又ゆる小
同三日、夜四ツ頃ゆる小
同四日、ゆりなし
同五日、日入頃ゆる小
同七日晴天五ツ時鳴動計有てゆりなし
同八日今日もゆりを覚へす
同十日、五ツ時ゆる小（〇朝）、七ツ時ゆる小（夕方）、夜ニ入ゆる小
同十一日、日入頃小ゆり
同十四日、日入前ゆる中ノ小
同十五日、今朝五ツ時ゆる小
同十六日、八ツ時ゆる小（〇午後）
同十八日陰天五ツ時ゆる小（〇朝）
同十九日、夜九ツ時ゆる小
同廿二日陰天六ツ半時ゆる中ノ小（〇朝）、夜中ゆりなし
同廿四日晴天四ツ時ゆる小（〇午前）、八ツ時鳴動小ゆり（〇廿五日未明）
同廿七日、日入過ゆる小夜四ツ半時又ゆる小
四月二日、九ツ時ゆる小（〇夜）

同三日、八ツ時七ツ半時弐度ゆる共小（〇午後）、夜五ツ半頃又ゆる小
同四日曇天九ツ時ゆる小（〇昼）
同六日、今日ゆりをしらす夜中同断
同十一日、今日九ツ半時ゆる小（〇昼）
同十二日雨天九ツ時小ゆり（〇昼）
同十五日、八ツ時ゆる小ノ大（〇午後）、四ツ頃ゆる中（〇夜）
同廿日、四ツ半頃鳴動小ゆり（〇午前）
同廿一日半晴九ツ時ゆる小（〇昼）
同廿三日、四ツ半時ゆる中ノ中（〇午前）、六ツ時又ゆる小（〇夕方）、夜中雨なし七ツ前またゆる小ノ大
同廿六日大雨天六ツ時ゆる中ノ中
五月三日今日八ツ時（〇夜？）鳴動のミ有てゆりなし
同四日、今朝六ツ時ゆる中ノ大
同九日半晴四ツ半時ゆる小（〇朝）
同十三日曇天五ツ半時より諸木ノ会へ行同時ゆる小ノ大（〇朝）九ツ半時又ゆる小（〇昼）、今日も鰹大漁市場大に賑し
同十五日晴天九ツ半頃ゆる小
同十七日、九ツ前ゆる小（〇昼）七ツ時又ゆる中ノ小（〇夕方）、夜五ツ時ゆる中ノ大
同十八日雨天五ツ時やむ同時ゆる小、今日五ツ頃ゆるといふ歩行中すへてしらす（〇朝であろう）
同廿日、今日四ツ時八ツ時両度ゆり有し由歩行中一向覚へす（〇朝と午後）
同廿一日、四ツ半時ゆる中ノ小日入頃又ゆる小
同廿二日晴天今日入梅六ツ半時ゆる小
同廿三日晴天七ツ時ゆる小七ツ半時又ゆる中ノ中
同廿四日、夜八ツ半頃ゆる小
同廿五日晴天波高し晩方迄之間ニ鳴動二三度する
同廿七日、七ツ時ゆる小（〇夕方）

閏五月朔日、九ツ時雨やミゆる中ノ小（〇昼）
同二日、七ツ時ゆる小（〇夕方）
同三日雨天四ツ時小ゆり（〇朝）
同七日晴天九ツ時ゆる小（〇昼）
同八日、九ツ時ゆる小（〇昼）
同十日、八ツ時ゆる中ノ大（〇夜）
同十二日陰天朝六ツ半頃ゆる小
同十四日晴天五ツ時ゆる小（〇朝）
同十七日雨天四ツ時晴ル九ツ時又ふる同時ゆる小、日入頃又ゆる小
同廿日雨天四ツ時雨やミゆる中ノ小（〇午前）、夜半頃ゆる
同廿四日、今日一度ゆるといふ我等すへて覚へす
同廿六日七ツ頃ゆる小（〇夕方）
六月朔日七ツ半時ゆる中ノ大暫ク有て又ゆる小夜五ツ半時ゆる小ノ中
同三日、日入前ゆる小
同五日、今日九ツ半頃ゆる小（〇昼）
同六日、七ツ時ゆる小ノ大（〇夕方）
同七日、今日五ツ頃小ゆり有（〇夜）
同八日曇天九ツ時ゆる小ノ大（〇昼）、暮六ツ時ゆる小ノ大
同九日、四ツ時ゆる小（〇朝）、五ツ半頃ゆる中ノ小（〇夜）
同十二日、七ツ半時ゆる中ノ小（〇夕方）
同十六日、八ツ時ゆる小（〇午後）
同十七日、八ツ半頃ゆる小（〇午後）
同廿日、夜千蓮寺御法座へ参る、高蓮寺遍照寺常通寺ノ僧三人参る、四ツ時御座済益永屋へ寄泊る、今夜朧月夜法座中ゆる中ノ中
同廿七日、暮六ツ時ゆる小ノ大
同廿九日晴天日出頃ゆる中ノ小
七月二日、七ツ時ゆる小（〇夕方）
同三日、九ツ時ゆる小（〇昼）
同五日、今日八ツ時小ユリ（〇午後？）

同十日、九ツ前ゆる小ノ大（〇昼）
同十二日、八ツ時弐度ゆる共小（〇昼）
同十四日、大波にて新在家ノ西外レ山際まて波来り往来難し此間中ノ波ニ新在家ノ浜大崩れ人家ノ傍まて汐入来ル
同廿八日、八ツ半頃ゆる中小ノ（〇深夜）
同廿九日、五ツ半時ゆる小大ノ（〇朝）
（〇このころ大風雨あり、諸所壁おち大きな庭木倒れる）誠ニ我等一向覚へぬ大風雨寅ノ年ノ大波ノ難を遁れし事を喜ひけるニ此たひ此様の難ニ逢ふ事転変ノ娑婆とハいひながら恐ろしき事也
八月三日、八ツ頃ゆる小（〇午後）
同四日晴天日出頃ゆる小大ノ、今日城下より状来ル処過日之大時化ニて江廻り堤切傷ミ新町農人町辺潮溢今以住居難出来大地震ノ時より弐尺計も汐高きよし取沙汰有之
同五日、八ツ時ゆる小中ノ（〇午後）
同八日晴天五ツ時ゆる中中ノ四ツ時又ゆる小（〇朝）
同十日、今日四ツ時九ツ半時両度ゆる小大ノ（〇昼）
同十三日、八ツ時ゆる小（〇午後）
同十四日、八ツ半頃ゆる小大ノ（〇午後）
同十九日、今日壱度小ゆり有といふ我等一向覚へす
同廿日、八ツ半頃ゆる小大ノ（〇廿一日未明？）
同廿四日、夜五ツ時ゆる小大ノ
同廿五日半晴五ツ半時大ニゆる大小ノ半時計有て又ゆる小直ニまたゆる中小ノ初度ノゆりは近頃なき大ゆりにて家ノ内ニ居るものなく皆門口へ飛出る暫くゆりやます其中波已前のことく入来らん事をおそれ宇佐中皆騒き荷物を山へ運ひ丈夫なる家へ頼男女の騒く声喧し当寺へも箪司長持ノ類より諸品を持来り積重ぬる、八ツ半時ゆる小七ツ時又ゆる小大ノ（〇以上すべて白昼）、六ツ半時より暁までの間ニ小ゆり四度夜中寒し
同廿六日晴天風大ニ吹く昨日ノゆりの事を漁船の人々尋候ニ地方より三四里沖ニ船掛りいたし申内五ツ半頃波だぶだぶとして船ゆり家にてゆらるとも同断同時に与津浦ノ山崩れ煙のことくものたつを見て扨ハ何方も大地震なるへしと相考へ櫓を立直し帰りける趣、七ツ半頃ゆる小（〇夕方）右海にてゆらるゝ時まづどぶどぶと鳴り夫よりゆる由陸にても屋鳴り夥しくゆる事海面と同し
同廿七日、八ツ前伊之介横山の薬を貰ひ帰る暫く有てゆる小夜五ツ頃ゆる八ツ頃又ゆる共小
同廿八日九ツ半時ゆる小七ツ時又ゆる小（〇昼と夕方）
同廿九日晴天九ツ時鳴動小ゆり（〇昼）、夜八ツ半頃ゆる小
九月二日晴天六ツ半時ゆる小（〇朝）、夜中三度ゆる小
同三日、夜五ツ半時ゆる小
同四日、九ツ半時ゆる（〇深夜）
同六日、夜中弐度ゆる
同七日、夜四ツ時ゆる小中ノ
同九日、夜中弐度小ゆり有
同十日、夜九ツ頃ゆる
同十一日薄陰日出頃ゆる中小ノ、今晩ゆりなし
同十四日、今朝五ツ半時ゆる小
同十五日、夜五ツ時ゆる小大ノ
同十六日、夜四ツ時ゆる小
同十七日陰天五ツ半時ゆる小夜四ツ時ゆる小
同十八日（〇高知城下にて）、此度城下にて出来たる三災録地震大火大浪といふ筆記を見る、夜ニ入小ゆり有（〇高知にて）
同十九日、四ツ時ゆる小中ノ（〇夜、高知にて）
同廿二日、夜五ツ時鳴動小ゆり（〇宇佐に戻って）
同廿四日、今日もゆりなし、夜中同断
同卅日、八ツ時ゆる小大ノ夜五ツ半時又ゆる小
十月二日、五ツ半時ゆる小（〇朝）、夜小ゆり壱度あり
同三日、八ツ時ゆる中小ノ（〇午後）
同七日、ゆりなし
同八日、夜七ツ時ゆる中小ノ

同九日晴天九ツ時小ゆり日入頃又ゆる小ノ中
同十一日晴天九ツ半時ゆる小（〇昼）
同十二日、八ツ時ゆる小（〇昼）
同十三日晴天六ツ半時ゆる小
同十四日晴天昼暖也連日之晴空ゆへ又地震する事もや有んと恐るゝもの多し
同十五日晴天四ツ頃より空ニ雲出る同時ゆる小（〇午前）
同十八日晴天朝ゆる小
同廿五日、四ツ時雨やむ日輪朧ニ見ゆる同時ゆる小
同廿八日、四ツ時ゆる中ノ小（〇夜）
霜月三日夜六ツ半時ゆる小
同四日、今日鳴動の声二三度ゆりなし
同五日曇天九ツ半時ゆる小
同七日、今夜四ツ頃ゆる小ノ大
同八日晴天風有九ツ時ゆる小（〇昼）
同十日、七ツ時ゆる小ノ大（〇夕方、筆者土佐大津仏性寺にあり）
同十七日、六ツ頃帰着同時ゆる小（〇土佐大津・高知より宇佐へ、暮方帰着）
同十八日晴天五ツ時ゆる中ノ小（〇朝）
同廿日、夜寒し鳴動ノ音計有てゆりなし
同廿二日、今日弐度ゆる中小ノ、夜中三度ゆる中小ノ今日朝より夜ニ入ても時節不似合ニ暖也人皆恐怖する
同廿三日晴天朝六ツ半時ゆる小
同廿六日晩景ゆる小
極月五日晴天大風八ツ時ゆる小（〇午後）
同七日、七ツ時鳴動の音のミ有てゆりなし（〇夕方）
同九日晴天八ツ頃より陰る同時ゆる小ノ大（〇午後）
同十日、四ツ時ゆる小ノ中（〇夜）
同十一日、夜九ツ半頃ゆる中ノ中
同廿日、日入頃ゆる中ノ
同廿一日、七ツ半時ゆる小（〇夕方）
同廿三日、七ツ半時ゆる小（〇夕方）
同廿四日、八ツ時ゆる小（〇午後）
同卅日（〇中略）程なく日も暮れ、（〇和歌三首をしたためて）と狂し筆をさしおくや否やすこしゆる又暫く有てゆる小

76 安政四年閏五月十七日（1857－Ⅶ－8，2399504）、香美郡西峯村大峯池の堤がきれる。

〔暁霞村史〕〈松本実編、昭30、香美郡〉

安政四年閏五月十七日から十八日にかけて大雨、十九日には大暴風雨となり、西峯村においては大峯池の堤がきれて、池より下の新田本田共に大きな被害をうけた。この時には藩の役人が実地検分に来て、被害の本田に対する加治子米を減額した程であった。

77 安政四年七月二十二日（1857－Ⅸ－10，2399568）、高岡郡に地変あり

〔大変記〕〈県図、K 254－22、香美郡赤岡町〉

一、同（〇安政四年七月）廿二日高岡清龍寺近辺山汐出潮江川大洪水、真如橋シ南麓上下弐ケ所堤押切家廿七軒流失ス、一香我美郡は川々みつしらず

78 安政四年八月二十五日（1857－Ⅹ－12，2399600）伊予を中心とする地震あり、今治、松山、大州、広島で被害あり、土佐香美郡赤岡、吾川郡宇佐でも大地震を感じた。

〔大変記〕〈県図、K 254－22、香美郡赤岡町〉

一、同八月廿六日四ツ頃、又八ツ頃長陶地震二ツあり此時幡多郡宿毛よ

り伊予九州大地震ト哉、伊予大州は家陶潰出火ト云

一、九月十一日申刻未申の方より丑寅の方へ火玉通白昼に怪敷事なり寅の大変後より是迄弐度あり

79 安政五年、土佐国、安政元年十一月四日、五日の大地震の余震続く、また六月二十八日、宇佐風波高く海岸崩れる。

和暦・西暦換算表（安政五年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月1日	1858年2月14日	2399695
2月1日	3月15日	2399725
3月1日	4月14日	2399754
4月1日	5月13日	2399784
5月1日	6月11日	2399813
6月1日	7月11日	2399842
7月1日	8月9日	2399872
8月1日	9月7日	2399901
9月1日	10月7日	2399930
10月1日	11月6日	2399960
11月1日	12月5日	2399990
12月1日	1859年1月4日	2400019

〔鹿持雅澄日記〕〈中島鹿吉刊、昭18、史談79〉

一、同（〇正月）五日、晴、夜中地震三四度

一、同（〇二月）十三日、雨、膺ニ甲寅仲冬大震一福島岡本屋某者尽力賑ニ其地之窮民一矣、上嘉レ之賜ニ累々之寵功名於レ茲旌焉、仍綴ニ寸分言一功陳ニ賀祝一云。

〔地震日記四〕

〇安政五年

正月三日、今日八ツ時ゆる小（〇午後）

同四日、八ツ頃ゆる小（〇午後）

同五日、八ツ半頃戻る同時ゆる小（〇午後）、夜九ツ頃ゆる中ノ小又弐度小ゆり八ツ時又ゆる中ノ閨より出て行灯とほし本堂余間ノ油皿をおろし置く

同八日、今朝五ツ前鳴動の音甚ししかれ共ゆりなし

同九日、七ツ半時ゆる小夜九ツ頃又ゆる小

同十日、四ツ半時ゆる小夜風やミ時雨ふる大ニ寒し壱度小ゆり有

同十一日半晴大風四ツ時ゆる小夜八ツ時ゆる中ノ小七ツ時またゆる小（〇十二日未明）

同十二日、五ツ半時ゆる小（〇朝）夜中弐度小ゆり

同十六日、日入頃ゆる小

同廿二日、六ツ時ゆる小（〇夕方）

同廿三日、四ツ半頃ゆる小（〇夜）

同廿四日、七ツ半時ゆる小（〇夕方）

同廿五日、夜七ツ時ゆる中ノ小

同廿六日半晴五ツ時ゆる小九ツ時又ゆる大小ノ（〇白昼）

同廿七日、五ツ半時ゆる大小ノ（〇朝）

二月二日、夜八ツ時ゆる中ノ小

同七日、九ツ半時ゆる小（〇昼）此節大坂ハゆり少しもなしと市艇船頭共の咄し

同九日晴天九ツ時ゆる小（〇昼）

同十三日、八ツ半時ゆる中ノ小（〇午後）

同十七日、此間中ゆりを覚へす

同十八日、日入過より雨大ニふるゆる小ノ中

同廿日、暮六ツ過ゆる小ノ大

同廿三日、七ツ半時ゆる小（〇夕方）

同廿六日薄陰五ツ半時ゆる小夜四ツ時ゆる小ノ大

三月朔日晴天汐大ニチる、夜五ツ半頃ゆる小ノ中

同五日薄陰六ツ半時本堂勤行中ゆる小ノ大（〇朝）

同八日、六ツ半時ゆる小（〇暮）
同十二日、五ツ半時ゆる小ノ大（〇夜）
同十八日、夜四ツ時ゆる中ノ中
同廿五日曇天四ツ時より雨ふり出ス石築ノ男雨天ゆへ根石をすへおき帰る。此度当浦萩谷口ニ石碑を立一ツには大変ノ砌溺死ノ男女追善ノ為二ツニハ後代此碑を見る者子孫伝言ノ一端共なれかしと思ふより当浦中にて石碑料を集メ往還の傍ニ碑を立ル筈ニ相成此節塚地ノ石工へ頼近日出来之由左候時ハ出来次第右萩谷口ニおいて読経供養致し呉度段肝煎中より当寺へ頼来り有しゆへ造立ノ時碑下へ納る御経一巻今日謹て薫沐致写し畢る。
同廿九日、暮六ツ時ゆる中ノ小夜弐度小ゆり有
四月六日、今日五ツ前小ゆり有（〇朝）
同十一日陰天五ツ時ゆる小（〇朝）
同十二日、九ツ時ゆる小ノ中（〇昼）、四ツ半頃又ゆる小ノ中（〇夜）
同十四日、七ツ時俄ニゆる中ノ中（〇夕方）
同十七日曇天八ツ半時ゆる小（〇午後、以下は十八日未明の記事）鶏鳴頃にても有んと思ふ頃当浦あミ屋七左衛門悴急病にて死去の由届来ル此男ハ代々当寺ノ世話方にて人柄宜しき訳を以近年御目見ニ相成天性美質ノ上大変後も身上相応ニ人を救ひ浦人一同ほめそやせし処いかんせん無常ノ暴風忽ち至り長キ旅路ニ趣きぬ予も彼男の性質をおしミ数行の涙枕を浸し我身の行末を思ひめくらし曙まて眠らす称名念仏する。
同十九日、六ツ半時ゆる小（〇夕方）
同廿一日晴天六ツ時ゆる中ノ大（〇朝）
同廿二日、八ツ時ゆる小ノ大（〇午後）
同廿六日、九ツ前ゆる（〇昼）
同廿七日、九ツ時ゆる小ノ大（〇昼）
同廿九日、六ツ半時ゆる小（〇夕方）
五月朔日、九ツ半時ゆる小（〇昼）、夜中ゆりなし
同二日、九ツ半時ゆる小（〇昼）
同五日、大変後より当浦西浜ニ住居の岡俊蔵潮江ノ庄屋より被頼当寺の半鐘を借りニ来るニ付惣して寺院の鐘ハ法器にて一寸も外へハ出さぬ物水火時変ニ必うつ品大変の時も当寺の鐘鳴て其音を聞漸く大波の入来ルをしるものも多く扨鐘ハ衆生ニ其声を聞しめ其苦を救ふの徳有夫を稲虫を殺すの場所へ用ひんも如何且諸宗共四月十五日より七月十五日迄一夏九十日之間毎日九ツ時ニ鐘を打読経する事常例是ハ上ミ四恩を報し下モ六道ニ及ほすの訳有ての事年々如此なるゆへ先年両度当村の百姓中より借用仕度段申来りしか共右の委細申聞ケ断りし趣なとつまひらかに咄し岡氏を返す。夜中大雨五ツ半時ゆる小
同六日雨天八ツ頃より晴ル当四日迄ニ新在家の人家囲の普請相済昨今の間二人歩皆帰る同所稲荷社より西ノ方神明の鳥居の下土俗御山ノ鼻ト云迄ハ新在家中の家々より歩役家相応の寸志出歩にて役人下知して是を築しむ最早大波の時節にてもたやすく往来せる様ニ成結構是ニ付ても公儀の御恩の辱キを知へし予か七八歳の頃右の御山ノ鼻を往来せしニ稲荷社ノ傍海辺ニ大岩弐ツ三ツ有中ニも南ノ一段卑キ岩の上にて漁人鱒（キスゴ）殊魚を釣ルを毎度見し事也其後自然ニ波退キ海浜広クなり石の岩も砂中ニ埋まれ只二ツの大石計突然と顕れしニ大変の節より彼鱒（キスゴ）殊魚岩再ひ昔のことく波中ニ顕れ浜も狭く往来出来難きよふニ変化するも桑海谷陵の論符合する処天道ハ三十年ニ一タヒ変スと記されし言の謬まらさる人界ノ形勢も独り感するのミ。
同七日、八ツ半より七ツ迄之間ニ四度ゆる小（〇午後）
同八日、八ツ半時より陰る同時ゆる小（〇午後）
同十三日、夜陰る九ツ時と覚しき頃ゆる鳴動ノ音甚しくゆりは中ノ小
同十七日晴天九ツ前ゆる小（〇昼）
同廿二日雨天五ツ半時ゆる小（〇朝）
同廿三日雨天九ツ頃ゆる小（〇昼）
同廿五日此間連日の大雨（〇十九日からこの日まで）ニ新居坂ノ麓崩れ往来出来ず、人馬共甫淵坂へ廻ル不自由成事也、七ツ時ゆる小中（〇午後）
六月二日、夜九ツ半頃ゆる小（〇午後）

同五日陰天四ツ時ゆる小ノ大（〇午前）
同九日、四ツ頃弐度ゆる小（〇午前）
同十日、夜鳴動小ゆり
同十一日、四ツ時よりやむゆる小（〇午前）
同十四日、萩谷口へ後来ノ為とて石碑を立て正面ニ六字名号を書き脇ニハ大変ノ時ノ模様を記せる碑文昨日出来ニ付明十五日供養ノ読経致し呉度段相談ニ来る
同十五日、八ツ時より萩谷口へ行此処ハ塚地へ越る往還にて路傍ニ立る碑ノ下タニ御経を書写し納メ碑前ニ香華を供し旅本尊を御供致しけるより其仏前にて読経詣人四十人計有夫より法談一席勤る其趣意を略していわく此碑を立ルニ付三由有一ニハ正面ニ六字名号を彫付碑下ニ御経を納メ今日読経するハ大変ノ節溺死ノ男女追福ノ為也第二ニハ碑ノ三方ニ大変ノ模様をくわしく記したるハ此以後又大変有ん時此碑ニ記せる意味を見伝へ聞伝へたれハ後人の心得ニもなるへく第三ニハ此処ハ四国遍路ノ通り筋なれハ此碑面ノ名号を見ハ光明真言又ハ念仏を称へ通るへし又遍路ニ限らす心あらん人々通行ノ節念仏ノ助縁と成へし（〇七月十三日の文を参照）
同十六日、暮六ツ時ゆる小ノ中
同十七日、先月四日北国越中立山地震にて大崩ニ成山麓拾四ケ村埋れ人馬死失夥しき由頻りニ風説有いまた虚実定まらず（〇「飛越地震」は二月二十六日）
同十九日晴天五ツ時潮江より廿代へ寄廿代橋より北へ越んとせし処汐高く岸上ニ溢れ往来人迷惑ノ様子を見て南へ廻り寺町へ行、今朝日出頃ゆる小ノ大
（〇筆者は潮江伝照寺にあり）
同廿四日、四ツ時ゆる小ノ中（〇午前）、福島十郎ケ谷より乗船大変後此辺を始て通ル海辺惣して已前と替り松岡より西ハ一面ノ野を見ルことく其中ニ其所此所ニ家有て南ニハ長く堤を築き土手ノ内よりハ外ノ砂高く見ゆ
同廿八日大雨晩方大風門ノ戸をはつす波高く風烈しく往来する者なし畠物少し傷む、夜中雨やます寒し、新在家西外レノ岸今日ノ浪ニ又崩れ往来ノ者迷惑する
七月三日陰天四ツ頃小雨降る同時ゆる小（〇午前）
同五日雨天六ツ時ゆる小ノ大（〇朝）、七ツ時ゆる小（〇夕方）
同六日、九ツ半時弐度ゆる小ノ中（〇昼）
同七日、九ツ前より快晴同時ゆる小、八ツ半時又ゆる小ノ大、暮六ツ時ゆる小ノ中、夜中壱度小ゆり有
同八日、四ツ時ゆる小（〇午前）
同十日、八ツ半時ゆる小（〇午後）
同十六日、八ツ時ゆる小ノ中（〇午後）、今夜月食四ツ半頃ゆる中
同十八日、夜中ゆる小
同廿四日、暮六ツ過ゆる小ノ中
八月朔日、今日暮六ツ時ゆる小夜七ツ前ゆる小ノ大
同四日、夜半頃ゆる小
同七日、今夜九ツ頃ゆる小ノ中
同十三日晴天朝子供をつれ萩谷口へ女郎花をきりに行序を以先達而供養せし御経塚の碑文をくわしく一見し帰る其文左ノ通

※『安政元甲寅歳十一月五日申の刻大地震日入前より津波大ニ溢れ進退八九度人家漂流残る家僅六七十軒溺死の男女宇佐福嶋を合して七十余人なりき都而宇佐の地勢ハ前高く後低く東ハ岩崎西ハ福嶋ノ低ミより汐先逃路を取巻ゆへむかし宝永の変ニも油断の者夥敷流死の由今度も其遺談を信し取あへす山手へ逃登る者皆恙なく衣食等調達し又ハ狼狽て船ニのりなとせるハ流死の数を免かれす可哀哉其翌日ハ御倉開けて御救米頂戴し凍餓に至るものなく誠ニ難有御仁沢下りけれハ後代の変ニあふ人必用意なく共早く山の平かなる傍ニ岩なき所を択ひて逃よかし且流失の家財衣服等拾ひ得し人暫時内福に似たれとも間もなく流行の悪病染ミ悉皆なくなりしを眼前見聞したるとを告残し殊ニ両変溺死の人の菩提を吊ん為にと衆議して此碑を立るものと云爾

同十六日、七ツ半時ゆる中ノ小（〇夕方）
同十八日晴六ツ時ゆる中ノ小長五ツ前又ゆる小少々暑し九ツ時又ゆる小（〇白昼）
同廿四日晴天日出頃ゆる小ノ大
同廿七日晴日出頃ゆる小
九月朔日、夜五ツ時ゆる小ノ大
同三日、夜明頃ゆる鳴動中ノ小
同五日曇天今朝七ツ半頃ゆる小続てまたゆる中ノ小、今日九ツ頃ゆる小夜四ツ半頃ゆる小ノ大
同六日、夜ゆりなし
同七日、九ツ半時ゆる小（〇昼）
同十一日、今日七ツ半時ゆる小ノ中（〇夕方）
同十七日、夜月明也六ツ半時ゆる小
同十九日晴天今朝六ツ時ゆる中ノ中
同廿五日、日入頃ゆる小
同廿六日、七ツ前ゆる小（〇夕方）
同廿九日晴天八ツ半時ゆる小ノ大
十月朔日、九ツ半時ゆる小（〇深夜）
同三日晴八ツ時ゆる小ノ大（〇午後）、九ツ半時ゆる小ノ中（〇深夜）
同五日晴六ツ半時ゆる小（〇朝）
同六日、今日昼八ツ時ゆる小ノ大
同七日、夜四ツ半時七ツ時両度ゆる小ノ大
同八日、夜九ツ頃ゆる小
同十日、此頃雨すへてふらす頻りニ地震有ニ付浜ノ井戸ハ濁り山際ノ水谷流れ共涸乾キ水不自由なるニより五七軒かハるかハる朝夕水を当寺の井戸より汲む
同十一日、五ツ時また時雨ふる同時ゆる小
同十二日、七ツ時ゆる小夜五ツ時ゆる小ノ中
同十三日、夜九ツ時ゆる中ノ中
同十四日、岩崎ノ鼻ノ往来道岸崩れ波高キ日ハ通行出来かたし
同廿二日晴五ツ時ゆる小（〇朝）
同廿三日、九ツ時ゆる中ノ小（〇昼）
同廿七日、夜五ツ時ゆる小ノ中
同廿九日晴朝大風六ツ半時ゆる中ノ中（〇朝）、夜九ツ時ゆる小
霜月三日、八ツ時ゆる小（〇昼）、夜五ツ半時ゆる小
同七日晴天五ツ半時ゆる中ノ小（〇朝）
同十日、五ツ半時ゆる小ノ大（〇夜）
同十三日、四ツ頃ゆる小ノ中（〇夜）
同十七日、七ツ頃ゆる中ノ大長し（〇十八日未明）
同十九日、五ツ半頃より又雨ふる夜中やむゆる小
同廿一日、四ツ頃ゆる小（〇夜）
同廿二日、四ツ半時ゆる小八ツ時又ゆる小（〇白昼）
極月二日、日入過より五ツ頃迄之内四度ゆる中ノ大、尤長し、同時汐くるひ有とて人々大ニ騒キ山際ノ家へ荷物を運ひ老幼を引つけ預け置提灯を持頻りニ海面を窺ひ騒動するもの多し甫淵辺も同断なりといふ我等独笑し寝る
同六日晴六ツ時ゆる小（〇朝）
同八日、夜八ツ時ゆる小ノ中
同十一日晴天五ツ半時ゆる中小ノ
同十三日晴九ツ半頃ゆる鳴動甚しく、ゆりハ中ノ中、八ツ時弐度ゆる小、夜八ツ頃又ゆる小
同十六日、日入頃ゆる小
同廿二日、六ツ時ゆる小（〇夕方）
同廿三日、八ツ時ゆる小七ツ半頃又ゆる小（〇廿四日未明）
同廿四日、九ツ頃ゆる小ノ中

安政六年、土佐国、安政元年十一月四日、五日の大地震の余震続く

和暦・西暦換算表（安政六年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月1日	1859年2月3日	2400079
2月1日	3月5日	2400109
3月1日	4月3日	2400138
4月1日	5月3日	2400168
5月1日	6月1日	2400197
6月1日	6月30日	2400226
7月1日	7月30日	2400256
8月1日	8月28日	2400285
9月1日	9月26日	2400314
10月1日	10月26日	2400344
11月1日	11月24日	2400373
12月1日	12月24日	2400403

〔地震日記五〕

○安政六年

正月二日陰天風吹ク地震日記の仮とちし端書を加ふる、今朝七ツ頃ゆる小ノ是当年の初ツゆり也、夜風なし九ツ頃ゆる小

同七日晴風ふく五ツ半ゆる小（○朝）、九ツ時又ゆる小（○昼）

同十一日晴天五ツ半時ゆる大小ノ

同十四日、夜四ツ半頃ゆる中小ノ

同十五日、七ツ時ゆる中小ノ（○夕方）

同廿一日、此間中ゆりなし

同廿二日、夜五ツ半時ゆる小四ツ時又ゆる小

同廿三日晴五ツ時ゆる小、今夜四ツ頃ゆる大小ノ

同廿五日、夜九ツ頃ゆる小

同廿八日九ツ時ゆる小（○昼）

二月朔日、（○近くに火事あり、本尊を避難させる、そののち真夜九ツ半時鎮火して）、又本堂へ御還座なさしめ奉り先当寺別条なきを喜ぶ寅ノ大変ノ砌本尊を出し奉り一昨巳ノ年風雨ノ節又五尊様を庫裏へ移し此度又戸外へ出し奉る合して三度併三度なから本尊に別条なし

同二日、今日八ツ頃ゆる小（○午後）

同十二日、夜九ツ時ゆる小

同十五日、四ツ時ゆる大小ノ（○夜）

同廿一日、夜九ツ頃小ゆり有

同廿四日晴五ツ時ゆる小（○朝）

同廿八日晴四ツ時ゆる大小ノ（○午前）

三月朔日、夜五ツ時ゆる中小ノ

同三日陰天風なし四ツ半時ゆる中小ノ（○午前）、夜五ツ頃ゆる小

同四日、九ツ前ゆる小（○昼）

同十日晴四ツ半時ゆる小（○午前）

同十一日晴、夜四ツ時ゆる小中ノ

同十二日晴天日出頃ゆる小

同十三日、四ツ半時ゆる中小ノ（○夜）

同十九日、四ツ半時ゆる（○夜）

同廿日、夜に入雨やむ四ツ半頃横町へ寄り泊る暫く有てゆる小中ノ

同廿六日、九ツ時ゆる小中ノ（○昼）

四月十三日、日入過ゆる小夜九ツ半頃又ゆる小中ノ

同十六日、夜九ツ頃ゆる小

同十八日晴日出頃ゆる大小ノ

（○四月十九日から、五月二十八日までこの日記の筆者は京都へ旅行している）

五月廿九日、日入頃ゆる小中ノ、上京出足ノ頃より他国逗留中すへて地震を覚へす不思議なる事也

六月二日、八ツ半時またゆる大小ノ（○午後）

同三日、八ツ時ゆる小（○午後）夜五ツ半時ゆる小中ノ

同五日、夜ゆる小

同九日夜中風雨鶏鳴頃ゆる小ノ大（〇現代の時法では十日未明ということになろう）
同十九日、今日七ツ半時ゆる小同時雷鳴
同廿一日、今日八ツ半前ゆる小ノ中（〇午後）
同廿二日、夜五ツ時ゆる中ノ小
同廿三日晴、四ツ時ゆる小ノ大（〇午前）
同卅日、夜五ツ半時ゆる小
七月二日、八ツ半時ゆる小（〇午後）
同三日陰天六ツ時ゆる小ノ大（〇朝）
同四日小雨四ツ半時ゆる小（〇午前）
同十七日、今日九ツ半頃ゆる小（〇昼）
同廿三日、八ツ半時ゆる小ノ大
同廿四日晴、大風波大ニ高く岩崎ノ岸又崩れかかる
八月朔日、今日八ツ半時ゆる小（〇午後）
同七日、七ツ前ゆる小（〇夕方）
同十五日、夜四ツ前ゆる中ノ小
九月十一日陰天九ツ時ゆる中ノ大（〇昼）長し本尊様御台座のゆかゝをなをす八ツ半時又ゆる中ノ大（〇午後）臆病者ハ皆門口ヘ飛出る
同十二日、四ツ時ゆる中（〇夜）
同十三日、夜叢虫かハるかハる鳴を聞ツヽ寝入る鶏鳴頃ゆる中ノ小
同十六日、夜五ツ半時ゆる中ノ小永し
同十七日半晴七ツ半時ゆる小（〇午後）
同十八日陰天日出頃ゆる小九ツ時又ゆる（〇昼）
同廿八日雨天朝六ツ時ゆる中ノ中ゆり長し
十月四日、今日暮六ツ時ゆる中ノ
同五日晴五ツ時ゆる大小ノ暫く有て又ゆる中ノ
同六日、夜中ゆる小
同十三日、五ツ頃ゆる小（〇朝ゆる）
同十四日、暮六ツ時ゆる小ノ中
同廿二日、日入頃小ゆり有
同廿三日、七ツ時ゆる中ノ小（〇午後）
同廿四日、六ツ時ゆる小ノ中（〇朝）
霜月三日、朝ゆる小暮六ツ過又ゆる小ノ中
同八日、今日三度ゆる共ニ小ノ大
同廿六日、暮六ツ時ゆる小ノ中
同廿七日、五ツ頃ゆる小（〇夜）
極月四日半晴七ツ時ゆる小（〇午後）
同十四日晴日入頃ゆる中ノ
同十五日、暮六ツ時ゆる小
同十六日、今日九ツ半時ゆる小（〇昼？）
同廿日晴大風寒し大変後当年ほとの寒サハ覚くぬと人の咄し
同廿四日晴日入頃ゆる小

81 万延元年、土佐国、安政元年十一月四日、五日の大地震の余震続く

和暦・西暦換算表（万延元年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月1日	1860年1月23日	2400433
2月1日	2月22日	2400463
3月1日	3月22日	2400492
閏3月1日	4月21日	2400522
4月1日	5月21日	2400552
5月1日	6月19日	2400581
6月1日	7月18日	2400610
7月1日	8月17日	2400640
8月1日	9月15日	2400669
9月1日	10月14日	2400698
10月1日	11月13日	2400728
11月1日	12月12日	2400757
12月1日	1861年1月11日	2400787

〔地震日記六〕

〇万延元年

正月七日、日入頃ゆる小

同十二日、今日七ツ半頃ゆる中小ノ（〇午後）

同廿三日晴朝五ツ半時ゆる中ノ

同廿五日、七ツ頃ゆる小（〇午後）

同廿七日、夜八ツ時ゆる大小ノ

二月三日、四ツ時八ツ時両度ゆる小（〇昼）

同四日、八ツ時小ゆり

同十四日、五ツ時ゆる小（〇朝）四五日以前当浦中町ノ浜にて弐朱ノ砂中ニ埋れたるを拾ひし小供有三人の中へ弐朱七ツ程拾ひ取ル先年大波ノ節より埋もれ有し銀子なるへし又松岡ノ川跡を掘り茶釜を得るもの有是を聞付ケ我も我もと掘る程ニ大釜脇指等を拾ひしものも有、茶釜ノ数すへて六十余り瓦一万余り堀出しける中ニ泉や甚七左衛門次男ハ一人にて弐百目余りの品を掘り鍋釜ノ類ハ直ニ売渡しける由是皆大変の時よりけふ迄埋れ有しニ時至て再ひ世ニ出たるもの也寄と謂へし（〇寄は奇カ）

同十五日、鶏鳴前ゆる大小ノ（〇十六日未明）

三月四日、暮六ツ時ゆる中小ノ

同五日、夜五ツ半頃ゆる小

同十一日、今日昼八ツ時ゆる中小ノ

同廿八日、夜七ツ頃ゆる小（〇廿九日未明）

閏三月朔日、九ツ半時ゆる中小ノ（〇昼）

同三日、九ツ頃ゆる小中ノ（〇昼）

同十二日小雨五ツ半時より雨やミ日輪幽ニ見ゆる同時ゆる小（〇朝）

同廿二日、七ツ時ゆる中小ノ（〇夕方）

同廿八日晴九ツ時ゆる大小ノ（〇昼）

同廿九日、九ツ半頃ゆる小（〇夜）

同卅日、七ツ時ゆる小ノ（〇夕方）

四月四日雨、七ツ頃ゆる小（〇夕方）

同九日大雨もりのかからん事を恐れ四幅ノ御影をまき御箱に納むる一両年已前よりいくたひも左官を雇ひ本堂を繕しむれ共漏りの止さるハ已前の大変ニゆり乱したる所の元のことくならさるよりの事なるへし

同十三日、今夜四ツ頃地震大小ノ

同十六日晴九ツ半時ゆる大小ノ（〇昼）

同廿五日、八ツ半時ゆる小（〇午後）七年已前大変ノ節ハ此地震三十日も続てゆりなハ中々たまりたものてハないと我人一同言ひあへり然ニいつ共なくゆりゆりて早七年覚へす歳月をへたり

五月二日雨四ツ半頃ゆる小（〇午前）

同四日、九ツ頃ゆる小（〇夜）

同六日小雨四ツ頃ゆる小（〇午前）

同七日陰天五ツ半頃又ゆる小（〇朝）

同九日、今夜五ツ頃ゆる中ノ

同十日、八ツ時ゆる大小ノ（〇午後）

同十三日、今日七ツ時ゆる中小ノ（〇夕方）

同廿六日、四ツ半時ゆる（〇午前）

六月五日日入頃ゆる小中ノ

同廿日、七ツ時ゆる大小ノ（〇夕方）

七月十八日、八ツ時ゆる大小ノ（〇夜）

八月七日陰天五ツ時ゆる中小ノ（〇朝）

同十六日晴四ツ半時ゆる中小ノ（〇午前）

同十八日、七ツ時ゆる（〇夕方）

九月朔日、今朝日ノ出頃ゆる大小ノ、九ツ半頃又ゆる小、暮六ツ半時極楽寺へ寄一杯呑て戻る同時ゆる中小ノ

同廿日陰天朝六ツ時ゆる中中ノ

同廿一日晴日ノ出頃ゆる小

同廿五日晴大ニ寒し五ツ時ゆる小（〇朝）

同廿九日晴四ツ頃ゆる大小ノ（〇午前）

同卅日半晴六ツ半時ゆる小（〇朝）

十月十五日晴六ツ半時ゆる小（〇朝）
同廿四日夜九ツ頃ゆる中ノ小
霜月四日、大変ノ七年目なれハ油断すへきニあらすと怖るゝ者多し
同十六日、夜五ツ半時ゆる中ノ小
同廿七日半晴朝六ツ時ゆる中ノ中ノ九ツ頃又ゆる小ノ大（〇昼）
極月六日、八ツ半時ゆる小ノ大地震より直ニ大風ト成る（〇午後）
同七日、夜八ツ半頃ゆる小ノ中
同八日半晴先月先念寺へ盗人這入本堂ノ勤鐘を盗む先生大変ノ砌仏具流失ニ付一両年跡一女有て右勤鐘を寄附しけるニ当年又盗取るゝも亦奇也
同十一日、夜五ツ半頃ゆる
同廿二日、五ツ頃ゆる小（〇朝）

82 文久元年、土佐国、安政元年十一月四日、五日の大地震の余震続く

和暦・西暦換算表（文久元年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月1日	1861年2月10日	2400787
2月1日	3月11日	2400817
3月1日	4月10日	2400846
4月1日	5月10日	2400876
5月1日	6月8日	2400906
6月1日	7月8日	2400935
7月1日	8月6日	2400964
8月1日	9月5日	2400994
9月1日	10月4日	2401024
10月1日	11月3日	2401053
11月1日	12月2日	2401083
12月1日	12月31日	2401112

〔地震日記七〕
〇文久元年
正月十三日晴五ツ半時ゆる小（〇朝）
同十七日、七ツ半時ゆる小（〇夕方）
二月十七日晴朝六ツ時ゆる中ノ大也近頃珍敷大ゆりにて寝耳ニ惚りする夫より大風と成る暮六ツ時又ゆる小
同廿八日、七ツ時ゆる小ノ中（〇夕方）
三月朔日、四ツ時ゆる小（〇午前）
同三日、九ツ頃ゆる小（〇昼）
同十日薄陰五ツ半時ゆる小ノ大（〇朝）、今朝六ツ時ニもゆるといふ我すへてしらす
同十九日、昨夜小ゆり有
同廿日、夜九ツ時ゆる永し中ノ小
同卅日半晴五ツ時ゆる小（〇朝）
四月朔日、四ツ時ゆる小ノ大（〇午前）
同二日、夜九ツ頃ゆる小
同十六日、五ツ半頃ゆる小ノ大（〇朝）
五月十七日、暮六ツ鳴動してゆる小ノ中
六月七日晴五ツ時ゆる小（〇朝）
同廿六日、七ツ時ゆる小（〇夕方）
七月五日、七ツ頃ゆる小ノ中（〇夕方）
同十六日、四ツ頃ゆる小（〇夜？）
同卅日晴去ル寅年大変ノ砌より記せし地震日記へ表紙かける
八月十三日、四ツ半頃ゆる中ノ（〇午前）
同廿六日晴九ツ頃ゆる小ノ中（〇昼）夜四ツ頃又ゆる小
九月二日、五ツ頃ゆる小（〇夜）
同十二日、七ツ頃ゆる（〇夕方）
同十六日、夜八ツ半頃ゆる小ノ大
同廿四日、九ツ時ゆる中ノ目を覚しおきる（〇二十五日未明）
十月四日晴日出頃ゆる小、夜九ツ頃ゆる小ノ中、七ツ頃又ゆる小
同八日、夜八ツ半時ゆる小
同九日、夜七ツ頃ゆる小

同廿一日晴六ツ時ゆる小ノ大（〇朝）
同廿八日晴早朝ゆる小
霜月七日鶏鳴頃ゆる小ノ大
同十日、七ツ半時ゆる小ノ大（〇夕方）
同十八日、夜中七ツ頃ゆる小
同廿日、夜七ツ時ゆる小ノ中
同廿九日、夜中八ツ頃ゆる小
極月十三日晴日出頃ゆる小ノ中

83 文久二年、土佐国、安政元年十一月四日、五日の大地震の余震続く

和暦・西暦換算表（文久二年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月1日	1862年1月30日	2401171
2月1日	2月29日	2401201
3月1日	3月30日	2401230
4月1日	4月29日	2401260
5月1日	5月29日	2401290
6月1日	6月27日	2401319
7月1日	7月27日	2401349
8月1日	8月25日	2401378
閏8月1日	9月24日	2401408
9月1日	10月23日	2401437
10月1日	11月22日	2401467
11月1日	12月21日	2401496
12月1日	1863年1月20日	2401526

〔地震日記八〕
〇文久二年
正月三日陰鶏鳴後小震
同五日、昨年より地震も少なく日記も酉ノ大晦日限り筆を抛んとせしニ日頃此地震日記を一読せる者両三人口を揃へて身の楽しミニ一生の間記せよと勧む予日一生といへハ長キ事のよふなれ共命ニ長短有ハいつを身の終り共しるへからす今十年も生延なハ紙筆墨の費も多かるへし一生ノ一も一なり一年の一も一也一生の詞を止メて一年にかへ今年一ケ年晴雨震時を記スへし是汝等か請ニ応する処也若又予か命数今年ニ促りて此稿終らすして死せハ願くハ公等其跡を続補せよといへハ皆笑ふて退きぬ故ニ又当戌年の陰晴を記し始たり。
同九日、晩方豊永春沢来る南浦八勝ノ図並地震日記を見せ主客共々大笑。
同十三日、五ツ頃ゆる小（〇昼夜不明）
同十七日、八ツ半頃ゆる小（〇深夜）
同廿一日、六ツ半頃ゆる中ノ小（〇夕方）
同廿三日、今夜七ツ頃ゆる小ノ大
二月二日、七ツ頃ゆる小ノ中（〇夕方）
同三日、夜風ふく井ノ水減る
同八日、夜五ツ頃ゆる小
同九日晴風五ツ半時ゆる小ノ中（〇朝）
三月三日夜陰る五ツ半時ゆる小
同五日、夜五ツ半頃僕戻る、雨やむゆる小
同九日、雨当浦中町辺ノ堤いたみしとて人夫夥敷集り是を繕ふ新在家と橋田との境なる汐田も大変後は其儘ニすたりし所此間中地主言合せ昔のことく堤を築く
同廿六日、七ツ半時ゆる小ノ大（〇夕方）
五月六日半晴七ツ前ゆる小（〇夕方）
同七日晴日出頃ゆる小ノ中
同廿七日、今夜ゆる小ノ大
六月十一日、八ツ半時ゆる小（〇昼？）
同十七日、六ツ時ゆる小（〇夕方）
同廿六日、九ツ頃ゆる小（〇昼）
同卅日、夜四ツ頃ゆる小

七月十日、当所古田儀三郎百姓竹右衛門鍛治丑之介此三人ハ平生人と異なる性質にてほめらるゝ事ハなく謗らるゝ事ハ多し所謂異兀粗なるもの也然ニ当春より丑之介ハ極貧ニ付鉄床も鎚も家を出去り釘壱本打ツ事もならす此節西浜鍛治屋へ手伝ニ行漸く光陰を送る古田儀三郎ハ大変後甚零落縄襷にて自ラ畠ニ入草を刈辛労せしか多年ノ心配ゆへにや先達而死去せり

同廿二日晴九ツ頃ゆる小（〇昼）
八月十五日晴五ツ時ゆる小（〇朝）
同廿八日曇六ツ半時ゆる小（〇朝？）
同廿九日、今日日入頃ゆる小
閏八月十一日、今日五ツ半頃ゆる（〇夜？）
同廿三日雨五ツ半時ゆる小（〇朝）
同廿四日陰天九ツ半時ゆる小（〇昼）
九月四日、夜五ツ半頃ゆる小ノ大
同十日、暮六ツ頃ゆる小ノ大
同十六日曇五ツ半頃ゆる中ノ小（〇朝）
同廿九日、八ツ半頃ゆる小（〇午後）
十月四日、今朝五ツ半頃ゆり小今夜四ツ半頃又ゆる小ノ中
同十四日、今日七ツ時ゆる小ノ大（〇夕方）
霜月朔日、今日八ツ時ゆる中ノ小（〇午後）
同十四日、七ツ時ゆる小ノ中（〇夕方）
同十七日半晴五ツ半頃ゆる小ノ中（〇朝）
同廿四日、暮六ツ時ゆる小
極月八日、日暮頃ゆる小ノ大
同十三日、鶏鳴頃ニゆる小ノ中

文久三年、土佐国、安政元年十一月四日、五日の地震の余震続く

和暦・西暦換算表（文久三年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月16日	1863年3月5日	2401570
2月1日	3月19日	2401584
3月30日	5月17日	2401643
4月24日	6月10日	2401667
5月2日	6月17日	2401674
6月12日	7月27日	2401714
7月27日	9月9日	2401758
8月29日	10月11日	2401790
9月21日	11月2日	2401812
10月5日	11月15日	2401825
12月2日	1864年1月10日	2401881

〔地震日記九〕

○文久三年

正月元日、去春地震日記を閣んとせしニ勧むる人の有けるより戌年の晴雨地震迄も記し畢ぬ今年ハ勧むる者もなく自身も筆を採るニ懶けれハ最早筆を絶んと思ひ倩考るニ寅年より九ケ年の日記を終て十年ニ満さるも残念也干支も当年ハ癸亥なれハ一周の終る処一際立てよろしかるへき乎と思案し且ハ命の全キを喜ひツ、又もや筆を立る事となれり。

同十六日、七ツ頃ゆる小（○夕方）

同廿一日陰天五ツ頃ゆる大小ノ（○朝）

二月朔日晴五ツ時ゆる小（○朝）

同十六日陰天七ツ半時ゆる小（○夕方？）夜五ツ頃又ゆる小

三月卅日、四ツ頃ゆる小（○午前）

四月廿四日、夜八ツ頃ゆる小

同廿七日晴暑し九ツ時ゆる七ツ頃又ゆる小（○昼）

五月二日、昨夜鶏鳴頃ゆるといふ我等都而しらす

同廿日、けふ九ツ半頃ゆる小（○昼夜不明）

同廿四日晴四ツ半頃ゆる小（○午前）

同廿八日、今朝五ツ頃ゆる小

六月十二日雨五ツ時ゆる小（○朝）、七ツ頃ゆる小中ノ（○夕方）

同十五日曇四ツ時ゆる小（○朝）

同廿七日、七ツ頃ゆる小（○夕方）

七月廿七日、九ツ頃震る小中ノ（○夜中）

八月廿九日、暮六ツ時ゆる小

九月廿一日、今夜六ツ半ゆる小

同廿三日、日入頃又ゆる小

十月五日陰天大風五ツ時ゆる小（○朝）

同十日、夜七ツ頃ゆる小

極月二日、夜五ツ時ゆる小ノ大

同四日、夜五ツ時ゆる小

同廿四日、夜五ツ頃ゆる小

同卅日、此頃地震もなきニ馬鹿らしく何を書ぞへ下手ノ横好

元治元年、土佐国、安政元年十一月四日、五日の大地震の余震続く

和暦・西暦換算表（元治元年）

和暦	西暦	ユリウス日
1月4日	1864年2月11日	2401913
2月3日	3月10日	2401941
3月17日	4月22日	2401984
5月16日	6月19日	2402042
6月19日	7月22日	2402075
7月3日	8月4日	2402088
8月21日	9月22日	2402137
9月23日	10月22日	2402168
10月13日	11月11日	2402188
11月18日	12月16日	2402222
12月3日	12月31日	2402237

〔晴雨日記一〕

○元治元年

正月四日、夜七ツ頃ゆる小

同廿三日、朝六ツ時ゆる小

二月三日、九ツ頃ゆる中小ノ（○深夜）

同四日、四ツ前桝形着暫時休息し役所へ行段々半鐘指出ノ事六ケ敷隙取ル序を以左ノ通りノ願書を認む

奉歎願口上覚

当寺之義ハ宇佐浦寺院之中ニ而も別段小高キ山際ニ而浦中一面ニ見渡し候土地故在所火災之度毎ニ当寺半鐘之音ニ驚キ火事場江欠付候者も多く御座候且去ル寅年大変之節モ当寺へハ波先早ク見へ候故如例半鐘を打候へハ地下之者共聞付急難を遁レ申候然ニ此度右品御鋳替ニも相成候時ハ右等之時変用も忽相闕難敷奉存候間半鐘指出之義ハ可相成義ニ御座候而御用捨被仰附候ハヽ、第一浦民之急難を救候用具ニも相成且万一異船海岸ニ近寄候節之海防御用一助共相成可申哉と奉存候不而已右半鐘之義ハ先年地下人之中不意死仕候者御座候而為供養当寺江寄附仕処之品ニ付彼是宜御詮議之上何卒御用捨被仰附度奉願候已上

子ノ二月四日

右願書を役場にて認メ証判役へ迄頼置桝形へ戻り（○以下略）

同七日雨九ツ頃ゆる大小ノ（○昼）

三月十七日雨四ツ時ゆる小（○朝）

五月十六日、日没頃ゆる小

同廿九日、日入頃ゆる

六月十九日、七ツ頃ゆる中小ノ（○午後）

七月三日、暮六ツ時ゆる小

同廿六日、夜九ツ頃地震弐度始のゆりハ其音すさまじく瓦飛んとする程の勢也

八月廿一日、夜五ツ頃ゆる小

同廿二日、七ツ頃ゆる小（○夕方）

九月廿三日、八ツ頃地震中小ノ（○午後）

同廿六日半晴今朝六ツ時ゆる小

十月十三日、五ツ半頃ゆる（○朝）

同廿九日、暮六ツ時ゆる小

霜月十八日、四ツ頃ゆる小（○夜）

同廿日、夜五ツ頃ゆる小

極月三日、五ツ頃ゆる小（○朝？）

慶応元年、土佐国、安政元年十一月四日、五日の大地震の余震続く

和暦・西暦換算表（慶応元年）

和暦	西暦	ユリウス日
2月15日	1865年3月12日	2402308
4月6日	4月30日	2402357
5月11日	6月4日	2402392
6月12日	8月3日	2402452
8月2日	10月10日	2402520
10月11日	11月27日	2402568
11月29日	1866年1月15日	2402617
12月16日	2月1日	2402634

〔晴雨日記二〕

○慶応元年

正月十六日、今日極楽寺へ行此寺ニ安置の釈尊ノ大像ハ昔当浦和泉屋ノ先祖沖合にて拾ひ帰り檀那寺なれハ極楽寺へ上ケ安置せり然ニ去ル寅冬大変ノ砌堂宇と共ニ流レ給ひ暫く行方知さりしか後ニ近辺畠ノ中ニ埋レ有しを洗ひ清メ又寺ニ安す此時尊像大破損ニ成けれ共再興ノ助勢する人もなく空しく月日を送りけるニ去年四五人の発起有りて船便にて大坂へ登セ御再興終り輪後光蓮華惣台座皆々新調代金拾五両仏師へ相渡し此間極楽寺へ御下着依而右尊像を拝礼する以前と違ひ中々立派成事也。

同二十八日、夜七ツ頃地震ゆり長し

二月十五日、七ツ頃ゆる小（〇夕方）

四月六日、七ツ前ゆる小（〇夕方）

同十三日、五ツ頃ゆる小（〇朝）

五月十一日、八ツ半頃ゆる小（〇午後）

同十二日半晴今朝暁前ゆる小

同廿七日晴、今日七ツ頃ゆる小ノ大（〇夕方）

六月十二日晴、浦ノ内三ツ松の庄平といふ者来る此男ハ石鉄参りの講頭ノ由其者扣地の傍ニ古塚有昔より言伝へニ宝永四亥大変ノ砌流来りし者ノ墓地といふ先年今川内村小左衛門己家を立ルとて其塚を堀少々骸骨の有し迄皆堀取り山へ投上しニ夫より後彼家ニも病人絶へす先達て右庄平自分扣山をきりしニ俄ニ足すくみ動かれぬ様ニ成りしゆへ怪ミツヽ手伝の者共を呼ひ道へ舁出し貰ひ拠足をさすり揉ミ大分快く成儘々是ハ合点行かす若や塚のたゝりならんもしれすと思ひ塚ニ向ひ祈念すれハ忽チ告有ていわく我ハ宇佐浦橋田ノおこめトいふ者にて亥ノ大変ノ時船にて流レ此処へ上り死せし後此方より人ニ崇をなさんとハ思ハね共我墓を気儘ニ崩せハ天から其者へ罰を当ルニ依て病人もたへす是ハ自分ニ災を招クといふ者也。

八月廿一日、今日七ツ頃ゆる小ノ中（〇夕方）

同廿二日曇五ツ時ゆる小ノ（〇午前）

同廿三日晴（〇中略、貨幣を論じたのち）夫より五年の後寛文ニ寅年五月朔日京都大地震五條の石橋崩れ落朽木谷崩れ土民おされ死す東山大仏銅像砕ケ破るゝ修理せんとするニ当りて松平伊豆守信綱建議して大仏を木像ニ換へ其銅を以鋳銭せハ国家の為なるへしと言上す将軍家綱公尤ニ聞しめされ大仏銅像を改メて木像ニ造る同しく四年甲辰夏大仏成就る此大像ハ天正十四年ニ関白秀吉公京都ニ於て高サ十六文の大仏を始て造る十ケ年の後慶長元年七月十二日夜の大地震ニ右の大像摧裂す翌日秀吉公諸侯を従へて大像の破損せるを見ていわく我レ国家を守らしめんか為に此処ニ大仏を安置せり然るニ地震ニ当りて其身の難を防く事能ハすいかんぞ国家を守るへきトいひて大像ニ向ひ矢ニ筋放チ帰る諸大名一言を出ス者なく皆悶れ恐れて其場を去れり然レ共太閤も深く心ニ懸りしにや同三年五月再ひ京師方広寺の大像を改鋳んとす疾ニかゝりて止む其年ニ秀吉薨しけるゆへ右大臣秀頼父の志を嗣き慶長十四年復大仏の銅像を鋳る翌年堂宇悉ウ成就す広大なる事已前に越たり僅ニ五十年を経て又々寛文の地震ニ破壊せり実ニ以惜むへし

十月十一日、七ツ頃ゆる小（〇夕方）

霜月廿九日、夜四ツ頃ゆる小

極月十六日半晴五ツ時ゆる小

87 慶応二年一月三日（1866－Ⅱ－17，2402650），九日、九月三日（1866－Ⅹ－11，2402886），十一月四日（1866－Ⅻ－10，2402946），九日、および十二月二十二日（1867－Ⅰ－27，2402994），宇佐に地震あり、また五月十五日（1866－Ⅵ－27，2402780），八月九日（1866－Ⅸ－17，2402862），十二日、宇佐風波高く海岸崩壊する。

〔晴雨日記三〕

○慶応二年

正月三日晴風ふく、七ツ頃ゆる小（○夕方）

九日朝風吹く、七ツ頃ゆる（○夕方）

五月十五日晴、岩崎の道両三日跡の大波ニ大崩レニ成ル

七月九日、昨夜月入んとする時月輪三体の様に見ユル

八月九日晴此間（○五～七日）の大浪ニ岩崎の道崩レ往来成難キゆへ今日惣出にて道を作る

同十二日、七日の大浪ニ池浦坂ノ麓迄浪打来り夫より東唐芋池へ皆汐入る人家へ浪の入たるも有先年の大変よりハ波別して高かりしといふに仁ノ村は堤を浪打こし文庫落しの麓より北へかけての地皆汐入

九月三日晴五ツ頃ゆる（○午後）

霜月四日夜五ツ半頃ゆる小ノ大

同五日晴昨夜の地震にて今日ハ十三年の当り日なれハ気遣ふ儘ニ相応ニ道具片附用心する者も有由也今日も西浜へ行風なくして暖也あミ屋にて読経終り食事を始んとする場合又ゆる大ニハ非され共甚永し来客の中ニ脇指を提外へ出んとする者も有予是を見て先ツ喫飯し然して後戸外へ出へしどふしても食事せねハ只逃ても事ハ足るましといへハ皆笑ふて元の席へ戻り膳ニすわる先ツ何気もなし地震の国ニ何そ十三年の法事あらん天災地殃兼てしれる事なれハ天変とハいふへからす思ハす来るものゆへ時変といふ成へし。けふハ溺死の年忌ゆへ法事の家多し別して福嶋ニハ余斗有といふ。

同九日晴九ツ半頃ゆる小（○昼）

十二月廿二日半晴七ツ頃ゆる小（○朝？）

88 慶応三年二月三十日（1867－Ⅳ－4，2403061），宇佐に地震あり、また八月十日（1867－Ⅸ－7，2403217），風波のため宇佐の沿岸崩壊する。

〔晴雨日記四〕

○慶応三年

二月卅日陰天今朝六ツ過地震大分長くゆる

五月十六日新在家ニ米屋仲右衛門といふ者有若年より商業を能し質貸をも致し酒屋のかぶをも求メ宇佐にてハ銀子持の組ニ入り富家にて在りしニ去ル寅の大変ニ家庫諸道具皆流し夫より追々衰へ近年扣山田地等をも売払ヒ光陰を送る。

六月七日けふハ松岡龍王宮遷宮狂言有とて北在郷新居甫淵より山を越し汗を流し来るもの夥し此宮ハ大変ニ流レ其後なかりしを当年再建元より大く成る四拾貫目程入費有といふ。

八月十日晴当月朔日二日頃の大浪ニ岩崎の鼻を打破り岸も崩れ往来出来難く成る地下役指図して郷浦の者を集メ北ノ方山際より神明宮の鳥居の前へ出西へ下りる様ニ道を拵へる已来大波にても往来の愁ひなし結構成事也。

89 明治元年一月三日（1868－Ⅰ－27，2403359），六日、十八日、二月四日（1868－Ⅱ－27，2403390），十九日、六月四日（1868－Ⅵ－23，2403537），八月四日（1868－Ⅸ－20，2403596），および同十五日、宇佐に地震あり、また六月二十七日（1867－Ⅷ－16，2403560）宇佐で潮位異常あり。

〔晴雨日記五〕
○慶応四年
正月三日晴七ツ頃ゆる小
同六日晴風ふく、昨日晩方ゆりけふも亦ゆる小
同十八日夜四ツ半地震小ノ大
二月四日雨四ツ頃ゆる小
十九日、今日七ツ半時ゆる小ノ中
六月四日、八ツ頃ゆる小
同廿七日小雨、夜ニ入汐ニ狂ひ有とて浜へ松明をとほし騒動する者多し
八月四日雨九ツ頃ゆる小夜中同断
同十五日九ツ頃ゆる中
（○筆者井上静照は明治二年三月二十二日卒、五十四歳）

90 明治九年（1876）五月十三日（2406388）、高知で二度地震あり。
〔明治九年五ー十一月気象測検〕〈「皆山集九」所収、松野尾章行宅〉
五月十三日、晴、後四（○午後四時）地震、五又震

91 明治十三年（1880）七月一日（2407898）、高知に地震あり、肥後では強震ありという。
〔矢野川正修日誌〕〈松岡司刊〉
（七月）同廿八日、七月朔日、夜十一時頃地震ス九州肥後尤甚シカリシト

92 明治十五年（1882）、安芸郡に五度、香美郡に十度、長岡郡に二度、吾川郡に四度、高岡郡に二度、幡多郡に四度の有感地震あり。
〔明治十五年高知県統計表〕○地震度数
安芸郡、三月、一度
五月、一度
六月、二度
七月、一度
香美郡、六月、五度
七月、三度
十月、二度
長岡郡、六月、二度
土佐郡、（○通年0度）
吾川郡、三月、一度
六月、一度
九月、一度
十月、一度
高岡郡、九月、一度
十月、一度
幡多郡、二月、一度
三月、一度
九月、一度
十月、一度
（○これ以外すべて0度と記してある）

93 明治十六年（1883）四月二十九日（2408930）、七月三十日（2409022）三十一日、高知に有感地震あり。
〔庁中私日記〕〈「皆山集七」所収、松野尾筆〉
同（○明治十六年四月）廿九日、曇、午前十一時十分地震
（○七月）三十日、夜二時地震
三十一日、夜九時地震

94 明治十八年（1885）十二月二十五日（2409901）、高知県潮位異常あり、また十一月四日（2409850）小笠原島に地震あり。
〔皆山集九〕
「日抄抜萃」

一、十八年十二月廿五日六日比浦戸種崎辺ノ潮水いたく違いたりと地震の兆と云々、十一月四日小笠原島地震す云々

95 明治十九年（1886）九月十七日、（2410167）高岡郡長者村に地裂を生じる。

〔皆山集九〕

「日抄抜萃」

一高岡郡長者村字寺野部落ハ東西凡弐丁南北凡六丁山腹ニアリテ戸数五十戸明治十九年九月十七日ヨリ家床幷畠地等数ケ所幅一尺五六寸ヨリ二尺余ニ至ル地裂ケ其長凡（ママ）又所々地凹入シ一面ノ地微塵トナリ人家九戸傾崩シ内三戸ハ既ニ毀除キ諸人ハ字南平ヘ仮己屋ヲ建テ又親戚ノ内ヘ諸道具ヲ携立除ク尚残品ノ盗難ヲ恐レ夜中壮年ノ者立戻リ其看護ヲナスト云又云往昔ヨリ稀有ニ僅々地破砕スル事アル趣目今ニ至リテハ糞汁等地中ニ滲透シ潴留セサルヨリ此地ハ到底永住農業する能ハさる故に南平及其他へ移住ノ含ヲ以目下地所購求ニ計画ノ者有之由地裂ノ事ハ十七日ニ初リ廿一日ニ至ルモ尚止ます又十七日ノ降雨ニ該村列ニ甚シク長者川ノ河岸ニ連亘シタル所ノ田圃洪水ニ横断シ長サ八十間幅二十間余ノ川トナリ田圃ノ潰口ノ下方ヨリ大ニ水湧出シ今ニ水勢盛也元ノ川ハ返テ白砂トナリ新故両川ノ中間ハ原野トナル此新川ニ沿タル田ノ潰口ヨリ川縁迄直立二丈有余又川縁ニ長三間余ノ古キ田ノ石垣アリテ其上ヲ赤土ヲ以塗リタル畦ヲ存ス又其下段ニモ長四間幅一間ノ田床共現出ス古老ノ口碑ニ此寺野ハ昔大潰ニテ当時川の向ニ字宮崎ノ地所ヲ生シタリト云　九月廿二日ノ報知アリ

96 明治二十年（1887）一月十一日（2410283）、高知に地震あり。

〔片岡健吉日記〕〈立志社創立百年記念出版委、昭49〉

十一日　午前十時地震アリ

97 明治二十三年（1890）九月十一日（2411632）（旧暦七月二十七日）高知県に暴風雨がおそい、高岡郡、幡多郡の各河川流域各所に山崩れを生じた。

〔尾川の郷土誌〕〈佐川町誌編纂委、明神健太郎編、昭31〉

明治二十三年七月大洪水あり、尾川川やそれに注ぐ谷々の濁流奔騰して所々の堤防や堰関を破り、田畑に浸水したがわけても西山川の上流大谷の山崩れは大きく、遠くいんぢようまで、根こぎの大木を流し、下流西山部落の田畑数反歩を砂地と化した。この時尾川の峡は全く大河と化して濁水滔々と流れ、広瀬、下郷、高平付近の田畑は大半流失、埋没したため耕地を失つた村民は北海道移住を唱えるもの多く、時の北海道開拓官武市安哉らが来村視察する騒ぎであつた。

〔斗賀野村史〕〈明神健太郎著、昭29、佐川町〉

洪水　明治二十三年七月大洪水あり、増水甚しく役場（二ノ部）東にかけて道路面上の水嵩二尺に及んだ、西山大谷の大崩れは遠くいんぢようまで大木を押流し近傍の田畑数反歩を砂地と化した、この時松田伝六は山崩れのため圧死した。

〔仁淀村史〕〈編纂委、昭44〉

明治二十三年九月十一日の大洪水で、川向うの古生寺（こしゅうじ）が地辷りを生じ、住居することが不可能となったので明治二十四年四月に西森久太郎、西森長太郎、西森信弥、西森米次、西森吉弥の五世帯が折合に移転し、字駄場の鈴原を開墾する等、今日の部落発展の基礎を築いたのである。この駄場の大植谷に沿ったところを〈押畝〉という。ここは延暦年間の大洪水のとき、大植の中曽の山が押し流されて潰え留ったものと伝えられ、石灰岩からなる土砂が積っている。

〔高知県神社誌〕〈竹崎五郎著、昭6〉

三島神社（〇幡多郡）昭和村四手字仲又山

明治二十三年九月十一日洪水の為め社殿流失社地も又崩潰したるより、現社地へ移転再建したるものである。

〔大正町誌〕〈高知県幡多郡、昭45〉

明治二十三年庚寅の年旧七月廿七日午前八時頃より大雨ふりだし、十時さがりより大山しを、はじまり、うねうね、さこさこ、居所も立ち所一面にくづれ諸人民一命只一つものこらじと思い候十二時ごろ水さかり先づ仁井田川筋において山崩につき出され、又は木にをしながされたる家数凡千余戸になって、夫が為に死んたる人数は弐千人余を、あらそを其他牛馬犬猫死亡は幾万やら難斗り其時の水かさは上岡字横野まえで、だば屋式を除くの外は家毎、のき限り、又柱の中半限り大川水にてつばかり、上岡村社河内神社の拝殿の式板限り大川水と上岡谷水との、のまえに依てつばかり、下だば屋式の門と石かけの根元を大川水にて洗い、字向い山は鎚打山のこしと兵助畑よりこゑる所大川、水面よりこへとの地面まで二間内外と思候也。我れは其時字横野東より二番目の屋式、云い伝へに喜代八屋式と云処に住居致候所其家ののき限りつばかり、其東脇に三蔵と云老人有り長男清次二男芳吾此家もつばかり両家ともどもにせどなる野芝へ諸道具家財を取片付けそこで一夜野宿致し字高松屋式に五間に二間の居家有り住人は上岡吉太郎弟万次兄弟くらし宅地のそら伐畑が数反歩崩れかかり家は谷川へどうと落ち兄吉太郎はそれにうづもれてながれ相かわらず弟万次はつゑの片ほうにて廿間斗り落し所仕合せにも畑のきしねっとーゑ落ち入りそこで立上り助かりしなり、如石の山しを大出水のこと故所々て田畑の破損おびたたし、水害にあいたる土地一切は官の検査を受け三年五年七年十年十五年までの御免許相蒙り畑作は場所によりては少少残れ共田作は皆石入り砂入り、つゑにうもり一りうも見へてはをらず官へ出願して窮助米をもらい、よをやく命をつなぐ者多人数有り、旧来のいせき用水路は何丈も底へ成り又東上山村の内でも第一番は芳川大荒れ二番市ノ又三番上岡四番下岡極大荒のケ所なり折合相去瀬里比三部落も大分荒なれども先双方おしならしに荒ました。

大水中に夜に入り候翌朝方々へ行き来したるに、仕合也にやひるの水害の事ゆえ上岡にては死者一名に限る又他部落も右に記する通り惣計二千余人の積りなれば、思たより少なかりしなり、部落毎に流死人一名も扱はずと云所なく、西上山村小野部落にては数名かかりて皆扱いたる由是も二百廿日に当る日なり、其後も長雨ふりつづき川水、まし、へり度度ありて気づかわれた事で有ました。

明治廿六年癸巳年五月中旬ヨリ大日照りと相成り廿三年水害の為旧来の堰は何丈も川底ゑ、うもれ用水路は崩れ田作へ水をあたへること叶わず黍作は枯はてる畑作はもちろん皆無となり、野山の草木まで赤く成り、夫れがために諸人つるいもを植ることあたわず、ところへ旧七月七日八日はじめての大雨大かみなり其雨に皆つるいもをうゑたれども、ほりとるものあらず、明治廿七甲午年も前の年と仝様にして極大日照り諸作物は日やけに成てごく不さく其内黍作はかいむと云処なり、旧八月十一日大南風吹いて少々残りたる黍作を吹折り大こんきうとなる。以下畧

故人の遺志を尊重して原文のまま写　森恭仙翁遺誌（安政六年五月生）

明治二十三年旧七月廿七日大洪水にて水の高さは伊与木長太郎居家の座から一尺上に上がり、池の堤の上を船に乗って通り武内宅の上カタシ木の所へ船を着けた。

弘瀬の流失家屋井谷次太平、武内三吾居宅納屋共のこらず流れた。弘瀬の耕地の五分位川に成り、四分は荒地に成り、一分位残り地があると向地の伊之作等の見込にて、諸作物も一分位は拾ひ集めの有様なり、稲の土砂に埋もったものを堀り出して、みたが臭くて食へない。弘瀬、上宮、北ノ川、一ノ又、烏手、芳川は被害が同等の見込みである。

高岡郡四手原村より下流田野々迄にて流れた人三十人位内五人秋丸村迄家に乗ったまま流れて来る内に泳ぎ上がった者あり。

流失家は凡居家二百戸位なり此内大井野村にて流れた人二十二人内五人助かり十七人死亡せり、弘瀬村内にて山ツヱ凡百五十潰へほどあり、

百二十年前の寅の年大へんより川水二尺斗り大きく上りたり。
故人の遺志を尊重して原文のままとす　伊與木長太郎翁遺誌（嘉永三年正月生）

明治二十三年水害のとき北ノ川では新谷居宅前の県道まで仁井田川の出水となった。現西口バス乗場の西側少し下った所に井上という医者家があったが流された。この井上屋敷えは仁井田川本流の水勢が強く突きかけてくる。それが相去川を奥えむかって逆流して屋式田の方え逆渦を巻いたのである。仁井田川から桶が流れてくる。「タンス」が流れてくる。家がくる。モクがくる。それがみんな逆流して屋式田（現学校所在附近）は仁井田川の渦巻の底になったのである、そんな関係で屋式田は多量の泥土を以て埋められた、学校前の小川端の田岸の崩えくちに何尺かの底に古い稲株の埋ったものがあるのを見ても昔の洪水のはげしかったことが相像されるのである。（牧野久之助翁九十六歳談）

明治二十三年水害に四手ノ川部落中の山林、旧林、焼け山ともに潰えぬけが一千八百ケ所あった、この潰えぬけと共に住家が二軒押しつぶされて流亡し死亡行衛不明者数人あった。宮の谷国有林から潰えと共に押し出された杉、桧、松、雑木類の大木が根つきのまま次から次えと濁流と共に流れ出して氏神社下から山中仲次宅前えかけて田地は流亡したり、土砂に埋まりて、原形の田は、一とせまちも無い、でん川原となってしもうた。大畑から下流も一面の土砂で山といわず畑といわず、谷といわず埋めてしまい、当分の間は道も無いので其の上を通行した。（森中徳太郎翁八十八歳談）

明治二十三年水害のとき一ノ又部落の本谷は現天神宮の後方字石ザシより右岸字ホーリヤ西音馬宅地の前を流れていたのが、オートー谷の上方から大潰えが押し出してきて、ホーリヤの谷をつぶしてしまった、そのとき西の家も九尺位土砂に埋ってしまった。

谷の流水は柳ケさこの谷水とオートーの谷水とが合流して神社の後方から左岸の現在の村道沿いに押し流すことになった。

洪水の当日は朝の十時頃から奥の国有林ちくぜんを始め谷々、山々から山塩が吹き出して大洪水となり、大平山から潰えが抜け始めて同日二時頃までに百六七十ケ所の山崩れができた。現在も所々の山にその潰え跡が残っている。洪水の水位は今のお宮の床上まであがった。この洪水で田辺三蔵という人は八斗蒔の田を全部流失して荒地となり、部落全体では馬一頭田畑一町位を流亡した。米も三百俵位を流した。

水害後補助金を貰い堤防五ケ所修築した（日雇賃金廿四、五銭位であった）五ケ所の修築堤防はその後水害が無いので附近の人が築石一つ取り二つ取りして大半無くなった字ウチヤシキに若干の面影が残っている。（林梅太郎翁談）

明治二十三年水害に大奈路では竹の谷が水害のため荒地となり田四反五畝位はでん川原となり、イタヅリの生へる野原となった。流失した家一戸。大奈路から八足までこれまた谷川が土砂で埋って、でん川原となり、谷水は地下水となって地上には出てこず、馬を引いて行くのにこの川原を通行するのが一番で途中まぎれるもの無く当分の間はここを通行するのが便利であった。

大奈路から八足えかけて百潰え崩壊して、そのため谷川を埋めて岩も淵も瀬も滝も埋もれてしまい、八足、大奈路間一とべったりという荒廃の状態であった。（小野川清馬翁談）

明治二十三年水害で中津川は谷水も大した洪水にもならず、小野川弁次宅えも出水はとどかなかった。（田辺ひで婆九十五歳談）

明治二十三年水害のとき下岡は田村嘉太郎宅地の下二番目の田まで仁井田川の水があがった。下岡谷の水は大川水にささえられて名本屋敷のかみしもが土砂に埋った。（田村嘉太郎翁談）

明治二十三年水害のとき西ノ川で現在位置の茶堂が洪水のため流失した。部落のしもの家岡本では倉庫が残ったのみで居屋其他は流失した字名本屋敷の附近は西ノ川谷の山潰えの土砂で埋まってしまった。（林喜代太翁談）

明治二十三年水害で木屋ケ内は檮原川の大洪水で那須友永のかみの家が座敷まで水が揚った。潰え抜けが、大奈路、八足で百潰え、芳川で千

潰えあったと聞いた。（田辺良次翁談）

明治二十三年旧七月二十七日午前八時頃から降り出した雨は午後三時頃まで、天から水をウツスように降りつづいた四万十川の大洪水は打井川谷の増水と共に畦地屋敷より四尺以上もあがった。長山のかみから大川口まで田といわず谷といわず一とべったりの川原となっていた。（畦地佐太郎翁談）

明治初年打井川村の世話係をやった小谷安兵衛が河内神社の棟札に「後年に至り知る為記し置、明治廿三年寅之旧七月廿七日大高水有之此水通常之流水より凡拾丈位上り候字松がナロより下も田畑相見へず人家に於は流家は無之候得共カドタ西カ奈路之人家へ四尺位い上り候誠に後今無双之大雨水也」（筆者写）

明治二十三年水害に下道の山林に潰えの抜けた所二十五、六ケ所あり田四反位畑五、六反位と人家一戸が山塩で押し出されて流失した。（小野川利吉翁談）

明治二十三年水害に上宮部落では四万十川の大洪水が字「下も舟戸」の上宮づけえつきかけた濁流が山手の方を逆流して、大きなさかうづとなり、かみから流れてきた家やハタやタンスや仏壇、それと一処に大きな藻くがつらなって神社林のしもまで舞い戻るようなことを繰りかへして次第次第にしもえ流れて行った。

上宮の下も前で上方の山が崩れて大潰のため家が一戸押しつぶされた。その時妊娠している嫁さんが潰ぶれた家の中で餅搗き臼にもたれたまま赤ちゃんも生まれて一所に死んでいた。馬も四匹程だやの内で圧死していた。流失した人家が四戸あった。萱葺の氏神様は拝殿の軒まで洪水が揚り天上裏にゴミが溜っていた。お宮から下もは、その時の洪水関係で砂が滞積して大沢のような深田となり稲の良くできる田となった。針木は弘瀬轟から一ち段と川面がさがっている関係で下流えの水引きが強く洪水のとき田畑の表土を洗い流し、中には底土まで洗堀流亡した所も多い。（宮脇栄政翁談）

明治二十三年水害のとき田野々津野伝氏が四歳の時であった当時字岡本谷に住家をかまえていた。水害当日岡本谷の奥から大山塩が押し出してきて、見るまに家屋敷の周囲や田畑を土砂と共に埋づめてしまい家の中えもどんどん水が這入ってくるので、居ることが出来なくなり、母におわれて森の駄場の方え逃げあがったことを覚えておる。

その時分田村屋（旅宿屋）が山本の向いにあった、そこの奉公人で北村常治という男があった。水害の当日田村の附近から川舟を乗り出して現在の県道のあたりを熊野神社まで乗って行ったということである。如何に未曽有の大出水であったことが想像されるのである。（津野伝翁談）

明治二十三年の水害のとき折合谷の左岸ヒソギ谷奥から大潰が押し出して本谷を埋めた。そうすると向い側右岸桧生原分の橋谷よりも大山崩があって両方の大潰が一と所へ重って埋もり折合本谷を堰き止めることになり天神の宮本屋敷附近まで一面の泥海となってきた。そのため西村屋敷の前の川に浮いたタライが天神の方へ逆に流れ登って行くようなことがあった。

折合部落の奥民有林官有林の中には数十ケ所の山塩の吹き出した大潰えがあって大木の根こぎと共に岩や土砂で一時は谷水を堰き止めるようになっていたものを、烈しく降る雨と奥から迸り出る谷水によって、この土砂や大木を一挙に押し出して田畑は埋まってしまったのである。幸に人馬の流失の被害は無かったが昭和の今日でも埋もれたり、流失した田畑はそのままで復旧することも出来ず、荒地のままである。生き地は昔の田が三町位に畑が三反位残っているにすぎないのである。（西村栄翁談）

明治二十三年水害のとき芳川の山崎弥吉氏は八歳のときであった。兄貴は十二歳で同部落の佐々木方へ子供の守りに行っていたが、声が充分に出んので「モノ」がわからん。これでは子守りには具合が悪いというので今度は弥吉さんが兄貴と交替することになり佐々木方へ行って自宅には居なかった。

それから兄貴は自宅に居ることになった。水害の当日は天の底が抜けたのではあるまいかと思うばー大雨が降りつづく、すると家の上の谷か

ら大山塩が吹き出して大山崩と共に居り家を兄貴とおやぢを乗せたまま下の谷のもやいまで押し出されて二人は泥水の中え押し潰ぶされて兄貴は行衛不明となり、おやぢは潰ぶれた家の下で柱にかきつき「ボーゼン」としているところへ地下の人達が来て引っぱり出して助けてもらい命拾いをした。兄貴は到々行衛知れず、死骸もそのままである。此のような騒ぎが内にあるとも知らず、弥吉さんは佐々木方に居たので安全であった。私は兄貴が身替りになって呉れたものであると語った。(山崎弥吉翁談)(○以上「山塩」の「塩」の字は「さんずいへん」が書いてある)

桂の谷山崎さんの近所は水害のとき桂の大潰の為にヌノマタ谷口に大潰山を築くことになり谷間いを陥いでしまい一面の泥海となり、沢山の田も畑もその底に埋没してしまったのである。

98

年不詳の地震、津波、地変記事

〔南海大震災誌〕〈広木三郎編、昭24〉

甲浦町萬福寺にのこる碑の碑文は歳月を経て不明であるが、貞享元年十月十三日の銘がある。十月十三日は日蓮聖人の入滅の日にて此の経塚は当山の中腹にありて、此の塚まで津浪が来りたりと伝えられて居る。

この地に船越の地名あるは、津浪の浸入をうけたとき、此の坂を船が越えたりとの言伝えより生したりと云々。

○

甲浦町の言い伝え

甲浦町に船越という処があるが、これは何時かの大津浪にこの坂を船が越えたとの云い伝えより船越の地名を附けたとのことである。

又古老の話では、井戸の水が減つたときは、大津浪があるから気を付けよといわれている。

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文協教会刊〉

○香美郡柳瀬村

仁井田古宮

貞重筆記云　昔より有来りしかいつの此に敷洪水の節川の北山潰枝水溢れ宮神体とも押流されける槇山郷大杤村しまやしきの先人今紋右衛門祖といふ魚捕に新敷網を初て持行しに此神体をすくひ上け有しを所の者迎来り又々洪水危しとて氏宮へ納め一所に祭りける由村老慥に云伝れと年暦未考夫より此所に宮なく古木有古宮床と云其の西を宮のまへと屋敷名に呼来りし也今の市助祈願の事有明和年中宮を建紙幣を神体とし氏宮神事の序に祭来る也又天明八年七月五日タキシリ山潰抜たる時此宮も押流し田中に掛り有しを後日又取立ける也

○土佐郡朝倉村下切村

穴神野地社地二代

地主三所権現

州志曰伝言昔在レ社一夜無故尽レ陥二干地中一而其レ地為大穴一去二社地一五丁許有レ川其材木尽流出後終二不レ置社十一月択レ日祭

○高岡郡西郡土崎村(吾井郷之内)

天神　先年山潮之節土崎へ流来り此処へ勧請土崎氏神に祭

○高岡郡宮内村、仁井田之社鎮座伝記、甲把瑞益述

又土佐物語に大鳥井村大鳥井の社というは非也古昔土佐国公領或一条家御時代までは社の前に長十間余の大鳥居あるが故に里民大鳥居の宮といひならはせり今に到りて大鳥居の趾と言へる所有後世是を伝へ誤て大鳥居村の大鳥居の社といひまた大鳥居村ともいひ仁井田とも号し其祭神はといへは五社と神名を称せるか故に後世転達明敏の士も或は稲荷の五社を遷し祭るならんといへるは里民の伝称する事跡を知り給はされは也先代国衛元親公御再興の時既に大浪入て破壊し其趾のみ残けれとも郷俗の訳称に大鳥井の御屋と言ならはせる事にしたかひ土佐物語の作者不暁

して実に此神号村号有として妄に書記せりと見たり可嘆

〔土佐寺院誌〕〈竹崎五郎著、昭7〉

不動堂、朝倉村（〇土佐郡）宗安寺不動の元にある、往古領家郷横矢に安置のところ、ある年洪水山崩の為に堂宇流失、本尊は当所淵崖の藤にかゝり、乃ち堂を建ててここに祭るといふ

〔皆山集三〕

「歴代藩主」

一御能拝見の時地震

台徳院様御能被仰付諸御大名其外御旗本方迄拝見　龍山様未た半御元服の時分加藤左馬之助殿へ一豊様と御入魂ニ付万御場所之御後見尤此節も御同道則左馬之助殿側ニ御座被成候然ニ其能小鼓ハ台徳院様被遊笛ハ春日市右衛門其外其時分の四座之上手共御相手を仕しと然ニ御能半ニ余程の地震御城の義なれハ夥敷鳴渡りし程ニ御座敷御歴々方も御立騒き仍之龍山様も既ニ御立上り被成処を左馬之助殿龍山様之御長袴の裾を引き屹度御にらみ有りしに其儘御座着被成内地震もしづまり御座中落着しと右之御仕形ニて御座中御両人様始終御動不被成ニ付其外より目付申由扨又御舞台少も立騒不申然共御能合方少も違不申ハ御前の小鼓と春日市右衛門か笛斗也其外ハ拍子方いづれも違しと扨御能も相済いつれも御退出の以後上意ニ今日地震余程の事いつれも騒きしも無余儀事ニ候就夫左馬之助か事ハ是等之事ニハ善悪沙汰ニ不及土佐守ハ未た若輩者成か神妙の座着さすが父の子なりけりと上意有其跡ニて扨春日めハいつかたまでも名人なりしと上意有て外何篇の御沙汰もなかりしと

右之段ハ龍山様御客方へ両度御御咄我等若輩何の思慮無之ニ左馬之助殿老功を以其節天下の外聞誠ニ老人差引今更感入申と左馬之殿を御称美御物語両度迄奉承知乍恐御尤と井上孫右衛門殿咄を若輩之時分慥ニ聞し也

〔多ノ郷村誌〕〈小野弥太郎編、大6、現須崎市〉

戸島大明神ノ伝説

戸島神社ハ宗像三社ト御同体ノ神ニシテ現在ノ御神体ハ略々同形ノ自然石ナリ、而シテ太古ハ戸島（宗像戸津島）中島（同中津島）神島（同沖ノ島）ノ三ケ処ニ祀ラレシガ、何時ノ世敵大変ニ遇ヒ神体流失セシガ（〇以下に宝永津波の話が出てくるので、それ以前の津波である）

〔補註幡南深古録〕〈亀井釣月筆、沖本樵児補註、昭41〉

越

此湖は今越浦清水の湊なりとぞ、越清水海と云ことならん。此湊むかしは水海なりしがいつ頃にか水戸波にあれて、大海に混じたりとぞ。

下川口

爪白川は元は今のイデザキと云ふへ流れて、弁天嶋の北方の海浜に注ぎしが、何れの時代か不明なるも其後銚子の口と云ふ所を堀割りて、今の如く東流せしめしものなり。往古のイデザキは弁天嶋の南方約二町の処に其名残れり。

99

参考記事

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文教協会刊〉

〇香美郡

手結村夜須之内

〇湊一ケ所　銚子口酉戌ノ間ニ向南北六十間東西二十七間浦戸より五里満潮ニハ舟ノ出入有干潮ニハ出入なし〇湊内地面五反廿一代同深サ満潮ニ三尺四寸斗イニ五

但往古ハ一丈も有之処右ノ通干潮ニ潮ナシ

〇高知市五台山竹林寺縁起

本朝に於て震旦の五台山に似たる霊地あらハ、彼山に擬らへ伽藍を建立すへしと宣ふ時に、行基奏曰、臣僧行化して遍く諸州を見るに、土

州長岡郡に寄異の霊嶋あり。其形震旦の五台山に異ならす。五峯高く聳へて文珠の頂に五髻有に似、三池深く湛て三解脱の法門を示すか如し。伝聞昔金輪際より一夜に湧出せり。故に此山地震動揺せすといへり。如之奇光霊瑞不レ可二勝斗一。寔文珠大聖の浄土成へし。願は此地に如藍を建立し玉へと。天皇叡聞有て大に感嘆し、既に行基に勅して神亀元甲子年伽藍を営興せしめ玉ふ。

〔高知県史下〕〈津村久茂編〉

明治二十一年十月浦戸港に洲を生ずる。

〔皆山集〕

一秦泉寺村　八大龍王

神社帳ニ云勧請年月未詳但往古ハ此地所へ迄潮入来リ塩浜等有之由楠之大木有之以其楠祭候処亨保十二年九月廿五日従御楠之内火炎出候而後建宮

〔佐川町誌〕〈西村亀太郎編、大8〉

中山揺ぎ石　当町ノ西北隅赤土峠ノ西中山ノ山中ニ在リ巨巌ナレトモ一指以テ能ク之ヲ動揺スルコトヲ得世人呼ンテゆるぎ石ト云フ又一奇観ナリ

〔南海大震災誌〕

高岡郡多ノ郷村大間の人の話

（大間部落は、今回の津浪を真正面にうけて、被害甚大であつた場所である。）

私は大地震が止むともうこれで後は大した事はあるまいと、寒いので皆家の中に入つて休もうと思つたが、フト思い出したのは地震後の津浪である。

昔の云い伝えに、津浪の入る前は必ず海岸の水が無くなるから気をつけよと聞かされて居たので、早速近くの大間川へ見に行つた。

すると、暗がりの中に川の水が一切無いことが判つたので、これは大変だ津浪が来るに違いないと思い、大急ぎで駈け戻つて大声でこの事を附近の者に知らせ、私は家族をせきたて、何物をも取る暇もなく二丁ばから西の山をさして走りましたが、津浪は早や大波の音を立てゝゴウゴウと真白に押し寄せて来ました。

何様暗がりの道を川端づたいに逃げるのではかどらず、津浪は既に私どもの脛の所まで来ましたが、漸く山に駈け登ることが出来ました。

〔南路志〕〈武藤致和筆、高知県文協教会刊〉

○高岡郡金上野村

御在所山　高山也村の右ニ有山の八分より上ハ不能登麓の人家より朔望に神酒を備へ祭る毎月朔望の宵には山上に大皷笛手柏子の音賑々敷聞ユ又山神怒る事有時ハ山嶽より大石小石夥敷崩れ落る声して里人甚恐る

○高岡郡窪川村

御滝山神崎今神西滝と云　此下に岩原有奇異の岩組也昔は此御滝山に天狗倒有其時ハ山崩れ大木切倒し天地も覆か如し又或時ハ噇と笑ひ下岩原へ墜る響国中へも聞へけるとそ今ハ鳴動する事なし

○高岡郡宮内村

神崎御滝山　里人昔より五社御遊山所と云今神の西滝と云　秦姓地検帳に神崎と書けり

今按に西の字を書るはサイはイキシチニの韻なれは韻を借れるものなり　又此山下に岩原とて奇異の岩組有いにしへは深山にて山気甚敷故にや此御滝山時々天狗倒あり爾時は山崩れ大木切倒し天地も覆る如く音し又或時は噇と笑ひ下岩原へ墜る響夥敷人皆是を聞ては肝を潰し胸を冷す上古此山鳴時は土佐国中へ聞へけると也佐川の横倉五社の御滝山鳴動する事普く隠れなかりし今は妖孽の沙汰もなし

○幡多郡弘瀬村

一、伊与土佐堺之事

一、幕打澪両国之境石也但近年大浪立候哉余之石重り埋りて難分り尤御当領船引揚有之

○幡多郡沖ノ島中崎野方

〔下川口村誌〕〈田村信吉編、昭10〉

千尋港の水深は南路志には四丈余とあり、爾後約四十年を経たる後の万延元年の図面によれば六尋余と記せり、更に五十余年を経過して今大正の三年に測れば五尋半となり居り、又同じ万延の図面によれは前ノ浜一町沖を十二尋と記しあるが、今は満潮の時にて四尋斗りとなれり、僅なる年所を経過して変化は実に斯くの如き甚しき者あり

宝永地震津波記事

〔皆山集三〕〈「一門連枝」〉

一同年十月四日未刻大地震山崩河海溢沼近里村浦或没海或成荒壑老若男女波溺死不知其数民屋流失潰家牛馬流死田畠波損等夥鋪不可勝数因茲大変損亡之廉々委細御附届幷御内分御伺蒙御用之旨同月廿六日高知発足御急用故立川通也往千江府

一同十一月十四日参着於東武早速右件奉経上裁段々御国中夥鋪損毛諸民困窮仍之翌子春御参勤御赦免之御奉書同廿七日出同十二月四日江戸出足

此時節自十一月廿三日不二山桧平従地中焼出飛砂石穿雲自黒烟中猛火出其光火烟揚炒飛散虚空満凄冷事無云許砂石殆為山社人名宝永山

十二月九日聞烟焼消熄

一同五戊子年初夏修理考重直之墓所

去冬十月四日地震転倒墓碑破砕因茲択吉辰斎戒敬而拝請于鬼神開挙墓取填土其半而設誌石埋蔵之立碑石

事竟稽首拝礼俯伏而曰嗚呼遂歳歴之宿意設誌石埋蔵之謂也再拝追傷敬慕爾矣

一宝永四年御届ノ写

土佐国高知山之城当十月四日就地震破損之覚

一大手門脇塀下石垣表裏共二三ケ所孕申候城中所々塀下倒或傾損申候

一北ノ口櫓門潰幷門脇塀崩申候

一同所櫓門之石垣長十三間崩申候

一同所西ノ方塀下石垣長九間崩申候

一二ノ丸下曲輪塀下之石垣長六七間斗之内石数々抜落申候

一三ノ丸石垣際之地形長四十間斗割塀際地形下リ石垣孕小石抜落申候

右之通ニ御座候此段申上候以上

十月十九日　松平土佐守

宝永六年九月御やしき土手之崩御普請当月初より始る

○聞書ニ云同冬三御丸ノ御家ハ畳置れ石垣ハ漸々ニ御修築等被成度旨土屋相模守様へ御願被成如御願相叶候然共御失墜之考を以御家ハ先つり置れ候

○

住吉神社　吾川郡第二十八区甲殿村磯山ニ鎮座

宝永四年丁亥地震大波ニ宮社跡モナク流亡シ神宝一ツモ不残今ノ神器ハ皆後ノ物ナリ社モ昔ハ山下ニ有シ由今ハ山ノ半腹ニ移リ云々

〔皆山集八〕〈「紀貫之関係記録」〉

○大港　大港ハこし方長岡郡十市浜のあたりにありしとせしと見エて元禄年間桂井素庵が望大港詩文をミるに大港ハ長岡郡十市蚊居田村の東畔にありしよし云その後享保年間安養寺禾麿と云人土佐幽考を著してそれニもなほ大港ハ長岡郡十市浜与に池浜一之堺有下称二古港一処上蓋是也中古為二怒浪一所レ没としるせりしかれとも十市浜ハ浦戸よりわづか一里ばかりあれバ浦戸より出し船の更に泊りしとせんことおほつかなきことなりされハその後野見嶺南と云者香美郡下島村と云処ニ住めりしが曲に地を見定め熟考へて我廬の真南前浜と云る地いにしへの大港の蹤なりと云て安永年中その図説を著したりしか尚いふかる人

もありし趣なるを果していにし文化十二年丁亥の洪水にかの嶺南か云し港の蹤の砂石を海に流し広く大きなる凹の地になりてまことに港のさまあらはれたりしかその後自らニ砂入りて又本のことく潰れしとぞしかれハ大港ハ嶺南が説によるべしかくて岡本信古か云しハ大港の所在ハ嶺南かいへりしにいさゝか違ふなし香美郡物部川の川末の地それなるよし云れとももとハ今の物部川の外西の方ニ別ニ川ありて前浜久枝村の間を流れて海に入れりしかば其流の末の弘くなりし処すなはち大ミなとニて今の物部川ニハあらずよくせすハまかひぬべしさるハその川すぢを寛永年中ニ当国の執政野中氏埋めてその水を今の物部川ニ落し一派の流となし跡を田地とせしより大港ハ自に潰れしなるべしさるによりてその所を古港と称ひ沙地凹ニなりてありしを宝永四年丁亥の高潮に右凹の処の砂打ナヤサレ海ト一ツニナリ港ノ如クナリテアリシガヤヤウヤウ沙入テ本ノゴトクナリシヲ又シモ文化ノ洪水ニ砂ナガレ港ノ如クナリタリシヲ又ヤウヤウ潰レシナリサレハ大ミナトハ今ノ物部川筋ヨリハ西ノ方ニアリシナリトイヘリ

「土佐国白湾往来」

巌礁　西巡紀行曰龍串磯、千尋崎、（〇中略）土佐故事曰布引在レ磯幅三四尺長四五丈許高一二尺末低而入二于海一龍門瀧在二山腹一岩背有下水流落二于地一状上焉里談謂昔亦有二鯉魚状一而宝永年中為二大地震一破砕而今亡焉」（〇中略）又云額石といふあり昔紀貫之の此石の面ニ歌を書給ひしと此石宝永四年地震ニ落て打伏ニなりたり（〇中略）此外有名のもの多し手引のまめ口云東の方に雄龍石西の方ニ雌龍石ありて岩峯聳へ連る形飜龍のふしまとひたるか如くなれハ臥龍山と称すフク通音なれハ俗誤呼て龍くしと号又一名屏風山と云後ロの山峨峨として切岸の如く屈曲する処屏風を立たるニ似たれハなるへし前ハ蒼海渺々として白浪天を浸し漁帆朝日に映し汀に種々の奇石あり東ニ当麻の浜西に桜の浜ありて四時の壮観をなし洞庭西湖松島象潟も目前ニたゝミて見るか如し後ハ青山峨々として古松枝をたれ岩間に怪岩奇石を顕し面向の宝珠不背山ありて蓬萊の仙宮も是ニハ過へからす磯に中将姫の曼陀羅石鰐口石浪のに鯨潜あり岳方ニ額石てふあり往昔紀貫之郷当国の任たりし時此地ニ遊覧し給ひ此岩面に詠歌を筆せられしに宝永四年亥十月大地震津浪入りし刻此石落て打ふしとなり水莖の跡今ハミへす唯石のミ遺り存せり（〇中略）夫より巽の方に鹿の落角龍門の滝あり水ハなく数十丈の岩屈にして白糸張り落るか如し其西の岩腹に鬼の礫石有り其傍に座頭の昼寝石有面向不背山あり高十丈餘廻り二十間許りの独歩の岩上に古松枝さひて仙宮に異ならす此上より丘の山へ橋の如き石かゝりあり号て通天橋と云へり宝永年の大地震ニ落て今ニ芭蕉谷ニあり夫より千畳敷の間ニ岡の港てふ処有り小舟一艘出入斗りの自然の港なり

〇

〇加茂神社　入野郷入野村、延喜式所載ノ社」訂正土佐国式社考曰此社今入野松原に在り八幡と同宇ニして南ハ賀茂北ハ八幡なり八幡ハ石清水を奉祀せり旧ハ八幡原ニあり賀茂ハ本賀茂地ニ在しを何時此ニ徒併するを知らす応仁比藤原家基此社を再建すと云宝永四年丁亥十月四日大震して社地海嘯の為ニ没せられ神宮も流れ行けるか潮涸ニ及て本の礎石ニ止る其社少も破壊せす

桂蔵寺伝記云庄司塚有井川村長尾山東の畝崎ニ有高サ七尺斗り大キなる五輪を中ニ立四方へ四尺斗りの五輪を立並へ有此塚ハ根元山の峯ニ有宝永の大地震ニ崩れ落ち散乱して今の所ニ有けるを地下人取繕ひ建置しとの言伝へ也此塚ハ親王御誓願にて一石一字書写の経塚とも言伝へ又外ニ一町程西ニ高野堂の崩れて有是か庄司の墓所ニて可有か此も宝永の大変ニ崩落しと見へ分りかたし云々

〇種崎村（長）東西凡八町南北凡十二町其地砂宝永四年地震海潮横溢民屋寺社悉漂没矣

〔皆山集九〕

手結　香美郡夜須村ノ内」南端ニ出る小岬を手結崎と称す」小松三筆

記云古き書ニ男女手を結ひ合斗ニて子産ミし事有之より名付と按ニ手結ハ沖合より見れハ手結山御茶屋の下を腹と見長楽寺の鼻を左の手と見北の御藏の西を右の手と見時ハ人の手を結ひたる形顕れる也宝永の大変ニ米藏の西余程切候へ共何分手を結ひし形有し也

○

○寺院帳云専修寺　称名寺末開基来歴不相知往昔高岡郡日下村ニ在慶長年中引移于高知浦戸町元禄十一寅年寺焼失以後新町南端へ所替被仰付候処宝永四亥年大変後亦小高坂村へ被引替候由云伝土佐故事曰旧在高岡郡日下村慶長年遷二于吾川郡浦戸一元禄十一年戊寅高知新町宝永四年亥此地

○真宗寺　元禄十一寅年御城下火災之節類焼就右両所替地於新町被仰付引移候処宝永四亥年地震潮入以後居住難成故以願遷ニ于浦戸町今之地一尚新町旧地今以御免許扣来

○寺社帳云長泉寺　京本願寺末開基年歴不詳元真宗寺脇寺延享四卯年十二月西本願寺直末ニ相成元高知浦戸町ニ在り元禄十一寅年類焼就レ右替地於ニ新町一被仰付引移之処宝永四亥年十月四日大地震之時潮入居住難成故其後以願浦戸町之地買求造営尚新町旧地今以御免許扣来十五代五歩本田新町

○遍照寺　京本願寺末開基年歴不詳元真宗寺脇寺之所延享四卯年十二月京西本願寺直末ニ相成元高知浦戸町ニ在

新町一被仰付引越之処宝永四亥年十月四日大地震之時潮入居住難成故其後以レ願浦戸町今之地買求之造営尚新町旧地今以御免許扣来

○寺院帳云大超寺開基来歴不知旧遠州ニ在之京都知恩院末寺之所住持信誉栄心山内一豊公御入国之節随来為二称名寺末高知細工町ニ在元禄十一寅年寺堂焼失同十二卯年春遷二新町一宝永四亥年地震之節寺及破壊同五子年春小高坂村へ引移仮造之処享保十六亥年第九世円的町家修行を以本堂庫裏共建立

○寺院帳云　西念寺智福山願生院と号京知恩院末開基不相知」往昔長岡郡種崎浦ニ在り慶長年中移ニ于高知紺屋町一之由元禄十一寅年回禄同十二年春遷ニ于新町一宝永四亥年地震之節寺及破壊同五子年春小高坂村之地村ニ引移」同云真光寺京佛光寺末吾川郡浦戸ニ在之由一豊公御入国以後引ニ移于高知紺屋町一元禄十一寅年焼亡同十二卯年春被仰付を以遷ニ于新町東端一宝永四亥年地震之時寺破損ニ付同五子年春小高坂村之地御引替被仰付天明二年八月西本願寺末忠義公御姫君普照院殿御位牌御安置

○善法寺　寺院帳云花園山と号す日蓮宗要法寺末開基不知開山ハ室寿院日秀（寛永十九年化）旧材木町ニ在り元禄十一寅年十月六日焼亡同十二年遷一于新町一再興宝永四丁亥年十月四日地震之時流亡第五世稚圓寺地差上替地相願同八卯年五月於潮江村再興寺地弐反拾六代四歩才山崎弥右衛門屋敷ト有

○寺院帳云浄福寺源信山玉林院京知恩院末開基来歴不相知往昔長岡郡豊岡ニ在り其後移ニ于吾川郡浦戸亦高知新市町一十一寅年回禄同十二卯年春遷ニ于新町一宝永四亥年地震之節寺及ニ破壊一同五子年春小高坂村へ移

○又云真慶寺浄福寺末開基不相知高知新市町ニ在元禄十一寅年火災ニ付焼失其後遷于新町南端宝永四亥年大変後小高坂村へ移

○又云法仙寺　阿弥陀山蓮乗院と号す真言宗常通寺末開基不詳高岡郡蓮池村ニあり妙蓮寺と号慶長年中高知蓮池町寺地賜引移蓮乗院と革元禄年中火災之節類焼此時伝記等失十一寅新町へ遷宝永年中潮溢入ニ付寺地差上於潮江村西入庵之旧址元禄十五午年十一月御遣付を以御免許地拝領寺建立享保年故有て法仙寺と改寛延二己年福井村へ遷

○又云山泉寺念仏院　称名寺末開基歴不相知古高岡郡蓮池村ニ在之其後高知蓮池町ニ引移元禄十一寅年寺焼失之由其後新町ニ遷宝永四亥年地震之節寺及破壊同五子年御断を遂け小高坂村へ引移

○又云大善寺　摂州天満定専坊末開基歴不詳古高岡郡蓮池村ニ在之処檀家悉高知蓮池町へ引越候故同町下ノ端へ引移元禄十一寅年類焼以後依ニ被仰付一引ニ越于新町一宝永四亥年大地震之時潮入寺堂流没其後再遷ニ于蓮池町一享保十二未年類焼同十六亥年亦類火同年買二求江之口村ニ

寺地一引移

○十楽寺　月輪山宝持院小田坊と称す真言宗常通寺末左開基不詳但昔香美郡植村ニ在り其後年歴不詳御城下山田町へ移住元禄十一寅年火災ニ依て焼失同十二卯年於新町代地賜り寺坊建立す宝永四亥年大潮溢入故同五子年廿代町今之寺地買求之同六丑年造立元と宝持院と唱天明六午年六月十楽寺と改め唱」

○安養院　真言宗常通寺末　開基不詳昔長浜ニ在之良福寺と号由云伝後当院号ニ改年歴不相知慶長年中御入国之比於高知蓮池町寺地を賜ハリ引移元禄十一寅年火災之節類焼同十二卯年新町之内寺町ニ於て代地賜り寺建立宝永四年大潮溢入故其後於廿代町御貢物立之地買求之引遷新町扣之古地五世以前住持代商家へ売放之所後右地被召上之由今之寺地を後御免許被仰付年歴不詳

寺院録云常通寺末五法院山寺号無し右開基年歴不相知高岡郡日下村奥之谷ニ先住恵深在山内将監帰依ニ付寛文年中被遂御断高知へ引移於廿代寺地賜り寺建立之由云伝え元禄十一寅年焼亡其後於新町之内寺町替地賜り寺建立宝永四丁亥年大潮入故寺修覆難相調暫無住を以寺領物成納集置追テ住職可相備旨申出御聞届之上同年より十ケ年以ニ無住ニ寺役本寺より兼帯之由申伝承享保元申年遂断右寺地売払無住之中物成米相加へ於井口村寺地相求寺建立同年住職申付元文五申年右寺地売替於福井村シロノ南相求之寺建立

○真証寺　西ヨリ二丁西ノ方南側京佛光寺末開基歴不相知元禄十一寅十月類焼ニ付旧記等無之古高知新町ニ在火災後引ニ遷塩田寺町ニ之処宝永四亥年地震大潮之時流没其以後北新町ニ遷

○明治維新後退転

○

一寺院移転

真証寺古新町ニあり元禄十一年十月火災ニヨリ塩田寺町ニ移る宝永四年地震大潮ニ付再北新町二丁南側ニ遷る○宝持院号十楽寺元ト香美郡植村ニ在り後高知山田町へ移ル元禄十一年火災ニヨリ新町寺町ニ移り宝永五年廿代町に移る○善法寺寛永十九年材木町ニ在り元禄火災ニヨリ新町ニ移り宝永八年五月潮江村ニうつる○真慶寺元新市町ニ有元禄火新町ニうつり宝永四年小高坂村ニ移る○浄福寺長岡郡豊岡ニ在り後浦戸又高知新市町ニ移る元禄火災新町ニ移リ宝永五年小高坂村ニ移る○西念寺元種崎浦ニ有リ慶長年中紺屋町ニ移リ元禄火新町ニ移リ宝永五小高坂村ニ移る○専修寺元高岡郡日下村ニ在リ慶長中浦戸町ニ元禄十二新町ニ宝永四年小高坂村移転す○金剛院往昔瀧本村ニ在リ瀧本寺と云慶長中朝倉町ニ元禄十二新町ニ宝永四年新市町筋新町西一丁北側ニ転移す○真光寺元浦戸ニ在リ一豊公御入国の後紺屋町ニ移元禄十二新町ニ宝永五年春小高坂ニ移転す○安養院元ト長浜ニあり御入国之比蓮池町ニ元禄十二新町ニ宝永四廿代町ニ移転す○真宗寺元ト浦戸ニあり御入国後浦戸町ニ元禄十二新町ニ宝永四年後又浦戸町ニ転移す○遍照寺元ト浦戸町ニ在元禄十二新町ニ宝永四年再浦戸町ニ移遷す○長泉寺元ト浦戸町ニあり元禄十二新町ニ宝永四年片浦戸町ニ移転す○山泉寺元ト高岡郡蓮池村ニ在リ後蓮池町ニ移リ元禄十二新町ニ宝永四年の後小高坂村ニ移る○蓮乗院元ト蓮池村ニ在リ後蓮池町ニ移リ元禄十二新町ニ宝永四年後潮江村又福井村ニ移る○大超寺元細工町ニ在リ元禄十二新町ニ宝永五年小高坂村ニ移る○五法院元ト日下村ニ在リ寛文年中廿代町ニ移リ元禄十二新町ニ宝永四年後無住享保元年井口村ニ移リ又福井村ニ転す

○

一宝永四亥年大地震以後先年ヨリ西町ニ有之候竹藪被除町家ニ被仰付上魚棚所替ノ云云書ニ見

○

一右魚棚所替之儀（○中略）其後元禄十一寅年御城下火災御屋敷類焼ニ付右御屋敷西之御待屋敷被除弘小路被仰付候之砌御口上書を以御願被仰上候尤此時ハ御絵図ハ不被為差出候哉扣等相見へ不申候其外右寅年火災之後御城大御門南之見付帯屋町より東町へ通る横丁或ハ北奉公人町へ出る新越度出来又ハ宝永四亥年大地震以後先年より西町ニ有之候

竹籔被除町家被仰付是等之儀其都而御届之御沙汰不被及候哉扣書不相見候

横畠村（高知市） Ⅳ－454
横浜（高知市，吾） 21, 40, Ⅱ－107, 171, 172, Ⅳ－173
吉川（芳川，吉川村，香） 45, 47, 245
吉原（芳原，吉川村，香） 14, 20, 45, 47, 59, 109, 170, 179, Ⅱ－106, 171, 176, Ⅳ－166
吉野（本山町，長） 17, 191
与津（窪川町，高） 22, 33, 34, 44, 48, 89, 158, 172, Ⅱ－109, 173, Ⅳ－175
呼崎（宿毛市，幡） 24, Ⅱ－112, 174
与力町（高知市，城） 163, Ⅳ－321

り

龍（土佐市，高） 21, 40, 56, 57, 82, Ⅱ－108, 172, Ⅳ－174, 175
竜光寺（南国市，香） 35
両栄川（中土佐町上ノ加江，高） 127
領家郷（高知市，土） 47
漁師町（高知市種崎，長） 36

ろ

牢の町（高知市，城） 163

わ

脇田（中村市，幡） Ⅱ－173
脇地（室戸市室津，安） 117
脇ノ山村（本川村，土） 47
和食（わじき，芸西村，安） 20, 54, 170, Ⅱ－106, 171
和田（宿毛，幡） Ⅱ－174
和田ノ原（香我美町岸本，香） 197

☆ ☆ ☆

（地名の読み方について，資料収集の際地元の方々にお聞きしたり地図で調査したが，なお推定によったものがある。また，高知市内と南国市内の各地名については，旧行政区画の何郡に属するか推定によって示したものがある。これらについてあるいは正確でないところがあったらご教示いただきたい。）

や

矢井賀（中土佐町，高）　79, 128, Ⅱ－109, 173
八百屋町（高知市，城）　108, 148, 186, Ⅳ－317
屋頭（家頭，八頭，高知市，長）　20, 158, 179, 183, Ⅱ－107, 171, Ⅳ－320
八川（大豊町，長）　47
夜須（夜須町，香）　29, 50, 79, 104, 105, 109, Ⅱ－171, 176, Ⅳ－123, 176, 325, 451
八助堤（高知市，土）　Ⅳ－320
安田，～川（安田川，安）　20, 24, 54, 95, 170, 195, Ⅱ－106, 171
安野尾（物弐村，香）　91
柳野（佐川町尾川，高）　Ⅳ－162
柳原（高知市）　163
柳瀬（香北町上韮生，香）　29, 91, 246
山路（中村市，幡）　22, Ⅱ－110, 173
山田（中村市，幡）　11, 33, 45
山田（山田町，香，次項との区別不明確なものあり）　18, 59, 188
山田，～橋（高知市，城）　65, 142, 162, 163, 178, 186, Ⅱ－122, 131, Ⅳ－123, 171, 317～321, 324
山奈（中村市，幡）　11, 45
山ノ神（土佐市龍，高）　41
山南（香我美町，香）　47
山崎（中土佐町上ノ加江，高）　81, 135

ゆ

椿原，～川（ゆずはら，椿原町，高）　81, 128, 244
柚ノ木（ゆのき，香北町，香）　98

よ

陽貴山（高知市，長）　Ⅳ－320
用石村（中土佐町，高）　Ⅳ－176
要法寺町（高知市，城）　110, 148, Ⅳ－317
養老（土佐清水市，幡）　23, Ⅱ－111
横田（東洋町甲浦，安）　189

南与力町（高知市，城） Ⅳ－321
御畳瀬（みませ，高知市，吾） 21, 34, 56, 64, 65, 110, 170, Ⅱ－108, 120, 131, 172, Ⅳ－325
耳崎（室戸市，安） 54, 79
宮内（窪川町，高） 246, 248
宮尾（土佐清水市下川口，幡） 45, 85, 86
宮ノ前（土佐清水市大岐，幡） 46, 48
宮ノ前（土佐市宇佐，高） 37
宮原西分（椿原田越知面，高） 44
美良布（香北町，香） 47, 93, 96, 97, 98
三和村（中土佐町？，高） 165

む

向地（土佐清水市下川口，幡） 131
鞭（大方町，幡） 22, 137, 138, Ⅱ－109, 173
室岡山（南国市，香） 66
室津（室戸市，安） 5, 15, 20, 27, 58, 59, 78, 79, 90, 98, 116, 126, 170, 182, 193, 195, 197, Ⅱ－105, 117, 146, 170, 548, Ⅲ－9, Ⅳ－193, 435
室戸岬（安） 17, 58, 116, 157, Ⅱ－170

め

メガネ橋（須崎市，高） 73, 75

も

藻浦（宿毛市，幡） 24, Ⅱ－112, 174
藻州潟（高知市，土） Ⅳ－170
元（室戸市，安） 20, 53, 79, 170, 190, Ⅱ－106, 170
本浦（中村市下田，幡） Ⅳ－180
本山（本山町，長） 36, 47
物部（ものべ，物部村，香） 29, 91, 94, 156, Ⅱ－107, 171
物部川（香） 59, 62, 65, 96, 166, 180, 250
森，～郷（土佐町，土） 47, 156
森本山（香北町，香） 179

松田島（安芸市，安） 28, 44, 170, 195, Ⅱ－171, 176
松の下（土佐清水市三崎） 83
松原（中土佐町，高） 43, 47
松原（大方町入野，幡） 46
松原（仁淀村，高） 97
真崎（まねざき，中村市，幡） 22, Ⅱ－110, 174
万々（高知市，土） Ⅳ－171, 322
丸池（南国市浜改田，長） 166
丸山（高知市大島） Ⅳ－321
万ケ谷（土佐清水市大岐） 121

み

三尾（佐川町，高） Ⅱ－156
三崎（土佐清水市，幡） 23, 47, 83, 125, 126, Ⅰ－676, Ⅱ－111, 174
三島（南国市，香） 35
三島ケ原（土佐市宇佐，高） 38
水沢山（須崎市，高） Ⅳ－190
水関（高知市，城） 163
三津（室戸市，安） 19, 54, 157, Ⅱ－106, 146
三ツ頭番所（高知市，城） Ⅳ－321
湊（宿毛市小筑紫，幡） 23, Ⅱ－111, 174
湊（窪川町与津，高） 89, 114, 129
湊崎（中土佐町久礼，高） 43
南浦（高知市浦戸，土） 7
南会所（高知市，城） 179
南川（高知市，城） Ⅳ－321
南川原（高知市，城） 163, Ⅳ－323, 379, 423
南郷（中土佐町上ノ加江，高） Ⅳ－191
南新町（須崎市，高） 43
南新町（高知市，城） 163, 178
南田ノ浦（大方町，幡） 10
南古市（須崎市，高） 42, 48
南奉公人町（高知市，城） Ⅳ－320
南町（高知市，城） Ⅳ－124

船付山（中土佐町久礼，高）　43
古市町（須崎市，高）　32
古川（吉川村，香）　20, Ⅱ－106, 171
古川（大方町入野，幡）　138
古倉（須崎市，高）　Ⅳ－189
不破（中村市，幡）　22, 79, Ⅱ－110

へ

ヘイノジョウヤマ（須崎市鳴無，高）　41
別枝（仁淀村，長）　87, 170
別所村（安田町，安）　47

ほ

法師ヶ岬（高知市）　24, Ⅱ－131
堀川（高知市，城）　162, 163, Ⅳ－172, 316, 321, 323, 324
堀川（須崎市，高）　70, 73, 75, 80, 162, 163, Ⅱ－115
堀詰（高知市，城）　143, Ⅱ－131
本田（大方町入野，幡）　138
本町（高知市，城）　168, Ⅱ－131, Ⅳ－181, 182, 311, 321
本町（土佐市宇佐，高）　53
本村（大方町入野，幡）　138
本吉原（吉川村，香）　Ⅳ－451

ま

前浜（南国市，香）　12, 20, 29, 59, 191, 250, Ⅱ－108, 171, 176
まきの浜（土佐清水市，幡）　123
槇山（香北町，香）　187
間崎（まさき，中村市，幡）　23, Ⅱ－110, 174
松尾（土佐清水市下ノ加江，幡）　23, 123, Ⅱ－111, 119, 171, 173
松岡（土佐市宇佐，高）　Ⅳ－194
松ヶ崎（高知市）　49
松ヶ瀬（須崎市，高）　80, 101, Ⅱ－172, Ⅳ－314, 317, 322
松ヶ鼻（高知市）　66
松ヶ鼻（土佐清水市下ノ加江，幡）　69, Ⅱ－171

東浜（奈半利町，安） 115
東孕（ひがしはらみ，高知市，土） Ⅳ－323
東吹上川（大方町，幡） Ⅳ－355
東古市町（須崎市，高） 75
東分村（須崎市，高） 50
東堀詰（高知市，城） Ⅳ－321
東諸木（春野町，吾） 21，Ⅱ－108
引地山（高地市，土） 63
久枝（ひさえだ，南国市，香） 20，29，35，66，250，Ⅱ－107，131，171，176，Ⅳ－176
比島（ひしま，高地市，土） 5，21，62，65，90，118，142，145，156，158，179，180，183，184，Ⅱ－107，122，131，171，Ⅳ－171，311，320，324
日出野（高知市，長） Ⅱ－172
日和山（土佐市宇佐，高） 40，48
日向岬（宿毛市沖ノ島，幡） 128
平井（香我美町，香） Ⅳ－166，451
弘岡（春野町，吾） 47，150，151
弘岡町（広岡町，高知市，城） 148，Ⅳ－311，317，320
弘瀬（宿毛市，沖ノ島，幡） 128
弘瀬（大正町，幡） 243，248
広瀬（佐川町尾川，高） 242
弘見（大月町，幡） 129，130

ふ

深木（中村市，幡） 22，Ⅱ－110，174
福井（高知市，城） Ⅳ－171
福良（宿毛市，幡） 23，Ⅱ－111，174
福島（土佐市宇佐，高） 21，39，87，88，123，125，136，144，146，150，179，190，192，195，Ⅱ－108，172，173，Ⅳ－174，180，194，355
藤原山（物部村，香） 93，94
二ツ石（須崎市，高） 53
舟川（土佐清水市下川口，幡） 8

八田峰（高知市？） 28
八町森（大方町入野，幡） 10
羽根（室戸市，安） 16, 17, 20, 24, 47, 53～55, 58, 70, 90, 95, 97, 158, 170, Ⅱ－106, 146, 172, Ⅳ－322, 339
羽根橋（刎橋，高知市，城） 163, Ⅳ－320
浜（中土佐町大野，高） 33
浜市屋（土佐市宇佐，高） Ⅳ－180
浜改田（南国市，香） 20, 59, 166, 191, Ⅱ－107, 171, Ⅳ－324
蛤丁（高知市，城） Ⅳ－321
浜崎（佐賀町，幡） 14
浜田（東洋町甲浦，安） 189
浜町（須崎市，高） 53
浜津（室戸市，安） 54
浜ノ町（大方町入野，幡） Ⅳ－180
浜ノ宮（大方町入野，幡） 138
浜分（土佐市宇佐，高） 136
浜益野（土佐清水市，幡） 125
早崎（中村市，幡） 133, 134, 138
原（須崎市，高） Ⅳ－189
孕（はらみ，高知市，土） 5, 6, 155, 179, 183, 184, Ⅳ－324
播摩屋町，～橋（高知市，城） 72, 163, 168, 170, 178, Ⅳ－123, 311, 312
馬場屋敷（窪川町与津，高） 44, 48
半山川（須崎市，高） 73, Ⅱ－115

ひ

東奥浦（須崎市，高） 21, Ⅱ－108
東川（香我美町？，香北町？，香） 98, 187
東崎（高知市葛島） 179, 183, 186
東谷（本山町，長） 36
東堤（高知市下地，城） 36
東津野村（高） 128
東豊永（大豊町，長） 57
東中町（土佐市宇佐，高） 39
東狭間（吉川村，香） 45

ぬ

奴田原（南国市，長） 60
布（土佐清水市） 23, 34, 69, Ⅱ－110, Ⅳ－381
布師田，～川（高知市，土） 21, 34, 62, 65, 186, Ⅱ－107, 119, 131, 171, 172, Ⅳ－315, 321, 322
布山（土佐清水市） 160, 189

の

野市（野市町，香） 20, Ⅱ－106
農人町（高知市，城） 49, 110, 148, 150, 163, 178～180, 183, 186, Ⅳ－123, 168, 181, 311, 316, 320～324, 326
野根（東洋町，安） 15, 19, 24, 27, 47, 54, 57, 110～113, 158, 170, 190, Ⅰ－674, Ⅱ－105, 113, 121, 146, 170, Ⅳ－176
野々村（大豊町，長） 87
野見（須崎市，高） 5, 7, 8, 21, 31, 170, Ⅱ－108, 172, Ⅳ－174

は

萩谷，～口（土佐市宇佐，高） 150, Ⅱ－172
萩千軒（土佐市宇佐，高） 67
波介（はげ，土佐市，高） 137, Ⅳ－176
橋田（土佐市宇佐，高） 31, 136, 150～152
蓮池町（高知市，城） 162, 163, 178, 186, Ⅳ－123, 310, 313, 316, 320, 321, 379
蓮池村（土佐市，高） Ⅳ－176
八田（はた，伊野町，吾） Ⅱ－172
幡多倉橋（高知市，城） 178
幡多郡 89, Ⅳ－176, 381
畑山村（香） 47
八幡原（須崎市，高） 44, Ⅱ－132, 148
八幡林（土佐市宇佐，高） 37, 48
初崎（中村市，幡） 23, Ⅱ－110, 174
八田村（伊野町，吾） Ⅱ－172
八反芝（大方町入野，幡） 138

に

新居（にい，土佐市，高） 21, 31, 37, 48, 201, Ⅱ－108, 172, Ⅳ－174

仁井田（窪川町？，高） 5, 6, 89, 117, 244, Ⅳ－191

仁井田（高知市，長，なお仁井田は土佐山田町にもあり，これと区別しがたいものを含んでいる。） 20, 61, 64, 91, 95, 107, 144, 165, 178, 179, 180, 246, Ⅱ－107, 171, Ⅳ－409

西奥浦（須崎市，高） 21, Ⅱ－108

西牡蛎瀬川（にしかきせがわ，大方町入野，幡） 138, Ⅳ－355

西川（香北町，香） 187

西川（大方町入野，幡） Ⅳ－355

西琴平山（南国市，香） 191

西頭横堀（高知市，城） 65

西泊（大月町，幡） 23, Ⅱ－111, 174,

西廿代町（にしにじゅうだい，高知市，城） Ⅳ－320, 323

西ノ久保（土佐清水市下川口，幡） 126, 131

西ノホケ（春野町甲殿，吾） Ⅳ－327

西畑（春野町，吾） 21, 151, Ⅱ－108, 172

西鼻造（高知市種崎，長） 146

西浜（土佐市宇佐，高） 38

西浜（安芸市伊尾木，安） 44, 170

西孕（高知市，長） 34, Ⅱ－131, Ⅳ－320

西分村（須崎市，高） 117

西町（高知市，城） 164, 252

西諸木（春野町，吾） 21, Ⅱ－108

西山（夜須町，香） 105

西山川（佐川町，高） 187, 242

廿代町（にじゅうだいまち，高知市，城） 163, 178, Ⅳ－320, 323

西横堀（高知市，城） 49

西横町（高知市，城） 163

蜷川（にながわ，大方町，幡） 22, 137, Ⅱ－109, 173

仁ノ（にの，春野町，吾） 21, 150, Ⅱ－108, 172, Ⅳ－164, 165, 197

韮生（にろう，香北町，香） 47, 96, 179

仁淀川（高，吾） 95, 146, 180, 192, Ⅱ－172, Ⅳ－160

仁淀村（高） 87, 97, 117, 139, 140, 242

土佐郡 196, Ⅳ－174
戸島（須崎市，高） 10, 49, 42, 72, Ⅱ－115
戸波村（須崎市，高） 82, 95, 139, Ⅳ－175
泊，～浦（大月町，幡） 23, 129, Ⅱ－114, 174
巴堤（高知市，土？，長？） 49, 66, Ⅳ－322
豊永郷（大豊町，長） 47
鳥ヶ巣（土佐市宇佐，高） 39, 40

な

奈良師（奈良瀬，室戸市浮津，安） 54, 79
中（土佐市宇佐，高） 57
中井（中村市，幡） 133, 134, 138
長岡郡 196, Ⅳ－174
中里（室戸市佐喜浜，安） 15
中島村（土佐市，高） 95, 180
中島町（高知市，城） Ⅳ－314, 321
中島新田（高知市種崎，長） 192
中新町（高知市，城） 163
中須賀（土佐市宇佐，高） 150, Ⅳ－194
永瀬（香北町，香） 187
中ノ浜（土佐清水市，幡） 23, 46, 82, 83, 122, 123, 125, 129, Ⅱ－111, 174, Ⅳ－326
長浜（高知市みませ，吾） 7, 21, 103, Ⅱ－108, 131, 137, 172
中町（高知市，城） 195
中村（中村市，幡） 18, 22, 79, 89, 94, 119, 123, 125, 128, 133, 134, 140, 150, 152, 179, 190, 195, Ⅱ－110, 173, Ⅳ－123, 160, 177, 180, 192
中山（室戸市羽根，安） 55
名越坂（須崎市，高） Ⅱ－172
奈半利（奈半利町，安） 15, 20, 24, 28, 47, 55, 58, 115, 170, 190, 195, Ⅱ－106, 171
鍋島（中村市，幡） 22, Ⅱ－110, 173
納屋堀（高知市，城） 164, 178, 186, Ⅳ－318, 320

津野崎（中村市，幡）　22, 79, Ⅱ－110
津呂（室戸市佐喜浜，安）　15, 19, 54, 98, 109, 116, 124, 170, 182, 193, 195, 197, Ⅱ－106, 173
津呂（土佐清水市，幡）　23, 27, Ⅱ－110, 117, 146

て

手結（てい，夜須町，香）　20, 49, 55, 104, 105, 108, 170, 190, 195, 197, 247, 250, Ⅱ－106, 171, 176, Ⅳ－123, 176
鉄砲町（高知市，城）　67, 69, 110, 148, Ⅳ－316
手の瀬川（宿毛市，幡）　Ⅱ－174
寺野（仁淀村，高）　242
寺町（高知市，城）　30, 67
天神ヶ森（土佐清水市以布利，幡）　83, 121
天神（須崎市，高）　73
天神橋（高知市，城）　162

と

土居（安芸前安）　20, Ⅱ－106
戸板島（野市町，佐古，香）　96
土居山（夜須町？，香）　104
十市浜（南国市，長）　5, 20, 61, 64, 71, 249, Ⅱ－107, 171, Ⅳ－322
堂ヶ奈路（須崎市，高）　10
東寺西寺の浦（室戸市，安）　Ⅰ－674, 675
唐人町（高知市，城）　110, 148, 162, Ⅳ－170, 182, 317
唐人山（大方町，幡）　138
遠奈呂（土佐清水市片粕，幡）　86
十ノ木（夜須町，香）　104
唐ノ浜（安田町，安）　20, 47, 54, 170, Ⅱ－106, 171
通町（とうりまち，高知市，城）　Ⅳ－181, 182
斗賀野（佐川町，高）　59, 80, 127, 140, 189, 242
徳王寺（香我美，香）　47
徳善町（赤岡町？，香）　109, Ⅳ－451
徳谷（高知市一宮，土）　158
土佐（総称）　89, 90, 166, Ⅰ－8, Ⅱ－183, Ⅳ－335

種崎（高知市，長，次項とは同名異地。これと区別しがたいもの若干あり） 20, 26, 29, 34, 36, 54, 56, 59, 61～64, 95, 107, 143, 144, 146, 155, 157, 170, 178, 179, 192, 250, Ⅱ－107, 120, 131, 134, 171, 172, 176, Ⅳ－123, 409

種崎町，～広小路（高知市，城） 155, 163, 178, Ⅳ－172, 318, 323, 327, 379

田ノ浦（大方町，幡） 22, Ⅱ－110, 173, Ⅳ－180

田ノ浦（宿毛市小筑紫，幡） 23, Ⅱ－111, 174

田ノ口（田野口，大方町，幡） 134, Ⅱ－173, Ⅳ－180, 381

田野，～郷（田野町，安） 15, 20, 24, 31, 52, 54, 71, 108, 156, 170, 190, 195, Ⅱ－106, Ⅳ－315

田辺島（田部島，高知市，土） 147, 156, 158, 179, 183, 186

田淵（高知市下知，土） Ⅳ－321

田村　～下庄（南国市，香） 35, Ⅰ－332, Ⅱ－176

垂見（高知市，土） 158

丹七潮田（高知市，土） Ⅳ－321

ち

千切（夜須町，香） 105, 195, Ⅱ－171

千尋港（高知市浦戸，長） 249

茶円場（高知市，城） 178, 186

長者川（仁淀村，高） 141, 242

長者村（仁淀村，高） 242

長者の鼻（須崎市，高） 72, Ⅱ－115

長仙寺山（室戸市浮津，安） 117

つ

津賀山（土佐市宇佐井ノ尻，高） 40

月ノ口（土佐清水市以布利，幡） 83

次川（安？） 24

津蔵淵（中村市，幡） 23, Ⅱ－110, 174

土崎（須崎市，高） 21, 31, 42, 73, 80, 101, 141, 426, Ⅱ－115, 137, 141, 149, 172, Ⅳ－189

津野山（梼原町，東津野村，高） 18, 49, 71, 82, 87, 94, 95, 98, 139, 150

爪白（つまじろ，土佐清水市下川口，幡） 8, 23, 83, 247, Ⅱ－111, 174

僧津（安芸市，安） 95
僧新（室戸市羽根，安） 24
宗呂（土佐清水市下川口，幡） 8
曽我（土佐市宇佐，高） 39
外ノ浦（宿毛市小筑紫，幡） 23, Ⅱ－111, 174

た

大正町（幡） 111, 243
鯛ノ川（須崎市吾井ノ郷，高） 77
当麻（土佐清水市三崎，幡） 125, 126
絶島（高知市，土） Ⅳ－320
絶海（高知市，長？，土？） 179, 183
高井（物部村，香） 91
高岡村（土佐市，高） 63, Ⅳ－174
高岡郡 226
高須（高州，高知市，長） 21, 141, 147, 158, 179, 180, 182～184, 186, Ⅱ－107, 131, 171, Ⅳ－320, 381
高瀬（佐川町？，高） Ⅱ－148
高野村（本川村，土） 47
高平（佐川町尾川，高） 242
滝ヶ谷（土佐市宇佐，高） 151, 202
滝本（高知市，長） 50
竹島（中村市，幡） 22, Ⅱ－110, 173
竹島，～堤→（高知市，土） Ⅳ－320
竹ノ鼻（須崎市多ノ郷，高） 41
竹ノ鼻（土佐清水市大岐，幡） 121
立花（室戸市佐喜浜，安） 191
橘，～浦（大月町，幡） 23, 47, Ⅱ－111, 174
竜串（土佐清水市，幡） 83, Ⅱ－174
立田村（南国市，香） 47, 59, 190, 192
辰巳之浜（安芸市赤野，安） 45
田詰（大方町入野，幡） 10
田中（香我美町，香） Ⅳ－166
棚広小路（高知市，城） 178

156, 170, 178, 186, 251, Ⅱ－171, Ⅳ－123, 168, 173, 308, 311, 314, 317, 320～322, 324, 326, 379
新町（夜須町手結，香） 55
新町（大方町入野，幡） 138
新要法寺町（高知市，城） Ⅳ－181

す

周防方（大月町，幡） 23, Ⅱ－111, 174
須川（室戸市，羽根，安） 54
杉田（香北町，香） 187
宿毛（宿毛市，幡） 18, 23, 26, 46, 57, 114, 118, 123～125, 129, 131, 150, 158, 170, 171, 190, 195, 226, Ⅱ－112, 134, 146, 174, Ⅳ－160, 180
須崎（須崎市，高） 5～8, 21, 25～27, 31, 32, 34, 48, 53, 70～76, 86, 103, 123, 125, 135, 141, 144, 151, 165, 166, 168, 169, 174, 179, 186, 189, 190, 195, Ⅱ－108, 114～116, 132, 136, 141, 147～151, 171～173, Ⅳ－123, 160, 167, 175, 180, 189～191, 200, 325, 459
鈴（佐賀町，幡） 22, Ⅱ－109, 173, Ⅳ－191
砂地（高知市，土） 178, Ⅳ－320
住吉（春野町甲殿，吾） 37
住吉（安芸市赤野，安） 44
住吉原（吉川村，香） 45
須留田（香我美町王子，香） 109, Ⅳ－166, 451

せ

瀬戸（高知市，土） 21, Ⅱ－107, 171
仙月（土佐市宇佐，井ノ尻，高） 40
千本松原（高知市種崎，長） 146, 192

そ

惣七河原（大方町入野，幡） 138

下猿野（しもましの，土佐清水市三崎，幡） 23, 124
下夜須（夜須町，香） 20, Ⅱ－106
下山（安芸市，安） 20, 170, Ⅱ－106
下山郷（土佐清水市，幡） 45, 87, 129
将監殿橋（しょうげんどのばし，高知市，城） Ⅳ－321
庄田（佐川町，高） 12
常通寺橋（高知市，城） 62, 65, 66, Ⅱ－171, Ⅳ－321
昭和村（十和村，幡） 243
職人町（須崎市，高） 74
白川（香北町，香） 187
白田川村（大方町，幡） 165
白浜（東洋町甲浦，安） 19, 53, 189, 190, Ⅱ－105, 170
白浜（幡多郡） Ⅱ－173
志和（高知市吸江，長） 10, 23, Ⅳ－175, 191, 322
新市町（高知市，城） 50, 163, 178, 186, Ⅳ－123, 182, 309, 313, 320, 379
新川町（高知市，城） Ⅳ－164
新京橋（高知市，城） 110
新在家（土佐市宇佐，高） Ⅳ－195
新在家（香我美町，香） 193, Ⅳ－171
新崎町（高知市種崎，長） 62
新庄（中土佐町矢井賀，高） 79
新庄（須崎市，高） Ⅱ－172
新庄（土佐清水市大岐，幡） 121
秦泉寺（高知市，土） 21, 26, 34, 49, 62, 66, 126, 146, 178, 183, 248, Ⅱ－107, 119, 120, 171, Ⅳ－171, 322
新田囲（高知市，長） Ⅳ－381
真如寺橋（高知市，城） 62, 65, 66, Ⅱ－171
真如寺黒門通（高知市，城） Ⅳ－311
神母坂（佐川町，高） Ⅱ－137
神母谷（土佐市，龍） 41
神母屋敷（土佐市宇佐，高） 39
新堀町（高知市，城） 163, 179
新町，～寺町，～橋（高知市，城） 30, 49, 51, 52, 65～67, 110, 118, 147, 150, 155,

塩屋崎（高知市，長）　Ⅳ－320
地蔵寺（本川村？，土）　47
地蔵堂（須崎市，高）　53
下町（高知市，城）　143, 150, 168
歯朶ノ浦（土佐清水市，幡）　86
七軒町（高知市，城）　164, Ⅳ－321
四手原村（大正町，幡）　243, 244
芝（大方町入野，幡）　138
四方寺（土佐市波介，高）　137
島（高知市？，安芸市？）　67, 68, 158
四方川（檮原町，高）　90, 94
清水（土佐清水市，幡）　23, 48, 82, 83, 122～125, 151, 165, 247, Ⅱ－111, 141, 174, Ⅳ－326
下川内（須崎市多之郷，高）　42, 48
下川口（土佐清水市，幡）　8, 23, 84, 86, 125, 126, 131～133, 138, 247, 249, Ⅱ－111, 174
下郷（佐川町，高）　73, 242, Ⅱ－115
下郷（須崎市，高）　21, Ⅱ－108
下知（下地，高知市，城）　30, 36, 48, 62, 65, 66, 110, 118, 146, 148, 168, 170, 179, 180, 182～184, 186, Ⅱ－171～173, Ⅳ－168, 169, 171, 308, 309, 315～317, 321～323, 327, 451
下島（南国市，香）　20, 29, 36, 59, Ⅱ－107, 111, 171
下関村（本山町，長）　47
下田（中村市，幡）　22, 29, 46, 72, 123, 190, 195, Ⅱ－110, 173, Ⅳ－123
下田（南国市，香）　20, 65, Ⅱ－107, 131, Ⅳ－321
下田（高知市，長，前項との区別判然とせぬもの若干あり）　20, 62, 118, 179, Ⅱ－107, 171, 172, Ⅳ－173, 320, 370, 381
下第（土佐清水市，幡，下の茅の誤か）　23, Ⅱ－110
下田ノ口（大方町，幡）　22, 133, Ⅱ－109
下ノ加江（～賀江，下ノ茅，土佐清水市，幡）　114, 123, 124, 125, Ⅱ－174, Ⅳ－123, 381
下分（須崎市，高）　21, 32, Ⅱ－108, Ⅳ－174
下分橘村（土佐清水市，幡）　87

五紋中山（須崎市，高）　135
小矢井賀（中土佐町上ノ加江，高）　7, 21, Ⅱ－108
紺屋町（高知市，城）　163, 170, 178, Ⅳ－123, 310, 315, 320, 327, 379

さ

菜園場町（菜園町，菜園橋，さいえんば，さえんちょう，高知市，城）　110, 162, 163, Ⅳ－123, 182, 313, 317, 320～322，326
細工町（高知市，城）　51, 67, 163, 178, Ⅳ－123
在所村（香北町，香）　47
才津野（さいつの，大月町，幡）　23, Ⅱ－111, 74
材木町（高知市，城）　163, 178, Ⅳ－320
佐岡（中村市，幡）　22, Ⅱ－110, 173
佐賀（佐賀町，幡）　14, 22, 33, 52, 81, 82, 125, 139, Ⅱ－109, 173, Ⅳ－180
境町（高知市，城）　110, 148, Ⅳ－181, 182, 316, 321
榊（大月町，幡）　23, 129, Ⅱ－111, 174
坂の下（宿毛市，幡）　24, Ⅱ－111, Ⅳ－180
坂本（中村市，幡）　22, 33, Ⅱ－110, 173
佐川（佐川町，高）　12, 18, 57, 70, 80, 140, 150, 153, 168, 189, 248, Ⅱ－131, 145, 147, 148, 156, Ⅳ－162, 169
佐喜浜（崎浜，室戸市，安）　14, 15, 16, 19, 28, 47, 90, 158, 170, 190, 191, Ⅰ－674, Ⅱ－105, 146, Ⅳ－337
崎山（土佐市龍，高）　41
作左衛門提（高知市，土）　Ⅳ－311
狭島（桟島，さしま，高知市，浦戸湾）　110, 156, Ⅳ－170
幸山（須崎市吾桑，高）　80
里改田（南国市，長）　9, 20, Ⅱ－107, 171
サラン峠（土佐清水市大浜，幡）　8

し

思案橋（高知市，城）　168, Ⅳ－171
椎名（室戸市，安）　19, 54, 170
塩田，～橋，寺町（高知市，城）　49, 50, 51, 65, 69, 252, Ⅱ－122
塩浜（土佐清水市，幡）　Ⅳ－326
潮間（土佐市宇佐，高）　37

Ⅵ－171, 175

高知（城，「高知」という文字はなくとも明白に高知のことをさしていると判定される項目を含む）　5, 6, 18, 21, 24, 25, 49, 62, 66, 90, 94, 95, 97, 98, 99, 109, 118, 119, 123, 124, 125, 128, 142, 146, 147, 150, 155, 160, 166, 170, 182, 187, 190, 195, 197, 204, 206～214, 222, 227, 242, 249, Ⅰ－812, Ⅱ－100, 107, 109, 131, 132, 134, 141～144, 163, 171, 182, 247～259, 264, 265, 268, 271, 275, 285, 287, 289, 295, 303～307, 310, 323, 345, 352, 362, 367, 369, 371～373, 375, 376, 381, 391, 392, 394, 404, 405, 418, 419, 450, 485, 504, 505, 558, Ⅲ－1, 3, 4, 6, 120, 121, 135, 170, 172, 173, 196, 199～201, 203, 282, 392, 393, 396, 400, 416, 422, 426, Ⅳ－121～124, 160～167, 170, 173, 194, 383, 384, 409, 422, 447, 451, 454

甲殿（こうどの，春野町，吾）　37, 50, 141, 142, 249, Ⅳ－327

小浦（宿毛市小筑紫，幡）　23, Ⅱ－111, 174

小鎌田港山（中土佐町久礼，高）　43

国府（高知市，土）　157, 188

コガン峠（土佐清水市？，幡）　8

小才津（大月町，幡）　23, Ⅱ－111, 174

越（土佐清水市，幡）　23, 83, 123, 247, Ⅱ－111, 174

越戸（高知市）　Ⅳ－409

五台山（高知市，長）　20, 50, 61, 118, 158, 183, 184, 186, 247, Ⅱ－107, 120, 171, Ⅳ－314, 315, 321, 322

小高坂山（高知市，土）　26, 30, 34, 49, 52, 66, 102, 162, 163, 251, Ⅱ－119, 131, 171, Ⅳ－181, 311

小津賀（中村市，幡）　22, Ⅱ－110, 173

小尽（小筑紫，こつくし，宿毛市，幡）　23, Ⅱ－111, 174, Ⅳ－180

小鶴津（小弦津，こつるつ，窪川町，高）　22, Ⅱ－109, 173

御殿山（東洋町甲浦，安）　189

琴平山（南国市，香）　9, 59

御坊畑村（土佐清水市？，幡）　7

古間目（小間目，大月町，幡）　23, 114, 123, 129, 151, Ⅱ－111, Ⅳ－179

切戸（南国市，香）　59

く

串ノ浦（須崎市，高）　73
九反田（高知市，土）　178, Ⅳ－320
口湊（大方町，幡）　22, Ⅱ－109, 173
久通（くつう，須崎市，高）　5, 6, Ⅱ－147, Ⅳ－174
九番小路（中土佐町上ノ加江）　44, 81
久保（物部村，香）　90, 91, 92
久保（東洋町甲浦，安）　189
窪居野（仁淀村，高）　97
窪川（高）　248，Ⅱ－146
久保田（窪田，安芸市，安）　20, Ⅱ－171
窪田（中村市古津賀，幡）　22, Ⅱ－173
窪津（土佐清水市，幡）　23, 121, 123, Ⅱ－110, 174
窪屋敷（山本町，長）　36
久万，～川（くま，高知市，土）　26, 34, 49, 66, 146, 178, 179, Ⅱ－119, 171, Ⅳ－171, 321, 322
熊津村（日高村，高）　47
久礼（くれ，中土佐町，高）　22, 32, 43, 47, 50, 71, 123, 154, 190, 195, Ⅱ－109, 149, 150, 172, Ⅳ－160, 174, 175, 191, 194, 325
黒限（香我美町？，香）　193
クロミ（室戸市羽根，安）　170
黒森（須崎市，高）　Ⅳ－454

け

介良（けら，高知市，土）　21, 26, 34, 65, 67, 118, 158, 179, 182, 183, Ⅱ－107, 119, 171, 172, Ⅳ－320, 322

こ

小池，～坂（東洋町甲浦，安）　189
小石山（土佐清水市三崎，幡）　83
神田（こうだ，須崎市，高）　15, 21, 26, 42, 48, 73, 77, 81, Ⅱ－108, 115, 171,

観音山（夜須町，香）　104, 105

き

岸本（香我美町，香）　20, 29, 108, 174, 193, 194, 195, 197, Ⅱ－106, 171, 176, Ⅳ－166, 451
貴賤山（高知市，土）　Ⅱ－120
北磯（香我美町岸本，香）　197
北浦戸町（高知市，城）　Ⅳ－320
北会所通（高知市，城）　Ⅳ－321
北川（室戸市？，安）　95, 111, Ⅳ－321
北島（高知市，土）　Ⅳ－181
北下知（高知市，城）　158
北新町（高知市，城）　50, 110, 148, 180
北田村（南国市，香？，長？）　191
北ノ川（大正町，幡）　244
北原岡邑（高知市，城）　Ⅳ－191
北奉公人町（高知市，城）　143, 252, Ⅳ－123
北町（高知市，城）　65, 147
北山（高知市，土）　160
北与力町（高知市，城）　163
北渡上り（土佐市宇佐，高）　40
木戸屋敷（宿毛市，幡）　46
衣笠（南国市，長）　20, 65, 118, Ⅱ－107, 131, 171, 172, Ⅳ－320, 321

木屋ヶ内（大正町，幡）　244
木屋橋（高知市，城）　178
吸江（きゅうこう，高知，長）　10, 20, 30, Ⅱ－107, 210, 131 171, Ⅳ－168, 314, 321, 324, 322

旧寺山（土佐市龍，高）　40
暁霞村（ぎょうか，香北町，香）　47, 96, 187, 226
京町（高知市，城）　110, 148, 163, 168, 178, Ⅳ－123, 316
玉仙寺山（東洋町甲浦，安）　189
清松村（土佐清水市中浜，幡）　46
吉良川（きらがわ，室戸市，安）　20, 47, 53, 170, Ⅱ－106, 146

上川口（大方町，幡）
22, 125, 138, Ⅱ－109, 173, Ⅳ－180
上咥内（南国市，香）
59, 192
香美郡
→香我美郡
神子谷（須崎市多ノ郷，高）
42
上高坂井口（高知市）
Ⅳ－322
上田ノ口（大方町，幡）
8, 10, 22, Ⅱ－110
上灘（土佐清水市大岐，幡）
46, 48
上韮生（かみにろう，香北町，香）
91
上ノ加江（中土佐町，高）
7, 17, 21, 33, 44, 79, 80, 81, 123, 127, 128, 135, 165, 179, 190, 195, Ⅱ－109, 173, Ⅳ－175, 176, 180, 189, 190, 191, 198
上ノ川原（高知市，城）
162
上ノ平（須崎市，高）
Ⅳ－190
神ノ山（土佐清水市中浜？，幡）
46
上浜町（須崎市，高）
71
上分遅越関（須崎市，高）
77
上町（高知市，城）
143, 155, 195, Ⅳ－124
上山郷（土佐清水市？，幡）
10
上八川村（吾北村，吾）
18
鴨（須崎市多之郷，高）
2, 6
鹿持（加持，かもち，大方町，幡）
22, 138, Ⅱ－109, 173
鴨部（高知市，土）
Ⅳ－171
唐谷（高知市，長）
183
刈谷（南国市前浜，香）
191
加領（室戸市羽根，安）
53
川内（河内，かわうち，東洋町甲浦，安）
19, 189, Ⅱ－105, 170
川内川（須崎市，高）
Ⅳ－190
川北村（安芸市，安）
44, 54
川口（土佐清水市，幡）
123
川久保（安芸市，安）
45
川谷（須崎市，高）
57
甲浦（かんのうら，東洋町，安）
15, 18, 19, 24, 28, 35, 53, 54, 56, 125, 170, 189, 190, 195, 246, Ⅰ－675, Ⅱ－105, 170, Ⅳ－123, 176, 177, 315, 381, 382

音無川（大方町？，幡）　46
帯屋町（高知市，城）　35, 49, 163, Ⅱ－120, Ⅳ－321, 322
折合（大正町，幡）　245

か

鍵掛（鍵懸，かいかけ，土佐清水市，幡）　8, 23, 125, Ⅱ－110
改田（南国市，長）　5
貝ノ川（土佐清水市，幡）　23, 84, 85, 123, 126, 131, Ⅱ－111, 174
加江荒倉山（幡）　8
鏡川（高知市，城）　118, Ⅳ－409
香我美郡（香美郡，かがみぐん，かみぐん）　98, Ⅰ－332, Ⅳ－176
牡蛎瀬川（大方町入野，幡）　Ⅳ－355
角谷（須崎市，高）　165,
加久見（賀久見，土佐清水市，幡）　23, 123, 124, Ⅱ－111, 174
懸川町（掛川，高知市，城）　110, 148, Ⅱ－131, Ⅳ－317, 321
鹿児（高知市，城）　179, 182, 183, Ⅳ－320
樫浦（大月町，幡）　Ⅱ－174
鍛冶町（須崎市，高）　74, 166
鹿島山（土佐清水市，幡）　48
柏島（大月町，幡）　8, 23, 123, 130, Ⅱ－111, 174
加須（安芸市羽根，安）　170
香宗村（香）　47
片魚村（大方町？，幡）　10
片糟（片粕，かたかす，土佐清水市，幡）　23, 84, 85, 86, 131, Ⅱ－111, 174
片町（高知市，城）　142, Ⅳ－321
片山（南国市浜改田，長）　166
桂（大正町，幡）　246
葛島（桂島，かつらじま，高知市，長）　20, 103, 146, 147, 158, 179, 180, 182, 183, Ⅱ－107, 131, 171, Ⅳ－320, 323, 324
桂浜（勝浦浜，高知市，長）　56, 103, 111, 117, 146, 157, 170, 192, Ⅱ－131, 172, Ⅳ－170, 409
香北町（香）　95
鎌滝山（本山町吉野，長）　17
上岡村（物部村？，香）　180

大谷（土佐清水市，幡） 23, 49, 109, 123, Ⅱ－110
大田原（中土佐町上ノ加江，高） 44
大津（高知市，長） 21, 34, 62, 65, 118, 158, 180, 182, 183, Ⅱ－107, 119, 171, 172, Ⅳ－322
大津（土佐清水市，幡） 23, 85, Ⅱ－111, 174
大津川（高知市，長） Ⅳ－321
大弦津（大鶴津，おおつるつ，窪川町，高） 22, Ⅱ－109, 173
大栃（物部村，香） 90, 91
大奈路（大正町，幡） 244
大野（須崎市，高） 33
多之郷（おおのごう，須崎市，高） 5, 6, 26, 41, 42, 48, 73, 80, 81, 141, 158, 169, 247, 248, Ⅱ－108, 115, 172, Ⅳ－175
大野見村（高） 18, 56, 190
大浜（土佐清水市，幡） 8, 23, 82, 123, 151, Ⅱ－111, 174, Ⅳ－323
大深浦（宿毛市沖ノ島，幡） Ⅳ－179
大間（須崎市，高） 248, Ⅱ－172
大宮村（宿毛市，幡） 45
大矢井賀（中土佐町，高） 22, Ⅱ－109
大良千軒（須崎市？） 5, 6
岡地（田野町，安） 108, 156
尾川（佐川町，高） 128, 174, 242, Ⅱ－132
小川渕（高知市，城） 146
荻崎（土佐市宇佐，高） 38
沖ノ島（宿毛市，高） 128, 129, 189, Ⅳ－179
奥浦，～東分，～西分（須崎市，高） 9, 21, 31, 41, 50, 153, Ⅱ－108, 172, Ⅳ－175
奥田郷（大月町西泊，幡多） Ⅳ－315
岡豊（おこお，南国市，長） 56
御侍町（高知市，城） Ⅳ－321
押岡（須崎市，高） 21, 26, 73, 77, 80, 101, Ⅱ－108, 115, 172, Ⅳ－176, 190
尾僧，～新町，夷町（室戸市羽根，安） 24, 55
小田千軒（須崎市か？） 5, 6
越知面村（おちめん，椿原町，高） 44
鳴無（おとなし，須崎市，高） 9, 41, 50, 63

浦戸町（高知市，城下，前項とは同名異地） 163, 178, Ⅳ－310, 317, 319, 320, 324
浦ノ内（須崎市浦ノ内湾，高） 21, 37, 53, Ⅱ－9, 108, 172
浦分（土佐清水市下川口，幡） 84

え，ゑ

永国寺町（高知市，城） 163, 166, 186, Ⅳ－173, 321
江川本村（柄川，安芸市，安） Ⅱ－171, Ⅳ－320
ゑごの田（土佐清水市下ノ加江，幡） 123
江ノ口（高知市，土） 21, 62, 66, 158, Ⅱ－107, 131, 171, 172, Ⅳ－309, 315, 320, 321
蛭子松（えびすまつ，高知市種崎，長） 36

お

畝丘樹（おいが，高知市下知，土） 30, 36, 49
尾浦（大月町，幡） 23, Ⅱ－111, 174
大石（須崎市多之郷，高） 42, 158
大井出（土佐清水市下川口，幡） 131
大内町（大月町，幡） 8, 129
大浦新田（室戸市羽根，安） 53, 55
大影山（須崎市，高） 10
大方町（幡） 80, 137, Ⅳ－355
大川村（土） 87
大川内（中土佐町上ノ加江，高） 127, Ⅳ－190
大川筋（高知市，城） Ⅳ－322
大川端（高知市，城） 180, Ⅳ－321
大川渕（高知市，城） 163
大岐（土佐清水市，幡） 23, 46, 48, 83, 121, 123, 124, 125, Ⅱ－110, 174
大蔵谷（梼原町，高） 128
大御門（高知市，城） Ⅳ－321
王子（香我美町，香） 20, 99, 109, 193, Ⅱ－106, Ⅳ－166, 451
大島（大月町西泊，幡） 8
大島（高知市吸江，長） 179, 183, Ⅳ－320, 321
大杉村（大豊町，長） 57
大谷（須崎市，高） 5, 6, 21, Ⅱ－109, 172, Ⅳ－175

う

上田村（植田，南国市，香） 56
魚棚町（高知市，城） 163, 252
庵谷村（うおたにむら，大豊町，長） 47
鵜来島（宿毛市，幡） 128
浮津（うきつ，室戸市，安） 15, 20, 53, 79, 116, 117, 170, Ⅱ－106, 146, 172
浮津（うきつ，大方町，幡） 22, Ⅱ－109, 173
宇佐（土佐市，高） 21, 37, 48, 53, 57, 67, 70, 88, 89, 104, 111, 123, 125, 136, 144, 150～155, 161, 165, 169, 179, 190, 198～209, 215～226, 228～241, Ⅱ－108, 173, Ⅳ－123, 167, 175, 180, 194, 197, 198, 339, 355
卯沢（土佐市宇佐，高） 37, 48
牛追村（土佐郡領家郷という，高知市領家か） 47
潮江（高知市，土） 11, 21, 26, 30, 62, 65, 102, 118, 147, 155, 158, 170, 179, 180, 183, 184, 186, 201, Ⅱ－107, 116, 131, 171, 172, Ⅳ－319, 322, 381
後川（土佐市龍，高） 41, 140
宇薄（宇須々木，うすすき，宿毛市，幡） 24, 112, 174
臼碆山（うすばえやま，幡多郡という） 160, 189
内沢（土佐清水市大岐，幡） 46
打出川（大正町，幡）） 245
内ノ浦（宿毛市，幡） 23, Ⅱ－111, 174
馬詰（土佐市宇佐，高） 38
馬上村（うまのうえ，芸西村，安芸） 47
宇山（右山，中村市，幡） 22, 79, Ⅱ－110, 173
浦樺（宿毛市，幡） 24, Ⅱ－112, 174
浦九番小路（中土佐町上ノ加江，高） 81
浦尻（土佐清水市，幡） 23, 123, 130, Ⅱ－111, 174
浦戸（高知市，土） 2, 6, 14, 16, 24, 30, 34, 51, 54, 57, 60, 62～67, 103, 110, 117, 118, 157, 182, 183, 197, 248, Ⅱ－112, 120, 121, 131, 134, 137, 141, 167, 172, 176, Ⅳ－123, 167, 169, 170, 195, 320, 326, 408, 409

井沢（中村市，幡） 22, Ⅱ－110, 173
石切町（高知市，城） 178
石立町（高知市，城） Ⅱ－171
石原（宿毛市？，幡） 8, 11, 12, 34
石渕（石縁，いしぶち，いわがぶち？，高知市） 54, 65, 180, Ⅱ－122, 131
磯山（春野町，吾） 50, 249
井田（伊田，大方町，幡） 22, 129, 138, 165, Ⅱ－109, 173, Ⅳ－180, 381
板倉（高知市種崎，土） 36
一宮（いっく，高知市，土） 21, 26, 34, 65, 158, 180, 183, 186, Ⅱ－107, 171, 172, Ⅳ－171, 320, 321, 322
一切（いっさい，大月町，幡） 23, Ⅱ－111
一ノ又（市ノ又，大正町，幡） 244
出口（いでぐち，大方町，幡） 22, Ⅱ－110, 173
出崎（いでざき，土佐清水市下川口，幡） 8
稲生村（いなぶ，南国市，長） 47, 156
犬飼（仁淀村，高） 97
井ノ川村（本川村，土） 47
井ノ口（安芸市，安） 47, Ⅱ－171
井ノ尻（猪ノ尻，土佐市宇佐，高） 20, 40, 48, 53, 122, 195, Ⅱ－108, 172, Ⅳ－174, 323
渭ノ浜（いのはま，現在は「いはま」，土佐市宇佐，高） 21, 39, 48, 125, 150, Ⅱ－108, 172, Ⅳ－174
伊布利（以布利，いぶり，土佐清水市，幡） 23, 83, 121, 124, 125, 187, Ⅱ－110, 174
今在家（いまざいけ，須崎市，高） 25, Ⅱ－118, 172
井屋（中村市，幡） 22, Ⅱ－110, 173
伊与木（伊与喜，佐賀町，幡） 81, 82, 139, Ⅱ－173
伊予野（宿毛市，幡） 23, Ⅱ－111
入野（いりの，大方町，幡） 8, 9, 10, 22, 33, 46, 50, 69, 80, 114, 123, 125, 129, 133, 138, 179, 190, 250, Ⅱ－109, 173, Ⅳ－180, 355, 381
岩崎（土佐市宇佐，高） 38
岩永（須崎市，高） 73, 75, Ⅱ－116
岩村（南国市？，香） 47, 191
岩屋川（仁淀村，高） 97

安喜，～浦，～浜（安芸，安芸市，安） 11, 20, 54, 98, 170, 195, Ⅱ－106，171, 176 Ⅳ－123
安芸郡 90, 144, 156, 157, Ⅱ－146, Ⅳ－176
秋山村（春野町，吾） 21, 37, Ⅱ－108
吾桑村（須崎市，高） 47, 80, 101
あこぎ出し（土佐清水市下川口，幡） 86
浅宇津（東洋町，安） 190
朝倉村，～町（高知市，土） 7, 26, 148, 155, 163, 168, 178, 246, 247, Ⅱ－107, 171, Ⅳ－123, 171, 182, 311, 316, 317, 320, 324, 379
足軽町 110, Ⅳ－317
足摺岬，～山（土佐清水市，幡） 123, 125, 160, 179, 189, Ⅳ－325
汗見川（本山町，長） 17
薊野（あぞの，あぞうの，高知市，土佐） 21, 34, 156, 180, 183, 186, Ⅱ－119, 120, Ⅳ－171, 191, 322
愛宕，～山（高知市，城） 146, Ⅱ－120, Ⅳ－320, 322
穴内（穴無，あなない，安芸市，安） 170
安満地（天地，大月町，幡） 23, 180, Ⅱ－111, 174
新木（高知市） 146, 158, 179, 182, Ⅳ－326
有井川（大方町，幡） 22, 45, 53, 62, 250, Ⅱ－109, 173
有ノ木谷（香北町，旧暁霞村，香） 187
安和（阿波，須崎市，高） 22, 33, Ⅱ－109, 172, Ⅳ－175, 190

い，ゐ

伊尾木（安芸市，安） 20, 170, Ⅱ－106, 171
井口（高知市） 34, 66
池（南国市，長） 20, Ⅱ－107
池ケ峠（槻原町，高） 94
池川（池川町，吾） 94, 98
池ノ内（須崎市，高） 21, 73, 80, 166, Ⅱ－108, 172
生玉の森（土佐清水市下川口） 126, 131
生見（東洋町，安） 19, 53, 190, Ⅱ－105, 170
伊佐（土佐清水市，幡） 23, 123, Ⅱ－110, 173
為貞（須崎市吾井郷，高） 73

高知県地震津波史料五十音順地名索引

この索引は，本書および武者の「大日本地震史料」「日本地震史料」全四巻に現れる高知県に関する地名を集め，五十音順に配列したものである。この索引は次の基準によって作成した。

1. 本文中に出現する地名であっても，地震・津波の現象そのものとの直接的な関連性のない地名は採用しない。
2. 本文中に郡名，郷名，村名，字名の順に記してあるときは，郡名，郷名は採用せず村名と字名を採用した。
3. 地名の読み方は「新日本分県地図」（国際地理協会刊）により調査した。
4. 同一ページに二回以上同一地名が出現する場合にも，この索引では1個しかページ数を記していない。
5. ページ数を示す数字は，まず本書中のページ数をかかげ，そのあとに武者の「史料」中のページ数をⅠ－17，Ⅳ－256，257…，のような形で巻数とともにかかげた。
6. 地名のあとには，必要に応じて異なる漢字表記，読み方，現在の行政区画，および現時，または旧時の郡名を示した。郡名などの略記は次のとおり。

   安芸郡－安，香美郡－香，長岡郡－長，土佐郡－土，吾川郡－吾，高岡郡－高，幡多郡－幡，高知城下－城
7. 高知と記してなくても「城下」「郭内」など，高知城下であることが明らかなものは高知の項に含めた。

あ

吾井郷（あいのごう，須崎市，高） 21, 26, 73, 75, 101, Ⅱ－108, 115, 172
青木ヶ辻（須崎市，高） 169
青木森（中村市，幡） 133
青砂島（中村市下田，幡） Ⅳ－180
赤岡（赤岳，赤岡町，香） 20, 26, 27, 45, 47, 57, 79, 104, 109, 144, 170, 174, 190, 192, 194, 195, Ⅱ－106, 113, 121, 136, Ⅳ－123, 166, 176, 192, 310, 312, 325, 451
赤崎（須崎市） 75, 101
赤地（田野町，安） 108
赤泊（大月町，幡） 23, Ⅱ－111, 174
赤野（安芸市，安） 20, 28, 44, 54, 195, Ⅱ－106, 171
赤ハヶ（須崎市神田，高） 42
吾川郡（あがわぐん） 6, 90, 196, Ⅳ－174
吾川村（吾） 103